名所記 第一

近世文藝叢書第一

近世文藝叢書第一　名所記一

緒言

一、題して近世文藝叢書といふ。江戸時代中、元祿期を中心として、其前後に現れたる輕文學書を集めて十册とし、逐次刊行せんとす。これ曩に本會が第一期に於て刊行したる所の、新群書類從の遺漏を補へるものに外ならず。

一、本叢書の第一編として、名所圖繪の先驅とも謂ふべき、江戸時代初期に於ける名所記類中、最も珍奇にして且つ優秀なるもの十三種八十二卷を選び、更に之を上下二卷に分ち、上卷には三都の名所記、即ち江戸雀以下六種四十三卷、下卷には諸國の名所記即ち鎌倉物語以下七種三十九卷を收めたり。

一、本編收むる所の名所記は、悉く寶永以前に出版せられたる刊本

なり。而して此時代に於ける此種の刊本は、概ね文章に假名を用ふること多く、句讀亦一定せず。されば今之を校訂するに當りて、本文の意義を害はざる程度に於て、假名を漢字に改め、又句讀を訂正せる所少からず。これ讀者の讀み易からんが爲なり。

一、原本載する所の挿畫、多くは各地の風俗を描寫せる者なれば、當時の風俗研究の好資料なり。故に大半之を縮寫して收載せり。

一、江戸雀、京雀、難波雀の三書は、俗に三雀と稱して世に喧傳せらるれども、難波雀はたゞ名所舊蹟の名寄たるにとゞまるを以て、今之を除けり。

一、江戸名所記、蘆分船の二書は當然本編中に收むべき者なれども、本會第一期刊行の續々群書類從地理部已に之を載せたるを以て、今これを除けり。

一、本編上卷收むる所の三都名所記類左の如し。

一、江戸雀十二卷　著者詳ならず。延寶五年の開版にして、挿畫は菱川師宣の筆なり。

一、增補江戸咄六卷　貞享三年刊古鄕歸江戸咄の增補にして、卷末刊行年月を記さずと雖も、元祿七年開版の證あり。著者詳ならず。其文體紫の一本を學びたるに似たり。本書に異版あれど、たゞ卷初の大名宿所の異なるのみ。挿畫中江戸雀の古版木を利用せしか、重複の箇處少からず。それ等は煩を厭ひて之を省けり。

一、京童六卷　中川喜雲の著。明曆四年の開版にして名所記類の權輿なり。而して此書に二版あり。一はさはら木町通東のとう院東へ入町八文字屋五郞兵衞新刊とあるもの、一はさはら木町通烏丸東へ入町山森六兵衞刊行とあるもの是なり。共に同年同月の開版にして、版式も亦異ならず。たゞ挿畫中後者は前者に比してやゝ省畧せるの差あるのみ。著者喜雲は廣島の人にして、後、京都

に住す。北村季吟の門に入り、山櫻子と號す。著書、京童及跡追の外に鎌倉物語、案内者等あり。寶永二年十月三日、歳七十にして歿す。
一、京童跡追六卷　亦中川喜雲の著にして、京童の遺漏を補ひたるもの。寛文七年の開版なり。
一京雀七卷　著者詳ならず。寛文五年の開版にして、三雀中の先驅たり。
一、難波鑑六卷　一無軒道冶の著にして、延寶八年の開版なり。本書は其跋文に難波鑑年中行事と名づけたり云々とあるが如く、他の名所記といさゝか其趣を異にして、年中行事體に記せり。著者道冶は紀陽の人、藤原氏。醫を業とす。著書、難波鑑の外に蘆分船、高野山通念集等あり。

明治四十三年七月

校訂者識

近世文藝叢書第一 名所記一

目次

目次終

近世文藝叢書第一

名所記　一

江戸雀序

竊に松門を閉てひとり年月を送る事、此江府に良久しかりし、抑今の治世を考ふるに、誠に和漢の聖代に超て其政すなほなれば、上明君より下萬民にいたるまで、快樂のおもひをなさずと云事なし、されば東南西北之内いづくか豐饒せざらんや、あるひは高砂の尾上の松も後々百歳にも色替らず、蓬萊宮の鶴龜は千秋萬歳の祝言をなせり、かゝるめでたき御代なれば、國富民豐にして、歌人は山頂の花に詠じ、詩人は池邊の月に題をなせば、武家は弓を嚢に藏め、干戈は函に容て靜謐の代を猶守護せり、商人百姓は己々が所作をいとなみ、五穀成就に圓滿たる事あげてかぞふべからず、春夏秋冬の遊山見物啻此時にやあらむ、且は神社佛閣の繁昌ます〱也、僧侶は二六の勤行をなせば、社人は颯々の聲をすゞしめ、其威儀正しくせり、是武運長久たらましゝかば、爰に自ら國本の人、柴の扉を尋て來れり、うれしくもなつかしくも有て、種々のものがたりを問聞にこそ、つれ〲の慰ともなりけらし、暫く時移つて後、國の人我に問ていわく、我はる〲の道すがら、うき難所を越過て、汝に今逢ふ事は、偏に上君の御政道たゞしきゆへならずや、そも〱過つる中頃までは、此地へ來なん人あれば、皆人愁ふる事堪に忍びがたし、今はいつしかひきかへて、隣歩のごとくにして往還の煩ひなく、みな人此武江に着り、然るに我に等しき旅人の下着して後、寺社名所 武家屋敷町小路を一見仕侍らんと云ども、第一方角をしらず、殊に道筋唱斜として竪横直ならず、去るに依て往來しがたし、汝我ために是を敎へてんやと云、予答て云、我もと當地の者にあらず貴邊と同國たり、此地へ來て星霜をふる事十餘年に及べり、故に有まし所々の順道をしれり、我朋友の案内に、武家屋敷民家の町等をしるさん、又寺社名所舊跡を入て、見ぬ世の友になりもやせんと、雜紙のしわをひき

のばして、をづ〳〵筆を取そめて、大略をしるすにぞ、心おそろしくも恥かしき事にや侍るべき、漸々かきつゞけてこそ一部の書となしてんげり、國の人いへるは、汝よくしれり、江戸雀にやといひてければ、去ば燕雀鴻鵠の心を知らずといひて、はかなき縱(たとへ)に上たれば、百になれども踊忘れずして、よしなき笑草をつくり、しかあれば此題號を、譽友の言葉に付て江戸雀と名付てんとて、傍にさし置、又重ねて國の人いへるは、此書江府の案内なれば、花咲ぬ埋木とくちをかんもむげなれば、此たび板行にさせて世に弘めばやといへり、予がいわく、是智有人の見るべき物にあらず、又當地案内の人はしかなり、君がごとくなる人にこそ、あたふべき物といへれば、いやとよ、諸國の人々日々に此地へ入こむ事布をひくがごとし、然れば斯の人に道しるべのためならんといふ、むさし鐙さすがにことやさしくも、かく人のすゝめけるを、取上んも其甲斐なければとて、是非なく梓にちりばめてける、これ唯諸人の嘲をまねけば、狂人のわざにして人に指をさゝれんものなり、我大方の順路を知るといへども、あるひはおぼえちがひ亦は書おとしあらめ、名所舊跡はいにしへより云傳へ聞おぼえたるを書付ければ、是以珍しからず、兎角淺心愚癡にして文學を得ざれば、敢へて見る事なかれと云レ爾

治まれる時とや知りて江戸すゞめ
さへづる聲も萬歳〳〵

江戸雀目錄

初卷

二卷目

三卷目

四卷目

や橋、山下町、御成橋、新橋、紀伊國橋、眞福寺橋、高ばし、戸越橋迄之内、やしき町小路之事
ため池を限て、虎之御門外、櫻田御成橋、新橋、鹽留橋、愛宕之下、增上寺邊、金杉橋、同新堀をかぎり、西之窪、長坂、日ヶ窪、校栞橋、澁谷、靑山宿近邊、赤坂、築地之内、寺社地内屋敷町付之事
增上寺之事
神明之事
愛宕由來之事

五卷目

金杉橋より品川まで、金杉新堀を限て、淺府一本松、白銀村六本松、目黑村、高繩手まで之内、寺社地内やしき町付之事
大佛并閻魔堂之事
水月觀音堂之事
池上本門寺之事
目黑不動明王之事

六卷目

赤坂より、靑山宿、長者ヶ丸、澁屋之邊、權田原并四ッ屋近邊、よいぎ迄之内、寺社地内屋敷町付之事
氷川之明神之事
四谷より、内藤宿、市谷近邊、二本榎迄之内、寺社地内、市谷ヶ大久保迄之内、寺社地内、屋敷町付之事

七卷目

牛込より、どんど橋、りうけい橋、北は此河筋を限にして、南は川田ヶ久保、ごゞめき、早稻田、土塚村まで之内、寺社地内やしき町付之事
右衛門ざくらの事
穴八まんの社之事

八卷目

小石川見付より、どんど橋、りうけい橋、小日向、關口、すいどう村、高田、雜司谷、東は水道橋筋を限にして、傳通院近所、すがも村まで之内、寺社地内やしき町付之事
目白不動明王之事
傳通院之事
白山權現之事

九卷目

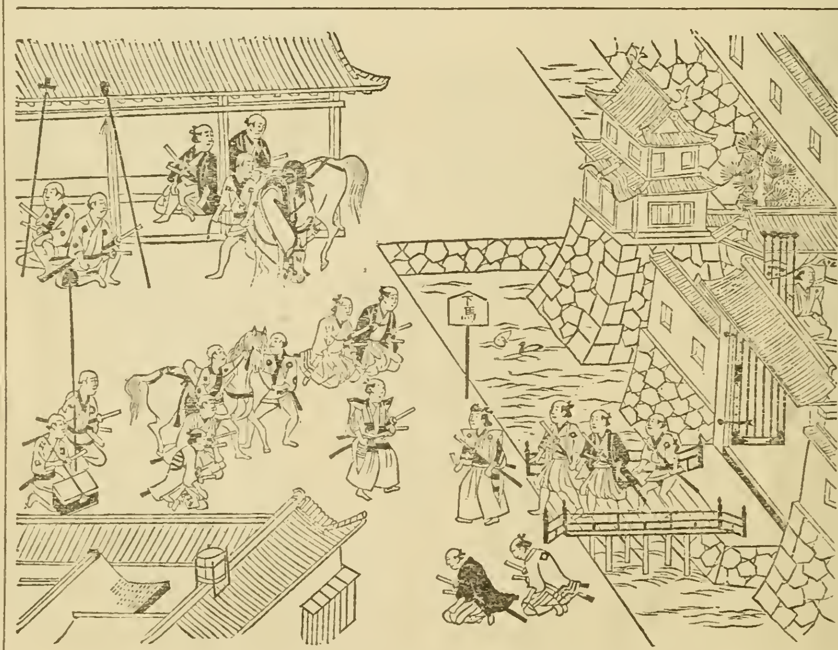
水道橋より、神田相生橋、筋違橋、和泉橋、新敷橋、淺草近邊、下谷、谷中、三崎、千駄木、駒込むら、につ

江戸雀初巻

御城之初并年中御規式之事

抑武州江戸之府と申奉るは、多景一入かぎりなし、先東南は蒼海滿々として果もなし、北にも海をかたどり隅田川といふ大河の流つよく、西は七重八重の堀をかまへ、其外關々山河難所なり、扨御本丸と申奉るは、縱廣甚有といへども知る人なし、御門々番所やぐらには數百の人番をつとめ、御本丸に相つゞき、紅葉山御佛殿有、その景世にかくれなしといへども平人の目に及ばず、同じつゞきに西之丸あり、此御城の起り申は、中頃長祿年中に太田道眞築二立之一、同道灌まで二代、そのゝち上杉定正之手にわたり、子息五郎朝良又二代、それより朝興在城之時、北城氏綱入かはりて四代相つゞく、氏直の時にあたつて、御當家之元司此地へ入らせられ、亦々御城池御見立之節、西之丸より本丸の方へいづくともなく鶴來て舞遊び、龜は陸地(くがち)に蚑行(はい)出て萬歲のしるしを顯はせり、是繁昌之地として則御本丸城レ之、代々の御在城と遊さるゝ、去によつて國々の大小名御在番怠らず、されば年々の御規式相變らず、先年始之御沙汰、元日二日御一門の御方、國主城主之人々、三献の御祝、其外諸侯昵近の面々、御詰衆番頭物頭諸役人諸番の健士、御流を頂戴す、且又大中納言參議中將侍從四品五位之諸大夫までは、美服一領づゝ下し給り、家祿の輕重と官位の淺深によつて、あるひは臺或は廣蓋もつて是を拜領し、三日は諸大名の息子、無位無官諸家中の證人、京都大坂奈良堺伏見淀におよび、過書銀座朱座の輩まで落緣に群候し、品々進物是をさゝげ奉る、御禮のその規式、目を驚す所也、同じ夜は御謠初として、酉之刻より御大廣間へ御出座有、祗候の大名は皆長袴を着し裝を刷ふ、四座の猿樂板緣に群集し、御拍子三番、所謂老松東北高砂是也、折々小謠順々うたひ、諸侯より所レ献の御盃臺銘々に披露有て御酒宴なり、其夜は、乘物下塲、追手下馬におひて篝火をたく事、實(まこと)に白晝かとうたがはる、四日御詰衆ばかり登城せしむ、五日は御門跡方近里遠墟之諸寺諸山の出家社人山臥等數百人、充二滿營中一、台顏を拜し奉る、七日は七種の御粥献レ之、十一日は御具足御鏡開、幷に連歌御

輿行、十五日恒例の諸御禮、十七日東叡山御參堂、廿日同所御參宮、廿四日増上寺へ御佛詣、別して此三日は御裝束をあらためられ、長柄の御輿をめぐらされ、供奉の勇士二行につらなりあゆむ、その出たち或は衣冠衛府の太刀はき、又は大紋風折烏帽子、布衣以下平侍頗その數を量がたし、辻々門々屋々の警固、ゑぼし素袍袴を着し大路にひれふし、還御の砌は、御兩典御一門方其外諸大夫諸役人無役の面々拜し奉る、彌生三日は諸大名已下御禮、卯月朔日御初物をさし上る、五月五日は端午之御祝ひ同じく御さゝげ物奉る、六月朔日富士山の御氷召上らるゝ、此氷のひやゝかさ實に大寒の中にとづる氷にひとし、是たゞ禁裏へ氷室よりさゝげ奉る例かと見えし、同十五日は御氏神山王權現御祭禮、御矢倉に出御ましまし御一覽有に、そのまつりの美々しさ、或は引山足屋體錦金襴を張廻して、小歌三味線笛つゞみ、太鼓かねをうちならし、神慮をなぐさめ奉り、又は笠鉾母衣負人、おもひおもひの出立其粧花やかに、羅綾の袂錦繍の裔をひるがへし、見物の老若棧敷をかまへ、土民は莚をしき、群集なゝめならず、神輿は是三社なり、隔年に祭



是あり、同月十六日は御加増日、七月七日七夕の御祝儀、諸大名已下御禮也、同十五日には御詰衆ばかり登城有レ之、八月朔日八朔の御祝、御禮同斷、九月九日重陽の御祝儀、御禮同斷、十月亥子の祝ひ、申之下刻御譜代大名其外以下登城せしむ、その夜門々にたくかがり火は天津星にことならず、水に映じておびたゝし、さて霜月にいたつては、御鷹野に出御あり、極月にはかならず忠勤にしたがひて官祿仰付られ候也、毎月朔日十五日廿八日、諸大名其外番頭物頭諸役等御出仕無二怠慢一御登城有レ之は、誠目出度御事也、穴賢穴賢、

　武士の出入かげは花の江戸
　　左行右行と寄るは大下馬

凡大厦の御構へ方二十餘町也、郭外より東の方は八町堀に口口木挽町 鐵炮洲 女木三谷靈巖島にいたり、僅に十町にたらず、是海岸據なきゆへなり、西は市谷四ッ谷中野牛込小日向小石川高田雑司谷千駄木村にいたつて二里餘、南は赤坂青山宿一木村櫻田愛宕之下西久保淺府澁谷白銀目黑池上芝品川神奈川にいたりて七里、東海道の順道是なり、北は淺草淺茅原隅田川千壽板橋越谷王子午柳まで四里なり、都て東西三四里南北十餘里、大小名の家々、思々の營作、以二金銀一築地とし珠玉を以て砂石とす、泉水築山眺望、日夜佳遊の宴を催し、此外所々の神社佛閣、逼々の民家小屋、軒端を繼で建つゞけ、錐を立べき畾地なし、草原のむさし野は名のみ殘りて、有明の月も家より出ているに入かとあやしまる、然る程に繁昌豐饒の體、想像せしめたまふなり、

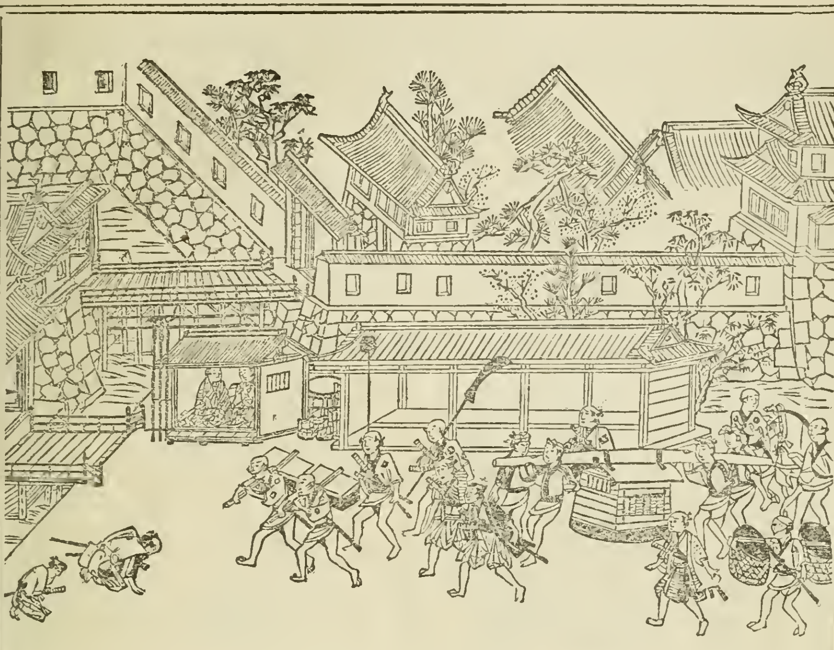
　たまぼこの道のみちたる時なれば
　　むさしの原は名のみなりけり

御本丸廻りやしき名付之事

追手下馬より錢龜橋、常盤橋、神田御門、一ッ橋御門、竹橋御門、雉子橋御門、淸水御門、田安御門、糀町御門までの分

一、追手御門より右、下馬腰かけ有、右龍之口への道、左壹ッ橋御門への道、左角御家老酒井雅樂頭殿、此やしき百間程有、右角土屋但馬守殿、此兩やしきをすぎて行あたり御破損小屋、左右に道有、左への道神田への道、左へ少し付て同かご館林宰相樣、右かご御破損御小細工小屋、此間百間ちかくすぎて行あたり土屋

伊豫守殿よこや、左右に道有、右に彥二郎橋へ行、但廿間あまり行てかし、左角土屋平八郎殿、右に彥次郎橋有、左酒井了庵佐田玉川山本道句伊阿彌角之丞殿水野監物殿竹田道庵町奉行島田出雲守殿よこや、此間二町あまり過て右に錢龜橋、左常盤橋の方へ壹町行て西へ行、脇に稻荷小宮有、土手下馬場也、右角酒井河內守殿、左かど松平佐渡守殿幷に土屋伊豫守殿、右東かどは小笠原遠江守殿、此間二町過て行あたり館林宰相樣、左右に道あり、右へ半町行て西へ行ば、角土井能登守殿幷水野中務殿よこや也、左館林宰相樣やしきじり、此間二町、行あたり井上相摸守殿、左右に道有、右へ付て北へ行に、左松平和泉守殿、右水野中務殿行あたり、それより西へ付て行ば松平和泉守殿よこや、本田土佐守殿、此間二町行て左に道あり追手へ行、前の通り西北へひぢ廻りて二町程行ば、右角松平伊豫守殿表門有、横手に壹ッ橋御門、前の通西へ行ば右かど御つきや藏六十間餘りあり、よこてに酒井日向守殿、此やしき六十間程有、行あたり雉子橋御門、前を通り行あたり竹橋御門に入て、右に中丸樣御やしき跡壹町餘有、此横て北へ行ば、左典壽院樣御やしき跡のよこて、壹町の餘有、行あたり堀有、右へ十四五間行て北へ行ば、行あたり淸水御門、堀に付て西へ行ば右秋本攝津守殿、此やしき壹町の餘有、横手に道有、北へ行ば左山高宇右衞門殿よこや、つゞき石川美作守殿、よこてに道有、前のつゞき、小笠原山城守殿、右增山兵部殿、行當たやす御門、此間二町の餘有、前の通ほりばた、山高宇右衞門殿志良平兵衞殿、此間壹町有、行あたり安藤內藏殿火消屋敷、向に同與力衆の家有、此間壹町、此邊代官町といふ、それより南東へ付て二町半行、左典壽院樣御やしき跡、右御藏、左右に道有、右西へ付て行ば御米藏七十間程あり、左右に通有、左の道西がはに石谷七之助殿同長門守殿よこやをとをりて、西へ半町行ば左角へ道有、右は酒井大學頭殿幷に大久保山城守殿、續て西尾右京殿よこや、左明地、此間三町、すぐ道、左右に道あり、右之道西へ付てゆけば西尾右京殿西尾隱岐守殿、此間二町程有、行あたり糀町御門、右北へ道有、此通りを行に、左角筒井內藏殿朝倉伊右衞門殿、右西尾隱岐守殿よこや、倉橋內匠殿、つゞいて江原甚右衞門殿酒井大學殿地じり、左がは中條左京殿中根百助殿伊澤



源右衛門殿、右に道有、行當北條右近殿、東つゞき池田備中守殿火消屋敷、北條右近殿よこやを北へ行ば今出忠右衛門殿松平次郎兵衛殿大岡次郎兵衛殿木田五郎右衛門殿となる也、左矢野忠兵衛殿伊澤主水殿行あたり、此邊を鼠穴といふ、

龍之口より、道三がし、銭亀橋、呉服橋、鍛冶橋、すきや橋、日比谷御門、和田倉御門まで之内

一、龍之口まへに板倉石見守殿やしき有、ならびに疊小屋有、

一、八重數がし通南へ行ば、右に和田倉橋、左は酒井修理殿よこや、松平伊豫殿裏長屋、此間二町有て左に道有、前のかし通同かご萩玄正高倉屋敷、新庄民部殿明やしき、久世三十郎殿火消やしき、山口平兵衛殿、此間二町有て右に喰違御門の橋、左への道南に織田左衛門殿、西よこやつゞき松平相摸守殿よこや、此間二町ばかり有、左に道有、前のかし通南へ行ば、ひだり角伊達遠江守殿奥平小二郎殿、是まで貳町有、右に日比谷御門有、幷に岡田豊前殿、行あたり松平日向守殿、九鬼和泉守殿、是まで二町あまり、左に奥平小次郎殿よこや、青山大膳殿よこや、是まで二町程有、行

當すきや橋御門へ出る、是より大名小路中道通、左靑山大膳殿大久保出羽殿、右は堀周防守殿伊井兵部殿、すぢかいに左右に道有、前の通右かど坂部三十郎殿毛利伊勢守殿松平土佐守殿、左角松平相摸守殿靑山因幡守殿、右左に道有、前通右角松平遠江守殿酒井左衞門督殿安藤對馬守殿、左八重數がしのやしきじり、右左に道有、左右に松平伊豫守殿表門有、右左に道あり、右は松平阿波守殿よこや、左は酒井修理殿よこや也、左かど典奏屋敷、御評定所幷に伴宗悦、酒井伯元よこや、右細川越中守殿よこや、同若狹守殿、行あたり左右に道有、是まで十町程有、和田倉橋通り右角松平阿波守殿、森內記殿、松平丹波守殿、左側は細川越中守殿前田右近殿戸田釆女正殿小笠原土佐守殿よこや、左右に道あり、是まで三町あり、

一、すきや橋より、錢龜橋までの土手前、堀周防守殿表長屋幷伊丹兵部殿表長屋、左道有、前の通、右かど水野右衞門督殿伊丹大隅守殿松平土佐守殿松平山城守殿、右鍛冶橋御門、左に道有、前の通左かど保科越前守殿橫屋幷に吉良上野守殿、左に道有、右の角に松浦伊右衞門殿幷安藤壹岐殿、よこてを行ば蜂須賀飛驒守殿よこや、左に道有、同側同飛驒守殿、右は岡部左近殿、森內記殿、左山名主殿頭殿安藤對馬守殿よこや、右松平伊豫殿、此間貳町半、行あたり同伊豫守殿、左右に道有、前の土手通北へ行に、岡部左近殿近藤彥九郎殿松平丹波守殿よこや、左に道有、前の道左かど小笠原土佐守殿宮崎若狹守殿町奉行所也、右に吳服橋、是より道三がし川添金左衞門殿、右は錢がめ橋有、前のつゞき戸田釆女正殿幷米津出羽守殿淸水喜庵同道祐幷に道三細川若狹守殿切、右に彥三郎橋有、

和田倉御門より內、櫻田御門、あかず御門まで之內

一、和田倉御門より西南へ壹町行ば阿部播磨守殿よこや、此間壹町過てかぎのてに西南へ壹町程ゆけば阿部對馬守殿よこや、壹町右に腰懸塲有、左に道有、行あたり久世大和守殿よこや、それより西へ壹町行て南へ行に堀田備中守殿、此間壹町半行、右は紅葉山への御門有、幷に諏訪部彥衞門殿御馬屋なり、西之丸下馬追手御門左かど永井伊賀守殿、此屋敷壹町の餘、よこて道有、前のつゞき保利筑前守殿、行あたり堀有、右櫻田御門也、

一、櫻田御門の內保利筑前守殿よこや、壹町過て右に道有、右かど朽木伊豫守殿、左久世出雲守殿森川出羽守殿、右松平縫頭殿よこや、行あたり稻葉美濃守殿、左右に道有、前の通東へ行ば右石川齋阿彌佐野福阿彌、左かど朽木伊豫守殿よこや、森川攝津守殿、此間壹町半、それよりよこて北へ出る道有、右かど土井兵庫頭殿よこや、鎰のてに壹町半に行て右にくいちがひ御門有、左の道右の側大久保右京殿、稻葉美濃守殿、堀田備中守殿よこや、左側松平駿河守殿松平縫頭殿、よこて道有、前の續き森河出羽守殿よこや、永井伊賀守殿、是まで三町有、向は西之丸、左右に道あり、前土手筋北へ行に大久保右京殿よこや、水野監物殿、左に道有、前の通北へ行ば、左かど阿部播磨守殿、右てに馬場二町の餘有、是まで七町計、ゆきあたり和田倉御門なり、

櫻田御門より、日比谷御門、山下御門、御成御門、
虎之御門迄之内

一、櫻田御門より虎の御門までの通、左上杉喜平次殿よこや、板倉隱岐殿土方河內守殿、右がわ永井市正殿本多對馬守殿松平安藝守殿、すぢかいに左右に道有、前の通角へ行に、左かど相馬長門守殿金森万之助殿右松平右衞門督殿、左右に道有、前之通南へ行に左かど松平伊賀守殿、右かど松平周防守殿、是まで五町の餘有、行あたり虎之御門なり、櫻田御門より御成橋への通りほり通上杉喜平次殿、右に道有、前のつゞき松平大膳殿、此まへのほり辨慶ぼりといふなり、甲府宰相樣、是迄四町、それより南へ行ば、堀ばた右がは甲府樣よこて鍋島丹後守殿、是まで三町、向に本多越前守殿、横通二町行ば山下御門有、又鍋島御門共いふ、是より土手に付南へ行ば、右かど土岐山城守殿松平大隅守殿鍋島加賀守殿、是まで貳町半、行あたり御成橋、又幸橋ともいふ、此御成橋左りかどに松平大和守殿、此やしき六十間程有、よこてに付て西へ行ば、右東角松平大隅守殿、右に道有、左がは秋田安房守殿本田伯耆守殿松平大和守殿、此間一町半、右がわ松平大隅守殿よこや、本田越前守殿、此間二町の餘、前の通西へ行て、左渡部越中守殿伊藤出雲守殿南部大膳殿龜井能登守殿、右秋田安房守殿よこや、南部大膳殿、横山內記殿、是まで三町、左右に道有、左之道同側龜井能登守殿よこや、板倉市正殿、是まで壹町の餘、す

ぐ道久保町へ出る前に小ばし有、市正殿よこて築地のきわに柳生飛驒守殿やしき有、行あたりさらの御門、此間壹町なり、前の通より右之道北へ行に、左水野谷右京殿水野民部殿、右は横山内記殿よこや、又水野谷右京殿松平主殿頭殿、此所過て左右に道有、前道北へ行ば、左稻葉美濃守殿板倉隱岐守殿上杉喜平次殿よこや、右は大關信濃守殿松平大膳殿よこや、行あたり辨慶堀、左右に道あり、是まで四町の餘あり、

一、右之內、松平主殿頭殿よこてを東へ行に、左大關信濃守殿よこや、大田原山城守殿鍋島丹後守殿よこや、右は眞田右衛門督殿松平大和守殿よこや、此間貳町半、行おたり本田越前守殿、左右に道有、

江戸雀初卷終

江戸雀二卷目

糀町御門より四ッ谷御門迄之內、糀町十一町有糀町壹町目諸商人諸職人有レ之、貳町目左横町隼町へ出る、右横町五番町へ出る、三町目右横町六番町通へ出る、左横町天神への道なり、四町目右横町は二番町へ出る、左に道なし、五町目左横町赤坂御門へ出る、六町目右横町六番町へ出る、左り道なし、七町め右横町六番町へ出る、左横町淸水谷へ出る、此町左がはに內藤若狹守殿戸田伊賀守殿表門有、八町目右に長福寺有、横町左右になし、九町目左横町尾張中納言樣御裏門へ出る、右横町五番町へ出る、右に眞法寺有、十町目右横町二番町へ出る、左に横町なし、十一町目四ッ谷御門外に有、右町內商人諸職人有レ之、見付之前に一番町通の道有、又見付より市谷御門への道土手筋よし、見付より右手に道あり、赤坂へ行なり、

糀町御門より、赤坂御門、山王、永田町、ため池、虎之御門、櫻田御門まで之內、付霞ケ關、幷山王權現の事

一、糀町壹町目南側西横手日根半助殿、よこてに道有、前の通南へ行、左角天野孫助殿幷に松平越後守殿、是まで四町、左右に道有、

一、右之內、日根半助殿横手西へ行ば、左天野孫助殿よこや、つゞき天野彥右衞門殿牧野七左衞門殿長田守右衞門殿、向角小栗平右衞門殿、右に道有、糀町貳町目へ出る、前の道西へ行ば、右西角三宅三十郞殿、續て新見五郞太夫殿横山五兵衞殿を限、左加藤六左衞門殿伴野甚左衞門殿伊藤養春、此間貳町、左右に道有、右は糀町三町目へ出る、此道西側横山半左衞門殿榊原權七殿、左の道西側天神の宮、此間壹町餘行西へ道有、壹町半行て右に諏訪因幡守殿之門有、左に道有、前のつゞき伊野子左太夫殿、左小崎半六殿よこや、服部平右衞門殿よこや、壹町程行ゆきあたり紀州中納言樣、左右に道有、右の道北へ行ば伊野子左太夫殿よこや、半町程すぎて左西へ道有、前のつゞき加賀爪半之丞殿諏訪因幡守殿、左武田越前守殿、此間壹町ぢかく、行當りかうじ町五町目に出る、

一、右之內、武田越前守殿よこてを西へ行に、左紀州中納言よこや二町半有、右側三枚長兵衞殿鈴木彌次右衞門殿、內藤若狹守殿うら門なり、先に四ッ辻あり、すぐ道二町半行ば紀國坂へ出る、此道左井伊玄蕃殿、右尾州中納言樣、此あたりを淸水谷といふ、左南への道赤坂御門へ行なり、

一、紀州中納言樣表門向に服部平右衞門殿今川大學頭殿伊藤勘五郞殿黑澤杢之丞殿相馬小次郞殿諏訪備前守殿堀三介殿よこや、右に菅沼越中守殿、此やしきに稻荷の宮有、貳間四面、あらたなる御社也、むさしの國一國之稻荷の根源とかや、菅沼主水殿、此間三町、右に赤坂御門有、行あたり松平出羽守殿屋敷有、東方壹町程行て左右に道有、右之道西側松平出羽守殿うら門、齋江若狹守殿岡部內膳正殿柴田七九郞殿、此間貳町半程、此通山王うら門通也、左之道右かごは駒井右兵衞殿よこや、つゞき山本六右衞門殿高木喜左衞門殿久保平左衞門殿小栗市左衞門殿玉虫十左衞門殿坂井極之助殿左側角堀三四郞殿よこや、諏訪備前守殿沖津內記殿小笠原吉兵衞殿同源六殿長木半六殿切、是まで三町有、

一、右之內、酒井極之助殿よこて通東へ行ば、左側角米浦半左衞門殿川內源五左衞門殿松平出羽守殿松浪

十左衛門殿福王半右衛門殿加藤勘右衛門殿、右に花房喜太夫殿、此間壹町半行ゆきあたり松平越後守殿、左右に道有、右之道壹町半行て行あたり松平傳左衛門殿、此間三拾間程過て南へ道有、前の通東へ行ば、左に日下部半之丞殿柴新兵衛殿三好石見守殿遠山忠三郎殿を限、右石川源五左衛門殿内藤天王三上次郎兵衛殿伊出五左衛門殿田村助太夫殿榊原兵左衛門殿此間壹町半、左右に道有、行あたり菅沼次郎右衛門殿、北つゞき深澤三郎左衛門殿、此間貳町程行てよこてに付て行ば、半町過て左に道有、前の道東へ行に、右は建部宇右衛門殿梶三郎兵衛殿井伊玄蕃殿、此間三町程すぎ右南へ道有、前の通東へゆけば、右は井上太左衛門殿小出瀬兵衛殿永井市正殿よこや、此間二町半行き行あたり櫻田御門へ出るなり、

一、赤坂御門通東へ行ば、右松平出羽守殿、左堀三四郎殿やしき、此間壹町行てゆきあたり駒井右京殿よこや、左右に道有、右の方へ少しゆきて東へ道あり、同右京殿同次郎左衛門殿松波五郎右衛門殿武田與左衛門殿、右側諏訪右衛門督殿片桐主膳殿石野八兵衛殿高木藤兵衛殿、是まで壹町半、北へ半町行て草野半之丞殿やしき、左右に道有、

一、右之内、松平出羽守殿うら門通、左諏訪右衛門殿、此間四十間通りて左東へ道有、よこやつゞき柴田和泉守殿高力左京殿天野佐左衛門殿内田出羽守殿大久保三太夫殿を限、右永井彌右衛門殿永井傳八殿牧野清兵衛殿を限、右に道有、山王への道也、前のつゞき永田善十郎殿中山伊右衛門殿よこや、此間三町、左右に道有、行あたり井伊玄蕃殿、右北へ四十間行ば、右西かど中山伊右衛門殿淺野因幡守殿よこや、左井伊玄蕃殿よこや、此間壹町ゆきてすぐみち二町行ば、虎之御門筋相馬長門守殿にて行あたりて、此間を霞ヶ關といふ、名所なり、續千載集春の上前大納言爲世卿歌に

　おなじくはそらに霞のせきもがな
　　雲路の鴈をしばしとゞめん

有人此こゝろを發句に、

　通すなよ霞ヶ關をかへる鴈

去年如月の頃、此所を通り侍しに、鶯の鳴を聞て、

　とがむるは霞の關の金衣鳥

一、四ッ辻より南へ道あり、東かど井上兵部頭殿幷に

岡邊三之丞殿坪内惣兵衛殿、此間壹町の餘、右西側淺野因幡守殿岡邊次郎兵衛殿永井彦兵衛殿、すぐ道山王へ行、左東へ道有、左坪内惣兵衛殿、右東は加藤三衛門殿、神谷長五郎殿井上次兵衛殿、右に道有、前のつゞき金松又四郎殿小出宮内殿松平因幡守殿、左松平右衛門督殿よこや、此間三町半、すぢかいに右左に道あり、虎之御門すじなり、

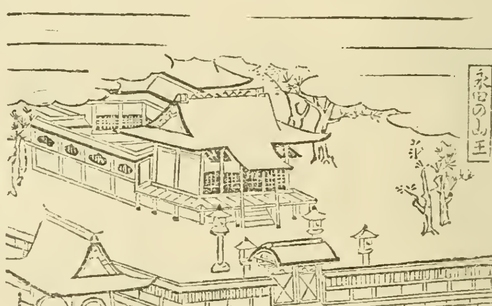
一、虎之御門より山王まで左入込、内藤左京殿村瀬伊左衛門殿高木次郎八殿坪内源五郎殿島田作右衛門殿、右松平周防守殿よこや、高木勘解由殿、右に道二筋有、前の通、左吉田喜庵保科主水殿成瀬宗右衛門殿加藤平右衛門同權七殿、右がわやしきの地より是まで三町、行あたり坪内平左衛門殿、左右にみち、左西の方へ半町行て行あたり永井彦兵衛殿、左右に道有、左西へつきて一町ゆきて行あたり丹羽左京殿、南つゞき城野半左衛門殿内藤豊前守殿、左かど設樂甚三郎殿松平外記殿、此間壹町、行あたりため池、丹羽左京殿より北への右かど小倉孫太郎殿門奈助左衛門殿淺野因幡守殿永田宇左衛門殿同清兵衛殿同善十郎殿、是まで二町半、向かど松平左近殿、南つゞき阿部丹波守殿内藤伊勢守殿大久保玄蕃殿、よこてに付て西へ行ば山王也、表門に入て石の鳥居貳ツ有、壹町半行て右うら門通なり、前の通西へ行ば、右は茶や坊舍あり、鳥居左かど最溝院、右日吉大膳神主なり、二王門有、石檀五十二段有、隨身門有、それより内に又門有、山王の宮銅瓦ぶき也、宮地の内に神社あまたまします、

永田山　山王權現之事

一、御當社山王權現は、叡山第二世の座主慈覺大師之開基なり、是江府の鎮守として和光同塵の利益淺からず、八相成道を示し給ふ、然るに慈覺大師佛法弘通のために、むさしの國川越にいたりて、今の星野山をひらき、初て圓頓の教法をひろめ給ふ時、且は佛法永く傳へんがため、又は和光の利益を普く東國にほどこさんがためにとて、我たつそまの山王權現を、上の七社中の七社、下の七社の内各一社づゝをぬき給ひて、三所の靈神を勸請し給ひぬ、抑三所の神と申奉るは、第一には上七社の内二之宮の權現、本地藥師如來、東方淨瑠璃世界の教主也、二六の大願をかなへ給ひて、衆病悉除の別意は洩さず、參詣の輩をすくひ給

ふ、第二には中の七社の內きびの宮、本地は則聖觀音なり、七難三毒の春の霞は十九說法の風にきえ、三十三身の秋月は五濁の水に影きよやか也、第三には下七社のうち王子之宮、本地は是文殊大士也、三世覺毎の智劔は三障四魔の軍を破り、獨步無爲の妙用は四德三昧の光をほどこしたまふ、爰に依て國家豐饒せり、關八州之內には誰か渴仰し奉らざらん、かくて星霜を累て後花園院の御宇長祿三年に、太田道灌江府の城に住ける時、文明年中に始て此御神を星野山より城內に勸請せり、さるによつて近き比まで、山のての城の西に御社ありける時は、再興修造の其奇麗なる事善つくし美つくせり、又承應三年に回祿の後、今の溜池の築山無双の勝地たるによつて、上命を蒙り此所にうつし奉る、月日幾度ならずして造營の功を立らる、金殿玉樓天にかゞやき、廣棟朱簾地に映ぜり、されば御當家の御氏神となさせらるゝも其故なきにあらず、御先祖六孫王經基公は、坂本の山王氏神也、然れば殊更御崇敬有べき也、神事は六月十五日なり、江戶中の大神事として、諸大名大かたは氏神としてあがめ奉らせらる、まつりは隔年におこなはれ侍るなり、

ひやせ〳〵山王の塲の眞桑瓜



糀町御門、四ッ谷御門、市谷御門、牛込御門、田安御門、番町筋、やしき付之事

一、糀町札の辻より五番町までよこて通、札の辻前に右かど沼野新五郎殿火消屋敷なり、向に町屋有、幷に花房大膳殿加藤清兵衛殿、左に道有、まへのつゞき中根平三郎殿石川太郎右衛門殿、平井三右衛門殿、左に

道有、うら五番町前の通、右長谷川刑部殿小栗市右衛門殿井上孫兵衛殿米津千之丞殿榊原一郎右衛門殿柴山小兵衛殿の究合に松平助之丞殿、向がは小栗八十郎殿宮重作兵衛殿島村市庵、前の通左側柳木三左衛門殿上村庄右衛門殿小野介右衛門殿太田善太夫殿塚原四郎右衛門殿是まで四町、左への道本五番町通なり、此邊地獄谷といふ、すぐ道之分やしき横てばかりなり、

一、糀町二町め横町、左松平内藏之介殿柳田隱岐守殿よこやにて、行當四ばん町、大橋五左衛門殿よこや、此間壹町、左右に道有、すぐ道なり、右安藤喜兵衛殿、ゆきあたりうら五番町へ出る、

一、同三町め右横町、右鈴木九左衛門殿岡部壹岐守殿よこや、左岡田長五郎殿永井左兵衛殿、此間壹町、左右に道有、前の通北へ行ば、左かど峯助兵衛殿山高甚右衛門殿宮崎彌五兵衛殿、右佐々木利介殿よこや、小見山傳九郎殿よこや、此間壹町の餘、行當り松波大藏殿、西へ道あり、

一、同四町目右横町、左服部十右衛門殿長谷川久三郎殿、右がわかど石谷市右衛門殿、入込に渡邊左衛門督殿辻忠兵衛殿江原三右衛門殿、横手に道有、前のつづきかど伊藤傳五郎殿、是迄壹町半、左右に道有、前のすぐ道通やしきの横手故しるさず、二番町へ出る、

一、同六町目右よこ町、右深津甚左衛門殿河久保三左衛門殿よこや、此間一町、左右に道あり、前の通北へ行ば、右小川淸左衛門殿よこや、大久保甚五左衛門殿杉田九兵衛殿よこや、左は水野傳兵衛殿三原又左衛門殿よこや、此間壹町、左右に道有、前の通北へ行ば、ゆきあたり六ばん町へ出る、

一、同七町目右よこ町、左赤井七郎兵衛殿岡野孫九郎殿よこや、右久保三十郎殿近藤三郎兵衛殿羽地賀傳右衛門殿よこや、此間壹町半、前の通北へ三町行てゆきあたり六ばん町へ出る也、

一、九町目右よこ町は、五ばん町通、十町めよこ町は二ばん町通、四ッ谷見付に二筋道有、壹ッは一ばん町へ出る、今一ッは市谷御門へ出申候、

一、糀町北後之通うら五番町といふ、沼野新五郎殿よこてより書付申候、左加藤淸兵衛殿よこや、大橋五左衛門殿、右中根平三郎殿よこや、安藤次右衛門殿、左右に道有、前の通り西へ行ば梁田隱岐守殿岡部外記

殿、右新見彦左衛門殿佐々木理助殿、左右に道有、前の通西へ行ば、左永井左京殿よこや、大橋七郎右衛門殿松下三郎左衛門殿門奈市十郎殿、右岸勘兵衛殿よこや、市岡五左衛門殿小澤兵太夫殿市岡左太夫殿、左右に道有、行あたり長谷川久三郎殿やしき也、此間三町半なり、

一、右之通より北後通同左りうら五番町通、左り平井三右衛門殿よこや、鎌田藤右衛門殿飛田庄左衛門殿、右柳三左衛門殿よこや、勝邊五兵衛殿木幡七郎右衛門殿、森川六之助殿伊賀死庄右衛門殿松波六藏殿坂本小左衛門殿、左小滿田傳左衛門殿須田平左衛門殿小見山傳九郎殿、左右に道有、右へ少し行て右は宮崎彌五兵衛殿よこやつゞき、町少し有て、鈴木七右衛門殿つゞきはやしきの地尻、右もやしきの地尻なり、壹町餘り有て宮崎彌五兵衛殿、左右に道有、前の通西へ行に長谷川久三郎殿横屋、左は小川彦右衛門殿川久保三左衛門殿、右は願照寺、小川清左衛門殿、左右に道有、前の通西へ壹町行て行あたり赤井七郎兵衛殿、左右に道有、是まで七町、又壹町さきに左右に道有、むかひはゆきあたりやしきなり、

一、右之通より北うら通、堀ばたより左塚原四郎右衛門殿よこや、小林平十郎殿澤瀨喜左衛門殿横田次郎左衛門殿小田切太郎左衛門殿、右やしきの地尻少有て石川助之進殿須田與左衛門殿加藤源四郎殿飯田宗左衛門殿松浦彌市郎殿遠山久四郎殿、左右に道有、前の通西へ行ば、左り田澤久左衛門殿永井金左衛門殿多久間伊織殿神保市衛門殿柴田牛之助殿、右青木又右衛門殿出淵市太夫殿坂本百助殿戸田又太郎殿西山喜兵衛殿本田彌五右衛門殿荒浪友右衛門殿、左右に道有、南の通西へ行ば、左太田太郎左衛門殿本間忠左衛門殿本間五郎左衛門殿高田七左衛門殿杉田九兵衛殿、右門奈惣兵衛殿山岡五郎作殿羽太權兵衛殿内藤源左衛門殿、左右に道有、前の通西へ行に、左三浦又左衛門殿高木甚兵衛殿蜂須賀傳右衛門殿、右筧權右衛門殿、左野間與八郎殿を限、左右に道有、前通西へ行ば、左岡野孫九郎殿同内藏之助殿、右は高木忠右衛門殿深和六郎衛門殿本田作右衛門殿、行泉寺まで行あたり、かうじ町九町目と十町目へ出る、此間九町あり、本五番町通なり、

一、右之通より北後通二ばん町、みなやしきの地尻な

るゆへしるすに及ばず、
一、右之通より北後通本表二番町通、堀ばたより左長屋長十郎殿松平伊右衛門殿、又宇田野作兵衛殿、入込根來五左衛門殿榊原五兵衛殿よこや、右松平助之進殿よこや、石川與次衛門殿よこや、左右に道有、左之道同側かど榊原五兵衛殿佐野傳右衛門殿武尾佐五右衛門殿佐橋内藏之助殿、右側かど三宅太兵衛殿松平平右衛門殿三浦五郎左衛門殿筧三郎左衛門殿、行あたり堀有、此間壹町、前の通より、右への道同側かど、石川與次衛門殿成瀨吉兵衛殿大岡佐渡守殿、左側かど、筧助兵衛殿朝比奈彦右衛門殿榊原源兵衛殿、是まで壹町、行あたり牛込御門の土手へ出るまへの二ばん町通西へ行に、左西山十右衛門殿伊勢平左衛門殿よこや、南つゞきに山寺彌太夫殿、右筧助兵衛殿よこや、遠山三太夫殿千葉太郎兵衛殿德庵、左右に道有、前の通西へ行に、左岡邊左兵衛殿伏見勘七殿中根權六殿小笠原八右衛門殿都筑又兵衛殿板橋與五右衛門殿服部五郎右衛門殿、よこてつゞき長野源助殿、右松平甚五左衛門殿恒岡新左衛門殿松浪甚左衛門殿加々見金右衛門殿多田見四郎兵衛殿福井勘兵衛殿井柄甚四郎殿小笠原源四郎殿杉浦久太郎殿、左右に道有、前の通西へゆけば、左靑山善兵衛殿西山八兵衛殿高田庄右衛門殿大岡吉十郎殿石川四郎兵衛殿笠井四郎左衛門殿塚子又十郎殿、右杉浦九郎兵衛殿近藤五郎助殿筒井七左衛門殿窪田又右衛門殿佐波瀨忠左衛門殿石野兵左衛門殿近山七郎左衛門殿小見山伊右衛門殿朝田十右衛門殿長田甚右衛門殿、左本田九藏殿小保六左衛門殿鈴木市郎左衛門殿、左右に道有、前の通西へ行ば、左りは逸見八左衛門殿本田主膳殿、右高林又兵衛殿高木安右衛門殿三枝八郎左衛門殿、左右に道あり、前の通西へ行ば、左原田彌右衛門殿久留六郎右衛門殿本田介左衛門殿永井勘兵衛殿、それより寺の地尻よこや、右豐島重左衛門殿笠原平六殿三田佐兵衛殿成瀨隼人殿、行あたり糀町十町目也、是まで十二町なり、
一、右之通北うしろ通うら一番町、いづれもやしきの地尻なるゆへしるすに及ず、
一、右之通より北うしろ通表一番町、土手際のやしき朝比奈佐兵衛殿松平助之進殿、是迄壹町、一番町西へ行ば、左朝比奈左兵衛殿よこや、大岡佐渡守殿よこ

や、右大岡宇右衛門殿深瀨左門殿、左右に道有、前の通西へ行ば、左榊原源兵衛殿よこや、又雨野宮權左衛門殿大久保三十郎殿大岡忠右衛門殿、右松下清左衛門殿多田三八郎殿太田半九郎殿小林太郎左衛門殿、左右に道有、前の通西へ行ば、左三浦八兵衛殿恒岡左太夫殿松波甚左衛門殿加々見權七殿西山與兵衛殿福井清藏殿澤瀨內藏之助殿、右は伊丹勘兵衛殿跡部茂兵衛殿稻垣清右衛門殿高木茂右衛門殿伊藤七郎右衛門殿原科孫九郎殿今村傳藏殿長田平右衛門殿、左右に道有、前の通西へ行ば、左山田庄兵衛殿關市郎左衛門殿天野市郎兵衛殿小林角右衛門殿同角助殿大久保半右衛門殿伊藤九郎右衛門殿、右は渡部介三郎殿山田重右衛門殿安藤太郎兵衛殿森川藏主殿栗林甚左衛門殿杉浦與七郎殿松平七左衛門殿大川內善左衛門殿佐々木庄五郎殿太田加兵衛殿後藤清兵衛殿、左右に道有、前の通西へ行ば、左小野淺右衛門殿林藤四郎殿押田五郎太夫殿、右は篠貝五右衛門殿伊藤長五郎殿久保半右衛門殿、左右に道有、前の通西へ行に、左り押上左衛門殿蓑部權之助殿舂田四郎五郎殿、右中島孫兵衛殿高林二郎兵衛殿小林庄之助殿夏目杢右衛門殿組、蜷川喜左衛門殿組、岡野內藏之助殿組、左り成瀨隼人殿地尻、行あたり四ッ谷の見付へ出る、此間十二町有、

一、右之通より東うしろ通裏六ばん町、みなやしきの地尻なるゆへしるすに及ず、此邊に法眼坂といふあり、

一、右之通より北うしろ通表六番町、土手まへ森川小左衛門殿山岡十兵衛殿同忠右衛門殿、是まで壹町なり、六番町西へ行ば、右がはかど大塚平右衛門殿よこや、近藤五左衛門殿松平次郎太夫殿鈴木四郎左衛門殿、左り森川小左衛門殿よこや、岩瀨吉左衛門殿同與左衛門殿西山嘉左衛門殿馬場一郎右衛門殿坂寄九兵衛殿小栗三右衛門殿、左右に道有、前の通西へ行ば、左朝比奈六右衛門殿筧助十郎殿同勘右衛門殿、右朝岡又四郎殿青木與兵衛殿細井左次右衛門殿森本惣兵衛殿、左右に道有、前の通西へ行ば、左小奈谷次郎兵衛殿駒井長四郎殿同喜平次殿武藏八郎右衛門殿南條小兵衛殿市川小左衛門殿久保傳兵衛殿淺岡八太夫殿落合源右衛門殿大河內吉左衛門殿、よこてに道有、前の道通、右は伊達庄兵衛殿朝比奈勘右衛門殿中野主

税殿市川權之助殿小川新九郎殿、よこてに道有、前のつゞき永田市左衛門殿同孫十郎殿揖斐半右衛門殿同坂眞五郎殿金田左兵衛殿高林與五左衛門殿飯村與兵衛殿有賀長三郎殿加藤長三郎殿川野庄太夫殿、よこてに道有、前の通、左金田宗頗溝子左衛門殿須田市兵衛殿宮木監物殿氷木藤右衛門殿竹島七郎左衛門殿小田切新右衛門殿永井源太郎殿、よこてに道有、前の通、右大田助之丞殿小奈谷權右衛門殿上田萬五郎殿南幡權六殿名取十左衛門殿久留善右衛門殿、よこてに道有、前の道、左り岩手平左衛門殿竹島勘右衛門殿山田九郎右衛門殿、よこてに道有、前の通、右は渡部八郎右衛門殿御洗太兵衛殿小林太兵衛殿杉原又兵衛殿大野麥右衛門殿、左り山田太郎右衛門殿沖津吉左衛門殿須田次郎太夫殿小野淺之丞殿、それよりつゞきはやしきの地尻、行あたり四ッ谷見付へ出るなり、此間十二町なり、

一、右之通より北うしろ通三番町、土手より左り揖斐與右衛門殿大塚平右衛門殿、此間壹町、三番町通を西へ行ば揖斐與右衛門殿横や、大久保荒之助殿同新八郎殿曲淵重右衛門殿松平三次郎殿黒川八左衛門殿、右松平丹後守殿油川源兵衛殿齋藤久右衛門殿三宅彌次兵衛殿阿部伊勢守殿、左右に道有、前の通西へ行に、ひだりは天野甚左衛門殿小見山喜左衛門殿廣戸半十郎殿堀内甚左衛門殿小野左兵衛殿、右は島次左衛門殿戸田金五郎殿鈴木甚左衛門殿矢部伊織殿神谷與七郎殿、左右に道有、前の通西へ行ば、左内藤半彌殿渡部傳藏殿佐野次郎兵衛殿深津長右衛門殿、右柘植小左衛門殿土屋勘介殿間宮忠左衛門殿前島十左衛門殿大島平八殿、左右に道有、前の通西へ行ば、左深津大膳殿御手洗五郎兵衛殿山中市兵衛殿中奥七太夫殿丸藤兵左衛門殿青木大助殿早見七兵衛殿上村五郎兵衛殿、右榊原八兵衛殿大木七郎右衛門殿厚見平左衛門殿横地太左衛門殿岡部半九郎殿南條喜兵衛殿蓑部彦左衛門殿三浦半助殿蓑部源右衛門殿、右に市谷御門有、左にも道有、前の道西へ行ば、右に馬場一町つゞき土手也、左三牧重右衛門殿駒井孫四郎殿小笠原久左衛門殿大橋源兵衛殿、よこてに道有、前のつゞき板戸平八郎殿、それよりつゞきはやしきの地尻、四ッ谷の御門あり、此間十四町也、

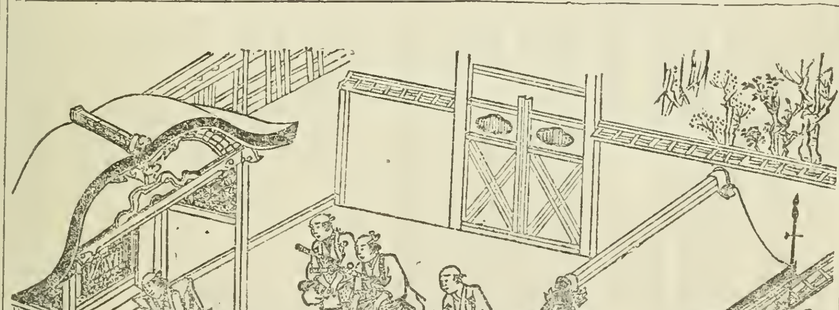
一、右之通より北うしろ表四番町通、花房外記殿火消

屋敷より左大久保右衛門七殿高林彌一郎殿山角文右衛門殿雨宮勘兵衛殿田中三郎右衛門殿小幡太郎左衛門殿、右は大賀沼三五郎殿、よこてに道有、前のつゞき五味藤九郎殿小笠原七郎左衛門殿、左右に道有、前の通西へ行に、左内藤與左衛門殿服部備後守殿阿部次郎左衛門殿佐脇甚右衛門殿、よこてに道、前のつゞき前田新八殿岡部傳八殿同平次郎殿加藤勘右衛門殿黒澤兵介殿、右高木又兵衛殿森川淸十郎殿坂部次郎太夫殿戸田七内殿沖津彥十郎殿塚原十左衛門殿内藤權右衛門殿勝野金右衛門殿高室四郎兵衛殿、左右に道有、前の通西へゆけば、左山角四郎兵衛殿岡戸半兵衛殿本間甚太郎殿土屋次郎左衛門殿、つゞきやしき地尻、右宮崎助右衛門殿中垣善兵衛殿伊郷善左衛門殿中山祐半、行あたり市谷土手也、是まで八丁なり、

一、右之通より北うしろ通うら四番町と云、但五味藤九郎殿横がはを壹町通て、左西へ道あり、まへの道北へ行ば、右手に菅沼藤十郎殿宇殿藤助殿、是よりやしきの地尻を壹町ほど通りて、右東へ道有、まへのつゞき松山七左衛門殿坪内藤介殿地尻へ駒杵長右衛門殿白坂淸左衛門殿黒田信濃守殿蓑部一學殿横山甚三郎殿まで三町、左右に道有、右菅沼藤十郎殿表門通西へ行ば、左は島藤左衛門殿大竹源太郎殿根岸長兵衛殿、右駒杵長右衛門殿よこや、井鄉新右衛門殿筧五郎太夫殿、すぢかいに左右に道有、右の道同側筧五郎太夫殿よこや、渡部六左衛門殿榊原四郎兵衛殿大久保次郎兵衛殿中根彌五左衛門殿、よこて向に藤市兵衛殿河上九郎左衛門殿、左り側菅沼新三郎殿よこや、松平新九郎殿松田六郎左衛門殿松田彌五郎殿、此間壹町半、左右に道有、前通西へ行に、左服部與左衛門殿權田市右衛門殿安西六郎右衛門殿水上五兵衛殿松田市兵衛殿大岡八郎左衛門殿本田淸兵衛殿松平九郎右衛門殿、よこてに道有、前のつゞき淺井傳八殿、右菅沼新三郎殿岡戸權左衛門殿本田左太夫殿山形次郎右衛門殿引田彥兵衛殿水野十兵衛殿笹山甚右衛門殿、是まで四町、行あたり土手、左右に道有、

一、牛込御門より市谷御門までの土手筋、左側石原甚兵衛殿三島五左衛門殿澤瀨治郎左衛門殿河村善七郎殿千葉市左衛門殿上村庄兵衛殿、左右に道有、前の道西へ行ば長坂彥兵衛殿、入こみ内藤金左衛門殿須山久兵衛殿朝比奈喜介殿岡部彥右衛門殿、是まで四町

之餘、すぐ道ゆけば市谷御門へ出るなり、
一、表四ばん町入口に、右ての通北へ行ば、右がは酒井采女正殿水野甲斐守殿大久保七兵衛殿内藤六之助殿、横手に道有、まへのつゞき、新見半左衛門殿よこや、同東つゞき鈴木甚之助殿、前のつゞき加藤加兵衛殿松平與右衛門殿、左側大加沼三五郎殿よこや、本郷庄五郎殿石川彦五郎殿末高半左衛門殿毛利數馬殿天野仁右衛門殿同清左衛門殿坂寄長兵衛殿大久保新右衛門殿筒井權兵衛殿、よこてに道有、前のつゞき山下長兵衛殿よこや、坪內藤七殿、此間三町半、左に道有、
田安御門より、清水御門、雉子橋御門、壹ッ橋御門、神田橋御門、かまくらがし、駿河臺、筋違橋御門、相生橋、水道橋、小石川御門、牛込御門まで之內
一、田安御門より牛込御門まで之內、土手まへ左花房外記殿火消屋敷、右渡部半三郎殿、左右に道有、それより西の方へ半町ゆけば留永孫左衛門殿、それより北へゆけば、右松下十郎左衛門殿宮崎若狭守殿蜂屋七兵衛殿布施孫兵衛殿筒井次左衛門殿布施五左衛門殿、幷に右手に道有、まへの通左酒井采女殿地尻也、



水野甲斐守殿うしろを通て知地伊左衛門殿靑木平助殿松平千之助殿坂寄六右衛門殿、幷に左てに道有、前の通右がは大久保勘三郎殿渡部權太夫殿河村惣十郎殿万年佐右衛門殿野間九郎右衛門殿、行あたり牛込見付也、左小栗友之助殿引田喜右衛門殿山本八十郎殿、向見付、是まで六町有、

一、たやす御門より渡部半三郎殿やしきを通て、右てに道有、左かど小栗庄二郎殿、よこてつゞきに宇殿惣右衛門殿渡部吉左衛門石谷織部殿石川六左衛門殿豊西九郎左衛門殿永見權七殿、右大久保平兵衛殿新見勘左衛門殿大久保吉之丞殿、よこてに道あり、前のつづき靑山七右衛門殿花井庄右衛門殿榊原四郎左衛門殿、入込石川作十郎殿帶十郎左衛門殿、行あたり長谷川庄二郎殿、左右に道あり、

一、雉子橋より小石川土手迄之內、きじ橋右に舟着借船有、右に御米藏有、幷に揖斐五左衛門殿、左に淸水御門、左へ少行き北へ行ば、右かど稻垣藏主殿永見新右衛門殿加藤太郎左衛門殿奥山藤十郎殿よこや、左かど御比丘尼方、幷秋本半左衛門殿、左右に道有、左飯田町諸商諸職人有レ之、右之道右同がわ奥山藤十郎殿森新兵衛殿、左がは牧野半三郎よこや、此間壹町斗、向に小橋有、北に道あり、則まへにほり有、水野主水殿內藤上野介殿、此間壹町、左右に道、前の雉子橋通北へ行ば、左に少し町有、幷に淺岡權三郎殿小野次郎右衛門殿永井五郎八殿鬮兵左衛門殿、右牧野半三郎殿成瀨吉右衛門殿荒川又七殿、左右に道有、左の道右手北見久太夫殿山本安兵衛殿靑山七右衛門殿よこや、左鬮兵右衛門殿よこや、次に三橋兵太郎殿大久保吉之丞殿よこや、此間壹町、前の道より右の道左手に土岐縫殿殿細井金五郎殿水野周防守殿、右荒川又七殿よこや、內藤上野守殿、此間きじ橋通北へ行ば、右土岐縫殿殿よこや、酒井兵部殿、横手に道有、右てに林權左衛門殿、此道筋水道橋へも出申候、前のきじ橋通、左北見久太夫殿よこや、闖本左京殿戸塚金左衛門殿阿部虎之助殿松平豐前守殿、よこてに道有、鍋島帶刀殿杉浦八郎五郎殿長谷川庄次郎殿大久保甚藏殿池田勘兵衛殿、横手を半町行て東道有、遠山半九郎殿酒井市右衛門殿、此間四十四間程、行どまり也、前はきじ橋通、右側戸田七之助殿建部與兵衛殿長田六左衛門殿、横てに道有、東へ行ば鈴木甚五左衛門殿、東よ

こてに道有、前のつゞき夏目傳右衛門殿よこや、廣田源右衛門殿榊原熊之助殿、右清水權之助殿よこや、北へ道有、前のつゞき御臺所衆、是まで壹町半、左右に道有、左小石川へ出る、前の雉子橋通、右がは鈴木甚五左衛門殿よこや、內藤筑後守殿秋山十右衛門殿大河內重右衛門殿、右手に道有、同側竹村九郎右衛門殿平野次郎左衛門殿同與左衛門殿曾根金五郎殿山中彌八郎殿、左馬塲三郎左衛門殿安藤重左衛門殿、此間壹町、行あたり土手、左右に道有、前の雉子橋通、左鍋島帶刀殿松平孫太夫殿齋藤庄左衛門殿戶田藤兵衛殿稻垣信濃守殿土てぎは也、右馬塲三郎左衛門殿よこや地尻、右てに道有、前のつゞき大友內藏殿馬塲忠右衛門殿大久保甚兵衛殿、向かど長谷川長五郎殿、是迄壹町、行あたり左右に道あり、まへの雉子橋通、右大友內藏殿よこや、猪飼五郎太夫殿水野吉兵衛殿雉子橋、爰迄十町半、行あたり土手、左右に道有、是より土手はたに付、小石川見付迄の內四町、右側水野吉兵衛殿よこや、高島右衛門八殿、大久保甚兵衛殿よこや、南へ道有、前のつゞき、山中彌八郎殿よこや、平岡源兵衛殿よこや、南へ道有、まへのつゞき榊原熊之助殿、

一、小石川見付より壹町西うしろ通、平岡源兵衛殿表門筋、右同人やしき出淵友右衛門殿井出岩松殿武藤庄右衛門殿加藤牛之助殿鈴木甚五左衛門殿。よこて夏目傳右衛門殿、是迄二町半、行あたり清水權之助殿よこや、表つゞき本田權兵衛殿やしき有、まへの通左右に道有、

一、壹ッ橋より半町行て。行あたり松平肥前守殿、よこや三十間程、左右に道有、左堀に付て北へ行ば、右酒井伊豫守殿、それよりよこやに付北へ行ば左堀、半町程行て右に道有、まへの通北へ行に、右大岡彌右衛門殿久貝惣左衛門殿小笠原丹齋榊原采女殿、左り大久保平左衛門殿よこや、中根十左衛門殿、よこてに道有、前の通、左島田藤十郎殿竹田法印宇殿十郎左衛門殿蜂屋源左衛門殿大澤五郎右衛門殿三枝對馬守殿、右永井平兵衛殿中山主馬殿日下部兵左衛門殿、此間過て左右に道有、前の通北へ行ば、右酒井作兵衛殿堀田五郎左衛門殿、左三好備前殿同久三郎殿、此間過て左右に道有、前の通北へ行ば、右小栗長右衛門殿三輪三左衛門殿久貝彌右衛門殿矢代越中守殿、左加藤彥

右衛門殿前田八郎左衛門殿前菓久三郎殿、よこて道有、前のつゞき高木新左衛門殿よこや、本多數馬殿、是まで十町、行あたり小石川土手、左右に道あり、右水道橋、左小石川へ出る、

一、右之内、大久保平左衛門殿よこて通西へ行ば、すぐ道ゆかず、北の通を行ば大久保平左衛門殿鈴木喜左衛門殿、左堀、此間四十間、磯貝市助殿よこや、右に道有、前の通、左御臺所衆、左に道有、まへの通右吉村七郎右衛門殿よこや、菓山權左衛門殿土屋市之丞殿同權之丞殿武尾四郎兵衛殿死村甚兵衛殿、よこてに道有、前の通左織田藤十郎殿、尻合に梁瀬庄左衛門殿戸田半六殿下河部次郎太夫殿戸田六郎右衛門殿神谷傳兵衛殿、よこてに道有、前の通北へ行ば、右天野廣八殿横屋、東つゞき小栗忠太殿、前通行あたり水野周防殿、西へ十間程行ば、北へゆけば、右赤井五郎作殿、左に又水野周防守殿、但よこや、織田小左衛門殿、此間過て左右に道有、行あたり三宅宇右衛門殿よこや、左西へ廿間程行に、右久保田兵介殿よこやへ付て北へ行ば、左御臺所衆、此間壹町過て左右に道有、まへの通北へ行に、右のやしきの地尻、左榊原熊之助殿よこや、行あたり小石川見付也、此間七町、

一、小石川見付より土手に付水道橋まで道有、東へ行に、左室賀源七殿横や半町、表門通左野瀬庄三郎殿宇殿新三郎殿、高木新左衛門殿よこや、右室賀源七殿堀屋半左衛門殿新庄宇兵衛殿大久保彌五郎殿、此間壹町半、左右に道有、前の通南へ行に、左井衾三郎右衛門殿長谷川三郎兵衛殿久世宇右衛門殿、右室賀下總守殿大森彌七殿三宅宇右衛門殿、此間壹町の餘行、ゆき當赤井五郎作殿やしき、左右に道有、前の土手筋書付可レ申候へ共、やしきのよこてゆへしるし不レ申候、
但道四町有、

一、右の通より二町東うしろ通南へゆけば、但土手ぎはより、左六尻六兵衛殿長谷川久兵衛殿近山五郎右衛門殿下島市兵衛殿曾根源左衛門殿、右坪井小左衛門殿水野源右衛門殿岡部庄左衛門殿太田新左衛門殿間宮左次右衛門殿、此間二町過て左右に道有、前の通西へ行ば、左河村善次郎殿松平民部殿上杉伊勢守殿日根長左衛門殿山門藤兵衛殿作間與右衛門殿安藤久左衛門殿朝比奈市平殿、右大森半七殿察佐又兵衛殿溝江半左衛門殿、尻屋に高木左兵衛殿、右てに道有、

前の續き淺野權之助殿柴田三右衞門殿神尾平三郎殿、此間三町過て左右に道有、行あたり牛奥甚五左衞門殿、右の道西つゞき、佐藤傳助殿松浪權兵衞殿原田彌之助殿中根十左衞門殿よこや、右側神尾平三郎殿よこや、此間壹町、行あたり竹田法印、左右に道有、牛奥甚五左衞門殿より東つゞき、齋藤勘右衞門殿飯山甚兵衞殿よこや、左朝比奈逸平殿よこや、一關藤五郎殿安藤彌右衞門殿杉才兵衞殿、此間壹町、左右に道有、前の通東へ行に、左水野藤右衞門殿松平長三郎殿、入込に小堀與十郎殿新見七右衞門殿水野半左衞門殿地尻、此間壹町半、左右に道有、鷹師町通也、まへの通東へ行に、左梶川十兵衞殿よこや、松平傳兵衞殿朝比奈孫兵衞殿、右阿部助之進殿よこや、萩原長左衞門殿夏目長右衞門殿よこや、此間壹町、左方に道有、同かわ長崎彌左衞門殿曾我權之丞殿村上孫八殿、右夏目長右衞門殿大棚半之助殿松平下總守殿地尻、爰を猿樂町と云、まへの通東へ行ば、左中坊長兵衞殿東條伊兵衞殿赤井六兵衞殿よこや、右東南かご長崎天方主馬殿、此間壹町、左右に道有、左の方への道に、同がわ赤井六兵衞殿水野九左衞門殿、右石川彌左衞門殿布施屋甚助殿長田金左衞門殿、よこてに道有、壹町程過て左右に道あり、左への方、同側高山平左衞門殿夏目權左衞門殿つゞきやしきの地尻行ごまり、それより歸る道に、和田新五兵衞殿赤井彌三兵衞殿川勝左衞門殿井上藏主殿笹邊甚六殿、右に道有、前通り也、并堀田賴母殿村越權三郎殿小倉忠右衞門殿、左りがわ笹邊甚六殿三宅內藏殿高山彌左衞門殿鈴木友之助殿大久保六右衞門殿、此間二町半、左右に道有、前の通東へ行に、左水野彌兵衞殿內田六之丞殿柳澤左太郎殿、右松田五郎三郎殿島角左衞門殿池田權太郎殿、此間左右に道有、右方へ十間程行て、東へ行にすぐ道、左原田金兵衞殿横屋、水野十兵衞殿、火消屋敷、右淺葉孫三郎殿よこや、中根十藏殿間宮新左衞門殿太田宇兵衞殿平野三五郎殿、此間壹町半、左右に道有、水野十兵衞殿よこや、三十間程行て西へ行に、右がわ館林宰相樣、并宇指才藏殿藤堂平右衞門殿松平次郎左衞門殿柘植傳兵衞殿小西助右衞門殿富永甚四郎殿、左水野十兵衞殿地尻、和田淸左衞門殿加藤淸兵衞殿、此間壹町半、行あたり武井八郎兵衞殿よこや、左右に道有、

一、壹ッ橋御門より水道橋まで之內、壹ッ橋より北へ行に、左土屋兵部殿橫屋、右手に道有、まへの通、右中根平十郎殿よこや、高井作右衛門殿よこや、左松平肥前守殿裏長屋、左右に道有、左の道北がわに井上宮內少輔殿大岡彌右衛門殿、左酒井伊豫守殿地尻也、此間壹町、行あたり堀、左右に道有、前の通より右の道、左がは池田備中守殿高井作左衛門殿幸田次郎兵衛殿松平三十郎殿大草主膳殿新見備中守殿、右高井作左衛門殿內田十左衛門殿西川淸左衛門殿、よこてに道有、前のつゞき戸田土佐守殿若林六郎左衛門殿、此間二町半、左右に道有、左は松平下總守殿表門有、右への道、左がは倉橋長右衛門殿建部十郎左衛門殿、右若林六郎左衛門殿よこや、堀三左衛門殿橫や、此間壹町、左右に道有、前の通南へ行ば、左は富田庄兵衛殿鳴海宗悅阿部豐三郎殿、右原田利齋大久保彥左衛門殿松雲よこや、此間壹町過て左右に道有、前壹ッ橋筋北へ行に、左飯高七兵衛殿日比野彌重殿、右池田備中殿よこや、戸田右京殿よこや、此間壹町、左右に道有、左への道右側大草彌右衛門殿朝比奈源六殿伊奈丹次郎左衛門殿板橋三郎兵衛殿大久保藤右衛門殿、左野村彥太夫殿關五郎右衛門殿山田十右衛門殿榊原采女正殿よこや、此間壹町半、すぐ道、左右にも道有、前の通より右への道、同側戸田右京殿本庄平七殿稻葉石見守殿、左根來新之丞殿武藤庄兵衛殿水野半左衛門殿、此間二町、左右に道有、鷹師町通なり、前は一ッ橋通、北へ行ば、左野々山新兵衛殿、右は根來新之丞殿橫屋なり、此間半町、左右に道有、爰は先紙に有レ之、前の通北へ行ば鈴木才兵衛殿橫屋、水野伊豫守殿大森信濃守殿大草三郎兵衛殿柳十左衛門殿松平民部少輔殿松下與兵衛殿毛利六兵衛殿、右水野藤右衛門殿橫屋、下山十郎右衛門殿佐藤景庵殿朝比奈源六殿近藤勘右衛門殿蜷川喜左衛門殿本田丹下齋藤宮內大河內又兵衛殿、此間三町半、左右に道有、前の通北へ行ば、左曾根源左衛門殿橫屋、小林十兵衛殿近山五郎右衛門殿柘植平兵衛殿、右大河內善兵衛殿よこや、小林半助殿廣戸三郎右衛門殿松笠權右衛門殿細屋彌次右衛門殿福村長右衛門殿、小坂まへに有、是まで一町、左右に道有、行あたり土手、右てへ十間ばかり行て水道橋有、右相生橋、左小石川見付へ出る、

一、水道橋より筋違橋まで之內、此通東へ行ば、福村

長右衛門殿よこや、淺原又左衛門殿宮毛傳左衛門殿よこや、此間壹町有て前の通東へ行ば、右側屋敷の地尻壹町程有て、小幡又左衛門殿山口四兵衛殿山中八藏殿石丸權右衛門殿青木彦兵衛殿杉原四郎兵衛殿新庄内藏殿山本七郎殿鈴木兵九郎殿同三右衛門殿同權兵衛殿同次郎右衛門殿、同九太夫殿、瀧川八郎右衛門殿、左は上田彌右衛門殿火消屋敷有、右に道有、十間程行て東へ行に、左石野五郎兵衛殿同權之助殿原田權右衛門殿蔦三左衛門殿西川清兵衛殿蘐部七右衛門殿、右は伊賀忠兵衛殿西尾嘉兵衛殿山上五郎左衛門殿藤川孫十郎殿竹井八郎兵衛殿、横手に道有、行あたり穴河十右衛門殿、左手へ十間程行て東へ行ば、同やしきの横屋、若林八兵衛殿淺井善左衛門殿鈴木淡路守殿、それより館林宰相樣裏長屋、其外屋敷之地尻を通て相生橋へ出る、是まで十町、先すぢかい橋也、

一、あいおひ橋通南へ行ば戸田采女正殿よこや、右西かど佐野内藏殿、よこてに入江有、左がは天野五郎八殿松永太郎右衛門殿、左永井信濃守殿よこや、此間壹町ちかく、前の南へ行ば、右手に永井信濃守殿やしき有、左横田甚右衛門殿天野彦三郎殿内藤權九郎殿、右西へ道、前の南へ行に、左やしきの地尻、右内藤飛驒守殿、是まで三町、行あたり北條安房守殿、左右に道あり、

一、筋違橋手まへに、連雀町西側中程に西へ道有、此通を西へ行ば、右がは戸田采女殿大澤右近殿、右に町貳十間口程有て南へ道有、須田町の新道なり、前の通又二十間斗行て南へ道有、めつた町へ出る、此道一町町屋也、前の通西へ行ば、左伊勢作十殿、安西彌十郎殿、左町のよこや少有て永井甲斐守殿よこや、此間一町有、南へ道有、前のつゞき久永源兵衛殿よこや、右石丸伊右衛門殿西尾小左衛門殿、よこてに道有、相生橋筋まへの通西へ行に、左北條阿波守殿地尻、近藤織部殿地尻、右内藤飛驒殿よこや、此間一町ばかり行て、左南の方へ道有、前の通西へ行に、左石川三左衛門殿横屋、舟越左門殿よこや、此間一町、右津輕越中守殿、此やしき過て筋違に左右に道有、前の通西へ行ば、左蒔田權之助殿よこや四十間程有り、右松平下總守殿、此やしき三十間程行て左南の方へ行也、左稻葉石見守殿よこや、一町過て左西へ道有、前の通北へ行ば、右内藤千之丞殿阿部助之進殿、左水野半左衛門殿、

よこや、此間半町過て左右に道有、前の通北へ行ば、左町野壹岐守殿よこや、右梶川十兵衛殿小泉次太夫殿富永源太左衛門殿、よこてに道有、同側萬年傳兵衛殿朝比奈藤左衛門殿八木次郎右衛門殿近江角助殿葛見木工頭殿酒井賴母殿神保左京殿戸田權兵衛殿夏目木工右衛門殿水野彥兵衛殿、西てに付て川野權右衛門殿山高孫兵衛殿よこや、左がは內藤主馬殿地尻、土岐大膳殿同縫殿殿、それよりやしきの地尻、但伊藤信濃守殿神保左京殿、西てに付てよこや也、此間二町半、此通をうら鷹師町といふ、前の本通北へ行ば、左山崎四郎左衛門殿由良新六殿淺井勘兵衛殿溝口源右衛門殿佐藤勘右衛門殿瀧川相摸守殿柘植平右衛門殿大久保八郎左衛門殿大河內又兵衛殿地尻、右がは內藤主馬殿遠野喜太郎殿伊東信濃守殿神保左衛門殿、此間三町、よこてに道有、前の通北へ拾間程行て、左西へ道有、前の通北へ行ば、左服部八郎左衛門殿大窪與右衛門殿三宅傳右衛門殿、右山高孫兵衛殿水野小左衛門殿、行あたり土手、左右に道有、但左の方へ壹町行ば水道橋へ出る、右之通本鷹師町といふ、此間十三町なり、

一、右之內津輕越中守殿松平下總守殿やしきの横合の通を北へ壹町程行て、右に小堀和泉守殿、それより十間口程西へ行て、左村上孫八郎殿よこや、市尾伊織殿、右は大久保兵九郎殿、此間一町過て左右に道有、左の道右がは飛驒半兵衛殿よこや、渡部九郎殿山本四郎兵衛殿、左がは市尾伊織殿よこや、水淵縫殿殿天方主馬殿よこや、此間壹町、すぐ道、左右に道有、前の通より右之道、左がは佐野主馬殿津波主馬殿久保金左衛門殿小野宗賀間宮三郎五郎殿、右がは大久保兵九郎殿よこや、堀八郎右衛門殿織田彌十郎殿北條新藏殿芦浦觀音堂、入込小堀三郎兵衛殿、此間壹町半、すぐ道、又左南へ道有、前の通に南へ道有、されどもやしきのよこてゆへ略レ之、

一、白銀町土手より一ツ橋までの道、此かし鎌倉がしといふ、米問屋まき問や有、右南之道三河町通也、前の通につゞいて廿間近く町也、此所過て又右、此通道有、左神田御門なり、前のかし通西へ行ば、半町町屋有、是を過て又右北へ道有、左に神田御門有、右かど加藤伊織殿、つゞいて中山勘解由殿、よこてに道有、前のかし通西へ行ば、右宮崎織部殿坂壽三郎殿久保

五兵衛殿同吉右衛門殿、よこてに道有、まへのかし通西へ行に桑島孫六殿、よこてに道有、前のかし通西へ行ば、右かど三浦志摩守殿土屋兵部殿、左一ッ橋、是まで七町半程なり、

一、右之内土屋兵部殿横やを通て東へ行ば、うら通、左中根平十郎殿内藤勘之丞殿土屋兵部殿地尻、三島志摩守殿地尻、此間一町の餘、すぢかいに左右に道有、前の通東へ行に、左荒尾平八殿堀三左衛門殿、右吉田意庵横屋、後藤八郎左衛門殿大久保喜六殿原田利齋よこや、此間一町、左右に道有、前の通東へ行ば、やしきのよこや兩側一町、行あたり林弘文院、左右に道有、

一、神田御門より一町西に、北の方へ通りたる道有、右中山勘解由殿よこや、左宮崎織部殿よこや、林又助殿よこや、すぢかひに左右に道有、同側渡部七郎右衛門殿岩船檢校久保吉右衛門殿、右側榊原左衛門殿よこや、阿部中三郎殿よこや、此間一町、右北へ道有、まへのつゞき松雲桑島孫六殿、此間一町、すぐ道有、まへの通、左榊原左衛門殿戸川主水殿、よこてに道有、前のつゞき川口源左衛門殿前田權左衛門殿蒔權之助殿、右朝倉織部殿水戸清庵伊藤信濃守殿、幷弘文院渡部孫三郎殿石丸五左衛門殿芹川庄三郎殿舟越左門殿、此間三町、左右に道有、向に津輕越中守殿、右の方へ一町行て南へゆけば、右石河三右衛門殿石河喜左衛門殿中川久太郎殿坂上峰智院阿部四三郎殿山田十太夫殿志保木長庵、よこて道有、まへの通南へゆけば、右彥坂壹岐守殿加藤伊織殿よこや、左近藤織部殿横屋一町、表門通、左須田町近道有、近藤織部殿、東隣北條阿波守殿、三河町への道有、前の通南へゆけば、左西尾藤兵衛殿牧野太兵衛殿山本三郎右衛門殿、よこてに道有、三河町へ出る、まへの通南へ行ば、左中川勘三郎殿渡部筑後守殿小笠原上野介殿よこや、左手に道有、佐竹殿前へ出る、まへの通南へ行に、左木原賴母殿、行あたり神田御門なり、左右に道有、此邊駿河臺といふ、此間四町なり、養安院、神田御門より右に町少し有、きぐすりだななり、橫通有、左養安院地尻なり、鈴木修理殿よこや、左右に道有、前の通北へ行ば、左志賀金五郎殿阿部豐五郎殿渡部筑後守殿小島久左衛門殿人見玄德、左右に道有、前の通北へ行ば、左佐合半右衛門殿酒井雅樂頭殿中やしき、幷に町

有、さいぎ町と云、右側三河町地尻、此間四町、行あたり北條新藏殿、左右に道有、

一、神田御門右三河町、新小田原町共云、一町目兩町屋、左右に道有、右への道、左り松平將監殿佐竹右京太夫殿、右眞田伊賀守殿神兎彌右衛門殿、幷に町有、佐竹右京太夫殿まへ也、佐竹殿まへと云、よこてに道有、鎌倉町堀ばたへ出る、三河町二町目片町、左金棚うら通龍慶町と云、右通町への道らうそく町、兩町色々商人あり、三河町三町目片町、同四町目片町、行あたり北條阿波守殿、左右に道あり、右への道廿間口計行て南へ行ば、雉子町新白銀町、兩町商人いろ〱有、うしろ町にいなりの宮有、同町も片町なり、

一、白銀町一町目土手より北に町あり、新かわや町つづいて新石町大工町新道あり、片町、次にめつた町一町目貳町目、行あたり町、左右に道あり、左横町は土物だな也、右五町之内新道横町有レ之、

江戸すゞめ二巻目終

江戸雀三巻目

常盤橋、すじかい橋、新橋、淺草見付、大橋、三俣、くづれ橋、高橋、湊橋、靈巖橋、思案橋、わざくれ橋、親父橋、あらめ橋、道場橋、江戸橋、日本橋、一石橋までの內屋敷、付町小路の事、幷禰宜町淨瑠瑠、歌舞の初りの事、

一、本誓願寺の內、筋違橋より土手に付東へ四町ゆけば、左手に和泉橋有、それより十間程行ば南へ道有、右大澤兵部殿よこや、黑川與兵衛殿、此間半町、それより西へ付て行ば、左依田內藏殿本多中務殿、右太田相摸守殿本田中務殿松平伊豆守殿土井周防守殿、左瀧川長門守殿地尻、土井信濃守殿地尻なり、よこて道通町通、左なべ町、右新石町へ出る、此間四町半有、

一、右の內、土井周防守殿表門通南へ行に、左土井信濃守殿よこや、右西尾八兵衛殿、幷に町少し有、すじかいに左右に道有、前の通南へ行に、左かご石川八郎左衛門殿加藤織部殿、此屋敷表門通白かべ町、すぐ道、通町へ出る、左鍛冶町一町め二町めなり、前本通

はこんや町へ出る、此間二町あり、
一、右の内、土井信濃守殿表門通東へ行に、となり瀧川長門守殿市橋下總守殿、それより屋敷地尻一町有て、六江伊賀守殿、右石川八郎左衞門殿よこや、扨遠藤備前守殿よこや、南つゞき西北かど、甲斐庄喜衞門殿、前の通東へ行に、右德山又右衞門殿よこや、加藤半内殿井戸三十郎殿山田左兵衞殿、すじかいに左右に道有、前の通東へ行に、内藤右近殿細川豊前守殿植村土佐守殿彦坂壹岐守殿、左細川豊前守殿水野中務殿市橋三四郎殿一宮右京殿、此間六町、左右に道有、左へ新敷橋へ出る、此道南東かど外山藤右衞門殿、右の道南東へふりてゆけば安田若狹守殿諏訪部文九郎殿中山勘兵衞殿横や、右彦坂壹岐守殿よこや、廿間計右西へ道有、前の通南へ行に、右森勘右衞門殿、願行寺よこや、行あたり馬場、左右に道有、此間一町半有、
一、右の内、森勘右衞門殿よこてを西へ行に、となり酒井壹岐守殿勝屋庄兵衞殿横や、右はやしきの地尻なり、一町半有て稻葉七左衞門殿、左手に道有、前の通西へ一丁の餘過て左右に道有、左の方の道に東がわ町少し有、前の通西へ行に、右三浦越中守殿松前兵庫頭殿市橋傳右衞門殿よこや、廿間ばかり行て南へ道有、前の通西へ行に、左大久保彦左衞門殿よこや、渡部孫三郎殿、此間一間過て左右に道有、半町行て西へ行に、右津田平左衞門殿、春日左衞門殿、左町、此間一町行て行あたり有、甲斐庄喜右衞門殿なり、左右に道有、
一、右の内、三浦越中守殿表門通南へ行に、左市橋傳右衞門殿山本養仙町のよこや、右大久保彦左衞門殿建部宗右衞門殿よこや、此間一町、行あたり土手、左右に道有、右への道西へ行に、同がわ建部宗右衞門殿智足院御祈禱所なり、是まで一町、左に道有、すぐ道通町へ出る、智足院よこやを半町行ば、西へ道有、紺屋町通、但西の方より一町め三町めまで有、
一、常盤橋より堀ばたに付、左へ二町半行ば、東へ道有、本白銀町通也、左ごて、右がは町、此間半町、右によこ町有、本阿彌小路といふ、前の通東へゆくに、白銀町一丁めより四丁めまで有、四丁めにつゞきて鹽町、同つゞきひだり籠屋、此間四十間ばかり有、同つづき藥師堂の前の町、その上藥師堂なり、今は淺草に有レ之、此通左がわ土手、右がはに町有、諸商人諸職人

有レ之候、又新道よこ町にも色々うり物有、右の通行あたり彌勒寺雲光院門前通に道あり、又よこてに道有、前の通東へゆくに、左法泉法善寺、願行寺、よこてに道有、此分裏寺町といふ、前の通東へゆくに、左中山勘兵衛殿、伊奈半十郎殿、右追廻しの馬場二町有、それより右手に道有、則淺草見付へ出る、此間十二町の餘なり、

一、右の通より一町南うしろ通、堀ばたより東へ行に、本石町通一町めに、左右に横町有、右よこ町は金吹町といふ、右石町は一丁目より四丁めまで有、又つゞきてつぼう丁、小でんま丁壹丁めより三丁めまで有、馬喰町一丁めより四町めまで有、行あたり淺草見付、是まで以上十二町有、又新道よこ町有、

一、右の通より一町南うしろ通、札の辻より東へ行に、本町通一丁めより四丁め迄有、つゞき大傳馬町一丁め、此辻二町の間に、毎年六月五日より十日の內かり屋をしつらひ、牛頭天皇御輿をうつし、神事を行ふ、つゞき二丁め三丁め、又旅籠町共いふ、此よこ町筋大門通といふ、大傳馬町つゞき油町、同つゞきしほ町、又つゞきて横山町一丁め二丁め三丁めまで有、是まで以上十二町、左右に道有、左へ半町行ば淺草見付へ出る、右兩國橋へ出る、此道一丁まちや、右てつゞきに矢之御米藏有、左小堀、小橋有、御同朋衆やしき一町程有、前の通行あたり大橋、此道半町、前の通新道よこ町にも色々うり物有、以上十二町なり、

一、右の通より一丁南うしろ通東へ行に、本兩がへ町、左右よこ町有、左皮屋町、右青物町、兩替町につゞきて駿河町、又つゞきて瀨戸物町、猶つゞきて次は伊勢町、行あたり堀、左右に道有、左道場橋へ行、右の町以上四町、新道横町有レ之なり、

一、右の通より十間ばかり南うしろ通東へ行に、北さや町、つゞいて品川町、次に小田原町一丁め二丁め行あたりなり、左右に道有、又新道よこ町有、

一、右の內、品川町うしろ通、北がしを東へ行て尼ヶ崎棚、横通は日本橋筋、此所を尼ヶ崎だなといふ事は、攝津國尼ヶ崎より商人來りて、此所にて商せしゆへ、あまが崎店といひならはせり、扨つゞきて小船町一丁め二丁め、行當りあらめ橋、左右の道江戸橋筋、以上三丁新道よこ町有レ之、

一、日本橋より筋違橋迄十二町、南より北へゆくに、

室町一丁め二丁め三丁めへ行手まへに、右東へ道有、うきよせうじといひて町屋有、室町三丁めにつゞきて十間棚通、白銀町、土手をこして乗物町、つゞきかぢ町一丁め二丁め、又つゞきてなべ町、新石町、須田町、連雀町、右がわうしろに肴棚、左北よりに、入込に戸田釆女正殿、行あたりすじかい橋見付、左右に道あり、又新道よこ町有、右町中に諸商人諸職人其數はかりがたし、
一、うきよせうじの通を東へ二町半行て、南へ行道有、小船町一丁め二丁め三丁めまであり、かしばた也、干物がし新道よこ町有レ之、
一、右の通一町東うしろ通、堀江町一丁め二丁め三丁め四丁めまであり、但三丁めと四丁めのあひ、東の方におやぢ橋有、右丁かしばた諸商人有レ之、
一、堀江町一丁めの内へ、六月八日に神田祇園牛頭天皇の御輿を、此所にかり屋をしつらひうつし奉り、祭禮をいとなむ、但十二日までなり、右小船町ほり江町はうしろあわせ也、但小船町西がし、ほり江町は東がし也、
一、おやぢ橋より西へ行に、せきだ町、又てりふり町共いふ、諸職人おほし、行當り商人の土藏、左右に道有、右へ十間計行て西へ行に、左十間程の間の土藏の内にしてあらめをあきなふ、行あたり橋なり、あらめ橋と云、すぐ道大船町行也、
一、小船町三丁めにつゞきて、小網町一町めにしあん橋有、次にわざくれ橋左手に有、此しあん橋いにしへはさかい町、又元よし原傾城町への道也、みな人あれにや是にやゆかんと、しあんするゆへしあん橋といふ、又わざくれ橋といふは、爰にてわざくれの是非を定るゆへ、世話によせていへると聞えし、傾城町はさんや新吉原へひけて今は爰になし、さかい町いにしへにかわらず、見物繁昌する也、扨しあん橋をわたりて小網町二丁め、是より向へ舟渡有、いにしへ此所は東海道のよし、爰をばよろひがわたりといひ、又かぶと石とて、かぶとににたる石ありしよしなれど、今はなし、さだかにしる人もまれなり、小あみ町三丁めゆきあたりくづればしなり、
一、ほり江町より半町東かし通、新材木町一町め二丁めまで有、つゞきて六間町、右にをやぢ橋有、前のつゞきよし町、南よこ通本大坂町といふ、前のかし通南

へゆくに、御藏左手に有、行あたりわざくれ橋、かしに付て行ば安藤對島守殿やしき有、四ヶ所有、

一、大傳馬三丁めより一町、南うしろ通田所町、つゞきて新大坂町、又花町共云、行あたりほり左右に有、濱町まきがしなり、向に松平兵部殿やしき有、

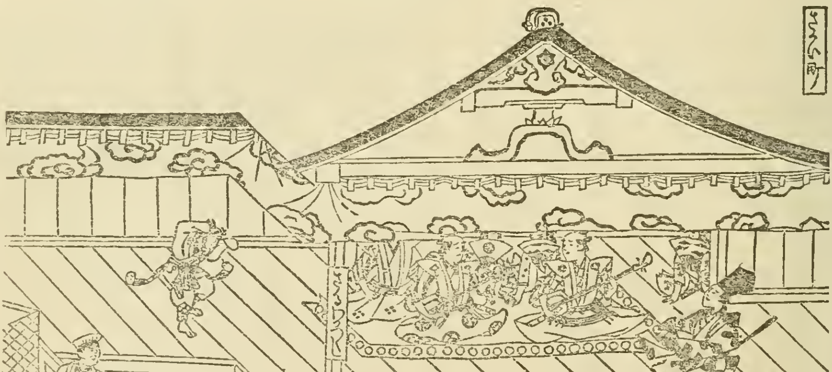
一、新材木町一丁目と二町めの間より東へ道有、新のり物町、右はよこ町有、右よこ町人形町といふ、新乘物町、つゞき長谷川町、富澤町、行あたりほり、左右に道有、ふるぎ市毎朝たつ、つゞき濱町まきがしなり、

一、六間町よりかしに付て北へ半町程行ば、東へ道有、ふきや町、つゞきてさかい町、また禰宜町ともいふ、此所あやつり、島原狂言、其外めづらしき見せ物有、其外商人も有、さかい町につゞきて、新いづみ町、つづきて高砂町、行あたりほり、左右に道有、はま町なり、

一、右の内新いづみ町より一町、南うしろ通、つゞきてなには町、行あたりはし、左右に道あるなり、

禰宜町淨瑠璃付歌舞妓之事

それ淨瑠璃の根元は、いにしへ左馬頭義朝公の八男御曹司牛若丸は、常盤腹には三男なり、父は平治の亂



に討まけて、尾張國野間のうつみ迄落下りて、長田の庄司を賴暫休息し給ふに、忽に心がはりして、湯入にことよせて腹をきらせけり、是によつて源家の一類身の措所をうしなふ、然るに牛若は鞍馬山にかくれ居給ふに、十五歳の春の頃、兄の賴朝伊豆の國にて義兵をあぐるときゝて、其まゝ鞍馬を忍びて出、其名を九郎義經とかへて、奥羽にくだりしに、或日矢矧の宿につき給ふ、爰に長者が娘に淨瑠璃御前といふ有、此娘藥師の申子なれば其名を淨るりといふ、世に限りなき美人にて、殊になさけの心深かりける、然るに牛若はひまをもとめて忍び入て、ひたすらくどいて戀られしに、さすが岩木にあらざれば、いもせのかたらひなしたまふ、此事を面白くことばにつゞりて、ふしを付かたりける、それより此かた、さまざまの事をつくり出しけるを淨るりといひならはせり、爰に御當地御繁昌に付て、淨るり太夫あまた有、大ざつま、伊勢大掾肥前掾兄弟、丹波掾、土佐少掾などゝて有、又説經には石見掾なり、芝居にきらをつくして結構せり、草木形有のつくり物、金襴の色、金物の光、目を驚かす事共なり、

一、歌舞妓の始と申は、その上後鳥羽院の御宇に通憲入道といふ者、磯の禪師といへる女に敎へて舞はせける、是より事起りて、遊女みな此ふうを學びて、笛皷もなくて今樣をうたひてまひかなでけるを、白拍子と名付たり、後には笛皷を入てまはせける、歌をうたひてまひける妓女なればとて、歌舞妓とはいへりとかや、近頃までは遊女共芝居を構て歌舞妓をしけり、皆人是にめで迷ひて、世の妨となりければ、程なく禁制せらる、若衆かぶきといふ事を初めけり、又ぞや少年の子どもに魂を奪はれける、重て其かたちを見にくきやうにして、人の戀をさませんにしかじとて、ひたひ髮をとらせたる、此ゆへにくゝり頭巾をなせり、狂言に出る時には付髮をする也、此江戸にしては中村勘三郎根元なり、今は市村竹之丞と二芝居なり、また木挽町にも二芝居、舞臺の軒端に玉をつらね、芝居の砂に珊瑚を敷くかとうたがはる、しらべ合する糸竹の聲、うらゝかに梅の香をなして、鶯の羽かせにも亂れぬべし、歌うたひかなでるさま、紅葉をかざす世界は、天津をとめの雲の通路に袂をかへせし袖ふる山の昔もよそにはあらじと思はるゝ、狂言

しづみしとやかに、三ばん四ばんの續にして、或は哀れなる事、いかる事、またはしのびわかれの事、男女の戯れいろ〳〵に、ゐんまにあらざるつくり髭、しやうづがはのうばのにせばば、旁とり〴〵のしなをもしめし、名人の役者を揃へたれば理りとも思はるゝ、花のぶたいへすゝむ姿、金銀るりをちりばめて綾羅錦繍を飾りたる風情、太皷のばちの音にきく驪山宮のいにしへ、かくやらんと思ひしられける、日々の見物はつくば山の麓のごとし、聞しはげにさる物にて、山鳥のなが〳〵しく、筧の水のたゆる事なく、さもいさぎよき口上は、柳の糸の亂れなく、窓の呉竹すぐなるわた道のみちたる狂言は、いかなる人丸のあねむこも難ずべき事かたからんや

一、此所に來たりて見物するにも色々有、棧敷にいる有、芝居にいる有、辨當を持たる有、さゝへをこしにつくるも有、然るに棧敷にいる方々は、上より舞臺を見おろせば、又芝居のともがらは、前なるはもゝじりになり、うしろ成はのびあがりて、耳もと迄口をあけ、涎を流しうちゑみて、さも大きなる聲をあげ、何樣たれ樣おでやつた、やう〳〵つかひ申などゝ、どよめき渡る者あり、是は貧福の人にもよらず、たゞひやうきんのよたくれものがいへる物行や、或ひは笛皷しやみせんなどをしらべ合せ、歌をうたひ、舞のなかば又はせりふの最中に、わけなき口をたゝくゆへ、物音もさだかに聞へず、然るに己ればかりが面白きとて、人の嘲りかへり見ず、是なん喧嘩買の馬鹿者ならん、哀れ止させたや〳〵、

あやつりもかぶきもおなじたはふれの
　　うきをわするゝなぐさみのたね

一、はま町松平兵部殿屋敷のかし通六町之間、右兵部殿やしき八十間程有、南横屋、東へ道有、右に多田豐前守殿よこや、伊勢權右衛門殿南條勘右衛門殿、横手に道有、前の通東へ行に、右がはかど由井長右衛門殿酒井甚之丞殿野瀨武右衛門殿、此間二町、左兵部殿よこや、左右に道有、左同朋町、行あたり甲斐庄右衛門殿、前のかし通南へ行に、本田豐前守殿、よこてに道有、前のかし通南へ行に、左材木手代衆、長坂七之助殿堀長門守殿吉野喜之助殿蓑部與藤次殿、よこてに道有、前のかし通南へ行に、左松平備前守殿本田彈正殿内藤志摩守殿古田兵部殿、右に橋有、横手に道有、

右秋本攝津守殿、左稻葉丹後守殿、行あたり酒井日向守殿水戸宰相樣御やしき有、前本通へ出る、井上相摸守殿、爰を三俣といふ、右之通かし也、

一、同朋町色々うり物有也、此同朋町一町南へ行て、それより西へ少し行ば、南へ道有、すぐ道濱町へ出る、南への通、左甲斐庄右衞門殿萩原十助殿よこや、一町過て同かど萩原十助殿金丸喜右衞門殿鈴木庄右衞門殿よこや、向阿部甚五郎殿成瀨三右衞門殿設樂七左衞門殿武藤庄五郎殿、此間一町、左右に道有、行あたり三上市右衞門殿、南つゞき小泉茂右衞門殿設樂勘右衞門殿、それより屋しきの地尻なり、向に屋敷の横屋なり、右の三上市右衞門殿より北つゞき富本武兵衞殿、向に石津九右衞門殿、南つゞき鈴木庄右衞門殿、此分一町有、前の本通へ出て、左酒井作右衞門殿、右河合甚五右衞門殿横屋、太田六右衞門殿よこや、此所を過て右の方へ道有、同がはかど太田六右衞門殿長谷川佐太郎殿竹田五右衞門殿、左がはかど志賀權右衞門殿青木金五郎殿青山五右衞門殿山本忠右衞門殿、此間左右に道有、前の通り南へ行ば、左森川助右衞門殿志賀權右衞門殿よこや、梶治郎兵衞殿よこや、此所を一町過、右に道有、同がは片側なり、梶治郎兵衞殿櫻井藤兵衞殿小西九右衞門殿、此間一町、左がは中程に南への道有、右かど青山善右衞門殿横屋、此間四十間、行當り美濃部與藤次殿地尻、左右に道有、

一、松平兵部少殿向がし濱町といふ、眞木がし也、四丁の餘過て小橋渡りて、右がは板倉伊豫守殿大島德十郎殿朝倉新十郎殿永井信濃守殿同伊賀守殿酒井修理殿阿部對馬守殿よこや、此間四町、行あたり三俣の落合、左に小橋有、井上相摸守殿やしき、右之通川ばた、阿部對馬守殿酒井修理殿、小橋わたりて同雅樂頭殿、うしろに安藤對馬守殿土井周防守殿やしき有、前雅樂頭殿通を參り候へばくづれ橋へ出る、是まで四町、左に小網町なり、右の方くづれ橋を渡りて左り箱崎町、すぐ道三町行ば大渡しへ出る、前の箱崎町のかしを通りて南へ行に、左に久世大和守殿やしき有、此間半町過て東へ行に、左久世大和守殿よこや半町有、右松平伊豆守殿朽木伊豫守殿阿部播磨守殿、行あたり堀田對馬守殿、右皆はまやしき也、此間四町あり、

三俣

一、此所を三俣といふ事は、淺草新堀靈巖島、此三方

より通じて水のながれ分る丶ゆへ、三俣とは申也、まことにその景はかりなし、北には淺草、深川、新田島、東叡山、待乳山、眼のまへにさへぎりて、西の方には當御城下榮々梢繁く、愛宕の山の權現堂霞をわけて見へわたり、辰巳の方には伊豆の大島、ひつじさるにあたりては、三國無双の富士の山、半を雲の打蔽ひ、九夏三伏のあつき日も絕せぬ雪の峯白く、夏あつきをもしら波の、かへらん事も忘る也、東は遙に安房かづさ、南は滄海滿々たり、いつにまさりて望月の、三五の暮の船遊び、ことに勝れてゆ丶しけれ、貴きも賤しきも、袖をつらね裳をそめ、思ひ〳〵に出船の、うきにうきたる有樣を、かの金岡も筆を捨、繪にうつすこともかきがたし、さて又ふねのたはふれは、歌をうたひ舞をまひ、琴さみせんに笛太皷、波もろ共にさゞめかせ、さて船々のふなじるし、ふじおろしにもませつ丶、色〳〵の花火のてい、流泉は雲をわけ、玉火は波にうつろいて、しだり柳に絲ざくら、風に亂る丶有樣は、吉野龍田の花もみぢ、是にはいかでまさるべし、

さあ御座れ月も見つまた船遊び

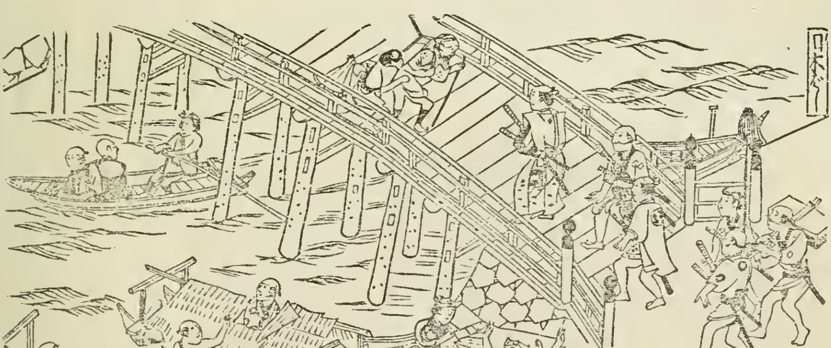
一、くづれ橋より南へ半町ゆけば、右てに湊橋有、此橋をわたりて右に靈巖橋、左にかし通二町、町屋有、大渡しへ行、右の橋筋半町ゆきて、左てに道有、東へ行ば新濱町、つゞきにしほ町、行あたり町屋、左右に道有、前の湊橋筋を、それより壹町行て、左手に道有、かしばた新四日市、壹町め二町め三丁め四丁めまで有、うり物色々有レ之、行あたり川、左手に川ばた一町半町屋有、前の湊橋筋南へ行に、小橋わたりて左手に町有、かしばた也、半町行て南へ道有、長崎町壹町め、東行あたり川、うしろ同二丁め、前の通壹町行て、右てに道有、松平兵部殿やしきへ行、前のかし道東へ行に、白銀町一町め二丁め三丁めまで諸商人諸職人有レ之、行あたり川也、前の湊橋筋のかし南へ壹町ゆけば、左井上宮內少輔殿、此やしき壹町半過て、よこてに道有、かし端壹町過て小橋有、渡りて東は湊町壹町め二丁めまで有、材木がし也、壹町め二丁めの間、南の方に高橋有、前の通行あたり、左松平兵部殿戸田釆女正殿、天野孫右衞門殿やしき有、向に石川大隅殿つきぢやしき見ゆる也、

戸越橋より、北八町堀、稲荷橋、高橋、靈巖橋、將監橋、江戸橋までの內、屋敷町小路之事

一、江戸橋、此所に借船有、土てまへに四日市廣小路、中道通にいろ〳〵うり物有レ之、日々此所へ持出て營みとす、すぐ道本材木町通壹町目より八町めまであり、行あたり左戸越橋なり、右の町に諸商人諸職人有レ之、かし端なり、小橋あり、但壹町目〳〵に一つづヽ橋八つ有、材木町壹町目將監橋を渡り向へ越、牧野佐渡守殿、橋の前右向井將監殿、それよりすぐ道へゆかず、南へかし通間宮造酒之助殿、横手に道有、前のかし通、左九鬼式部殿小濱孫三郎殿小笠原安藝守殿、よこてに道有、前のかし通南へ行ば、左松平越中守殿、前に橋有、越中橋といふ、越中殿やしきを過ぎて横手に道有、前の通南へかし通を行ば、鳥井兵部殿、よこてに町少有、兵部殿前に材木町へ橋有、南へ行あたり八町堀なり、是まで以上八町也、石をあきなふ、北八町堀一丁めより五町め迄有、行あたり高橋、左にいなり橋有、いなりの宮有、四丁めと五丁めとの間に今村傳三郎殿やしき有、

一、北八丁堀壹丁めと二丁目の間より、かやば町まで通道有、北へ行に右前田左兵衛殿日向半右衛門殿よこや、左鳥井兵部殿うら長や、右宮崎若狭守殿組六ヶ

（日本ばし）



所有、左松平越中殿裏長や、右島田出雲守殿組五ヶ所、左小笠原安藝守殿小濱孫三郎殿九鬼式部殿裏長や、間宮造酒之助殿向井將監殿、此衆やしき尻なり、右島田出雲守殿と堀ぎはに山王御たび所有、左牧野佐渡守殿裏門、是まで七町、右てに道有、東へ行にかやば町壹町め二丁めまでかし端也、此所に藥師堂有、行あたりれいがん橋へ出る、

一、北八町堀三丁め四丁めの間より北へ道有、此通壹町の餘、行あたり秋田淡路守殿、それより西へ行に、右溝口左近殿、左加賀井兵部少殿、つゞき松平丹後守殿、是まで壹町、左右に道あり、

一、北八町堀二丁目と三町めの間に通道有、北へ行に左三宅甚右衛門殿、つゞき宮崎若狹殿、但し右松平丹波守殿よこや、溝口左近殿、入込島田五郎兵衛殿神尾市右衛門殿、左り島田出雲守殿組又一ヶ所有、左り山王おたび所、行あたり小橋有、渡ば左右に道有、此間六町なり、

紀伊國橋より、眞福寺橋、南八丁堀、稻荷橋、鐵炮津、幷に築地、鹽留橋までの內、やしき町小路付の事、付西本願寺之事

一、紀伊國橋まへ、紀州中納言樣御屋敷有、是よりしほどめ橋までかしに付、木挽町一丁目同二丁目、うしろに坂倉隱岐守殿小出甚右衛門殿、道二丁の右左りに有レ之、木挽町三丁め南橫通に、左朽木彌五兵衛殿京極主税殿、右松平美作殿うら長や、此間二町、まへのかし通南へ行に、木挽町五丁め、此所にきやうげんづくし、あやつり、其外見せ物色々有、南橫通行あたり松平久之丞殿、南つゞき山岡三郎兵衛殿、左右に道有、木挽町七丁め、行あたりしほどめ橋なり、右町中に諸商人諸職人あり、かしばたなり、

一、きの國橋右木挽町通左かど、紀州中納言樣御藏屋敷、それより橫手に付東へ道有、かしばた一町の餘行て右てに入込有、右がは松平權左衛門殿加々美治郎右衛門殿、左新庄長門殿、それより前のかし通へ出て又東の方へ廿間程行ば、左北へ道有、前のすぐ道半丁程行ば、右伊達宮內殿よこや、行あたり本田兵部少輔殿、右南へ道ありてつぽう津へ出る、前の通ゟ左北へ道有、是を行ば左手に眞福寺橋、爰に借船有、東へ行道かしばたは南八丁堀壹丁め二丁目三丁め、同うら通に牧野八太夫殿松平和泉守殿、五目め左り稻荷の

宮有、同橋有り、此所にかしぶねあり、

一、濱通表筋の分、いなり橋南橋づめより、少し東へ出て本湊町一丁め二丁め、此間によこ道有、前の通南へ行に、小橋をわたりてふなまつ町一丁め二丁め、此間に道有、ならびあかし町、右に小橋有、西本願寺の道なり、

一、右の通うら筋いなり橋通南へ行に、牛町過て行あたり松平和泉守殿、それより東へ十間程行て南へ行ば、左石川八兵衛殿久治本内藏殿、小橋わたりて本田越前殿よこや、右に表門有、前のつゞき井伊兵部少殿松平山城守殿平井卜養横屋、行あたり海、右に橋有、此間七町半有、

一、右の内本田越前守殿表門を四十間ばかり通りて、小橋有、渡りて左小笠原隼人殿、右松平近江守殿、行あたり堀なり、此間二町、左に道有、南へ行に左かど加々美甲斐殿、前に橋有、加々美橋と云、となり淺野采女殿堀ばた也、行あたりに橋有、西本願寺への道なり、此間三町あり、

一、加々美橋筋、橋を渡りて左りに道有、ほりばた也、前の加々美橋筋を西へ行に堀なり、左荒川右近殿松平木工殿岡部主水殿、左に道有、前のかし通西へ行に、左森助十郎殿一柳權之丞殿安藤内藏殿、此間二町、右てに橋有、左り手の道南へ行に、堀ばた左がは安藤内藏殿よこや、水口内記殿、此間壹町、よこてに道有、同がは雨宮對馬守殿渡部半右衛門殿よこや、右がは松平與右衛門殿よこや、丹羽權右衛門殿よこや、右てに道有、前の通り東へ行に、右がは織田主計頭殿、左手に道有、前のつゞき溝口甚五右衛門殿地尻、右手に道有、前の通左がはかど松下加兵衛殿朽木隼人殿松平大藏殿、右戸澤能登守殿うら長や、此間三町、行あたり堀なり、左右に道有、前の堀ばたへ歸りて南へ行ば、左かど松平與右衛門殿 青山藤右衛門殿 戸田相摸守殿、よこてに道有、前のかし通南へ行に、左かど木下内匠頭殿龜井貞右衛門殿、まへに小橋有、前のつゞき堀長吉殿よこや、此間三丁半、行あたり堀なり、右に小橋有、木挽町への道、左西本願寺への道、濱ばたまで道有、

一、右の内堀長吉殿つゞき山口出雲守殿よこや、此間一町、表門通を北へ行に、左山口出雲守殿青山藤藏殿田中作右衛門殿佐野喜兵衛殿、右山田清太夫殿よこ

や、花房宇右衛門殿内田傳右衛門殿内藤八之丞殿伊藤出雲守殿、左右に道有、前の通北へ行に、左佐野吉之丞殿溝口孫右衛門殿、青山藤右衛門殿、右土岐左門殿よこや、播與右門殿よこや、續き富永源太夫殿飯高傳八殿、左藤懸六郎右衛門殿駒井三郎殿溝口甚五右衛門殿、此間一町、左右に道有、前の通左戸澤能登守殿、右本願寺寺内、行あたり大隅橋へ出る也、此間又一町の通、青山藤右衛門殿、北つゞき丹羽權兵衛殿、右藤掛六郎右衛門殿よこや、行あたり多宮對馬守殿、左右道有、此間三町半有、

一、加々美橋西づめより南への道三町、かし通行ば、大隅橋にて行あたり也、加々美橋よりかし通を南へ半町行ば、右てに西へ行道有、此道をさして行に、左後藤民部殿よこや、久保五兵衛殿、伊勢八右衛門殿よこや、右惣やしきの地尻、此間三町、左右に道有、行あたり堀助右衛門殿、南つゞき渡部平右衛門殿、前のかし通一町ゆけば、右手に道有、西をさして行に、左戸澤能登守殿、此やしき一町、右がは松平大内藏殿朽木隼人正殿松下加兵衛殿、是より南へ行道有、左戸澤能登守殿よこや、右溝口甚五右衛門殿よこや、此間壹町すぎて左右に道有、前の通南へ行に、右飯高傳八郎殿よこや、小笠原七右衛門殿よこや、左西本願寺、此間壹町ゆきて右てに道有、前の通南へ行に中山平右衛門殿伊藤主殿殿戸川主膳殿仝内藏殿横や、左本願寺まへ、此間貳町半、行あたり左右に道有、

鐵砲津西本願寺

一、此寺はいにしへ淺草御門のうちに有しを、酉の年の廻祿以來は此地にうつされ、海をつき出して地形とせり、其頃は人家も立離れていとさびしかりけるが、御當家御繁榮いやまし、かゝる築島のはてまでも軒に軒をかさね、今は江府滿中になりぬ、堂は東向に建られたり、前には海づらまん〳〵見おくり、つくばの山に安房かづさ、伊豆の大島一目に見やり、右手にふじの山をかゝへ、さながら庭にうつしをき、一詠句吟たねとせり、誠に行かふつり小ぶね、ながめにあかぬ有様なり、また發句に

時をかへずさくや本願寺の花

一、大隅橋西より東へわたりて、行あたり渡部大隅守殿よこや、南へ堀に付て道有、左水野民部殿、此町一町過て小田原町一町め二町め、行あたり堀、右にはし

衞門殿、よこてに道有、前の通西へ行に、川勝主水殿
妻木源治郎殿有馬三五郎殿大島左兵衞殿、よこてに
道有、是まで二町の餘あり、

有、左にも道有、
一、大隅守殿表門通、湯島本鄉町つゞき町二町有、小
田原町新道なり、行あたり堀、左右に道あり、
一、大隅守殿表門を一町東へ行て南へ道有、上柳町、
つゞきて淸水谷町、水上町、行あたり堀なり、左右に
道あり、
一、大隅守殿東よこやを一町通て又東へ半町行て、南
へ行にはま筋、江戸町、飯田町、川口町、橋をわたりて
左松平安藝守殿稻葉美濃守殿濱屋敷なり、此間一町、
行あたりなり、
一、西本願寺南横通かしに付て西へ一町ゆけば、左に
橋有、わたりて南へゆくに堀ばた也、左仙石長五郎殿
櫻井宗玄、よこてに道有、前の通南へ行に、左龜井能
登守殿土岐伊豫守殿、少しまはりて山名隼人正殿、よ
こてに道有、前のかし通南へ行に、左尾張中納言樣御
やしき、一町半過て右て橋有、しほどめ橋へ出る、前の
通行あたりにも橋有、此橋わたりて甲斐宰相樣御や
しき、行どまり也、是まで四町ほど有、
一、右の內仙石長五郎殿よこや、堀ばたを一町ゆけば
南へ道有、右がは本田源右衞門殿森兵吉殿米倉半左

江戸雀三巻目終

江戶雀四卷目

江戶橋、日本橋、一石橋、吳服橋、鍛冶橋、すきや橋、山下御門、御成橋、新橋、紀伊國橋、眞福寺橋、戶越橋までの內、町小路の事

一、一石橋は日本橋より二町西に有、此一石橋といふは、北に金後藤やしきあり、南に吳服後藤家有、去によつて兩方合せて一石なりとて、江戶わらはべのいひなせるせわなりしを、今に此橋を一石橋といふなり、

一、一石橋南橋づめより東へ行に、西川ぎし町一丁目二丁め、左右の道通町、左日本橋、前のつゞき萬町、左右の通中通といふ、前のつゞき靑物町、行あたり左右の通材木町、左江戶橋へゆく、是まで四丁あり、

一、右之町より、一町南うしろ通吳服橋、東西に橋をかけたり、西は見付、東へ行に吳服町一丁め同二丁め平松町、つゞきて左內町、行あたり材木町通、

一、右之町より半町、南うしろ通かしより東へ行に、大工町一丁め二丁め、つゞきて向あぶら町、川瀨石町行あたり材木町通、

一、右之町より半町南うしろ通、大工町廣小路三町、殘る一町は入込なり、左右に町有レ之なり、

一、右廣小路より半町南うしろ通かしより東へ行に、ひもの町一丁め二丁め、つゞきて下まき町一丁め同二丁め、行あたり材木町通、新道よこ町、右の町かしより東へ行に、南まき町一丁め二丁、つゞきて鋸町一丁め二丁め、行あたり小橋有、材木町へ出る、

一、右の町より一町半南うしろ通かしより東へ行に、一丁め桶町、二丁めさや町一丁め二丁め、行あたり材木町通へ出る、

一、右之町より半町南うしろ通、かしより東へ行に、長崎町廣小路二町有、殘る一町入込、是までなり、

一、右之町より半町南うしろ通、かしより南、かぢ町一丁め二丁め、すゞき町、いなば町、行あたり小橋有、材木町通へ出る、但よこ町新道有、

一、右之町より一町南うしろ通、かしよりから橋東西に有、西は見付、東の町少し南へふりたり、五郎兵衛町、疊町、つゞきて具足町、すみ町、行あたり材木町通へ出る、

一、右之町より半町南うしろ通、かしより東へ行に、新道二丁有て、左右の道通町筋、右京橋、前のつゞき竹屋町一丁め二丁め、かしばた也、右小橋有、行あたり眞福寺橋、すぐ道八丁堀通、材木町筋へ出るなり、石をあきなふ、

一、右之町より半町南うしろ通、北紺屋町一丁め二丁め、此二町かし也、右てに小橋二ッ有、京橋へまがりて出る道なり、

一、北紺屋町一丁めの西がしの小橋をわたりて南へ行に、かしばた筋南紺屋町一丁めより四丁めまで有、右にすきや橋南北にかけたり、西見付、是より少し西へふりてゆくに、かしばた筋日影町、右に山下御門、橋あり東西にかけたり、西見付、東に町二町あり、山下町、鍋町是なり、前のかし通を南へ行に、山下町横丁、つゞき山城町、左兵衛町、丸や町、行あたり幸町廣小路、左右に道有、

一、右之内すきや橋之通を南へ行に、すきや町横町、左なべ町、右山下町、前の通り南へ行に、さがみ町かが町八くわん町寄合町、左新橋への道、右かぎのてに御成橋へ出るなり、

一、南紺屋町二丁め東うしろを南へ行に、弓町新肴町彌左衛門町新右衛門町竹屋町惣十郎町山王町、つゞきて大坂町、行あたり橋有、左新橋、右御成橋への道有、

一、日本橋より新橋まで通町つゞき、南一丁めより四丁めまで、南傳馬町一丁め二丁め、南かぢ町一丁め二丁め、右町過て京橋、此所に借船有、此橋を渡りて銀座町、又新兩替町共云、一丁めより四丁め有、尾張町一丁め二丁め、竹川町出雲町、行あたり新橋、此所にもかし舟有、是より品川道つゞき候ゆへ、新橋より南はしば筋に入、先にしるすなり、

一、京橋を渡りて左に道、かし通金六町一丁め二丁め、行あたり眞福寺橋、左右の通本材木町なり、

一、右之町より半町うしろ通かしばた、水谷町一丁め二丁め、行あたりて左眞福寺橋なり、

一、通銀座町東うしろ三拾間ぼり、此通を南へ行に、一丁めより八丁めまで有、材木町がし也、一丁めにきのくに橋有、四丁め五丁めに橋有、木挽町と向ひ合也、右之分町人の家居なり、新道よこ町にも諸商人諸職人有レ之、しるすに及ず、

溜池を限て、虎之御門外、櫻田御成橋、しほどめ橋並に愛宕之下増上寺邊、金杉橋、新堀を限りて、西之窪、長坂、日ケ窪、かうがい橋、澁谷、青山宿近邊、赤坂、築地之邊、増上寺之事、神明之事、愛宕山之事、金王櫻の事

一、新橋を南へ渡りて左手に道有、左しほどめ橋、同かしばた鹽留町、此町を出て南へ道有、通町新道なり、左がは脇坂中務殿松平陸奥守殿保科筑前殿よこや、又入込有、神尾若狹守殿森内紀殿、左右に道有、右増上寺表門通、左濱ばた、かし船有、前の通南へ行に、左加藤内藏殿、よこてに道有、前の通南へ行に、松平大隅守殿秋月佐渡守殿、左右に道有、右之通通町へ出る、左の道松平讃岐守殿表門へ出る、但此道一丁半、前の通へ出て左右に堀有、行あたり金杉橋新堀筋なり、此間十二町半なり、

一、新橋筋通町を南へ行に、日比谷一丁めより三丁め迄、西新道に稻荷小宮有、源助町露月町芝居町宇田川町、此町は殊の外長き町也、小橋は宇田河橋と云、此橋を渡りて南へゆくに神明町、右ての道神明へ行、前の通南へ行に、久右衛門町一丁め、右手増上寺表門みゆる、久右衛門町二丁め同三丁め、行あたり金杉橋、右に道有十一町が間に新道横町、諸商人諸職人有之、

芝三縁山増上寺

一、三縁山増上寺の開山は、上總國之住人千葉之助の末孫千代松といひし少人也、幼稚の時より出家をとげ、後は其名を聖聰と申ける、然るに眞言の宗流を汲て、秘密金剛の妙用を仰ぎ、遍照舍那の實際を求め給



（増上寺）

ひて、のちには江府の貝塚の臺光明寺に住せらる、今此地は松平伊豫守殿、其比ほひ人王百一代後小松院の御宇に當れり、其時至徳二年乙巳の夏、光明寺にして論義有、讃題は善導大師の四帖の疏に、長時起行果極菩提といふ釋文なり、然るに此聖聰一山の能化として、諸化の翟問者答者互に法問の扉を開き、疑難の石を砕かんとす、爰に源空上人より七世、酉蓮社了譽聖冏上人は、托鉢の體にて彼講席法文の場に立て、つく／″＼是を聞きたまひて莞爾と笑て歸り給ふ、聖聰此由を見て、みづから座を立て跡を追ふて尋給ふ、やう／＼淺草の邊にて追付、終に其笑をふみくて退く事を問ひ給ふに、了譽其故を答給ふ、それより耳に口に劍戟をふくみ、身に妙道の鎧をきて、釋福文の利に勝んと屢々問答し給ふに、淨土の奥儀に舌をまき、聖聰深く此法を念じて、今迄の惡念名利の鋒鋭を折て、忽我法をすてゝ、了譽上人の弟子となり、則我寺を改て三縁山増上寺と號して、今に大蓮社酉譽聖聰上人と拜し奉る、第二代をば明蓮社冏仰上人なり、第三世は定蓮社聖觀音譽上人と號す、此和尚は心に大願を發し給ひて、億々の衆生を度せんとは志たまへども、末世の故にて、皆人邪見放逸にして、十惡の縄にからめられ、三毒の海に沈めり、いかにもして誠の心ざしを起さしめんと、みづから誓願をおこして、臨終の時節にいたりて火車のむかひに得給ふ、其時の辭世詠歌是あるよし、或人の曰、此上人前の年に火車のむかひを得給ひけるに、我今すこし衆生を引導して、弟子同宿にも一句の舟(しめし)をなさん、來年の今月今日にむかひにと仰ければ、火車は行方しらずうせにける、震動雷電もそのまゝやみにける、又ぞや月も日も違はざるに、權者の上とはいひながら、ふしぎ成ける事共也、誠佛在世の提婆、我朝の守屋も皆是衆生の見せしめ也、今の音譽もさのごとく、方便のためなるべし、又道號戒名をひとつに合すれば、聖觀音と見へたり、有難し／＼、なんぞ疑を起さんや、其後時代爰に推移りて、第十二代の和尚を貞蓮社源譽上人と號す、是より東照權現台徳院殿、將軍家二代の戒師たり、慶長十五年庚戌に當て、普光觀智國師の號を賜りぬ、今に至ていやましに繁昌して、一天四海にかくれなく、諸國より寄集まる所化多ければ、寮を作りて立つたへ、本堂の右に御魂屋有、その美麗なる事金銀を以てのべ

付たり、七寶莊嚴もかくやあらんと思はるゝ、山の上に五重の塔有、銅瓦造なり、娑婆則寂光の淨土とはかかる事をや申べし、又當寺の院號を廣度院とも申すとかや、

ゑどなれど淨土に増上寺

増上寺表門通に町有、又南の方ついち道に町二町有、新堀へ出る、行あたり橋なり、すぐ道西應寺前へ出る、増上寺表門通を半町ほど過て、左右に道有、是は神明の鳥居より新堀まで道有、二町の餘なり、左右に付て北へ行に、半町程兩がは町、神明へ出る、左齋藤修理、右かど金剛院なり、

芝日比谷神明之事

一、當社神明は、人王六十六代一條院御宇寛弘二年乙巳九月十六日に、御神幣幷に大牙一枚此所にふりくだり給ふ、邑中の者共驚きて、是いかさまにも神明の此地に跡を垂れ給はんしるし成べしと、みな〳〵あやしみをなす所に、いづくともなく年七つばかりの女子、其所に歩み來たれり、忽ち眼色かはり狂ひ出て口ばしりけるは、我は是、神風や伊勢の內外の兩宮の神也、是より東にあたつて軍の事有ゆへに、常陸國鹿島の地に降臨し、その惡軍を退治して、今歸座の道に赴く、然るに我此所に跡をとゞめんため、二種のしるしを顯はして先汝等に示す、早く宮所を造るべし、丹誠を拓て信心に崇敬するならば、末の世までも此所榮ふべし、我又守の神となりて惡事災難を他方にしりぞけん、五穀はゆたかに納らん、相摸國の內に藤原氏の者齋藤氏の者あらん、是を招き寄て神職の長とあがめ、宮仕へせさせよとて、神はあがらせ給へば彼兒女もうせにけり、村中の者は不思議の思ひをなし、先告げにまかせんとて小宮をしつらひ、御神幣と大牙を納め奉る、又齋藤氏の人を尋しに、相州足柄より下しよせて、彼旨をいひふくめ、家を造りて神職をつかさどらしめたり、靈驗實にあらたにして、祈り奉るにかなはずといふ事なし、かくて數百年を過て後、後鳥羽院の御宇建久四年癸の巳の年、右大將賴朝公下總國奈須野へ發向の時、當地の宇田川に至て、賴朝公の帶給へる御太刀みづからぬけて水底に沈みけり、水練の上手に仰せてもとめ給ふ、其うしろの方に瀨ありて水底に光る物有、是定て尋させ給ふ御劔ならんと申す者有、則かの男を案內者にして神明に御

參宮あり、頓てうしろの瀬にして太刀をもとめ得給ふ、直に御寶殿に納め給ふ、宮ゐは神さびて何となくたうとくおぼしめして、御尊敬淺からず、一千三百餘貫の田をもつて御寄附あり、それより社頭賑ひつゝ、次の年ゟ神主社僧禰宜等まで軒をば並べ家を建て、神前の祈念怠る事なく、香花灯明たゆる事なし、其後星霜推移りて、人王一百二代後土御門院の御宇明應三年の頃、伊勢の新九郎氏重といふ人有、小田原の城主大森實賴を退治して城を乘取り、是を初てあまねく關東を打從ふ、後には髮をそりて早雲と號す、此時にあたつて當社の御領を削り取つて我知行となしける、是に依て社人ども飢に望み、宮居悉く大破に及で、霧に朽風に倒れて修理する便を失ふ、夫より數十年が間諸國亂世しければ、おのづから參詣する人なし、然る所に、正親町院の御宇天正年中に、東照權現關東御在城の頃より、絶たるをつぎ廢れたるを興し、神社領額いにしへのごとく、此宮も同じく、昔には似ずといへども形のごとく再興を營み、宮領御寄附有ける、此故にや社人等安堵の眉を開き、漸く神前賑ひて、灯明の光を和光の月になぞらへ、利物の花房匂ひ



（ひゞや神明）

を施し給ふ、寛永十一年甲戌、大將軍家光公御信敬を以て、當宮は古へに變らず奇麗に修造有けり、又毎年九月十六日に御祭禮と號して、臨時の神樂を行ふ、十四日より十六日まで此所に市を立て、いろ／＼の物を商ふ也、

神風の今にたえせぬ宮ゐとて
　かげすゞしくもおがむ諸人

一、此神明の宮を出て東へ半町行ば、左右に道有、通

町の新道なり、左の方へ付て半町ゆけば、左南かごに藥師堂有、此通をすぐにゆけば日比谷横町へ出る、但し右手は町、左は屋敷の地尻なり、此ゆへに記さず、右藥師堂に横道有、行あたりて右に付北へ行に、三島町有、片町也、行あたり又町有、それより西をさして行ば、右て東かご松平帶刀殿横屋、一町程行て横てに道有、前の通西へ行に、西かご藤堂庄右衞門殿平野丹波守殿、此間一町、横手に道有、前の通西へ行に、左がは增上寺うら門有、右西角長谷川五左衞門殿横屋、川勝孫介殿靑木甲斐守殿よこや、此間一丁半、右てに道有、愛宕への道也、前の通左增上寺ついぢなり、南へよこたはりて行に、右に少し町有、片町なり、右てに道有、前の通南へ一町行て西へ行、左片町、右伊奈長右衞門殿、此間壹町、右てに道有、前の通西へ行に、左金地院、右加藤內藏殿、金地院につゞきて片町有、此間一町、それより南へ付て行、右牧野飛驒守殿、此間壹町、それより横屋に付て西へ行、左牛込太左衞門殿、此間壹町行て左右に道有、左金杉新堀、かはらけ町三田臺町へ出る、右西の久保への道、西へ行に、左信長寺よこや、右戶田九兵衞殿よこや、此間半町の餘、左右に道有、前の通西へ行に、右稻葉能登守殿、此間壹町、横手に道有、右高龍寺門前に町少し有、德元寺つゞきに町少し有、高德寺又門前に町有、左松平伊豫守殿、是まで二町、それより少まがりて南へ行に、左京極備中殿よこや、右甲府宰相樣よこや、此間壹町半、行あたり新堀、左右に道有、前の通西へ行に上杉喜平次殿、片町有て甲府宰相樣、又片町有、此間二町半ほど行て、右てに道有、前の通西へ行に、左太田原山城守殿よこや、右鍋島信濃守殿よこや、此間壹町行て、左てに太田原山城守殿、片町少し有て、大長寺門前に町有、金森帶刀殿、又片町有、入込に甲府宰相樣、それより西へふりて行に兩がは町、右がはかご有馬和泉守殿横屋、大久保出羽殿、よこてに道有、前の通西へ行に、あき地半町有戶田孫十郞殿、それより西へふりて行ば兩がは町一町、行あたり新堀、左右に道有、爰を長坂といふ、此間四町半、前の通へ歸りて西へ行ば、右鍋島信濃守殿よこや、左有馬和泉守殿、此間四町程行て右に道有、前の通西へ行に、左有馬左衞門殿、三十間の餘行て左手に道有、南へ行に右大久保出羽守殿戶川土佐守殿、左東へ道有、此間一町餘、前

の通へ出て西へ行に、右長谷川半介殿、片町有、左大久保出羽殿横屋、此間四十間計行て左手に道有、又十間計行て右手に道、宗願寺へ行、前の通西へ行に、左がは元泉寺地尻、少し町有て、勝泉寺門前に町有、光泉寺同じく町有、神高寺門前に町有、板倉伊豫守殿組やしき有、右内藤左京殿、此間二丁半、此邊六本木といふ、左右に道有、前の通西へ行に、左梅龍院、西へ付て道有、右少し町有て、法安寺門前に町有、長德寺長勝寺、同じく町有、長泉寺門前に町有、左町屋、中程に道有、此間二町、行あたり鍋島攝津守殿、左右に道有、前の通かへりて北へふりて行に、右松平大膳太夫殿、左寺町屋の地尻、又少し横屋有、此間一町半、同南へ道有、左町屋のよこて、右鍋島攝津守殿、此間一町の餘行て、行あたり伊達遠江守殿、それより南へ行に、左京極賴母殿、右阿部美作守殿、此間一町半、夫より東へ行て、左京極賴母殿、右松平縫殿殿よこや、此間一町過て左右に道有、右の方南へ行に、左松本伊賀守殿、町の地尻、右松平縫殿殿大久保助左衞門殿、入込阿部美作殿、此間一町、左に道有、又すぐ道も有、前の通北へふりて行に、左鍋島攝津守殿、敎雲寺并觀音有、右に谷出羽守殿、此間二町、右てに道有、前の通北へふりて行に、左井上相摸守殿靑山大膳太夫殿、右松平安藝守殿よこや、靑山丹後守殿よこや、此間五丁半、左右に道有、此邊靑山宿といふなり、

一、虎の門向に伏見町、兼房町又おなり町、左に御成橋有、是を幸橋といふ、見付の名は日比谷御門といふ、夫より東へ行道に、右廣小路左に有、前の通壹町程行て、ふきで町、左新橋、右日比谷一町目、横町有、

一、右の町より半町、南うしろ通、久保町うしろより右がは京極備中守殿横や、表門通はあたごへゆく、前の通東へ行に稻葉右京殿横屋、同庄右衞門殿分部若狹殿よこや、同向松平求女殿横屋、大村因幡殿秋月佐渡守殿よこや、同向有馬周防殿横や、井上玄鐵山内次郎太夫殿よこや、同向中川佐渡守よこや、左日比谷横町、此所に喜多七太夫家有、行あたり通町へ出る、是まで七町半程有、

一、ふきで町横通南へ行に、左中川佐渡守殿、右山内次郎太夫殿、岡部丹波守殿、此間壹町ゆけば左手に道有、前のつゞき木下長右衞門殿よこや、右てに道有、前の通南へ行に、左岡部志摩守殿片桐新之丞殿、右高

木伊勢守殿、此間半町行ば左手に道有、前の通西へ行に、右片桐主膳正殿、是より西へ付て道有、左本田源七殿見勝孫四郎殿仙石因幡守殿よこや、右高木伊勢守殿よこや、野瀬八左衛門殿同日向守殿よこや、行ぁたり永井式部少殿、左右に道有、此間二町有、

一、兼房町うしろに南へ付て小路有、左有馬周防守殿野尻了意盛法院、右秋月佐渡守殿松平久米之助殿、左右に道有、前の通南へ行に、左野瀬近江守殿日向守殿、右内田玄勝佐久間五右衛門殿永井式部少殿、筋違に左右に道有、前の通南へ行に、左仙石因幡守殿、南横てに佐々木源右衛門殿桑山主水殿、此間二町、前の通南へ行に、右田村右京、よこてに道有、前の通、左堀飛驒守殿、南横手に桑山修理亮殿、前の通南へ行に、右内藤三左衛門殿神尾五太夫殿、左松平陸奥守殿、此間半町行ば、右てに道有、前の通南へ行に、左溝口土佐守殿桑山丹後守殿 藤堂主馬殿同庄兵衛殿よこや、左手に道有、松平帶刀殿、行あたりは増上寺ついぢ、左右に道有、此間七町有、

一、増上寺裏門筋、南より北へ行に、左長谷川五左衛門殿藤掛采女殿本田美作守殿、是まで壹町半、右平野丹波守殿よこや、それよりかごまで屋敷の地尻也、右之内美作守殿横手筋西へ行、左野瀬庄左衛門殿松平丹後守殿同但馬守殿、右松平淡路守殿地尻、片桐主膳殿、此間二町、行あたりあたご、左右に道有、右愛宕の左に藥師堂有、左同がは松平但馬守殿青木仁右衛門殿同甲斐守殿、右清性寺、行あたり増上寺ついぢ、左右に道有、此間二町有、

愛宕山　此所の石だん六十八有

一、そも〳〵山城國愛宕山朝日の峯勝軍地藏と申は、百濟國日羅の塞なり、敏達天皇十二年に、帝日羅は賢にして勇有事を聞召及ばれ、彼國に勅使を下して日羅をめしけるに、百濟王惜みて渡されず、重て勅使をたてられければ、是非なく其時來朝せり、帝政を問はしめ給ふに、甲を被て馬にのり、廳前に進んでひざまづいて、天下を治る所以を顯はせり、又聖徳太子諸の童子に交りて共に日羅の舘にまみえ給ふに、あまたの中より太子をさして、是神人なりとて三拜す、其後日羅の御弟子にならせらる〻事有、文德天皇の御宇大寶年中に、役の行者と雲遍上人と同行にて、清瀧に至れるに、雲起り雷なり雨ふる事車軸の如し、もろも


(あたご山)

ろの天狗大杉の上に現ず、時に二人秘呪密言を以て祈らるゝに、天晴れかゞやきて、まのあたりに地藏、龍樹、富婁那、毘沙門、愛染、光りをはなち給へば、天狗はいづくともなくうせぬ、二人やがて山に入、神廟を峯に立て、彼大杉を清瀧の明神とあがめ給ふ、開山第一祖は雲遍上人、(雲遍を改て泰證といふ)その後光仁帝の御時、河内國の住人藤井氏慶俊、(天應元年に僧都になる)勅使を蒙り中興せしむ、和氣清丸建立なり、又桓武天皇の御時、宕の字を改て護の字になさせらるゝ、太郎房と聞えしは、文德天皇の御時、洛陽の人正六位上紀朝臣御國の子なり、名を眞濟と云、(柿本紀僧正也)弘法大師に密敎をうけ、承和の初めに入唐有て、程もなく歸朝してのち、高雄の峰にわけ入て、十二年が間出られざりけるに、いつの頃なるぞや眞濟染殿の后を見て心迷ひ、思ひの火を胸にたき、終に貞觀二年二月に死せり、年六十一、その執心靑き鬼となりて后を驚かし給ふ事有、終には其靈魂大天狗となり給ひぬ、誠に此山は軍をまもり火難をのがし給へば、誰れか渇仰の敬拜なさゞらんや、此故に東都江府の地に勸請有、いよ〱其德高くして、參詣の人日々にたえず、まことに殊勝の靈地なり、

勝軍地藏にこそ寄てかくなん

風と共に花をちらすや勝軍

一、兼房町うしろ通、堀飛驒守殿表門通、西へ付てゆく道、左内藤三左衛門殿よこや、右田村右京殿よこや、谷内藏殿堀三六殿長谷川又七郎殿上田彌右衛門殿跡部宮内殿、左松平淡路守殿名子藏主殿片桐又七郎殿、此間三町、左右に道有、左愛宕の道、前の通より

少し北へ行てすぐ道有、左大久保市左衛門殿岡部隱岐守殿天德寺表門、多羅尾權右衛門殿よこや、右片桐三郎左衛門殿戸田權九郎殿山岡傳五郎殿山形市左衛門殿小出斗右衛門殿德永賴母殿、行あたり牧野半右衛門殿、左右に道有、此間二町有、

一、右北うしろ通、兼房町うしろ筋、仙石因幡殿表門筋西へ付ての道、左田村右京殿よこや、丹羽內記殿、三雲平左衛門殿赤井五平次殿秋山六左衛門殿張部金右衛門殿野瀨市十郎殿渡部大隅守殿、右永井式部殿よこや、花房勘右衛門殿岡本玄陳大江次郎左衛門殿多賀三郎左衛門殿戸田市郎右衛門殿田村右京殿牧野大膳亮殿、此間二町半、左右に道有、少し北へ行ば、西へすぐ道有、左朝倉藤九郎殿大同寺孫十郎殿、並堀勘右衛門殿富永彥四郎殿同源右衛門殿、右細川丹後守殿加藤源左衛門殿、遠山與三右衛門殿、並下曾根三十郎殿、此間六町、左右に道有、南へ少し行て西へ付て道有、左竹中左京殿戸川玄蕃殿よこや、右多賀吉左衛門殿土方宇右衛門殿奧村八郎右衛門殿よこや、行あたりは水野民部殿、左右に道有、此間壹町の餘あり、

一、右北うしろ通、ふきで町よこ町筋、岡部志摩守殿表門筋、左高木伊勢守殿よこや、大島雲八殿能瀨近江守殿よこや、右木下長右衛門殿池田釆女殿盛法院よこや、此間二町、左右に道有、前の通西へ行に、左內田玄勝よこや、一柳山城守殿上村右衛門殿毛利主膳殿妻木傳藏殿土方備中守殿横や、右松平久米之助殿よこや、水野左近殿佐久間備中守殿、横てに道有、前のつゞき山崎勘解由殿荒木十左衛門殿一柳對島守殿島津飛驒守殿、此間三町半程、左右に道有、前の通西へ行に、左細川丹後守殿地尻、木下左近殿柚木彌五左衛門殿近藤九左衛門殿、右は木下右衛門殿相良遠江守殿谷出羽守殿谷藏主殿よこや、左內藤權之助殿よこや也、野瀨惣十郎殿同市十郎殿よこや、此間三町、左右に道有、行あたり中西圖書殿よこやなり、

一、右の內谷出羽守殿表門通筋、西久保へ出る、此通南へ行に、左近藤九左衛門殿横や、下曾根三十郎殿横や、右內藤權之助殿下曾根長次郎殿多賀吉左衛門殿よこや、筋違に左右に道有、前の通南へ行に、左富永源右衛門殿よこや、德永賴母殿よこや、右竹中左京殿よこや、牧野半右衛門殿朽木監物殿石尾七兵衛殿、右に道有、前の通左多羅尾權左衛門殿つゞき片町有、天

徳寺うら門、同町圓照寺左手に道有、同がは片町、清龍寺、右遠山半左衛門殿同半右衛門殿野瀨山城守殿齊圓寺加藤内藏殿よこや、左伊奈三右衛門殿よこや、行あたり金地院、左右に道有、此間三町、前の通へ歸りて、手前より右金松彌五左衛門殿、よこてに道有、右側北條左近殿、左大井新右衛門殿松平甚三郎殿佐久間備中守殿吉田長庵北條左京殿、行あたり大久保甚右衛門殿よこや、左右に道有、此間四町、前の通へ歸りて南へ行に右片町、仙石主税殿大要寺、町少し有、時の鐘つく所有、西久保八幡有、鳥居を過て石段有、四十九段也、八幡前より續きて町、片町なり、西手に長遠寺、横てに本田忠右衛門殿設樂市左衛門殿、向に井上太左衛門殿組有、前の通へ歸りて、左手北より光明寺、次泉光寺、門前に町有、加藤内藏殿、少し町有て、明教寺本田平右衛門殿岡部隱岐守殿畠山民部殿、少し西へ付て、それより南東ふりて道有、右かど戸田九左衛門殿よこや、片町少し有、四ッ辻へ出る、左右に道有、南へ付てゆく道かはらけ町なり、兩側町也、右てに道有、南がは須磨露水、岡本玄陳、曾高白庵、右信長寺よこや、左入込天徳寺隱居、花房助之丞殿、此間一町有、前の通へ出て南へ行に、右須磨露水よこや、熊野權現堂有、つゞき竹中監物殿、町少し有、池田忠右衛門殿、又町少し有、大連寺、入込に松平伊豫守殿、前の通へ出て同がは町有、但兩側也、青木甲斐守殿を限、左瑠璃光寺石川七左衛門殿、つゞき兩側町、入込に熊瀨攝津守殿同市十郎殿、前の通出て南へ行に片町有て、入込に永井彥左衛門殿、前の通へ出て南へ半町行に、行あたり新堀橋有、三田臺町へ出る、右てに道有、是まで十四丁の餘、右の道金杉新堀に付て西へ行に、右青木甲斐守殿よこや、京極信濃守殿同備中守殿、是まで四町、右てに道有、前通右側甲府宰相樣、此御やしき三町過て、右てに道有、長坂へ行、前の通すぐ道、右側稻荷の宮有、つゞきに片町、入込に鳥居兵部殿、前の通へ出て西北へふりて行に、右片町、向の入込内田出羽守殿、爰を日ヶ久保といふ、前の通へ出て北へ行、兩がは町屋壹町程有て、右森甲斐守殿、左伊東宗春、大橋宗有、明照寺、善心寺、續きに稻荷の宮有て清德寺、入込長要寺、片町有、右大久保出羽守殿うらながや、此間六町の餘、行あたり玄泉寺、左右に道有、左西をさしてゆく道に、右松平伊賀守殿

片町有、左寺町屋のよこや、此間三町行て、南をさしてゆく道に、左側森甲斐守殿、つゞき片町、西光寺、つづき誓専寺、門前に町少し有、右阿部美作守殿よこや、並に町有、左大寶寺、妙壽寺、右に長光寺、それより西側町や少し有、右妙専寺、左光明寺、横手に道有、右長福寺、左東北寺圓福寺明泉寺、此間壹町也、二町程南東へゆけば内田出羽守殿屋敷へ出る、前の通へ出てすぐ道、櫻田町といふ、右手前に稲荷の宮有、此町まで二町半有、櫻田町を過て右てに道有、前の通南へ行に、左側三光院、つゞきに町少し有、燈光寺門前に町少し有、正覺院つゞきに町少し有、右町のよこや、朽木監物殿、左松平織部殿、兩側町少し有て、十間ばかり西へ付て又南へ行に、右遠山主殿殿、左多賀左近殿、右に稲荷有、左片町、右はあき地なり、此間三丁程、左に廿間の餘東西に道有、此間前への通南へ行に西側町、左右に道有、右への道南側、遠山主殿殿よこや、北條伊勢守殿井上左太夫殿、右明地はたけ、此間二町、行ごまりなり、左への道に左側秋月佐渡守殿、右南部大膳太夫殿よこや、此間半町、前の通南へ行に、左南部大膳太夫殿、右遠山主殿頭殿木下淡路守殿岡部丹波守殿、此間三丁半程行て左に道有、前之通南へ行に、右片町、左町のよこや、此間半町過て左右に道有、左之道少し行て南へ行に、一町の餘過て、行あたり本多越前守殿、うしろに京極類母殿、左右に道有、是迄は新堀の順道より道七八町南へ行、

一、右之内櫻田町南に右手へ道有、此通西へ行に、左片町半丁、つゞき畠有、入込に遠山主殿殿、右向に阿部美作守殿、是より二町ほど行てかうがい橋有、此所狸谷といふ也、左右に道有、左へ付て行ばたんぼ道也、二町程行て西に道有、小坂上りて左山口平左衛門殿同修理正殿、右にも同屋敷有、此間三町程行て右に道有、前の通より一町ほど西へ行て、南へ半町程付てゆくに、西へ又道有、二町ほど過て左に道有、同側明地畠也、右側半町ばかり畠有て、金森萬之助殿、此屋敷一町半過て右に道有、金王櫻の邊へ行、萬之助殿つづき渡部越中守殿、此屋敷一町の餘有、よこてに付て西へ一町行、それより南へと行に左てに道有、右側牧野飛驒守殿森日向守殿、行あたり同日向守殿屋敷にて行あたる、左手に道有、此間四町、前の道金森万之助殿屋敷より北通を西に付て行に、小坂上りて右織

田信濃守殿、左㕝なり、二町過て櫻井庄之助殿、筋向右手島田出雲守殿一柳對馬守殿、此間壹町の餘有、すぐ道二町半行ば、行あたり堀なり、對馬守殿表門通を壹町程南へ行ば、左に金王櫻有、同じく小みや有、此あたり澁谷といふなり、

澁谷金王櫻

一、此澁谷は、左馬頭義朝に召使はれし金王丸といふわらはの在所とかや、然るに源義朝は、平治元年に大納言藤原信頼にくみして、よしなきむほんを起し、待賢門の軍にうちまけて、主從五騎にうちなされ、東國さして落たまふに、三男頼朝は垂井の邊にして見失ひ、それより四騎にて、美濃の國靑墓の宿長者が所へ付給ふ、其夜二男朝長は流れ矢膝口にうけて行歩叶ひがたく、雑兵の手にかゝらん事を無念に思ひ、腹かき切てうせたまふ、義朝一方ならず歎きたまふといへども、よし〳〵弓矢とる身の戰場の討死、なげく事ならずとて、猶東國へくだられけるが、尾張の國野間内海に鎌田兵衞正淸が舅長田庄司忠宗を頼み、かれがもとへ入給ふ、長田不忠にして裏がへり、聟鎌田をうち、次の日義朝につめ腹切せ奉る、金王口惜くおもひて、長田を討んとしけれども、とかふして討得ず、其の後都に上り、義朝の妻常盤御前にかくと語り、すぐに出家し廻國修行の身となり、主君の跡をとぶらひ奉る、修業のついで、故鄕なれば、此所へ歸りて今の櫻を植しと也、さて又頼朝仰に從ひ、判官義經を討手に向ひし土佐正高とは、此澁谷の金王丸の事也、櫻は殊の外老木にて、枝まはりに花の數すくなし、花の色は白し、

さく時や金王の盛あり花のもり

一、かうがい橋より右てに道有、一町半、たんぼ路を行て西へ道有、小坂上りて左淨生寺、高木小左衞門殿、此間二町半行ば、左手に道有、前の通西へ行て二町程西へ行に、高木勘解由殿、右てにも同屋敷有、此道五町ほど行て、左近藤のぼり組、右渡部平三郎殿組、左右に道有、

右之分を指置、溜池近邊、赤坂邊を書付可ㇾ申候へども、西南の限り知れ難きゆへ、わざと記す者也、

一、虎之御門より西南の通に付て行に、堀ばた左かど、田中大隅守殿谷帶刀殿同藏主殿、此間二町斗、堀へ付て溜池へ出る、前の通南へ行に、右中西圖書殿よ

こや、左かど野瀬市十郎殿奥村八郎右衛門殿、向に水野民部殿、左かど戸川玄蕃殿、此間壹町半、行あたり松平大和守殿、左右に道有、左へ壹町程まがりて東へ行に、左かど牧野半左衛門殿、右かど多賀三右衛門殿、櫻井庄之助殿、此間四十間程有、それより南へ壹町の餘行て、行あたり牧野飛騨守殿やしき有、それより東へ半町行ば、天徳寺うら門へ出る、左右に道有、一、右之内中西圖書殿表門通堀に付て西へ行に、隣織田内記殿、此間壹町内記殿よこや、溜池に付て二町程行ば左右に道有、右赤坂田町へ出る、前のすぐ道南へ行に、右かど山口修理殿、つゞきに片町有、左かど松平大和守よこや、御手洗傳左衛門殿大久保甚右衛門殿、右牧野半右衛門殿谷文五郎殿、此間壹町半、左右に道有、前のすぐ道南へ行に、左かど神尾左衛門殿木造七左衛門殿、右杉浦伊豫守殿、此間壹町行ば横てに道有、前のすぐ道南へ行に、左奥山甚右衛門殿、右かど荒井權之助殿、左金森左京殿、右本田主馬殿、此間壹町行ば横てに道有、前のすぐ道南へ行に、左酒井權左衛門殿、右かど木下淡路守殿、左花房外記殿、右長谷川九左衛門殿、又此間一町行ば横手に道有、右近藤源左衛門殿、左伊藤安左衛門殿よこや、西科勘右衛門殿、行あたりかど坪内惣左衛門殿組、此間一町有、前之通南へ行に、左山内大膳太夫殿後藤淡路守殿、此側一町、横手に道有、前の通右かど伊藤安左衛門、此側半町、横手に道有、西へ行に、左かど伴野九左衛門殿石川市正殿よこや、右片町、此間一町、左手に道有、前の通西へ行に、左かど日根權十郎殿、右石川若狹守殿、つゞき片町、市兵衛町といふ、左加藤金太郎殿、此間一町行ば右手に道有、前の通西へ行に、左片町有、右清圓寺横や、此間半町、行當り善覺寺、左手に道有、南へ行に、右岡部丹波守殿、つゞき片町、不動院、又片町有、かど岡本壽仙、左鍋島信濃守殿、此間一町半、行當有馬左衛門尉殿、左右に道有、右青山へ行道なり、一、右之内市兵衛町西右手に道有、小坂上りて北へ行に、右松平隼人正殿、つゞき町也、左清圓寺善覺寺延念寺、門前に町有、法忍寺、内藤伊勢守殿、此間二町の餘、行當相馬長門守殿横や、左右に道有、右長門守殿横やに付て、右渡部傳四郎殿、筋向に圓照寺、つゞきて光照寺法雲寺、門前に町有、此間二町行ば右手に道有、前の通東北へ行ば稻荷宮有、つゞき町少し有、

南部坂へかゝる、右町横や少し有、伊藤傳之丞殿、安部坂を越て、左岡部志摩守殿、右松平右衛門佐殿、行あたり新堀左衛門殿、左右に道有、此間二町有、

一、右之内稲荷の御前筋東へ行に、両側町少し有、左坪内杢之助殿、右丹織部殿、此間一町過て筋違に左右に道有、すぐ道東へ行に、右坪内惣左衛門殿組、左道源寺、此間一町、右てに道有、前の通一町行ば、行あたり酒井権左衛門殿、左右に道あり、

一、右之内道源寺西横てを北へ行に、左片町、此間半町行ば右てに道有、前の通北へ行に、右かど坪内宗左衛門殿組、行あたり眞田伊豆守殿、行どまり惣兵衛殿組の屋敷、横手通を東へ一町行ば北へ道有、左妙福寺、伊藤采女殿眞田伊豆殿、此間一町行ば東へ道有、半町行ば又北へ道有、右側屋敷の地尻、左養泉寺、門前に町少し有て長泉寺、此間一丁、行どまり也、

江戸雀四巻目終

江戸雀五巻目 御城より南之方

金杉橋より品川まで、金杉新堀を限て、淺生一本松、白銀村六本松、目黒、高縄手まで之内

大佛弁閻魔堂之事　水月觀音の事

池上本門寺之事　目黒不動の事

一、金杉橋を渡りて、同一丁目北門際より東へ出る道有、半町行て右手に町あり、金杉うら町と云、前のすぐ道半町程行て、行あたり松原相摸守殿濱屋敷有、右は金杉うら町一丁目より四丁目まで有、四丁目裏に稲荷の小宮有、前のすぐ道一町程行て小橋有、渡りて左に亀井能登守殿岡部内膳正殿濱やしき、二町程行て猟師町一町有、肴船此所へつく、すぐ道、行あたり鹿島小宮有、右手の道通町へ出る、

一、通町筋一丁目より三丁めまで有、右てに道有、西應寺へ出る、金杉四丁目小橋を渡りて、芝肴棚一丁目、此町殊之外長き町也、左右に道有、右ふくろ町へ出る、芝二丁目左右に道有、右長徳寺へ出る、芝三丁目左右に道有、三田臺町へ出る、芝四丁目左右に道有、

四丁目につゞきて田町一丁目、左に松平薩摩守殿保科筑前守殿町やしき町屋の間に有、田町二丁め右に稻荷小宮有、左側水野民部殿内藤左京殿町屋のあひに有、左右に道有、田町三丁目左中川佐渡守殿水野谷左京殿松平安房守殿町屋之間に有、左に道有、札の辻なり、田町四丁め左松平縫殿殿、右同若狹守殿、町屋より南也、田町五丁目同六丁め、左牧津飛驒守殿町屋あひに有、田町七丁め左細川越中守殿遠山主殿殿町屋のあひに有、八幡宮有、田町八丁目左南部大膳殿、町より南也、同右に淨覺寺、田町九丁め右に道有、前のすぐ道南へ行に牛町也、兩側茶や牛町ほど有、右に道、同北東かご楊樹院、左菅賀玄勝、此間半町、行どまり道應寺、前のすぐ道南へ行に濱ばた、かし舟有、右一町程の內に所々に茶屋有て、片町少し有、淸泉院、つゞき茶屋少し有、此間一町程過て右に道有、前のすぐ道南へ行に、右少し片町有、並に稻荷の小宮、つゞきて茶や、此間一町行て右の道、同兩側茶や一丁ちかく有て、向に閻魔堂有、前のすぐ道南へ行に、右茶や少し有て、右之道兩側茶や壹町程有、向に大佛有、

芝大佛並閻魔堂

一、歸命山五躰寺は木食但唱の建立也、頃は寬永十二年乙亥の年の事也、抑此但唱は攝津國多田鄕の人なり、其母有馬の藥師に祈て儲けたる子也、幼時より佛道の心深く、終に年十五にして木食但善の弟子となり、其後信濃國檀特山に入て、百ケ日の間に念佛三昧を成就して、向の嶺にまのあたり三尊の御影を拜す、それより山を出て又淺間の嶽に籠り、百日居りて、夫より紀州那智にいたり、おこなふ事百日、其外西國南

（芝　大　佛）



海あまねく巡り、色々の奇特を見る事たび〳〵也、其後江府へ下りて、今の五體佛をつくる、皆木像にして箔佛たり、年六十にして禪定に入が如く遷化せらる、されば三字念佛のすゝめは、但善但唱二代にして絕たり、又山城國葛野郡嵯峨の鳴瀧の五體佛も此時に造り、船に乘せて都に上せられしとかや、

又但唱の弟子念幸といふ人有、是は都の東白河の邊り田中といふ所にして地藏尊をつくり、廿五尊を共に安置して念佛をすゝめしが、是も早昔がたりとなりてうせぬ、

又門前の二王も同作也、石なり、其長一丈に及ぶ、ある禪僧來りて、小僧に此佛はいかにととふ、小僧答曰、是本來歸命山五輪ぐそくの五體佛と答へぬ、禪僧うらゑてとりあへす發句に、

そもさんかひらくや花の歸命山

一、大佛の左の方に閻魔堂有、幷地藏尊まします、垂跡の方便は水と波とのごとくにて、誓は同じ御助けにや、有難尊像也、みな五體佛と一作、但唱の刻めるなり、

右に太子堂並に庚申堂有、少しさきへゆけば右てに道有、前のすぐ道南へ行に、右側にまばら成町二町有、同東禪寺、町少し有、右てに道有、廿間程行て、行あたりに安體寺、南つゞきに宗淨寺、前のすぐ道南へ行に、右一町ほど片町也、右に道有、松平薩摩守殿やしきへ行、前の通へ出て、右ての町一町の餘行て右に道有、有馬中務殿やしきへ行、此道左手に稻荷の宮有、前の通南へ行に、右片町一町の餘行て小山有、同片町少し有、續きに松平美作守殿、つゞきに小さき山有、町一町有、それより一町の餘山有、やつ山といふ、それより南へ行ば左濱ばたに稻荷の宮有、是より兩側茶や、一町の餘過て右に道有、前の通南行に兩側町也、一町の餘過て右に道有、御殿山松林なり、御茶や有、前之通南へ行に、左右に町有て、右中程に泉福寺東海寺、右に道有、一町近く行て、南へついてゆく、此道畠也、行當り東海寺、西への道は池上目黑へ行也、東海寺は澤庵和尚のすみ給へる寺也、前の品川通、右片町ま原茶や、一町程すぎて右に海上禪林禪寺也、それよりつゞき一町程町有、兩側、それより二町が間旅籠や兩がは有り、右に駿河様表御門のあと、内に入て又御成御門有、五重の塔有、右ぞれ〳〵も破壞したる

有様也、前の品川通町屋、一町程雨がは町屋、右に道有、池上目黒へ出る、雨がは町一町程有、左右に松平陸奥守殿屋敷あり、是まで鈴の森へ程近し、

水月觀音堂爰を荏原郡品川郷といふ

一、金花山水月觀音は弘法大師安置の本尊也、閻浮檀金聖觀音の立像也、もと是龍宮世界よりあがらせ給ふ、大師唐土より歸朝の後、關東御廻國のつゐで、此所の地頭何某に賜ふ、それより代々信敬し奉る、その後品川左京亮といふ人まで傳りけるに、猶古へに超て持佛堂に移し奉る、花をつみ香をたき信じ尊みける、然るに應永年中に鎌倉の公方持氏公の時に至りて、上杉禪秀と合戰有し時、品川の一族討死して其跡たえたり、此時かの御本尊を草堂の内に隱し置ぬ、爰に太田道眞が子に持資入道道灌久しく此地に住て、深く御本尊を信心す、そのかみ此所は西國中國の商人船の着岸する湊なりしかば、此地中々繁昌して、堂塔を建立して皆人あがめ奉りぬ、長祿元年四月に、太田道灌江戶の城に移りて後、文明十八年七月に、その主君上杉修理大夫定政にうたれぬ、是より兩上杉不和になり、關東大に亂て皆人居所を失ふ、是に依て此所は旣に破滅に及ぶ、爰に小田原の北條家と兩上杉と數年合戰有しに、上杉家終にまけて江戶品川、小田原の方へ押領する、其後また北條家と武田信玄と爭ひあり、終りには武田方へ江戶品川をまた切取る、此時二ヶ所の神社佛閣を燒拂ひぬ、此故に今の觀音を武田方へ取りて甲州に歸りしかば、その人忽ち大熱狂亂して口ばしりけるは、是武州品川の觀音なり、いそぎもとのところへ返し送れといふ、諸人大に驚き、近き里につかはすに、その里又物狂はしくなり、口ばしりて品川へおくれといふ、然るに武州と甲州の境に新關据りて、たやすく人の往來しがたし、爰に品川の乞食この里に來りしにたのみて、彼本尊を返しつかはすに、乞食なれば關所にても咎めず、かくて品川に着きて古への跡をみれば、堂は燒けて礎ばかり殘りけるに、据へたてまつりて、やうやうに藁屋を造りて入まいらせけり、その後この近邊非人多くすみけるを、寺社奉行に訴てみな拂のけ、承應元年壬辰五月中旬にあたつて寺地を拜領して、時の住持權大僧都弘尊、則形のごとく觀音堂を修造せしめ、海照山品川寺普門院と改められたり、そ

れより以來大慈大悲の御惠みを、弘誓深如海にたとへ、歴劫不思議は波のごとし、されば信心渇仰の人の前には、一明の月の稀に宿るにひとし、誠に此ゆゑにや水月観音とはいふなり、

うつろふは和光の影か水の月

一、荏原郡千束郷池上本門寺

そも〳〵此長榮山本門寺は祖師日蓮聖人の開基なり、昔年日蓮は安房の國小湊より船にめし、鎌倉へ通り給ひしに、當國品川の浦より池上村に入給ふ、此時に關東の番匠の棟梁宇右衛門尉宗仲と云者あり、祖師かの宗仲が家に立よりて一夜をあかさんとの給ふ、あるじ限りなく悦びて、さま〳〵にもてなし奉る、祖師當地の景を見たまひて、爰は我遷化すべき地なるべしと心に思召ける、かくて宗仲に暇を取て、鎌倉へ入らせ給ひて衆生利益なされて、それより身延に入らせ給ひ、行ひすましておはしける、弘安五年の秋の頃、身延を出させ給ひて、又武藏へ下らせ給ひ、宇右衛門が家に來らせ給ひて、あまたの御弟子を集めての給はく、我衆生を化度すべき緣つきて、遷化すべき事今三七日の內に有とて、佛法弘通の遺言念

(池上本門寺)



頃に有りて、其年十月十三日に遷化有、宗仲も弟子となり、家を寺に改め、今の大坊是なり、日澄上人の寺なり、又寺中十六坊の內、照榮坊は日朗の寺、覺藏坊は日像の寺、南の坊は日照の寺也、扨寺內之廣さもつとも大廻なり、祖師堂の裏に聖人の御影あり、是は日蓮御在世のとき、御弟子日法上人、御前にして一刀三禮して作りたる御影也、長榮山本門寺祖師堂といふ、上の額は本阿彌光悅筆なり、次に寺の什物には、

注法華經四巻是祖師御自筆也、みづから注をつくりて、經の中に書入給へり、殘りの四巻は駿河の玉澤にあり、
靈鷲山より渡し紫色の石一ツ
御弟子檀那等のもとへ御遺物自筆帳
身延山御弟子衆輪番持御自筆之帳
御珠數一連
聖人御消息數多あり
肉附之歯一枚是は聖人御在世の間にぬけ給へる御歯也
貞宗の太刀一振

右は此寺の什物寶物也、又或人の發句に、
池上に咲や南無妙法蓮華

右池上の道二有、田畠のあせ道、又藪の中一村の在所などを通りゆくゆへ、道筋しれがたきゆへ、書付不レ申候、品川出はづれより一里六丁といふなり、

一、金杉新堀に付て西へ行、 金杉一丁目の北よこ道、同金森萬之助殿よこや、一町の餘過て左右に道有、前の通西へ行に、平岡市十郎殿よこや、知村清左衞門殿山村十郎右衞門殿織田信濃守殿武田長仙よこや、此間三丁半過て左に道有、 前の通西へ行に、 片桐主膳殿、此屋敷一町ばかり、よこてに道、 それより町よこやを一町過て左右に道有、左三田臺町へ出る、右かはらけ町、西久保へ出る、前の通西へ行に、有馬中務殿うら門、此間二町半、よこてに道有、前の通西へ行に、水野谷左京殿岡田豊前殿、此間二町半、左手に道有、前の通西へ行に、 小出大隅守殿石川若狹守殿、 此間二町、よこてに道有、前の通一町程行て、左手に道有、行あたり岡山次郎兵衞殿、右へ半町程行て西へ行に、しりやを通りて大寶寺增上寺隱居あり、

一、右之内金森万之助殿表門通 南へ行に、 左万之助殿、右平岡市十郎殿遠山信濃殿大島雲四郎殿、此間一町半行ば右てに道有、前の通南へ行に、右西應寺、 左片町、此間四十間行ば左手に道有、 通町へ出る、前の通南へ行に、右西應寺、本尊阿彌陀、惠心の御作、明賢上人開基也、左側町、此間四十間過て向に橋、 左右に道有、右之道へ付て行に堀ばた、西應寺、町一町有、行あたり松平薩摩守横や、左右に道有、 左へ付てゆく、右薩摩守殿よこや、 左片町半町程也、 行あたり源光寺、左右に道有、左の方の道、左西側惠門寺、此間廿間過て左右に道有、惠門寺うしろ通東へ行に、右ふくろ町、片町也、右に明神の小宮有、つゞきて法恩寺、右側西念寺、此間一町、行あたり通町、 惠門寺より南の通

下町、此町一町過て右へ行ば、左寺町、片町なり、右長徳寺西念寺、此間一町有、右へ付て西へ行に、左右に松平薩摩守殿やしき有、此間四十間、それより南へ行に左寺の地尻、右黒田千之助殿、此間一町過て左右に道有、右へ付て西へ行に、左黒田千之助殿、同やしきのよこや、此間四十間、行あたり松平讃岐守殿、左右に道有、少し右手へふりて西へすぐ道有、左讃岐守殿よこて、右松本阿波守殿、此間貳町行て左右に道あり、三田町筋なり、

一、右之内大島雲中殿よこやに付て西へすぐ道有、左西應寺片町也、右佐久間源四郎殿、此間一町の餘過て左右に道有、左の道同片側町也、右松平薩摩守殿よこや、此間二町、行あたり松平土佐守殿、右半町行て西へすぐ道有、右有馬中務殿うら門、左松平淡路守殿よこや、此間二町半過て右てに道有、前の通西へ行に、左かど島津飛驒守殿、此間一町近く行て右てに道有、西側町少し有、前の通西へゆくに半町程右側町也、同道有て西側に東光寺大乘寺有、前の通西へ行に、左森日向守殿、此間二町過て小橋有、渡りて左右に道有、前の通西へ行に、保科越前守殿よこや、福禪寺よこや、つゞき明地、此間一町半程過て左手に道有、前の通西へ行に、右に町少し有、此間半町行て右てに道有、前の通西へ行に、左松平陸奥守殿、右側町、つゞき春德院、ならびに町少し有、清見寺、左稲荷小宮有、此間三町、筋違に左右に道有、左百姓町へ出る、右一本松へ行、前の通西へ行に、一町兩側町、右手に道有、前の通少し南へふりて行に、右南部大膳殿、左大久保右京殿組、龜井能登守殿、此間二町半、左手に道有、前の通西へ行に、右南部大膳殿、左三枝攝津守殿片桐石見守殿平野丹波守殿、横てに道有て町少し有、右にも町少し有、是まで二町、行あたり左右に道有、左南へ付て行ば二十間程兩側町、それより西へ畠道一町行ば、左堀田備中守殿、右畠、此間一町、行當り誓運寺、左右に道有、右北へ二十間の餘行ば、又西へ道有、右山口修理殿岡部左近殿荒井甲斐守殿、右北へ行ば、左誓運寺よこや、森日向守殿、此間三町半、右へ二十間行ば又西へ道有、二町程ゆけば右北へ道有、同側福正寺、入込松平外記殿、此間一町半、それより西へ二十間行ば左右に道有、右北へゆけば左に堀有、其はた松平主殿殿屋敷有、前に小橋有、右手にも中屋敷あり、

一、右之内清見寺西よこてを北へ行に、左山崎勘解由殿、右に淺府大明神社あり、一町の餘行て東へふりて行に、左木下右衞門督殿表門、右寺の地尻なり、又町少し有、此間又一町の餘、行あたり增上寺隱居、左右に道有、此あたり一本松といふ、東へ付て行ば、左岡山八兵衞殿、右片桐新之丞殿、顯宗寺、此間一町の餘行て左手に道有、前の通東へ行に、右大恩寺、つゞきに町少し有、左一町の餘町也、行あたり石川若狹守殿よこや、左右に道有、左新堀へ行、此道左手に町有、右への道兩側町也、右入込に善福寺、町少し有て光善寺、左町、此あたりあざぶと云、是まで二町の餘、行あたり松平陸奥守、左右に道有、左手東へ半町行て南へ道有、右陸奥守殿、左明地廿間計有て、左海法寺、つゞき田地なり、陸奥守殿、此間二町過て右て西へ道有、二町近く行て南へ道有、右側小出瀨兵衞殿、廿間ばかり明地なり、一町程片町、西北かご宗景寺、左屋敷の地尻也、此間二町すぎて行あたり堀美作殿、左右に道有、前の通南へ行に、右側山内式部殿、小橋渡りて堀ぎはに上村七右衞門殿、左田地、此間二町半行ば右てに道有、前に小橋有、前の通南へ行に小出主殿殿、右堀ばた堀美作殿、此間五十間、それより西へ付てゆく、二町の餘過て、右圓澤寺西福寺、前に橋有、此間一町、それより西福寺横通小橋渡りて北へ行に、左側右に道有、左御藥園へ行、右之道北へ行に百姓町、左に觀音堂有、つゞきに町少し有、次に淸念寺、町又有て遍照寺、つゞき町、此間一町半、左手に道有、大久保右京殿組、本多越前守殿やしきへ行、前の通北へ行に、半町ほど兩側町、右光龍寺、景泉寺、行當り町、左右に道有、

一、金杉新堀有馬中務殿より、三田町筋北より南へゆくに、右中務殿、左一町程町、横手に道有て、左又町少し有、よこてに道有、前の通南へ行に、廿間計過て右てに道あり、前の通南へ行に、左松平土佐守殿、右に町少し有て、入込に松平淡路守殿、此間一町過て三田一丁目、右片町、左松平安房守殿、右町中に春日大明神宮有、松平主殿殿、是まで二町程有、左手に道有、前の通南へ行に三田二丁め、右片町也、町中に松平主殿殿、左に松平讃岐守殿、右手小道、四丁目さき兩側町屋一町程有、行あたり保科筑前守殿、左右に道有、前の通南へ少し行て左に道有、前の通南へ行に兩側町、

右に久留島信濃守殿、行あたり札の辻通町、是まで二町有、

一、右之内保科筑前守殿屋敷より南をさして行に、左側徳元寺大照寺西宗院、此間一町過て、右筑前守殿、横てに道有、前の通南へ行に、左長遠寺法勝寺大勝院よこや、半町過て左右に前の道南へ行に、左佛性院照光寺高福寺、次に願海寺よこや、右田中大隅守殿組、小出主殿殿、此間四十間過て左右に道有、右之道西南へ付て行ば一柳山城守殿やしきへ出る、左の道東へ行に、左願海寺、右之寺示現寺よこや、半町過て南へ道有、左貞林寺、右示現寺、左明金院、右臨泉寺、左多門寺、右明王院、左青林院、右玉泉寺、左かご泉能寺、右瑞應寺よこや、此間一町半、行あたり土方寺、左右に道有、右道同側瑞應寺ならびに町少し有、左側青山寺、此間四十間、東よこてに道有、左南體寺心宮寺、右世照寺、左淸久寺、つゞき畠、右大心寺、此間一町行て左右に道有、右へ半町行ば、左有馬伊豫守殿、つゞき中道寺、右かご一柳山城守殿、此間二十間斗行ば西へ道有、左中道寺、よこて有馬伊豫守殿、右田地なり、此間二町、それより畔道一町ほど行て、行あたり立行寺、左右に道有、左南への道、左は畠なり、右溝口土佐守殿、西生寺よこや、此間二町ゆけば行當目黒道へ出る、

一、右之内立行寺より北へ二十間ばかりゆきて、横通を西へさしてゆくに、左氷川の明神、又重信寺よこや、右伊達宮内少輔殿、此間二町程、左右に道有、左十間計行て西へ道有、廿間計、又行て右手に道有、一町程行ば東側に金森大膳亮殿やしきあり、前の道行あたり白銀村、右に道有、板倉伊豫守殿西側なり、

一、右之内重信守門前通を南へ行に、左右の寺、右松平長九郎殿、半町行てよこてに道有、又半町程行て、左渡部隼人正殿、それより北へ十間ほど行て西へ半町行ば、左に道あり、西側かご大恩寺、右白銀村なり、前の通南へ行に、左上杉喜平次殿、此間一町過て南へ行に、右土方備中守殿、つゞき畠、此間二町過て、右半町程畠有て、森刑部殿、左後藤淡路守殿大村因幡守殿、此間二町、行ごまりなり、前の道は目黒へ出る道なり、

一、田町三丁め北の門ぎはより西へ行に、左町のよこや、つゞき大久保勘解由殿、右に稲荷宮有、此間半町、

それより北へ十間ばかり行て西へ道有、此間廿間行て左右に道あり、左西へ付て五十間行ば左右に道有、右へ廿間程行て西へ行に、三田三丁め横て通、左入込原玄房、右町、此間一町程過て右に道有、前の通南へ行に右町有、爰に小坂あり、ひじり坂といふ、左久留島丹波守殿、右に齊雲寺、左松平駿河殿、右町つゞき妙音寺、それより兩側町有て、右大藏寺、左西海寺、右に片町有、實相寺、つゞき町也、よこてに道有、南荘嚴寺、入込に正覺寺、前の通南へ行に、左土岐山城守殿、右に町、三田臺町といふ、左大遠寺、道二筋有、西の方右側照泉寺塵相寺若王寺靑山寺善福寺、よこてに道有、南側町十五間ほど有、南へ少し行ば右に町十五間ほど有、前の通行當り細川越中守殿やしきへ出る、此道以上一町半、左右に道有、東の方の道南へ行に、右て町少し有、幷に靑龍寺敎學寺、此間一町の餘行て左右に道有、前のすぐ道一丁ゆけば、越中守殿うら門へ出る也、左の道いさらご町町ずへ、左水野對馬守殿、此間一町過て右に道有、前のすぐ道東へ行に、右片町、左福照寺長安寺大圓寺、行あたり通町なり、此間壹丁半、

一、右之內、水野對馬守殿表門通南へ行に、右長應寺、田中大隅守殿、つゞき町少し有、觀音堂楊樹院、左寺之地尻、右楊樹院、向多惠院、右高雲院善學寺、此間二町、すぐ道二丁行ば大佛へ行、左手に道有、此あたり高繩といふ、

一、右之內細川越中守殿裏門へ行道南へ行ば、右町少し有て東高寺、此間半町、右に道有、越中守殿表門へゆく、前の通南へ行に、左町一町有、入込に清源寺、前の通左一町ほど片町なり、うしろ通へ出、左町少し有、本案寺永昌寺、右へ道有、少し行て前の通へ出、左町少し有、正誓寺門前に町少し有、妙源寺妙雲寺、右に越中守殿、此屋敷二町半程、よこてに道有、前の通南へ行に、右に番所有、同西への道目黒へ行、前の通南へ行に、左町少し有、入込に秀養寺、つゞき町少し有て國勝寺、右高學院、それより兩側町、左正敎寺、右南側に正光寺、右兩側町少し有て右誓蓮寺、此間一町、行あたり松平但馬守殿、右へ十間計行て東へ道有、二町程行て北へ行、左松平丹波守殿、右松平山城守殿、上高寺、左正金寺正覺寺、此間一町、東へ道有、濱ばた、前の通南へ行に、右黃梅院永心寺、左覺專寺高野のや

しき、右に町少し有、此間半町、右てに道有、右側正行寺、つゞき町、此間一町の餘、右手に町有、九鬼千之助殿よこや、つゞき畠、南側松平大和守殿京極百助殿、此間四町、行あたり黑田市正殿、左右に道有、前の通南へ行に、一町の餘行て左龍照寺宗福寺、此間一町、左に道有、一町程行に左町、右本多越前守殿よこや、それより一町南へ行て東へ行に、右松平薩摩守殿、此間一町半、左右に道有、左の道同かど本源寺、それより一町の餘行ば濱ばたへ出る、前の通南へ行に、左本多越前守殿、右九鬼式部殿、此間一町行ば右手に道有、前の通南へ二町半行て、行あたり奥平小二郎殿、夫より東へ半町行て南へ行に、左有馬中務殿、此通五町半行て左右に道有、廿間行て南へ行に、左畠、右松平日向守殿阿部瀨二郎殿、此間二町半、行どまり也、一、右之內九鬼式部殿横通をゆくに、左桑山修理殿、此間一町、行あたり堀川丹後守殿、左右に道有、右へ一町の餘行て、左久留島信濃守殿、右森主膳殿、此間二町すぐ道有、左への道左片町一町有、それより右に半町ほど片町有、それより左に片町一町ほど有、入込に堀三右衛門殿、右万眞寺、それより二町程行てきじの宮、是より西へ一町ほど行て、右に片町有、此所過て左右に道有、西へ付て行ば、左田地なり、右松平伊豫守殿、此通四町行て、右に德性寺、行當り柳生飛驒守殿、是までなり、

一、細川越中守殿裏門南横てに番所有、此南よこて目黑道なり、西へさして行てに左一町程町なり、高學院隱居、次に觀音堂有、高大院、此間二丁過て左右に道有、左の道同がは正行寺元照寺、右松平丹波守殿丸岡定助殿、向に德明寺、此間三町、左右に道有、行當り松平大和守殿、左右に道有、前の通西へ行に、右に西生寺、兩側町少し有、右に溝口土佐守殿、兩側に町、茶や所々に有、此間三町過て右に道有、前の通西へ行に、一町程行て左手に道有、前の通、それより一町近く西へゆく、此道畠也、右に後藤淡路殿、つゞき畠、左町、此間一町過て左の道瑞泉寺、西へ行に右町、左畠、同增上寺屋敷へ行、前の道西へゆくに、右松平阿波守殿、つゞき町少し有、次に木食寺有、此間一町程、左に道有、前の通西へ行に、右松平阿波守殿、此間半町、横手に道有、西側松平讃岐守殿やしき有、前の通西へ行に、左妙音寺、右は松平讃岐守殿、ならびに行心寺万日

寺也、此間二町過て左に道有、同がはに法縁寺、前の通西へ行に、左一町の餘町、右西側に高恩寺、次に稲荷小宮有、左に道有、半町行て西南かご妻木傳左衛門殿、前の通西へ行に、左町一町の餘、右中程に八まん小宮有、つゝき山内右近殿、それより一町の餘町、左右に道有、左へ半町の餘行て、南東かご森内記殿屋敷有、右の道西側有馬左衛門殿よこや、松平主殿殿、東側畠なり、前の通西へ行に道二筋有、左の方西へ行ば、右茶や多し、左茶や有て内藤左京殿、それより小坂有、行人坂といふ、右に茶や有、左大恩寺、忠念坊、片桐又七殿、それより両側茶や、此間三町、左橋渡りて西へ行に、両側少し町有、夫より西へ一町の餘ゆく、左田地畠、此所過て左右に少し茶や有、此間二町の餘、左右に道有、右の道西側豊前殿、北つゞき大照院、大鳥明神、左の道南へ行に、右町、半町程有て金剛院、爰を過て両側茶屋一町程有、右に御殿有、両側茶や、右中程御殿有、此間三町過て西へふりて行ば、左南のすみ薬師堂有、それより西へ行、左成就院、安光寺、両側茶や、此間一町、すぐ道品川又池上へゆく、右の道両側町、一町近く行て鳥居有、是より目黒の宮地なり、

目黒不動

一、そも／＼此不動明王といふは、むかし慈覺大師十五歳の頃、下野國都賀郡大慈寺廣智菩薩を師としてつかへ給ふに、その年師匠廣智菩薩の供して、都比叡山へ赴き給ふ、大同三年の年也、此目黒の里を通り給ふとき、折しも夕陽西に傾き入逢の比になりしかば、此所に一宿し給ふ、其夜不動明王あらはれ給ひ、慈救

(目黒不動)



の明呪を唱へ、枕元を荒らかに踏み轟かし給ふと覺えて夢さめたり、廣智此音に驚きて、慈覺に此よしを語り給ふに、同じ夢なり、夫より奇特の思ひをなして、急ぎ此所に形像を作り置ばやとて、そのあたりに靈木有けるを取て、すなはちつくり置給ひ、其身は比叡山に登り給ひ、傳教大師の弟子となり給ひぬ、それより慈覺は日夜學問惰らずして、承知五年六月に入唐し、あまねく諸方の名師に逢て、顯密の二教をさぐり、海心の深き旨を究め、同じ十四年に歸朝有、その後關東へ下向の時、又此地に一夜を明して、夜もすがら通夜し給ふに、あらたに明王御告有て、嶺上に登りて獨鈷をもつてほり給へば、靈水忽ちにわき出、瀧水と漲り落る滴り、皆妙文の聲をなせり、今の御手洗の瀧是なり、されば此故にや、炎天にも乾ず、霖雨にもまさらず、奇妙ふしぎの靈水也、それより星霜遙に過て、元和元年の春の比、本堂のうしろの在家より失火さかんにして、ほのほ既に御堂にさゝへにけり、その時近邊の者ども集りて、明王の尊體を取出し奉らんとするに、黒煙天を掠め本堂に立蔽ふ、かるが故に出すべきやうなく、明王も灰燼とならせ給はんと、みなみなかなしみをなす所に、不動の尊像瀧水の上に立給ふ、是を見奉る人各々隨喜のなんだを流しぬ、諸人大きに渇仰して、形の如く再興し奉る、又寛永元年の頃、征夷大將軍家光公、此所にて御狩有しに、御秘藏の御鷹それて、雲路はるかに翔け行きけるを、別當實榮に仰付られ、祈念せさせ給ふに、忽御鷹飛來りて、寶前の松にとまりけり、家光公御手づからすへあげさせられしに、御拳にうつりける、御感甚だ淺からず、やがて本堂御建立有、同十一年に、かさねて御再興有、誠に明王の利劔の前には惡魔を他方に拂のけ、四咒妙句の縛の繩には、その善惡の二方により、信心のともがらには福壽を無障に授け給ふ、渇仰の心なき者には、忽其身に罰を與へ給ふ、まことにあらたなる尊像なり、發句に、

ばくの繩といはんお庭の糸ざくら

又

花を見る人や不動のからしばり

江戸雀五巻目終

江戸雀六巻目 御城より西の方

赤坂、青山宿、長者ヶ丸、澁谷之邊、權田原、四ッ谷近邊、よいぎまで、付氷川明神之事

一、赤坂御門より一町程西へゆき、行あたり半町程町也、表町傳馬町、左右に道有、左之道田町筋、一丁目より四丁目までかし也、五丁目左側中程より町、行あたり相良遠江守殿よこや、左右に道あり、

一、右之町西うしろ通、おもて傳馬町、南横て二十間ばかり行て左に道有、右三浦長門守殿高田九兵衛殿よこや、左町、田町一町目うら、同二町めうら、左側野間三竹、泉學寺、それより町有、右三宅五兵衛殿よこや、長坂半十郎殿龜岡半左衛門殿、三町めうらの町、右紅葉山坊主衆、よこてに道有、前の通右町、四丁目うしろ兩側町、五町目うしろ左町、右青木又右衛門殿曲淵庄三郎殿加藤傳兵衛殿、又土岐作右衛門殿よこや、行あたり相良遠江守殿よこや、左右に道有、右へ付て行ば、右土岐作右衛門殿仙石次郎左衛門殿、左相良遠江守殿横や、此間一町、左右に道有、右之道北へ行ば、左小林權之助殿、同北かど妻木吉左衛門殿横や、石野八太郎殿、東側仙石次郎左衛門殿よこや、土岐十左衛門殿川井善兵衛殿同源三郎殿、此間一町、行あたり松平安藝守殿、よこて左右に道有、前之通より左之道南へ行ば、左相良遠江守殿、右淺野采女正殿、筋向に土方河内守殿、此間二町、それより西へ一町行て南へゆく道、又一町近く過て、行あたり岡部志摩守殿、向に松平右衛門殿、右へゆく道右かど新堀十左衛門殿小林七右衛門殿よこや、此間半町、右に道有、同側小林七右衛門殿本多十藏殿久保吉左衛門殿岡部八郎右衛門殿脇坂六右衛門殿、西側乗松又八殿京極伊織殿眞田傳四郎殿松平市郎右衛門殿蓑部八郎右衛門殿、此間一町、よこてに道有、すぐ道も有、前の通西へ行ば、右米倉佐太夫殿石原十左衛門殿、此間半町、それより右へ廿間行て西へ行、一町近く行て左右に道有、左の道東側相馬長門守殿、右の道西かど松平縫殿殿組、氷川へ行道也、前の通西へ行ば、一町半過て右に道有、同北かど齋藤源右衛門殿久保田兵太夫殿よこや、同つゞき深江仁太夫殿、西側中程に松平大膳太夫殿裏門有、前の通大膳殿横屋に付て西へ行ば、

左側松平越後守殿山内右近殿、此間三町半、左右に道あり、前の通西へ行ば、右梅龍院、左坂倉伊豫守殿組、此道二町の餘行て右に道有、同北かど京極賴母殿、左側かど松平縫殿殿よこや、阿部美作守殿伊達遠江守殿、又鍋島攝津守殿、右寺町屋の地尻、此間四町の餘、行あたり松平大膳太夫殿、左右に道有、前の通西へ行ば松平伊賀守殿、右松平縫殿殿大久保助左衛門殿、入込阿部美作守殿、此間一町、左に道有、同側町少有、前のすぐ道櫻田町へ出る、是より南の通先に書く故爰に略す、

一、表傳馬町南横手一町程ゆく、此間右町、傳馬町の内左町廿間斗有て、同道前の通西へ行に、左三浦長門守殿、此間一町、西横手南へ行に、右町少し有て、爰に氷川小宮、宗泉寺、町少し有て威德院、一木百姓町一町程有、左武家屋敷地尻、右淨土寺、此間二町半、左右に道有、左うら田町三丁目へ出る、右の道南側入込松平安藝守殿山屋敷、大遠寺、つゞき町少し有、淨雲寺、西尾隱岐守殿、右屋敷地尻、此すぐ道四町、前の通南へ行ば、右半町程町有、靈光院、つゞき町少し有て志光寺、左手町うら田町四丁目の内、此間二町半、行あたり小林又左衛門殿、左右に道有、左田町四丁目五丁目へ出る、左への道すぐ道有、半町行て南へゆく、左側かど川井源三郎殿同善兵衛殿土岐十左衛門殿、右かど石野八太郎殿妻木吉左衛門殿よこや、此間四十間過て南へ道有、左小林權之助殿よこや、眞田內藏殿戸田吉太郎殿佐久間伊右衛門殿石川長左衛門殿高井傳九郎殿、右側妻木吉左衛門殿筒井佐次右衛門殿京極伊織殿瀧川三次郎殿小出市左衛門殿、此間一町半、右に道有、前の通西へ行ば、右側石川六右衛門殿石野金右衛門殿大久保八左衛門殿、左矢橋五郎左衛門殿、此間半町、同横てに道有、前の道西へ行ば、右戸田喜右衛門殿神野五兵衛殿勝屋甚五兵衛殿小出小平治殿、此間一町過て左右に道、右の道西側森山佐左衛門殿小森宗左衛門殿、北よこてに道有、右に今井の馬場有、左側小林宗兵衛殿よこや、紙谷八右衛門殿宮重十左衛門殿小笠原三郎兵衛殿、此間一町、左に道有、すぐ道も有、前の通より左の道南へ行ば、右側一色內匠殿、此間廿間、同道有、右側西江八郎左衛門殿遠山勘十郎殿森勘兵衛殿、此間一町、行あたり松平大膳大夫殿、左右に道有、前の道より東へ半町ゆきて、右

てに道有、同かど眞田右衛門督殿、向に氷川明神の社有、又小六の宮とも云、

氷川大明神之事

一、昔人王六十二代村上天皇の御宇天暦年中に、近江國甲賀の郡に、蓮林僧正と申て貴とき沙門一人有、かいぢやうゑの三學を掌に収め給ふ、然るに東國修行の心ざし有て、此所に一夜を明し給ふに、その夜の夢に、いづくともしらず白髪たる老翁來てのたまはく、我は是此土中に埋れて年久しくふる者也、急ぎほり出して安置せしめよ、此地の守護神となるべし、その埋し所には奇端有べしと見て夢さめぬ、上人奇異のおもひをなし、その近邊を見めぐるに、一所の擅の上に金色の光あり、急ぎほりてみれば十一面觀音の形像おはします、やがてその所に社を立てける、一木村の觀音といひふれて、諸人歩みを運ぶに、示現を蒙る者數多有ぬ、蓮林遷化の後、治暦二年丙午に當つて關八州の內、夏より秋まで大きにひでりす、此故に當所の士民此社に雨を祈るに、忽に洪雨ふり下つて五穀ゆたかにみのり、悅びの眉を開きけり、是雨を下して川をなし、萬民を助け給ふ故に、すなはち神とあがめて氷川明神と名づく、神事は六月十五日なり、今に至りて神徳おはしまして、皆人崇め奉る、爰は入間の郡也、

(ひかはの明神)



氷川とはいかなる人のつけぬらん
　世をばうるほす雨たつの宮

一、表傳馬町南よこて、西をさして一町ゆけば、筋違に左右に道有、前の通西へ行ば小坂有、右町屋、左に千代姫様御屋敷、井上左太夫殿、此間一町、右に道有、

前の通西へ行ば、右西かど三枝隱岐守殿横や、左入込に屋敷有、妻木傳兵衞殿竹越山城守殿千代姫樣屋敷、右は諏訪勘兵衞殿、此間一町半同道有、前の通西へ行ば、右かど松平左兵衞殿、向諏訪左衞門殿、此間一町、横手に道有、小坂上りて左三枝平右衞門殿、右靑山丹後守殿、右に道有、中間町、板倉彌作殿組左右に屋敷有、右手の西はづれに稻荷の小宮有、此間二町半、左右に道有、前の通南へゆくに、十間計り行て左に町少し有て、泉正寺門前に少し町有、圓通寺、松平安藝守殿、右側道賢寺、志村加兵衞殿、泉福寺門前に町少しあり、妙泉寺正學寺、此間一町半、右手に道有、半町行て右入込に志德寺、左に道有、左側町一町有、前のすぐ道西へ行ば、松平利兵衞殿萩賀次郎左衞門殿、ならび森八郎右衞門殿、向水野谷新右衞門殿小坂助六殿戸川權左衞門殿、左山村甚太夫殿、此間一町半、行あたり本田孫兵衞殿、左右に道有、又すぐ道も有、孫兵衞殿北つゞき本田十左衞門殿設樂三右衞門殿、前の通より右へ付てゆく、戸川權左衞門殿よこや半町通りて左に道有、前のすぐ道北へゆけば、西側本田五郎兵衞殿加藤杢之助殿宮重久右衞門殿川原八左衞門殿、行あたり淺野因幡守殿秋田平太夫殿、此間一町の餘より左への道、本田五郎兵衞殿よこやを通行に、左に設樂三右衞門殿、此間一町、それより南へ付て行に、右半町斗町屋、行あたり松平出羽守殿、左右に道有、右西へついて行ば、左今村町とて一町有、右側伊澤隼人正殿、松平外記殿、此間二町半、行あたり觀音寺、左右に道有、

一、右の內松平左兵衞殿表門通西へ行に、右玉窓寺、靑山因幡守殿、靑山丹後守殿、此道四町行て左手に道有、前の通西へ行ば、左靑山大膳殿、此道二町行て右手に道有、左靑山因幡守殿よこや、右甲府宰相樣裏門、向に松平志摩守殿、此二町西へ付てすぐ道有、前の通筋へ行に、左靑山大膳殿、右同因幡守殿、此邊靑山宿と云、右脇坂中務殿、誓源寺、つゞき町少し有、左梅泉院、此間四町半道有、半町の餘行て西へ道有、久保町へ行、前のすぐ道北へ行ば東側町也、西側松平志摩守殿、ならびに町少し有、此間二町、西へ道有、又すぐ道もあり、

一、前の通西へ一町程行て左に敎學寺、右手に道有、一町近く行て左側町、入込に松平安藝守殿、右に道

有、西側諏訪勘兵衛殿、よこてに道有、すぐ道、西側に松平左兵衛殿、

一、前の通西へ一町程行て左に道有、右側丹羽左京殿、筋向に川田六郎左衛門殿玉虫助十殿、是まで四町、又すぐ道六町程行て、東側に伊達遠江守殿屋敷有、前の通西へ行に、右に渡部半三郎殿、百人町、左に瀧川長門守殿、此間六町半、左手に道有、近藤能登守殿組屋敷へ行、此あたり長者が丸といふ、前の通西へ行に三町、左右に道有、前の道西へ行ば、右稲葉美濃守殿、左長谷川久三郎殿、此間二町、左手に道あり、此通南へ行ば、左長谷川久三郎殿、右仙石越前守殿よこや、諏訪因幡守殿、左島田出雲殿、此間三町、それより一町程行て、左一柳對馬守殿、右に八幡宮有、神前まで一町程有、左右に道有、左の道西側に宗福寺有、前の通西へ行に、左仙石越前守殿、右稲葉美濃守殿、此間二町、左に道有、廿間斗行て西へ道あり、一町行て、左かど藤掛監物殿に續きて三浦五郎左衛門殿、右は畠也、此間三町、行當り堀、左右に道有、前の通西へ行に、兩側一町の餘有、左に覺雲寺、右に熊野權現小宮有、又稲荷の宮も有、それより小坂上りて半町程行て左側町、此間一町、右に道有、前の通西へ行ば一町程町有、但兩側、行當りに小橋、左に道有、

一、表傳馬町右よこて兩側町、同二丁め兩側町、行當り右へ少しゆけば西へ道有、左町少し有、右側に水野十右衛門殿久野丹波守殿、左屋敷地尻、此間二町半、行當り諏訪左門殿、左右に道有、傳馬町二町め西横町色々賣物有、繪や町西よこ町、同所西側に紀州中納言様、つゞきて渡部若狹守殿、此間一町餘、東へ行ば元

(赤坂田町)



赤坂町なり、
一、表傳馬町右よこて兩側町、一町過て右へ道有、二丁め兩側半町が間なり、行當り西へ廿間ばかり行て北へ行、ゐや町元赤坂町、此間一町過て北へ行ば坂有、紀伊國坂といふ、一町半行ば紀州中納言樣表門、右に道有、土手筋四谷へ行、紀州樣表門より西へ二町程行て左右に道有、右への道日向半兵衞殿組屋敷有、左へ行道紀州樣御屋敷、右側町少し有て高雲寺、續きて町有、御旗奉行衆屋敷有、此間一町の餘、すぐ道鮫が橋へ行、一町程也、西へついて行道左少し町有、それより一町程過て左入込に永井佐渡守殿、つゞき町少し有、立國寺、同側一町たらず町有、永心寺宗福寺、此間三町過て左右に道有、左へゆくに同側文珠院立泉寺西應寺永泉寺正願寺、此間一町半、右に道有、前の通西へ行ば、左法恩寺本照寺診照寺、右に道有、前の續き正覺寺、此間一町半ほど行て筋違に左右に道有、左の方へ行道同側岡部淡路守殿安藤忠右衞門殿、入込に永井五郎八殿、同永井信濃守殿、横手向に永井甲斐守殿同對島守殿、是迄二間、本道南へ行ば、左同伊賀守殿、右同市正殿、是迄三町半、別にしるすゆへ爰に畧レ之、岡邊淡路守殿表門より西へ道有、右かど長安寺よこや、左森河出羽守殿、右に町少し有、此間一町過て右手に道有、前の通西へゆくに、右玉虫次郎右衞門殿、此一町過て左右に道有、左之道南へ行に右側町、それより先に、左太田三郎兵衞殿、右森三右衞門殿、右入込に三浦小次郎殿、向に水野傳藏殿、是迄三町、すぐ道有、別に記す故爰に略す、前の通一町程行て、行當り內藤若狹守殿、左右に道有、左へ一町半行て西へ道有、四町程行て右に道有、南側板倉筑後守殿、前の通一町近く行て東に道有、左安藤喜兵衞殿、右岡野權左衞門殿、此間一町、前の通是より二町程行て左右に道有、左之道同側町少し有て、正蓮寺、右側も町半町程有、此間一町、すぐ道、行當り御煙硝藏へ行、此道に小橋有、前の通より右への道兩側町半町ほど、左右に道有、右へ付てゆくに、道に八幡宮小みや有、並に棕顯寺、右町や、それより一町程行て右に永井伊賀殿、筋向酒井大學頭殿、是より一町半程行て左に道有、井伊玄蕃殿、此西末よい木と云、前の通五町程行て、行當り加藤源太郎殿、左右に道、是四ッ谷のはづれなり、

一、鮫ヶ橋を北より渡りて道二筋有、左の道西へゆくに、小坂上りて左紀州様御屋敷、右妙源寺、此間一町、少し左へよこたはりて西へ行、左高木喜左衛門殿組、右松平日向殿岡部主税殿、左右に甲府様御屋敷、此間四町、右に道有、前の通少し西へ行て南へ道あり、一町行て入込に坂部三十郎殿組、それより半町程行て右に道有、又半町程行て南へ道有、半町程行てかうが町と云、左坂部三十郎殿組屋敷有、横やを東へ行て本の通筋へ出る、それより南へゆくに、又坂部三十郎殿組、此間一町近く過て左右に道あり、右の通西へ行に、左坂部三十郎殿組屋敷、一町の餘過て南西へ付て行ば、二町近く過て左右に道有、右の道東かど駒井右京殿、左への道西側松平左兵衛殿、左に明地、續き熊野權現、此間一町、左に道有、同側町少し有て高徳寺、續き町一町近く有、左の町久保町と云、右立元寺自泉寺、同前東に町有、行當り町、左右に道有、此間二町半、前の通南へ半町行て西へ道有、二町程行て左右に道有、前の通左かど井上相摸殿松平安藝守殿、此道七町程、入込に第六天有、それより半町程過て左に稲葉美濃守殿裏門、此道それより四町過て左右に道有、百人町筋前に記すゆへ爰に略す、

一、鮫ヶ橋より右への道、西へはや少し行て右へ道有、西側應元寺、東南側に町有、前の通右かど青顯寺、續きて町少し有、法蓮寺、又町少し有て本寂寺、續きに町一町程有て永井式部殿、ならびに又町有、法勝寺一行院、此あたり權田原と云也、此所四町、それより一町程西へ行て左右に道有、左の道同かど諏訪次郎左衛門殿、右かど花房大膳亮殿、前の通一町の餘西へ行て左に道有、同酒井壹岐守殿組、高木喜左衛門殿組屋敷へ出る、前の通西へ又少し行て左右に道有、一町程ゆきて一町餘過、左仙石次左衛門殿組、それより西へ道有、一町程行て右に大神宮の社有、續きに町少し有て、寂光院、是より南西へ行ば左に御煙硝藏有、南てに高木喜左衛門殿組屋敷裏也、小橋渡りて半町の餘行て左右に道有、左の道西側に千手院、それより南へ又一町程行て西へ行ば、左松平左兵衛殿屋敷有、左田地、此道二町西北へふりて行、それより西へ行ば、右に水野民部殿、左田地、此道西へ二町程行て、行當り八代越中守殿、それより西へゆくに、右に三枝隱岐守殿、行當り井伊玄蕃殿、是まで二町の餘、左に道有、

田道也、家居無レ之、しるさず、

四谷、内藤宿、市谷近邊、二本ゑの木迄あかさかのならびきたの方

一、四ッ谷御門より小橋渡りて左右に道有、左土手通赤坂へゆく、右の土手筋は市ヶ谷へゆくなり、

一、四ッ谷土手のはたより小路三通有、南下通西へさしてゆく道、右町、左尾張中納言様御屋敷、此間半町、左右に道有、左の道、右早本十兵衛殿組、本多百助殿、一町程行て左に日向半兵衛殿、すぐ道赤坂へゆく、前の通西へ行に、右半町の餘町也、北へ道有、前の通、左早野七兵衛殿、つゞき川野三左衛門殿、此二屋敷一町半、右一町程町屋なり、西へ行ては兩側町也、左に道有、右側高木九助殿、一町の餘行て少し横手に西南へゆく、右側安樂寺圓照寺心正院、左西念寺横手、此間一町、左右に道有、左同側西念寺、右側一町半ほど町、あひに道有也、前の通西へ行に一町の餘町、左右に道有、左の道南へ行に、左に町のよこや、右手高木九助殿、右一町町屋、あひを隔てゝ東福院、行當り正覺寺、右に道有、同側妙源寺、並に天王の宮、又稻荷の小宮有、横向に瀧川長門守殿組、前の通四十間の餘行て左町、南うしろに町有、此通四町餘道筋也、井上太郎左衛門殿組、此間半町、左右に道有、左の道南へゆけば二十町土手、左能元寺法元寺、向に圓通寺、この間一町、よこてに道、毛利助右衛門殿組へ行、前の通西へゆくに、半町ほど兩側町、右に道有、半町ほど行ば、西側に松平兵部殿屋敷有、前の通西へゆくに十町斗行て左に道有、前の通右二十間斗町、入込に善性寺、前の通續き西側町、廿間計行て右に道有、前の道左一町町屋、右半町町、筋違に左右に道有、左の道毛利

（やつよ）



助右衛門殿組三ヶ所有、前の通西へ行ば、左一町まち、右にも四十間計町也、右に道有、同側大久保右京殿組也、左側安泉寺法雲寺延壽寺正雲寺、行當り本田伯耆守殿、市谷筋、是迄三町半、前の通西へ廿間行て左に道有、右側和田七郎兵衛殿同市右衛門殿鈴木七郎右衛門殿加藤甚兵衛殿大久保右京殿玉虫次郎右衛門殿よこや、此間三町、行當り森川出羽守殿、左右に道有、前の道右町半町、北へ道有、右側宮毛半助殿組、左町の横屋半町、つゞき眞福寺圓照寺高圓寺和合院、右寺の地尻、此道三町半、前の通、左四十間町、右半町まち屋、筋違左右に入込有、右立照寺、左長泉寺、それより西へ行に、兩側町、半町程行て左に道有、同側大久保山城守殿組、すぐ道赤坂へ出る、前の通西へ行に、左半町片町、右永井彌右衛門殿、左に道有、前の通西へ行ば、左方内藤若狹守殿、此屋敷七町程西へ續きて有、右久世三四郎殿、月性寺、御鐵炮屋、此間壹町、右に道有、前の通右伏見助左衛門殿、此あたり内藤宿と云、此道二町行て右に道有、前の通西へ行に、右側町少し有て躰正寺、又町少しありて伊澤隼人正殿、此道三町行て道二筋有、右の方同側朝倉仁左衛門殿木會日向守殿松平左近殿、此道三町、此あたり二本ゑのきと云、左の方右側渡部半左衛門殿、左内藤若狹守殿、此屋敷二町有、右竹越山城守殿松平出羽守殿、此屋敷四町有、右側西尾主水殿川村善七殿、つゞき片町壹町ほど有、幷に加藤源太郎殿、此側六町、左廿間ばかり町有て、左に道有、赤坂へゆく、前の通半町西へ行ば兩側町、すぐ道有、

一、中通三町有、よこて〳〵迄諸商人諸職人有レ之、

一、北上の通、土手より壹町目兩側町や、二町目、左壹町町屋、右は蜷川喜左衛門殿組二ヶ所有、三町目、左壹町まち屋、右半町ほど町、内藤新次郎殿組、菅沼藤十殿、此間半町過て左右に道有、前の通西へ行ば、左井上太左衛門殿組、右菅沼藤十郎殿組、此間四十間ばかり、行當り設樂甚三郎殿組屋敷、表門通左右に道有、

一、四ッ谷見付筋より、右土手筋へ行道市谷へ出る也、左側半町の餘町、同道あり、南がは町なり、前の土手筋北へ行に、左二十間計町有、横手に道有、前の土て筋北へ行ば、左側諏訪兵部殿河野藤左衛門殿、此間一町、横てに道有、前の土手筋北へ行ば、間野八郎左衛門殿金田遠江守殿、此間一町、横手に道有、前の土

て筋北へ行に、左栃原忠兵衛殿本田內藏殿松平三郎左衞門殿、續に町少し有、此間二町近く、横手に道有、前土手筋北へ行に、一町近く町有、一町程行ば市谷御門へ出る、

一、右の內諏訪兵部殿横手通西へ行に、續き酒井大膳亮殿大岡七兵衞殿柳澤孫左衞門殿、左渡部半藏殿、續きて町、此側一町、横手に道有、前の通西へ行に、左蜷川喜左衞門殿組、此屋敷二十間計行ば右へ道有、半町程兩側町屋、前の通西へ二十間計行て、南へ道有、半町計行て西へ行ば、左右の屋敷、喜左衞門殿組四ヶ所有、其間一町半近く、行當り內藤新二郎殿組、左右に道有、右へ五十間計行ば西へ道有、左菅沼藤十郎殿、右蜷川喜左衞門殿組、此間四十間、左右に道有、前の通すぐ道半町程有、又左に道有、

一、右の內諏訪兵部殿隣河野藤左衞門殿横手西へ行に、右早野八郎左衞門殿よこや、同つゞき伏見權八殿三浦宇左衞門殿、左松平左衞門殿山田六右衞門殿、此間一町、それより半町行て左右に道有、前の通西へ行に、左右のやしき菅沼藤十郎殿組なり、行どまりは寺なり、寳光寺といふ、此間二町半、左手に道有、

一、右の內間野八郎左衞門殿隣金田遠江守殿横手西へ行ば、つゞきて福井藤十郎殿、石原太郎左衞門殿、此間行どまりなり、

市谷より大久保まで よつやのならび北の方

一、市谷御門は、四ッ谷御門より六町程北なり、右見付より土手筋へ出て廿間斗北へゆけば、西へ道有、此方にゆかずして左に道有、右側橋口に東雲寺、町少し有て東圓寺、又町少し有て八幡宮有、石だん五十七段有、町少し有、是まで一町半、それより尾州中納言樣御屋敷四丁半ほど有、此內二町半程さきに、左一町町有、よこて同町、前のつゞき左四十間程町、左右に道有、右の道西側栃原八兵衞殿組、並に町少し有、此間二町半、前の通西へ行ば、右に松平上野介殿、此屋敷二町半近く有、左布施孫兵衞殿組屋敷一町半、それより西へ行に道二筋有、右の方松平上野守殿、ならび半町まちや、うしろに戸田相摸守殿組、横手に道有、前の道より左の道西へ行に、長谷川久三郎殿組宮毛半七殿組柴田三左衞門殿組、此間三町、南後にも道有、前の通西へ行に左右に道有、左拾間行て西へ廿間行に、右に板倉隱岐守殿、それより南へ廿間行て西へ行ば、

左早野七兵衛殿組、右布施孫兵衛殿組、此間五拾間程
行ば右に道有、左本田伯耆守殿横屋に付て、前の通西
へゆくに、半町行て左に道有、半町の餘行て東へ道
有、左善長寺養福寺清光寺、此間一町、夫より南へ道
有・一町近く行て左右に大久保右京殿組、東へ半町ほ
どゆきて岡野內藏殿組、安藤九郎左衛門殿組有、東て
に蜷川喜左衛門殿組、夏目杢左衛門殿組、南へ道有、
行當り町、左右に道有、四ッ谷筋なり、前の通西へ行
に、右側智教寺大久寺善教寺自勝寺、左町、此間二町
近く、右てに道有、右側に本田伯耆守殿坂部三十郎殿
組やしき、左田地、それより先に、右菅沼越中守殿、左
北條右近殿組、此間六間半、行當り尾張中納言樣御屋
敷、但よこて也、左右に道有、前の通西へ行ば、右は元
興寺、此間一町半過て左に道有、右に北條右近殿組、
此屋敷一町近く、横手の道西へ行に、左右に水野半左
衛門殿組、此間三町、左右に道有、前の通西へ行に、左
右に北條右近殿組、此間四町半、右にも道有、前の通
西へ行ば、右ては尾州中納言樣御屋敷也、二町半有、
一、右の內板倉隱岐守殿横手筋北へ行ば、右に町壹町
有、東へ道有、前の續き本村谷町兩側町、左手に道有、
前のすぐ道北へゆけば、西側に町壹町ほどあり、前の
左ての道西へ行ば、左手入込安龍寺、右町のよこや、
此間半町過て北へ道有、猶西へ行ば、右安藤九郎左衛
門殿組、左大久保四郎左衛門殿組、此間壹町半行て前
の通、それより廿間ばかり行て左に道有、前の通西へ
十間計行ば右に道有て、久貝宗左衛門殿組岩瀨市兵
衛殿組 榊原四郎左衛門殿組 小笠原太郎左衛門殿組、
此側三町半ゆけば左に道有、右に泉福寺寛長寺、つゞ
き畠、左に大草主膳殿、此間三町、前の通西へ行ば、右
町少し有、泉福寺、此間半町、行當り左右に道有、左の
道西へ行に、十間行て右てに道有、西へ行ば左は專念
寺、右に永福寺、兩側壹町程町、左の町四十間行ば南
へ道有、天神へ行、前の通西へ拾間程行ば、入込宮毛
彌次兵衛殿、是より左の道すぐに田道なり、
一、右の內大久保札の辻より東へ行ば、左側町少し有
て松平出雲守殿、此屋敷を過て右に織田小左衛門殿、
此道二町行て右に道有、同稻荷の宮有、前の通東へ一
町半近く行て右に道有、右小笠原右近殿、左今村傳三
郎殿、筋向に稻葉石見守殿、左本田美作殿武梨孫十郎
殿、右石川半左衛門殿よこや、此間四町、右に道有、同

石川半左衛門殿、左竹腰備前守殿よこや、水野半左衛門殿組二ヶ所有、此間二町半近く有、前の通東へ行ば、右竹腰備前守殿、左依田辨之助殿横田次郎兵衛殿よこや、右土屋忠二郎殿、此間二町、左右に道有、右の道東かど伊藤安兵衛殿榊原四郎左衛門殿久貝宗左衛門殿岩瀬市兵衛殿小笠原六左衛門殿、以上五組、此間四十間程有、前の通東へ行に伊藤安兵衛殿よこや、左松井助太夫殿地尻、此間四十間行ば右てに道有、前の續き五組、入込にてしれず、左多田八郎左衛門殿宇津作左衛門殿よこや、此間一町半近く過て、行當り尾張様御屋敷、左右に道有、

一、市谷見付筋、但見付より少し北へふりて有、此道西へ行に、左東雲寺よこや、續きて長體寺、門前に町少し有、長龍寺、右町のよこや、つゞき堀田五郎左衛門殿よこや、是より兩がは町少し有、左宗體院、右法藏寺、左町少し有て日向七郎左衛門殿飯岡權兵衛殿、右安藤彥四郎殿、此間三町、行當り尾張様、右へ半町ゆきて西へゆく、左尾州様御屋敷三町半程、右土取場一町の餘有て北へ道有、前の通右富永彥兵衛殿荻原彌右衛門殿菅新左衛門殿布施八郎兵衛殿、此間二町、左右に道有、前の通西へゆくに、右大久保九兵衛殿、左屋敷の地尻有て、松井助太夫殿、右三輪平右衛門殿、此間一町半、ゆき當り横田次郎兵衛殿、左右に道あり、

一、右の內富永彥兵衛殿横屋半町北へ行て西へ行ば、右側遠山七郎左衛門殿岡戸藤兵衛殿近藤八太夫殿本間十左衛門殿天野孫太郎殿、左屋敷の地尻、此間二町近く、左右に前の通西へ行に、左かど石東織部殿、つづき屋敷の地尻、右山中吉右殿門殿大久保孫市殿、此間一町半近く、行當り愛染院、左右に道有、

一、市谷見付より牛込近所まで土手筋、左側一町ほど町有、町中堀田五郎左衛門殿火消屋敷有、又右手に道有、前の通北へ行に、半町近く町有て西へ道あり、前の土手筋北へ行に、又半町の餘町にて、右てに道有、前の土て筋、是ゟ武家屋敷也、牛込見付まで二町半有、

一、右の內堀田五郎左衛門殿北横手を西へ行に、廿間斗左右に町のよこやありて、右に道有、土手筋裏通也、前の通西へ行ば、右水野對馬守殿横屋を通て、左入込長遠寺、ならびに町有、前の通西へ行に、右は水上五兵衛殿組、行當り高村助右衛門殿、すぐ道土取場へ出

る、右に道有、
一、右の町筋より北うしろ通西へ行に、左右に町の横屋廿間計有て左右に道有、前の通西へ行に、左水野對馬守殿よこや、右同長兵衛殿よこや、横屋續き田中六郎右衛門殿松平三郎右衛門殿松浦八郎右衛門殿、向左新庄與惣右衛門殿榊原清右衛門殿、右織田主計殿、左沖五郎左衛門殿内藤金彌殿、右春田伊之助殿、此間二町、左右に道有、前の通西へ半町行て、向ふ戸田七之助殿組、左右に道有、
一、右之町より北うしろ通西へ行に、其間廿間ほど町の横屋を過て左右に道有、前の通西へ行に火のばん町、右に道有、前の通西へ一町半近く行て右に道有、貳十間行て左右に道有、右北へ行に、右側町半町の餘有、左中程かど荒川長兵衛殿、廿間計行て右てに道有、東へゆくに、左御納戸拂方衆の屋敷、此間一町ほど行て、右へ拾間ばかり行て東へ行に、左松平半左衛門殿、右大竹勘右衛門殿、左松平清兵衛殿、右小笠原山城守殿、左松下次郎左衛門殿、右齋藤次郎右衛門殿、左長谷川權左衛門殿、右石野三左衛門殿、此間二町、左右に道有、右へ十間ばかり行て東へ道有、右淺尾彌八郎殿、高橋彌次兵衛殿よこや、左下枝忠兵衛殿、入込中根傳右衛門殿大久保孫兵衛殿、此間四十間、右に道有、同側高橋左次兵衛殿羽澤十郎左衛門殿石野小左衛門殿 松平新右衛門殿間宮宇右衛門殿、向に宇藤藤助殿加藤助三郎殿、此間二町近く有、行當り小笠原山城守殿、それより左へ廿間行て南へ行ば、右側神尾十兵衛殿 塚原三左衛門殿 山田平右衛門殿、向に小林長兵衛殿、此間一町の餘、行當り大番町に左右に道有、前の通東へ行に、左鈴木金右衛門殿筑紫主水殿よこや、此間二十間、右てに道有、同側筑紫主水殿松平藤兵衛殿宮城次郎八殿土屋忠兵衛殿伊東新右衛門殿松平三郎左衛門殿、同五左衛門殿、入込に小林金右衛門殿佐原三右衛門殿、前の通窪田新左衛門殿朝倉十兵衛殿、稻荷の小宮あり、此間四町、左右に道有、右火の番町、前の通南へ行に、左水野長兵衛殿、此間四十間程、左右に道有、前の通南へゆくに、左水野對馬守殿、此屋敷四十間程、左右に道有、右御納戸町へゆく、左市谷土手へ出る、此道筋土手うしろ通也、

江戸雀六巻目 終

江戸雀七巻目 従二御城一西北のすみ

牛込、ごんご橋、りうけい橋、北は此川筋を限にして、南は河田ヶ窪、ごゞめき、早稲田、土塚村まで、付ゑもん櫻の事 あな八まんの事

一、牛込見付は、市谷の見付より七町の餘北の方也、

一、見付筋より小橋有、渡りて西へ半町餘行ば、左右に土てあり、猶西へゆけば、左水野金兵衛殿よこや、右前田孫兵衛殿よこや、同五左衛門殿岩佐善兵衛殿、左山田庄兵衛殿山田庄右衛門殿、右かご國領半兵衛殿、此間一町、北へ道有、前の通筋へ行ば、右かご森川小兵衛殿、左金子金十郎殿三原彦兵衛殿同十太夫殿、右大岡五郎右衛門殿、左小宿市兵衛殿、右松平彦太夫殿、筋違に左右に道有、前の通西へ行に、右かご水野甚兵衛殿、左かご小角甚兵衛殿、右小野甚右衛門殿、つゞき町少有、左本多藤十郎殿、此間半町餘、南へ道有、前の通西へ行に、右入込行願寺、つゞき町少し有、左側肴だな、此間四十間近く、左右に道有、左の道右角曾根五郎左衛門殿、諸星内藏殿木村六右衛門殿川久保善左衛門殿、入込法照寺同法善寺、左御留守衆與力屋敷、次に天僧院、此間二町、右に道有、又すぐ道二町程有、前の見付筋より右の道北へ半町の餘行て、左照光寺、門前通に東へ道有、前の道一町の餘行て、左に茅屋清左衛門殿、向に小林十兵衛殿、前の見付筋西へ行ば、左曾根五郎左衛門殿よこや、右に藥師堂有、つゞき町、左三光院、右法善寺正元寺、左高泉院、つゞきに町有、此間一町半近く、左に道有、右側正僧寺泉僧寺、向に龍門寺つゞき寺の地尻、右側町一町有、長元寺、此間二町、筋違に左右に道有、すぐ道三町程行て、右に酒井修理殿裏門、つゞき大村因幡守殿伊丹大隅守殿、此間一町近く、南へ道有、前の見付筋西へ行に、右に町半町有て北へ道有、右に米津十兵衛殿、此間半町、行當り町、左右に道有、左北側に増山兵部殿、あかぎの明神の社有、此間半町、右之道左かご東學寺、此間十間程、横手に道有、半町程行て左町少し有、清立寺、又町少し有て天德院、是まで一町、門通に道有、天德院續きに町半町近く有、左右に道、又すぐ道有、すぐ道左かご石川兵右衛門殿、右伊藤長兵衛殿よこや、都筑次郎右衛門殿岡部權助殿、向河澤三右衛門



殿、此間半町、横手に道有、すぐ道馬場へ出る、前の見付筋西へ行に、左に町、右中程より町野壹岐殿、但此間五十間程、左右に道有、左の道同側岡野平兵衛殿浦野七郎兵衛殿大島角右衛門殿浦野權兵衛殿伊丹十兵衛殿岩堀平右衛門殿山口市左衛門殿、右は酒井修理亮殿屋敷也、此間二町半、前の見付筋西へ行ば、左酒井修理殿、此屋敷三町の餘、右町野壹岐守殿組、三枝平右衛門殿組、岡野内藏殿組、二ヶ所づゝ有、此側三町、右へ二十間行て西へ行に、左夏目杢右衛門殿組、此間一町、右に道有、前の通西へ行に、右側町つゞき前田了心、左に入込有、東側空伯寺、行當り明照寺、少し出りて、行ごまり大寶寺、前の本通右西生寺、此間一町、左の道同がは大願寺、筧新兵衛殿細井左次衛門殿、前の見付筋西へ行ばゑの木町、此所を過て左に道有、同側蜂屋半之丞殿組、降蓮寺專勝寺久照寺法蓮寺佛性寺、此間三町、前の見付筋北へ半町行て西へゆけば、右に半町近く町有、此あたりごゞめきと云、右に道有、おびくに衆の屋敷へ行、前の見付筋西へ行ば、半町程町、入込に左宗元寺、右町野壹岐守殿、前の見付筋西へ行ば、左相影寺地尻、つゞき少し町、右宗元寺よこや、續き少し町、此間一町半、左右に道有、右之道半町程行て、右賢照寺、横手に道有て、御比丘尼衆の屋敷有、向に酒井修理殿、前の見付筋西へ行に、左町、右に十善寺、續きに町有、左に大要寺、此あたり早稻田と云、此間一町半の餘、行當り正元寺、北へつゞきて菅沼藤十郎殿、左へゆく道、同がは廿間ばかり町有、すぐ道御座候へ共先に有、

一、牛込見付の土てより、市谷の方へゆく道、右側水

野釜兵衛殿丸藻五郎兵衛殿、入込に北より南へ、岩間源三郎殿小栗五太夫殿間宮七郎兵衛殿鈴木又右衛門殿、前之通へ出て南へ行に、中根九兵衛殿松平所左衛門殿、此間一町半餘、横手に道有、前の通南へ行に、右鈴木平兵衛殿小林吉太夫殿、此間四十間計、横手を廿間ばかり行ば北へ道有、左側鈴木金右衛門殿よこや、牛袋勘右衛門殿、行どまり戸田左衛門殿、此間一町、前の土手筋南へゆく道、市谷之内に書申ゆへ爰に畧す、

一、右之内松平所左衛門殿よこや通西へ行に、左鈴木平兵衛殿よこや服部采女殿市川太衛門殿、右窪田與右衛門殿、横手に道有、左若宮八幡の宮有、行當り鈴木又七殿横やに付て行に、左依田友右衛門殿丸藻三郎衛門殿、行どまり元の通へ出て、左逸見五左衛門殿戸田左門殿佐野六右衛門殿、右前田八右衛門殿よこて有、爰を御小人町と云、左磯尾三郎兵衛殿神田三右衛門殿、右片岡兵左衛門殿三宅半七殿蝦夷又左衛門殿、是迄二町半、それより北へ行に、左榊原四郎右衛門殿五十嵐仁兵衛殿岡部甚兵衛殿よこや、右岡部市兵衛殿よこや、此間半町、行當りの道牛込見付筋、此通半町ほど西へ行て左に道有、半町ほど小坂上りて、左正了寺高照寺、續きに町少しあり、右朝國又右衛門殿諸越庄兵衛殿、向野村伊太夫殿渡部仁右衛門殿よこや、此間一町半、左に道有、同かど仁右衛門殿竹内三郎兵衛殿、右井戸新右衛門殿組、横手に道有、前の通南へ行に、左荒川長十郎殿原田七郎兵衛殿、右牧野傳藏殿組、横手に道有、前の通南へ行に、左後藤淸左衛門殿鈴木長左衛門殿下枝忠兵衛殿、右長谷川藤左衛門殿横や、此通是まで二町半、筋違に左右に道有、左の道は前註す、故爰に略す、

一、右之内後藤淸左衛門殿前の通西へ行に、右牧野傳藏殿、但、左屋敷の地尻、此間行て左右に道有、左の道同がは町少し有て御納戸拂方衆やしき、此間四十間、右之道四十間兩側町、よこてに道有、すぐ道、兩側町、よこやに道有、それよりすぐ道半町程有て東へ道有、前の通西へ行に、左荒川長兵衛殿よこや、戸田七之助殿地尻、右町のよこや、つゞき松平彦兵衛殿中澤主税殿よこや、左市川與三右衛門殿、此間一町半、左右に道有、右之道同かど中澤主税殿、左稻垣數馬殿、右松平長三郎殿、此間一町、前の通西へ行に、左大井三郎

右衛門殿内藤七郎兵衛殿、右稲垣數馬殿よこや、つゞき朝比奈次兵衛殿本田助十郎殿、此間一町半、左右に道有、前の通西へ行に、左石原惣左衛門殿飯塚半右衛門殿、向に六島孫右衛門殿、左菅與三兵衛殿、右鈴木次右衛門殿、左久留半右衛門殿中島五兵衛殿、右小林佐次兵衛殿勝屋彌次右衛門殿、左石野七郎左衛門殿、此間二町近く、左右に道有、前の通西へ行に、左かご間宮二郎兵衛殿、つゞき屋敷の地尻、右岩間八郎左衛門殿地尻、よこてに道有、前のつゞき牛込南寺町前、此間一町の餘、左右に道、右之道西側本庄寺高德寺、入込に伊藤平右衛門殿、此間一町近く、左の道廿間ばかり行て西へ道有、右側生雲寺長生寺善能寺、左愛染院よこや、つゞきに法正院正榮院、向に久承寺、左長根寺、右妙傳寺、左月景寺、右佛現寺、此間一町半、行どまりなり、

一、右之内後藤清左衛門殿より北へ一軒隣荒川長十郎殿、前の通西へ行に、左牧野傳藏殿組、右井戸新右衛門殿組、此間二町行て左右に道有、前の通西へ四十間町のよこや行て、右手に道有、前の通西へ行に右二十間計町や、左松平長三郎殿よこや、此屋敷を過て左右に道有、前の通西へ行に左稲垣數馬殿よこや、小奈谷市右衛門殿千村八左衛門殿水野新兵衛殿、此間一町半、左に道有、前の通西へ行に、左朝比奈新九郎殿よこや、山田清左衛門殿山下又助殿岡部四郎五郎殿山田宇之助殿、此間二町、左に道有、前の通西へ行に、左かご岩間四郎左衛門殿、此屋敷半町、筋違に左右に道あり、前の通二十間行て、行當り八幡小宮、左右に道有、

一、右之内荒川長十郎殿より北へ一軒隣渡部仁右衛門殿通西へ行に、左井戸新右衛門殿組、右宮城監物殿組、左右に道有、前の通西へ行に、左四十間町のよこや、右阿部源五左衛門殿、町少し有て天龍寺、左に道、前の通西へゆくに、右天龍寺隱居有、つゞきに稲荷の小宮有、此間一町、左に道有、前の通西へ行に、右半町の餘町屋、よこてに道有、南へ十間行て西へ行に、右正興寺、此側二町、左天龍寺のあたりより是まで四町、此内に宮毛半七殿組渡部吉左衛門殿組、又宮毛半七殿組のやしき有也、左手に道有、すぐ道二十間行て左に道有、南寺町へ行、前のすぐ道又二十間行ば、右に道二筋あり、此あたり川田が久保といふ、前の通す

ぐ道を行に、左に祿泉寺、原町とて一町の餘有、右高國寺、阿部伊豆守殿よこや、此間二町、右に道有、左水野對馬守殿組、入込なり、前のすぐ道西へ行に、兩側一町ほど町なり、右に高國寺、此間二町、左右に道有、左の道右かど泉法院、前のすぐ道西へ行に、左泉法寺よこや、右鳴瀬豊前守殿、此やしき一町、よこてに道有、前のすぐ道西へゆくに、右御破損手代衆やしき、つゞき稲荷の小宮有、稲垣藤十郎殿、左畠、此間二町、右手に道あり、前のすぐ道西へゆくに、右尾州中納言樣御屋敷四町、此間を通りて、それより田道を二町行ば、右手に道有、前のすぐ道二町の餘行て、御たんす町、左に善立寺、是より三町の餘行て百人町、それより四町程ゆきて右に圓勝寺、ゑもん櫻此所にあり、

右衛門櫻の事

一、右衛門櫻は、そのかみ柏木のゑもんの督、ちとあやなきふるまひありとて、少しのうち此所へ流され給ふ、その時つれ〴〵の餘りにや、此櫻をうへ給ふが、程なく都へ召かへされ給ふとなり、花はしべなく、匂ひ四方にくんじて花のもとを立さりがたし、此あたりを柏木のゑもん居給ふ所とて、柏木むらといふとかや、

（ゑもん櫻）



下葉よりゑもんざくらの花の袖

一、右之内川田が久保三宅半七殿組の屋敷より西へ道二筋有、左の道は先しるす、扨右の道北へふりて行に、右側町少し有て、永正寺、大神宮社有、つゞき法忍寺、此側一町、左小野半左衛門殿組、右に道有、廿間行て、西北は水野半左衛門殿組、前の通西へ行に、左小野半左衛門殿組、此やしき一町、右四十間計町、今廿

間行間道二筋有、前のすぐ道西へゆくに、左寺の地尻よこや、右稻垣藏人殿志水甲斐守殿、町少しづゝ有、半町の餘なり、此道二町半の餘行て左に道有、貳拾四五間行て行あたり法正寺、東へ廿間行て南へ又半町行ば東へ道有、此側に千念寺、行當り長賢寺、此間半町の餘、横てに道有、前の通西へ行に、左感通寺南正寺よこや、五十間計行ば右に道有、一町程行て左右に道有、左の道南側に神習寺、兩側町、北側のはづれに比丘尼衆やしき有、此間一町、右之道同がは正法寺、秋山十右衞門殿組、左寺町屋の地尻有て、左入込に摠下寺、右に辨才天の宮有、是まで四町、すぐ道前に書置申、左右に道有、前の通十間西へ行ば左に道有、右がは來迎寺、小川三左衞門殿、泉元寺、工藤市左衞門殿、向に南性寺、此間一町、すぐ道有、前の通西へ行に、兩側町、馬場下よこ町と云、左西よりに西方寺、入込に五智如來、此間一町半、右に道有、前の通西へ行に兩側町、馬場下町左西よりに寺有、正覺寺、橋わたりて左右に道有、左の道右側穴八幡宮、左に少し町有て八幡太神宮稻荷三社あり、つゞき町、此間一町半、行あたり尾張中納言樣御やしき、北へ道有、前の通北へかへりて、右の道北へ行に、左法善寺、右入込權現の社有、半町程行て左南側に第六天有、北側とつか村、前の道筋二十間北へ行て、猪飼五郎太夫殿、此間三町半、前の通北へ行に、右法善寺、つゞき町、三町程行て高田馬場へ出る、此馬場二町程有、西東に有、此馬場過て北へ道有、二町近く行て、左七面大明神社有、一町程行て江戸川、小橋有、すぐ道有レ之といへども、此川ぎりゆへしるすに及ばず、

穴八幡宮

一、光松山の八幡宮は、その上寛永十三年丙子にあたりて、征夷大將軍源家光公の御弓大將松平新五左衞門尉直次に與力せしむべく、弓の稽古いたしけるが、それ八幡大菩薩は源家の氏神、弓矢の守護神なれば、此所に勸請し、その前に的山をつかせて弓をまなぶべしといひ合て、旣に言上に及ぶ所に、寔に天道の惠みにや、忽ち此地を望得て喜ぶ事限りなし、其折節山鳩三羽飛來て松の枝にとゞまる、是寔に八幡大菩薩の、我等の誠の心ざしを神も納受ましく〳〵、即ち御影向有事、何の疑か有べきやと、人々奇異の思をなしてかりに小社を造りける、又常磐なる松二もと有け

るを、神木と定めつゝ、鳥居を立てあがめたてまつる、それより六年の後、癸の巳の年の夏、威德院の良昌僧都、當國中野の寶泉寺に有けるを、招きて社僧とし、法味を備へ奉る、此僧も本は周防の國の人、山口の八幡の氏人と也、幼なくして毛利家の侍榎本の某に仕へしが、榎本身まかりければ、高野山に登りて十九にて出家をし、寶性院の法印春山の弟子となり、一記の行法學道をときて、卅一歳の時より諸國を修行しけるに、さま〴〵のふしぎ度々あり、然るに秋七月の頃人人談合して、草庵を結び住せんとて、此山の麓の地形をひきならして、上の山一丈ばかり堀崩してみれば、山の底に小さき穴有、內に御長三寸計のからかねの佛像、石の上に座しておはします、その前に小さき瓶一つ有、左右に人の骸骨多く有けるを、人々取棄させける、かの佛像をよく見るに世の常ならざりければ、良昌僧都加持し奉りて御づしに移し奉る、道俗男女此よしを聞傳へて群集して拜み奉る、八月三日に、將軍家に御若君御誕生有、良昌僧都修行の道すがら又當國曾司谷に居ける時分に、八幡大菩薩御夢想有けるに少しも違はず、誠に奇特の事なり、良昌愈有難き



(穴八幡)

事に思ひて神前に參り、御神樂をさゝげ祝言を申てかくぞよみける、

おひそふるちとせの松も千尋なる
かげさかゆる御代はつきせじ

とつらねける、同八月九日に、社頭のめぐり一町四方に繩ばりして、地形をば引開き、本社をば神木の松のもとに遷し、鳥居を石淸水の上に南向にたてかへつつ、八重垣ゆひまはしけるを、加州の大守黃門より數

百の人數をつかはし給ふ、此故に日數いくばくならで、同じ月の十四日に、朝淸めして遷宮の禮行ひけり、此日又加州の大守より酒肴餅など山の如く送りて賑し給ふ、次之日は放生會の觀式とりおこなふ、別當社僧は、曉かけて振る鈴の聲空にひゞき、神子巫覡は、朝まだきより神樂の音雲に聞ゆ、庭の面に竈をたてゝ御湯を奉る、松平新五左衞門尉は、其與力同心を引ぐして、的山の邊に幕をはり棧敷を構へたり、假初の宮居なれば、八的百手等はことしかるべしやとて、只だ式正の小的をたつる、神的は射法なれば、小池の某が子十二歳にして仕けるが、又其有さま人の目を驚しけり、其夜神前にして風流の踊有けるに、亥の刻計に、神木の松の梢より提灯ほどなる光りもの飛出て、社の上に落侍り、諸人拜み奉りて靈驗のあらたさを尊みけり、然るに此山の腰より、淸き滴りの水流れとゞまる、さしも潔き水なりければ、ほりためられしに、限なく湧出たり、誠に石淸水の名にしおふ奇特ならずや、昔より此所を阿彌陀堂山といふよし、それ八幡の本地は彌陀なり、これ和光垂跡の方便なるべし、是よりして山の名を改め、神木の奇特によそへて光松山放生寺と付られたり、されば御詫宣にも、人の國より我國、他人より我が人とて、あながちに本朝を惠み、ことには氏人をあはれませ給ふ事、いづれの神よりすぐれたり、くはしくは當社の緣起にあり、

八まんのしげみや鳩の夏木だち

一、牛込見付よりどんど橋迄の土手筋屋敷付、二町半程の間なり、此通北へ行に、左側蒔田孫兵衞殿齋藤忠右衞門殿曾根五兵衞殿、此間一町近く、西へ道有、前の土手筋北へ行に、半町の餘まきがし有て、上村宇右衞門殿蜂屋喜右衞門殿、此間一町、よこやに道有、前の土手筋北へ行に、左木村久右衞門殿よこや半町、行あたりどんど橋、西東にかけたり、

一、右之內蜂屋喜右衞門殿よこやを二十間ばかり西へ行ば、左へ道より南へ行に、南の入込三島淸左衞門殿、右側永井彌十郞殿朝倉平十郞殿山田半右衞門殿梶川口兵衞殿、藤井善右衞門殿、左屋敷町の地尻、此間一町、行當り曾根五兵衞殿、左右に道有、左土手へ出る、右之方西へ行に、同河合善右衞門殿よこや、左朝比奈瀨兵衞殿伊子五兵衞殿よこや、右かど永井權右衞門殿、此間一町、左右に道有、前のすぐ道西へ

行に、左市川甚兵衛殿横や、同つゞき秋山源太左衛門殿、前の通、右横山藤左衛門殿竹内五左衛門殿、左向井千之助殿、かど大川與三右衛門殿、右鈴木龍千代殿よこや、此間一町、左右に道有、前のすぐ道西へ行に、右松平次郎右衛門殿よこや、間宮市左衛門殿、左酒井甚左衛門殿、此間四十間、北へ廿間行て西へ行ば、右に道有、西側自正院、前の通西へ行ば、右側中村平右衛門殿泉増寺森川助左衛門殿布施惣十郎殿須田喜左衛門殿、左行願寺地尻、此間一町、行當り正高寺、左右に道有、

一、右之内永田權右衛門殿よこて通北へ行に、左横山藤左衛門殿よこや、深屋喜右衛門殿よこや、此がは一町、右永田權右衛門殿よこや、つゞき内藤九左衛門殿曲淵助右衛門殿 蜷川彌太郎殿向に飯室源左衛門殿、右側阿佐尾忠庵森川傳右衛門殿、此間二町、西へ道有、此筋曲淵助右衛門殿表門より西へ道有、左かど深屋喜右衛門殿、右かど伊賀善左衛門殿、左大久保平三郎殿中山勘右衛門殿、右美濃部三郎左衛門殿、つゞき町一町、左に道有、右入込成就院、西への道、左西尾彦介殿、右がは町半町程、左右に道有、前の通行當り赤木明神社、並に八幡の宮あり、左の方入込無量院、是まで、

一、どんど橋りうけい橋かし通、左側かど木村久左衛門殿齋藤小兵衛殿 久松太左衛門殿 吉田太右衛門殿、此間一町の餘、横てに道有、前のかし筋北へ行に、左かど秋山傳兵衛殿天野孫八郎殿小栗庄右衛門殿、右にりうけい橋有、前のつゞき山本藤右衛門殿、曲淵孫兵衛殿 此間一町半の餘、よこてに道有、前のかし通北へ行に、左かど蜂屋三郎左衛門殿同十郎右衛門殿同彦兵衛殿島彌左衛門殿、かど敦賀兵部殿、此間二町あり、是より西へ付てかし筋、兵部殿よこや、稻葉清左衛門殿よこや、此間一町の餘、前のかし通西へ行に、左本間傳四郎殿よこや、半町過て南へ道有、前のかし筋西へ行に、左大久保三之助殿秋山十郎左衛門殿、此間一町、よこてに道有、前のかし筋西へ行に、左馬場道、かど加藤甚五左衛門殿神保甚五兵衛殿佐野與右衛門殿よこや、此間一町、表門通に道有、前のかし通西へ行に、左堀七郎右衛門殿よこや、石野七郎左衛門殿丸山兵左衛門殿、此間一町、横手の通右側一町町屋、色々うり物有、左側大久保八郎右衛門殿大岡新

五左衛門殿余子仁左衛門殿よこや、左右に道有、左の方同がは仁左衛門殿、右かど門奈半右衛門殿川野小右衛門殿、左森川次郎太夫殿、かど鈴木市郎兵衛殿、右かど伊奈五左衛門殿、此間一町、左右に道有、前のすぐ道東へ行に、左大澤三郎左衛門殿よこや、右長手五左衛門殿よこや、宍野勘右衛門殿、左野間五左衛門殿、右かど小關武助殿、左かど青柳半左衛門殿、此間一町、行あたり馬場、左右に道有、前の通南へ行に、右側一町うり物色々有、左側門奈半右衛門殿よこや、多奈武喜左衛門殿根岸又八殿太田長助殿よこや、左右に道有、前の通南へ行に、左側かど戸田七郎右衛門殿三田杢之助殿、此間半町、左に道有、前の通南へ行に、左側かど大岡孫右衛門殿河野九郎左衛門殿、少し曲りて南へ一町行に、此通西へ行に、左渡邊半三郎殿組、此間二町の餘過て、右に道三筋有、同側かど青柳勘兵衛殿、つゞきに町半町、此間一町、よこてに道有、東側に渡邊源藏殿、此間半町の餘、此道三町程つゞきてあり、左右に道有、あいに小橋二つ有、前の通西へゆくに、右水野十兵衛殿、雲照寺、入込西側に夏目杢左衛門殿組屋敷有、前之通西へゆく、左にも道有、すぐ道行あたり西松寺、行どまりなり、此間一町半有、

一、右之内りうけい橋南筋向、吉田太右衛門殿よこて西へ行に、右秋山伊兵衛殿横屋、此間四十間通りて、行あたり萩原傳藏殿よこや、南へ十間ばかり行て西へ道あり、右かど傳藏殿、左かど天野兵右衛門殿、右東かど藤片平九郎殿、此間四十間、横てに道有、前の通西へ行に、左小佐手杢之助殿、成就院地尻、右坂氏清右衛門殿よこや、半町通りて左右に道有、前の道西へ行に、右原田彌右衛門殿よこや、半町通りて行あたり眞田久太郎殿よこや、左右に通有、右へ半町行て、左右に道あり、右半町の內、南側かど大村藤右衛門殿よこや、北かど野尻七兵衛殿、左の方西へ行に、左眞田久太郎殿鴨宮庄右衛門殿、右小笠原金兵衛殿松野文右衛門殿、右松下善太夫殿淺井權兵衛殿、左花田次左衛門殿、此間一町の餘、よこてに道有、同つゞき酒井七郎左衛門殿、此間半町、前の通西へ行に、右かど伊藤長兵衛殿、左かど筒井源之丞殿、此間廿四五間、左右に道有、前の道西へ行に、左町のよこや、右石川兵右衛門殿よこや、品川六郎右衛門殿よこや、左に八幡の小宮、並に十王堂有、此間半町、右に道有、前の通

西へ行に、鈴木筆助殿よこや、今井友之助殿赤之宮庄九郎殿大岡孫右衛門殿よこや、右三田杢之助殿よこや、此間一町、左右に道あり、すぐ道なし、

一、右之内吉田太右衛門殿より、北へ一町半かし通行て西へ道有、左曲淵孫兵衛殿よこや、右蜂屋三郎左衛門殿よこや、三橋九左衛門殿よこや、左帶甚五兵衛殿、此間半町、左右に道有、但右は入込なり、東側に三橋九左衛門殿、左の道西側かど帶源五左衛門殿、前の道西へ行に、左帶源五左衛門殿よこや、曲淵傳右衛門殿よこや、右かど中川三郎兵衛殿早野惣左衛門殿よこや、此間半町の餘、左右に道有、前の通西へ又半町の餘行に、左右の屋敷よこや、行當り野尻七兵衛殿、左右に道有、

一、りうけい橋かし通、行あたりのかど敦賀兵部殿、よこてを通りて又稻葉淸左衛門殿よこや、表門通へ出て南へ行て、左かど稻葉淸左衛門殿、右かど本間傳四郎殿坂氏淸兵衛殿、左楠正庵、右島角左衛門殿、左林太兵衛殿、右大谷太郎左衛門殿、左間野九郎兵衛殿西川與左衛門殿、右森川庄左衛門殿、左かど間野惣左衛門殿、右かど西村又右衛門殿、此間二町餘、左右に道有、前の通西へ行に、左かど曲淵傳右衛門殿、右蛭野淸右衛門殿小栗又八殿、つゞき屋敷の地尻、左藤方平九郎殿よこや、此間一町の餘、左右に道有、

一、右之内本馬傳四郎殿西うしろ南へ行に、右かど大久保源四郎殿、左神尾孫兵衛殿、右細井惣左衛門殿鳴瀨藤太夫殿、此間一町、右に道有、北側かど後部九郎右衛門殿松崎宗左衛門殿、此間半町、右に道有、前のつゞき左かど村越七郎左衛門殿、左戸田孫六殿淺井伊右衛門殿、右多澤又兵衛殿、左かど半兵衛殿、右かど松田太左衛門殿、此間一町、行あたり馬場、左右に道有、右之方東側中程に大竹勘右衛門殿、前の通南へ一町近く、右に道有、右側鴨宮次左衛門殿戸志十兵衛殿、左夏目藤右衛門殿、右大久保源五左衛門殿、左山本九兵衛殿、右山高杢右衛門殿、左落合三郎左衛門殿、右かど鈴木八郎右衛門殿、左かど余子半助殿、此間二町近く、行あたり馬場、左右に道有、前の通西へ行に、右かど生野新五郎殿、久保田小左衛門殿、此間廿間計行て左に道有、前の通西へ行に、左かど竹本八左衛門殿落合九郎右衛門殿、右かど野尻七兵衛殿よこや、十四五間行ば西へ道有、前の通西へ行に、右か

ご大村藤右衛門殿、左間宮惣十郎殿吉田藤藏殿、右北かど原田彌右衛門殿、左北かど坂氏淸右衛門殿、此間半町、すぐ道赤木明神へゆく、左右に道有、

一、右之内余子半助殿よこてを南へ十四五間行ば西へ道有、右は馬場なり、左かど淺葉三右衛門殿よこや廿間ばかり有、筋違に左右に道有、前の通西へ行に、左かど浦橋平右衛門殿、右かど二本傳三郎殿、左東かど遠山權兵衛殿、右東かど加藤平助殿、此間一町、筋違に左右に道有、前の通西へ行に、左側半町程町、右かど飯田兵左衛門殿靑木久右衛門殿、東かど太田長七殿、左戸田七郎右衛門殿よこや、此間一町、左右に道有、前の通西へ行に、兩側町のよこや、此間四十間、右に道有、一町兩側町、東がは中程に靑木小左衛門殿やしき有、その先に又兩側の町一町有、はづれに橋有、すぐ道小石川へ出る也、此川を限りなるゆへ餘は略す、前の通西へ行に、左に稻荷の宮有、町少しあり、此間廿間、行當り傳澤寺傳中寺、右之道西側行どまり長修院、左への道渡部源藏殿へ行なり、

江戸すゞめ七巻目終

江戸雀八巻目　從二御城一北之方

小石川見付より、どんど橋、りうけい橋、小日向、關口、すいどう村、高田、雜司谷、東は水道橋筋を限て、傳通院近邊、又はすがも村までの事、

目白不動之事　白山權現之事　傳通院之事

一、小石川見付は、牛込見付より五町半之餘北東なり、見付より北へ出る小橋あり、渡れば左右に道有、向は水戸宰相樣御屋敷、見付より左の道かし筋、小橋渡りて右側に屋敷尻一町の餘有て、東かど小栗忠左衛門殿、此間二丁近く、よこてに道有、前のかし通西へ行に、右阿部八之丞殿、此やしき四十間計、よこてに道有、西側に岩瀨市兵衛殿よこや、本多彥九郎殿、野間忠右衛門殿、右屋敷のよこや地尻、此間一町半、左右に道、又すぐ道有、前の通かし筋西へ行に、右側かど岩瀨市兵衛殿內藤加兵衛殿、此間一町、行當りどんど橋、內藤加兵衛殿、よこて通、かし筋中程に中山藤兵衛殿生見市左衛門殿、南かど大久保孫兵衛殿、此間二町近く、横てに道有、左にりうけい橋、前のかし

通北へ行に、右側かど大草半助殿落合彌太夫殿水野孫助殿齋藤惣左衛門殿野間市之助殿佐々喜左衛門殿阿部勘左衛門殿間宮喜左衛門殿吉田新左衛門殿高野惣五郎殿、此間三町、是より西へ付て島角左衛門殿渡部源左衛門殿内藤飛驒守殿、此間一町近く、よこてに道、前のかし通西へ行に、右齋藤賴母殿荒木市左衛門殿よこや、此間一町、表門通に道有、つゞき小奈谷伊左衛門殿、左小野忠左衛門殿よこや、竹島忠右衛門殿、右長田平十郎殿、左都筑加右衛門殿、右東角森川孫右衛門殿、右西かど木村伊右衛門殿、此間一町、行あたり近藤勘右衛門殿組、左右に道有、前のかし通西へ行に、右西かど小野忠左衛門殿阿部甚五左衛門殿小奈谷與左衛門殿よこや、此間一町、表門通に道有、つゞき安西次郎兵衛殿天野五郎左衛門殿、左宮城孫六殿よこや、神保源五左衛門殿同又左衛門殿、此間一町、行あたり近藤勘右衛門殿組、左右に道有、前のかし通西へ行に、宮城孫六殿榊原八左衛門殿松田七郎右衛門殿、此間一町、よこてに道有、つゞき伊藤善左衛門殿堀田太左衛門殿よこや、宮毛市右衛門殿淸水庄右衛門殿右東かど小出勘右衛門殿、左西かど太田半左衛門殿、此間一町、行あたり近藤勘右衛門殿組、左右に道有、前のかし筋西へ行に、右堀田太左衛門殿前田五郎右衛門殿、此間一町近く、よこてに道有、五郎右衛門殿よこや、つゞき窪田源兵衛殿榊五郎左衛門殿荒木五右衛門殿よこや、青柳新五兵衛殿板倉惣右衛門殿、右東かど杉浦十右衛門殿、左美濃部庄右衛門殿よこや、此間一町、左右に道あり、左の方南側に竹島一郎右衛門殿、前のかし通西へ行に、右荒木五右衛門殿下山忠兵衛殿小林甚右衛門殿、此間一町、左に小橋有、よこてに石野六郎右衛門殿、それより西へ道有、兩側町半町が間なり、左右に道有、左小橋有、牛込へ行、右にも小橋有、前の通西へ行に、一町が間町、水道町といふ、左右に道有、左の道に小橋有、前に永見權七殿組、此やしき牛込の方に書申べき所なれ共、道筋なき故爰に記す、右にも小橋有、前の通西へ行に、兩側町半町程なり、一町程行て筋違に、左右に道有、同小橋有、水道町右西よこてを二十間行に、小橋渡りてすぐ道二町半行ば、左に山高宇右衛門殿組、石津九兵衛殿組やしき有、此あたり小びなたといふ、前の通小橋より左の道川へつきて西へ行に、右側入込久世

大和守殿、専願寺元國寺、此間半町の餘、つゞき田地五十間程、右之道堀に付て一町程行て、西へ入込に八幡の小宮有、前の通西へ行に右傳明寺、此間十四五間、行あたり長高寺、右へ十間計曲りて西へ又十間程行に、右に道有、前の通西へ行に、右町少し有て、祿泉寺貞泉寺、並に了國寺、八幡の小宮有、つゞき松平刑部殿、此間一町、左てに鳥居有、目白不動へゆく、前の通西へ半町計行に左に道有、目白不動なり、又半町程西へ行に、右がは半町程町也、左入口の入込に毘沙門堂、奥に東向に愛染堂有、ならび淺岡七兵衞殿、又西之入込に淺岡權三郎殿、又少し西に達華寺、此間一町近く、左に道有、一町近く行て右に道有、西南かど前田半助殿、すぐ道水道水上の關こへ行、前の通西へ行に、右入込に清水牧之助殿、夫より半町之餘兩側町、筋違左右に道有、右之道一町程行て北へ道有、左西北がは渡部九助殿、行あたり郡三郎太夫殿、前の道西へ行に、右九助殿家尻、右に道有、前の通西へ行に、半町程行て、左入込黒田信濃守殿、右町少し有て三好備前守殿神尾若狹守殿堀宮内殿、此間二町、横手に道有、南西へ二町半之餘行て左右に道有、左かど川端、曾我伊賀守殿、前の通西へ行に、右に道二筋有、此内西之道二町半程ゆきてすいどう村、此村のうら、北のはづれ藥園有、此村より西東へ道有、前の通西へ行に、右畠、左増山兵部殿稻垣信濃守殿、此間三町、右に道有、曾司谷へゆく、前の通西へ行に、左入込、西側中川半左衞門殿表門有、前の通よこてを一町半の餘行に、右に道有、東の方への道御藥園へ行、前の通西へ十間計ゆくに、右に少し町有て横手に道有、曾司谷へ行、前の通西へ行に、右側一町程町有、中程左に道有、右はづれに北へ道有、此あたり高田といふ、前の通西へ半町の餘田道行て、左右に道有、前の通西へ行に、右側半町の餘町なり、猶西へ行道兩方畠なり、前の道の内に左右に道有、左の道二町行て西へ道有、北かどに金乘寺、前の道一町ほど南へ行に、左かど南窓寺藥師堂有、手前筋違に左右に道有、藥師向に氷川の明神小宮有、一町程行て橋有、面影橋といふ、すぐ道高田馬場へ行、前の通より右之道二町程行て右に道、北東へつきて一町ほど行ば本宗寺、又つゞき右に道有、北へ一町計ゆくに兩側茶や、鳥居あり、行あたり北側茶や、一町ばかり西にさり居又有、稻荷の宮有、廣き地内

也、前の通西北へ一町半程行ば、左に鬼子母神の宮有、名作木像也、右に道有、前の通北へ半町行て、東へふりて一町程行に、行あたり法妙寺、開山は日源上人、本堂は三間四面なり、是は飛騨内匠が作りし堂也、蓮師御影は、鎌倉大佛師式部卿權僧都、百日が間精進潔齋して作り立る所也、右一乘坊よこや、少し北左手專修坊、一乘坊、門前通東へ半町ゆくに、左入込、西側に賢明坊、前の通東へ行に、要西院法忍坊本行院、此間半町、東へ一町程行て筋違に左右に道有、但左の道板橋への道也、

目白不動

一、豐山新長谷寺目白不動明王は、尊體は弘法大師の御作、荒澤鑽火(あらさはきりび)の不動明王、御長八寸の尊像なり、當寺の開山は秀山僧正なり、其上弘法大師湯殿山のうら荒澤河におこなひ給ふとき、まさに大日如來忽然と現はれ給ふに、たちまち不動の御形と變じ給ひ、みづから手に持給ふ利劔をふりて、左の御手をはらひ給へば、火煙さかりにもえ出たり、大師すなはち此尊體をうつしたまへり、類なき佛體なれば、秘佛にして開帳なし、本躰は御厨子の前に立給ふ、明王を目白の

(目白不動)



不動と號す、湯殿の行人鑽火を出す事此山より初れり、されば法界體性智の德用は、本有舍那の妙理を示し、阿字三摩耶の觀相には、瑜伽上乘の究竟をあらはし、護摩灌頂の壇の上には、災難を他方にはらひ、祈念加持の床の前には、福壽を自家に成す、寔にあらたの佛體なれば、人みな諸願を成就すとなり、

お不動の利劔はしものつるぎかな

一、小石川見付より、左へかし筋を二町半行に小橋

有、渡りて半町北へ行ば西へ道有、左かご大膳亮殿、右がは水戸宰相樣御屋敷、百間長屋と云、二町程つゞきて有、左阿部忠右衞門殿中根左兵衞殿靑木遠江殿、此間二町近く、よこてに道有、西南かご小堀三郎兵衞殿、前の通西へ行に小堀三郎右衞門殿よこや、東かご宮田市右衞門殿、右かご阿部三右衞門殿、此間半町の餘、左右に道有、右之道同かは阿部三右衞門殿よこや、內藤加兵衞殿、左側かご島與右衞門殿木村庄右衞門殿、此道二町行ば小橋有、行あたり天神の宮有、前の通西へ行に、右島與右衞門殿よこや、半町の餘、左野間忠右衞門殿よこや、松平小左衞門殿、向かご山下五郎左衞門殿、大草半助殿よこや、左大久保孫兵衞殿よこや、此間半町の餘、行當りりうけい橋、山下五郎左衞門殿橫手を北へ行に、左細田彌右衞門殿、右屋敷地尻也、左同斷、此道二町程行に、左入込に稻荷小宮有、すぐ道北へ二十間行て、左右に道有、前の通北へ行に小橋有、此橋渡りて北へ行に、半町兩側は町、左右に道有、右天神へ行、左西へ行道傳通院なり、前の通すぐ道、行あたり水野彈正殿、右に道有、前の小橋筋水道に付て西へ行に、一町半程行て、右に齋藤賴母殿火消屋敷、前に小橋有、夫より一町半行て筋違に左右に道有、右之道には小橋有、前の通西へ行に、左近藤勘右衞門殿組、右に金剛寺、此寺は太田道灌建立の寺なり、木像有、用山大和尙の開基也、まへに小橋有、同町少し有、前に小橋有、同龍感寺前に小橋有、同正念寺、橋同斷、本多飛驒殿、橋同斷、此間二町近く、右手に道有、小橋渡りて少し北へ行ば、左に入込有、北側に永見權七殿組、南てにいなり小宮有、すぐ道御たんす町へ行、前の通西へ行に、右入込秋山十右衞門殿、前に小橋有、照明寺、橋同前、根來小才次殿、橋同斷、左に近藤勘右衞門殿組、此所まで三町の餘有、それより前の方は屋敷尻也、小才次殿つゞき日達寺、前に小橋有、左町の家尻、右がは氷川明神、橋同斷、善念寺、橋同斷、此間一町、右に道有、すぐ道は三町程有、但水道町うしろ筋なり、善念寺よこ通小橋わたりて、北へ十間近く行ば西へ道有、前のすぐ道北へ行に、左側かご近藤勘右衞門殿組、內藤無德、此間一町、少まがりて北へ行に、左宗淸寺、此間一町、行あたり久松喜三郎殿、西へ道有、つゞき土屋但馬守殿、南筋宗淸寺、此よこや此間一町、左右に道有、前の道西へ行に、

左大岡彌右衛門殿よこや、加藤長右衛門殿、右渡部六左衛門殿よこや、星合太郎兵衛殿土屋兵部殿、此間一町、左右に道あり、

一、右之內後の通近藤勘右衛門殿組よこ通西へ行道、右東かど樂照寺、左町のよこや、此間一町、左右に道有、左の道半町、東側町、西側服部與左衛門殿、行あたりに小橋有、前の通より右之道十間ばかり行て東へ半町、右樂生寺地尻、左堀田五郎左衛門殿、夫より北へゆくに、右中程に大草主膳殿、左南かど大岡彌右衛門殿、此間一町の餘、左右に道有、前の通北へ行に、左かど渡部六左衛門殿、右土屋但馬守殿よこや、此間一町の餘行て、左右に筋違に道有、左の道半町程行て、南てに入込有、淸増寺、直道有レ之といへども爰に畧す、

一、右之內服部與左衛門殿北よこや廿間行て、行あたり了高寺、北へ道有、右は畠、左は馬場左衛門殿、此間一町、よこてに道有、猶北へ半町行て右に道有、猶北へ行に、右土屋兵部殿よこや、一町通て左に道有、前の通北へ行に、左北かど大遠寺、右がは大森半七殿、南かど山下五郎左衛門殿、左西かど遠山半九郎殿、此間一町、行あたり安藤對馬殿、左右に道有、左の道二町近く行て、北がは內藤新五郎殿表門有、左に道あり、前のすぐ道一町程行て小橋有、渡りて左右に道有、

一、水道橋は小石川見付より二町半東也、水道橋北橋詰より右に道あり、土て筋なり、橋筋を北へ行に、左かど曾我伊賀守殿、此やしき半町程、よこて入こみ有、北側かど松平壹岐守殿小笠原佐渡守殿、此間一町、行どまり也、前の橋筋北へ行に左に道有、小石川見付水戸宰相樣御屋敷へ行、橋筋北へ行に、左かど山口太郎千代殿本多飛驒守殿同大膳亮殿、右松平壹岐守殿よこや、小笠原山城守殿、よこてに道有、南東かど宮毛能登守殿、すぐ道弓町へ行、前の通北へ行に、右能登守殿よこや、左加藤八兵衛殿稻葉八左衛門殿眞田伊賀殿、右がは片町、此間二町半、左右に道有、行あたり內藤出雲守殿、東へ十間行て橫やに付て北へ行に、右かど田村四郎兵衛殿、此間一町、行あたり水野監物殿、西へ二十間行て橫やに付て行に、左中川半左衛門殿大窪山城守殿、南かど渡部筑後守殿、右は屋敷尻也、此間二町の餘、左右に道有、左の道西がは小菅內藏殿一守九左衛門殿、南がは渡部筑後守殿よこ

や、此間一町近く、右に道有、二十間計行て西へ道有、此間半町、雨がは町屋、此方へゆかずすぐ道北へゆくに、左島田刑部殿、右やしき尻、同道あり、此方へゆかずすぐ道、左南かど小菅伊右衛門殿よこや、此間一町、筋違左右に道有、前の通右北かど須藤次郎左衛門殿中川惣左衛門殿、左かど若林孫左衛門殿よこや也、宮崎長十郎殿、右神尾伊左衛門殿、此間一町、よこてに道有、前の通北へ行に、右北かど川田半平殿澤淸兵衛殿、向宮崎新左衛門殿中川三十郎殿やしき尻、右河村十左衛門殿、左本多金右衛門殿、右かど赤井六之助殿、左かど山崎仁兵衛殿やしき尻、此間一町の餘、左右に道有、行當り屋敷の尻屋なり、

一、右之内小菅内藏殿よこて通水道橋筋、左河田吉兵衛殿曾根平兵衛殿、右側一町まちや、大橋こして左に道有、右え廿間計行て北へ道有、左側かど神保四郎右衛門殿新庄千助殿中川飛騨守殿よこや、此間一町、西へ道有、南側中川飛騨守殿神尾伊左衛門殿よこや、北側かど宮城主殿殿川田半平殿よこや、此間一町、前の通へ出て左宮崎主殿殿よこや半町、夫より東へふりて宇戸野藤左衛門殿よこや一町近く、左の道南側かど宇殿藤左衛門殿、北側かど富田八郎左衛門殿上村半助殿山本五郎左衛門殿よこや、南側朝比奈傳右衛門殿表門通北へゆくに、左かど山崎甚右衛門殿よこや、右かど山本五郎左衛門殿、西へ道有、前のつゞき須藤三左衛門殿、左松平備前守殿よこや、右南東かど布施新助殿、此間半町、よこてに道有、同馬場有、前の通北へ行に、右北東かど小倉權兵衛殿神田勘三郎殿、此間四十間、よこてに道有、前の通西へ行に、右北東かど佐々木新左衛門殿上田宇右衛門殿表（とりゐ）井四郎右衛門殿世奈源三郎殿久野伊兵衛殿、向に權淨院、右南東かど荒川四郎兵衛殿、此間一町の餘、よこてに道有、行あたり蓮華寺よこやなり、

一、右之内富田八郎左衛門殿よこて通、水道橋筋北へ行に、左側中根六左衛門殿一色仁左衛門殿よこや、此間一町、左に道有、北側馬場、南側一色仁左衛門殿安藤傳右衛門殿布施新助殿よこや、此間一町、行あたり松平備前守殿よこや、左右に道あり、前の通北へ行に、右に田澤彌十郎殿曲淵彌次右衛門殿、左に馬場有、同道有、南側へ馬場有、北側井出三左衛門殿よこや、土岐内匠殿小倉權兵衛殿よこや、此間一町、行あ

たり松平備前守殿よこや、左右に道有、前の通北へ行に、左側かご井出三左衞門殿筧仁兵衞殿伴野九左衞門殿、此間四十間計、よこてに道有、北へ廿間計行て北へ行ば、左側早野宇兵衞殿、右かご下山四郎左衞門殿、左大久保次郎太夫殿、右中根八左衞門殿、左表井五郎兵衞殿、右小見山瀨兵衞殿戸田孫三郎殿、左筧太郎左衞門殿、右篠山平右衞門殿、左南西かご水野權左衞門殿、右名取三郎左衞門殿、此間一町の餘、左へ道有、十四五間行て北へ行ば、左かご蓮華寺、つゞき町屋、右淸水庄九郎殿蜂屋源五兵衞殿、此間一町、筋違に左右に道有、左の道北側に本田中務殿館林宰相樣御やしき有、前の通北へ行に、左側町、右は觀音堂の横や、同町有、左に淨雲寺信高寺大蓮寺、つゞきに町少し有、右淨景寺、つゞき町、東に鳥居有、白山權現の宮へゆく、北側茶やなり、御まへまで一町の餘有、前の通北へ行に、左明照寺藥師堂、此間二町、左右に道有、すぐ道有、左へ付て行に町半町両側有、左入込に土井能登守殿同兵庫頭殿向同周防守殿、此間三町半、左に道有、前の通是より四町行て酒井日向守殿、此間七町行て右に道あり、ふじへゆく、前の通一町半行て

筋違に左右に道有、右そめ飯へゆく道、前の通西北へふりて行に、右かご水野隼人佐殿、それより四町行て左に心照寺、此所にゑんま藥師、愛宕いなり、八まんの宮社塔有、

一、右之内蜂屋源五兵衞殿向に道二筋有、北の方西へ行に、左かご本田中務殿横手、右町の横手ならびに畠山下總守殿、左に正福寺、此間一町、それより半町行て、左本多中務殿、右白山權現の宮へゆく、つゞき両雲寺、左町少し有、此間四十間、それより南へふりて行に、左明傳寺本念寺、右淨土寺よこや、此間四十間、夫より西へ行に、右かご淨土寺、一町半近く行て、右に道有、前の通左館林宰相樣御屋敷六町程つゞきて有、右之道より一町程行て立泉寺、つゞき町少し有て、横てに入込有、前の通西へ行に、右町少し有て無量院、曲りかご二つ過て右に酒井雅樂頭殿、此間五町近く、左に道有、前の道それより一町行に、左新見備中守殿よこや、一町過て左へ道有、右手畠也、左新見備中守殿屋敷尻、半町の餘行て右に道有、北側に中山備前守殿屋敷へ行、前の通すぐ道二町ほど行て、西へ又十間行て南へ行に、右側に池田備中守殿、此屋敷一

町程、行當り田地、左に道二筋有、宮毛能登守殿屋敷へ出る、

白山權現之事

一、此白山權現は加賀國の靈神なり、其かみ越の大德泰澄初て白山に登給ふに天女にあへり、彼天女語りての給はく、我は是日本の始天神七代の終り、いざなみの尊なり、今は妙理大菩薩と名づく、本朝男女の根源の神なりとて、忽ちに十一面觀音の御形と現じて、

（白山權現）



やがて御姿をかくし給ふ、又ひとつの峯にして神人にあひ給ふ、手には金の矢をもち、肩には白銀の弓を横たへたり、名を小白山大行事といふとて、聖觀音の尊體をあらはしうせ給ふ、次に一人の翁にあひ給ふに、我は是大己貴の尊と名付、西方淨土のあるじ也とて、御影をばかくし給ふ、是によつて白山權現を祝ひ給ふ、佐羅の早松は本地不動明王也、金劍は又是倶梨伽羅不動の變作なり、又白山權現は、神代の古は菊理媛の尊と申侍りきと也、此地に勸請せし事は元和元年の事なり、本の社の地には名水の瀧有、いつの頃にや、右典厩公彼寺を替て御下屋敷とし給ひしに、瀧水をつき山の前に落さしめ給ふに、更に一滴もおつる事なくたえて、今の地には其まねびもなし、

　敎へずと名をしらやまや今朝の雪

水道橋筋四町北へ行て、行あたり內藤出雲守殿表門通西へ行に、左眞田伊賀殿よこや四十間ばかり、水道水筋有、中山備前守殿、水戸宰相樣、三町程つゞきて有、右半町町屋有て、よこてに道有、前の通西へ行に、半町町屋有て、よこてに道有、西北かご堀市正殿、殘は屋敷の地尻也、右同前三町程行て左に藥師堂有、又

手前に稲荷の宮有、行あたり傳通院ついぢ、右へ道有、前の通西へ行に、堀市正殿よこや、黒田信濃守殿、入込に内藤新三郎殿、此間二町半過て左に道有、前の通西へ行に、左西感寺、右側え町一町程有、左に道有、同かは少し肴棚有て、坂氏清左衛門殿つゞきに町少し有、右側町屋白かべ町といふ、左右に道有、傳通院表門通、右のすぐ道西へ行に両側町、六尺町といふ、右てに道有、前の通西へ行に、左白かべ町うしろ町也、此間一町過て右傳通院、左に道有、半町程行て左右に道有、左白かべ町、右六尺町、表門通又十四五間行て右に道有、北側一町の餘町屋有、それより一町程行て、行あたり金剛寺、左右に道有、表門通東へ行に、右かど齋藤頼母殿火消屋敷、此道二町近く行て東へ道有、半町近く行て東へ行ば南へ道有、三町程行ば、行當りりうけい橋筋なり、前の通西へ行に左六尺町うしろ、町屋四十間計過て、よこてに道有、前の通西へゆくに、左に町十四五間有て左右に道有、左の道半町程行ば西へ道有、右側一町町屋、左側かど山口五左衛門殿、木造五左衛門殿宮毛求女殿、多福寺よこや、左右に道有、右之方を行ば半町程西側町、東は町のよこや、左の方南へ行に左多福寺、右松平志摩殿よこや十四五間、表門通向八代越中守殿、此間一町、先に道なし、多福寺つゞきに稲荷の宮、清水權之助殿、此側一町、横てに道あり、又すぐ道有、

一、傳通院よこ通北へ行に、左小野吉兵衛殿組、此間二町行て左右に道有、右之道一町程行て西へ道有、右側かど間宮孫太郎殿、入込西てに高圓寺、すぐ道半町程行て南へ行、右善仁寺よこや、半町の餘行て西へ道有、右入込善仁寺、西へ半町の餘行て、行あたり松平播磨殿、左右に道有、右之通一町行て、行あたり松平播磨殿、左へ十四五間行て北へ行に、左宗景寺、夫より北へ行に、右は播磨殿よこや、つゞき町、左側同町両側なり、一町半行て左右に道有、前の播磨殿屋敷よこてに付て西へ半町程行に、左に道有、御たんす町へ出る、前の通西へ行に又半町行て、左に入込小栗長右衛門殿、前通の又西一町程行て右に道有、前の道西へ行に、左側かど永井勘九郎殿、専光寺、つゞきに町少し有、右入込に井上帶刀殿、左光學寺、此間一町半、よこてに道有、前の通西へ行に、左かど北條阿波守殿組、此やしき半町近く過て右に道有、井上帶刀殿屋敷

へ出る、すぐ道なし、
一、傳通院表門通、前の道より西へ行に、右かど小野吉兵衞殿組、左町、半町過て左に道有、前の通西へ行に、右入込に神保左京殿よこやを付て西へ行に、右久永源兵衞殿、左本多飛驒守殿横や、此間三町近く、左右に道有、右之道半町程行て入込有、加藤伊織殿、左之道同かどに本多飛驒守殿、夫より小坂上りて一町計行に、右入込に吉利支丹の牢有、南へ道有、前の通西へ行に御たんす町、此所を過て右に松平長三郎殿組、左に傳妙寺よこや、此間一町、左に道有、北へ行に、西側東雲寺よこや、左傳妙寺、此間四十間過て右に道有、同かは東雲寺、戸田右近殿、次に道遠寺了念寺甚光寺、左田地、此間一町半近く、左右に道有、左の道西側に泉德院有、右之道北へ行に、甚光寺よこやに付て行に、西側戸田右近殿、入込西正蓮寺、此道二町近く通りて左右に道有、但左は行どまり也、前の通西へ行に、右側町一町、左は寺屋敷の地尻一町ほど、右に道有、同かはかど石川三左衞門殿よこてに道有、三左衞門殿表門通二町の餘行ば、松平刑部殿やしきへ出る、前の通西へ行に兩側町一町程、左に道有、西角に安藤對馬殿、表門通西へ行に、左對馬守殿よこや、右成瀨吉右衞門殿やしき三町の餘あり、つゞき十四五間町、よこてに道有、半町の餘行ば松平刑部殿屋敷へ出る、左右に道有、前の通西へ行に、右かど高木善左衞門殿、此道二町近く過て右に道有、松平刑部殿屋敷へ出る、但一町程行て東へ道有、前の通西へ行に、右半町畠、つゞき町一町有、町中に天神の宮有、入込に水野伊豫守殿、大須が上町一町、此所を過て左右に道、左御藥園へゆく、前の通西へ行に、右側かど不動有、つづき稻葉八左衞門殿屋敷半町の餘あり、つゞきに町少し有て大照寺、內藤出雲守殿、是まで二町の餘、左右に道有、右之道すがも村へゆく、是まで、
一、傳道院表門道、水戸宰相樣裏門より、半町餘西へ行ば北へ道有、一町半ほど兩側町、行あたり堀市正殿、左右に道有、右之方十間計行て、行あたり泉能寺、左右に道有、左へ付て北へ行に右に町有、是まで一町程、よこてに半町程兩側町なり、前の道北へ行に、右町のよこや少し有て、島田刑部殿やしき尻、杉浦武兵衞殿、南かど杉浦大隅守殿、此間一町、筋違に左右に道有、行當り左傳通院裏門有、それ右へ半町計行て北

へ行、左側町一町有、右側かど若林孫左衛門殿よこや、宮崎長十郎殿しりや、左側町一町、西へ道有、前の通北へ行に、右宮崎新左衛門殿地尻、中川三十郎殿、又本多金右衛門殿しりや、かど山崎伊兵衛殿、左側一町まちや、右へ道有、前の通西へ行に、右かど伊丹加兵衛殿、此やしき廿四五間、左町、つゞき太田千十郎殿よこや半町計、行あたり町、左右に道有、右之道同かど伊丹加兵衛殿よこや、太田小兵衛殿山崎十兵衛殿、かど同甚右衛門殿、左松平備前守殿、此間一町の餘有、行あたり須藤三左衛門殿、左右に道有、前の通より左の道、同かど太田與右衛門殿、右町少し有て淨業院、つゞきに町少し有、左無量院、右かど淨福寺、此間一町、よこてを北へと行に左側町、久雲寺、此間一町の餘、西へふりて左法傳寺、右永井佐渡守殿、此間一町、よこてに道有、館林宰相樣表門有、前のすぐ道西へ行に、左かど館林宰相樣四町の餘、右に道有、館林樣よこてに付てゆくに、西側南かどに松平信濃守殿、此間二町の餘、よこてに道、同つゞき依田久女之助殿中坊長兵衛殿地尻、右館林樣、此間二町、左右に道有、南本通西へ行に、右戸田淡路守殿、よこて一町通て左右に道有、右之道淡路殿表門有、行あたり中坊長兵衛殿、淡路守殿門通半町近く行ば、行あたり宮毛能登殿、左右に道有、右へ付て一町行ば左右に道有、左の道池田備中守殿やしきへ行、前の通北東へふりて行に、右側館林樣御屋敷のよこや、左側かど小堀和泉守殿、よこてに入込古屋五兵衛殿、本通北へ行に五兵衛殿よこや、西南かど新見備中守殿、此間二町半、行あたり酒井雅樂頭殿、左右に道有、

傳通院

一、無量山壽經寺傳通院は、了譽上人の草創として順德年中の開基なり、本尊は惠心僧都の御作、坐像の彌陀なり、六八の誓願はあまねく苦海の衆生を導給ふ、四八金色の妙相は十方に光を放て、もろ〳〵のやみぢを輝かし給ふ、然るに當寺は是關八州の其一として、淨土衆流の一流なり、所化は爰に於て學問を究めて、古き名師の跡を慕ふ、爰によつて、或は聚螢映雪の効作をつみて、眼を經論にさらし、又は飛花草露の道を得禪して、其心敵をしりぞけん、此故に論談に唇をかへして、富婁那の辯舌を得、互に疑問を開く事、迦葉のむねを中に悅して、只をのづから蓮葉の泥土

（傳通院）



を出るにことならず、とにかく恨むらくは我人の身、願はしきは十萬億土彌陀の淨土なり、唱ふれば佛も我もなかりけりと、心をやり給ふべし、しばらくも五念修行にもとづきて、三心具足の床にざし、往生のそくわいを期すべき也、

彌陀たのむ人ぞさながら小石川
わたる心もすみわたるなり

江戸雀八卷目終

江戸雀九卷目 從御城北の方（小石川より東つゞき）

水道橋、神田相生橋、筋違橋、いづみ橋、新敷橋、淺草近邊、下谷、谷中、三崎、千駄木村、駒込村、新ぼり、田畑村、長里村、王子、染飯まで、

神田明神之事　富士權現之事　湯島天神之事

上野東叡山之事并忍の岡之事付花見記

不忍池辨才天之事

一、相生橋より水道橋之内土て拾町有、相生橋渡りて北詰より西への道本郷、すぐ左右に道有、左の道西へ行に、土手筋一町まきがし、よこてに道有、前の土手筋西へ行に、一町半ほど材木がし、よこてに道有、湯島二丁目三丁目のあひに出る、此間一町半、前のごて筋西へ行に、右一町半、土て中程に道有、小出瀨兵衞殿火消屋敷へ出る、此間半町有、前の土て筋御茶の水といふ、よこてに道有、西北かど別所孫四郎殿、前のごて筋西へ行に、孫四郎殿よこや半町、右てに道有、竹や町へゆく、此間一町半、前のごて筋西へ行に町三町、横てに道有、前の通西へ行に安藤九郎左衞門殿よ

こや、石丸石見守殿曾我伊賀守殿横や、此間二町近く、左に水道橋、右之道前に書しるし申候間略す、

一、右之内安藤九郎左衞門殿表門通北へ行に、右半町近く町や、横手に道あり、東へゆくに御中間町一町有、兩側左右によこ町有、御中間町、つゞき神田元町一町有、兩側左右によこ町有、此よこ町を神田元町といへども左にはあらず、惣じて惣名なり、つゞきて竹や町、左右によこ町有、つゞき湯島六丁目、よこ町北うしろにも町あり、但北側計、南側別所孫四郎殿やしき也、竹や町の北うしろにも町有、前の通安藤九郎左衞門殿表門通北へ行に、東側町一町有、御中間町よこ町也、東へ道有、此通を行に御弓町、左右によこ町有、此間一町計御弓町といふにはあらず、なべて惣名也、弓町つゞき町一町、左右によこ町有、左の道南西かごに中山市之丞殿、此間一町、よこてに左右に道有、右之道本郷一丁め二丁めへ出る、此道本郷のよこ町也、半町にたらず、前の通一町の餘西へ行に、左右に道有、左水道橋筋へ出る、右之通東へ行に、北がは鳥井久太夫殿組、此間四十間、よこてに道有、つゞき蜂屋七兵衞殿組、南側三念寺地尻、北かご大窪八郎左衞門殿組、此間四十間、よこてに道有、前の通行當り鳥井久太夫組、左右に道有、右へ一町程行ば西へ道有、北側かご三念寺、並に藥師堂有、南側は町屋の地尻なり、此間四十間、左右に道有、前の通西へ一町近く行に、右て鳥井久太夫殿、左に道有、西へ行に、北側かご大窪八郎左衞門殿組、此間四十間、左右に道有、右之道中程に天方十郎殿やしき有、前のつゞき北かご水野小左衞門殿組、此間半町、行ごまり也、前の通北へ行に、左大窪八郎左衞門殿組、左右に道あり、左へ付て行道、南かご八郎左衞門殿家尻、北東かご小笠原外記殿、此間四十間計、左右に道有、前のすぐ道西へ行に、北側かご吉田吉左衞門殿、南かご大窪八郎左衞門殿組、右は水野監物殿、此間四十間ばかり、少し西へ行ば水道橋筋へ出る、

一、相生橋より王子まで長里村の邊、相生橋筋北詰より、半町近く北へ行て旅籠町、左右に道有、前の橋筋西へ行に、湯島一丁目、續きて二丁め、右側中程に神田明神社有、此道に茶や有二町、門ぎはより左へ道有、御茶の水へ出る、右之道東北へふりて行に、左半町近く町、右町のよこや、入込に山田友右衞門殿、右

甲斐庄四郎右衛門殿、左井上源太郎殿、右東かど木村藤三郎殿、此間五十間計、よこてに道有、佐野内藏殿組、松平助之進殿組の屋敷へ行、前の通西へ行に、左東かど牧野金助殿、右東かど伴野六左衛門殿よこや、此間廿四五間計、行あたり金助町、西側町一町、右へ二町程町、よこ町有、行あたり天澤寺、左右に道有、

一、湯島五丁目のきはより左へ道有、竹や町へ出る、五丁めにつゞき湯島六丁め、兩側町、但し右側中程に北へ道有、金助町へ行、六丁目のきはより左右に道有、左の道竹や町へ出る、右之道金助町うしろ通、兩側町、左右に道有、すぐ道半町ほど兩側町、行あたり近藤のぼり、左右に道有、六丁目につゞきて本郷一丁目、左側手まへに南へ道有、兩側町半町有、一町めのきはより左へ道有、二丁目につゞきて同二町目のきはに右へ道有、此道三町程町屋、行あたり町、左右に道あり、

一、本郷三丁めにつゞきて四丁めを行に、初口左に天神の宮有、幷に眞與寺、右初口に道有、此道半町近く町のよこや、左右に道有、左へ二町程行ば松平加賀殿表門有、前のすぐ道東へ行に、南側大安寺しりや、近藤のぼり尻や、左は松平加賀守殿うら門有、是まで二町近く、筋違に左右に道有、左の道北へ行に、西側加賀殿、東側天澤寺よこて、此道一丁過て、廿間計東へ行て、北へ一町の餘行又東へ行に、北側松平飛驒守殿同大藏殿、つゞき町ちと有て高安寺、門前に町少し有て正光院、門前に町又少し有、南側或は寺の地尻、屋敷のよこや、此間二町半、左右に道有、下谷通なり、前の松平加賀守殿うら門筋東へ行に、十間計行て右へ道有、金助町通、前の通東へ行に、左天澤寺、其上此寺は、寛永二乙丑の年、征夷大將軍家光公の御乳母春日局建立し給ふ、前の妙心寺渭川劉和尙を招きて、當寺の開山とせらる、此寺のつゞき正泉院、此側一町半、右にも同町、左右に道有、左の道北へ行に、西側かど正泉院、東かど萬福寺横屋、正泉院つゞき德念寺淨照寺、向に圓淨寺、此間一町行ごまり、前の通より、正泉院の方へつきて少し東へ行に、南側北側かど萬福寺大修寺、此間半町、右に道、前の通東へ行に、左松平加賀守殿榊原熊之助殿よこや、此間二丁、行あたり板倉石見守殿よこや、左右に道有、下谷通なり、

一、本郷四丁目兩側町、筋違に左右に道有、右之道は

松平加賀守殿やしきへ行、此道半町、左の道半町行て、右に一町程道有、屋敷なし、前の通西へ行に、南側久永飛驒守殿よこや、北側水野半左衛門殿組、此道五十間近く、左右に道あり、左へ二十間行て、西北へふりて行に、南側かど本妙寺門通に道有、此寺に續きて直に長全寺、向に池田五郎助殿、此間壹町の餘、右之道長全寺よこてに小坂有、菊坂といふ、此間四十間計行て、北東かど中山勘解由殿組、よこてに左右に道有、前の通北へ行に、左側吉村武兵衛殿久保源左衛門殿山本加兵衛殿、此間一町近く、右に道有、二町半行ば本郷筋へ出る、前の通北へ行に、左三枝平兵衛殿、此間廿間、行あたり入込阿部對馬殿三枝平兵衛殿、よこて通西へ行に、右町一町近く有て阿部伊豫守殿、左側一町町屋、右側大全寺光傳寺、此間一町半、左右に道有、此通是よりすぐ道之分は、水道橋通にしるすゆへ爰に略す、

一、本郷四丁めにつゞきて、同五丁め兩側町、右がは中程に道有、松平加賀守殿屋敷へ行、但半町程、五丁め猶北へ行に、左に法心寺、同六丁め兩側町、右南かどに喜福寺、よこてに道有、二町程行ば菊坂へ出る、六丁めの通北へ行に、左かど本多中務殿、三町半程つづきたる屋敷也、右がは三町、此所を過て本郷追分一里塚、是より左右に道有、前のすぐ道北へ行に、左新庄惣兵衛殿組、右三枝隱岐守組、左右のやしき三町、左右に道有、右之通半町近く行ば、右は三枝隱岐守殿組、左かど高明寺よこや、行あたり織田小十郎殿、幷に島田一玄、此間一町、行どまり也、前の通左の道、同かど新庄惣兵衛殿組、右かど本多左太夫殿、左右のやしき一町の餘有て左右に道有、前の通北へ行に、左かど本多左太夫殿組、右側かど高明寺林正寺正金院高蓮寺長源寺十方寺、右側或は寺、やしきの尻や、是まで三町半、左右に道有、左の道一町南側町や、右之道南側少し町有、北側町のよこや有て、水醴寺圓照寺清林寺、門前に町少し有て高源寺、此がは二町、向に太田攝津守殿、つゞき千駄木林、高源寺、ならび東かど法福寺、日光御門跡樣御屋敷のよこや、此間三丁、法福寺よこて通半町近く行て、左西南かど兩顯寺、右すみに揚源寺、此間一町半、向に道有、前の一里塚の通北へ行に、左寺町の地尻、右側一町町や、ならびに高林寺、此間一町の餘、左右に道有、前之通北へ行くに、

左側かど天圓寺萬日寺也、つゞき町少し有、右側かど延林寺、左に藤堂監物殿、淨泉寺、ならびに不動有、右町少し有て吉祥寺脇寮、左海立寺祿蓮寺、右に町少し有て吉祥寺、山號は諏訪山と云、太田道灌遠山丹波守兩人の建立、開山は青嵓周陽和尙、此寺に江城の傳記有、左側町一町の餘有、右東光院、つゞきに小笠原壹岐守殿、此間四町、左道有、酒井日向守殿屋敷へ行、但七町有、前の通北へ行に右南かど法勝寺、左町半町、右てに道有、北側町少し有て海窓寺、行あたりに明神の社有、此間二町、左に道有、前の通北へ行に、左町也、一町の餘有、右は町のよこや一町近く、右に道あり、北かど富士權現の社有、此あたり駒込村といふ、すぐ道二町半ほど行ば、北側戸田左衞門殿やしき有、前の通北へ行に左町、二十間程行て右へ道有、前の通北へ行に、左町半町の餘有て、左松平加賀守殿、右堀丹波守殿、此道四町の餘行ば左右に道有、左の道西へ行に、二十間計行て南へ道有、前の西へ行道、左かど藤堂大學殿、六町の餘つゞきて有、右畠一丁近く有て、北東へ道有、前のつゞき町二町の餘有、此あたり染飯といふ、それより一町半行ば右に道有、一町ほどゆけば西福寺、前の通一町行て行あたり建部丹波守殿、南よこてに道有、北よこてを少しゆけば北へ道有、植木やあまた有、行どまり、前一里塚の通二町程北へ行に、左右は畠、夫より土橋こして一町近く行ば、左右に道あり、左の道一町半行て、北へ道半町行ば長福寺有、前の通より右之道三町行ば長里村へ出る、前の通すぐ道、是より王子へ十餘町有、岩淵へ一里半也、

一、本鄕追分一里塚より左北へ行に、右側茶や、つゞきて町、新庄惣兵衞殿組屋敷、此間三町、右に道有、前の通北へ行に、右側町一町程有、つゞきて本多左太夫殿組、此間一町半、左に道有、前の通左は屋敷の地尻ゆへ記に不ㇾ及、

一、前の通北へ行に、兩側町半町たらず、右に大遠寺、つゞきて町一町の餘有、此間二町、左に道有、白山へゆく、右に道二筋有、すぐ道は前方にしるす、右之道二筋之内西の方へ付て行に、左側町のよこや有て、正念寺千日寺なり、右側町や、つゞきて長泉寺、つゞきて又町有、左德昌寺立高寺、つゞき町や、是まで一町半、左右に道有、前の通北へ行に、左かど延林寺よこ

や、右側高林寺よこや、此道一町の餘行て右に道有、前の通北へ二町半近く行に、左右寺のよこや、左に道有、二町行ば戸田左衞門殿やしきへ出る、前の通北へ行に、左かど見門院、此道一町半行て左に道有、二町行ば戸田左衞門殿、是より二町の餘行ば富士權現へ行、前の通それより半町の餘行て、左右に道有、右之道四丁ほど行ば日光御門跡樣御やしきへ出る、左の道北側かど前村權之助殿、前の通北へ行に蒔田權之助殿横や、左右之田地に付て二町の餘行ば右に道有、一町行て東がは瓔珞寺、左右に道有、すぐ道三町の餘行ば新堀へ行、前の通北へ一町行て、すぐ道へゆかず、左西へ付て行に、左十町程田畠なり、右側八幡の宮有、東學寺、此道一町半行て右へ道有、前の通西へ行に、右たばた村、とつゝき光明寺、是まで三町の餘、右に道有、半町の餘行て西へ行に、住大寺淨樂寺、是まで一町半有、右へ十間行て西へ行に、右長里村圓照寺、是まで一町の餘、三町行ば一里塚通に出る、

一、壹里塚より右へ行に、左て三枝隱岐守殿組、此間半町、夫より北へ付て行に、同組やしき、右小笠原右近殿、大恩寺、左織田小十郎殿屍や、此間三町半、行あたり太田攝津守殿、夫より右東へ一町ゆくに、南側甲府宰相樣、向に町屋少し有、是より北へ行に是まで一町、北へゆく道左かど太田攝津守殿よこや、右側町や少し有て、稻荷小宮有、是まで一町程、二町の餘行て右に明神の宮有、つゞき畠なり、左千駄木林、此はやしは太田道灌の植られしとかや、此間一町行て左右に道有、右之道三崎へ行、左の道白山へ、前の通北へ行に、右に不レ寢の權現の宮有、近き頃太田備中之大守再興有ぬ、別當は眞光寺昌光、後ゆきうつり、左かど日光御門跡樣、右松平飛驒守殿、此間二町、夫より四町の餘行ば蒔田權之助殿やしきへ出る、

神田明神之事

一、此明神と申は、人王六十一代朱雀院の御宇にあたつて、相馬小次郎將門といふ人有、先祖は桓武天皇六代後胤、陸奥守鎭守府將軍從五位下平朝臣良將が次男なり、然るに此將門大惡無道の勇者にして、勅宣をも用ず、下總國相馬郡に內裏をたて、我とわが身を平親王と改め、剩へ伯父鎭守府將軍良兼を討ち、後には百官を悉く奪ひて、賤しき下﨟にゆるして召使ひ、すでに都へうつて登り天下をたな心に握らんとたくむ

よし、叡聞に達しければ、帝大に驚かせ給ひ、天慶三年庚子の年、常陸大掾國香が子に平貞盛に大將軍の宣旨を下され、副將軍には藤原忠文、俵藤太秀郷、かれ數万の軍勢をさしそへ、討手に遣されしに、將門通力自在の身と變じ、その身一人を七騎の形となして、天をかけり地をくゞり、中々うつべきたよりなし、ここに貞盛秀郷智略をもつて、かの將門をたばかり、大のかり股うちつがひ、將門の首を射きりぬ、されば將門は其身を七人に變じければ、さして本人を見別がたく、只こめかみの動くを見あてに射ければとて、何者かよみけん、その頃の落書に、

將門は米かみよりも射られけり
俵藤太がはかりごとにて

とよみける、されば通力自由の將門なれば、その首藤太をおつかけ、今此神田にて勢力つきて落とゞまりぬ、さる程に將門の首、一七日を經ても終に死せず、眼れき〳〵と開き、その色終に變せず、所の者おそろしき事に思ひて、此由都へ訴へければ、彼が怨を報せんために、則其前にうづみて、神田大明神と祝ひて社をたて、それより此かた悪勢をひるがへし、今に弓矢


(神田明神)

の守護神とあらはれ給ふ、神は敬ふによつて威をます、御當家に至て隔年の御神事、目を驚かすばかりなり、

そよめけばいはふ神田の早稲哉

富士權現之事

一、いにしへ此社は本郷に有りしを、百させ此かた此所へうつしぬ、それをいかにといふに、此所に小さき山有、さながら駿河の富士にひとしき形にして、上に

大木生たり、是に一つのふしぎ有、あるとき六月朔日の事なりしに、雪白妙にふりて、此大木時ならぬ花の枝と見えしが、所の者ふしぎの告有て、則富士權現を勸請して、本郷の社を爰にうつし、それより此かた、六月の朔日にして諸人是に詣で、駿河富士のおもひをなし奉る、然るに寛永の初つかた、此所を加州小松中納言御拜領あつて、下屋敷となさしめ給へども、山は昔の如く神事を行ひける、されども下屋敷なれば、その前に書院を立、居ながら富士を目の前にうつし、餘景たぐひなき所なり、則富士書院と名付つゝ、朝暮御遊の樂みとし給ふ也、さて此社の別當は、眞光寺昌泉院よりおこなひつとめらるゝとかや、

はらひぬる其あしがらの遠ければ
こゝにするがのふじの山かな

一、相生橋筋北へ行ば旅籠町、東うしろに道有、東へ行に半町程北側町有て、北へ行ば一町兩側町、左右に道有、左の道湯島一丁目と二丁目のあひに出る、右の道松平加賀守殿表門へ行、前の通北へ行に、右東かど松平加賀守殿よこや一町の餘、左側半町たらず町、よこてに道有明神へ行、前の通北へ行に左一町程町屋、右福原淡路守殿、此間二町半、左之道明神へ行、一町の餘兩がは茶や、石段有、前の通北へ行に、右千本兵衞門殿渡部久衞門殿芦野左近殿、此間一町、左に道あり明神へ行、前の通北へ行に、左南かど那須遠江守殿、右南かど川口源兵衞殿、此間半町、筋違に左右に道有、左の道西へ行に、南側かど那須遠江守殿よこや、北西かど酒井因幡守殿よこや、此間四十間計、北へ道有、西側小細工同心之屋敷二町半之餘有、東側一町の餘やしきの地尻、東へ道有、すぐ道東側一町程小細工同心やしき、行あたり喜見院よこや、左右に道有、左の道天神へ行、前の通西へ行に、右かど小細工同心のやしき十間計、同道有、前の通西へ行に、右かど大神宮あり、妻乞稻荷の宮有、是まで一町、行あたり西尾七兵衞殿、右へ道有、北へ付て行に、右かど稻荷のよこや二十四五間、同道有、前の通天神への道筋、左南かど黒林市兵衞殿、此間四十間計、よこてに道有、前の天神筋北へ行に、右かど小細工同心やしき、左側四十間まちや、よこてに道有、前の天神筋北へ行に、兩側町や、左の方二十間計有て西へ道有、前の通北へ行に、左の方半町町屋有て、西へ道あり、南

がは町一町半計有て、右側二十間計町有て、植木や半町たらず有、北へ道有、兩側町一町有て、行あたり松平加賀守殿、左右に道有、前のつゞき右がは四十間町や、木工町といふ、行あたり左右に道有、前の天神筋北へ行、兩がは町、左の方半町たらず有て西へ道有、それより北へ行に、右の方少計行て東へ道有、前の天神筋北へ行に、左がは茶や、右北かど喜見院、此間一町、行あたりに天神の鳥居あり、前の道那須遠江守殿表門通北へゆくに、右かど建部内匠殿よこや、左かど酒井因幡守殿藤枝攝津守殿、右池田次左衛門殿、左本多彌兵衛殿、同かど松平采女正殿、右かど立花和泉守殿、此間二町、左右に道有、右之道石川主殿殿表門へ行、左之道西へ行に、南かど松平采女殿よこや、北側かど秋山源左衛門殿小堀下總守殿、よこてに道有、北へ行に、東側かど小堀下總守殿、此かは五十間、よこて西側かど小細工同心の屋敷一丁の餘、東がは三澤友之助殿、同かど竹村彌太郎殿、此間一町、行あたり喜見院横屋、左右に道有、小堀下總守殿表門通西へ行に、右かど小細工同心やしき、行あたり同やしき、左右に道有、前之通北へ行に、右かど石川主殿殿よこや

一町の餘、左かど秋山源左衛門殿よこや、中西圖書殿組、此がは一町、左に道有、天神へ行、前の通北へ行に、左南かど小笠原三郎右衛門殿、右かど平井四郎右衛門殿よこや、此間四十間計、行あたり板倉石見守殿、左右に道有、右之道東へ行に、南側かど平井四郎右衛門殿井戸安兵衛殿石川主殿殿、北側板倉石見守殿、太田攝津守殿よこて、此がは一町、表門通一町の間行ば下谷筋へ出る、前の通東へ行に、東かど泉念寺、つゞき町、此がは四十間、南西かど美酒(みき)清左衛門殿よこや、表門通に道有、左の道西へ行に、南西かど小笠原三郎右衛門殿よこや、北東かど板倉石見守殿、此間半町、よこて一町ゆけば下谷筋なり、前の通西へ行に、兩側茶や、右半町たらず有て、北へ道有、此道兩側町や、前の通西へ行に、石だん上りて鳥居有、右てに道一町の餘、兩側茶や、鳥居の內に入て天滿天神の社有、三間四面なり、西に觀音堂有、

湯島天神之事

一、當社此地に立給ふ事は、人王百四代後土御門院の御宇、文明十年夏の頃、太田道灌江府の城に居住のとき、北野の信仰の心ざし深く、すなはち城中に勸請せ

(湯島天神)



らる、その年の秋あやしき夢想をかふむりしに、明る朝或人菅丞相の自筆の御影を奉りぬ、道灌それよりいよ／＼信心深くして、城より北の方に社をたて、梅の木あまた植らるゝ、殊に社領をよせてあがめ奉りしより以來やうやく繁昌して、神前の庭のうり物は山市晴嵐とおもはる

湯島にて啼鶯や神樂笛

一、筋違橋は相生橋より壹町東なり、筋違橋筋北へ行に、右かど本田下野守殿、此屋敷一町の餘有、左は土手也、行あたり松平加賀守殿、二十間東へ行て北へ行に、右南かど遠藤肥前守殿、此間十町計、横てに道有、前の通北へ行に、右側かど遠山半九郎殿、左側かど松平加賀守殿、よこて二町計有、右沼野新五郎殿川口藤右衛門殿堀藤右衛門殿眞崎甚兵衛殿、左向に島田八郎左衛門殿、右一色賴母殿、同南がは堀丹波守殿、此三町左右に道、前の通北へ行に、左側かど建部内匠殿よこや、池田治左衛門殿尻や、同かど立花和泉守殿しりや、右側かど石野八兵衛殿組よこや、此間二町近く、左右に道有、前の通北へ行に、左側かど石川主殿頭殿横や、同南かど美酒清左衛門殿、右側かど榊原大膳殿組よこや、野口龍庵、此間一町半、左右に道有、左の道天神筋、右へ十間行て北へ行に兩側町、上野廣小路と云、左町中に東福寺、藥師如來有レ之、傳教大師御作也、七佛藥師の其内なり、左本阿彌三郎兵衛家有、此間二町、筋違に左右に道有、左の道下谷筋、前の通北へ行に兩側町、中ほどに小橋有、右之はづれに牛天神の宮有、北條氏康初立す、堯惠法師中興す、是上野の鎮守たり、此間一町、行あたり上野黑門、左右に道

有、谷中三崎新堀への道なり、
一、下谷筋西へ行に兩がは町、中之町と云、植木や唐物屋、一町過て左へ道あり、前の通西へ行に、右側町や、一町の餘過て左へ道有、天神へ行、前之通北へふりて行に、左かど榊原熊之助殿、右側福昌寺敎照寺、つづきて町、是まで一町半程、右に道有、前の通北へ行に、右宗泉寺、つゞきて町、左町のよこや有て町や有、右大尊院不動有、つゞきて町有、此間二町近く、西へふりて左松平大内藏殿、右信行寺東院、つゞき町、空南院、つゞき町、覺昌寺、是まで一町半程あり、行あたり水戸宰相樣、是より北へ付て行に、右覺昌寺、よこて左東圓寺法蓮寺、右大生寺、左妙願寺、右南かど淺岡宇右衞門殿、此間一町、よこてに道有、前の通北へ行に、左淺井七郎右衞門殿、右かど松平飛驒守殿、此やしき一町半ほど有、左向八郎兵衞殿、大澤左兵衞殿、忠高寺久生院、夫より右へ半町行て北へ行に、右那須遠江殿、此やしき一町の餘、行あたり甲府宰相樣、左右に道有、左へ付て一町行に、小橋渡りて左に川筋に付て道有、右側本住寺景山坊林高坊、是まで一町の餘、よこてに道有、北側三浦志摩殿、つゞき了源寺、是まで二町程有、前の小橋通東へ行に、兩側町半町程、右松平伊豆守殿、左玉蓮寺妙典寺泉高寺、つゞきて妙遠寺、右町半町の餘有、左同斷、本長寺本光寺、是迄二丁の餘、よこてに道有、左本光寺よこて、右一乘寺しりや、實相院よこや、左佛心寺妙敎寺、幷に妙善寺不妙院東高院實相寺法勝寺、此間一丁半、左右に道有、行あたりは蓮華寺、西つゞき了源寺、三浦志摩殿、東は法勝寺よこや林高坊横や、右之道、左瑞林寺、右實相院、寶藏寺よこや、此間一町、行あたり自性院、左右に道有、前の通水戸宰相樣御屋敷筋、本光寺、つづき一乘寺横や半町たらず有、すぐ道一町行ば永井土佐守殿、左右の道谷中寺町筋、一乘寺表門通、右側本行寺よこや、大行寺、此間一町、横てに道有、前之通北へ行に一乘寺、つゞき寶上寺寶藏寺、右北側かど自性院よこや、此間廿間、左に道有、前之通北へ行に、左北かど瑞林寺、右大泉寺長大寺西光寺、つゞき町のよこや少し有、左永久寺よこや、此間二町、左右に道有、左三崎へ行、右へ半町行に、兩がは町や、夫より北へさして行に、左町の横や、右がは威應寺寺中尻や、右要泉寺西上寺、此間一町半、よこてに道有、前の通北

左に堀大學殿よこや、同茶や有、是まで二町、左右に道有、一町行ば七面明神社有、前の通北へ行に、左延命院よこや、右敎應寺横や五十間近く有、夫より北へ行に左右畠、二町近く行て、行あたり諏訪大明神、此あたり新堀といふ、

上野坊中名付之事

一、上野黑門より二町が間松原なり、左に不忍池へ出る道有、下馬有、右普門院横屋、半町程行て左に大佛有、右に淸水觀音堂有、洛陽音羽山淸水寺のうつしなり、堂の下に櫻など植られたり、春は一しほ美景也、此道に普門院、西がは四十間行て、行あたり最敎院、それより東へ行に常照院よこて、此間一町行ば左右に道有、右之道常照院表門一町行ば南へ一町道有、又東へ行ば車坂へ出る、常照院の表門通北へ行に、右がは明照院相嚴院照隆院、左院坊の地尻、此間二町、行あたりの堂は慈覺大師まします、左右に道有、右屛風坂へ出る、但一町、左の道二十間行ば北へ道有、五十間行ば東漸院、それより東へ五十間行ば北へ道有、半町行て圓覺院、前の通西へ行に大猷院様御魂屋、つゞきて日光御門跡様、此間二町近く有、黑門通下馬より東へ行に二王門有、猶東へ一町行て左右に道有、東照大權現様御宮殿へ行、此道双方に石燈籠あまた有、黑門通東へ行に、左右に松原一町近く有て、左に輪藏有、右に塔有、行あたり本堂有、うしろ左は法華堂、右は常行堂なり、

一、東照權現様鳥居のきはより東へ道有、左がは威照院泉隆院凌雲院、此間二町半、横てに道有、すぐ道東へ行に、左東かど靈泉院よこや、右東かど御門跡様裏門あり、左寶性院東學院、此間二町ばかり、横やに道有、前の通東へ行に、左に所化道者五十間計なり、右西かど延壽院、行あたり元光院、南つゞき行どまり律拾院、此間一町、左右のすみに護國院、西つゞきに林光院、此間一町、よこてに道有、

一、右之內凌雲院よこてを北へ行に、右靈泉院、一町行て左右に道有、左の道北がは旦那院、西つゞき御藏有、よこてに道有、谷中へ出る、此間四十間、右之道東へ行に、左覺成院明王院松林院、右院守の地尻なり、左西かど東圓院、此道二町半、筋違に左右に道有、左北へ付て行に、左側に東圓院よこや、右側かど林光院よこや、左福性院蓮乘院常德院、右毘沙門御門主様、

左南のすみ尊壽院、此間二町、行あたり寶珠院、御魂屋行ごまりなり、

東叡山

一、此東叡山寛永寺は、忍の岡といひて名所とかや、南光坊の慈眼大師と贈號す開基なり、然るに都の丑寅の方に比叡山といふ有、是桓武帝と傳教大師と御心を一つにして、延暦年中に御草創有、是によつて寺號を延暦寺と號す、王城の鬼門を守、惡魔を拂ふ靈塲として、天下泰平の御祈禱所也、又此東叡山も、我たつ杣をうつせり、寛永年中に是も建させられし故にや、寛永寺となづく、又是江城の鬼門を守、惡事災難を拂ふ、鎭護國家の靈地なり、天台四明の法燈をかゝげ、佛乘三觀の覺月をあふぐ、殊更東照權現樣御宮、大猷院樣御魂屋、寶珠院樣御魂屋、寔に其きらをつくす事、金銀珠玉をちりばめて、善つくし美盡したり、凡寂光の淨土もかくやとばかり思はる、寺中僧坊二六の勤行怠らず、香の烟は空に滿、花の匂ひはこゝにもうつりて、栴檀の林となれり、寺内南北數十町にこえ、東西それに應ぜり、此山に登りぬれば、江府殘りなく眼前に見おろし、又黑門の松原より西を下へ見おろせば、不忍の池さながら志賀の湖水をうつし、ことに島には辨才天、深き誓に近江なる、竹生島のおもひをなせり、見所おほき景地なり、爰を又忍ぶの岡といふ事は、俊成の歌に、

誰ために忍ぶの岡のしたわらび
　けぶりはたてずもえわたるらん

或人の發句に

上へ下へゐいとう山の花見哉

自吟に

咲ば上野ちりては花の下谷哉

同

花ざかりゐいとう山や江戸ざくら

上野花見行記　　身獨軒一夢子

ひとひは目のやみもほゞはれ候間、ある心地し侍りしかば、上野の邊にたどりもてゆき、とある木陰に腰をかけ筆をならしぬ、

目なしどり〳〵、聲に付て來ませといへり、友もなくとぼ〳〵と、たよりなしの杖を、つきそふ物とては身に從ふ影のみにて、東叡山にまかりぬ、實にや名にしおふ、寺は都に近き江の、その絕景をむさしあぶみ、

さすがにかけし御願ひに、うつさせ給へるとにや、すべて年毎の、花は芳野の春よりも、爰は上野のながめぞと、暮中うらつく花の下は、敷島のむしろを見はりて、連歌催すもあり、類づえに顔をすがめつゝ、俳諧のつらねごとものするも有、歌を謡ひ詩を吟じ、さざめきさゝのむさまじゝは、實や哀のはてし迄、人の心のおく底もなきたはぶれかなと、爰かしこ見やりはべりて、

露の身とおもひすつれど春ごとの
　　花には惜きいのちなりけり

と、かくつぶやきながら普門院に下り、大師の尊像を拜し奉り、足休めし侍りしに、時ならぬ風の花をちらしければ、

よけてふけ雲の上野を花の風

つどふ中に、いたいけしたる子の、花たべといろひさけびけるに、あるじ方の僧、衣の袖に一えだを手折あたへられしにぞ、心ちよげに笑ふをみければ、そのたらちねにかはりて、

給はるは菩提の行ぞ普賢像

下谷にくだりて、



里の子の下谷も花の上野かな

しれる書舍のもとに立より、往來の人をかぞへ居りつゝ、

廻文みなはな見はるはぞはるはみなはな見

日も山の端に入相の、耳の許へつげくれば、

入相のかねやこゝろせよ花の暮

さらばあす逢はふさてかへりぬ、

丑の二月廿八日

追句みる人はこゝろうへのゝ花見哉

一、上野黑門の西北へ道有、南より北へ行に、右は東叡山がけなり、左に茶や少し有、七間茶やと云、つゞいてしのばずが池、鳥居有、小橋島のあたりまであり、辨才天の宮、幷に左は經堂、右中に役行者、左に稻荷の宮、右に摩利支天宮有、それより此池の端に付て北へ行に、右に淨雲稻荷の宮有、是より猶右東叡山がけ、左池のはたに付て行、黑門より五町半行て右へ道有、前のすぐ道一町近く過て、行あたり松平伊豆守殿、右の道東北へふりて行に、一町行て、左入込法恩寺、開山は日住上人、太田道灌建立也、又稻荷の小宮有、つゞきて茶や、兩側町、左に永龍寺、是まで一町半、右に一町の餘、南側は東叡山寺中の尻や、北がは長樂寺よこや、つゞきて本龍寺感應院妙顯寺、行あたり吉田久米之助殿、北つゞき行どまり北條安房守殿、此間一町、前の通北へ行に、左入込法恩寺、右かど長樂寺、左明生寺妙光寺大寶寺本法寺、此側二町の餘、よこてに道有、北がはに龍泉寺本行寺、此間一町、すぐ道よこ通まへに記し申候、前の通北へ行に、右永井土佐殿、左かど龍泉寺よこや、つゞきに町少し有、右南かど妙法寺、此間一町、筋違に左右に道有、右ての道東へ行に、右南がは妙法寺、よこて左がはかど大照寺かまへ半町、よこてに道有、大照寺ならび淸水寺宗林寺、此がは一町、右妙泉寺蓮久寺、此がは一町半、左に道有、大照寺よこて北へ行に、右淸水寺横や、大龍寺、左福双寺妙要寺、此間一町の餘、是より二町の餘感應寺寺中の尻や、右東叡山の內、それより西へふりて北へ行に、感應寺寺中尻や、右明地半町近く行て、右へ道有、此通一町ゆけば泉照寺、幷に三十番神有、前に小橋有、右北への道金杉村へ行、前の通北へ一町半行ば、北へ道二筋有、右ての道二町程行ば新堀へ出る、前の通より谷中へ左に道有、西へ行に左大感寺、

左東かど大行寺よこや、右東かど自承院、此間一町、行當り寶上寺、左右に道有、前に記すゆへ爰に略す、前の通北へ行に、左がは町、右て大照寺西よこや、左妙恩寺、つゞきに町少し有、多寶院、つゞきに茶や少し有、此間一町半、行あたり感應寺門有、左への道三崎へ行、半町程行て右へ行、此通すぐ道日堀へゆく、此通二十間計行て西へ行に、雨がは町半町有、右東かど圓照寺、筋違に左右に道有、前にしるす、前の通西へ行に、左西かど永久寺、右西かど妙王院、つゞきに町少し有、左本通寺了國寺、右本佛寺福聰寺、此間二町近く有て右に道有、すぐ道千駄木林へゆく、右之道北へ行に、右がは松平釆女正殿、長明寺、是まで三町、横てに道有、前の通北へ行に、右かど新堀七面大明神、是則延命院之住持日長上人萬治三年に再興す、同側一町行て内泉寺、二町近く北へゆけば、左右に道あり、左の道田畑村へゆくなり、

不忍池の事

一、此池を、古はしのばずの池といひしを、近代しのわすの池といひならはせり、堯恵法師の路次の記に、忍の岡は今は上野に有といふ、しのはすが池をしのばずが池と號すといへり、池の廣さ五町四方に及ぶ、池の中に島有、辨才天おはします、水谷伊勢守建立せらる、寔に此所は竹生島の面影に似たり、上野はひえの御嶽に似て、名におふ湖水の景氣、さながら爰に見るがごとし、

涼しやと池の蓮を見かへりて　誰かはあとをしのばずの池

谷中感應寺之事

一、長曜山感應寺は、法華讀誦の道場として、其聞え四方にかくれなし、當寺高祖日蓮大聖人の自作の御影おはします、若人立願の事あるに、草履一足を持て參り、御前にかけ置て、おもふ願ひを祈るに、諸願成就すること、鐘のしもくに隨て音を出し、谷のひゞきに應るがごとし、又十月十三日は、此聖人御忌なれば、前臺に花をなし、種々のもり物を備へて法事をなす、諸人詣でくる事市のごとし、寺内は廣大にして、本堂の前に五重の塔有、右に小宮少々おはします、鐘樓經堂あり、三十番神猶左に有、坊舍も二十ヶ所の餘有、

受持讀誦解說書寫といふ心を

かみとても敎のほかの道ぞなき
　　妙なるのりの水くきのあと

一、筋違橋より新敷橋まで六町の餘、かし通西より東へ行に、左側本多下野殿よこや、壹町半過て北へ道有、前のかし通東へ行に、佐久間町一丁目、材木がしなり、横てに道有、右にいづみ橋、佐久間町二丁めよこてに道有、佐久間町三丁めまきがし、横てに道有、佐久間町四丁め、よこてに道有、右に新敷ばし、すぐ道有ㇾ之といへども、淺草の方へかき付る故爰に略す、

一、右之通北うしろ通、新町より右かど岡古庵、左かど松平伊勢守殿横や、つゞき屋敷の地尻半町程有て、町中に闕本友典、つゞき町、是まで二町、左右に道有、和泉橋筋、前の通東へ行に、左かど京極甲斐守殿、新庄隱岐守地尻、本多內藏殿、此間三町、左右に道有、新橋筋なり、

一、右之通より北うしろ通、松平伊勢守殿表門を北へ五十間計通て、行あたり北東かど丹羽式部殿、東へつづきて杉浦內藏殿同源右衛門殿、右側かど松平伊勢守殿よこや、松平因幡殿牧野因幡守殿、左西かど曾我又左衛門殿、右西かど又松平因幡殿やしき、此間二町、左右に道有、和泉橋筋、前の通東へ行に、左かど藤堂和泉殿、同西かど中根平十郎殿、右西かど本多內藏殿地尻、此三町左右に道有、新敷橋筋也、

一、右之內丹羽式部殿北よこてを北へ行に、つゞき遠藤肥前守殿、此がは一町、右てに道有、右遠藤肥前守殿、向松平加賀守殿よこや二十間計有、右ての道北へ行に、左かどは遠山半九郎殿よこや四十間、北へ道有、つゞきて紙屋平七殿、右本多將監殿、つゞき屋敷の地尻、左西かど小川惣左衛門殿、此間一町、横てに道有、前のやしきの向に三吉長兵衛殿、左東かど中西源之丞殿、つゞき野々山彌兵衛殿、右西かど曾我又左衛門殿地尻、左西かど野々山肥後守殿、此間一町、左右に道有、行あたり藤堂和泉守殿よこやなり、

一、右之內紙屋平七殿よこて北へ半町行て、又東へ半町行ば、北への通左かど內藤傳右衛門殿、つゞきて加藤庄之助殿、右向溝口出雲守殿、左南かど丹羽平右衛門殿、右南かど眞田勘解由殿、此間二町、行あたり石野八兵衛殿組、左右に道有、左へ二十間行て北へ行に、左右に石野八兵衛殿組、二町ばかり過て左右に道有、前の通北へ行に、左榊原大膳殿組、右かど廣原八

兵衛殿、つゞきて金照院信行寺、左南かど野口了庵よこや、右南側かど正行寺、此間二丁、筋違に左右に道有、前の通北へ行に上町、右南かど一照院、此間一町、横手に道有、前の通北へ行に、南がは町、半町過て左右に道有、右之道三枚橋へ出る、前の通北へ行に、左かど常樂院、右がは町、左敎雲寺、右本養寺本光寺、つづき町、此町一町、よこてに道有、前の通北へ行に、下谷町、半町行て左てに道有、上野黑門へゆく、前の通右本學寺、つゞき町、此間半町の餘行て、右てに道有、前の通北へ行に、右かど龍光寺一町の間、左南かど千手院、此間一町、左右に道有、左車坂上野へゆく、右之道淺草寺町筋、前の通北へ行に、左林松寺よこや壹町の餘行て、同道有、前の通北へ行に、松平助之進殿組、此やしき壹町程、此所を過て行あたり明地、左右に道有、屛風坂へ出上野へ行、前の通北へ行に、西光寺よこや、壹町過て又右に道有、前の通北へ一町行ば、左へ道有、行あたり要金寺よこて、北つゞきに戸田相摸守殿、すぢ向に千倉主菴、要金寺、北つゞき戸田相摸守殿、此間一町、筋向に東行庵、又すぢ向に八まんの宮有、つゞき世尊寺、行あたり眞田勘解由殿、是まで

又一町、左右に道有、前の通北へ廿間行ば右へ道有、一町の餘行ば正東院大遠寺有、幷によこて有、前の通北へ一町行ば、又右へ道有、北側かど丹珠院ならびに稲荷小宮あり、南がは遠心寺よこや、表門へは右へ付て行、前の通より一町程北へ行ば、筋違に左右に道有、左八まんの宮へ出る、此道をあとに記す故爰に畧す、前の通北へ半町行ば、左に道有、北かど眞田勘解由殿屋敷半町通て、行あたり世高寺、左右に道有、右へ十間行ば、左手に西念寺よこやを一町通て、行あたり西園寺、左右に道有、前の通北へ行に、眞田勘解由殿よこや、一町行ば左に道、一町程行ば金杉村へ行、前の通より北へ一町半行ば左右に道有、右之道右かど小出伊勢守殿、左戸田采女殿、右入込北西かど靑東庵、行あたり甲斐庄喜右衞門殿、すぐ道日本堤へ出る、此二町前の通より二町程北へゆけば、右に道有、同がはに信榮寺、つゞき龍泉寺、すぐ道日本堤へ出る、此間一町半、前の通北へゆくに三の輪町一町有て、筋違に左右に道有、猶北へ行に左に藥師堂有、一町近く行て右に道有、一町程行ば右てに自永寺、すぐ道河へ出る、前の通北へ行に、新町南がは町、左に道

有、半町程行ば小橋有、渡りて左右に道有、猶西へ行に、左かど池田備中守殿よこや一町、右かどは宗對馬守殿よこや、つゞきに石河主殿頭殿、行あたり光臨院、前の通北へ行に、一町兩がは茶や、北末はみのわ村、此間右てに道有、日本堤筋なり、前の通北へ行に、左半町茶や、小橋渡りて兩がは一町町や、是より先千手海道なり、

一、右之内紙屋平七殿東隣小川惣左衛門殿、此よこて通北へゆくに、右中西源之丞殿よこや、つゞき屋敷の地尻、左溝口出雲守殿地尻、右内藤三五郎殿、同南側かど石川三郎兵衛殿、左南かど眞田勘解由殿地尻、此間二町半、左右に道有、行あたり大森半七殿組、右へ十間計行て北へ道有、左大森半七殿組、右野瀬惣左衛門殿組、二町近く過て左右に道有、前の通北へ行に、左野瀬惣左衛門殿組、右中西圖書頭殿組、久世惣十郎殿組、此間一町半、左右に道あり、但左の方北側肴棚有、前の通北へ行に、右石野八兵衛殿くみ、左町のよこや、つゞき一生院地尻、此間一町半、小橋わたりて左右に道有、前の通北へ行に、左町、又は寺の地尻、右石野八兵衛殿組、此間一町の餘有て、左右に道有、前の通北へ行に、左町又は寺などの地尻、右安藤傳右衛門殿組、此間一町有て左右に道有、行あたり正寶院、左右に道有、

一、右東通和泉橋筋橋詰より北へゆくに、左佐久間一丁目、右同二丁目、右之兩よこや半町近く町有て、左右に道有、前の通北へ行に、右京極甲斐守殿よこや、左町のよこや、松平因幡守殿よこや、此間一町有て左右に道有、前の通北へ行に、右藤堂和泉守殿よこや一町の餘有、左曾我又左衛門殿よこや半町有て、西へ道あり、前のつゞき野々山肥後守殿よこや、神保左近殿、此間四十間、右に道有、前の通北へ行に、左伊奈五兵衛殿、右かど奈良八郎左衛門殿、宮原左兵衛殿、左松平大學頭殿、右南かどは多田三五郎殿、此間一町、よこてに道有、前の通同北かど福田藤左衛門殿山名圖書殿神田五左衛門殿、南かど松井宗左衛門殿、左は屋敷尻、此間一町、左右に道有、前の通北へ行に、左右に野瀬宗左衛門殿組二町近く有、此所過て左右に道有、前の通北へ行に、左中西圖書頭殿組、右かど本多伯耆守殿、同南かど上村志摩殿、此間一町、横てに道あり、前の通左久世惣十郎殿組、よこてに道有、上野

廣小路へ出る、前の右かど加藤遠江守殿よこや、つゝき南かど村越伊豫守殿、此側一町、左北かど石野八兵衞殿組一町半、右に道有、前の通右かど大窪山城守殿組、此がは四十間過て三枚橋有、渡りて左に道有、前の通北へ行に、右南かど酒井兵部殿地尻、左本田伯耆守殿組、此間一町の餘、筋違に左右に道有、猶北へ行に、右上村志摩守殿、左かど安藤傳右衞門殿組、此間一町過て左右に道有、前の通北へ行に、右かど武田越前守殿組、左正寶院よこや、つゝきて景照寺、此所一町過て左右に道有、左の道に北がは正源院、つゝきて林松寺、南がは景照寺よこや一町有、すぐ道車坂へ行、左右に道有、前の通へ行に、左町少し有て松陰寺、右かど曾我權之丞殿組、左南かど遍龍寺、右南かど眞田內藏殿組、此間一町半、筋違に左右に道有、前の通北へ行に、左かど松平介之進殿組、右かど朗感寺よこて、此所一町過て左右に道有、行あたり鳥井內膳殿、左へ半町ばかり行ば北へ道有、右に井戸新右衞門殿組一町有、それより一町の餘行て、行あたり西光寺、左右に道有、鳥井內膳殿屋敷より、右へ十四五間行ば北へ道有、左鳥井內膳殿よこや、右淨泉寺よこやに付て半町行ば、切手町うしろ一町有、此所過て左右に道あり、前の通北へ行くに、西光寺横手について一町ゆけば、左に道有、北がはに法誓寺、前の通北へ半町ゆけば左右に道あり、右之道松平大內藏殿屋敷へ行、此道一町有、左へ付てゆけば左手のかど西生寺、右かど入込長生寺心元寺、同東かど淨蓮寺、此一町左右に道あり、

一、右之內藤堂和泉殿よこてより地尻の方東へ付て行ば、左奈良八郎左衞門殿横や、つゞきて松浦半左衞門殿、此間一町、横てに道有、前の通東へ行に、藤堂佐渡殿よこや、宗對馬守殿、右は屋敷地尻、行あたり加藤遠江守殿、左右に道有、新敷橋筋なり、是まで二町半あり、

一、右之內松浦半左衞門殿よこて通北へ行に、右藤堂佐渡守殿、此やしき二町あり、左南かど大久保出雲守殿、此側一町、右に道有、前のつゞき北かど須久留次郎兵衞殿林勘右衞門殿、多佐尾本右衞門殿、南かど廣五郎右衞門殿よこや、同つゞき依田源太郎殿、此がは一町、左右に道有、前の通北へ行に、左永井六左衞門殿よこや、右かど北條新藏殿組半町近く有て、右に道

有、前のつゞきかご生駒主殿殿、左南かご新見七右衛門殿組、此間一町行て、行あたり本田伯耆守殿よこや、左右に道あり、右へ少し付て北へ行に、左本多伯耆守殿組、左右に道有、左の方へ二十間ゆけば堀田對馬守殿組、夫より北へと行に、右阿部彌平次殿よこや、町有、同西前のつゞきかご主膳正殿、此間一町、行あたり藤堂佐渡守殿、左右に道有、酒井伊豫殿組、左に道有、前の通北へ行に、左かご加藤遠江守殿よこや、右南かご皆川左京殿、此間一町半、左右に道有、前の通北へ行に、右かご大窪山城守殿組、右橋左近殿、あひに土橋有、此間一町の餘行て右に道有、前の通北へ、左南かご酒井兵部殿、此間四十間行ばよこてに道有、半町行ば、北南かご青山丹後守殿組やしき有、前の道北へ行に、右青山丹後守殿組、左かご武田越前守殿組、此やしき二町あり、此内一町行て右に道有、前のつゞき右かご中西圖書殿組、此屋敷半町過て行あたり内藤新五郎殿組、左右に道有、右之道北がは高徳寺、南東かご中西圖書殿組地尻、西かご體宗寺、よこてに道有、此間一町半、よこてに道有、前のすぐ道淺草の方へしるし申候、前の通より北、左の道半町行て左右に道有、右の方北へ付て行に、左曾我權之丞殿組、つゞき眞田内藏殿組、右内藤新五郎殿くみ、此間一町の餘過て左右に道有、右之道北側東かご近藤縫殿殿、南側武家やしき、内藤新五郎殿組、高徳寺地尻、北側宗圓寺、加藤平四郎殿、右に道有、加藤平八殿、つづき少し萬隨寺、つゞき少し町有、南がは西蓮寺よこや、是まで三町、行あたり板倉石見守殿、左右に道有、前の通より左の道北側に稲荷の小宮有、つゞき大久寺、南がは眞田内藏殿、北東かご朗感寺、此間半町の餘有、行あたり松平助之進殿組、左右に道有、前の道北へ行に、右近藤縫殿殿よこや一町有、左南かごは水泉寺、筋違に左右に道有、左の道北がは西かご蓮行寺生感寺、つゞきかご淨泉寺、左水泉寺よこや、此間一町近く有、すぐ道屏風坂へ行、一町半、淨泉寺よこて通切て町、前に書しるし申候、前之通半町行て、行あたり泉高寺也、

一、新敷橋通より、かしばたに付て四町行ば、淺草見付筋へ出る、前の新敷橋筋北へ行に、兩町横や半町有て、左右に道有、前の通北へ行に、左かご本多内匠殿よこや一町近く、右心福寺、又本多內藏殿やしき兩地

右町廿間計有、左に道有、前のつゞき、左かど中根平十郎殿よこや一町の餘有、右南かど最上刑部殿、此やしき五十間、よこてに道有、前の通北へ行に、右北かど加藤遠江守殿、此やしき四十四五間有、左に道有、前のつゞき牧野遠江守殿、左北かど宗對馬守殿よこや二町有、右大久保賴母殿、同南かどは津輕越中守殿、此間一町半、又前の通二十間行て左へ道有、前の通北へ行に、右堀ばたに松平下總守殿、此やしき一町半、左かど天野佐左衞門殿組半町程有て、よこてに道有、前の通左かど本田造酒之丞殿半町の餘有て、左右に道有、左の道一町行て、行あたり生駒牧之助殿、左右に道有、前之通北へ行に、右ほり一町半有、左北かど本多出雲守殿、つゞき町、右ほり過て六郷藤右衞門殿多田島半右衞門殿松平仁右衞門殿宮村孫右衞門殿、南かど玉島武兵衞殿、此間二町半過て左右に道有、前の通北へ行に、土橋わたりて左橋左近殿よこや、右本多彈正殿よこや、此所一町の餘過て、行當り眼龍寺よこや、左右に道有、前の通左の方へ二十間ばかり行て北へ行に、左かど天野彌五右衞門殿、右かど眼龍寺、此間一町の餘過て、左に道有、前の通北へ行に、右に法養寺、左かど伴野九郎右衞門殿、右南かど成就院、此所一町過て、行あたり宗顯寺、東つゞき清雲寺、左南かど高德寺隱居、右南かど西蓮寺、此間一町半近く、行當り加藤平八郎殿、左右に道有、前に記し申ゆへ爰に略す、

江戸雀九巻目終

江戸雀十巻目（從御城北東の方）（淺草見付は東に當れり）

淺草見付、新橋、駒形、山之宿、今戸橋、山谷、橋端、角田川邊、石濱までの分

淺草寺觀音堂之事　姥ケ淵の由來　駒形馬頭觀音之事　金龍山之事　新吉原之事　總泉寺付妙龜山之事

一、淺草見付より新敷橋之間四町なり、西東にあたる、見付より出る側小橋有、是を渡りて左右に道あり、見付筋北へ行に、左入込松平中務殿、かや町一町め、雨がは町屋、はりこ人形造ばなゑむまなど賣る、右町はづれは松平市正殿、かや町二丁め、左手まへに松平中務殿門有、右はづれに本多出雲守殿、かや町三丁め、瓦町ともいふ、左はづれに池田豐前守殿、同右に本多出雲守殿、三町めにつゞきて次は天王町、左がは町中に十王堂、并に閻魔堂有、左に道有、南がは一町の餘町の横て有、北がは鈴木九左衞門殿、竹島宇右衞門殿、つゞきて町、さるや町と云、向に池田豐前殿、是まで二町程有、すぐ道よこてにも道有、前之通北へ行に、左鈴木九左衞門殿よこや、右は籔なり、此所半町過て小橋有、千石橋といふ、又鳥越橋と云、則渡りて左に道あり、半町行ば本多肥前守殿、前の通北へ行に、右淸水九兵衞殿、大窪平兵衞殿、左がは町や、右がはも二やしき過て町なり、かた町と云、右のうしろ御米藏也、左右に道有、前の通北へ行に、左町中に大六天有、此所一町過て左へ道有、北がは西福寺、御本尊はあみだ、あん阿彌之御作也、前の道右一町雨がは町や、左右に道有、左の道西へ行に一丁程行て、北東かど板倉筑後守殿、よこてに道有、西北かど本田長門守殿、筋向に曾根五郞左衞門殿、行どまり也、前の通北へ行に旅籠町、右に道あり、北がはかご桑島左近殿、つゞきて石井孫右衞門殿、右がは堀、此間一丁、行あたり川なり、前の通北へ行に、左に大師堂文珠院、此寺の本尊は不動明王矜伽羅勢多伽の二童子なり、堂は東向なり、高野山の行人方の頭なり、右木林孫八郎殿、つゞき稻荷の小宮有、うしろに御馬屋有、左に正學寺、是まで一町有、つゞき黑舟町、猶北へ行に、左堀田對馬守殿、つゞき小出百介殿、並に諏訪明神有、右がは諏訪町と云、一町の上有、左に道、廣小路へ行、前

の通北へ行に、半町ぢかく左がは町、右一丁町屋、よこてに茶や有、向に駒形堂有、前の通北へ行に、左半町まちや、右茶や少し有、左に道有、兩がは町一町、右手に道有、猶西へ行に、左小出十郎右衛門殿、右がは町一町ぢかく有て、すじかいに左右に道有、猶西へ行に兩がは一町まちや、右に道有、猶西へ行に田原町一丁目、兩がは左右に道有、猶西へ行に半町兩がは町、左右に道有、右大かた古金棚なり、猶西へ行に、右かど妙福寺、つゞき東本願寺、此がは二町計、向に橋有、左町のよこや一町有て南へ道有、西がはかど實相寺、東がはかど町の地尻、つゞき本法寺、西に圓相寺、東に大泉寺、西に感應寺、東に海雲寺、西國相寺、東北德要寺、西北かど不動院、此間一町半ぢかく有、行あたり東林寺よこや、左右に道有、前の見付通北へ行に、右に道有、山谷へ行、前の通北へ行に並木町、兩がは茶や、左右に道有、並木町よこ町一町、左右に道有、西へ行に西中町、よこ町一町有て左右に道有、猶西へ行に兩がは町、左右に道有、猶西へ行に田原町二町め、左右に道有、猶西へ行く、半町兩がは町、行あたり大泉寺、左右に道有、前見付筋北へ行に、東中町一町、兩が

は茶や、行あたりかみなり門、是より淺草寺也、右の方かど佛道、北がは中すえより半町程有、左右の道山の宿筋、東中町よこ町一町有て、左に道有、猶西へ行に、左茶や、右高べい、入込に千樂院、左右に道有、猶西へ行に、左茶や、右は高塀、左に道有、猶西へ行に田原町三丁め兩がは町、左に道有、猶西へ行に兩がは町、左に道有、猶西へ行に、左兩がは町半町、行あたり法分寺、左右に道有、右へ拾間行て西へ行に、左法分寺よこて、右かど誓願寺、其かみ相摸國小田原に有りしを、東照權現樣御在世之時、御當地へ遷され本誓願寺といふに有けるが、又酉之年炎燒の時、又此地へ遷されたり、見蓮社東譽上人開基也、本尊は御長三尺の彌陀なり、つゞきて青龍寺、同三枝攝津守殿組、左東本願寺地尻、此間二町、行あたり堀、左右に道有、是まで二町あり、かみなり門より內へ入るに、一町の餘左右に坊舍十三ヶ所有、右に道有、猶御堂の前を北へ行に、左右に水茶や有、半町程行て左に稻荷の宮西の宮辨才天の社有、此所過て二王門有、內へ入て左に神馬のこや、右に五重の塔有、左山王權現の宮、右に輪藏有、左に藥師堂、右に隨身門有、並に鐘樓有、隨身門を東

へ出れば左右に茶や少し有、すぐ道、左右に道有、扨本堂にあがりて鰐口こはぐ〳〵も打ならし、南無大慈大悲觀世音とおがみて、繪馬などをうちながめ、それよりあたりに僧の有けるに、此寺の縁起いかゞぞととふに、彼僧くはしくは知ねども、いで〳〵かたり參らせん、且は信力を催すためならんと、あら〳〵とかたりしを聞覺えて書ならし、

淺草寺觀音堂の事

いにしへ淺草川は、宮戸川とやらんいひて、漁夫の集まりてすなどりせし所とかや、然るに推古天皇の御宇にあたりて、進（しんの）中臣と云人あり、少のあやまち有にや、此所へ流人となりて有しが、彼が郎等檜熊濱成同武成とて兄弟の者、主人中臣の跡を慕ひ此所に尋きたり、みやづかへすなどりをして主従のいとなみをおくりしに、あるとき此川に出て網をひきけるに、魚一つもかゝらず、朝暮のいとなみ苦しき事に思ひ、あちこちこぎめぐり網をひきしが、此網にあやしきもの七度までかゝりぬ、ふしぎの事に思ひて、月の夜かげに見たてまつれば、光明かくやくたる觀音の佛體なり、いづれも奇異の思ひをなして、假に草屋をしつ



らひ安置せしが、此邊の草刈おのこ、淺草刈に十人伴ひてきたり、かのくさやに金色の光りさしけるをみて、終に見なれぬくさやに、殊更光明かくやくとかゞやけば、怪き事に思ひ、たちよりおがみたてまつれば、尊き觀音の佛體なり、是はいかなる人のわざやらん、かゝるふしぎなる事とて怪みけるに、かの三人の人々來りて、是々と語りしかば、愈々尊き事に思ひ、各々心を一にして、わづかに御堂をとりたてけると也、今に至りてかの人々を三所の護法とあがめ、又十人の草刈を十社權現と祝ひ奉るなり、又一の權現は、初てくさやを立てし所なりとてみやゐをたて、一の權現とは申なり、

一、孝德天皇大化元年に勝海上人此地に詣で、奇特の告かふむり給ひしより此かた、秘佛として尊體を直に拜む事能はず、人はたの尊體といひ傳へしなり、

一、朱雀院の御宇天慶五年に、安房守平公雅此觀音に祈りて所願を成就し、國の守になり官位高く昇りしかば、此祠に觀音堂を再興し、側に又佛堂をたて、輪藏をつくり、院坊をたてらる、又五重の塔を作り給ふ、雲をわきばさみ、露盤新たにさゝげて寶鐸風に響き、又かさねて一軀の皃鐘を鑄て高く一樓にかけらる、鯨音遠く響きてきく人無明のねぶりをさます、一たび參詣のともがらには、福壽海無量の利生を蒙むる事、鏡に影の映るが如し、それより此かた、或は地震或は兵亂又は炎燒、度々堂塔破壞すれども、再興度々して、源右兵衞佐賴朝御代に參籠有て、悉く再興有、三十六町の寺領を付たり、其後足利尊氏も又寺領を付させ給ふたり、

心をば淺草川の名につれて
　　暑さを身には覺ざりけり

など、つぶやきて、それより左へ付て後へ到りて、きざはしをとく〳〵と下りて西へ至るに、少し高みに辨才天、並に經堂有、北の手まへに天照大神の宮もおはします、後に藥師堂熊野權現並に閻魔堂、向に御寶藏護摩堂有、つゞきて小宮七社、後にあみだ堂八幡宮、東へ至るに十社權現並に稻荷の小宮、行あたりに三社權現、是も隔年に祭り有、左に四つ足の門有レ之、一、四つ足の門を北へ行に、馬場の中を通て左賢福院板坂卜齋泉相院六郷伊賀守殿、右がは寺院の地尻、武家屋敷の裏尻なり、行あたり富士權現也、是まで二町

牛あり、
一、四つ足の門を行に、馬場に付て一町ぢかく行ば、左右に茶や有、半町行て左に道あり、猶西へ行に、半町程右に道有、一町ゆけば六郷伊賀守殿表門あり、前の通西へ半町行ば右に道又あり、すぐ道一町ゆけば行あたり景兪寺、左右に道有、前の通右の道北へ行に一町、左右に田地有て、左松平兵部殿屋敷の地尻、右は六郷伊賀守殿よこや、一町の餘過て北へ一町行ば、左に道有、乞食村へ行、前の通一町の餘北へ行て、左に茶や有、一町程有、夫より一町の餘行ば日本堤へ出る、左右に道有、
一、門の内より左に智樂院、向に道有、一町程行て右に正藏院、夫より北へ付て行に、右がは大久保山城守殿地尻、左明地、一町半行て左右に道有、左隨身門有、右の道東へ行ば、北がはかど金剛院、つゞきて覺善院龍泉院妙音院、並に姥ケ池有、一の權現小宮有、此間二町有、

姥ケ池の事

一、此姥ケ池といふは、昔此所に人家稀にして人のやどりなし、此ゆへ旅人宿を求むるに所なく苦しめる所なり、爰に野中に一つのしばの庵あり、是に年おひたる姥の、若かりし娘をもちてすみけるが、ゆきゝの旅人を爰にとめて宿しけるが、旅人に石の枕をあたへ臥させて、上より大石をおとし、頭を打砕き殺して衣裝をはぎとり、からだを此池にすてぬ、既に其數千人に今一人たらざりしに、此淺草の觀世音大慈大悲御誓あやまらず、大いに愍ませ給ひ、草刈と變じて笛をふきて、ゆきゝの人にきかせ給ふに、其笛の音旅人の耳には歌ときこえぬ、

日はくれて野にはふすともやどかるな
あさくさでらのひとつ屋のうち

此笛の聲獨りの旅人聞てふしぎに思ひながら、宿なきまゝの宿として爰にやどりしが、あるじの姥、たび人を一しほもてなし、かの石の枕をあたへふさせける、旅人心に思ふやう、寔にかの笛の聲ふしぎなる事と思ひしが、此一つやの事にてや有けん、枕もおほきに、石の枕こそ怪しけれ、いか樣にも殺さんとのたくみなるべしと、心をつけやりてねやをかへて窺ひ見るに、さよふけ方にあるじの姥忍び入て、上よりふしどの上へ大石をおとしけるこそ怖しけれ、旅人きも

をひやし、からき命を助かりけるよと思ひ、足にまかせて逃げゆきけるが、まだ夜ぶかなれば、一つの堂に夜をあかし、ちとまどろむと覺えて、夢中に童子きたり、我は是この淺草の觀音なり、汝常に觀音信ずる故に、かく告の笛を吹て汝が命を救ひし也、信ずべし〳〵と、かきけすやうにうせ給ふ、旅人夢さめ見るに、此觀音堂にふしけるは、いとたうとく、ずいきのなんだひまなかりしとなり、其後用明天皇の御宇に、此觀世音は、かく姥が惡逆をなし罪をつくり、地獄におちん事を憐み給ひ、ひとりの兒と現じ、かの姥がもとにやどり給ふに、姥此兒の裝束びゞしきをみて、やどかし打殺しはぎとらんと悦び、よきにいたはりもてなしける、かの姥が娘此兒をみて、ゆふにやさしくたへなるすがたに心ち迷ひて、かの兒のふしたる所に忍びてふしけるが、姥かくとはしらで、はや兒を殺さんと思ひ、例の石をおとしけり、兒は觀音の化身なればいづくへぞうせ給ひぬ、娘はみぢんとなりてうせぬ、姥兒をはがんと是を見るに、兒はあらでわが娘石にうたれ、みぢんとなりあけにそみぬ、かく情なき姥、おや子愛執のなげき深く、悲しさたえがたくや有けん、此池へ身をなげうせしとかや、その執心大蛇となりて人を取事夥し、去程に神といわひて其惡靈をなだめらるれば、今は守りの神と成て、諸病の難を退けぬ、ゑきれいおこり、いもはしかのはやるときは、あま酒を作りて竹の筒に入、木の枝にかけて是を祈れば忽ち平愈するとかや、白河院の御製

武藏には霞の關やひとつ屋の
　　石の枕や野寺有てふ

發句に

花の浪もしわより候うばが淵

一、右之内金剛院の横てを北へ行に同隱居、南かど福壽院、是まで一町有、右道有、北がは中程に小出信濃守殿表門有、前の通北へ行に、右北かど法正院、左に道有、前の通北へ行に、左に馬場有、蓮上院、右に修善院泉僧院泉了院、左無動院、つゞきに道有、道心者庵有、壽敎院千泉院、內藤右近殿、稻垣若狹殿、是迄二町半有て、右てに町の横て有、同道有、二町ちかく南がは町、北がは中ほどに安樂院、前の通より二町行ば日本堤の下へ出る、左右に道有、

駒形堂

一、此堂は二間四面南向なり、本尊は馬頭觀音なり、朱雀院の御宇天慶年中に、安房守平公雅の立られし所なり、梵音海潮の響を淺草川の波にあらはし、定業能轉の誓は此御堂の軒にしめす、大悲の利生あらたにして乾けるかばねは重て宍つき、枯れたる木には花をもさかせ、火坑變じて池となる事何疑かあらん、爰に信力を催す人は、此川においてこりを取て淺草へ參ると也、こゝに船着にして、出舟入船の有さまは遠浦の歸帆とや申さん、九夏三伏の暑き頃は、風すゞやかに吹落、飛びかふ螢水にうつり、勝景限りなき所なり、

（駒形堂）



駒形といふばかりにや此堂の
本尊は馬頭觀音の像

一、駒形堂より横てに付て北東へと行に、右に茶や肴だななど有、それよりつゞきて兩がは材木や一町有て、左右に道有、右に渡舟有、左並木町へ出る、此よこて兩がは町也、前の通北へ行に、兩がは材木や一町有て、左右に道有、左かみなり門へ出る、前の通北へ行に、兩がは一町町、左中程に道有、又左入込に金森左兵衞殿、前の通北へ行に兩がは町、左はづれに大久保山城守殿、夫よりつゞきて一町兩がは町、左右に道有、左隨身門へ行、前の通北へ行に、左かど一之權現の宮有、右がは町、左入込藤堂采女正殿、同南かど久本寺、是まで二町、左右に道有、前の通北へ行に山之宿町一町、左に道有、金龍山へ行、此道兩がは壹町町や、聖天町といふ、右に道有、前の通北へ行に、左がは町、右金龍山なり、

金龍山付待乳山之事

一、此山を金龍山といふ事淺草寺の山號也、爰の名たるは、此寺の鎭守として、上に聖天宮を安置すると見えたり、又一說には、唐船日本へ渡るに此山を始て見そめしに、たゞ金龍のまとへる如く見ゆといふ說あり、寔は此山をば待乳山といへり、武藏の名所也、紀州にも有となり、新勅撰に

まつちやま夕こえゆきていほ崎のすみだ川原にひとりかもねん

或人此所にて遊山しける時に

べんとうをまつちの山の宮にしてまてどおそきはなにとしやうでん

かくよめるも爰の待乳山の事なるべし、さて爰を一町程ゆけば左に道有、此通まへにしるすゆへ爰に略す、前の通北へ一町行に、手前に町少し有、すぐ道さんや町へ行、前の通より西北へ行に、左に西方寺萬日寺藪の內に有、是より土て六町程ゆけば左に道有、前に是もしるすゆへ爰に略す、觀音堂裏門へ行、前の土て二町の餘ゆけば左に道有、新吉原傾城町へ行、右にも道有、それより土て一町の餘ゆけば左に道有、同又一町行左に道有、それより四町ゆくに、左の方一町ばかりみのわ村、行あたりに茶や有、左右に道あり、千壽海道なり、

吉原傾城町

一、昔は江戸の內に有しを、酉の年回祿此かた此所へ遷されたり、大道より八町の堤を北に向ひて行に左に門有、但一方口にして三方は堀也、門の內に小路六町有、日夜朝暮の賑ひ筆にも盡しがたし、それ傾城傾國のいはれは、凡漢史に見えたり、李延年が歌に、北方有二佳人一、絕世而獨立、一顧傾二人城一、再顧傾二人國一、是傾城傾國といふ名の起也、されば此道遠き世より起けるにや、天竺には龜茲國より始れり、唐にては三代の時よりこれあり、虞氏楊貴妃王照君西施など皆傾城なり、我朝にしては鳥羽院の御宇に、嶋千歲若前、是白拍子根源なり、古へは江口神崎室の泊三嶋江などに有て、舟路の旅人に愛せられし故に、ながれの女ともいへり、今は世の泰平なるまゝに、人の奢り日日にまして人々も美女に乏からず、僅の價をもつてあひみる事の嬉さは、何にたとへん水鳥の、はねとはねとをうちかはし、心の奧の底深く、一夜の枕を川島や、水の流れと諸ともに、千夜も萬夜と思へども、は

や明がたの近づけば、うかれ烏も鳴わたり、じんじやうの鐘耳に響き、あかぬわかれの鳥の音も、はやきぬ〳〵のもとひとなれば、互に名殘を惜みつゝ、五更未明ざるに、我家路にと歸れども、彼里のゆかしさ、ねては夢、さめてはうつゝ面影に、幻の如く見えわたれば、今一度參會して今のつらさを忘れんと、主親の目を忍び、人めを包みて今ははや、一兩夜もなれそむれば、一紙の艶書を得ては三跡の名筆も及ばざる心ちして、肌の守りにかけ置て、朝夕大事にする事は、皆是我身のやき草なり、それともしらでゆく程に、次第にはたのしる人もいでき、宿のかゝも念頃にしやりて、言葉やさしくなるまゝに、金銀をゆ水の如く思ひて、君がなさけの付ざしに、金ちやくのそこゐなく、一せきをふるひだし、重代の調寶をうりしろがへ、主親の勘當を蒙むり、身のをき所を失ひて、爰の橋詰かしこの辻、こもを枕のうたゝねは、昔にかはりて悲けれ、つら〳〵是を案ずるに、越の西施が國を亂し、呉王ふさの悲みや、我朝の白拍子龜菊がなすわざにて、承久の兵亂も是皆傾城傾國のわざにして、國を傾け身を亡す、畏るべし〳〵、

津の國のなにはに付てよしはらや
又あしはらといふ所なれ

一、日本堤之内左に萬日寺の右に道有、さんや寺町へ行、下へおりて小橋有、渡りて北へ行に、右鈴兼寺正圓寺、左は明地、此間一町、左右に道有、前の通北へ行に、左がは町、右がは鈴正寺よこて、其つゞき寺の地尻一町有て、左右に道有、但左の道一町の餘行ばつゝみへ出る、此道北がはすみ法勝寺、並にさんや町よこ町有、前の通北へ行に、左入こみ嚴念寺正行院、又少し行て入込道蓮寺、それより高德寺春景寺仲傳寺、右がは寺の地尻有て、道二筋有、是まで一町程、北へ行に、右かど千念寺半町ぢかく有て、よこてに道有、前のつゞきかど觀音院辨才天福壽院、つゞき茶や有、左明地一町の餘有て同道有、二町半行ば堤へ出るなり、向に吉原見ゆる也、

一、右之内鈴正寺表門通東へ一町行に、つゞき泉入寺、南がは明地、行あたり遍照寺、南よこてに道有、遍照寺、北つゞき淨生寺、左泉入寺よこや、本妙寺古伯寺遠通寺、右に安正寺、左南かど遠丹寺、是まで一町、左てに道有、さんやへ行、前の通北へ行に、右に瑞泉寺

萬日寺、左北かご淨福寺圓生寺長福寺光清寺、右南かご玄壽院、左南かご利生院、是まで一町、左右に道有、前の通北へゆくに、左北かご衆生寺、右かご淨念寺よこや一町あり、左高照寺、つゞきに明神の社あり、よこてに道あり、少し過て右にも道あり、行あたり田地なり、

一、右之内常念寺表門通東へ行に、つゞきて淨雲寺法藏寺、右がは玄角院横や、左念佛院、右焚生院、是まで一町、右に道有、寺の地尻ゆへしるさず、前の通東へ少し行て、北へ道有、念佛院よこやに付て少し行に右に道有、一町程行ば北がは正蓮寺萬日寺なり、つゞきて正億寺、右田地、此間一町、左右に道有、前の通北へ半町、左南かご長善寺、右は田地なり、左に道有、前の通北へ行に、左北かご蓮花院、つゞきて永典寺、右に道有、前の通北へ行に、左に道心者庵、右かご辨才天の宮、左にかゞみの池有、是まで一町きて、東へ道有、一町行に、左松原、右妙龜山、左右に道有、左入込摠泉寺、すぐ道二町ゆけば左右に道有、角田川あり、

摠泉寺付妙龜山

一當寺は是學宗和尚の開基として、正法眼藏の妙理をしめし、實相無相の心印をひらく、向上の一路には差相實有の草を拂ひ、言下の一喝には靈學執解の塵を飛す、公案の床の前には、一千一百の則をかさねて以心傳心を守り、座禪のふすまのもとには、朝三暮四のたすけを待て文字言句をはなれたり、寺内に千葉介石塔、幷に軍謀團有、まさに生前の昔には八陣の備に臆變をしり、三軍の師に勝負を決し、敵をなびかし、威をふるひしかども、死後の今は僅に一簣の土に五尺の身を埋み、一聚の墳の上に一軀の塔婆に名を殘したるばかりなり、

一、妙龜山、是は角田川にして身まかりし梅若丸の母、尼になりて住し寺なり、寔に此梅若の母は、美濃國野上の宿長者がもとに有し花子といひし遊女なりしが、梅若丸の父吉田少將と深く契り、かたみに扇を取かはし別れけるに、花子扇に心をうつし、ねやより外いづる事なければ、斑女がねやのうちには秋の扇の有といへるにことならずとて、其名を斑女と異名しけるが、後には長者がうちを狂ひ出、都へ少將を慕ひ行、終に都たゞすにおひて少將にめぐりあひ、愈々深く契りて此梅若をまうけぬ、少將世をさりて後、世

乱れ、梅若落人となりてまよひしを、人商人かどひて爰の角田川までつれ來ぬ、梅若いとけなくして旅の疲といひ、一かたならぬ思ひにくれ、もつての外に違例し、此角田川のほとりにひれふし、一足もひかれずとてなげきしを、人商人なさけなく打捨てくだりしに、所の者いたはり國所を尋しかば、梅若微かなる息の下より、我は都北白川吉田なにがしが子に、梅若丸といふもの也、我死なば此川のほとりに埋み、しるし


(妙龜山)

に柳をうへてたべといひて、十五歳を一期として三月十五日のくれがたに終にこときれ給ひけり、去程に梅若の母、ゆくゑを尋て此所までくだり、物狂ひて尋ねしに、この川の渡船にて此物語をきゝ、いよ〳〵物狂はしくなりて、此墳のほとりにゆきて泣悲しみ念佛しければ、かの亡靈に二たびまぼろしの如くあひしと也、それより尼になり妙龜となづき、此庵にすみし故に妙龜山といへり、

又爰なる池は、妙龜ひゞに梅若を戀しく思ひ、此池のほとりにゆきてわが面影をうつし、かの亡者に逢ふ心ちせしが、我面影のいたく衰へやつれたるをみて、おもひいやましにして、終に此池に身をなげ、むなしくなりしゆへ、かゞみが池とはいふなり、

かきくもるかゞみが池の月影は
泪の雨のふるにぞ有ける

一、山之宿の町より、すぐ道角田川へ出る道、北をさして行に、雨がは町一町有、左道有、前の通北へ行に、右町、左本龍寺、此間一町過て今戸橋、則渡りて北へ行に、左がは右かど野村彦太夫殿、左明地、此間一町有て左に道有、猶北へ行に、左かど本龍寺、つゞきて

八幡の宮松林寺、入こみ乘明寺、右がは三浦越中守殿、此間一町の餘有て、左に道有、猶北へ行に、左かど淨正寺溝口修理亮殿正福寺高樂寺心光寺、右向に正法寺、左安降寺、つゞきて明光寺、筋向に島田出雲守殿、左南かど蓮德寺、是まで三町、左に道有、一町行て行あたり長照寺、南横手に正雲寺、前の通北へ行に、一町行て左入こみ法元寺、同福壽院、半町行て左に道有、此邊橋端と云、前の通三町行て、角田川向へ渡し有なり、

一、駒形堂てまへに淺草廣小路有、西へ行に右に小上ケのこや一町有、後は町なり、左がはに稻荷宮有、此間一町過て左右に道有、前の通西へ行に、右に又小上ケのこや一町有、裏は町なり、前の通西へ行に、右田原町一丁め裏なり、此所過て右に道有、前の通西行に半町町あり、行あたり金輪寺、左右に道有、左の道南へ行に、左側堀田豐前守殿屋敷二町程有、右がは泉龍寺よこや、一町ばかり過て西へ道有、泉龍寺西つゞき本念寺、前のつゞき東林寺善生寺金藏寺、此間一町、行どまりなり、前の通廣小路より右之道金輪寺につゞきて町、高原やき物有、左も同町、半町過て左右に道有、前方記之、但左の道北がはに東本願寺の堂有、前の通北へ行に、左妙福寺よこて、右がは半町町や、同道有、前の通北へ行に、左大泉寺清光寺、右一町まちや、左法念寺、右に道有、前の通少し行て左に道有、前の通北へ行に、左がは誓願寺よこや、二町ぢかく過て左に道有、西へ行に南がは寺の地尻、北がは日輪寺、此本尊はあんあみの御作、遊行の末寺なり、つゞきて天學寺正應寺東光院、此間二町過、向に小橋有、左右に道有、前の通北へ一町の餘行ば、左に光龍寺半町、それより行ば右に道有、前の通北へ行に、右は田地、左かど万龍寺、つゞきて景劔寺、此間一町、右に道有觀音裏門へゆく、前の通一町程田道を通りて行ば、松平兵部殿屋敷右手に有、

一、淺草の見付の橋を渡りて左右に道有、右之通北がは一町の餘町有、中に稻荷の宮有、前のつゞきに松平市正殿、つゞき少し町有、かしばた也、前の見付の橋より左への道かしばた、右がはかど松平中務殿よこや、つゞき平右衞門町一町、酒井左衞門督殿、幷久右衞門町二丁め、右よこてに道有、前のつゞき久右衞門町一町め、左に新敷橋有、

一、右之內、久右衛門町一町目と二町目あひより北へ行に、半町ぢかく南がは町、左に道有、南がはは町、北がはは本多內藏殿よこや也、前の通北へ行に、右に天野喜之助殿、左廿間ばかり屋敷の地尻、同道有、するが町と云、南がはは心福寺よこて、北がはは町有、前の通北へ行に、右岩木權之助殿、左最上刑部殿地尻一町有、右南かど岩木伊豫守殿、行當松浦壹岐守殿、左右に道有、右へ一町付て行ば佐竹左京殿、それより北へ付て一町行に、行あたり松浦織部殿、少し東へ付て行ば北へ道有、左松平織部殿よこや、右森次郎兵衛殿、此間半町の餘行て又東へ行に、左次郎兵衛殿横や、右本多長門守殿、此間一町近く有て左に道有、すぐ道さるや町へ行、前の道北へ行に、左本多長門守殿よこや、右がはまきや、此間半町、小橋渡りて北へ少し行ば右に道有、猶前の通北に行に、左り松浦角左衛門殿よこや、右半町ぢかく町有、行あたり鳥越の明神、左右に道有、

一、鳥越の明神より右へ行に、半町程行て左に道有、南がは一町町、北がは明神、同つゞき町半丁有て、左右に道有、行あたり安藤壹岐守殿組、左右に道有、前の通東へ行に、左一町町有、右がはも少し町有て、右へ道有、前のつゞきかど本多肥前守殿織田對馬殿、左へ道有、すぐ道、小橋有、もり田町へ行、左の道北へ行に、右は堀、左は寺、自性寺一町有、此所過て左に道有、右に小橋有、すぐ道もり田町へ出る、前の通北へ行に、左松平半左衛門殿組、此やしき二町、內一町行て右に橋有、すぐ道旅籠町へ行、前の通一町行て左に道有、南がは屋敷の地尻、北がはかど松平圖書殿、つづきて上村帶刀殿と、戶田備後守殿組、此間二町ぢかく有、行あたり橋左近殿、左右に道あり、前のかし通北へゆくに、松平圖書殿よこや一町過て、右に小橋あり、前の通北へゆくに、左稻垣藏人殿組、つゞきて松平兵庫殿、此間一町あり、左に道有、西へゆくに半町程過て左松平兵庫頭殿、右半丁町の横て、右に道有、前の通西へ行に右半町西德寺、右に道有、前の通西へ行に、左稻垣藏人殿、右半町ぢかく本行寺横や、右に道有、前の通西へ行に左一町井上左兵衛殿地尻、右がはかど不動院雨兼寺、行あたり織田山城守殿よこや、左右に道有、前のかし通北へ行に、左一町町や、右に小橋有、左に道有、西へ行に半町、左町のよこや、右西

念寺よこや、左右に道あり、左の道東がは一町町の地尻、西がはは修能寺地尻、つゞいて泉覺寺長松寺要清寺淨照寺地尻、泉養寺地尻、西德寺よこや、行あたり松平兵庫頭殿、左右に道あり、前の通より右の道、右がは寺の地尻、左がはかご松高寺、つゞきて心景寺德善寺正圓寺長仁寺地尻、正覺寺地尻、行あたり本立寺地尻、此間一町、前の通西へ半町行に、左修能寺よこて、右松高寺よこて、此所過て左右の道に寺有、跡にしるすゆへ爰にしるさず、前の通より半町ちかく西へ行に、左稻荷の宮有、右久恩寺よこや、此所過て左右に道有、左の道西がはかご正念寺、つゞきて二ヶ寺の地尻有、此間一丁、行あたり稻垣藏人殿、左右に道有、前の通より右への道、西がはかご妙福寺地尻、つづきて大照院泉景寺地尻、萬福寺眞光寺遠久寺地尻、養福寺、東がはかご久恩寺地尻、永祐寺、それよりつづきて四ヶ寺地尻有、行あたり大空寺、此間一町左右に道あり、前の通西へ一丁行に、左正念寺よこや、右妙福寺、此所を過て左右に道有、前の通西一町行に、左法泉寺地尻、つゞいて泉相院よこや、右がはかご眞光寺正遠寺、行あたりに善龍寺、左右に道有、左の道西がは觀音院よこや一町有、東がはかご泉相院清德寺よこや、行あたり織田山城守殿、左右に道有、前の通より右への道北へ行に、左正林寺并妙敎寺正淨寺唯念寺、右正遠寺よこや、つゞき三ヶ寺の地尻、加藤織部殿よこや、此間一町半、行あたり正安寺、左右に道有、前のかし通北へ行に、左がはかご西念寺應景寺淨行寺、つゞきて本立寺よこや、是まで一町有、右に橋有、東本願寺へ行、左に道あり、西へ行に、一町の間に、左本立寺正興寺よこや、右行安寺當國寺、此所過て左右に道あり、跡にしるし申ゆへ爰に畧す、前の通西へ行に、右がはかご大空寺、左善心寺よこや半町ぢかく有て、左に道有、前の通西へ行に、左養福寺よこや一町、右北大寺万泉寺、同かごの寺東學寺、此がは一町半、筋向に左右に道有、前の通西へ行に、左かご加藤織部殿屋敷半町、右がはかご西光寺、つゞきて正安寺、左に道有、前のつゞき正林寺、左はかご唯念寺よこや、右東かご西照寺、同よこてに道有、すぐ道の通は下谷の方へしるし申候、よこてに付て北へ一町行に、左永照寺よこや、右西照寺よこて有て、ため池有、此間一町、東へ道有、前の通北へ行に、左龍國寺、

つゞき寺二ヶ寺の地尻、此がは一町半、右かご板倉石見守殿、此やしき一町有、一町程行ば、左西へ道有、前の通北へ行に左町、右に白泉寺、此間二丁、行あたり本多下野守殿、左右に道有、前のかし通北へ行に、行安寺よこや、泉覺寺、此間一町行て左へ道有、左へ一町行に右泉覺寺よこや、摠安寺よこや、此所過て左右に道有、前の通西へ一町行に左修南寺よこや、千手院よこや、右善徳寺よこや、救恩寺よこや、此所過て左右に道有、前の通西へ一町行に、左法分寺よこや、つづきため池なり、右がは板倉石見守殿よこや、此間一町、行あたり龍國寺、左右に道有、前のかし通北へ一町行に、左町、同道有、三十三間堂へ行、右に小橋有、前のかし通一町ぢかく行に、左に町あり、行あたり清水寺、御本尊千手觀音、慈覺大師の御作なり、江北山清水寺寶聚院といふなり、左に道あり、行あたり高感寺、左右に道有、

一、右之內、自性院まへの南の橋を渡りて、すぐ道もり田町へ行、左かしばたへ付て一町近く行に、右がは半町まちやなり、此所過て左に小橋有、右もり田町へ行、前のかし通一町行ば左に橋有、右に道有、旅籠町へ行、前のかし通北へ行に淨南寺よこや、つゞきて東軒寺龍方院、左に小橋有、前のつゞきやくし堂有、泉生院心月院又龍方院、是まで都て四丁有、左に小橋有、前のかし通北へ行に、二ヶ寺の地尻有て、廻向院感應寺地尻、永景寺圓相寺地尻、素圓寺實相寺地尻、是迄一町の餘行に、左に小橋、右に道、東本願寺へ行、前のかし通一町の餘行ば、東本願寺横て一丁半、此所過て右に道有、前のかし通堂へ行に右がは三枝攝津守殿組、左に小橋あり、三十三間堂へ行、前のつゞき了泉寺、此間二町近く有て、左に小橋有、右に道あり、前のかし通北へ行に、右一町東光院よこや、つゞき一町田地なり、左田地有、右に道有、前の通北へ行に右松平備後守殿、此屋敷二町有、同一町行て左に道有、前の通北へ行に田地なり、それより東へ一町行て北へ道有、二町の餘北へ行て右かご長國寺、一町の餘行て左に大恩寺、半町行て左右に道有、左の方は下谷の方へしるし申候、右之道東へ行に、兩がは茶や有、一町過て右に入こみ不動の堂有、すぐ道三町行ば日本堤へ出る、前の通北へ行に、右かご佐久間備中守殿、此屋敷一町半の餘、それより半町行て左右に道有、右

之道堤へ出る、左の道南がはに龍泉院、つゞきて眞傳寺、此間一丁餘有、前の通一町程行ば、行あたり藥師堂有、左右に道有、千壽海道なり、

一、右之内東光院よこてに小橋有、西へ渡りて行に左淸水寺地尻、右海禪寺、是は平親王將門の草創なり、此間一町行て左に道有、南をさして行に、左淸水寺よこや、右かど正法寺地尻、つゞきて光感寺、此間一町ちかく行て左に道有、前の通南へ一町の餘行に、右に東正院地尻、つゞきて久福寺法覺寺生德寺善德寺、左がは三十三間堂、此間一丁半、左右に道有、前にしるし申候、前の通南へ行に、左攝安寺、右修南寺、つゞきて大空寺よこや、左當國寺よこや、此間一町過て左右に道有、前の通北へ行に、右がはかど養心寺、左かど正覺寺、右法泉寺、左長仁寺、右中養寺、左四ヶ寺の地尻なり、右中生寺、つゞきて永入寺地尻、久恩寺、此間一丁半、左右に道有、前の通南へ行に左修能寺、つゞきて三ヶ寺の地尻也、右がは稻荷の宮有、つゞき明照寺、左淸正寺泉養寺西德寺よこや、右本行寺、此間一丁の餘、行あたり稻垣藏人頭殿、左右に道、前の小橋通西へ一町行に、左正法寺よこや、右宗顯寺長德寺、此間一町、左右に道有、あさにしるし申候、前の小橋の通西へ行に、兩がは町、半町の餘町、左白泉寺よこや半町程有、右本多下總守殿よこてを過て東へ道有、前のつゞき松平大隅守殿、西へ道有、又よこてにも有㆑之、前の小橋通半町行ば左右に道有、今一町行ば右くろくわ町、兩がは町なり、

一、鳥越の明神の社の西よこてに、松浦覺左衞門殿表門を西へ半町計、北へ道有、左永田喜左衞門殿勝屋勘左衞門殿、左山岡七右衞門殿、右勝屋六兵衞殿、左永田七左衞門殿、右萬年五郎右衞門殿、左かど小長谷市右衞門殿、右かど松下忠兵衞殿、此間一町有て左右に道有、行あたり松下市正殿、左の道西へ二町行に左小長谷市右衞門殿よこや、つゞき松平下總守殿よこや、右がは松平市正殿、同大和守殿、同兵部殿、よこてに道有、前の通り西へ行に小橋有、前の通より右之道東へ行に、半町の間に左松下市正殿、右松下忠兵衞殿よこや、此所過て左右に道有、前の道東へ行に、左がはかど三村土佐守殿組、右半町町や、南へ道有て町又一町有、左安藤壹岐守殿組、つゞきてかど松平半左衞門殿、左右に道有、行あたり小橋、すぐ道もり田町へ行、

一、右之内松平市正殿よこてを北へ行に、右がは三村土佐守殿組二町有、米津出羽守殿橋左近殿、左へ道有、前の通北へ一丁近く行に、右戸田備後守殿組よこや、左佐野内藏殿組、行あたり井上左兵衛殿、それより西へ少し行ば北へ道有、前の通西へ行に左佐野内藏殿、此屋敷半町有、右かど細井左次右衛門殿、行あたり小出伊勢守殿よこや、それより南へよこやに付て行に、左がは佐野内藏殿横や、此間一町の餘行て、西へ一町行に、左武家屋敷地尻二ヶ所有、右小出伊勢守殿、行あたり堀、左へ道有、

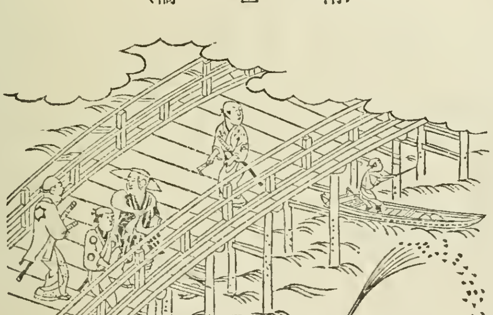
一、右之内、佐野内藏殿表門通北へ行に、右井上三左衛門殿よこや一町有、左細井左次右衛門殿横屋二十間有て、左へ道有、尻やに付て二町行に、右織田山城守殿、つゞき本多彈正殿、並に少し町有、左久留島武兵衛殿よこや、行あたり土橋、左右に道有、すぐ道、共に下谷の方へしるし申候、前の通北へ行に、左織田山城守殿よこや一町の餘有、此間四十間計行ば右に道有、前の通北へ行に、右兩龕寺よこや、半町過て左に道有、西へ行に左がは武家やしきの地尻、右がは法泉寺清徳寺、此間半町の餘、よこてに道有、前つゞきかど觀音院、並に嚴淨寺眼立寺よこや、此間一町行ば、すじかいに左右に道有、すぐ道は下谷の方にしるし申候、前の通北へ一町行に、左法泉寺よこや、右願明寺密揔院清念寺地尻、此間四十間過て左右に道有、前にしるし申候、前の通北へ行に、左眞光寺よこや、右妙福寺、つゞき大照院地尻、泉景寺、左吉祥院、右萬福寺地尻、左蓮明寺、右民淨寺、左永揔寺、右信光寺、左經應寺地尻、つゞきかど加藤織部殿よこや、右かど養福寺地尻、此間一町半、左右に道有、前の通行あたり東學寺、左右に道有、左の方西へ少し行て、横屋に付て北へ一町行て、左西光寺よこや、右かど千手院、左法念寺、此所過て左右に道有、前の通北へ行に、左板倉石見守殿地尻一町の餘有、右數恩寺つゞきに溜池、半町の餘過て東正院金剛院兩龕寺、左龕龍寺、右かど正法寺、左かど町の横や有、此間二町過て左右に道有、前にしるし申候、前の通北へ行に左町の横や有て東明寺、右がは長徳寺横て、續きて長遠寺、此間半町、すぐ道有といへども、田道故しるすに及ばず、

江戸雀十卷目 終

江戸雀十一巻目　従二御城一東之方

兩國橋より北本庄之分
一ッ目橋より、四ッめ橋、行德川口、小松川、北は源兵衛橋、業平橋、牛島、押上村、柳島村、高目村、洲崎村、寺島村、角田川葛西口、須田村之分
無緣寺發起幷大火之事　角田川付木母寺之事

一、兩國橋を武藏と下總の國境の川にかけさせらるとて、兩國の橋とは名付給ふと世にさたす、大橋の長さ九十四間、西東也、諸國の大船、殊に唐船此川にかゝる、限りなき納涼の地なれば、船遊びの船に波のつゞみ、風のさゝら、あしのはの笛ふきならし、舞つ唄ふつさゞめかせ、花火かゞりのその光、橋の上より見おろせば、あまつほしかとあやしまる、餘景限りなき所なり、さて此橋を渡り左右に道有、すぐ道は廻向院、兩がはに植木や一町有、左の道北へ行に小橋有、渡て右は藤堂和泉守殿、此屋敷を過て右東へ道有、よこやに付て行に、左にも藤堂和泉殿、此間一町過て左右に道有、右への道廻向院へ行、前の通東へ行に、左小細工同心、うしろに御材木有、右廻向院よこや、一町過て右へ道有、前の通東へ行に、左小細工同心、右御竹藏、つゞきて依田小隼人殿よこや、右小林六左衛門殿、此間二町近く過て左に道有、前の通少し行て又右に道有、前の通東へ行に、左かど橋本太郎左衛門殿やしき一町の餘有、右岡田仁左衛門殿よこや、出野甚五左衛門殿よこや一町有、左に道有、同馬場有、行あたりは朝比奈彌太郎殿、左右に道有、前和泉殿よこや、


(兩國橋)

半町行て、行あたり三浦志摩殿、右に道有、半町行て左右に道有、左北へ行に、右酒井雅樂頭殿、此やしき二町餘有、左津輕越中守殿、つゞきて松平市正殿、同はまへ道有、是まで一町の餘、前のつゞきかど黒川獨居、此やしき一町有、小橋を渡りて、左かど酒井河内守殿細川若狹守殿、右にも同やしき有、つゞき松平播磨守殿、左松尾肥前守殿、右藤堂和泉守殿、前の小橋より四丁近く行て又小橋有、渡りて北へ行に、左水野對馬守殿、右がは町、此間半町の餘過て右東へ道有、堀端、南がはに稻荷の宮、日向傳右衞門殿、此間二町ばかり有、前の通北へ行に小橋有、同渡りて左川、右に町少し有て藤堂佐渡殿、つゞきて最上刑部殿、是まで一町の餘有、よこてに道有、前の通北へ行くに、右かど井上相摸殿小笠原外記殿船越伊豫守殿松平刑部殿、是まで一町半有、夫より東へ半町行けば北へ道有、半町行て、左小笠原山城守殿、右に道有、一町半行ば、左に景玄寺泉龍寺有、前の通北へ行に、右普賢寺、此間半町過て横手に道有、一町程行ば左東がは明王院、それより右手に付て一町程行ば、北がはに清光寺有、前の通北へ行に、右入込東光寺、夫より一町程行て、右東へ道有、北がはに松浦肥前殿、入込に本久寺、つゞき清正寺よこや、南がは本多佐渡守殿、横手に道有、前のつゞきは善光寺、よこてに道有、前のつゞき松平三十郎殿よこや、地尻に道有て、前のつゞき第六天の宮、並に八幡の宮有、向に松浦肥前守殿屋敷一町近く有、是まで道三町半有、前の通北へ行に、松浦肥前殿よこや、つゞき安藤伊賀守殿、此間一町の餘有、よこてに道有、一町半程行て、右西手に高徳寺、並に神明社有、前の通北へ半町行に、左駒形へ渡し有、右てに道有、東へ一町ぢかく行て、北がは成就院淨正寺、南側長衆寺よこて、夫より三町程行ば、北西に福嚴院、うしろに妙圓寺、行あたり御歩行目付衆のやしき、左右に道有、前の通北へ行に、左芦野左近殿、本多内記殿、右がは大窪出羽殿、此間一丁有て、よこてに道有、一町半行ば北西かど清應寺、行あたり玄德法師、左右に道有、左へ半町行ば、西がは如意輪寺、つゞきて藥師堂有、入込長生寺、少し行て堀端へ出る、左右に道有、前の通北へ行に、右松平圖書殿、町のよこや少し有て、左川、此間一町の餘有て右堀に付て一町行ば、左に橋有、源兵衞橋といふ、すぐ道四町の餘行

て右手に道有、一町程行ば業平橋、右に道有、北かどに業平の天神の宮有、前の源兵衛橋を北へ渡りて左右に道有、橋筋を北へ行に、一町程行て右に道、此通二町ちかく行ば、北がはに延命院、それより一町程行ば北にかうめ村、一町行て入込に行泉寺、是より先に家なし、前の通北へ一町行て、又右に道有、高目村へ行、前の通北へ四町程行て右に道有、此道一町の餘東へ行ば、左手に道有、洲崎村へ行、一町先に地藏有、前の通北へ行に、右牛の御前、つゝきに長命寺、此間一町半有、すぐ道へ行ず横手に付て一町近く行ば、北へ道有、五町程行て左寺島村、夫より一町半程行て、行あたりに明神の社有、左へ少付て行ば北へ道有、一町程行て右に法泉寺、夫より二町ちかく行ば左へ道有、隅田川なり、向へ渡し有、前の通より又一町の餘行ば右に道有、葛西へ行、一里半といふなり、ヿ　へ一町程行て右にすだ村見ゆる、夫より二町行て木母寺なり、

隅田川

一、此川は武藏と下總の境に有て下總の名所なり、伊勢物語にいへるは、武藏としもつふさの國との中にいと大なる河あり、それをすみ田川といふ、その川の邊にむれゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守、はや船にのれ、日もくれぬといふに、のりて渡らんとするに、みな人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず、さるをりしも、白き鳥の鴫の大きさなるが、水の上に遊びて魚をくふ、京には見えぬ鳥なれば、みな人えしらず、渡守にとひければ、是なん都鳥といふをきゝて、

名にしおはゞいざこと問はん都どり

(隅田川)



我おもふ人はありやなしやと
とよめりければ、船こぞりて泣にけりとかけり、其はか爰に題してよめる、近衛院御宇藤原信尋卿の歌に
きて見ればむさしの國の江戸からは
北とひがしのすみだ川かな
玉葉集に、後二條院大納言典内侍の歌に、
ことゝへどこたへぬ月のすみだ川
都の友と見るかひもなし
又新拾遺集羈旅の部御製に、
かぎりなく遠くきにけり角田川
言とふ鳥の名をしたひつゝ
水鳥のあとかきながす角田川
ことづてやらん人もとひこず
下愚も、前の年大橋より船にのり、此所まで來りけれども、都鳥は名のみきゝてなかりければ、是いかなるゆへやらんと思へども、業平の如く人まねもいかゞなりとひかへ侍りてかくなん、
名にしおはば出て見よかし都どり
角田川原のしるしにや見ん
然れば、此川の都鳥いづちへか行つらん、又我見し時は飛行けるか、都鳥は此川に限りて有りと思へば、此川にも限らず見えたり、或歌に、
古鄕を戀ふる寐覺の浦風に
聲なつかしき都鳥哉
と詠ぜしは、相摸とかやいへる女房の、播磨に下りて、しかまといふ所にして、都鳥のなく聲をきゝてよめりといへり、又俊頼朝臣筑紫へ下りけるに、和田の三崎といふ所にして、都鳥の見えければよめる、
名にしおはゞしらじな和田の都どり
心つくしのかたはとふとも
又安嘉門院四條あづまにくだりしに、鳴海潟を過るに、鹽干の程なれば、さはりなくひかたを行に、角田川の渡りにこそあれと聞しかど、都鳥といふ鳥の嘴と足の赤き鳥は、此浦にも有けりとてよめる、
言とはんはしとあしとのあかざりし
わがこしかたの都どりかも
右の三首の歌は、此所の都鳥にはあらず、此鳥はうつくしき鳥なれば、網にとりつゝ籠に入て飼侍るに、蛤を餌にしてかふとかや、
一、爰の梅柳山木母寺は、梅若丸の墓所也、しるしの

柳今にうへたり、歳毎に三月十五日は、縁日として詣でぬ、梅若の御影又母の御影あり、物狂ひの姿なり、不斷念佛の道場として誠に殊勝の靈地也、諸人爰に詣でゝ昔を思ひやり、哀を催ほし、歌をよみ、詩をつくり、心のいたれるにまかせて書つゞく、河のながれ、すざきの體、御當家御遊興の地なれば、拙なき口にのぶるも愚かなれば、なぞらへて思ひやるべし、

梅若のはかなき花の跡とひて
鳴鶯やほゝう法華きやう

とよみければ、ともなる人我もとてよめる、

梅若のあと問ふならば鶯も
法華經やめて申せ念佛

とよみてどつと笑ひぬ、

一、兩國橋より右之道南をさして行に、左がは町一町有て、よこてに道有、前の通猶南をさして行に、又一町たらず町や有、夫より東へさしてゆくに、左半町町や、かしばた也、此所すぎて右に橋有、一つめ橋とい ふ、左の道廻向院へ行、前のかし通り東へ行に、一町が間材木がし、横てに道有、前のかし通東へ行に、二町が間眞木がし、うしろは御竹藏なり、左横手に道有、前のかし通左がは一町町屋、此所を過て右に二つめ橋、左に道有、前のかし通東へ行に、肴棚一町有、横手に道有、前のかし通東へ行に、左町一町有て横手に道有、前のかし通東へ行に、村松町一町、よこてに道有、同二町め、よこてに道有、同三町め、よこてに道有、前の町つゞき柳原一町め、横てに道有、堀ばた也、前のかし通東へ行に小橋有、則渡りて左手に道有、前のかし通り東へ行に柳原二丁め、よこてに道有、同五丁目、是は南がしに三丁め四丁め有ゆへ也、横てに道有、同六丁め、よこてに道有、前のつゞき新かや町二丁め、是も一丁め南がしに有、横てに道有、前のつゞき清水町一丁め、横てに道有、同二丁め、横手に道有、同三丁め、よこてに道有、堀通也、前の通東へ行に小橋有、渡りて横て堀通り道有、前のかし通東へ行に、四町町屋、此所過て右に橋あり、左よこてに道有、前のかし通東へ行に、左畠一町有、同よこてに道有、市橋下總守殿前のかし通東へ行に、左畠也、うしろに岩木伊豫守殿、左手に道有、家なし。前の通東へ行に、左畠、うしろに橋和泉守殿、よこてに道有、家なし、前のかし通二町行に、左畠、うしろに本多中務殿、よこて

に道有、家なし、前の通東へ一町ぢかく行に、左畠、うしろに戸田相摸守殿、前のかし通東へ行に、左田地七町ばかり行て、右に橋有、すぐ道行徳川口番所へ行、左に道有、一町程行て東かどにふじの宮有、すぐ道かめ井戸の天神まで道有、前のかし通一町行ば小松川、向へ渡しあり、是までなり、

一、右之内一つめ橋筋材木がし、西よこて通北へ行に、左一町半、町中に道有、右町のよこや有て、伊奈十左衛門殿、此屋敷半町程有て横手に道有、御竹藏へ行、前のつゞき廻向院構一町、西中程に道有、兩國橋筋、前の通行あたり、御細工道心右てなり、左右に道有、廻向院の事奥にしるす故爰に略す、

一、右東うしろ通、材木がし東横手通行に、左町の横手、つゞきて伊奈十左衛門殿地尻一町有、右同町のよこや、つゞき御竹藏、左西へ道有、前の通北へ行に、左廻向院地尻一町、行あたり小細工同心、左右に道有、

一、右より二町東うしろ通北へ行に、左町のよこて有て闕作左衛門殿、小笠原四郎左衛門殿、渡部太郎左衛門殿、西南かど依田小隼人殿、右側町のよこや、つゞき大久保一郎右衛門殿、東南かど岡田仁左衛門殿、此間二町有、行あたり橋本太郎左衛門殿、左右に道有、

一、右東一丁、うしろ通二つめ橋、此所かし舟有、此通北へ行に、左町のよこや、つゞき山川三左衛門殿、設樂源右衛門殿、窪田五右衛門殿、西南かど出野甚五左衛門殿、右町のよこや、つゞきやしきの地尻、此間二町、左西へ道有、前の通北へ行に、左馬場一町の餘有、右朝比奈彌太郎殿、宮野谷八郎兵衛殿、東條十右衛門殿、南かど津輕左京殿、左右に道有、右之通堀ばたに付て東へ行ば十四町有、此間やしきのよこや、行あたり堀、左右に道有、前の通少しゆきて、又堀ばたに付て東へ道有、一町過て二町めに南部遠江守殿、夫より五町行て橋有、是を渡りて又北かしばたに付て一町過て半町ばかりに水野小左衛門殿組、つゞきて又半町酒井作兵衛殿組、それより五丁行て、行あたり堀、左右に道有、前の通北へ行に、左がは御材木、つゞきに屋敷の横手少し有、四町、右がはかど片山千庵、つづきて多田小左衛門殿、杉浦平兵衛殿、川内太左衛門殿、原田藤十郎殿、横山孫兵衛殿、同かど織田金左衛門殿、是まで三町有、横手道有、東へ行に、左かど德山權十郎殿、此間一町行て、左入こみ稲荷の小宮有、右

に道有、前のつゞき一町行て右に道有、前のつゞき、左辻源五兵衛殿吉田杢右衛門殿須頭七右衛門殿、右がは千本左右衛門殿よこや、此間一町過て左右に道有、前の通東へ行に、左御歩行見付衆やしき、右明地、此間一丁過て左右に道有、まへの東へ行道、左御歩行目付衆、安藤次左衛門殿組、右明地、此間壹町過て左右に道有、前の東へ行道二町過て橋有、是を渡りて両の橋づめより左右に道有、堀ばたなり、左の道六町ばかり行ば、業平橋へ行也、前の東へ行道、左石津九兵衛殿、右同組山高宇右衛門殿組、此間一町有、前の東へ行道半町程、左明地、右水野小左衛門殿組、又半町有て左明地、右酒井作左衛門殿組、夫より五丁行て橋有、是を渡りて両の橋づめより左右に道有、前の東へ行道一町ぢかく、左右明地なり、此所過て左右に道有、右之道一町ぢかく堀に付て行ば、東手に錢座有、前に小橋有、前の道東へ行に、右堀二町有、左半町ぢかく町有て鳥井有、龜井戸の天神へ行、此道半町、両がは茶や、前の通東へ行に左半町町、横手に道有、東へ行に、左がは一町の餘、此所過てよこてに道有、一町行て西がはかご入込、かご普門院、つゞき法明寺、二ケ寺の門通に道有、前の道東一町行て左に道有、二町行て行あたり金藏院、西並に稲荷の宮有、横手を一町行て西南かどの寺龍光寺、行あたり堀、左右に道有、前の道東へ少行て、右に廣き道有、前の道少行て左に道有、一町行て行あたり東學寺、左右に道有、前の道一町行て行あたり明地、左右に道有、左の方西がはに法蓮寺といふ寺有、前二つめ橋の通徳山權十郎殿よこや、左日向傳右衛門殿よこや一町ぢかく有て左に道有、前の道北へ行に、橋を渡りて左に道有、前の通北へ行に、右館林宰相様、此やしき二町有、左がは屋敷の地尻、右東へ道有、此通東へゆくに、右がは宰相様よこや三町の餘有、左がはかご船越左衛門殿、つゞき牧野新三郎殿よこや、此間一町半、左手に道有、前の通東へ一丁行て左に道あり、前のつゞき、御歩行目付衆のよこや一町有、此所過て左右に道有、前の通行あたり堀、是よりすぐ道、北かし南かしなり、

一、南かしを東へ行ば、御歩行目付衆屋敷一町過て横手に道有、前のかし通東へ行に、島田十兵衛殿組、此やしき一町有、横手に道有、右に橋有、此所を過て東へ二丁行ば橋有、両の橋づめより左右に道有、堀ばた

也、右之橋渡りて又すぐ道、行當り堀有、南がしの方を東へ行に、石津九兵衞殿組、此やしき一町、横てに道有、此所過て夫より東へ六町行て行あたり堀なり、左右に道有、

一、北がしを東へ行ば御歩行目付衆のやしき一町有、よこてに道有、前のかし通東へ行に、本多平右衞門殿組一町有、横手に道有、右手に橋有、前のかし通二町行て橋有、南の橋詰より左右に道有、此橋を渡りて行あたり堀、左右にかしばた、南がしは前に記し申候、北がし東へついて行に、石津九兵衞殿組一町有、横手に道有、前のかし通、夫より六町行て行あたり也、左右に道有、右前二つめ橋筋、すぐ道すみだ川へ行也、

一、右の東うしろ通北へ行に、左町のよこや有て中川源五兵衞殿、つゞきて酒井三郎左衞門殿、紙谷助左衞門殿、中根三郎兵衞殿、野々山彦右衞門殿、戸田惣左衞門殿、同周防守殿、牧野兵部殿、水野主殿殿、夫より屋敷の地尻半町程有、右がは又町のよこや有て土井周防守殿、かど本田山城殿地尻、此間左右共に四町計有て、左右に道有、前のすぐ道北へ行に、小橋渡りて又左右に道有、前の通北へ行に、左屋敷の地尻有て鴨宮太郎左衞門殿、榊原四郎左衞門殿、右南部遠江守殿よこや、辻五左衞門殿、此間左右共に三町有て、左右に道有、行あたり入こみ稻荷の宮あり、

一、右東うしろ通北へ行に、左町のよこや有て土井周防守殿、同かど本多山城守殿、右がは又町のよこや有て久留島平八郎殿、つゞきて依田勘左衞門殿、伊奈彦右衞門殿、深田三郎兵衞殿、堀田源次郎殿、多門藤兵衞殿、かど朝比奈吉兵衞殿地尻、此間左右共に四町ばかり有、横て左右に道有、前の通北へ行に、小橋渡りて左右に道有、前の通北へ行に、左南部遠江守殿横や、つゞき榊原善右衞門殿、右がは松平伊織殿、影山左衞門殿松野孫左衞門殿、かど千本十郎左衞門殿、此間左右ともに三町程有、横手に道有、行あたり右辻源五兵衞殿屋敷なり、

一、右東うしろ通北へ行に、左町のよこや有りて津戸甚左衞門殿、つゞきて松平杢之助殿天野百助殿志村七郎兵衞殿瀧川久三郎殿鈴木十兵衞殿松平源助殿伴野八右衞門殿戸田新五郎殿同三十郎殿、同かど朝比奈吉兵衞殿、右がは村松町一町め西横手有りて、佐佐平右衞門殿、續きて岡邊太郎左衞門殿加藤市十郎殿

山野次郎左衛門殿 松平右門作殿 島田五郎左衛門殿、同かご川口助十郎殿、此間左右共に四町ばかり有て、横手に道有、前の通北へ行くに、小橋渡りて左右に道有、前の通北へ行くに池田庄左衛門殿、つゞき屋敷の地尻、右がは明地、此間左右共に三町計有て左右に道有、前の通北へ行くに、右御歩行目付衆のよこや、左館林宰相様地尻、此間二町半有て左右に道有、前の通北へ行くに、一町行て行あたり松浦肥前守殿、左右に道あり、

一、右東うしろ通北へ行に、左村松町一丁めよこて有て日下部權太郎殿中山太右衛門殿、夫より屋敷の地尻一町有て松平又右衛門殿島田兵四郎殿、同かご佐藤甚左衛門殿、右がは村松町二町め西よこて有て一町過、つゞき川口七郎左衛門殿久留勘右衛門殿松前半助殿板橋八兵衛殿依田吉左衛門殿同彦左衛門殿川勝平左衛門殿、同かご岡部庄兵衛殿、此間四町程有、横手に左右道有、行あたり堀なり、

一、右東うしろ通、三つめ橋筋北へ行に 村松町二町め東よこて有て上村宇助殿、つゞきて內藤平左衛門殿六木伊兵衛殿廣原源兵衛殿振野四兵衛殿織田九右衛門殿坂四郎左衛門殿山田四郎右衛門殿福王平左衛門殿、同かご星合甚四郎殿、右村松町三丁め西よこて有て夏目茂右衛門殿丸茂五郎右衛門殿河內新右衛門殿粂田源兵衛殿木村喜左衛門殿久留八郎兵衛殿津賀權內殿山田彌三右衛門殿淺田平左衛門殿、同かご大岡善四郎殿、此間左右ともに四町ばかり有り、前の通北へ行くに小橋渡り、兩の橋づめより左右に道有、前の通北へ行くに、左右に明地二町半有て左右に道あり、前の通北へ行くに安藤次左衛門殿組、島田十兵衛殿組、右明地、此所二町半有て左右に道有り、前の通北へ行くに、小橋渡りて左右に道有り、前の通北へ行に、右御歩行目付衆やしき四町有、左本多平右衛門殿組二町餘有て、猶北へ三町半行に、西へ行道四筋有、右御歩行目付衆の屋敷を過て東へ道有、二町行ば業平橋有、前に通一町程行ば行あたり堀なり、左右に道有、

一、右之町、東うしろ通北へ行に、左村松町三丁め東よこて、つゞきやしきの地尻、右柳原一丁目のよこや有、少ばかり行て東へ道有、前の通北へ行に、山高宇右衛門殿組二ヶ所有、此間左右共に四町ばかり有て、

左右に道有、前の通北へ行に、小橋渡りて左右に道有、前の通り北へ六町行て左右に道有、前の通小橋渡りて左右に道有、前の通北へ行に、左御歩行目付衆のよこや四町有、右がは同四町行て、左右に道有、右一町行ば業平橋へ出る、行あたり明地なり、

一、右より東うしろ通、右てに橋有、北へ行に、西かしばた、左側柳原二丁めの東横て有て、山高宇右衛門殿組二ヶ所有、此間四町計有て、左右に道有、右てに小橋有、前の通北へ十町ばかり行ば、右てになり平橋有、それより一町行ば、行あたり堀、左へ道有、源助橋へ出る、かしばたなり、

一、右之通より東がし左て橋有、右側柳原二丁めの西よこて、つゞきに時の鐘つきの家有、田村四郎兵衛殿組、是まで四町有て、左右に道有、左の方に小橋有、前のかし通北へ行に、明地一町半程有て、山高宇右衛門殿組、此やしき一町の餘有て、左右に道有、左の道築地の天神へ行道なり、右之方に小橋有、前のかし通北へ行に、石津九兵衛殿組三ヶ所有、此間五町計有、それより二町行ば、左に業平橋、右之方にも道有、行あたり明地なり、

一、右之通より東うしろ通北へ行に、左柳原二丁めの東よこて有て、田村四郎兵衛殿組二ヶ所有、右がは柳原五丁めのよこて有、あひをへだて丶田村四郎兵衛殿組、大久保平左衛門殿組、此間左右共に四町計有、行あたり堀、左右に道有、

一、右之通より東うしろ通北へ行に、左柳原五丁めよこて有、あひをへだて久貝惣左衛門殿組大久保平左衛門殿組、右がは柳原六丁めよこて有、あひをへだてて永井左衛門殿組大久保平左衛門殿組、此間左右共に四町計有、左右に道有、前の通北へ行に、小橋渡りて又左右道有、前の通北へ六町行ば行あたり堀、左右に道有、

一、右之通より東うしろ通北へ行に、左柳原六丁めよこて有、右がは新かや町よこて有、相をへだて丶左右に明地有、此間四町計有て、小橋有、両の橋づめより左右に道有、前のすぐ道六町行ば左右に道有、行あたり堀、むかふに道有といへども橋なし、一町東に橋あり、

一、右之通より、東うしろ通四ッめ橋筋北へ行に、左新かや町横て有、相をへだて丶松平九郎左衛門殿組、

右がは清水町一丁めのよこや有、相をへだてゝ明地有、此間左右共に四町ばかり有て小橋有、雨の橋づめより左右に道有、前の通北へ六町ばかり行ば又橋有、雨之橋詰より左右に道有、前の通北へ行に、一町の餘行て行あたり神上村、左西へ道有、左大恩寺よこや、右七面明神、西教寺、此間左右共に一町有、行あたり明地、左右に道有、右の方北へ付て一町ばかり行ば、西がはに景光寺金生寺春景寺、東がは明地、此間二町、行あたり堀、左右に道有、かしばた也、右之内七面明神の地尻に、大神宮の社有なり、

一、右之通より東うしろ通北へ行に、左清水町一丁めよこや、右同二丁めよこや、左右のつゞき明地、此間四町ばかり有、行あたり堀、左右に道有、

一、右之通より東うしろ通北へ行に、左清水町二丁めよこや、右同三丁めよこや、左右のつゞき明地、此間四町有て小橋有、雨の橋づめより左右に道有、すぐ道八町行て行あたり柳島村、左右に道有、此間小橋一つあり、

一、右之通より、東うしろ通西かしばた、右に橋有、左がは清水町二丁めのよこや有て、それより十一町行て大澤左近殿、此やしき一町有、左右のよこてに道有、前のつゞきは寺、法勝寺、此寺一丁有、行あたり堀、左右に道有、左の道は業平橋へ出る、

一、右之通より東かし通北へ行に、東かしばた、右がは五町程畠有、小橋有、渡りて又一町計畠有、同道錢座へ行、前の通より一町程行て左に橋有、右に道有、一町程行ば築地の天神なり、前の通より一町程行て、右に鳥居有、それより半町の餘行て、加藤遠江守殿、此やしき二町近く有、左右のよこてに道有、北へ行に、左に又小橋有、前つゞき龍顯寺、つゞき德山五兵衛殿、此間二町行て、行あたり堀、左右に道有、左に小橋有、

一、右之通より四町、東うしろ通北へ行に、左町のよこや少し有て、つゞき畠六丁半程有、右がはも半町ばかり畠有て、京極甲斐守殿本田彈正殿、つゞき明地、此間五丁半有て東へ道有、三町計行て左北へ道有、一町行ば泉入寺、六あみだの內也、前の通東へゆくに、佐竹右京殿、水神の宮有、此間一町、左北へ道有、前の通二町ばかり畠道を通りて、又北へ道有、前の通東へ行に、本多下野守殿やしき有、それより十町ばかり南

東てに付て行道有、行あたり小橋、左右に道有、本庄之北がしなり、

廻向院の事

一、此寺の開發あまねく人のしれる事なれど、古今まれなる事なれば、後世のために記るし侍りぬ、さて其頃は明暦三年丁酉正月十八日辰の刻の事なりしに、乾の方より風ふき出し、頻に大風となり、塵ほこりを吹上て中天にうづまき、雲か煙とあやしむ所に、江戸中の貴賤門戸をば開き得ず、白晝ながら俄にくらやみとなつて、人々心を奪れ氣を失ひ、周章たち騷しに、既に時うつり未の刻ともおぼしき頃、本鄉の四丁目本妙寺といふ寺より失火もえ出、黑煙天に覆ひ、寺中一等に燒あがる、時しも惡風頻に吹付、刹那がうち湯島へ燒出、旅籠町より堀をとび越し、駿河臺へいたり、大名屋形數百家を燒はらひ、鎌倉がしへおしうつる、それより西風になり、さや町へ焰とびうつり、海岸まで燒出て、八丁堀御船藏、其外數ケ所燒ければ、數萬の男女靈岸寺へかけこもるに、程なく當寺の本堂を初て、數ケ所の坊舍一同にもえあがり、車輪ほどなる焰、風にはなされて雨の如くとびちり、大勢集り

（無　緣　寺）



居たるうへに落ければ、頭の髮にもえつき、袂の内より燒出、誠に堪がたかりければ、諸人あはてふためき、火をのがれんとて海邊をさして走り行、泥中ににげこみ、寒さはさむし、食にはうゑ、水にひたりて立すくみ、たま〳〵火を遁たる者あれども、精力つきはてゝ、凍へしすもの多かりけり、或は難所へ追詰られ、のがるゝ事かなはねば、猛火五體にもえ付て、空をにぎり、地にたをれ、たがひに上下押返し、やけし

する有さまは、大焦熱の罪人も、かくやと思ひやられたり、既に其數かぞふるに、九千六百餘人なり、一時にやけ死うせたりけり、又其くれがた、西風いよ〳〵烈しく吹て、やけ殘りたる家々、乾ききりたる屋棟へ、火のこ大いに吹かけ、神田の明神皆善寺、大名屋形町、和泉橋を限りてやけあがり、扨又右の駿河臺の火、須田町へもえ出、一筋は眞直に通りて町屋をさして燒行、今一筋は誓願寺より追廻して押來る間、貴賤老若資財雜具を持はこびて、西本願寺の門前に休みける處に、旋風おびたゞしく吹まきて、本堂寺家數ヶ所の寺々一等に閧と燒たち、山のごとく積上げたる道具にもえ付しかば、集り居たりし諸人、せめて命を助らんと、井のもとに飛こみ、溝の中ににげ入ける程に、下なるは水におぼれ、中なるは友におされ、上成は火にやかれ、爰にて死する者四百五十餘人、扨又通町の火は、傳馬町に燒來たり、數萬の貴賤是をみて淺草こそのき端よしとて、車長持を引つれて、見付をさしてにげける人、幾千萬か知らず、親は子を失ひ、子は親におくれて、押合ひ揉合ひせきあふ程に、或は人にふみ殺され、或は車にしかれ、かゝる折を幸にや、方々の惡徒は出て、或は財寶を切はぎ、目もあてられぬ次第なり、かゝる折ふし、天魔のわざにや、牢屋四人、牢をやぶりてにぐるぞや、それ逃すな捕へよといふ程こそあれ、淺草の惣門をはたと閉ぢたり、されば思ひもよらずして、諸人跡より車長持戸棚革籠を持つゞひ、門際につめかけ、上を下へと揉合ひける、門を開かんとすれど、家財雜具をいやが上に積重ねたれば、扉を開くにせきなく、うしろより大勢押かけ、せきかけしに、柳原よりやけくる火、誓願寺前へ押移つり、大名屋形三十五ヶ所寺院百廿ヶ寺、一面にもえ立、此見付へ三方よりやけくる火のこ、火の雨の如くふりて、集まる諸人の頭をやけば、こらゆるにたえがたく、諸人の肩をふみて中にかけり、或は屋のうへに上りて逃るも有、是は〳〵といふ程こそあれ、高さ十丈ばかりに切たてたる石垣の上より堀の中へとび入けり、されども中にて石にあたり、首を打碎き、或は手足を打折り、或はいやが上に飛入間、悉く死して助かるはなかりけり、爰にて死人二萬三千餘人、三町四方にかさなりて、堀はさながら平地になる、其後ちにとぶ者は、死骸の上にとびける程に、恙なく助かり

ぬ、さしも重々に構へたる見付の櫓に猛火もえ付、大地にひらきてどうと崩れ死人の上に落かゝる、逃後れたる者どもは、向へ進まんとすれど火既に前に廻り、後ろより火のこ雨の如くふりかゝる、諸人聲々に申念佛天に響き地を動かし、前後猛火にとりまかれ、一同にあつと叫ぶ、其聲々の耳に響き、目もあてられぬばかりなり、其夜亥の刻ばかりに御米藏に火のてつき、爰に集まる者ども七百餘人一度に死す、此火牛島新田まで悉くやけ行て、寅の下刻に時移り火事はやう〳〵静まりぬ、既に其夜も明はなれ、正月十九日にもなりしかば、やけ殘りたる者ども、命ばかりを助かりて、やう〳〵てと身ばかりにて夢のさめたる心地して、親を尋ね子をよばり、妻は夫を失なひて、聲聲によび叫ぶ、されどもやけ死す者どもは、首のやけはてゝあまほうしの如くになり、衣類は殘らずやけうせぬ、形も黑くふすぼりて、竪横に肉はさけ、其人體のあらざれば、どれを誰とも見わけなく、歎き悲むばかりなり、かゝる折しも不敵なる惡盜人ぞ怖しけれ、是は親よ兄弟とて、死骸扱かふふせいして、死人の腰に付たりし金銀を奪とり、家財道具のやけ殘り、不敵に取行有樣は、怖しくあさましけれ、さて又其日の巳刻に、小石川新鷹師町より火出て、黑煙りのあがりしを、雲か煙りか、辻風にふきあぐるやけばいか、又火事とはわきまへず、しかも北風烈しくして早時刻も移らぬに、吉祥寺に火のて付、學寮院の一時にもえ、傳通院を初として廿餘ケ寺一同に煙渦まきやけあがり、本鷹師町へやけ出、御殿主、二三の丸、諸大名の大屋形十五ケ所、常盤橋の內大屋形、其外むねとの大屋形四十三ケ所、北南七十二ケ所數万間、前後十五町が其間、一同にもえあがり、焰は天にみち雲をてらし、火の雨をふらしつゝ煙は四方をやみとなし、鐵砲の藥、焰硝に火のつけば、數万のいかづち一どに響き渡るにことならず、爰に一つの奇妙有、紅葉山東照權現樣御宮殿へ、風に火のこ雨霰とふりかゝり、既に危き所に北風俄に西にかはり、紅葉山西之丸はことゆへなく殘らせ給ふ、怖るべし敬まふべし、神力のほどぞありがたき、扨八重洲がしへ其火うつり、南北廿四町一面になり、町やをさしてやけ出る、是に驚き中橋京橋までの者共、あはてて騷ぎ、やけ跡へやゆかん、風下へや行んとさまよひけるが、かぢ町長崎町の者共

前後一つになつて、いやが上にせきあひ、家財はちまたをさまたげ、辻小路通るに所なく、押合ひ揉合ひする所へ、大名家中の名馬綱切て放せば、萬民せきあふ中へ驅込み踏殺し、はねたをし、猛火は先々にもえわたり、四方の橋々一時にやけをち、今は逃るべきかたなく、右往左往に押合ひ、人は我、われは人をたてとなし、互に火をばよけんとすれど、煙にむせび伏まろび、將棊倒になる所に、ほのほ一度に吹かけて二萬六千人の餘爰にて燒死、南北三町東西二町が間にかさなりふし、ひとへに山の如く也、夫より南は新橋木挽町、東は材木町水谷町へやけわたり、諸大名の藏やしき十六ヶ所一度にやけくずれ、鐵砲津へやけぬけ、其日の酉の刻ばかりに海際にてやけとまる、淺草川深川より是迄惣て六里餘の湊にこぎ浮べる船の、幾萬艘かやけうせ、戌の刻ばりにやけ靜まり、今はかふよと思ふ所に、糀町五町めより又もえ出、西風夥しくしはをまくつてふきたて、大名屋形數十ヶ所やき拂ひ、旣に西の丸紅葉山危かりしに、愈々神力あらたなるか俄に風のふきなをり、北になることふしぎ也、さて南の大名小路、大小名の大屋形四十六ヶ所、殘ずやけぬけ櫻田の町に出、愛宕の下八十五ヶ所の大屋敷、海際のやかた十八ヶ所、增上寺に至まで、其夜丑の刻まで燒亡す、されども增上寺は、東照權現樣御社台德院樣御臺樣いづれも御魂屋、本堂經藏鐘樓堂五重塔三門裏門殘りぬることあらたなれ、扨表門を初として所化寮百十ヶ寺殘らず燒通、神明の本社神樂堂護摩堂あやしの禿倉まで一時に燒失せぬ、增上寺より南へ十一町、芝口三丁目濱てにて燒留る、本郷より是まで六十餘町、四方十餘里の廣野となる、惣じて町中五百餘町、大名小路五百餘町、同屋形五百餘宇、小名宿所六百餘ヶ所、其外次々のともがらは擧て數へ難き所也、御殿主、大手の御矢倉を初て、外廓、淺草神田四谷赤坂青山の見付〳〵三十餘の御矢倉、又江戸中の橋の數六十餘ヶ所、日本橋を初として、皆悉くやけ落ぬ、たま〳〵殘物とては、一石橋、其橋ぎはに居住する後藤源左衞門が家ばかり、是ばかりぞ殘りける、神社佛閣三百五十餘宇、土藏の數九千餘庫、代々の重寶家々の記錄、此時にあたつて悉く滅しけり、其外雞犬牛馬等、生とせいける物ごとに、やけ死其數はいかでか數へつくすべし、爰の川、かしこの堀、或は百八二

百人、死倒たる死骸共、凡十萬二千百餘人、一類眷屬しれたるは夫々にとぶらへ共、其人體の知ざるは、河原の者に仰せ付られ、武藏下總の國境牛島といふ所に、舟にて運び遣はし、六十間四方に堀埋み、其上に冢をつき大佛を安置し、増上寺より寺を立られ、今諸宗山無縁寺廻向院と號し、佛法流布の靈地是なり、さて其頃燒死萬靈の爲に、諸寺の僧を集め仰られて千部の經を讀誦し、其跡を弔ひ給ひけり、夫より此かた不斷念佛の道場として、道心堅固の所也、ほつくに、

　風もなくちるもやむゑん寺の花

一、誠に一業所感の者ども、諸國より集まり、一時にやけ死て同じ穴に埋まれ、一所の土となりけるも、過去世の因縁あるべしや、生殘たる姥祖父、若さかんの孫子を失ひ、夫にをくれ、妻に別れ、子にはなれたる者ども、老若男女の袖を連ね、此寺に詣でつ聲打あげて念佛し廻向するこそ殊勝なれ、さすが廣大無縁なる江府の都と申せども、一時の煙となり行て武藏の原となりしかど、月の入べき草もなし、かゝる折しも何者かよみけん、

　武藏野はけふはなやけそ若草の

　　つまもこまれり我もこまれり

去程に、諸萬民やけ殘る火にかきあたり、圍をすべきよすがもなく、晝はともかくも紛れしかど、夜は物の音たえて物すごき有さまは、言ばにものべがたし、ことにげんごくやけぬれば、求むるに食物なし、既に餓死に及びしに、御城樣より仰付られ、おなり橋新橋日本橋すじかい橋増上寺前に假屋をたて、粥をたかせ飢人窮民に施行し給ふに、瓦のかけ、茶碗のかけ、半分やけたるごきにうけ、食するこそあさましけれ、頭の髮はやけちゞれ、或はかた身かたほうや、手足やけつる者も有、或は衣裳のびゞしきを半分やきて片身ばかりを纏ふも有、かゝる者も皆富貴榮裕に榮へし者のはてぞかし、さてきさらぎの中頃には、竹の柱にこもをはり、假の屋をしつらひ夫々の商賣せしが、後は逃散りし者共方々より寄集まり、次第々々に賑あひける所に、公方より銀子一萬貫目を下し給り、是をもつて家居を悉くしつらひ、もとの如く商賣せしむべしと仰下され、其年の九月十月には、町々の者棟を揃へてたてつゞく、もとは大道の廣さ六間なりしか共、往來狹しとて今は町の廣さ十間に定られ、車馬道に

とゝこほりなく、ゆきゝ往還自由なり、又白銀町より柳原まで町屋一通をのけて、高二丈四尺に石をもつて、東西十町餘りに土手をつかせ給ふ、又日本橋南萬町より四日市まで町屋を取のけ、高四間に河端にそふて北を請、東西二町半に疊み上らる、日本橋より京橋まで八町の間、町屋三ヶ所を取のけ、會所三十間づつに廣くなし給ふ、是は町屋餘りせき合、諸人いやが上に入こみ、やゝもすれば失火を出し人民をなやます、其上此たびの大火事に、人民やけ死す事も、所せきつまりたる故とて、かく改まりをなさしめ給ふなり、さて右の取のけられし五ヶ所の町人には替地を給はり、其上引料として家一軒に金子七拾兩宛下されけり、又其年の暮には、類火の大名小名殘らず黄金を恩賜有けり、上は公侯より下は民下に至るまで、普く君の御惠に依て元の如くに治り、繁昌日々にまし高家貴人は禮儀厚く、賤き庶人も財産の利に飽て、目出度榮ふる事、年にまし日に百倍せり、誠に

龜の甲のはげたをやみん君が春

江戸雀十一巻目終

江戸雀十二巻目　従二御城一東の方

南本庄之分

一ッめ橋より、四ッめ橋、深川村、東小奈木村、小松川、行德川口、三俣、上之橋、中之橋、下之橋、大渡、新田島、永代島、靈岸寺之近邊之事、付永代島八まん宮之事

一、一ッめ橋筋南へ行に、兩側町茶やなど有、此間二十間計過て左東へ道あり、此通東へ行に、左がは町の地尻、此間二町有、右がは町一町有て八幡の御旅所、つゞき稻荷の宮藥師堂有、入込に西光寺、是まで一町、土屋但馬守殿、此屋敷二町ぢかく有、左町の地尻、行あたり堀、左右に道有、かしばた也、前の通南へ行に左半町近く町有て、右に御船藏三町有、左八幡の御旅所深川村、此間三町過て南へ行、左にあたけ丸、大船なり、此間一町過て左の方に東へ道有、一町行て南西かど松平右衛門殿、左右に道有、前の通南へ行に、右松平右衛門殿、此屋敷一町有、石取場あり、左側かど太田備中守殿、つゞきて尾張中納言様、伊奈半十郎

殿、此間二町有て左右へ道有、かしばた通東へ少し行て右に橋有、左がは伊奈半十郎殿よこや一町の餘有て、左北へ道有、前のかし通東へ行に、小橋渡りて又左北へ道有、前のかし通東へ二町行て右に橋有、此所に貸船有、左に道有、前のかし通東へ行に、久増院よこや一町有て、左北へ道有、前のかし通東へ行に、屋敷の地尻二町近く行て一心寺、夫より一町行て北へ道有、前のかし通東へ行に、近藤彥九郎殿地尻一町有て、水戸宰相樣、つゞきに町少し有、中坊宗仝よこや、是まで二町の餘有て左北へ道有、前のかし通東へ行に、小橋渡りて又東北へ道有、前のかし通東へ行に、横山内記殿よこや、つゞきて細川若狹守殿、十願寺地尻、此間三町半有て左北へ道有、前のかし通東へ行に、一町過て柳木十三郎殿、さる江村有、此間四町過て小橋渡り、雨の橋詰より左北へ道有、夫れより一町の餘過て又小橋有、是を渡りて左北へ道有、前のかし通東へ行に、町一町有、つゞきなべや町、津輕左京殿、此間二町半の餘有て左北へ道有、前のかし通東へ行に、小笠原土佐守殿よこや、松平越中守殿、つゞき少し町有、此間二町半有て左北へ道有、但かしばた也、

家はなし、前のかし通東へ行に、屋敷少し有て北へ道有、一町程行ば靈巖寺屋敷あり、前のかし通東へ行に、やしき少し有て東平方村、正敎寺、此間五丁程有て北へ道有、前のかし通東へ三町ばかり行て稻荷の宮有、東こなぎ村、此間三町過て北へ道有、前のかし通行あたり御番所なり、小松川行德川口なり、前の伊奈半十郎殿よこやに橋有、是を渡りて行あたり町、左右に道有、左の道南かし通東へ行に、新町とて一町あり、つゞきて町有、松平伊豫守殿並に少し町、是まで一町の餘有て南へ道有、引込町とて一町有、東に稻荷の宮有、前のかし通東へ行に、町有て左手に橋有、此所に大船有、前のかし通東へ行に、伊丹左近殿、曾根源左衛門殿、是まで一町程有、横てに道あり、前のかし通東へ行に、佐竹右京殿、岡田豐前守殿、牧野半右衞門殿、稻葉美濃守殿、石八右衞門殿、秋本攝津守殿、是まで三町程有、よこてに道一町行て行あたり神保左京殿、左右に道有、前のかし通東へ行に、板倉筑後守殿、此屋敷一町程有、横手に道有、前のかし通東へ行に、松平丹波守殿、牧野佐渡守殿、增山兵部殿、岡田豐前守殿、是まで三町、よこてに道有、前のかし通東

へ行に、内藤出雲守殿、水野監物殿、同出羽殿、是まで二町有、よこてに道有、一町行て行あたり又水野出羽守殿、西つゞき同監物殿やしき有、東西に道有、前のかし通東へ行に、後藤八右衛門殿、天野彌五右衛門殿、保科筑前守殿、松平豊前守殿、土屋民部殿、秋本玄正、是まで都て四町の餘有、横手に道有、前のかし通東へ行に、堀市正殿、土井能登守殿、酒井圖書殿、此間二町有、よこてに道有、前のかし通東へ行に、堀市正殿、土井能登守殿、酒井圖書殿、遠山半九郎殿、新庄宮内殿、石丸庄三郎殿、此間三町程、よこてに道、三町程行て西手に石不動、同申あり、夫より二町の餘行ば、松平肥前守殿屋敷へ行、前のかし通東へ行に、戸澤能登守殿、尊空和尚、丹羽左京殿、石川大隅守殿、内藤右近殿、是まで三町有、横手に道あり、かしばた也、前のかし通東へ行に、小橋渡りて津田平左衛門殿、吉良上野殿、皆野西庵、本多内記殿、是まで二町の餘、よこてに道有、前のかし通東へ行に、加藤平左衛門殿、蜂須賀飛騨守殿、戸田主税殿、稲葉八左衛門殿、大森半七殿、松本彌五兵衛殿、新庄隱岐守殿、小笠原彦太夫殿、此間四町程有、よこてに道有、前のかし通東へ行に、加々爪次郎右衛門殿、佐藤勘右衛門殿、中根平十郎殿、本多帶刀殿、戸田相摸守殿、是まで三町程、よこてに道有、二町の餘行て、西に淨妙寺、前のかし通東へ行に、織田金左衛門殿、水野半左衛門殿、川野了意、是まで四町、行あたり小松川といふ、右に道有、行徳川口なり、

一、右之内曾根源左衛門殿よこや一町行ば、左へ道有、半町行右て南へ道有、一町半行て少し町行あたりに有、左東へ道有、少し行て南へ行に道、西がは一町まちや、行あたり靈巖寺の坊舎二ヶ所有、右近道一町程有、内に橋有、左の道濱邊を四町程行て、南てに松平加賀殿濱屋敷有、夫より五町の餘行て、左北へ道有、

一、右之内行あたりの町より、左東への道と書置候通、六町程やしきの地尻を左に見て行ば、右に水野監物殿、同出羽守殿、同やしきの地尻有、夫より七町程行ば、右に極樂寺、左東へ道有、此通七町ばかり行ば、南手に自法寺有、内にまがり道、小橋有、夫より四町の餘行ば、行あたり明地、左右に道有、前の通極樂寺のよこやに付て二町半行ば、左に道有、小橋渡りて南



東かど松平備前守殿やしき有、夫より又三町行て小橋有、則渡りて左手に石の猿有、夫より一町行ば海なり、前の通少し行て左東へ道あり、四町の餘行て南手に伊奈半十郎殿やしき有、夫より六町ばかり行て行あたりは明地なり、左右に道有、前の通堀端に付て十六町東へ行ば、小松川の川筋へ出る、左北へ道有、
一、伊奈半十郎殿よこての橋、南の詰より右への道西へ少し行て南へ道有、此通右側に御舟藏有、彌兵衛町、此所一町過て横手に道有、左に町の横屋並に稲荷の小宮有、右杉浦内藏殿、此間一町行て行あたり、榊原熊之助殿、前の通南へ行に、杉浦内藏殿、此やしき一町有、よこてに道、二町過て行あたり伊奈半十郎殿、前之通北へ行に、少ばかり町有、上の橋を渡りて南へ行に、次郎兵衛町、夫より中の橋を渡りて藤左衛門町、又一町近く行て、横手に道有、行あたり稲荷の宮、前の通南へ行に、町半町の餘有、下の橋をわたりて助左衛門町、一町の餘を過て向へ大渡有、夫より又一町の餘過て左東への道八幡へ行、橋口助兵衛町と云、前の通南へ行に佐左衛門町、行あたりに橋有、左北への道かしばた、室町前の橋を渡りて一町行ば又橋有、此所に貸船あり、前の橋を渡りて右之道榊原越中守殿、夫より二町過て行あたり松平伊豆守殿、前に小橋有、左北へ道あり、
一、八幡へ行道、橋口助兵衛町右側に正元寺、此間一町の餘過て左右に道有、小橋渡て又左右に道有、前の通東へ行に、江戸町一町近く有て左右に道有、左南の道かしばた隠即寺万徳寺、此間一町、横手に道有、前の通東へ行に、小橋渡りて左右に道あり、前の通東へ

行に、両側茶屋一町有、左北へ道有、前の道猶東へ道有、助左衛門町と云、左がは心光寺、つゞきに茶や一町有、左北へ道有、猶東へ行に、右がは茶や、左永代寺半町有、夫より東へ行に、右がは茶や少し有て横手に道有、少し行て行あたり渡部大隅守殿、前の通左がは明地少つゞ二町程有、右がは茶や一町の餘有て、はづれに稲荷の宮あり、左北へ道有、八幡への道、前の通二町程行て左への道加々爪甲斐守殿濱屋敷、すぐ道三町程行ば紀州中納言様御やしき有、扨又八幡への道一町が間、両側茶や、小橋渡りて夫より東へ一町程行て北へ行に、八幡宮有、左天照大神宮、右春日大明神有、

永代島八幡宮

一、此永代島の八幡宮は、そのかみ寛永元年の頃、長威法印其年七旬にたけたり、あるよの夢に、八正宮をおがみ奉り、夢中に託宣有けるは、我永代島に鎮座すべしと、斯の如く數度の靈夢を蒙むり給ふ、是によつて自から信を起し、一社の宮所を建て八幡宮を勸請す、同き八年にあたりてやうやく再興をとけたり、御神體は菅丞相の御作として、中古は源三位入道頼政是をあがめらるゝ、其後千葉の助の家にうやまひ、後又大將軍源の尊氏公に傳はり、夫より鎌倉の公方基氏より同持氏公に傳はり、同管領上杉家に崇敬有て、太田道灌深く崇め奉る、もとは下總國におはしましけるを、和光有緣の大悲によつて今此當社に安置せしめ、御神體とならせ給へり、伊勢太神宮春日大明神、左右に相ならび給ふ、則八幡三社と崇め奉る、同き寛永二十年 癸未八月十五日に初て 祭禮を行奉る、



夫より毎年式として愈々神德深く諸人渇仰の頭を傾ぶけ、島のうち日々に賑ひて今は人家立つゞけり、慶安四年の頃より法務貫首の仰によつて宮寺となされ、大榮山永代寺と號せらる、同く五年の夏、弘法大師告げ給ふ御夢想の歌に、

名にしおふひろめん法のわが家を
　人のこゝろのうるほはずとも

是によつて、高野山兩門主碩學其外東國一派の衲僧、この永代島に集會せしめ一夏九旬の間法談有、別に高祖大師の御影堂を立て眞言三密の秘蹟を講ず、夫より此かた神前に龍燈を上る事ありて、おがむ人すくなからず、同じ年の秋、天下泰平のために神前にして流鏑馬をはじむ、これ鶴が岡の法式を移す、左右に假屋棧敷を構へ、是を見る貴賤上下市をなせり、萬治三年の夏の頃、御室の宮日光御社參の節、下向の道に此島に詣ふで給ひ、天下安全のため、兩日の間神前に御念誦を勸め給ふ、此折から兩院家の詠あり、

永代のさかへひさしき此島の
　めぐみたえせぬ神垣の內

又

立並ぶ常盤の松も色そひて
　治まる御代は永代の寺

寔に此島の地景は比ひすくなし、東には安房上總山を見やり、南には品川池上も見えわたる、未申の方には富士のたけ、乾の方には江城、北に筑波山ほのかに見えて興を催ほす、艮の方には下總にうちつゞき、末は海邊の磯近く、鹽やの煙立のぼり、風に靡くよそほひまで、殘りなく見えわたる、詠つきせぬ景色なり、此島を題として、詩を作り歌よむなり、

さしくれば波こゝもとに立しほの
　ひけば洲崎も永代の島

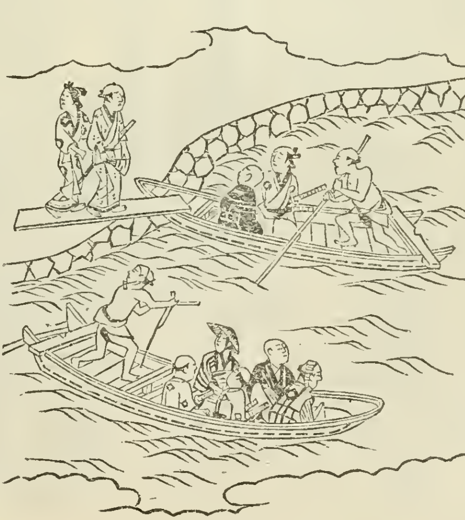
爰もまた同じ流れの岩淸水
　すむ心から永代の島

永き代の浦吹風に霧はれて
　八十島照す月の影哉

下愚もかくぞ
　咲つゞく花や永代島の景

一、壹つめ橋より小松川の川際までの分、壹つめ橋を左になして、南がしを東へ行に、小橋渡りて又右南へ道有、前のかし通東へ行に町一丁有、前の通東へ行ば

町一町有、左に二つめ橋、右南へ道有、永代島へ行、前のかし通東へ行に町一町有て右南へ道有、前のかし通東へ行に町一町有て、右南へ道有、前のかし通東へ一町行て又南へ道有、前のかし通猶東へ行に、同前町一丁め、此所過て南へ道有、同町二町め、右横手に道有、左に三つめ橋有、二町めにつゞきて德右衞門町一丁め、横手に道有、同二町目、西すぐによこて有、又東はづれによこて有、但かしばた也、前のかし通東へ行に、小橋渡りて南へ道有、是もかしばた也、前のかし通東へ行に柳原三丁目、是は北がしに一丁め二丁め有ゆへなり、つゞきて四丁めよこてに道有、四丁めならび新かや町一丁め、横手に道有、同三丁め二町め北がしに有、右によこて道有、左に四つめ橋有、前のかし通東へ行に町一町有、是より智樂院持、よこてに道有、前のかし通東へ行に、横手に町一町有、前の道猶前へ行に又町一丁、よこてに道有、但かしばたなり、前のかし通東へ行に、小橋渡りて南へ道有、前の通東へ行に四町程畠、此所過て左に橋有、右に道有、前のかし通東へ行に畠、うしろに牧野遠江守殿、此間二町近かく有て横手に道有、前のかし通東へ行に畠二町



（深川大渡し）

有、此間に中に道有、うしろに丹羽左京殿、前田右近殿、横手に道有、前のかし通東へ行に、畠三町半程有、うしろに松平兵部殿、土屋民部殿、横手に道有、前のかし通夫より六町程過て左に橋有、右に道有、前の通夫より一町行ば、向へ船渡しあるなり、

一、右之町のよこて通、二つめ橋筋南へ行に、両に町のよこや有て左小笠原丹波守殿地尻、右宮崎若狭守殿組二ヶ所、つゞきに島田出雲守殿、外に又二ヶ所

有、左一町町や、後に宮崎若狭守殿組、左右に道有、此間二町近く有て小橋有、是を渡りて左入込、堀ぎわ眞田伊豆守殿、つゞき長景寺、右に道有てつゞき津輕七郎兵衞殿よこや、此間一町計有て左右に道有、前の通南へゆくに、左酒井左衞門殿よこや二町ばかり有、土井周防守殿、此屋敷一町、横手に道有、南東かどに菅野谷八郎兵衞殿、前のつゞき松平内藏殿、此屋敷一町の餘有、左久増院地尻一町の餘、右一町程明地なり、此所過て左右に道有、前の道南へ行に、橋渡りて行あたり町、左右に道有、左へ少し行て南へ行に、兩がは屋敷のよこや一町程有て、左坂部三十郎殿、同三之助殿、右伊奈左衞門殿、左靈巖寺、是まで三町程、行あたりの寺淨心寺、夫より南をさして行に、一町の餘行て右に材木町五町程が間に有、但堀の中に有、あい〳〵に道あれども家はなし、藪の內なり、左がは正覺寺廬尊寺淨蓮寺、並に海福寺心行寺玄心寺法生寺養學寺、つゞきに久世大和守殿、是まで四町、夫れより小橋渡りて、明達寺半町程有、夫れより又小橋渡りて二町程行ば八幡の道へ出る、左右道あり、

一、右之町より東うしろ通南へ行に、兩側町のよこや有て、右小笠原丹波守殿、つゞき宮崎若狭守殿組、左榊原十郎兵衞殿、松平半七殿、東條武兵衞殿、此間二町近く有て夫より右の堀に付て南東へふりて行ば、右は屋敷の地尻なり、一町の餘行て左右に道有、行あたり阿部伊豫守殿、東つゞき諸星清左衞門殿、近山五郎右衞門殿、久世大和守殿、是まで三町近く有、此通東十町程つゞきて有、右之久世大和守殿屋敷より一町行て、右手に土井能登守殿、此やしき二町有、夫より小橋渡り、兩の橋詰より左右に道有、前の通東へ行に、左に永井伊賀守殿、此屋敷二町有、右大德院かまへ一町有、あひをへだてゝ牧野因幡守殿地尻一町有、夫よりさきに家なし、前の阿部伊豫殿より右への道に小橋有、是まで渡りて西へ行に、右長景寺、左に道有て酒井左衞門督殿、此間一町行て行あたり堀、左右に道あり、

一、右之通より東うしろ通南へ行に、兩側町の横や有、左山名表左衞門殿、右松前八左衞門殿、つゞき屋敷の地尻、左津田平四郎殿、建部傳內殿、一色七兵衞殿、新庄勘助殿、打越次右衞門殿、右間宮又左衞門殿、左內藤虎之助殿、右島田權三郎殿、左山內數馬殿、此

間三町、行あたり諸星清左衞門殿、左右に道有、

一、右之通東うしろ通南へ行に、兩側町やの横手、左五見小才次殿、中山勘之丞殿、右奈井五郎兵衞殿、津金理左衞門殿、左細井喜三郎殿、右山崎三左衞門殿、左小幡五左衞門殿、右皆川半助殿、つゞき屋敷の地尻、左阿部大膳正殿、松平長八殿、此間三町、行あたり久世大和守殿、左右道有、

一、右之通東うしろ通南へ行に、左右に町の横や、但同前町一町め二町めのあひなり、右菅沼勘解由殿、右口口才兵衞殿つゞきて梶藤右衞門殿小見山左兵衞殿門奈三郎右衞門殿、つゞきやしきの地尻、六郷藤右衞門殿、曾我根助之進殿、此間三町、左右に道有、前の通一町行て左東へ道有、前の通南へ行に、左織田內記殿、此やしき一町過て左右に道有、左の道東へ行に、南がは近藤彥九郎殿、つゞき水戸宰相樣御やしき地尻、此通二町行て行あたり北條安房守殿、前の通より右の道へ西へ行に、左淨行寺よこて一町有、右に若王寺、つゞき鈴木修理正殿、左一心寺地尻、松平佐渡守殿美濃部十右衞門殿、此間四町の餘行て行あたり寺久増院、左右に道有、前の通南へ行に、一町行ば左右に道有、行あたり堀なり、

一、右之通東うしろ通南へ行に、兩側町の横や有て、左服部六左衞門殿、つゞき屋敷の地尻、右柴山主稅殿伊鄕次左衞門殿中村金右衞門殿加藤三左衞門殿松平忠兵衞殿戸田源兵衞殿小村七兵衞殿左竹本武兵衞殿、右別所理兵衞殿、左一色二郎兵衞殿、此間三町、左右に道有、前の通一町行て行あたり織田內記殿橫屋、左右に道有、

一、右之通東うしろ通南へ行に、兩側町の横屋、左天野五郎太夫殿組一町の餘有、右森佐左衞門殿、本田新七郎殿、大炊利兵衞殿、高井三郎兵衞殿、つゞき屋敷の地尻、左明地一丁の餘有、此間三町、行あたり土井周防守殿、左右に道有、

一、右之通東へ一町、うしろ通西かしばた南へ行に、町のよこや有、つゞきて鈴木佐左衞門殿組一町の餘有、夫より岩出佐五右衞門殿組一町、是まで三町ほど、左に橋有、右へ道有、前の通南へ行に、土井能登守殿よこや一町の餘有、右西へ道有、前のかし通り南へ二町近く行て北かど中坊宗空、行あたり堀左に有、右に道有、但かしばたなり、

一、右西がしより東の通同かし南へゆくに、柳原三町め西よこて、つゞき戸澤能登守殿よこや一町の餘有、左東へ道有、此通を行に北側同やしき一町、南がは永井伊賀守殿地尻一町、行あたり曾根五郎左衛門殿地尻、右南へ道有、前のかし通南へ行に、左永井伊賀守殿よこや一町半有、小橋渡りて右に橋有、左にも道有、前のかし通南へ行に、大徳院横や一町半程有、左に道有、東へ行に右宮毛能登守殿よこや、細川若狭守殿地尻、つゞき十願寺明照寺地尻三町半有、左大徳院地尻一町有て横手に道あり、前のつゞき牧野因幡守殿、此屋敷一町有、よこてに道有、前のつゞき、夫より半町程明地よこて有、猶東へ行に、左右に一町程づゝ有、行あたり明地、左右に道有、前のかし通南へ行に、宮毛能登守殿、横山内記殿、此間一町、行あたり堀、右に橋有、左に道あり、かしばた也、

一、右之通より二町東の通南へゆくに、両側町の横屋有、左坪井理右衛門殿、右玉澤彦兵衛殿松平淸左衛門殿曾根五郎左衛門殿、横手に道有、前のつゞき永井伊賀守殿東よこて、左は明地、此間三町、左右に道有、前の通南へ行に、右牧野因幡守殿東よこて、左がは明地、此間一町の餘有、行あたり細川若狭守殿、左右に道有、

一、右之通より東うしろ通南へ行に、両がは町のよこや少し有て、左松平因幡守殿、右水島百助殿田代又左衛門殿奥村七郎右衛門殿、つゞき明地、夫よりこの間三町、左右に道有、前の通三町の餘行て行あたり堀、左右に道有、但かしばたなり、

一、右之通より東うしろ通南へ行に五町程道有、行あたりさるへ村、左右に道あり、

一、右之通より東うしろ通西かしばた、左に道有、南へ六町半有、行あたり堀、左小橋有、右に道有、但かしばたなり、

一、右之通より東かしばた南へ道有、六丁半有、行あたり堀、右に橋有、左に道有、かしばた也、

一、右のかし通より四町、東うしろ通南へ行に、右がは田畠、左に畑少し有て、松平市正殿松平中務殿土井周防守殿酒井壹岐守殿小笠原土佐守殿、右に津輕左京殿横手二町程有、行あたり堀、左右に道有、かしばたなり、此間六町半あり、

一、夫より東よこて通四通程有レ之といへども、屋敷

の横手、又は田畠の道なる故しるすに及ばず、
右凡東西南北三里四方を有増記す、
右書付之分惣數
一大名屋形數、凡五百貳拾ヶ所之餘歟、
一小名屋敷數、凡貳千八百七拾ヶ所之餘歟、
一寺院之數、凡八百五拾ヶ寺餘歟、
一神社之數、凡百貳拾ヶ社之餘歟、
一町數、九百町之餘に及ぶ歟、
一橋數、凡貳百七拾ヶ所之餘歟、
右書付之道を町數に積りて凡貳千八百八拾町之餘あり、但三拾六町一里にして凡八拾里之餘有レ之歟、

江戸雀十二卷目終

跋

それ順路をわかつは、後世のためにして當代の鑑なり、しかあれど、予愚朦にして己が心に任て書つゞけ侍れば、善惡の二道おほからん、大略我人の行べき跡をしたひ、或は其至れる道を詩聞いて、今一部の書とはなせる、うらむらくは、諸國の人此江府に入込事幾程といふ數を知らず、然れば斯の人此書を見て、わが行べき所の方角を見、言傳書翰等を屆まほしくおもふさき、それ〳〵の名付所を見て贈り屆けんにはしかんや、又當所案内の人々は、爰の近道、かしこの曲り道まで、御存知有べけれど、春雨のしめやかにふり、つれ〴〵のあまりには、此書をみてゐみをふくみ、予が淺心を胸にたゞさへて其批判のいたさしめ、あやまりのおほき所を世人に傳へて、あきらかしめ給ふべし、是唯當座の笑草にて、又と取あぐべき物ならじ、亦寺社名所舊跡は、右序せしがごとく、古き人の物語を書付侍り、こしをれ歌あだ口發句は、是たゞあんかうの口に出るに任たれば、見る人のために耻をさらし、閒人のために嘲弄せられ侍る、されどもい

くらかるくぼに是をゆるし給へ、盲蛇におぢずして、わけなき口をたゝきて、かくなん世にひろめたれば、悔ても甲斐はなけれども、愚才の程推量せらるる事、粗いかめしき事にや侍るべき、

延寶五年丁巳仲月

武州江戸之住
絵師 菱川吉兵衛

江戸大傳馬三丁目
本屋 喜右衛門板

増補江戸咄序

夫めでたき御代のためしには、唐土の堯舜本朝の延喜天暦の聖代とは申せ共、今此御代にはよもまさじ、まことに四海の波しづかにて、吹風枝をならさねば、國富民豐にして、武き家には弓をふくろに入、干戈は函に治て、猶も御代を守護し奉れば、農人は春耕夏植て秋かり納る業を營み、工商はそれ〴〵の所作賣買に暇なく、子に伏し寅に起き、おのがしわざの樣々なるにも、上君の廣き御めぐみの有がたさよと、萬歲を唱ふ聲、ちまたにみちておびたゞし、かゝる折にも生れあひ、水上きよき御代ぞとて、流の末のわが身まで、榮ゆく花の御江戸にすみける事こそうれしけれと、古郷の事をも打忘れて年月を送り侍る所に、旅の者とうち見へたる男、ふと尋ね來りぬ、笠をぬぎけるを見れば、古郷のいとこにてぞ有けり、夢の心地して、是は何故爰には來り給へるぞといへば、彼者申樣、さればとよ、在所にては、御身の御兩親、われらが父母まで、其方の事明暮いかゞとあんじくらされけるが、次第に年もよりければ、呼下し、家督をもゆづり、隱居の身となり、安樂に月日をも送り度との願、月にかさなり、日にまさりて、とかく片時もはやきこそほいなれ、善はいそげと世話にもいへば、われにとくのぼりてともなひきたれとの使ひにこそ來りつれ、早々思ひ立給へとすゝめける程に、予がいはく、古郷ゑは錦をきて歸るとこそきゝつるに、我はそれにはひきかへて、しきしのたもとを外聞あしくひるがへさんは、且は我みのぶてうほうをも人にしらせ、父母親類のおもてぶせになさんもいかゞなれば、今しばらくも見合てこそと辭しければ、彼もの申やう、それは去事なれ共、老少不定の習ひなれば、もしへん成事も出來ては、悔ても返るべきにあらず、とかく互に無事無難なる内に、父母の願を叶へ給ひてこそ、孝行にもなりなんと、强ていさめけるにぞ、打つれてくだるべきにきはめぬ、扨むかし今の戀しゆかしの物がたり過て後、彼もの申やう、そなたは數年當御地に住馴給ひぬれば、町中は申におよばず、神社佛閣迄、殘らず見たまひつらんが、われは此度初てのぼりければ、東西南北をもわかたず、此まゝ歸りなんはほいなき事也、此序にしばらく逗留して、あなたこなたを見

めぐり、此物がたりを古郷のみやげにもせばやとぞ思ふ、ちか比太儀には有べけれど、道しるべしてたべかしと申ける程に、われも年久しくは住けれども、世わたるわざに取まぎれて、こまかに廻り見る事なし、然どもそなたには少しまさりぬべし、旅のつかれをしばらくはらし給へ、道筋をばあない申べし、まぎらはしき所は人にもたづねきくべきぞかし、我も幸とこそおもへ、在所にて人にとはれ、あいさつのてにはあしくば、めんぼくなかるべきに、よくぞおもひ立給ふ物かなとて、互に打ゑみて其日はすでに打過ぬ、

増補江戸咄目錄

卷第三

卷第四

卷第五

卷第六

增補江戸咄卷第一

第一　武藏國の古事

去間明ぬれば旅人つとにおき、いたづらに逗留すべきにもあらず、けふよりして思ひ立ぬる江戸めぐりせばやとぞおもふ、朝がれいゝのむせるまに、爰を武藏國といへるいわれをや知給ふ、語り給へと望ける程に、いやとよ、我も委き事はしり侍らねど、當地古老のものがたりに聞つる事有、此口まねを申べし、そも當國を武藏國と申事は、此國の中に祖父が嵩とて高き山有、其山のさま偏鎧武者の大に怒つて立たるがごとし、されば人王十二代景行天皇の御宇に、日本武尊東夷鎮めんが爲此國にくだり給ひ、彼嵩のけはしきを見給ひ、此山のいきおいにより、此國の人の心のたけき事、餘國に勝れたるもことはり也、我今大將軍として、東夷王命に背くを、責したがへんが爲にくだれり、願くは此嵩の神、我軍を守るべしとて、自所持の武具を嵩の上なる岩藏にこめて、山神を祭り給ふ、武具をこめし岩藏の國なれば、文字に武藏と書たる

也、扨程なく國平におさまりければ、今ははや武者武具をさしをく也とのたまひしより、むさしの國と名付たり、彼嵩は後弘法大師のぼり給ひて、妙見菩薩を勸請し給ふ故に、妙見菩薩の御嵩と申也、誠に保元平治の亂、壽永元暦の合戰にも、此國のわかもの共勝れたるはたらきはしつれ、西塔の辨慶が武藏坊と名乘けるも、此古事をや思ひこめつらん、かれが氣情にては尤にこそ侍れど、語もあへぬに麁飯をすへければ、亭主箸をおつとりかくなん

黑わんに黑米飯はむさしとも
　ちときこしめせ身もた辨慶

旅人返歌 いづくでもそいゝ九郎とおぼしめせ
　よしつねならぬ是は御ちそう

第二　御城の方角并大名小名の屋敷の覺

扨も名にしおふ花のお江戶の春のそら、くもらぬ日影長閑なり、いざゝせ給へ御供せんと、打つれ宿を立出て、先御城の大下馬へぞ誘なひゆく、是こそ日本の大將軍の御住城也、大廈の御構、方二十餘町、大手は東向也、西の御丸は、御本丸の南に有、是又大手は南向也、西の御丸と御本丸の間に紅葉山有、東照大權現樣を崇奉る御佛殿也、されば德川の流れ淸く、參州松平の鄕より新田の跡をかゞやかせ給て、向ふ所に敵なく、まねかざれ共歸降し、よくやわらかに、よく剛なれば一振の釆の下にて、萬年の永昌となさしめ給ふ、御城のめぐりは大名小名の屋形棟をならべ、軒をきしり立つゞき、ゆゝしかりける事共也、まづ大手御門のまへには酒井與四郎、本多伯耆守、井上河內守、稻垣對馬守、松平右京大夫、ひとつばしのうちには小笠原佐渡守、神田橋のうちには松平美濃守、內藤山城守、常盤橋のうちには黑田豐前守、本多伊豫守、典藥頭、今大路延壽院法印道三、吳服橋のうちには松平備前守、米倉主計、蜂須賀飛驒守、戶田釆女正、松平丹波守、丹羽遠江守これ町御奉行なり、さて西の御丸の下には稻葉丹後守、秋元但馬守、永井伊豆守、加藤越中守、大久保加賀守、同長門守、依田新五郎、加藤源五郎、中村新右衞門、杉浦藤五郎、中條丹波守、田中左衞門、小平與次兵衞、土田孫左衞門、稻葉長十郎、平田仁兵衞、三浦壹岐守、平岡和泉守、安藤信濃守、間部越前守、その外大小名の御屋しき軒をならべたり、また御馬屋あり、たつの口より大名小路までには御傳奏御

屋しき、御評定所、土屋相摸守、松平伊豫守、細川越中守、松平加賀守、土井周防守、溝口伯耆守、酒井左衛門尉、松平出羽守、織田越前守、松平越後守、坪内能登守、これまた町御奉行所なり、松平土佐守、松平淡路守、青山下野守、松平右衛門督、松平和泉守、牧野大學、戸田能登守、松平下野守、松野壹岐守、これも又町御奉行所なり、小路をへだてゝ土屋山城守、青山播磨守、松平主殿頭、さて又馬場先御門の外には齋藤帯刀、これ火けし御役也、林大學頭、山下道壽、米倉新五郎、同じならびに高倉殿屋しきあり、まことにさかゆる御城下の風情いとそうとくぞおぼゆ、櫻田御門の外、御堀ばたには井伊掃部頭、井上志摩守、上杉彈正、松平大膳大夫、日比谷御門の外には、櫻田御てん御屋形なり、姫門の内に、松平丹後守、阿部對馬守、松平薩摩守、酒井石見守、松平主殿之介、松平兵庫、幸橋の内には、石川吉十郎、鍋島加賀守、松平大隅守、秋田信濃守、本多吉十郎、南部大膳、横山内記、渡邊越中、伊東出雲守、龜井隱岐守、永代橋の内には、半田三郎左衛門、朽木丹波、阿部飛騨守、西尾隱岐守、稲葉出羽守、虎の御門の内より櫻田御門の外迄には、堀田對馬守、松平周防守、黒田甲斐守、相馬彈正、阿部伊豫守、板倉隱岐守、本多備前守、松平安藝守、黒田右衛門佐、永田町の近所には、井上兵庫、岡部三之丞、丸岡丹後守、淺野釆女正、岡部次郎兵衛、永井彦兵衛、小出宮内、兼松又四郎、村瀬伊左衛門、高木勘解由、坪内源五郎、古田作左衛門、吉田策庵、保科主水、成瀬惣右衛門、加藤平右衛門、加藤權七、永田町山王の近所には、丹羽若狹守、内藤紀伊守、松平外記、設樂甚三郎、小倉孫太郎、門奈助左衛門、永田小左衛門、永田清兵衛、永田善七郎、大久保四郎左衛門、内藤伊勢守、阿部丹波守、松平左近、牧野清兵衛、永井傳八、永井彌右衛門、山王の裏門通りには岡部美濃、西郷若狹守、赤坂御門の内には、松平出羽守、菅沼主水、菅沼越中守、紀州中納言公の御屋形也、土橋の内外に、尾張中將公の御屋形有、又一谷の御門の外に、尾州中納言公の御屋形有、扨又土橋の内に、井伊掃部頭下屋敷有、土橋の外に、紀州中納言公の御屋形、小路を隔て立向ふ、それより赤坂の方へ行ば、渡邊若狹守、水野平右衛門、久野丹波守、三枝隱岐守、諏訪勘兵衛、千代姫君樣之御屋形有、井上左太夫、妻木傳兵衛、竹越山城、諏訪左門、松平左兵

衞、松平美作守、青山宿には、青山內記、青山下野守、青山播磨守、さて其先々を畧す也、虎の御門の外には、田中大隅、谷帶刀、谷藏人、谷出羽、野瀨市十郎、岡田八郎右衞門、中西圖書、織田內記、松平丹後守、戶川玄蕃、松平大和守、牧野半右衞門、牧野駿河、朽木監物、竹中左京、永代橋の外に、京極備中、木下右衞門、相良遠江、島津飛驒、一柳對馬、稻葉右京、同庄右衞門、分部隼人、松平采女、幸橋の外には、大村因幡、秋月佐渡、松平久米之介、永野左近、有馬左衞門、井上傳庵、山內次郎太郎、岡部丹波、木下長兵衞、池田采女、中川佐渡守、岡部志摩守、片桐新之丞、同主膳、扨增上寺裏門通には、野瀨日向守、仙石因幡守、堀飛驒守、田村右京、松平陸奥守、松平帶刀、內藤三左衞門、神尾五郎次郎、溝口土佐守、桑山丹後、藤堂主馬、同庄兵衞、平野丹波、愛宕の下には阿部伊豫守、牧野大膳、細川丹後、跡部宮內、片桐縫殿、同主膳、石河藏人、松平隱岐守、本多美作守、野瀨庄左衞門、松平丹後守、松平但馬守、青木仁右衞門、青木甲斐守、川勝孫四郎、長谷川五左衞門、藤堂釆女、是等の人々の屋敷也、日比谷一町目より、金杉迄の濱手には脇坂淡路、松平陸奥守、

保科肥後守、神尾若狹守、森和泉守、關備前守、加藤佐渡守、松平右京大夫、松平大和守、松平伯耆守、龜井能登守、岡部美濃守、是等の人々の屋敷也、鹽留橋ゟ東の濱手には、奧平美作、秋山十兵衞御はまの御てん、尾州中納言公の御下屋しき、稻葉丹後守、松平安藝守、是等の人々の下屋敷也、紀伊國橋より木引町七丁續たるうしろには、先紀州中納言公の御藏屋敷、かゞつめ次郎右衞門、松崎權左衞門、新庄長門、伊達宮內、板倉隱岐守、小出甚左衞門、朽木彌五兵衞、京極主膳、松平玄蕃、松平周防守、松平甚九郎、松平久之丞、山岡三郎兵衞、鐵炮洲の築地には松平遠江守、大岡備前守、酒井靭負、奧平美作守、彥坂伯耆守、小笠原隼人正、井伊伯耆守、保科兵部少、久志本內記、石野八兵衞、南八町堀に、本多隱岐守、井伊掃部頭藏屋敷、丹羽若狹守藏屋敷、牧野八太夫、松平和泉守、北八町堀に、今村傳四郎、酒井兵部、松平丹波守、三宅甚兵衞、前田左兵衞、疋田半兵衞、鳥居播磨、松平越中守、小笠原安藝守、小濱源次郎、九鬼內匠、間宮酒造丞、向井將監、牧野因幡、小濱民部少、小濱杢之介、神尾市左衞門、島彌左衞門、其外は町與力同心等のやしき也、本靈岩島には、

井上筑後守、松平兵部少の屋敷有、北新堀には松平伊豆守、朽木伊豫守、阿部豊後守、久世出雲守、是等の人人の下屋敷也、くづればし近所の濱手には、大名下屋敷、小名の居屋敷打續く、先安藤對馬守、酒井河內守、土居內記、同式部少、酒井靭負、阿部伊豫守、永井伊賀守、淺倉新十郎、大島源十郎、板倉伊右衛門、靑山播磨守、井上相摸守、水戶中納言公、秋元但馬守、堀田下總、牧野備後守、岡田將監、松平備前守、其外は小役人の面々也、柳原の土手の內には、土居周防守、西尾權之介、松平伊豆守、本多中務、戶田石見、大澤右京、黑川丹波、六鄉佐渡、細川豊前、水野隼人、市橋三四郎、一色右京、依田源藏、保田甚兵衛、大草七十郎、小幡又兵衛、伊奈半十郎、守川勘右衛門、酒井壹岐、勝屋庄右衛門、彥坂壹岐、上村土佐、細川豊前、稻葉七左衛門、內藤右近、山田左兵衛、井上三十郎、加藤平內、德山五兵衛、遠藤備前、石川八郎左衛門、土居左門、瀧川長門、市橋下總、本多中務、井上左兵衛、依田內藏助、加藤織部、甲斐庄□□□、春日左衛門、津田平左衛門、松前民部、三浦越中、戶田但馬、渡邊孫三、建部傳右衛門、市橋傳藏、山本半左衛門、是等の人々の屋敷也、神田橋の外には、永井伊賀守、神尾下總、松平對馬、中山丹波守、加藤伊織、彥坂壹岐、御大工の木原內匠、同鈴木修理、小笠原上野介、御堀ばたには宮崎織部、久保五兵衛、久保吉右衛門、一つ橋の外には三浦壹岐、土屋備前、中根平十郎、內藤甚之丞、高井作左衛門、內田十左衛門、池田帶刀、戶田右京、横田次郎兵衛、大草主膳、岡部出羽守、きぢ橋の外には、大岡彌右衛門、井上筑後、久貝惣左衛門、小笠原丹齋、榊原釆女、其外御臺所方の諸役人也、淸水御門の外には、稻垣藏人、揖斐五左衛門、永見新右衛門、加藤太郎右衛門、奥山藤十郎、毛利新兵衛、田安御門の外には、太田式部、火消役屋敷、酒井土佐、水野甲斐、渡邊平三郎、蜂屋半之丞、朝岡權三郎、小野次郎右衛門、永井外記、關兵左衛門、大久保吉之丞、新見勘左衛門、大久保半兵衛、さて又外くるわの御門の內番町筋には、御旗本之面々、軒をならべ棟をつゞけて立てつらねたり、小石川御門の外には、水戶中納言公の御屋形、同御家老の中山備前屋敷有、水道橋の外には、松平紀伊守、小笠原壹岐守、曾我伊賀守、石丸石見守、安藤九郎左衛門、山口太郎千代、本多大膳、加藤八兵衛、稻葉八左衛門、酒井越前

守、小笠原内匠頭、本多肥前守、筋違橋の外には、本多下野守、丹羽長門守、杉浦内藏、松平伊勢守、土屋主税、遠藤備前、本多將監、和泉橋の外には、松平因幡、牧野長門、京極甲斐、藤堂和泉、新庄主殿、水野隼人、藤堂佐渡守、あたらし橋の外には、本多内藏、中根平十郎、酒井左衞門、宗對馬、松浦伊右衞門、佐竹右京、津輕越中組屋敷、牧野遠江守、加藤遠江守、淺草橋の外には、佐竹右京、松浦肥前、本多長門、酒井左衞門、松平中務、下野の内方々に、松平下總、松平兵部、松平大和、松平市正、立花飛驒、小出伊勢、本多彈正、織田山城、戸田備後、皆川左京、加藤遠江、村越伊豫、岩城伊豫、酒井兵部、其外組付の與力屋敷也、本郷に松平加賀守、松平飛驒守、榊原式部、松平大内藏、水戸宰相公の御下屋敷、甲府宰相公の御下屋敷、小笠原内匠頭屋敷有、先あらましはかくのごとし、但塲中にても小名の屋敷はのぞきたるもおほし、大名の屋敷をも、端外に是有をばしるさゞる也、

第三　江戸御城の由來

抑江戸の御城と申奉るは、後花園院の御宇に、鎌倉の山の内に管領上杉右京亮憲忠とておはせしが、其家の子に太田道眞と云人、長祿元年に初て築給ふと也、されば都五山の萬里和尚も古き詩を引て、此地を譽給ふとなん、其詩に云く

窓含㆓西嶺千秋雪㆒　門繫㆓東呉萬里舟㆒

と點をよみかへて、此城かならず一度は繁昌の地なるべしと申されけるに、少もたがわざる賢德の程こそふしぎなれ、扨道眞の息道灌入道持資、相續て居住せらる、然に享德三甲戌年十二月廿七日に、鎌倉の公方西御門成氏公、彼管領憲忠を御所の内にて誅し給ふ、是より關東大にみだれて靜成時なし、去程に道灌は、上杉修理大夫定正の長臣として、扇谷に伺候せられしに、山の内の管領上杉民部大夫顯定と定正と中あしく成て、度々軍有けるに、文明十八丙午年太田道灌むほんの事有とて、定正の爲に誅せられ給ふ、其時畝十文字の鑓を道灌の胸へ突かけ、日比すきの道なれば、今も歌よみ給んやと申けるに

かゝる時さこそ命のをしからめ
かねて有べき事としらずば

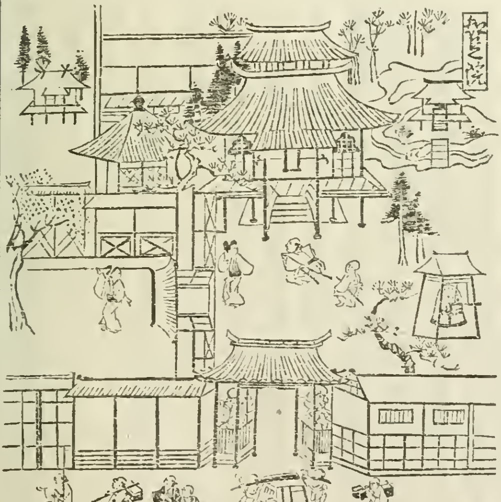
とよみ給ふと也、かくきう成折しも、取しづめたる辭世は、前代未聞の事也とて、世擧てかんじけると也、

扨定正、朝良、二代在城也、朝良卒し給ひて後、管領上杉修理大夫朝興居城有しを、北條氏綱攻落して、四代相續、氏直の時に至て、北條治部少輔遠山左衛門尉をもつて、城代とせられしに、天正十八年七月六日に小田原没落して、江城すでに御當家に屬し、又々御城地御見立の節、西の御丸の方より御本丸の方へ、いづく共なく鶴來りて舞あそぶ、龜は陸地へあがりければ、千秋万歳の印なりとて御在城とあそばさせられさぶらひてより、とりわけ東夷北狄南蠻西戎もをのづから隨ひ奉り、國々の諸侯大夫はまねかざるに來り公を守護し奉れば、民のかまどもにぎあいて、朝よりつづく夕煙、たつやかすみの關守も、戸ざゝぬ御代こそめでたけれ

戸ざゝぬや關が原より御代の春

第四　內郭外郭の御門

先大手の御門より出れば、左の方に平川口の御門、竹橋の御門、はね橋の御門有、右の方に內櫻田外櫻田の御門有、西の御丸よりすぐに出れば、東方に馬場先の御門也、それより表へ出ればやよすがし、右の方は日比谷御門、左へゆけば和田倉の御門、瀧の口の小橋也、ほりばたにつきて東へゆけば道三がし、爰に道三橋錢瓶橋とて橋二つ有、此錢瓶橋と云は、そのかみ橋かけはじめの節柱たつるとて、瓶に錢の入たるをほり出したる故の名也とかや、此橋の南北に御門有、南を呉服橋の御門と云、北をときわ橋の御門といふ、常盤橋の御門を出れば、左の方に神田橋の御門有、御門の外へ出てむかふに大伽らん立給ふ、あたりの人にとへばことばをろかにとひ給ふ物かな、此寺と申は



日域の鎮守として、御代萬々歳の御祈願所、眞言密宗の丹誠をこめて、久かたの天ながくあらがねの地久しく、國土安寧の願所なるをや、されば御本尊には不動明王、左は觀世音右は釋迦如來、御玉屋の御堂玉の光をあはせ、いらかたふとく立ならび給ふ、もとは下谷に立給ひてとし月をへけるを、元祿二年に此所に此寺をうつさせ給ふて、常陸山知足院元祿寺と申也、とかたるに、いとたふとくおぼえてふしおがむ、そのいとなみきよらかに金銀をちりばめ、まことに善つくし美つくすとは、かゝる御ことを申にやと、しばしたゞずみて

是やこれ貴き寺は門からぞ
　見へてかゞやくきがね白がね

夫より左へ行ば一つ橋、きぢ橋、清水御門、田安御門つゞく、外の町を飯田町といふ、それより御堀に付て廻れば糀町御門、右の方を辨慶堀と云、是はそのかみ、西國東國の大名衆へおほせ付られほらせらるゝによつて、西東の武藏の堀なればとて、辨慶堀といふと也、御門の外は糀町一丁目也、扨立歸り呉服橋より出れば、右の方に鍛冶橋の御門、すきや橋の御門、山下町の姫御門、土橋を渡りて幸橋の御門、永代橋と虎の御門有、猶また榎木坂をのぼり、溜池についてまわれば赤坂の御門也、是より左へ行、紀伊國坂をのぼりて土橋有、四つ谷の御門有、うちは糀町十町目、外は同十一町目也、猶左へ行て一谷の御門、牛込の御門、小石川の御門也、猶々御堀につきめぐり行ば、水道橋、かり橋、筋違橋の御門也、なを行て和泉橋、あたらし橋、淺草橋の御門也、是迄にて内外の御門は見めぐりをわりたり

第五　日本橋より北の町

扨淺草の御門へ入て、左の方は童朋町、矢の御藏屋橋町、兩國橋も見へにけり、右の土手こそ柳原、げに青柳の枝たれて、直にはゆけど横山町、うちつゞきつゝ三町有、さもしほらしき鹽町の、口もすべるや油町、大傳馬町三町過、町に似せとてあらざれど、是ぞまことの本町と、慥につゞきて四町有、右の方に打廻ば、あいだに新道へだゝりて、石町つゞき四町有、かくははづさぬ鐵炮町、小傳馬町が三町有、それにつけてもばくらう町、四町過れば又もとの、柳原にぞ出にける、新道馬塲や岩井町、しりなわ町や鹽町の、しほみ

がきにてひかりさす、しろかね町は四町にて、御堀のきわへ出る也、土手をへだてゝかわや町、東へゆけばこん屋町、三町つゞきて有ぞかし、新石町に大工町、田町が二町それよりも、跡へかへりて白かべ町、片町よりも本通りへ出れば、右は鍋町や新石町やすだ町や、實商人のれんじやく町、人にすじかい橋のきわ、それより歸りてかぢ町を、二町過ればくたびれて、のり物町に乘ならば、あたひに出すやしろがね町、十間棚やむろまちを、三町行ば日本橋、南北にかゝりつつ、長さ一町あまりあり、下は魚船新船數百艘こぎつどひ、日毎に市ぞたちにける、西はあまだなまきがしや、うをあきなひをしな川町、さがり物をも能見せて、人の眼をぬきつけて、ぬかばもつべいさや町と、きけばうたてやすげんくわを、するが町ならさわがしく、人をきるともきりちんを、とるかとらぬか雨がへ町、かまくらがしをよそながら、りうかん町より三川町、四町のさきはきじ町や、さやぎ町のこなた成、新白かね町らうそく町、釼橋よりも北にむき、本通の東には、大ふな町が二町也、小田原町も二町也、あんじん町やせと物町、いせ町米がしあらめ橋、爰ぞ名にあふ江戸橋に、こぎつけをくやこぶな町、二町のするゑはこあみ町、三町さきはくづれ橋、わたれば箱崎町とかや、北新堀はあれならん、てれふれ町をとをりつゝ、左の方は堀江町、三町有かとしあん橋、渡る心はよし町や、甚左衞門町大坂ちやう、住吉町に住なれて、うたふうたひはなにわ町、猶も目出度高砂町、猩々舞はまわねども、いづみ町にて金平を、かたるも心いさぎよく、爰ぞうき世の堺町、はやはぢまりとしばゐにて、さがりはの笛ふきや町、六助町より見物の、女中の乘や乘物町、長谷川町に富澤町、新大坂町田所町、材木町の堀留に、知人あれば立よりて、しばらくやすみ居たりける、

第六　日本橋より南の方、京橋迄の町

いざやとても此つゐでに、日本橋より南の町をめぐらんとて、米がしの堀留より、うき世しやうじにさしかゝり、いそげば程なく日本橋、札の辻にぞつきにける、爰よりも方々への道程を考るに、品川へ二里ぞ有、甲州口の高井戸へ三里有也、中山道板橋へ二里ぞ有、奥州道の千壽へも二里ぞ有也、下總の葛西へ二里半、行德へ三里有也、鐵炮洲へ二拾町也、小松川へ

一里八町、角田川へ一里十二町、箕輪橋へ一里有也、駒込の富士へは一里六町也、本鄕の追分へ三十町也、ぞうし谷へ一里十町、扨四つ谷の追分迄は一里也、目黒不動へ二里有也、扨又此橋のにしにあたりて壹石橋、こがねごふくの兩後藤、住ける中にかけたるとて、壹石橋とは云とかや、くれ木の有は西がし也、南の方の本通、日本橋を本にして、四町目こそは中橋よ、西の方は廣小路、東の方は入江にて、其いにしへの中橋の、名を殘したるしるしなり、さて本通りは京橋迄、南傳馬町三町也、都合七町有ぞかし、本通よりも東の方、四日市とていにしへは、市の立たる所とかや、萬町に靑物町、かいぞく橋の向ひ成、かやば町には山王の、御旅所有て其近所、町與力同心の住所成ぞや、かいぞくのはしのこなたの川ぎしは、本材木町七町有、とは申せどもうたがひて、左內町とやおぼすらん、平松町の松が枝を、もんにやつけん呉服町、二町通ればごふく橋、新道へだてゝ南大工町、二町過れば油町、川瀨石町くれまさ町、はくや町よりひもの町、二町過れば御堀ばた、南のかうじをひつかへし、上まき町が二町ある、下まき町も二町有、入江をこしておが町も、二町つゞきて西へゆき、南まき町貳町有、そこらでたがをかつちめろ、まかせて桶町貳町過、まなこの玉のさや町を、はづせと云て二町過、南の方へいなば町、くまのそだちかすゞき町、船路の旅のかぢ町を、貳町と云はろの事か、五郎兵衞町疊町、たゝみあげたる草摺の、ぐそく町きてさねもりの、むかしがたりのびんひげを、そむるはすみ町いさぎよく、問も竹町二町にて、京橋爰に北こん屋町、是も二町で堀ばたの、小橋のきわに出る也、

第七　京橋より新橋迄の町

扨京橋を打渡り、南の方の本通、新兩替町四町也、尾張町は二町有、竹川町へ出雲町、是新橋のはしづめ也、扨京橋のひがしには、金六町や水谷町、橋をわたりて八町堀、南北共に五町づゝ、打過ゆけばいなり橋、それより南へをしまはり、本みなと町三町有、爰にて船松町とかや、本あみだなや拾間町、ほのぼのとよむあかし町、江戸町とや飯田町、川口町にゐだたる、上柳町志水町、むすぶもうれし水上町、小田原町に小島町、是ぞ世界のてつぽうず、こなたへ歸りて木挽町、紀伊國橋より初つゝ、鹽留橋迄七町也、三十間

堀八町を、新材木町と云、四丁目より五丁目迄、二町の間新道有、扨京橋の西の方、たちうり弓町鳥屋町、それより四町新道有、彌左衞門町新右衞門町、ひゞきたへせぬ瀧山町、惣十郞町の南なる、山王町に參る身は、神のりしやうに大坂町、馬は馬づれ牛は又、牛づれなりと寄合町、尤卑下する其心、ねうちするなら八官町、花の加賀町にほひきて、月の影こそさへぎ町、南なべ町八間町、さもきれいなるすきや町、南こん屋町四町有、日かげ町のすゞしとは、山下町のわきゆへか、のぼるも高き山城町、左兵衞町は角なくて、丸や町にもつゞくらん、土橋をわたりてあなた成、町屋のゑんに腰うちかけ、おゆるしあれとてやすみけり、

第八　新橋より南、品川迄

それよりも又うち出て、西の方には兼房町、備前町にやいづみ町、かぢ町善右衞門町を過、久保町太郞兵衞町とかや、東の方はふきで町、さいわい町のことぶきは、日々にあらたやひゞやちやう、三町ゆけば源助町、臘月町のいそがしきに、ゆさんらしくも芝居町、宇田川町の橋をこへ、神明町より西の方、三島町とはあれならん、久右衞門三町過、金杉橋につきにける、過にし日比谷二町目より、是迄新道一筋有、西は門前町とかや、東に一筋道ぞ有、金杉橋を打渡り、西は新堀麻布也、金杉町を四町過、小橋をわたりてさかなだな、四町過れば田町也、是はつゞきて九町有、三町目より右の方、もと札の辻是よりは、三田町筋ときこへける、田町九町の右の方、いさらごとかや申けり、物牛町のならひとて、めぐるいんぐわや小車の、わがまならぬうき世かな、しばと云うらとへば、しほきのために辻の札、高繩手にもつきにけり、是よりすへはかみ海道、あれに見ゆるは品川也、いざや歸らん尤とて、濱邊の小船かりてのり、むかふを見れば安房かづさ、かすみの內にみへわたる、海士の小ぶねの數々に、諸國よりの運送船、又賣船も打つゞき、おびたゞしくぞ見へにける、扨も此浦にて取ざこは、芝ざかなとて名物とききゝければ、家づとにせばやとて、すなどりの船にこぎちかづき、少所望したりければ、やすき御事とて、只くれそうにもてなすを、心やすくおもふ所に、分に過て高直なれば、

高さごや此うら舟で買上て
　　ゑびもろともに鹽いりにせん

とロずさみければ、船人返歌、
　あみのこあぢのしばざこ高く成物を
　　はやすみそにもつけ給へかし
とてうちわらひけるは、只ものにはよもあらじ、古しへ住吉大明神の、漁夫と成給ひて白樂天にあひ、詩歌の問答し給ひける心地こそすれ、定てその方は、すみその大めいじん成べしとて、わらひて左右へこぎわかれけり

增補江戸咄卷第一終

增補江戸咄卷第二

第一　神田明神附明達法印并聖堂事

さらばけふは、上野の方へともなひ申さんとて、宿を立出ゆく程に、すじかい橋にほどなくつく、橋を渡りて右のかしつゞきはさくま町四町、久右衛門町二町、平右衛門町二町にてあさ草橋也、さてはたご町にかゝり湯島へゆく、此町六町つゞきてすへは本郷也、是も又六町つゞきてすへは守川宿といふ、扨湯島二町目に神田大明神立給ふ、此御社と申は平親王將門之靈廟也、昔仁王六十一代朱雀院の御宇にあたつて、相馬の小二郎將門と云人有、先祖は桓武天王六代の後胤、陸奥の鎮守府前將軍從五位下平の朝臣良將が次男也、承平二年に總州相馬郡に内裏を立、我と我名を平親王と改、伯父鎮守府將軍良望、後常陸大丞國香といへり、彼をうち取て關八州をなびかし、百官をうばひて、いやしき下﨟にゆるして召仕、いきをい大にふるふて、天下をたなごゝろの内に握らんとて、旣に駿河國迄うつてのぼるよし、叡聞に達しければ、帝大に

驚せ給ひて、天慶三庚子年、國香が子平貞盛に大將軍の宣旨をくだされ、副將軍には藤原の忠文、俵藤太秀鄕を被二仰付一、數萬の軍兵をさしそへ、うつてにつかわされけるに、將門通力自在にして、其身を七人に變じ、天をかけり地をくゞる事、目を驚しければ、たやすくうつべき術なくして、いたづらに月日を送りけるが、秀鄕はかりごとに、將門の味方と成、ちかくうかがひより、終に米かみをねらひて射ころす、是天慶三年二月十四日なりといへり、されば正月より美濃國南宮の山神の御寶前にて、住吉の明達法師におほせて、四大王の法を修し將門を調伏有、然るに二月十三日の午刻に、赤雲東より來て爐壇に入、しばらくなまぐさき香道場に滿けるとなん、其翌日うたれけるとぞ、藤太まさかどの首を討ければ、其首飛で虛空をかけり、都にいらんとしけるが、美濃國にて南宮の山神矢をはなち、其首を射おとし給ふゆへに、南宮の神を箭路御首の宮と稱す、彼首も飛行ははやならねども、いまだ眼をふさがず、色へんせず、すさまじかりけるを、都にのぼせ獄門にかけゝるに、いかれるけしき猶やまざりけり、然所に何ものか狂歌に

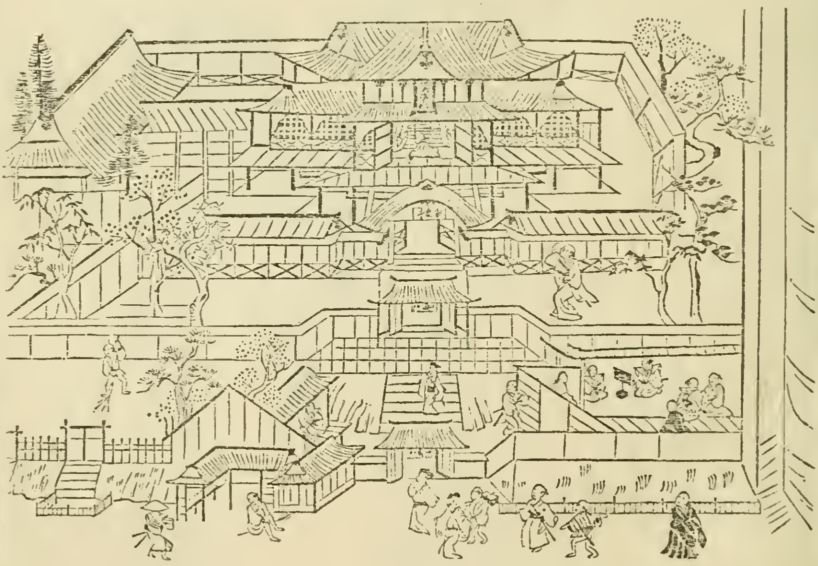
將門は米かみよりぞいられける
　俵藤太がはかりごとにて

とよみければ、から〳〵とわらひて、それよりしだいにかれけると也、扨むくろは、下總國より此武藏國迄追來り、せいきつきてたをれけるを、路邊に埋けるに、何となく光物出て、しんどうやむ事なければ、國の守より都へうつたへ、將門の首を申くだし、むくろと一所に埋み、一社の神にいわひて、からだの明神とあがめ奉ける故、しんどうも鎭りけると也、いつの比よりかあらためて、神田大明神と申也、所をも神田と申とかや、古しへは此社神田橋の內なりけるが、今の御城の內ひろげさせ給ふ故、此所へうつし奉ると也、扨藤太が子孫は、今の世までも此神前をとをる事ならざりける故に、蒲生飛驒守殿は道をかへて往行し給ふと也、誠に神は人のうやまふに依て威をまし給ふことわりにや、今は藤太の家絶けるとぞ、扨又祭禮は隔年に九月十五日同月十八日に御寶前の舞臺にて能有也、扨も彼調伏の師明達は攝州住吉縣の人、姓は土師氏也、十二歲にして、藥師寺の勝雲に隨ひ出家し、後叡山にのぼりて尊意に逢、顯密の奥旨を請給へ

り、天曆九年九月二十二日に、七十九歳にして寂し給ふ、師の尊意は菅丞相雷神と成給ふときの祈の師也、師弟共に行德勝れたまふ故にや、神のたゝりのなかりけることそふしぎなれ、扨御社のうら坂より見をろせば、江戸中不殘一目に見へて、氣はれ〳〵とする也

米かみのいはふすかゞみ曇なき
御代を守りの神田そときく

それより西のかたへ出れば、あたらしく大なる堂見へたり、そのよそほひぎゞとしてあたりもかゞやき、をのづからひれふすやうにおぼへければ、たやすく立よるべきよしもなくて、かたはらに立やすらふに、五十とせあまりの人のみへくる有、とひよれば、かしこくもとひ給ふ人かな、いでやあらましかたり申べし、よくきゝていなかの人にもかたりつたへ申されよ、たとへば其ほうごときの人は、たゞみだ佛の御名號ばかりはとなへて、後の世のことは思ひ給ふらめど、今の世のいとなみにつきて、人の上の心づかひは、敎ゆる人なければ能しり給はじ、そも〳〵此御堂と申は、かけまくもかたじけなしや、もろこしの大聖人孔子の御跡なり、そのかみ文宣王とをくりなし奉



る、その尊像を宗として、その以下の賢人たちの諸像をあまねく安置なさせ給ふ所なり、比は元祿四年はつ春の比御はしら立まし〳〵て、同年八月廿一日に移らせ給ふ、三皇五帝といふはそのかみの聖王にして、大唐をよくおさめ給ふといへども、いたりて久しき御ことなり、孔子は中頃の大聖にて中興とも申べし、此御ときより人間の道もひろく、をしへくわしくなりぬ、この道此國につたはるといへども、いまだ下愚のともがら、いなか邊土に生れたる人は、孔子といふ御名をもしらぬやからおほかるべし、かたじけなくも今爰に安置し給ふことの有がたさ、仁は秋津洲の外に流れ、めぐみはつくば山のかげよりもしげしとは、かゝることをや申べき、されば日ごとに此御堂のかたはらにて、人倫のことはりを講談あれば、貴きもいやしきもまかりまうづ、其おしへ只孝をもつぱらとして親をいたはり、忠節をはげまして主につかへ、禮をまもりて夫をうやまひつまをあはれみ、いつはりなくして友だちとまじはり、老たる人には能したがひ、いとけなきをばめぐむ、たふとくとみさかへてもおこたらず、たかぶらず、いやしくまづしきもむさぼらず、ぬすみせず、心をすゞしく清くもちて、それ〴〵のいとなみにおこたらず、世の中のつとめをはげむべき事は、此道のをしへにこへたるは侍らずとや、猶たび〳〵もまうで給へ、この徳に入の門と、いとねんごろにきこえければ、かたじけなくて肝にそみてふしおがみぬ、

徳に入の門なりけりと至善に
　立とゞまりてみぬ人もなし

第二　妻戀の稲荷明神

扨明神のうら坂をのぼりて右へつき行程に、湯島天神へ參る坂口に付たり、坂をのぼりて右のかたに妻戀の稲荷明神立給ふ、此社もとはわづかの小ほらにて、此坂より下に妻戀の橋とて、溝堀にかゝりたる小橋有、此きはに有けるを、近き頃爰にうつし奉る、此縁起さだかならねども、古老の云傳には、相馬の將門の孫に信太の小太郎と云し人有、若年の時父にをくれ、はゝごにそひてまし〳〵けるが、十四五歳の頃かとよ、姉むこの小山太郎に國をうばわれ、るらうの身と成て、母御もろとも都へ上るとて、近江國ばんばのしゆくにて母御にをくれ、いよ〳〵ちからなくて國



へ帰りけれども、小山よせつけざれば、郎等の浮島太夫を頼ておわせしに、小山きゝつたへ、大勢を率しをしよせ、終に合戰に討勝、浮島一家をほろぼし、信太殿を生捕、千原の太夫といふものに預け置、海底にしづめよと申付けるに、姉御小山が目を忍て、千原が宿所に尋來り、信太殿に對面有て、なく／＼家のけいづのまき物を、信太殿のふところにをし入て帰り給ふ、去程に千原は、夜陰に内海へ出、信太殿をばをとし申て、をもりの石ばかりを海底にしづめ帰りければ、けんしをこはざるとて小山うたがひ、がうもんして責ころす、それより信太殿は、あなたこなたとるらう有て、終には奥州の國司と成、小山が舘へをしよせ給ふときゝて、小山かなはじとやおもひけん、此國の妻戀が原迄にげきたりけるを、追手のものども妻戀の橋にて追詰、うちとりけると也、去によつて今の世迄、彼橋の上にてまろびけるものは、三とせの内に死といひつたへてつゝしむ也、扨小山がかばねを爰に埋けるが、魂魄野干と成て、在所の土民をなやましけるゆへに、此稲荷大明神といわひ奉ると也、

妻戀のいなり小山とおがむにぞ
　悪やかんじて善神と成

第三　湯島天神

湯島天神の御寶前に參りふしをがみ、あなたこなたを見れば、おさなきものゝ手跡にて、古き詩歌古語などかきて、餘多かけたり、年の程よりをとなしく、墨色うつくしく、尋常に書なしたるを見れば、老の身のおろかに過し事をくやめり、扨當社のゆらいを尋奉るに、仁王百四代後土御門院の御宇、文明十年の夏の

頃、太田道灌江戸の城に居住有て、北野の天神を信ずる心ふかゝりければ、城中に勸請せられけるに、其年の秋、あやしき夢想をかふむり給ふに、あくる朝ある人菅丞相の自筆の御影を奉りぬ、道灌此きごくをかんじ給ひて、城の北の方に社を立、梅の木あまた植、社領をよせてあがめ奉り給ふより此かた、漸はんじやうして、みやゐはたぐひすくなき景地となれり、湯島と云は鄕の名也、且又庭前に鍵梅有を見て、

鍵梅や天神皐下の持道具

とやつこらしくもいひちらしければ、旅の男、

自由自在にふるは春雨

第四　天澤寺

天澤山麟祥禪院は、其昔寛永二乙丑年、征夷大將軍家光公の御乳母、稻葉氏春日局、心ざしを起して、武州江城の東北、湯島の鄕に是を建立して、報恩山天澤禪寺と號し、前の妙心寺渭山の劉和尙をまねきて、當寺の開山とせらる、此師後に本釋定禪師と諡號有けり、寛永十一甲戌年、大將軍家光公、すなはち豐島の郡柏木村にて、二百斛の田地を御寄附有て、齋料となし給ふ、殊に天澤山麟祥院とあらためさせ給へり、然るに本願のぬし春日の局は、寛永廿癸未年九月十四日に往生のそくわいを遂らるゝ、家光公御歎き淺からずして、其忌日のあたる毎に、無遮の大會を取おこなひ、諸僧をくやうし御布施なさせらるゝ、其上に又駒込村にして、二百斛の寺領をよせて、佛事念頃にいとなませ給ふ、萬治元年九月六日に、唐僧隱元禪師濟州の普門寺より江府に來り給ふ時、大將軍家綱公の仰によつて此寺に逗留し給ふ事七十餘日也、貴賤道俗群集して市のごとし、殊勝明德の高僧、見性悟道の名師也、去間山の手筋のやもじ達は、無鹽の釋迦の膓もちと云けるとぞ、彼春日の局の一周忌には、禪尼の孫稻葉美濃の太守、尊靈追福の爲にとて、太唐印本の一切經を寄進して、此寺永代の法寶とせられけると也、

天澤寺本尊の作はしらねども

寺は春日の御作成けり

第五　牛天神

それよりしのばずの池のはたにつきて行程に、東叡山の黑門ぎわにつきたり、右の方に牛天神の宮有、是は北條うぢやす關東たいぢの後、靈夢に菅丞相御手に一枝の梅花を持、大成牛にのりて、都の右近の馬場

より御影向有けりと見給ひ、夢さめて此社を祠らる、久しく大破に及びしを、堯恵中興して其跡をうしなはず、今は上野鎮守也、

むかしこそ物うし天神成べけれ
今は御自由自在天神

第六　東叡山附元三大師

此東叡山と申は、其いにしへ忍の岡とて、當國の名所成とかや、南光坊天海大僧正の御開基也、僧正入寂有て慈眼大師と諡號なさしめ給ふ、然るに都の丑寅に當つて比叡山有、是は桓武帝と傳敎大師御心をひとつにして、延暦年中の御草創也、去によつて寺號を延暦寺と號す、王城の鬼門を守、惡魔をはらふ靈場として、天下泰平の御祈禱所也、今此東叡山も、彼ゑいざんを東にうつし給ふ故にや、東の字を置れたり、寺號は又延暦寺を學びて、寛永年中に建られし故にや、寛永寺と名付、是又江城の鬼門を守、惡事災難をはらふ國家鎮護の靈場也、天台四明の法灯をかゝげ、佛乘三觀の覺月をあふぐ、殊更東照大權現様の御宮殿、大猷院様の御廟、嚴有院様の御廟、寶樹院様の御廟、彼と云是と云、金銀珠玉をちりばめ、七寶莊嚴の卷柱、善盡美盡て立つらなりたるは、只寂光の都極樂世界もかくやらん、寺中僧坊の勤行は、二六時中にをこたらず、香のけぶりは空に滿て、雲にくんずるばかり也、南北數十町に越、東西それに應せり、此山にのぼりぬれば、江府殘りなく眼前に見をろしぬ、黒門の松原より西の麓を見をろせば、しのわすの池、さながら志賀の湖水をうつして、島の辨才天は竹生島の思ひをなせり、扨も爰を忍ぶの岡といふ事は、俊成卿の歌に、

たが爲に忍ふの岡の下わらび
けぶりはたてずもへわたるらん

とよまれしは爰の事にや、又續古今俊恵法師の歌に、

何事を忍ぶの岡のおみなへし
思ひしほれて露けかるらん

とよみしは奥州の名所をよめりといへり、何れと定知がたし、さらば山中の案内申さんとて、黒門の内へともなひ行に、二町程が間は松原にて、並木の櫻今をさかりと咲みだれたる内にも、ときをとき有て、ときは雪をふらし、おそきは色をふくむ、老若男女貴賤の花見ぐんじゆして、貴きは輿の長ゑをかきつゞけ、それより下つかた成は、袖をつらねもすそをかゝげて、

ひきもちぎらざりければ、をかしげなる發句をいふ、

　ゑいとうゑいさんよとおすは花見かな

旅の男も、

　うへの下やともてかへす春

さたがひにつぶやきて行程に、二王門につきたり、左にしのばずの池へおるゝ道有、右に下馬の札立たり、然る折ふしいづく共なく異香くんじければ、

　花かきやらかなんでもきやしやに二王門

といひすてゝ、左の方へ行て大佛をふしをがみ、旅の男にかたりきかせけるは、此大佛、そのかみは土のねり物にて、みかげ石にて切立たるごとくの尊像にてまし〱けるが、寛永年中に大地震有て、みぐしを前へゆりをとしける、其時何者か狂歌、

　釋迦佛のみぐしは前にねはんぞう
　　是ぞ誠のじしん成佛

とよみけると也、其以後御再興に、かくのごとくからかねの尊容鑄奉るなり、右の方の小路の隅は、普門院也、此坊の前を通て、清水寺の觀音堂有、洛陽の音羽山清水寺をうつせり、御本尊は惠心僧都の御作千手觀音、其昔は平家の侍主馬の判官盛久が持佛堂の御本尊也とかや、堂の舞臺の下には、櫻をあまた植られたれば、春は一入の美景也、

　櫻散る此下庭はさむからで
　　うへのきよ水すゞしかりけり

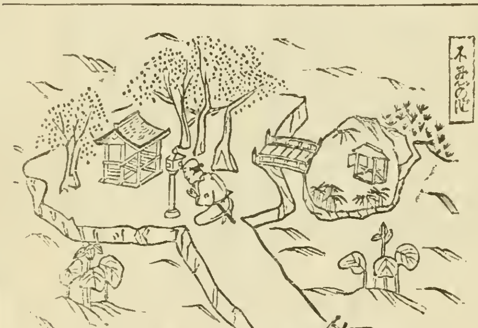
それより行あたりて最敎院、爰に山王權現立給ふ、是又當山の鎭守、比叡坂本の山王をうつし奉る、それより東へまはりて常照院也、南へ行又東へ折まがれば車坂也、常照院の表門通りより北へ行道有、右がわに明照院、相嚴院、照隆院、左の方は顯性院、顯明院、修禪院、一乘院等の地尻也、此道を二町程行あたりて慈覺大師の立給ふ御堂也、是より左右に道有、右の方は屏風坂へ出る、左の方の道を二拾間程行て北へ道有、是は東漸院圓覺院への道なり、此道を見すてゝ左へ行ば大猷院樣の御廟也、つゞきて日光御門跡樣なり、爰に嚴有院樣の御廟へ向ふ道あり、左の隅は靈山院、次は寶性院、正覺院也、爰によこての道有、延壽院、元光院、御廟別當は津靈院と云也、此津靈院は其昔越後國高田にて、五智の如來の院主たり、武州へ來り淺草の津靈院とて、津輕越中の大守の菩提所に住持せられけるが、一山より撰て、此御佛殿の別當職にふせら

るけるこそ、修練の劫とはいひながら、時に取ての面目やと、うらやまぬはなかりけると也、左の隅の方に護國院、西續は林廣院、是より北への道筋に、右は則林廣院、左は等圓院の横屋、福性院、蓮乘院、常徳院、左に道有、此隅は尊重院、右は毘沙門堂御門跡様也、猶北へ行當りて寶樹院様の御廟也、是より引返して等圓院の道筋を西へ行ば松林院、明王院、覺成院、且那院御藏有、爰より谷中へ出道也、南の小路へ少まはり、西へ向て行ば涼雲院、靑龍院、寒松院なり、是權現様の御廟別當也、爰に東照大權現様の御宮殿立せらるる、御寶前の左右には、諸大名衆より御寄進の石燈籠立たり、尤餘の御廟にも石燈籠は立けれ共、平人の通ふ事かなわざれば、しらざる也、扨本通りへめぐり歸て、東へ向行程に、左右は松原にて、並木の花枝もたはゝにさきみだれて、芳野の春を爰にうつすかとうたがはる、一町程行て左に輪藏有、爰に笑佛立給ふ、中はぶかん、左右はかんざん十とく也といへり、右の方に塔有、ゆきあたりは本堂、うしろの左は法花堂、右は常行堂也、扨又花を見すてゝ、ゆきゝする人おほかりければ、いかなる故ぞと尋ねけるに、此御山に、元三大師の御影まし〳〵けるが、一ヶ月切に坊中をめぐらし奉て、是を執行し申さるゝに、諸人參詣して諸願をかけ奉る、もろ〳〵の吉凶を、御鬮にまかせうらなふぞ、ひとつとしてたがふ事なし、是をくわんをん占と云とかや、此儀比叡山ばかりにての執行なりけるが、近き頃より此御山へも御影を守奉て、執行是ある也、其あらたなる事言葉をもつてのべがたし、抑慈惠大師の御儀は、諱を良源と申奉る、木津氏にて近江國淺井郡の人也、延喜十二年九月三日に生れ給ひ、十二歳にして叡山にのぼり、理山を師として御出家有、延長六年に尊意を禮し、登壇受戒有也、康保三年八月に天台座主と成給ひ、天元四年に大僧正と成、永觀三乙酉年正月三日に、彌陀の名號をとなへ、入寂ならしめ給ふ、かるがゆへに元三大師と號すとかや、慈惠は謚號也、大師は一宗の尊秘也、御存生の内にも、ゑきれいを鬼形とへんじてしりぞけ給ふ、然間末迄も我化形を門戸に押をく家には、疫神をしりぞけ守るべしとの御誓故に、此尊形を、參詣のもろ人申請ざるはなきとかや、扨松原を見るに、まんまくを打まはし、酒宴遊興さま〴〵にて、謡つゞみ小歌しやみせん

にてうくも有、又いかにもわびしく三四人よりあひ、ほうづゑにかほうちすがめて、物あんじすがた成も有、是はいかさま連歌誹諧をやあんずる、詩歌をやつらぬる、さぞ心の內すみわたりておもしろからん、然共よそめにはきづまりなるべしと見ゆる、かくうちひらきたる所にては、たがひにうつひきうんのみさわぎてこそ、其身もよそめも心うきたちて、常の心苦貧苦をも忘るべきに、氣をつむべくは宿に居てこそよけれどいへば、折ふしわきに、あみがさかぶりたるわび人有て申けるは、いかにもおほせの通にては候へども、すきにあかるゝばしといふせわも有、その上歌の道は、めに見へぬ鬼がみをもやはらげ、たけきもののふの心を慰、いもせのなさけ知事も、皆是和歌のとくとかや、されば今うたひさわぐこうたも、もとは詠歌より出たる事ぞかし、古きそうし物がたりうたひなどにも、今やうをうたひらうゑいしと候へば、今やうとは、ときぐ〵のはやりこうたの事ときこへたり、らうゑいは大納言公任のゑらまれたる詩歌なるを、ふしをつけてうたひたりときこゆ、然ば水の風にうごきけるをばなみと名付、寒天にかたまれるを氷といふがごとくにて、もとは是おなじ水也、めいぐ〵の心をなぐさむは、何れの道も同事也、人のせんきを頭痛にやみ給はんより、さいわいそれがし吸筒を持合候にとて、うたひぶしにて、先木のもとに立よりて、よもの木ずへをながめて、しばらくやすみ給へやとたわむれける程に、われも又うたひぶしにて、木かげになみ居て、いざぐ〵はなをながめんとて、はや芝原に座をさだめ、人のなさけのさかづきに、うきて心もみだれがみ、ゆふにゆわれぬたのしみの、餘の事のうれしくて、さけかしとねがひやりなふ花の下といひければ、彼わび人も、神のめぐみも長閑なる空といふ、旅の男も、主親にそむかで春ならんと、木に竹つぎたるごとくにやと、心をかしかりけれ共、いぐちのうそもなぐさみとて、醉のまぎれの口だわ事、ところてんにはあらねども、心ぶとくもつきいだし、さてさてけふの御もてなしかたじけなしや、是とても此花さくや姫の御引合なるべし、又もや御ゑんにてめぐり車坂にて御禮申のべたやとて、たがひにひきそわかれける、

第七　不忍池弁了翁が錦袋圓

忍ぶの岡にうちつゞきて、しのわづが池有、本はしのばすが池といひしを、今篠輪津が池と呼來れり、堯惠法師の路次記に、忍ぶの岡は今は上野に有といふ、忍ばずが池今はしのわづの池と號すといへり、誠に此所の上野、古しへはかやすゝき生茂りて有けるに、此池ばかりあらはれて見へけるゆへ、しのぶの岡によそへて、しのばずの池といふよし也、池の廣さ五六町四方も有ぬべし、夏は紅白の蓮花さきて、今一入のながめ也、池の中に島有、辨才天の宮有、是は水谷伊勢守奉りて立らるゝ、そのかみは道なくて、なべてのものゝ參詣する事ならざりけり、其後道つきて、とりゐも立たり、此島の內の左に經堂有、右の方の中に役の行者、左に稻荷の宮、右に摩利支天の宮有也、扨彼經藏は、了翁と云道心者の建立也、彼了翁は男陰を切すて、大和國長谷寺にこもり、已がゆびに油をつけてとぼし火をたて、血出してくわんおんきやうを書寫し納奉り、それより日々夜々に勤行て、心中に大願を起しけるは、一切經その外儒醫の書籍迄も不レ殘とゝのへ、本朝の內一兩所に納をくべしと思ひ込て、心經の守を出し、其外さまゞゝと心をつくし、其刧むなしからずして、京都の黃蘗山に經藏を立、思ひのまゝに納けるが、猶あきたらずやおもひけん、武州に下り下谷の池のはたに住して、錦袋圓と云妙藥を調合して代なしける所に、誠の心ざしふかき故にや、遠國端島までもきこへて、此藥はやりければ、一切經ことゞゝく調、經藏を立、此島に納奉る、彼妙藥の商人には、大助と云美少年を抱て、勸學屋と屋號を云けり、彼美少年は程なく身まかりけれども、其跡にも又大助と云て、



前にあいも劣らぬ美少年相つゞきてあきなふ程に、樂の望ならぬも、色にめでゝも此みせだなにぐんじゆしけると也、去程に丁翁の大願も成就しければ、今は大助が世渡るわざと成て福貴繁榮す、抑江州竹生島と申は、有經にいわく、ゑんぶたいの內に水うみ有、其中に金輪ざいより生出たる水精輪の山有、天女すむ所と云へり、則竹生島の事也、されば大辨功德天は往古の如來法身の大士也、妙音辨才二天の名各別なりとは申せ共、本地一體にして衆生さいどし給へり、一度參詣の輩は、所願成就圓滿す、信心厚きにおいては、福貴延命に守らせ給ふと承れば、有がたや今此島も竹生島をうつし奉れば、たのみをかけて伏拜み、

辨才天道ひが事ならぬ參詣は
　更に人めもしのばずが池

第八　忍岡の稻荷大明神

しのばずの池のはたを北へ行ば、稻荷の宮有、此社まで猶忍ぶの岡の內也、本社は洞のうちに有、ほらの上にも又社立たり、社の前は則石のほりぬき也、穴の前兩わきに、白き狐を作りてすへをく、此御社に二說有、一說は太田道灌爰に洛陽のいなりをくわんじやうせらるゝといへり、又一說には天海大僧正此山御開基の時、忍ぶの岡に年へて住ける狐、山もあらわに成ければ、すみ所にまよひ、歎きかなしみて、此旨を大僧正へ夢中にうつたへ申事度々なれば、僧正不便とおぼしめし、爰の地をあたへ、則をのが住ほらの上に社をたて、稻荷大明神とあがめおかせ給ふと云り、御神木は榎木也、社の右の方に糸櫻有、是や梅が香を櫻の花ににほはせて、柳の枝にさかせたるともいつつべし、石壇の下に泉水有、岸は石にてたゝみ、石の橋をかけたり、西の方へ向けば、しのばずの池目の下に見へて、氣もはれ心もすみていさぎよし、しばらく鳥居の內の茶屋に腰うちかけて、庭の花に見とれて居たりければ、旅の男、いざゝせ給へ、日もたくるにと、手を取引たてながら、

見る人の足をつなぐや糸櫻

とつぶやく、さて〳〵いなかにも都有とは是なるべし、きどくにも申されたりと打ゑみて、

座もさらでいなかに見るや庭の花

といひすてゝ、きく人もやあらんにと、足ばやに逃出て、猶池のはたにつきて北へぞ行、

第九　清水の稻荷大明神

四五町もあゆむやうにて、爰にも又清水のいなりと
て、ちいさき社有、是は昔弘法大師御修行の時、此所
をとほり給ふに、御喉かわかせたまふ、折ふし一人の
嫗有て、水桶をいたゞきて、遠き所より水を汲てはこ
ぶ、大師此うばに水を乞たまへば、うばいたはしくお
もひ奉りて、水を參らせて云やうは、此所に更に水御
座なくて、遠き所より水をはこび候に、我としわかゝ
りし時は、さのみにくるしからざりけるが、今年より
候ては、いとくるしうこそ候へ、又一人の子を持て候
が、年頃わづらひ伏て、嫗がやしなひともしく侍る
と、歎きかなしみければ、大師不便に思召、獨鈷をもつ
て地をほり給へば、たちまち淸水わき出たり、其味か
んろのごとく、夏はひやゝかに冬は温也、いかなる炎
天にもかわく事なし、大師みづから此稻荷明神を勸
請し給ひけり、かの嫗が子を此水をもつてあらふに、
病すみやかにいへたり、それより此かた、此水にて洗
ものは、よくもろ〳〵の病いへずと云事なし、この故
に淸水のいなりと申すと也、御神木は杉なり、千載集
僧都有慶のうたに、

いなり山しるしの杉の年ふりて
　みつの御やしろ神さびにけり

と有ときは、是にすぎたる御神木はあらじとたわむ
れ、西行の口まね、

道野邊に淸水わき出る宮のかげ
　しばしとてこそ立寄にけり

と云ければ、旅の男も、
　くみてしれいなりの淸水そこきよく
　　近井も深き神のめぐみを

つら〳〵おもんみるに、此御神を大師くわんじやう
なされけるも、其故あらんか、社家の說には、いなり
明神、和同年中にあらわれ給ひて、本地いざなぎいざ
なみとも、又は大己貴命ともいへり、密家の說にいわ
く、弘法大師洛陽東寺の門前にて、稻を負る老人に行
逢たまひて、其異相成事を見知、密宗の鎭守と成給へ
とたのませ給ふ時、老人諾して光をはなち、伊奈裡山
へ飛行し給ふ、かるが故に、彼山に社を立、稻荷大明
神とあがめさせ給ふ、さるあいだ、いなりとは、いね
をになふと書れたり、右の故を以て爰にもくわんじ
やうなされけるかと、いとたふとくぞ拜奉也、

第十　法恩寺

それより法恩寺へ參りける、されば此寺は後土御門院の御宇文正年中に、太田道灌建立せらる、開山は日住上人なり、後に台徳院様より、寺領御寄附の御朱印を下されけると也、大門の左の方に、三十番神の社有、拜殿の前に魂屋有、鐘樓は屋ねなし、本堂の兩方に櫻二本有て、花も漸ほころびける頃なれば、

花のひもとく御きやうやだら二本



と、やたて取出したとうがみに書て、枝につけんとしける所に、脇よりいふは、とても事に、此花の盛成頃御覽候へかし、只曼陀羅花の地よりわきあがりて、木ずへにむらがりさゞまるかと、怪まれて、まうでくる人は歸らん事を忘れて眺めくらせりと云を聞て、

花はさかり月はくまなきを見る物かは
　　つれ〳〵くるもよしなかるべき

旅の男、

南無妙法恩寺內なる庭の花
　　二本にならび又ござるまい

第十一　南命山善光寺

猶行程に、南命山善光寺と云比丘尼寺につきたり、御本尊は祕佛にて開帳なし、門の二王は幾年ふりけるかや、手足もなくて只くち木のごとし、實とはきざみたるおもかけばかり少殘たり、いつの頃か、去大名の庭の景にせんとて、築山にすへおかれければ、毎夜やなりしんごうおびたゞしかりければ、もとのごとく寺へ返しおかれけると也、御本尊の御づしの兩わきに、善導法然の繪像かゝり給ふ也、此寺の本寺、信濃國の善光寺の如來は、佛在世に月蓋長者が、龍宮世

界の閻浮檀金を乞請て、則極樂淨土の敎主を鑄寫し奉る、尊像遠く日本に渡給ふを、欽明天皇の御宇に、尾輿連弓削守屋がわざとして、難波堀江にしづめ奉るに、信州水內郡いもいの鄕の本田善光と云もの、官に駈れて都へのぼり、國に歸らんとするをりから、堀江のきしをとほりけるに、うたかたのそこより光さし、此御本尊本田がうしろに飛付、おはれさせ給ふを、國に歸り家を寫して寺となし、わが名を直に寺號として、善光寺と名付けるとかや、今此谷中の善光寺は、何れの時いか成事にて立られしとも、さだかにきこへがたし、門の內には、兩方に並木の櫻有て、花の頃まふでくる人は、繪筵もうせんを敷島の道に心をよせ、手まつさへぎるさかづきの、めぐる日影もにしへかたぶくをおしめり、しばらくだうのゑんにこしうちかけ、たばこなどのみやすみ居て、

善光寺すはみだのちかいぞさ
くわんぎの泪袖にあまれり

第十二　長耀山感應寺

長耀山感應寺は、中興日長上人より此かた、法花讀誦の聲たへず、十羅刹女、三十番神も、感應の眉を開き



給ふべし、當寺に日蓮大聖人のみづからきざみ給へる御影有、十月十三日は此上人の御影講なれば、諸人まうであつまる事市のごとし、さる程に立願の事有ば、草履一足を持て參り、御影の前にかけ奉りて祈るに、所願成就する事、鐘のしもとに随て音を出し、谷のひゞきにおふずるがごとし、よくもろ〳〵のきごくおほければ、感應寺と號すも故有か、虎うそぶけば風生じ、龍吟ずれば雲をこるがごとし、是を感應と云、まさに行者の心ざし眞有ときは、其しるしむなしからず、常はおろそこに打過、何ぞ我身の上に事出來たるとき、俄に祈をかくるこそおろかなれ、寺内は廣大にして、本堂の前に五重の塔有、鐘樓、經堂、卅番神左に立給ふ、坊舍も廿餘ヶ所有、扨御經にも正直捨方便と聞て、

方便のあぢわひ惡き二ぜん箸
　なげすてなむめう法のあぢはひ

又一乘法無二亦無三ときゝて、旅の男、

二つなく又三つもなき法の花に
　座して佛に成は一乘

第十三　新堀村七面明神

感應寺より左へ少行て、新堀村の七面明神へ參ける、是は寶珠山延命院の住持日長上人、万治三庚子年正月十六日うたゝねの夢に、七旬にたけ給ひし老僧、かうぞめの袈裟をかけ、水精の珠數をつまぐり、枕もとにきたり給ひて、汝かならず七面の明神を勸請せよ、しからば大にはんじやうして、宗流ますますひろまるべしと、あらたに告をかふむりて、夢はそのまゝさめたり、日長つら〳〵あんじ給ふに、われ日頃妙見菩薩をくわんじやうすべきや、七面の明神をくわんじやうすべきやと、二心有て終に決せず、日頃を經る所に、今此夢想をかうむる事の有がたさよと思ひ、頓て七面の明神を此地にくわんじやう申されしと也、御縁日は九日と十九日と廿九日を取、神事は九月十九日也、七面は本地北斗の七星なり、妙見も又是星の名也、武曲星のかたはらに有て、諸星のつかさ也、七面を祟れば、妙見菩薩は其間にこもりておわします、日蓮上人大難の時、梅の木ずへに星下りて、きごくをあらはし給ふも、七面の明神の守護故なりとかや、然るに七面のもとは是甲州身延山に有、峯七つの山也、昔日蓮上人、此身延山にして法花讀誦有りける砌、其

御聲谷岸にひゞき、天人もあまくだり、十羅刹女も影向し給ふらんと、きく人かんるいをもよほしける、かかる所に、一人の美女忽然として來り給ひ、上人に向てのたまはく、我は此山の神也、御經どくじゆの聲にひかれてあらはれ出たり、此山の岸七つ有、そのをの七面をむかへて住す、今より後守護神と成て守べしとのたまふ、折節はぎり井の何某と云人來り、美女の有を見てうたがひの心をこりければ、たちまち七面の大蛇と成て、行がたしらずうせたまふと也、上人是をあがめ、身延山の守護神とし給ふを、日長上人右の通りの夢想をかうぶり、爰にくわんじやう有し也、立願の事有ば、神前へめんを七つかくるも有、鏡を七つかくるも有也、

七面鏡にかけてあきらけき
神のりしやうのたのもしきかな

旅の男、

めん〳〵の心々の立願を
かくる鏡もなゝおもてかな

第十四　不寢の權現

扨七面より左へ行て、さんさきを通り、せんだん木ばやしにつく、爰に不寢の權現とて、ちいさき社、樗の木ばやしの內に有、太田道灌植られし林也、さだめて社も其頃よりや有けん、其來歷をしらず、太田備中の太守、あらたに社を作られしと也、別當は眞光寺昌泉院よりおさなひつとめらるゝと也、

もろ〳〵の神の中にて火の番を
つとめ給ふか不寢の權現

第十五　駒込村吉祥寺

權現の社より左へ行ば駒込村なり、諏訪山吉祥寺は、太田の道灌、遠山丹波守、心ざしを合て建立せらる、開山は靑岩周陽和尙也、此寺、そのかみは和田倉橋の內に有しに、此所にて用水の井を堀けるに、井の中よりひとつの金印をほり出す、其印に、吉祥增上の四つの文字有、是によつて此所に一寺を建立して、吉祥寺と號すとかや、禪林はんじやうの靈地也、遙に年月を經て後、東照權現樣、初て江城に移らせ給ふ時、當時は第五代の住持用山玄照和尙也、城內きわめて狹かりける故に、吉祥寺を神田にうつして、城をひろげさせ給ふ、其頃寺の替地、旣に城をさる事遠かりければ人倫通ずる事希にして、寺のためいかゞ有べきと上

意有しに、玄照和尙答て申上られけるは、今此江城の氣を見奉るに、君の御代大きにはんじやうして市をなし、月に隨ひ日を追て家居たちひろまり申すべし、此故に後には、今の替地の寺も又地をかへられ侍らんと申上られたりければ、御感斜ならずして、則當寺に七十五石の寺領を御寄附有けるとなり、それより代々の御朱印有、明暦三年にあたつて、同安洞察和尙の住持たるとき、寺を此駒込村に移されたり、當寺に江城詩記有、文章玉をつらねて金聲有が如く、是をよむ人は、忽ちうつきをはらし、心淸々と成よし也、

すわさんればよきさいわいかなじるし

堀出をして寺はたちけり

第十六　富士權現

それより左へ行ば富士權現の社有、是は百年ばかりもむかしの事にや、本鄕に有しと也、彼所にちいさき山有、山の上に大き成木有、其木のもとに六月朔日に大雪降積る、諸人此木の本に立よれば、かならずたゝり有ける故に、人皆をそれて木の下に小社をつくり、時ならぬ大雪ふりける故をもつて、富士權現を勸請申けり、それより年每の六月朔日には、富士參りとて、貴賤上下まうでける也、寬永の初つかた、此所を賀州小松中納言拜領有て、下屋敷と成、今も猶其社の跡を殘して、每年六月朔日に神事有、山のかたち富士山をかたどる、其前に書院を立、富士書院と名付らる、扨爰にうつし奉る富士權現へも、今にたへせず、六月朔日には、江戸中の老若男女群集す、此社の別當も、眞光寺昌泉院より、おこなひつとめらるゝと也、

此神はするがの富士のおむすめか

こふじぢよろとやなをも申さん

第十七　白山權現

富士より吉祥寺の方へ立歸り、西へそろ〳〵行程に、白山町と云少き町有、爰に白山權現の社有、されば白山權現と申は加賀國の靈神也、其昔越の大德泰澄、初て白山に登て天女に逢給ふ、彼天女かたりてのたまはく、我は是天神第七代いざなぎの尊也、今は妙理大菩薩と名付、本朝男女根元神也とて、たちまち十一面くわんおんの形を現じて、御姿をかくし給ふ、又ひとつの峯にして、金の矢を持肩には白銀の弓をよこたへ給ふ神に逢給へり、我は是小白山大行事と云とて、聖觀音の形を現じ、御姿をかくし給ふ、次に又一人の

翁に逢たまふ、我は是大己貴の命と名付、西方浄土の主とて、御形をかくし給ふ、是によつて白山權現を崇給ふ、佐羅の早松は本地不動明王也、金劔は又是くりからふどうの變作也、又白山權現は、神代のいにしへは菊理姫の尊と申侍りきと也、今此地に勸請有し事は、元和元年の事なりとかや

白山の本地を今ぞきくり姫
きかぬさきより猶ぞたふとき

第十八　王子村金輪寺

程は遠けれども、いざ是より王子へ行かんとて、いそぎけるに、程なくかしこにつきたり、爰も豊島の郡にて、王子村禪夷さん金輪寺東光院と云、此社は熊野權現の別宮、若一王子の宮也、元龜二年に此所にくわんじやうあり、中興東照權現樣深く御歸依有て、社領二百石を御寄附有けり、それより此かた代々の御朱印有、寛永十一甲戌年、將軍家家光公御再興ましましけり、此時儒官の羅浮氏道春、宮社の緣起を作て社頭に納られたり、當寺に萬病妙應の五香湯有、近國の人民是を信服するに諸病をいやす、いつの頃何ものゝ云出しけるぞや、案内の乞やう小聲なれば、弟子の私に



合たる薬をあたふる故に、其妙すくなし、大音に案内を乞へば、住持の耳に通ずる故に、弟子の私ならざると云によりて、かしこへ五香望て行ものは、おこがましく大音聲にて案内を乞入事、おかしかりけり、然ばいづかたより來るものにも、湯漬飯に奈良漬の香の物をそへて出しもてなすなり、七月十三日に祭禮有、寺中十二坊より躍子を出して、風流のをどり有、見物の貴賤群集するなり、稲荷大明神、是も同じく王子の寺内也、若一王子の社よりは一町ばかりかたはらに有、當社は關東所々に祟る稲荷の棟梁也、毎年十二月晦日の夜は、關八州の狐ども此所にあつまり、狐火をともす、爰の地下人等は、燐火のともりやうにて、田畠の善惡を知と也、二月の初午の日は、諸人參詣して祈り申すとかや、

きつね火に王子田畠のよしあしを
　知らんと爰へこんりんぢかな

増補江戸咄巻第二終

増補江戸咄巻第三

第一　小石川の傳通院

けふは又小石川邊へともなひ申さんとて、うちつれゆく程に、無量山壽經寺傳通院につく、當寺は明徳年中に、酉蓮社聖冏了譽上人の開基也、御本尊は恵心僧都の御作、坐像の阿彌陀如來也、六八の御誓願は専濁世の苦界を憐愍し、四八の金色は十方をてらし、普く念佛の衆生を攝取し給ふ、然に了譽上人只常ならぬ知識にておはしまし、御ひたいに三日月生のあざ有て、闇夜に灯なけれ共、かの痣より光を放ち、聖教をてらして勤學なされけると也、御製作の書籍、是又數巻有とかや、應永七庚辰年九月廿七日に、御年八十歳にして御入寂し給ふ、去によつて今の世迄、九月廿六日の夜は、よもすから待夜の法事有と也、一說に云、了譽待と名付て、廿六夜の月を待といへり、定て其故有ぬべし、扨又所化は爰において學問を究め、古き名師の跡を慕ふ、去程に螢雪の劫作をつみ、眼を經論にさらし、反鵠垂露の點畫をかさね、手を紙筆の上に

ひるがへし、口に富樓那の辯花をちらし、疑門の扉をひらく事、迦葉の胸に悦して、只蓮の泥土を出るに異ならず、兎にも角にも僧俗共に、ねがわしきは九品の蓮臺なれば、五念修行にもとづき、三心具足の床の上に、三輩往生の素懷を期さん、

彌陀賴む人の心は小石川
　罪もむくひも流ゆくらん

幷に護國寺



又爰にあらたに伽藍立給ふ有、護國寺と云、眞言の秘密明らけく世々の御守りなれば、忝なくも元祿年中に古きを改めさせ給ひて、御造營まし〳〵ければ、きよらなる風情いはん方なし、玉殿玉のいらか和光の光をやはらげ、神さゞまり諸佛ぼさつ此御寺に守護し給ふにこそ、かゝるめでたき時に生れあひて、逢がたき御法をきくのみならず、極樂淨土も近くまのあたりに拜み奉る事淺からず、有がたさことばにものべがたけれど、古鄕につたえんとて、

あふげ猶神も佛も跡たれて
　國を守りの寺ぞ此てら

第二　金杉村の天神

扨てそれより金杉村の天神へ參る、是は古へ右大將賴朝卿勸請し給ふ所也、社は五間に三間也、此神の氏子は五間に三間の家作る事を恐れて作らざるといへり、本社は山の上に有、山の下に鳥居有、御神木は榎木也、

兒童（ちごわらべ）たのみをかけてよむ歌を
　かくもかなすぎ村の天神

第三　金剛寺

それより金剛寺へ尋行けるに、當寺は太田道灌の建立として、用山大和尙の開基たり、此故に道灌の木像有、其昔は寺院もおほく境內も廣く、僧錄、首座、請客、侍者、沙彌、喝食、維那、納所、行者、火番なんどありて、祈禱、祝星、開浴、淋汗の式々の勤怠らず、堂塔もきらびやかに塔頭も賑ひけるを、今はかすか成住居にて、人げもいとゞまれ也、本堂は萱ぶきにして、經行の道もなし、門前は水道也、門の內兩方に寺家の寮有、鐘は有ながら鐘樓もなし、只二柱に龍頭をかけたる也、それさへ一方は庭に生たる松の木、一方は柱にて、上に貫を渡してもたせたる鐘也、酉の年の回祿以後、神社佛寺かたの如くに作りあらため、或は地をかへ所をうつし侍りしも、さすがわびしかりける有さま也、

むかし玉の床に有共今庭に
　はきすてられし金剛寺哉

第四　吉水の極樂の井

それより吉水の極樂の井へ尋行けり、是は其かみ傳通院の開山了譽上人吉水の寺におわせしに、龍女かたちをあらはして、上人にま見へ奉り、佛法の深旨をもとめしかば、上人則彌陀の本願他力の實義、即相無相事理俱頓の要法を念頃にしめし給ふに、龍女即悟無生の理にかなひ、菩薩戒血脉を請、其報恩として此名水を出して奉りけり、此故に極樂の井と名づく、むかしは靈山八年の御法に、八歲利根の龍女、南方無垢の成道をとげたりしは、法花開會の力也といへども、まのあたり末代の今、畜趣を出て西方に往生す、まことに十方衆生のせいやくあやまち給はぬは、本願ふしぎの功にあらずや、

法を得て龍女返上する水は
　了譽ともにふしぎ成けり

第五　關口村目白不動

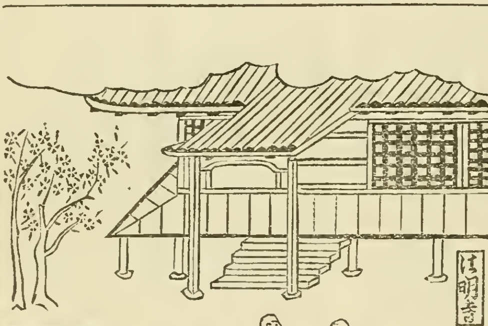
いざとても事に、關口村の目白不動へ參らんとて、打つれ行、此豐山新長谷寺目白不動の本躰は、是弘法大師の御作、荒澤鑽火（きりひ）の不動明王、御長八寸の尊像也、當寺の開山は秀山僧正也、そのかみ弘法大師、湯殿山の內、荒澤川にをこなひ給ふ時、大日如來御姿をあらはし、たちまちに不動明王の御形と變じ給ひ、みづから持給ふ利劔をふりて、左の御手をはらひたまへば、火焰さかりにもえ出たり、大師則此御姿をうつ

し給へり、たぐひなき秘佛也ければ、ふかくおさめて開帳なし、御本體の御厨子の前に、別に坐像の明王をすへ奉る、此玉眼の白き故にや、是を目白の不動といへる也、湯殿の行人鑽火を出す事は、此明王より初れり、されば法界體性智の德用は本有舍那の妙理をしめし、阿字三摩耶の觀相には瑜伽上乘の究竟をあらはし、護摩灌頂の壇の上には災難を他方へはらひ、祈念加持の床の前には福壽を自家に成す、まことにきごくの御本尊にてましませば、貴賤老若あゆみをはこぶ事おびたゞし、堂の前にはわびたる茶屋共有、是よりにしの麓を見おろせば、田面打ひらきて、心もはれ〳〵と氣もいさぎよし、こなたのきしぎはには清き流有て、御手洗水ともいはまし、

おしあひて參るめじろの鳥居かな
貴賤は不同かごにもれまじ

第六　曹司谷法明寺

いざや是迄來る事なれば、曹司谷の御經寺へ參らんとて行程に、威光山法明寺に着たり、當寺の開山は日源上人也、此上人もとは天台の宗風をつたへて、玉泉の法流を汲、止觀鑽仰の床の上には、一念三千の霜をこらし、無相般若の窓の前には、一乘實相の月をもてあそび、學術高く智德廣ふして、世にかくれなき名匠也、ある時駿河の岩本と云所にて、日蓮上人に行逢て法問有、互に勝負に任せて、弟子と成べしと約束して問答有けるに、詞の鋒は刃をみがき、辯舌に火花をちらし、妙理の劒はしのぎをけづり、難破の鐔をわりて、終に日蓮上人問答に勝給へば、日源は弟子と成給ふ、それより天台の流義をはなれ日蓮宗になり、寺



を轉じて此經を弘められたり、本堂は三間四面也、是は飛驒の內匠が作し所、日蓮上人の御影は、鎌倉の大佛師式部卿權僧都、百日の間精進潔齋して作りたる所也、或はいはく、楠正成の妻室の願主にて作られたり共いへり、又六老僧の御影も有也、鬼子母神は十羅刹の母として、法花經守護の神也、是も名作の木像也、そのかみ傍の村に有しを、日昭房といへる沙門、天正六年に此寺にうつして安置せり、諸願あやまたずかなへ給ふて、諸人參詣して祈りをかくる、東照權現樣御在世の御時、當寺に十石の佛餉を御寄附有、それより御代々の御朱印を給りけり、大猷院樣折々當寺に御成の事おわしましける故、御茶屋を立置れしと也、

御佛の威光の山のともし火に
　たとへし法のあきらけき寺

第七　牛込村穴八幡宮

それより引返して高田の馬場へ行、此所打開き、馬場の長さ四五町も有ぬべし、是より南へ少(すこし)行ば、光松山の八幡宮也、是を世に穴八幡と號し奉る、爰は武州豐島郡牛込の鄕戸塚村と云、此八まんの地、古しへはきわめて茂りたる山なりけるを、世々の人皆きりつくして根を堀返し、山は荒て岡となる、わづかの松の木二本殘りたり、然に寬永十三丙子年にあたつて、征夷大將軍源家光公の御弓大將松平新五左衞門尉直次に與力せし人々、弓の稽古をいたしけるが、誠に源家の宗廟なれば、八幡宮をくわんじやうし、その前に的山をつかせて、弓をもまなぶべしと云合る、幸に此地を望得て、喜ぶ事かぎりなし、其折ふし山鳩三羽飛來りて、松の枝にとゞまる、是誠に八幡大菩薩われらのまことの心ざしを御納受ましく〳〵て、御影向有事うたがひなしとて、皆々歡喜の泪を流し、かりに小社を造り、則二本の松を御神木と定、鳥居を立て崇奉る、それより六年の後辛巳の年、威成院の良昌僧都をまねきて社僧とし、法味をそなへ奉る、此僧もとは周防國の人山口の八幡の氏人也、いとけなくして毛利家の侍榎本の何がしにつかへしが、榎本身まかりければ、是をなげき、十九歲にて高野山に登り出家して、寶性院の法印春山の弟子となり、一紀の行法學道をとげて、三十一歲の時より諸國を行脚し、つちのへ寅の年十月の頃奧州にくだり、金花山の求聞持堂七十

五日こもり、次の年の春二月七日、同き山の尾上に八幡宮有、爰につやし侍りしに、其夜の夢に、髪からわに結る老翁、枕に立告てのたまわく、將軍家の御子幸巳の年の夏の頃にはかならず御誕生有べしとのたまふと覺へて、夢はさめたり、然共ふかく心の中にこめて更に人に語らず、それより二年過て、巳の年正月三日の夜武州に來り、曹司谷の御藥園の主が家に宿しける夜の夢に、さきの老翁又來りて告てのたまふ、今年夏將軍家の御子生れ給ふべきよしを、兼て云しらせしを、汝うたがひ思ふならば、明日此所へ將軍家御わたり有べき也、それをしるしとして、わがいふことばをうたがわず、人に語りきかせとしめし給ふ、夜あくるをおそしと、此夢をあるじにかたる、案のごとく其日俄に御成おわします、僧都もあるじも大きに驚き奇特の事におもへり、され共世にひらうすべき事にはあらずとて、猶ふかくつゝみて打過ぬ、其夏の頃中野の寶泉寺に立入て、法印秀雄の會下に有けるを、彼八幡宮を草創しける人々の中に、相知れる方有て、宮守の爲にとて招よせ、秋七月に草庵をむすばんとて、此山の麓の地形を引ならして、上の山一丈ばかり堀くづしたる山の底にちいさき穴あり、諸人あやしみ見るに、口は狭くて奥はふかし、おこもの共内に入て見れば、九尺四方に深さ一丈二三尺ばかりの穴也、内に御たけ三寸ばかりのからかねの佛像、石の上に座しておわします、其前にはちいさき瓶一つ有、左右に人の骸骨おほく有けるを、人々とりすてたり、彼佛像は世の常ならざりければ、良昌僧都加持し奉りて御厨子にうつし奉る、道俗貴賤此由を聞傳へ群集して拜み奉る、扨八月三日、右の御夢想にたがわず、將軍家の御若公御誕生ましく、上下萬歳をよばふ聲ちまたにみちたり、良昌いよくみてぐらをさゝげ祝言を申て、かくぞよみける、

かげとさかゆく御代はつきせじ
生そふる千とせの松も千尋有

此若公御たんじやうの奇瑞、其數々おほし、當社の縁起につまびらか也、同八月九日、社頭のめぐり一町四方に縄張して地形を開、本社をば御神木の松の本にうつし、鳥居を石清水のうへに南向に立かへつゝ、八重垣ゆいまわしけるを、賀州の太守黄門よりも數百の人夫をつかはし給ふ、此故に日數いくばくならで、

同月十四日に朝淸めして、遷宮取をこなひけり、此日賀州太守より、酒餠肴など山のごとく送りてにぎはし給ふ、次の日放生會の式取行ふ、尤御神樂御湯を奉り、松平新五左衞門與力同心引具して、的山の邊に幕をはり棧敷を構へ、かりそめの宮居なれば、八的百手等はことごとしかるべしやとて、只式正の小的をたつる、神的は射法なれば、小池の何がしが子十二歲にしてつかまつりけるが、又其有さま人の目をおどろかしける、其夜神前にて風流のおどり有けるに、亥のこくばかりに、神木の松の梢より、てうちん程なる光物飛出て、社のうしろに落侍りぬ、諸人おがみ奉りて、靈體なふじゆのしるしをあらはしたまふとて、いよいよたうとみ奉る、然に此山の腰より、きよきしたたり流出るを、堀ためられしに、限なくわき出侍りぬ、誠に石淸水の名にあふきごくならずや、昔より此所を阿彌陀堂山と名付つたへし、いか成故とも知人なし、さればみだは是八幡の御本地也、山の名もいわれなきにしもあらず、されども山の名を改、神木の奇特によそへて、光松山放生寺と號す、誠に神と君との道すぐに、納る御世のうごきなき、名もいわし水の御神の、廣き誓ぞ有がたき、

穴たふとふかくぞ賴む神心
弓矢八まん男みやうりを

第八　築土の明神幷赤木の明神

それより築土の明神へ參る、此明神と八幡宮とならびて立給ふ也、扨つくどの明神と申奉るは、將門の首を祝ひけると也、然共將門の首は、都へ飛ゆきけるを、美濃國南宮の山神、矢を放射留給ふといへり、いづれかたゞしかるべき、但先爰へ飛來て、そのゝち都の方へ飛ゆきけん、又は都より申くだして後、爰に神といわひ候や、此わけしりがたし、一說にいはく、此近所に赤木の明神と申てあり、是は將門の首木の梢に落留りて、血のつきたる故に赤木といふ、それより此築土に飛下りけるを、塚につきこめける故に築土と云と、古老の云傳へには有とかや、

七人に身をわかちたる人なれば
八百万にも神はなりなん

第九　堀兼の井　　第十　柏木右衞門櫻

それより尋ね行程に、ほりかねの井につきたり、是は武藏國の名所也、俊成卿のうたに、

むさしには堀かねの井も有ものを
うれしく水にちかづきにけり

とよみ給ふ、されば昔繼母の讒によりて、其父わが子に井をほらせけるが、いとけなかりければ、えほらで死ける故に、堀かねの井と名づけて今に是有也、

ほりかねの井のちをはりしいにしへは
物うしごめときくもあわれさ

それよりたどり〳〵て行程に、柏木村圓照寺につきたり、此寺の庭に右衞門櫻とて名木有、此ゆらひを尋るに、昔柏木右衞門督とておわせしが、源氏しなさだめの時、月卿雲客を、月日星くもかすみ、萬の木くさにたとへられしに、此ゑもんのかみをば、柏木によそへらる、いつもときわなりけるすがたをたとへていへるなるべし、あるとき源氏まりをあそばしける御つめに、右衞門督參られけるが、みすの内より猫のかけ出けるに、つなにてみすのうごきけるひまに、女三の宮を見そめ奉りて、それよりいひたよりて行通ひ給ふ、あるときはなだの帶をわすれて、源氏に見つけられ侍りき、源氏是をほのめかし、ゑもんのかみに酒をしゐて、御心よからぬ御目づかひをし給ひしより、右衞門督心の鬼にやいとゞしく心みだれたり、かくて少の内炁にながされ給ひしが、程なくめしかへされしかども、限なく心地やみに打ふしぬ、女三の宮は柏木の子をはらみてうみ給ふ、五十日のいわひのをり、彼若公を源氏かきいだかせ給ひて、女三の宮の御そばに立寄給ひて、

たが世にかたねをまきしと人とはゞ
いかゞいわねの松はこたへん

とよみ給ひしかば、宮はいふばかりなく、御はづかしくてひれふし給へりしが、ゑもんのかみうせしより、物のけにならせ給ひぬ、扨程なくうせ給へり、彼若君をば後に薫大將と名付しとかや、ゑもんのかみあづまに下りし時、うへられたる櫻なりと云つたふ、花はしべながく匂ひ四方にくんじ、花のもとを立さりがたし、されば此所を柏木村と云、人しげき所をきらふ人は、ひそかに此所へ來り、さびしく花打詠て短冊などを付、散花をさかづきにうかめなどして、たのしめり、かくのごとくに、ひとしき心の人も有て、あなたこなたより參りつどふ程に、花の頃はにぎ〳〵しく成ぬ、

かしはぎのゐもんつくるや花のかほ

といへば、旅男も

女三みやるとたしなめる春

といひて花の下に立より、人のつけをきしたんざく

を見れば、

たが世にか櫻うへしと人とはゞ

いかゞいもほり坊はこたへん

と狂歌をかきたり、さだめて此花の事を、小僧などに

たづね問けんとき、いざしらぬともこたへつらんと

おもへり、

第十一　澁谷八幡宮金王櫻

それより尋もて行程に、澁谷の八幡宮に着たり、此八幡は金王丸を祀ひたる共云、又金王丸爰を知行しける故に、八幡宮を勸請して、氏神としける共云傳へたり、爰に金王櫻とて名木有、彼金王丸と云は、左馬頭源義朝にめしつかはれし童なり、大がらの兵にて度度の高名をあらはしけるとぞ、然るに平治元年に義朝は藤原の信賴にくみして、むほんをおこし、待賢門の軍にうちまけ、東國へ落られしに、尾張國野間の內海に御家人長田庄司忠宗と云もの有、殊には鎌田兵衞正淸が舅なれば、心やすく思ひ給ひて、かれがもとに落來り給ふを、長田心がわりして、御湯をひかせ給ふとて、湯殿にて討奉る、むこの鎌田をもその前の日討たり、金王は其折ふし有合ざりしが、此由を聞てかけつけ、口をしやとてはしりめぐり、手むかふもの共を切ふせて、その後義朝の思ひ人常盤がもとに來り、此有樣をかたりつたへて後、出家して諸國をめぐり、義朝の御跡をとぶらひ奉る、修行のつゐでに古鄕へ來り、爰に櫻をうへ置しと也、此さくら今はかれて其木の名殘有を、おこりの落とて參詣の者共けづり取て歸る也、ある說には、賴朝の仰にて義經の討手にのぼり、都堀川の御所にて、夜討の大將土佐坊正尊と云はこれ金王丸なりといへり、今は別に櫻をうへ置て、跡をすてざるゆへに、花の頃は爰に來りて、詩歌をつらね、短册をかき、櫻の枝に付るもおほかりけると也、さて旅の男に向ひていはく、その方に誘はれずばよもや爰には來るまじきにとて、

よしともにさそはれ爰に金王の

かたみにのこすさくらをぞ見る

といひければ、たびのおのこも

よしつねに心がけたる正尊にて
今もはなしに澁谷なりけり

第十二　長者丸并香貝橋

それより百人町にかゝり、長者丸を過て香貝橋に着たり、爰を長者丸と云事、香貝橋のいわれを、古老の云傳には、むかし此所に澁谷の長者とて長者有けるが、金の長者也とて、代々おさな名を金王丸といへり、是正尊が子孫成べし、然るに後光嚴院の御宇かと



よ、其時の長者に子なきにより、氏神八幡宮に祈て女子をもうけたり、此姫十五の春の頃、目黒不動に參詣しける所に、白銀村の長者の子をしろかねの長者也とて、代々おさな名を銀王丸と申せしが、是も目黒に參詣して、御寶前のきざ橋にて、かうがひをひろい給ふ、見ればくりからふどうのほり物也、是はひとへに明王より給りたる所なりとて秘藏し、下向の道にて、澁谷の長者の娘を見て、戀慕の闇にまよひ、歸りて中だちを頼、千束の文を送りて、終に心うちとけゝれば、忍やかに行かよふ、あこきが浦のならひあれば、はやはし〳〵人も知たるやうになる程に、有夜姫をともなひて、舘の内を忍出て此橋迄來りぬ、もと大河にて橋も廣長成けるとぞ、渡らんとするとき、橋の下より鬼形あらはれ出でさまたげんとす、其時太刀にさしたるかうがいぬけて、くりからふどうと化し、鬼神をのまんとかゝる、鬼神も又是にまけじとあらそひけるが、終に鬼神いきをいおとりて、いづちともなくさりうせけり、其時またもとのかうがひと成て、爰にしづみける故に、かうがいばしと云と也、彼鬼形と見へしは、日頃澁谷の姫を戀て、色にも出さずして戀

死たるもの丶靈魂なりとかや、彼長者の住けるあとを、長者丸と云傳へけると也、かくて追手のもの共來り、二人ともにつれ歸りて、澁谷の長者には、幸男子なければとて、むこに取て銀王を改、金王丸とし、銀の長者には、子共多き故に、次男を惣領に立けると也、其長者の末孫、近き頃迄かすかなる百姓にて有ぬるよし、今もや有けん、

鬼神がけんをふるともかなふまじ
　くりから不動はゑ物にてのむ

第十三　麻布龜子山善福寺

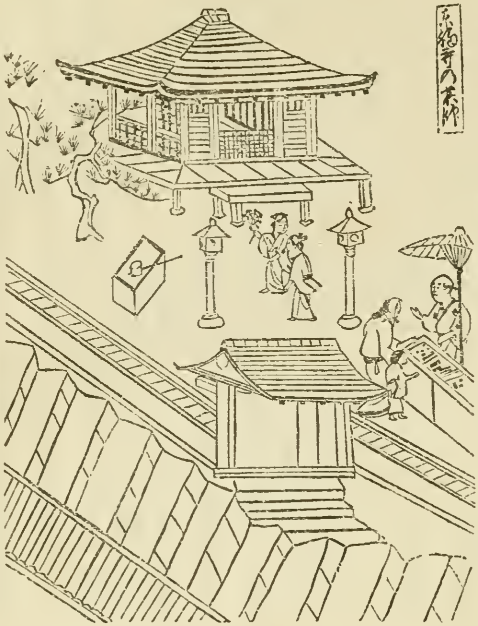
それより阿部豐後の太守の下屋敷の前をのぼるに、百姓町へ出、麻布へ行、爰に龜子山善福寺とて、一向寺有、是を世にあざぶ殿と云、當寺は親鸞上人の御弟子了海上人の開基也、此寺其かみは天台宗にて、此開山迄そのさき三四百年も過來る古跡なりとかや、然る所に、親鸞上人、常陸之國の配所より、御赦免にて京都へ御登の時、此寺に御腰をかけられ、御一宿有て、夜もすがら淨土の法問を談ぜられければ、了海信仰有て、則宗旨を改、上人の御弟子と成、一向專念の行者と成給へり、親鸞は翌日御立候とき、いよ〱我すゝむる所の法問はんじやうすべくは、此杖に根つきて、枝をたれ葉しげりさかふべしとて、自つき給ふ御杖を庭にさし置給ふ、此杖に根つきて、今に御堂の左の方に是有銀店の木是也、扨了海上人は、衆生濟度の御心ざしふかき故、心中に誓願有て、末世のため神と成、所の產宮になるべきとちかひ給ひて、七月十五日に遷化し給ふ、則藏王權現と崇奉り、今の世迄麻布の氏神と成給ひて、自他宗共に、宮參をば爰にまふでけると也、其外願望をかけ祈るに、かなわずと云事なし、七月十五日は祭禮とて、所のものども集て、相撲を取て神慮をすゞしめ奉る也、御堂の左の方の開山堂是也、

淨土より今此しやばぞたのもしき
　龜子山の善福のてら

それより陸奥の太守の下屋敷の前にかゝり、目黑方へ行、

第十四　東福寺の藥師如來

本御藥園の前に、東福寺の藥師とてあり、是は傳教大師御在世のとき、七佛藥師の靈像をきざみ給ふ、其中の一躰也、然るを本山第二世の慈覺大師あまねく衆



生利益の爲に、此御本尊を守奉りてくだらせ給ひ、廣く濟度の御結縁を施こし給ふ、爰に又江城の元祖太田道灌此靈像を歸敬し、年ひさしく城内に崇給ひしが、又故有て神田にうつし奉り彌々崇敬淺からず、ことさら時の 大御臺御願主と成給ひて 御堂御再興有、玉をつらね金をちりばめて、奇麗なる事目を驚しけり、其後又故有て、東叡山の廣小路にうつし奉りぬ、貞享元年に又此地へ遷さるゝ、誠に此如來、星霜久しく、もろ〳〵の衆生に結縁し給ひ、所々に座をさゞめ現當二世の悉地は、古往今來さらにかはる事なくさかん也、靈瑞奇特を語り傳へ、きゝつたへて、諸人あまねく知る所也、

おやくしのゆらいいかにと東福寺
傳敎をかたりきかする

第十五　紫雲山瑞聖寺

それより白かねの方へ行程に、紫雲山瑞聖寺につきたり、此寺は寛文年中に唐僧木庵禪師の開基也、今は小田原の鐵牛和尙住持し給ふ也、門の額は木菴和尙の筆跡也、門の右の方に、不レ許二葷酒門入一と石に切付立たり、門に入て右の方に、からかねの蓮葉の手水鉢有、内にもからかねの龜を入置、石のきざはしをのぼりて、四天王立り、本堂には釋迦佛立給ふ、向て左の方の奥に、木庵の御影堂有、毎日唐音の念經有、例へば念佛を、なむをみたうふさ唱るが如くにて、經の音聲餘寺より取わけ殊勝也、

紫の雲のたなびく山ならば
きずいしやうじと拜むべき也

第十六　直指院

それより目黒道に出西の方へ行程に、右の方に千體佛を安置したる小寺有、直至院と云、是は近き頃、直至院搗譽とて木食の聖有て、念佛のいとまには、佛をきざみ、あなたこなたへ千體宛立られ、八千體に及し時、爰に千體立らるゝを、終とせんと大願をおこし給ふと也、此聖もとは參州の人にて足助の後胤成とかや、若き時闇夜に人たがひして父を討、逆罪といひ、そこつといひ、是非なき事して、既に自害せんとせしを、皆人其やうすを知たる事なれば、太刀をうばひて本意を遂させざりけるゆへ、一日々々とながらへ居られけるが、とかく出家遁世の身と成、父母の後世をもとぶらひ、我後の世をもたすからんとて新智恩寺にて受戒して、一向專念の行者と成たまへり、然ば行住坐臥口には讀經念佛をこたらず、手には佛形を刻心に西方を念じ、身は有髪草衣木食と成て、自他平等の大願をおこし、目黒の原に一束の草庵を結び、往來の人をすゝめたまふ、其有様眞實報恩者と見へて有がたし、かくて念佛の功もつもり、きざみたる佛形も既に八千體になれり、時に寛文六年午二月彼岸會の事成に、行者もくねんとして座し給ふに、夢とも なく

現ともなく、老僧一人忽然と來りたち給ひ、直至に告てのたまわく、よきかなや汝を神無月廿日にかならず來迎引攝すべしとて、夢のさめたるごとくにうせ給、直至いよ〳〵信心まし化導の心深くして、參詣の諸人に向て、我宿命つき當年十月廿日に往生をとぐる也。心ざしあらん人は、其節參詣有て結縁したまへ、扨我しるしの石は、あれ成觀音の像きり立たるこそ、なきあとのかたみにて候と、毎日に語りきかせ給ふ程に、此事江戸中にかくれなし、既に神無月にもなりたる所に、如西と云へる道心者有ける、是は讃州高松の人にて俗名は西村角左衞門といひけり、世の中の無常成事をくわんじ、發心して此直至の弟子に成たりけるが、諸國修行して爰に歸りきたり、直至に對面して彼趣をきゝ、扨はよき幸に參りたる物かな、しからばわれ師に先立て十八日かばねを土中に埋り、師と共に往生の素懐をとぐべしと申ければ、直至のいわく、我は宿命かぎり有て往生す、なんぞ捨身して益あらん、時に取てかうくわひ出來なば、却て後の世の障りと成ぬべし、とまり給へとさま〴〵申されけれども、一筋に思ひつめたる事なればしきりに望け

る故に、直至も此上はともかくも、心にまかせ給へとのたまふ、既に十七日になりけるに、如西俗なりし時二世とかねたる妻、七つに成男子五つに成女子をつれ來り、如西に尋あひ、すみぞめのそでにすがり、さても御身は世をさり給ふべきとのたまふよしをきゝ侍る也、さまをかへ給ふだにもうき事におもひ侍りつれども、同じ世にまします故にこそ、此年月立はなれまいらせ候ても、又あふせもたのみつるかひ有て、たま〳〵あい見つるをうれしき事におもひけるに、うらめしくもむなしくならんとはのたまふかとて、さま〴〵歎きとゞめけれ共、如西は少も正念をうしなわず、利劍即是彌陀號と念じておんあひの魔障を降伏し、一聲稱念罪皆除ととなへて罪障をはらひ、不見不聞と觀念して更に愛欲の言葉なければ、妻子もおもひきりて今は臨終のさはりにも成べしとて、なく〳〵宿へ歸りたり、扨如西は、しのゝめも明渡るそらのあさの衣にづだの袋、五重血脉首にかけ、念珠を持、直至に向十念を請、われは鍾馗大臣と成て、衆生のゑきれいを拂はんと誓て、劍を持て穴に入、上よりは同行の輩、念佛の聲ともに土を投入片時に埋けると也、扨直至は廿日の夜すがら、道俗男女の群集したると共に念佛し、すはや聖衆の來迎を近付けるぞとて、くんじゆの念佛をとゞめ、其身はいすの上にのぼり、合掌念佛數遍におよび、積曆四十七歲の十月廿日の明方に、心顛倒せず、心しやく亂せず、心しつ念せず、心身にもろ〳〵の苦痛なく、心身けらくにして、禪定に入がごとく佛の本願に乘じ、往生のそくわいをとげ給ふ、其時西のそらに紫雲たなびきけるを、おがみける人々多かりけると也、死骸を煙となしけるに、悉く舍利と成給ふを、結緣のため方々へ乞請申事おびたゞし、さて如西はちかひける事むなしからずや、今に疫癘やみけるもの、あま酒を作り竹の筒に入、この墓にかくれば、速に病苦をのがれけると也、

法の場譽は四方にかくれなく
　直に至や花のうてなに
　　誠の道にいればせひなし
如西にて妻や子共をすてざれど

第十七　行人坂付六間茶屋

それより西の方へ行程に、行人坂につきたり、爰を行人坂と云事は、寛永の頃湯殿の行人爰に住て、大日如

來を安置奉りし故也、其跡今は小庵と成て大日堂有、彼頃迄は目黑原と云て、原中に茶屋六間有し故に、六間茶屋と云、今は人家立續きて、原は少しもなき也、

めぐろはらといひはつたへて原はなし
誠に是はからつはらなり

第十八　蛸藥師

猶行てたこやくしにつく、慈覺大師の御作成とかや、さだめて京都のたこやくしをうつされけん、

御やくしのるりのつぼをも爰にては
蛸つぼにもやなし給ふらん

第十九　安養院

少し行て安養院也、こゝに釋迦佛の涅槃像を安置し、法華讀誦、稱名念佛の道場也、誠此(まことにこれ)御佛靑蓮慈悲の御まなじりをふさがせ給ひ、頭北面西右脇臥の御尊容を拜奉れば、心なき者共迄も袖をしぼらぬはなし、三界の衆生を御へだてなく、一子のごとくにおぼしめさるゝ御佛にて、忝もわれら衆生の御父にてまします也、二千餘暦の昔を過し、今をがみ奉りても、覺ず泪のこぼるゝは、三世了達の如來にてましませば申もをろかなれども、ふしぎなりける御事也、

安養の臺に釋迦はねはんぞう
拜む衆生をもらし給はじ

第二十　目黑不動

漸く目黑不動につきたり、されば目黑と云は所の名にて、此御本尊の御名にはあらざる也、抑此不動明王の御由來を尋奉るに、慈覺大師の御作也、大師本は下野國都賀郡の人也、俗姓は壬生氏の後裔として、延暦十三年に誕生し給ふ、九歳にして父にはなれ、兄に隨て外典を學(がく)すといへども、心ざし佛法をしたひて、終に同郡の內大慈寺の廣智の御弟子と成、諱を圓仁と申奉る、大同三年の頃十五歳也、有夜の夢に、一人の沙門、身のたけ六尺ばかり成が、其姿はなはだうるはしく、世にたぐひ覺へて、深く敬ひ禮拜せしかば、彼沙門笑ひを含み、さまぐ〵物がたりし給ふ、傍に人有ていわく、汝此沙門をしりたるや、是は比叡山の大師也といへり、かくて夢さめて後、此由を廣智菩薩にかたり給ふ、廣智大にきどくの事におぼしめし、則慈覺をめしつれ比叡山におもむき給時、此目黑を通り日暮ければ、一夜爰にとまり給ふ、其夜の夢に忿怒强盛なるかたちのもの、右の手に劍を持左の手に索を持、

枕に立慈救の明呪をとなへ、枕もとをあらゝかにふみ給ふと覺へ夢さめたり、廣智も此音に驚き、同夢さめておき給ふ、慈覺は夢の有さまをかたり給ふ、これ誠にきどくの事也とて、折ふし靈木の有けるをとりて、夢中に御姿をきざみ作りて、此所に立置給ひて、比叡山にのぼり、傳敎大師の御弟子となし給ふ、承和五年六月入唐有て、あまねく諸方の名師にあひ、顯密二敎の深きむねをきわめ、同き十四年に歸朝有て、其後關東へ下向のとき、又此所に一夜をあかしてのたまわく、此所には瀧水有べしとて獨鈷を持て掘給ふに、やがて手に應じて瀧水漲りてわき出たり、今の御手洗の瀧水是也、此水炎天にも更に乾かず、又霖雨にもます事なし、扨又慈覺大師は、淸和帝の御宇貞觀甲申年正月十四日に御年七十一歲にして御入寂也、其後星霜はるかに押移り、元和三年のはる本堂のうしろの在家より火出て、ほのを旣に御堂にもへつきたり、此所の男女はしりあつまり、明王の御尊體を取出し奉らんとするに、しきりに黑煙立おほひ、猛火烈しくもえあがりければ、いかにともすべきやうなく、今は明王も同く灰と成給はんと悲しみける所に、明王の尊像瀧水の上に立汗を流しておわします、是を見奉る人をの〳〵かんるひを流しけり、此外靈驗種々おわします、諸人此故に力を合て、かたのごとくの本堂を作り安置し奉る、又寛永元年の頃にや、征夷大將軍家光公、此所におゐて御狩のときに、御鷹それて雲井にかけり行けるを、別當實榮におほせて祈念せられしに、たちまち御鷹飛來り、御寶前の松の梢にとゞまれり、家光公是をよばせ給ふに、御聲に應じ御手に移り參らする、御感なのめならずして、頓て御再興迄有けり、それより此かた理智圓明の威力廣大にして、迦樓羅焔の德用深妙也、本堂のうしろは、高くそばだちて、山の腰に堂有、爰へのぼるには、石のきざ橋をつたふ、きざ橋の本(もと)左の方に松有、是彼鷹居の松也、それより先には勾松(まがりまつ)といへり、獨鈷の瀧水今猶みなぎり落て絕る事なし、人此水にうたるれば諸病をいやす、前には二王門有也、扨本堂の後にからかねの大日如來を安置奉る、其外左右に或は三十番神、或は愛染明王、彼是末社もおほし、二王門の外にもあまた堂宮是有也、

あら鷹や松に鳥居て不動(うごかざる)

それで佛の堂は立けり

又かたはらにて人の語るをきけば、爰の不動は目黒と申、又關口村の不動は目白と申、又そめい丶にも目赤の不動とておわします、然ば此御佛は、目にかわりおわしますかとかたるを聞て、旅の男、

目黒目白目赤と云は不同也

明王をかへ靑黄といへ

第廿一　池上村本門寺

さらばとても の事に、音にきく池上へまいらんとて、尋ねもて行程に、荏原郡千東鄕池上村長榮山本門寺につく、當寺は高祖日蓮上人の開基也、其昔安房の小湊より船にめされ、鎌倉へ通り給ひしに、武州品川の浦にして、舟よりあがり池上村にいらせ給ふ、此村に關東番匠の棟梁宇右衛門尉宗仲と云もの有、上人彼宗仲が家に立より、一夜をあかさんとし給ふ、あるじ限なく上人をたうとみて、さまぐ\にもてなし奉る、聖人此山の景を見たまひ、心におもひ給ふやう、爰は我遷化すべき地成べしと、その丶ち身延山より此地に移り、宗仲が家にいらせ給ひ、あまたの御弟子達を集てのたまわく、我既に衆生利益の化緣つきて、遷化すべき事今三七日の內に有とて、佛法弘通の遺言ねん頃にして、弘安五年十月十三日に遷化有、宗仲も上人の弟子と也、家を點じて寺となせり、今寺中十六坊の內大坊是也、これ上人遷化の地也、漸(やうやく)此寺はんじやうして寺中の境尤廣し、祖師堂の內に上人の御影有、此御影は上人御在世の時、御弟子日法上人、則日蓮上人の御前にして、一刀三禮して、作立られたる御影也、長榮山本門寺祖師堂と云、三の額は本阿彌光悅是を書たり、寺中十六坊之內に古跡四坊有、大坊は是上人遷化の地にて宗仲が家、日澄上人の寺也、照榮院は日朗の寺、覺藏坊は日像の寺、南坊は日昭の寺也、次に寺の什物には、

一注法花經、是日蓮上人の御自筆也、自注を作りて經の中に書入給へり、殘りの四卷は駿河國玉澤に有

一靈鷲山より渡りし紫色の石一つ

一御弟子檀那等のもとへ御遺物自筆の帳

一身延山御弟子衆輪番持御自筆の帳

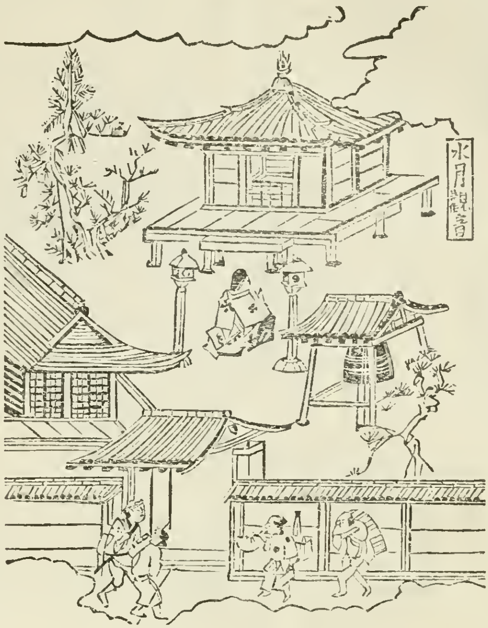
一數珠一連

一上人の御消息數多有

一肉付の齒一枚、是は上人御在世の間に拔たる也
一貞宗の太刀一振
有發句に、
池上の花はめうほうれんげかな
愚予發句、
とし御祖師と花や池上奉る
旅の男一首、
長く榮ふ山は誠に本門寺
妙法蓮花經の日蓮

第廿二　品川寺水月觀音

それより品川へといそぐ程に、爰も猶荏原郡品川郷、金花山水月觀音の堂につく、此御本尊は弘法大師安置の御本尊也、閻浮檀金の聖觀音の立像也、本是龍宮世界よりあがらせ給ふ、大師入唐歸朝の後、關東御廻國のつゐでに、品川の押領使某に附せられて、家に傳へて崇奉る、品川左京亮と云人迄代々相傳して、持佛堂に居奉りて他念なく敬信せらるゝ、應永年中に鎌倉の公方持氏公の時にいたりて、上杉禪秀と合戰有し時、品川の一門皆討死す、此ときに彼御本尊を草堂の内にかくし置たり、太田左金吾源持資入道久しく品川を知行して、深く彼本尊を信じて大檀那たりしが、そのかみこの所西國中國商人舟の着岸する湊也、故に士民はなはだ富榮て、觀音堂をもきらびやかに作りてあがめ奉りぬ、長祿元年四月太田道灌江戸の城にうつりて、當寺旣に五十餘町へだてたり、文明十八年七月に道灌は、さがみのくに糟谷館にして上杉修理大夫定正にうたれ、兩上杉不和になり、關東大きにみだれ品川の諸寺諸社皆破滅に及ぶ、爰に小田原北條家と兩上杉と數年の間合戰有、上杉家終にうちまけて江戸品川皆小田原の爲に押領せらる、其後小田原北條と武田信玄とあらそひ、永祿十二年九月上旬に、甲州の信玄旣に小田原へ押よせ、信州よりうすいの峠を越て武藏の北方にかゝり、江戸品川を追捕し、江戸の芳林院、品川の大圓寺、此くわんおんだうをはじめとして、數ヶ所の神社佛閣を燒はらひ、財寶共をうばひ住持の僧法師を殺害す、此ときにあたりて此觀音を武田方に取て甲州に歸りしかば、其人たちまちに、大熱狂亂して口ばしり云やう、我は是武州品川の觀音也、急ぎ本の所へ返しをくれと云、諸人おどろきをそれて、あたり近き里につかわす、又其里に



ても物くるはしく成たる人有て口ばしり、品川に歸らんと云、然共武州甲州の國境に關有て、たやすく人の往來なし、とかくする內に、品川の乞食一人甲斐國に來りしを賴て、彼本尊を返しつかはすに、乞食なれば關守もとがめず、品川に歸り給へども、堂はやけて只礎ばかり殘りしにすへ奉りて、漸(やうやく)わら屋を作りて入參らせけり、其後ひさしく此近邊に、非人おほくあつまり住けるを、寺社奉行にうつたへて皆はらひのけつゝ、承應元壬辰年五月中旬にあたりて寺地を拜領し、時の住持法印權大僧都弘尊則かたのごとく觀音堂を修造し、海照山品川寺普門院とあらため名付しより此かた、あまねく衆生をみちびき、普門示現の威力をあらはし、歸依渇仰の輩二世願望を遂る事、鐘に槌のふるゝ時に聲の出るがごとし、利生あらた成事は、猶名月の水底に落て影をやどすがごとく、信敬をいたす行者のまへには、かならず其しるし有、此故に水月觀音と云也、

品川の流も淸き水の月
影くもりなき觀音の慈悲

第廿三　東海寺附三僧の事

それより江戸の方へむいてくる程に、同所の東海寺に着たり、當寺は澤庵和尚の開基也、師の生國は但馬國出石村の人なり、出家して諱を宗彭と號す、其かみ事有て玉室、江月、澤庵三僧共に、流罪にせらるべきに定りしに、江月は別義の旨有てなだめられ江府にとゞまり給ふ、玉室は奥州棚倉に流され、澤庵は出羽の國上山に流され給ふ、其時落書に、

江戸見そうふたすりすりて一摺は

みそかすばかり殘る江月

とよみて江月を中にもかすにたとへたり、いく程なく御赦免有て二たび江府に歸り給ふ、寛永十五年十一月の初つかた、東海寺を立て引こもり給ひしに、猶その風儀をしたふ輩は、門前に市をなしけるとかや、去時有レ人和尚に梅干をちいさきつぼに入、進上しければ、和尚御覽じて御狂歌、

むかし見し花の姿はちりうせて
しわうちよれる梅ぼうしかな

又去方よりにごり酒を送るとて、十里酒と銘をうちける返禮に、

十里とは二五りといへる心かや
すみがたき世に身をしぼり酒

扨庭前に泉水有、爰に一つの石有萬年石號將軍家御成の事おわしまして此石を御上覽有しに、此石俄にうごきけるこそふしぎなれ、其時此奇妙を和尙文談にて書記、則石に切付させておきたまひ今に是有也、又和尙の御影は丸の内に一點を殘給ふ、廟所には大き成石をそのまゝ、三つかさねておかるゝ、是は常々弟子に云ふくめをき給ふ故に、かくのごとく成とかや、

開山の御影をおがみ澤庵と

東海もなく丸に一點

澤庵の御影は丸に一てんか

東海道にかくれ御ざらぬ

さる程にけふの日も、命の内にくれにけり、あすもやきかん古跡のゆらい、先此所に一泊すべし、尤とうちうなづき、幸旅人のやどるはたごやに立いりて、一夜をこそはあかしけれ、

增補江戶咄卷第三終

増補江戸咄巻第四

第一　芝の東禪寺

夜も既に明ぬれば、旅宿を出て江戸の方へおもむきける程に、東禪寺に着たり、當寺は靈庵和尚開基にて、齋家の末流也、もとは麻布の臺に有つるを、寛永の頃此所に引うつさる、門前は京都江府の海道にて、往來の旅人のたゆるまもなし、東は海づら廣々として、安房上總迄見えわたりて景地たり、門の內へ入て、小僧のあそび居たるに、此寺の事をきゝけるに、こざかしくも宗旨は齋家、開山は靈庵と云、

開山はたれと小僧に東禪寺
　齋家くらしく靈庵と云

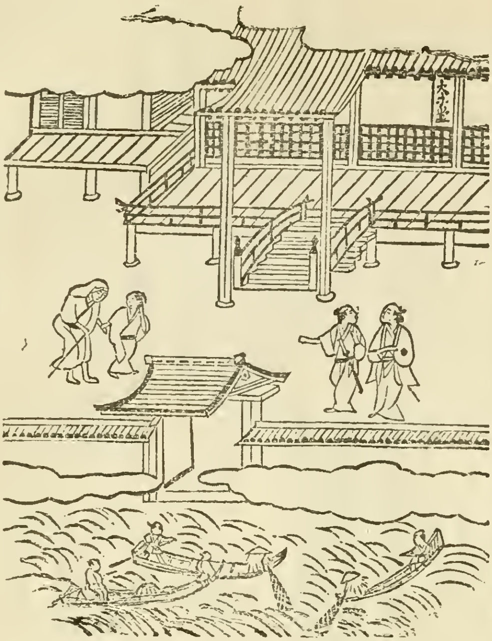
第二　高野寺

それより上の山へたどり登りて行ば、高野寺につきたり、本堂には弘法大師の御影を安置奉る、前の庭には三鈷の松をうへらるゝ、紀州高野の一山より、江府に所用あれば、爰に來りて宿坊とするゆへに、坊舍も少々立をかれたり、抑高祖大師は生國讃州の人也、諱を空海和尚と申奉る、入唐有て恵果和尚より眞言秘密を御傳受せさせ給て、御歸朝の砌三鈷を明州の津よりなげさせ給ふに、紀州高野山の松にとゞまる故、今に三鈷の松といへり、扨高野山を御開基なされ、御年六十二歳の承和二乙卯年三月廿一日に、御入定有也、大師の御事は御在世の奇妙さま〴〵にて、言葉にも盡し難し、遠國端島迄御修行有て、所々にふしぎを殘おき給ひて、今に是有なり、

弘法のちからを賴む諸人を
　淨土に高野と待給ふらん

第三　太子堂幷庚申堂

それより海邊へ出れば、太子堂幷庚申堂有、抑聖德太子と申奉るは、本朝佛法最初の元祖にておわします、御父は用明天皇と申奉る、御諱は橘の豐日と號す、欽明天皇第四の御子也、御母は穴穗部の間人の皇后と申奉る、敏達元年の正月朔日の夜、間人の御夢に、金色の天童來り給て間人の御胎內をかり給ふ、はしひと夢の內にのたまふは、我不淨の身にして、御請申がたきと仰られければ、天童かさねてのたまふやう、われに求世の願有、皇后の御はらより外に、又やどるべ



き所なしと、しひてかゝり給ふ、さて御口へ飛入給ふと御覽じて、御夢はさめたり、猶さめて後迄、口の內に物のさわりぬる心地したり、かくて明る敏達二年正月朔日に、皇后宮中の庭を見めぐりあそび給ふに、御厩を過させ給ふ時、しきりに御心地して、太子降誕し給ふ、是によつて厩戸の皇子と名付させ給ふ、御成長にしたがひ、諸道に妙を得させ給ふ、然所に百濟國より、佛像經卷に僧あまたわたされける、太子是を尊敬ましませば、守屋の大臣あへて是をもちひずして、佛像經卷ことごとくやきすてたり、かるがゆへに太子是をせめほろぼし給ひて、佛法はんじやうの地となさしめ給ふ、推古廿九辛巳年二月五日に、御壽四十九歲にして薨じ給ふ、此太子の御ちからならずば、いかで末代の衆生、佛法の有がたき事を知べきや、御恩德の高き事山のごとく、深き事海にひとし、心あらん輩、たれかおろそかに思ひ奉るべき、又庚申を爰に崇奉るも、其故有事か、我朝にて庚申を待奉事、是又攝州天王寺より初れり、爰にむかし民部の僧都とて、七旬にあまる僧一人ましますが、有時十歲ばかり成天童、そらよりあまくだり給ひて、僧都に告てのたまわく、それ本朝は神國にして、佛法はんじやうの國也、然共庚申待と云事をしらず、汝是をあまねく衆生につたへよ、先庚申の夜、鳥のなくをかぎりにまつり待べし、然らば今生にては、七難消滅して七福即生し、來世にては地ごくがきちくしやうしゆら人道のくるしみをのがれ、佛果に至る也と、をしへ給ひて天上有、それより此かた日本國にひろまりて、信仰し奉ると也、扨爰の太子堂より、東の海づらを見おろせば、

氣はれ〴〵と、心もひろ〴〵としていさぎよし、且又太子と守屋と合戰有昔を聞て　太子方の雨とふるやにせめられて、いかで守屋はたまるべきかは　とよみければ、旅の男も此國佛法有緣の國也ときゝて、

聖德より佛法ひろまる國成に
しいてきらふもりやなかるべし

第四　歸命山如來寺の大佛

海邊の道を江戸の方へと行ば、歸命山五智院如來寺に着たり、是を世に芝の大佛と云、是は但唱木食行者の建立せらるゝ所也、然るに但唱は生國攝津國多田の鄕の人なり、其母有馬の藥師に祈りてもうけたる子也、三歲より忽然と魚肉をせず、少にても理不盡にあたふれば、則はき返して腸中にとゞめず、扨胎内に有し時母の夢に、老僧來りて告てのたまはく、汝がはらめる子は權者也、かならずもつて、魚鳥の肉を喰べからずと、しめし給ふと見て夢はさめたり、母ふしぎにはおもひながら打過ける所に、隣近のもの共の申けるは、懷胎のときは、とびうをの干物藥也といふてすゝめける程に、是を用ひければ、此母大きになやみけると也、それよりかたく魚鳥の肉を禁じける、扨生るゝ時母少も苦痛なく平産す、漸く成長して、五歲の頃とかよ、小兒の云くわれ胎内に有し時、母上乾魚を用給ふ、其骨今に我等の背中にありていたむ也、是を取てたまはれかしと云、そのとき小兒の背を見れば、左の肩さきより、二三寸下の皮肉の間にあやしき物見ゆるを、針をもつてほり出して見れば、魚のほねのちいさきにてぞ有ける、九歲の年よりのぞみてしゆつけし、近き所の寺に十五歲迄居たり、其年但善木食の弟子と成、信濃國檀特山に籠り、百日の內に念佛三昧を發德し、むかひの峯に三尊の影向を拜む、其御すがた甚大にして、虛空にみち給へり、其後山を出て、又淺間の嶽にこもる事百日也、紀伊國にいたり、那智におこなふ事また百日也、其外西國南海あまねく廻り、もろ〳〵のきどくを見る事たび〴〵也、殊に江府にくだり、此大佛を五體作り漸く箔の功をじやうじゆせり、又門前の石の二王も、同く但唱の作也、但唱の弟子念幸は、都の東白川の邊田中と云所に、地藏と廿五の菩薩を作りあんちし、念佛をすゝめられたり、然るに但唱は六十一歲にして、奄然として遷化せらる、念幸も今は往生し給ふ、三字念佛のすゝめは、但

善但唱二代にして絶たり、扨此寺のうしろは山、前に海のおもてを見渡絶景の地也、庭には櫻藤などうへられければ、花のさかりは一入の興あり、門前の茶屋は、江戸中の商人、諸賣買の相場定の會所とする、又は江戸より上がたへのぼるもの、京より江府へ下もの、伊勢參宮の送りむかへなどの、酒もり所に用るゆへにいつもにぎ〳〵しき也、さて又ほうかう人の男女、二季の數人の頃は、爰にて出合、あるひは逢をよろこびて、過にしことをかたり、行すへかけてのかねごと、たがいに云も有、或はうらみかこちて袖にあまるなみだの雨に、ぬれたるありさま、いやはやよその見るめも、うら山しかりけるとき〳〵て、

御佛の利生かふしぎ歸命山
　五智院衆にあふぼとけまへ

堂を出る左の方に閻魔堂有、石にて切立たる地藏菩薩も立給ふ、是又但唱の作なり、

第五　泉岳寺

猶江戸の方へむきて行ば、泉岳寺に着たり、當寺は門菴和尚開基にて、洞家の末流たり、其かみは麻布の臺に有しを、正保年中に此所に引移さる、境地絶景にして、山門は雲をさしはさみ、虛空に聳ゆ、門の內の道兩方に並木の松有、雪飛で枝につもれば、着綿をのべて雲にまがひ、風吹て梢をわたれば、琴のしらべ空にひゞく、東南の方は海上遙に晴て、帆かけ船波をはしり、萬天の雲に漣をなせば、田面の鴈のわたるに似たり、釣する蜑のいさり火は沖に小さく浮沈、なみまにすだく螢火か、それかあらぬか晴る夜の、星かとのみぞ見へまがふ、嵐はげしき折からは、波爰元に立か〳〵る心地して、獨りまろねの夢をやぶる、潮にひたす月影は、くもらぬ鏡をあらふに似て、海より出て海に入、すべて眺望に興をもよをす、岸にはかし船をうかめて江府の方へ行人を乘る、心有人の見たらんには、さぞ面白侍らん、

螢火や雪を集てせんがくじ
　つのれば悟道の爲にこそなれ

第六　福昌寺の藥師

猶北に行て左に小坂有、爰をいさらごと云、此坂をのぼれば右の方に福昌寺の藥師とて、ちいさき藥師堂有、是はもと鎌倉はんじやうのときは、彼地におわせしが、いつの頃か品川の御殿山にうつし、其以後此所

へうつし奉る、智證大師の御作也、醫王善逝の悲願平等にして、一切衆生の爲に光明を放て、是をてらせばよく惡業煩惱の闇をてらし饒益をたれ、是をすくへば廣大慈悲の本誓むなしからず、靑色の寶壺をひらきて、微妙の法藥をほどこし給へば、萬病すみやかにいへ壽命ながくのぶる、しかのみならず、日光月光の二菩薩は、晝夜をこたらず衆生のまよひをてらし給ふ、十二神將は又二六時中に守護をくわへてやむ事なし、八万四千のけんぞくの夜叉は、常にかつがうの人をまもる、たとひ三毒五欲强盛の羅刹鬼なり共、いづれかをそれしりぞかざらんや、然に此御堂に十二神將の形像ましまさねば、當時の住持かゝる權者の御作佛に脇士なき事を本意なく思ひ、心にこめてかなしみけるが、貧窮なればちからなく打過けれ共、ねてもさめても心にかゝりて、貞享二年の春ふと思ひ立て是をもよほすに、佛意に相かなふしるしにや、遠近の奉加不ㇾ招にあつまり、程なく其夏の頃成就したり、かくあれば貴賤老若結緣の爲、又は十二神將造立のよろこびの爲、開帳すべきとて、五月一ヶ月開帳有て諸人におがませらる、此住持もとは奧州田村郡守山の人なりしが、おさなかりける時より出家して、更に名聞利用の望なく、有にまかせたる生つきにて、外をかざる事なし、然共佛の莊嚴をば、心にこめらるゝこそ殊勝なれ、

まことある願を佛いつくしみ
福昌寺てや成就有けん

第七　三田山魚籃寺の觀音

いさらごの小坂をのぼりて、三田へ出て魚籃寺へ着たり、當寺の觀世音は異國佛にて、常は秘して拜奉る事なし、貞享二丁丑年の春開帳有て、諸人におがませらる、其頃參詣し尊像を拜奉るに、右の御手には、籃に魚を入てもちたまふ、左の御手には、天の羽衣をもたせ給ふ、御たけ八九寸一尺ばかり共おがまれさせ給ふ、御面相は唐女のごとくにてわたらせたまへり、抑此御佛と申奉るは昔唐土金舍檀と云國、つよく旱魃有しとき、浦の漁父共食とぼしくて、あみを引べき力もなく、既に餓死すべきと見へし所に、觀音の大慈大悲にて女と變化、每日々々籃に魚を入持來り給ひて、漁父のうへをたすけさせ給ふ、さて又薄衣なるものには、天の羽衣をあたへて、寒をふせがせたまふ、

かくて月日を送らせ給ふ内に、浦人共命のびて、ちからもつきもとのごとく、すなどりをして世を渡りける程に、はや心も長閑になりて、色欲の心も出來ければ、彼魚籃女のようがんうるわしきに心まどいて、をの〳〵宿の妻にさだめんとあらそふ程に、魚籃女のたまふやう、大勢の人にいづれとわけてしたがわん樣もなし、此上は我望をかなへ給ん人に、したがふべしとあれば、みな〳〵よろこびいかやうの望にてもかなへんと云、其時化女、さらばこの御きやうを、一日一夜が内に覺たらん人に、したがはんとて、くわんおん經をよみてきかせらるゝ、其時色にめでたるもの共、此經のわけはしらね共、我望をかなへんが爲、われおとらじと、彼御きやうを讀ならひける程に、いづれものこらず此經を覺たり、然ば是も又いづれともわけがたければ、此上は別の經をのぞまんとて、法花經一部八卷廿八品を、皆覺たるものにしたがわんとのたまふ程に、又皆々精を出しよみならひけれども、卷軸おほければ覺ゆるものなし、其内にばらうと云者一人能覺、さらばやくそくをたがへず其方のつまと成べきとて、かれが宿所へともなひゆきけるに、

其夜俄にかの女わづらひ付て、身大きにはれ、ねつ甚敷事火ゑんの如くにて、あたりへもよられざる程也、おとこなげきてさま〴〵いたわれ共かいなくて、終にむなしくなりぬ、男なげきしづみて、死骸を野邊に送り、無常の煙りとなしてわがやに歸り、いよ〳〵ならひたる御經を、かたみとおもひよみ居ける所へ、八旬ばかりの老翁たづね來りて、かやう〳〵の女や此邊にはきたらざるか、此翁は彼女の父也、いつも歸



りけるが、今夜かへらざる故に尋來るといへば、彼男されば其女は、われらの妻にやくそくして、此所へつれ來りければ、俄に煩付てはてられけると、なく／＼かたりければ、扨はさやうに有けるか、さらば其けぶりとなしたる所へ、われをつれゆき給へと申さるゝ程に、かしこへともなひゆき、爰にて候とをしへたり、そのとき翁、はいをかきのけ見せけるに、皆金銀るり、しやかうめのふの、舍利佛となり給へり、おつとおどろき、ふしぎのおもひをなしおがみ奉れば、其とき翁申樣、きのふの女は、くわんぜおんの化女也、汝等あくがうぼんのふにひかれ、ぢごくにおちん事をふびんに思ひ、かりに美女とへんげて、ほうべんのためにをしへたる經也、われもきのふの美女と、一躰分身の菩薩也とて、光をはなちうせさせ給ふ、彼男かんるいきもにめいじて、則出家し彼魚籃を持來り給ふ御すがたをきざみうつして、魚籃のくわんおんと名付崇奉り、毎日法家ごくじゆ、稱名念佛をこたらずして、終に往生のそくわひをとげたり、是を見聞輩皆皆佛に歸依し奉り、ともに極樂へ往生をとげしもの、かぞるにいとまもなし、彼きざみたる御佛像、遠く本朝へわたらせたまひて、年ひさしく西國の邊土にまし／＼けるを、當寺の開山諸國修行の節、御夢想の告有て、是を守奉り爰にきたり安置し給ふに、貴賤ききつたへあゆみをはこび、諸願を祈り奉るに、ひとつとして叶ずと云事なし、有難かりし靈佛也、つら／＼おもふに、當寺の開山は、そのかみもろこしの漁夫の再來か、例せば天竺の月蓋長者、本田善光と成て、善光寺の如來を負奉り、信州に下りけるにことならずとおもへり、誠に開帳の時節にあひ、拜奉りけるも御緣成べし、

御緣あれば此くわんおんを三田の山
　わきにて又もぎよらんじはせじ

しんじつに祈る願を見たまへや
　大悲の御目にぎよらんじやせん

第八　田町の八幡宮

爰にて三田八幡尋ねければ、今は芝の田町に移り給ふと云によつて、それよりもとの道にひつかへし、田町へ行て此八幡宮を拜み奉る、もとは三田に立給ふを、正保年中に爰にうつし奉ることなり、此宮は渡邊の綱を神にいわひけり、つなを三田の源五と云て、三田

を知行させり、尤もとは、津國の渡邊より出たる故に、渡邊を姓とせり、身終所は武州の三田也と云傳へたり、毎年八月十五日に神事有、社のうしろは山也、前は海のおもてを見わたして殊勝なる宮立也、

渡邊の綱とやいわん見しめ縄
ながく守れや源の御代

第九　西應寺

それより北へむき行程に、田中山西應寺に着たり、此寺は鎮西一派の流儀をつたへて、念佛三昧の法門をひらく、其昔人王九十九代、後光嚴院の御宇、應安三戊申年仲秋の頃、明賢上人初て開基し給ふ所也、御本尊は惠心の御作、西方彌陀の形像也、鎮守は熊野三所權現也、彼三所之内證誠殿は、則本地みだによらい也、然れば本地垂跡共に一致にして、あまねく念佛の衆生をみちびきおわします也、然るに開山明賢上人は、應永五戊寅年黄鐘十日に遷化せらる、年八十六歳也、其後天正年中に東照權現様此寺に入らせられ、開基の由來其年代をきこしめされて、寺領御寄附ましましけり、時の住持御朱印をいたゞき候てより、御代代の御朱印相違なく出さるゝ、第十六世存冏和尚の時、將軍家より仰の旨有て、一夏九旬の中、法幢をたて一百餘人の所化を引て、宗風の實際をしめさるゝ、すべて念佛三昧他力往生のことわり、日々にあらたにひろまり、をの〳〵此をしへに歸す、應安開基より以來、三百餘年におよべり、講堂の前後に園林有、老松數株ゑだをたれて、いく百歳をか經ぬらん、武州相州の間に、末寺あまた有といへり、

おふ西應寺よろこび有やみだ頼めば
浄土の外へはやらじとぞ思ふ

かくて門外へ出るとて、かたはらを見れば、門番の翁乾菓子をあきなふと見へしが、枕に白頭をやすめ、飴をしやぶり居るを、旅の男見て、是や宋の晦機師が頌に、人間番衆西應寺、推二枕白頭一握レ飴舐、とは此事かとてわらひながら一しゆ、

さいおうじうまそふなれば其飴を
少はうばにふるまひもせよ

とよみければ、番のおやじかしらをあげて返歌に、

是ぞらくがんをとぢまめやすみしを
おこし米成人ぞうらめし

とこせきしながらよむほどに、さて〳〵其方は、かき

の本の人猿か、山家の赤へたかと、わらひてそこを出にけり、

第十　日比谷邑神明宮

かくて行程に、豊島郡飯倉日比谷邑の、神明宮につく、抑此神明の宗廟天照太神の宮所也、人王六十六代一條院の御宇、寛弘二乙巳年九月十六日にあたりて、御神幣幷大牙一枚此地に降くだり給ふ、邑中の老若男女あつまりて、是はいかさま、神明のあまくだり給ふべきしるし成べしと、あやしみ奉る所に、いづくともなく年七歳ばかりの女子、其所に歩み來り、たちまちまなこの色かわり、おどりくるひ口ばしりて云、我は是神風や伊勢の内外兩宮の神也、是より東國に當て軍有故に、常陸の國鹿嶋の地に降臨して、其軍兵を退治し、程なく歸座の道に及ぶ、われ此所に跡をとめんとおぼしめす也、此故に二種のしるしをあらはして先汝等にしめす、はやく宮所を刱て、おさめ奉るべし、いかにもたふとみうやまはゞ、末の世迄も此所さかへにぎはひてめでたかるべし、我又守の神と成て夜の警晝のさわぎ、惡事災難を他方へはらひ、天か下納り五穀豐ならん、相摸國の内に藤原氏のもの齋藤氏のものあらん、是をまねきて神職の長となして、宮仕させよとて神明あがらせ給へば、少女も跡方なくうせにけり、村中此奇特によつて打置がたく、先小宮を作て御神幣と大牙を宮に納奉り、齋藤氏の人を尋しに、相州足柄の内に齋藤氏の人有、神明の御託宣にまかせまねきよせて、家を作り神職を司どらしむ、靈驗誠にあらたにして、祈り奉るにかなはずと云事なし、かくて數百餘歳を送りて、後鳥羽院の御宇建久四癸丑年右大將源頼朝卿、下野國那須野に發向し給ふ時、當地の宇多川に至て、頼朝卿のはき給へる御太刀自ぬけて水底に沈みけり、水練のものをめして、さがしもとめさせ給ふに更になし、爰に傍に人有て申様、此川上に神明の宮所おわします、其うしろの方に瀬有て水みなぎる、水の底に物有て光る、是定て尋ね給ふ所の御劔なるべしと申上る、頼朝きこしめして、すなはち彼男を案内者として神明宮に御參有、やがて後の瀬にして太刀をもとめ得給ひて、直に神明の御寳殿におさめ給ふ、宮居は神さびて、何となくたうとくおぼしめして尊敬淺からず、一千三百餘貫の田をもつて神明に御寄附有、それより社頭にぎはひ、次

の年より神主社僧禰宜等の家々軒をならべて立つゞき、神前の祈念おこたる事なし、貴賤老若あゆみをはこび祈をかくるに、かなはずといふ事なし、其後星霜ひさしくかさなりて、人王一百二代後土御門院の御宇、明應三年の頃伊勢の新九郎氏茂と云人有、小田原の城主大森實頼を退治して城を乗取、自北條新九郎と名乗、それよりいきをひおびたゞしく、あまねく關東を打随へ、後には髪をそりて早雲と號す、此時にあたつて當宮の御領をけづりとつて、禰宜神主社人等各飢にのぞみ、宮居ことごとく大破に及ぶといへども、修理するたよりをうしなふて、社僧宮司も方々へ行散て、只其跡ばかりわづかに殘り、年月をふるといへども亂世打續て、おさまらざりしかば、をのづから參詣する人もなかりし處に、正親町院の御宇天正年中に、東照權現樣關東御領知のときにあたつて、絶たるをつぎ、すたれたるをおこし、神社佛閣いにしへの故有所には、所領御寄附ましましけり、當宮も社領御寄附有て、いにしへには似ずといへども、形のごとくの御再興をいとなみ、兩神主其外社人等、安堵の眉をひらき、漸神前にぎはひて、燈明の光り和光の月になぞらへ、利物の花ぶさ匂ひほどこし給ふ、寛永十一甲戌年大將軍家光公御信敬をもつて當宮御再興ましまし、いにしへにかわらず宮居奇麗の修造有けり、さて舊例にまかせ、年毎の九月十六日に、神事祭禮おこなふ、此砌市立、在々より品々の物を、もちはこびてあきなふ、中にも古來よりおほくもち來る物は、土しやうが、うすきね、木ばち鮓くだ物也、誠に天下安全武運長久の御祈禱、次には五穀成就万民快樂のため、御神樂たへず、取おこなひ丹誠をいたすと也、

神明に祈る願のかなひつゝ
　日比谷あらたと飯倉すかな

第十一　三縁山増上寺

扨三緣山增上寺に參る、本堂は東向、橫二十間縱二十五間也、扨本堂へ向へば、左の方に台德院樣の御廟有、寛永九壬申年正月廿四日に、御他界ましますなり、同御臺樣の御廟有、御法名は崇源院殿、一品大夫人、昌譽和興、仁淸大禪定尼と號奉る、寛永三丙寅年九月十五日薨給ふ、兩御魂屋の美麗成事、金銀をもつてのべつけ、七寶をもつてかざれたれば、西方極樂世界もまのあたりにて、爰を去事遠からずとき給ふ

も、ことわりに過て覺へける、上の山には五重の塔有、銅の瓦をもつて是をふく、本堂のうしろに、經堂太子堂有、本堂へ向右の方は方丈也、同方の庭に大き成鐘をかけらるゝ、左の方に開山を初代々の上人の御影堂有、山門の上には、釋迦文珠普賢十六羅漢を安置す、爰にあがりて四方を見るに、江戸中は中におよばず、あわかづさまで、くもりなく海のおもてを見わたして、只目の下に見ゆる也、常は山門へ人のあがる事なし、毎年正月十六日、二月十五日、四月八日、七月十六日、同月十八日、此日は山門へあがる事をゆるさるゝ、諸國よりつどふ所化、數千人にあまれり、前は京都江府の海道也、上下往來の諸人市のごとし、海上はれて、船の行通ふを見れば、又有べきともおもわれぬ絶景也、抑當寺の開山は、上總の國千葉介の末孫、千代松丸と云し少人、幼稚の時より出家をとげ、後は其名を聖聰と申ける、然るに眞言の宗流を汲て祕密金剛の妙用をあふぎ、遍照舍那の實際を求め、後には、江府の貝塚の臺光明寺に住せらる、此地は今松平伊豫の太守の屋敷と成なり(これは越前の伊豫太守の事也後に越後中將公の屋敷と成今は又細に渡數多の屋敷と成辨慶堀のはたなり)、其頃おひは人王一百一代後小松院の御宇にあたれり、時に至德二乙丑年の夏、光明寺にして論義有、讃題を善導大師の四帖の疏に、長時起行果極菩提と云釋文也、然るに聖聰一山の能化として、諸化の輩、問者答者たがひに、法門の扉をひらき、疑難の石をくだかんとす、爰に源空上人より七世の孫弟、小石川傳通院の開山酉蓮社了譽聖冏上人は、托鉢の躰にて、彼講席法文の場に立、つくづく是をきゝ給ひて、莞爾と笑て歸りたまふ、聖聰此由を見て、自坐を立、跡を追ふて尋給ふ、やうやく淺草の邊にて追付、終に其笑をふくみ退事を問給ふに、了譽その故を答給ふ、それより互に、口に劍裁をふくみ、身に妙道の鎧をきて、釋福文の利にかたんとしばらく問答し給ふに、淨土の奥義に舌を卷、聖聰深く法味をあぢわひ、先の惡念名利の鋒鋩を折て、たちまち眞言をすてゝ、偏に淨土宗に歸し、則我寺光明寺を改て三緣山增上寺と號して、了譽上人の弟子と成、大蓮社、酉譽、聖聰上人と成給ひて、當寺第一の開山也、應永廿四丁酉年七月十八日入寂し給ふ、第二代を明蓮社聰譽冏仰上人といへり、第三世は定蓮社聖観音譽上人といへり、此上人心に大願を發し給ひて、億々の衆生を度せんとはしたまへども、皆人邪見放逸にて、

地獄有と云事をうたがひそしりて用ず、十惡の繩にかゝり、三毒の海にしづむが故に、いかにもして誠の心ざしを出さしめんと、自誓願して衆生見こりの爲に、臨終に火車に乘去べきと、常々心にこめて大願有しに、既其心ざしむなしからで、有時火車を引て鬼形來れり、上人のたまふは、只今は我行べき時にあらず、今少衆生をも化度し、弟子にも一句のしめしをなさん、來年の今月今日きたれと、仰られければ、鬼形火車を引てさりぬ、又ぞや月も日もかわらず、火車來りぬ、其とき上人の辭世にいはく、

看々天地清濁色　五妙境界淨刹臺
三惡火坑阿鼻底　一器不轉古今事

火宅をばまたもや出でじ小車の
　法得て見ればわがあらばこそ

とのたまひて、火車に打のり給へば、震動雷電して鬼形共引て、いづちともなくうせけるとなり、權者の方便とは云ながらふしぎ成ける事共也、つたへきく佛在世の提婆、我朝の守屋も本地は佛菩薩にてましますか、衆生の見せしめに、かりに惡人の形をあらはし給ふとかや、此音譽上人も、かくのごとくの方便なるべし、されば道號と戒名をひとつに合れば、聖觀音と見へたり、なんぞ疑をおこさんや、其後時代はるかに押移、第十二世の和尚を貞蓮社源譽存應上人と號す、これこそ東照權現樣台德院樣將軍家二代の御戒師たり、去によつて五千餘石の寺領を御寄附被成、慶長十五庚戌年普光觀智國師の號をたまはりぬ、元和六庚申年霜月二日に入寂し給ふ、去程に淨土の宗門、一天下に繁昌して、念佛に歸する輩、四海にあまねし、是や末法萬年、餘經悉滅彌陀一敎にかなひ、下根下智に相應の御をしへにて、廣く濟度是有は、當寺の院號の廣度院の名にかなひ、有がたかりし結緣也、

　彌陀の悲願は廣く度す院
諸の佛に增上の寺の

旅の男、

七寶の御玉や光かゞやきて
　よそにぞ增る上の寺かな

第十三　萬年山青松寺

增上寺の裏門を出、左の方へ行ば坂有、是を切通と云、是へのぼらずして、右の方へ少行ば、萬年山青松寺也、此寺は文明の頃かとよ、青松の何がしと云人

有、爰の開山雲江和尚へ歸依不レ淺して、建立有し寺也、故に名字を寺號とす、本は此寺も貝塚に有けるが、天正之頃此所へうつさるゝ、江戸洞家三ヶ寺の内也、開山より當住迄、十五世におよべりと也、

萬年山は青松しげりあひ
　みどりの色も禪なる寺

第十三　愛宕山圓福寺

北隣は愛宕山圓福寺也、石段を六十八段登りて、東を見れば安房上總迄見へわたる、北より丑寅へ見わたせば、江戸中不レ殘目の下に見へ、氣もはれ〴〵としていさぎよし、されば此愛宕は京成あたごを、遠州なるこ坂にうつし、それを又爰にうつさるゝと也、抑本山の山城國愛宕山は、地藏龍樹攝化の地として、唐の五臺山の風景に似たると也、文德天皇御宇、大寶年中の事にや、役の行者と越の大德泰澄と、同此山に登給ふに、日良、善界、太郎坊等の、諸大天狗あつまり、大杉の木のこずへに有て、行法をさまたげんとす、役の行者泰澄是を降伏せらる、地藏、龍樹、富樓那、毘沙門、愛染、光をはなちあらはれ給へば、諸天狗共いづくともなくさりうせけり、然ば第一の開基は泰澄也、彼大杉を清瀧の明神とす、太郎坊は高雄の眞濟僧正也とかや、爰に又慶俊法師とて河内國の人なりしが、俗姓は藤井氏の末孫也、出家して和州大安寺に住し、人をあわれむ心ざし深く、貧成ものには、自衣をぬぎてあたへ、飢たるものには、一飯をわけてたすけらるる、天應元年に僧都に成、それより世をいとひ名利をうとみ、大安寺を忍び出、山城國愛宕山に引籠、勝軍地藏菩薩を安置しておはします、光仁天皇より勅使立中興せしむ、和氣清麿建立也、然るに勝軍地藏は、修羅闘諍のしんいを調伏して、太平静謐の守護をくわへたまふ、忍辱慈悲の尊躰也、遠く東關の江府の地に勸請有、其とくいよ〳〵たかくして、太平安全の守りあやまち給はず、此社もとは天台宗にて侍りしが、本山よりむづかしき事共云かけたりし故宗旨を改、今は眞言宗と成、長く本山の通路きれたりとかや、

地藏がほで佛も物やかし給ふ
　しやくじやうにぎりをわましける

旅の男、

かるに地藏なすにはゑんま顔と聞
　あたご味能物のかしぶり

第十四　眞福寺の藥師

北隣は眞福寺の藥師堂也、是は空海和尙草創の砌とかや、そのかみ勢州一志の郡五十崎村は、藥師如來應現の靈地として、弘法大師開基し給ひ、晝夜おこなひ給ひし所に、武州芝の山中にゐりの光明をはなつ事、よるひるとなくかゞやきければ、諸民あまねくおがみて、遠近にかくれなし、大師きこしめしをよばれ此山に來りたまひ、光りに付て山にのぼり尋たまへば、山のいたゞきに、ひとつの盤石有、此石より光をはなつ、大師此石に向て、持念したまへば、やくし如來忽然として、御すがたを現し給ふ、大師すなはち此みすがたをきざみうつし給ひて、ひとつのがらんをたて安置し給ふ、かくて數百年を經てのち深草院の御宇、建長年中に俊英阿闍利と云人有、つら〱おもはれけるは、世すでに澆漓にいたり、人又下根下知なり、今此けわしき山坂をしのぎて、あゆみをはこぶに物うくして、參詣の輩をこたるべし、貴賤老若の爲、廣く結緣せしめ、利益かふむらしめんにはしかじとて、山上より五十餘町の麓に、七間四面の御堂をたて、彼御本尊をうつし奉る、是より參詣猶たゆる事なく、病患を祈るに癒ずと云事なし、されば田村の長者は、此尊に祈りて愛子の盲目をひらき、攝州の貧女は、此像に詣で、速に窮子の願望をとげたり、かくのごとくの靈驗かぞふるに暇なし、げにも我此名號一經其耳衆病悉除身安樂の御ちかひ、有がたかりし御事也、

第十五　西の久保の天德寺

それより西の方へ少行ば、西の久保と云、爰に光明山天德寺とて、淨土宗の寺有、是は應永の頃かとよ、稱念上人の開基也、此上人は、名聞利用には少もかゝはり給ず、日夜朝暮、稱名の外他事なく、殊勝にましまして、往生の素懷をとげ給ふとなり、それより十二代の上人をば、晃譽上人と申ける、是は智德勝れたる知識にて、諸人たうとみ申ける、尤大名高家の御崇敬有て檀那と成たまふ故に、漸寺はんじやうして、寺家もおほく軒をならべたり、然れば晃譽上人を中興の和尙と崇申也、今は廿餘世なりとかや、御本尊は西方敎主の彌陀如來也、正面のなげしの上には、釋迦文珠普賢四天王十六羅漢を悉作り付られたり、御堂へむかふ右の方に觀音堂たてらるゝ、左の方にて少引込て、釋迦佛のねはんぞうの堂も有也、うらへまわりて隱

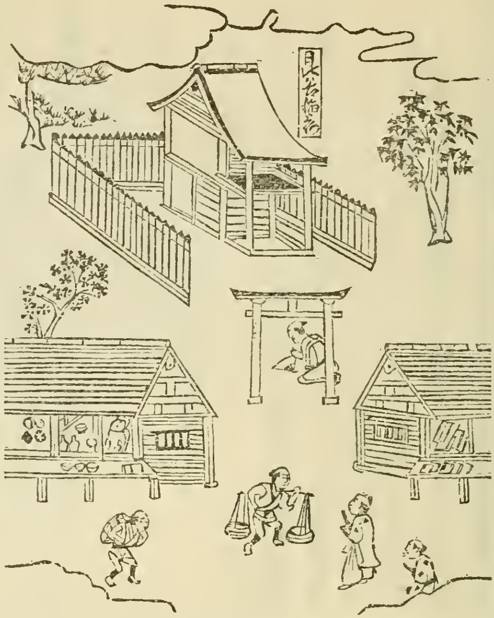
居寺有、扨寺の左の山はあたご山なり、右の方にうら門有、此前の通りは西久保通りとて、芝本札の辻へ出る海道也、其方々への道わかれ有也、
念佛の衆生を照す光明山
天の徳有てらぞたうとき

第十六　烏森の稻荷

それより東の方へ行て、烏森の稻荷大明神立たまふ、爰を武州の名所とは云つたへけれども、歌枕名寄等にも見へず、さてまた古しへは此所にもり有て、からすのおほくやどりしゆへに、からすもりといへるとなり、其森に此いなりみやうじんのやしろ、古來よりさしひさしく立來る故に、烏森の稻荷と云、かくて江城御はんじやうにつき、此所大名衆の屋敷に成て、構の内なる故に、わき〳〵より參詣ならざる事、慮に叶がたくやありけん、其屋敷主に御たゝり有て災難に逢人おほし、然故にや久しく明屋敷と成て、皆人化物屋敷といひあへり、然る所に明暦丁酉年正月十九日の回祿のとき、江戸中殘なく燒て、此明屋敷も燒ける中に、此稻荷の御社ばかり、只ひとつ殘りけるこそふしぎなれ、其時より稻荷の宮地をのぞきて、外は御醫師衆へくだされけるに、今は少も御たゝりなく、いづれもつゝがなくて、住宅せられけり、爰をもつて前を考るに、神慮にかなわざる事分明也、扨次第にはんじやう有て宮居もあらたに立なをり、別當もつきたり、爰にもうでゝ、もろ〳〵の願を祈り奉るに、ひとつとしてかなはずと云事なし、有がたかりし靈神也、
くろやきになるべき烏森なれど
やけぬは神のいとく成けり

第十七　日比谷の稻荷

それより東へ二三町行て、日比谷の稻荷とて、爰にも有、是は日比谷三町の内の氏神也、もとわづかのほこらにて有來る故にや、さだまりたる宮地もなく、町屋に借地の躰にて有ければ、既に此宮斷絕に及べかりし所に、宮守の夢に、けだかき老翁忽然と來り、告てのたまわく、我は是いなり明神也、古しへより爰に有て、氏子を守護す、然に今斷絕あらんこそ物うけれ、さりながら古來久敷しるしあらば相續有ぬべし、かるが故に其證據を汝にあたふるとおほせられて、何かはしらず枕本に、さし置たまふと見て、夢はさめたり、宮守ふしぎに思ひ、枕本を見れば鰐口ひとつ有、



此年號三四百年程にも及たるよし也、宮守よろこび、
寺社奉行所へ持參仕指上る、是によつて宮居無レ恙さ
しをかれけると也、
宮守も鰐口すれど證據あれば
いなりに社立をかれけり

増補江戸咄巻第四終

増補江戸咄巻第五

第一　淺草の閻魔堂

けふは又淺草邊へ行べきとて、編笠引込ともなひ行程に、淺草の總門へつきたり、御門を出ればかや町二町つゞきて、瓦町也、左の方に十王堂有、二足三足あゆむとおもへば、又閻魔堂有、寶形作り(はうぎやうづく)にて、中尊は閻魔大王、左に地藏菩薩右に三途川の老婆也、本堂の左に不動堂も有、されば此閻魔大王と申は、人死て五七日の斷罪をつかさどり、淨玻瓈の鏡、檀陀幢皆此王宮に有、倶生神、司命司錄神、同爰に有て、衆生の罪の輕重をかんがへらる、地藏は是閻魔王の本地也、本地の大悲は柔和端嚴の相をしめし、變化の大慈は忿怒強盛のかたちをあらはし、本迹の方便樣々成事は、衆生利益の善巧也、嫗は又死出の山の麓、三途川のほとり、衣領樹のもとに座して、罪人の衣をはぎとり、木の枝にかくる、是閻魔王の妹也、奪衣婆と名付る由、經にとかれたりと也、衆生更に慚愧の心なく、放逸にして一生を過し、罪業にひかれて爰に來る、此故に一

重の衣を剝取て、慚愧の心なき事をあらはす、又十王といふは、第三年迄十三佛の變作として、十大王のもとに亡者をうけ取て、罪科の品々をことわり給ふとなり、十王は秦廣王、初江王、宗帝王、五官王、閻魔王、變成王、泰山王、平等王、都市王、轉輪王是也、十三佛と云は、不動、釋迦、文珠、普賢、地藏、彌勒、藥師、觀音、勢至、阿彌陀、阿閦、大日、虛空藏是也、

じやうはりの鏡にかけて見ゆるなら
日蓮宗はこわ物ぞかし

三途河の姥を、せわにはしやうづかのうばといふによりて、旅の男、

人の物を取が罪にて有ならば
おばゝのつみは何としやうづか

第二　大六天

それより出て、天王町、片町を通り、森田町に行ば、爰に大六天の祉有、是は開基より此かた、八百餘年に及ぶと、古老の云つたへけれども、其緣起をしりがたし、代々の兵亂に取うしなへると也、神事は二月九日也、大六天とは、摩醯首羅王の尊像にや、此天は欲界大六の、他化自在天のあるじとして、三目八臂の形を現し、九頭の大牛に乘て、神通自在變化無方の威をあらはし、三千世界に飛行し、欲色二界の中間禪を修し、大樂圓滿の果報をうけ、三千界のあらゆる衆生を、我けんぞくと思へり、此故に深く世間を守り給ふ大元明王と申奉ると也、

大八ならば地引の車共いわん
大六は牛くるまけいしゆらかな

第三　西福寺



そこを出て、旅籠町の西福寺へ參りける、當寺はその昔東照權現樣駿府の御城に御座なさせらる丶御ときに、心蓮社貞譽上人頑故を、御歸依の僧として、開基したまふ寺也、御本尊は安阿彌の御作、殊勝端嚴のみだによらい也、後に江府にうつされて、今此所にをわします也、辨才天をもつて鎭守とせらる、此寺の鐘樓は屋ねなし、藤の林鐘の龍頭にしげりまとひて、花さく折からは、又一しほの興をもよほす、

紫の雲たなびくとうたがはる
龍頭にまとふ藤の花をば

第四　文殊院

それより文殊院へ立よりける、此寺は高野山行人方の頭かはる〳〵住院たりしが、故ありて元祿五年の頃より京の岩淸水をうつさせ給ふ、されば醍醐院とかやもいふと也、近き程なればさだかにとふべきかたもなく、ふしをがむにたふとくおぼへて、

法の師のおこのふ道の跡ふりて
今もすみける岩淸水かな

第五　駒形堂

爰を出て行程に、黒舟町に稻荷の宮有、すは町にすはの社もまします、それを通り過て、駒形町の駒形堂に着たり、爰は淺草寺の門口と云、舟つきと云、にぎにぎしくてくわんおんへまうずるものも、又よしはらへと心ざすものも、ふねにて來るは皆爰にあがる、前に茶屋有、殊に此川の鯉は名物にて、其風味淀鯉にまされり、かるが故に此川端にして是をあきなふ、されば此駒形堂は、朱雀院の御宇天慶五年に、安房の太守平の公雅の立られ、馬頭くわんおんを安置せらる、佛前に馬を作りてならべるが故に、駒形堂と云、梵音海潮のひゞきは淺草川の波にあらはし、定業能轉のちかひは駒形堂の軒にしめす、大悲の利生あらたにて、乾けるかばねには重て宍づき、枯たる樹にふたゝび花さく、まことに殊勝の事ならずや、諸人爰にて、うがいし身をきよめ、心をあらためて、淺草の本堂へ參る也、

法の道いさむ心は駒形の
だうぞ〳〵とねがふ後の世

第六　淺草寺の觀世音

扨淺草の本堂へ向へば、右の方に材木がし、はながはら町、山の宿、聖天町とつゞきて、其すへは奥州迄へ

の海道にて、千壽へつゞき出る道筋也、是を見すてゝ本堂の方へゆく程に、並木の茶屋町を打過て、雷門へつく、門前の左右は廣小路也、扨門より内へいるに、一町餘左右に坊舍十三ヶ所有て、程なく二王門につきたり、内へ入て左に神馬をつなぎ、右に五重の塔有、又ひだりに山王の社、輪藏有、やくし堂有、右に隨身門鐘樓有、扨本堂にあがりて、鰐口を打ならし、南無大慈大悲の觀世音とふしをがみ、御寶前のかけ繪共を見るに、おもひ〳〵心々に、善盡美つくしてかけたる中に、正面を見れば、さのみ見所有とも覺へぬ、すゝびはげちりたる繪馬かゝれり、こはそもかゝる結構成中に、何とてかやうの見ぐるしきものを、眞正面にはかけゝるぞと、ふしぎに思ひければ、かたへの人に尋けるに、あれこそ狩野の古法眼とて、名譽の畵工かきたる也、此馬もとははなれ馬にかきたるが、夜中はまことの馬に化して、近邊の作毛をあらしけると也、百姓共あやしみ、有夜彼馬を追けるに、此御堂之内に入と見へて、見うしなひたり、あくる日せんさくして見るに、此繪馬の四足に土つきたり、扨は是よと心づきければ、繪師をたのみて、つなぎ馬にしけれ共、つなぎとむるほどの繪師なくて數年を送る、爰にちかき頃、左甚五郎と云、ほり物ざいくの名人有、彼が繪もほり物の心にちがふべからず、われほり物の下繪の心にて、つなぎとむべきとて、望てつなを書つきければ、それより此かたつなぎ馬と成て、はなれあるく事なしといへり、かゝるきどくも有事にや、ふしぎとはおもへども、羅浮氏の撰まれける神社考にも、繪馬の神の事しるされたり、此繪馬のきどくに相似たり、然ば昔も有事か、抑此觀世音の緣起をくわしく尋奉るに、いにしへ此淺草川をば、宮戸川と云て、漁父のあつまる所也、然に推古天皇の御宇に、進中臣と云人有、少あやまれる事有て、此所へ流人と成て有しが、彼が郎等に檜熊濱成、武成とて兄弟三人の者、主人の跡をしたひて此所へ尋來り、みやづかへすなどりをして、主從のいとなみを送りしに、推古卅六戊子年三月十八日の事なるに、兄弟三人のものあみをもち、舟にさほさして、宮戸川の沖にこぎいだして、網をおろしけるに、魚更になし、あなたこなたとこぎめぐり、あみをおろしけるに、七度迄あやしき物かゝりぬ、ふしぎにおもひ月の夜影に見たてまつれば、光

明かくやくたる觀音の佛躰也、兄弟三人大きにおどろき、手を合て禮拜し、かりに草屋をしつらひて安置せしが、此邊の草かり、朝草かりに十人ともなひて來り、彼草屋より金色の光さしけるを見て、終に見なれぬ草屋に、光明かくやくこそあやしけれとて、おがみ奉ればたつときくわんおんの佛躰也、是はいかなる人のわざやらんと、あやしみける所へ、彼三人の者共來りて、これ〳〵のやうすと語りければ、いよ〳〵たつとみて、その〳〵心をひとつにして、わづかの御堂を取たてけると也、今にいたつて兄弟三人を、三所の護法と崇、又十人の草かりを、十社權現といわひ奉る也、初て草屋を立し所に宮居を立、一の權現と申奉る也、



○孝德天皇大化元年に、勝海上人此地にもうで、奇特の告おはしましけるより此かた、御本尊を直に拜み奉る人なし、

○朱雀院御宇天慶五年に、安房守平公雅此觀音に祈りて、所願を滿足し、國の守になりて、官位高く登しかば、此よろこびに、件の本堂を再興し、かたはらに又佛堂を立、輪藏を作り、院坊を立らる、又五重の塔を作、一軀の梟鐘を鑄て高く一樓にかけらるゝ、鯨音遠くひゞきて、闇人無明のねぶりをさまし、參詣禮拜の輩は福壽海無量の利生をかうぶる事、鏡に影を移すがごとし、それより後あるひは地震、あるひは兵火の爲、度々堂塔破壞すれども、再興度々也、源賴朝卿は、三十六町の神田をよせられ、其後足利の尊氏公、又寺領を寄られけると也、其外遠くは田村將軍、新田義貞公、ちかくは權現樣を初奉り、代々の武將御崇

敬あさからざりし御佛像にてまします也、

すくはれてあがらせ給ふ觀世音
すくいぞかへし給ふ衆生を

第七　明王院の嫗ヶ池

本堂より右の方にも門有て、坊舍打つゞきたり、その中に明王院と云有、爰に嫗ヶ池有、是はむかし此所に人家まれにして、人のやどりなかりける故、旅人の宿を求むる所なし、爰に野中にひとつの柴の庵有、是にとしおひたる姥の、若かりし娘を持て住けるが、往來の旅人に宿をかし、石の枕をあたへ、ふしける時上よりも大石をおとし、頭をうちくだきころして、衣裳を剝取、からだを此池にすてぬ、既其數九百九十九人に及び、今一人にて千人に成ぬべき處に、淺草の觀世音草かりに御身を變じさせ給ひて、笛を吹せ給ふ、其笛の音をきけば、

日は暮て町にはふす共宿かるな
淺草寺のひとつ屋の内

此笛の音をひとりの旅人聞て、ふしぎには思ひながらも、やごなきまゝの宿として、爰にやどりしが、あるじのうば、旅人を一入もてなし、彼石の枕をあたへふさせける、旅人心に思ふやう、誠に彼笛のねふしぎ成事とおもひしが、此ひとつ屋の事にてや有けん、枕も大き成石の枕也、あやしやいかさまにも、ころさんとのたくみなるべしと心を付て、やがてねやをかへてうかゞひ見るに、さよふけてあるじのうば忍び入て、上よりふしどの上へ大石をおとしけるこそおそろしけれ、旅人きもをけし、からき命をたすかりて、それよりあしにまかせてにげゆきしが、まだ夜ふかければ、ひとつの堂にて夜をあかすとて、少まどろみければ、夢中に童子きたりて、我は是此淺草の觀音也、汝常にくわんおんを信ずる故に、かく告の笛を吹て、汝が命をすくひし也、いよ〳〵信ずべしとて、かきけすやうにうせたまふ、旅人夢さめ見るに、此觀音堂にふしけるこそふしぎなれ、其後舒明天皇の御宇、三月十六日に、くわんぜおんは彼姥があくぎやうつもりて、ぢごくにおちん事を、ふびんにおぼしめし、ひとりのちごと現じ、うばがもとに宿かり給ふ、姥此ちごのしやうぞくのびゝしきを見て、宿をかしうちころしてはぎとらんと思ひ、よきにいたわりもてなしける、彼姥がむすめ此兒のゆうにやさしくたへな

るすがたに心まどひて、彼ちごのふしける所へ、忍び入てそひぶしけるが、うばかくとはしらで、早兒をころさんとおもひ、例の石をおとしける、兒はもとよりくわんおんの化身なれば、いづくかうせ給ひけん、むすめはみぢんと成てはてたり、うばしすましたりとて是を見るに、兒にはあらで我娘、石にあたりみぢんと成たり、かくなさけなきうばなれども、おやこあひしうのなげきふかく、かなしさたえがたくや有けん、此池へ身をなげうせしとかや、其しうしん大じやとなり、人を取ころす事おびたゞしければ、一社の神にいわひて、その惡靈をなだめければ、今はかへつて守りの神となり、諸病のなんをしりぞけ、ゑきれいおこり、いもはしかのはやる時は、あま酒を作りて、竹の筒に入、木の枝にかけて是を祈れば、たちまち平癒するとかや、されば白河の院の御製にも、

武藏にはかすみの關やひとつ屋の
　石の枕や野寺有てふ

と詠じさせ給ひけるも、彼媼が住けるひとつ屋と、淺草のくわんおんおわします、野寺の事をよませ給ふと申傳へたり、今は人家立つゞき、寺内も廣がり、明王院も出來る也、

旅人をきらずにころし娘をば
　くづしたうふのうばが池かな

さて又むごき心を引かへ、今は守りの神と成、ゑきれいをのぞくちかひゆへに、あまざけを作りて、上るときゝて、旅の男、

世に有し時にしらがをそりもせで
　今の甘酒何のゑきれい

第八　金龍山附眞土山

觀音のうら門より出て、金龍山へ行、此山よりむかし、金龍をほり出しける故に、則金龍山と名付るとかや、淺草でらの山號も同名也、爰に聖天宮立給ふ、此御社へは縁組の事、又夫婦あいさつよきやうにと祈り奉る、さゝげ物には、ふたまたの大こんを上る、尤つくり物にもしてさゝぐる也、山は松山にて、東の方に、淺草川、牛島新田迄見ゆる、西は大道也、扨又此山をむかしは眞土山と云て、武藏國の名所也、紀州にも同名有と也、新勅撰、辨基法師の歌に、

眞土山夕こえくればいほ崎の
　角田川原に獨りかもねん

とよみしは此眞土山の事也、又續古今秋の部に、小町が歌に、

誰をかも眞土の山のおみなべし　秋とちぎれる人ぞあるらし

とよみしは、紀州のまつち山の事也、

いつしかと眞土の山の櫻花　待てもよそに聞がかなしさ

とよみしも紀州の眞土山をよめりとかや、さても爰の山の麓のよねまんぢうは、江戶中にかくれなき名物也、山の事は古歌にもよまれたれども、此まんぢうは、數をばよめども歌にはよまず、されどもひとゝせのはやり小うたに、金龍山で同道しよ、もどりがひもじかよねまんぢうとうたふたり、然ばこうたとかきても、こかとよめば、よむかうたふかの違にて、口にとなふるはひとしかるべし、それてんぢくのれいもんを、唐土の詩賦とし、唐土の詩賦をもつて、我朝の歌とす、されば三國をやわらげ來る故に、大にやはらぐと書て、大和歌とよむとかや、それを又やはらげ略して、うたふ小歌の一節も、心をなぐさむは同事ならん、誠や彼吉原へ行若者ども此所にて待合て、同道すべきとやくそくせしを、右の小歌にはのべたるといふをきゝて、

金龍山で同道せんと約束し　つれをまつちの待遠きかな

第九　總泉寺并妙龜山

それより北へ行て、石濱村の總泉寺につきたり、當寺は學宗和尙の開基として、正法眼藏の妙理をしめし、實相無相の心印をひらく、向上の一路には、着相實有の草を拂ひ、言下の一喝には、異學の執解の塵を飛す、公案の床の前には、一千一百の則をかさねて、以心傳心を守り、坐禪のふすまのもとには、朝三暮四のたすけを待て、文字言句をはなれたり、寺內に千葉介の石塔并軍配團有也、

妙龜山は、總泉寺を去事遠からず、爰をば淺茅ヶ原と云て當所の名所也、されども歌枕名寄等にも見へず、されば妙龜は梅若丸の母の法名也とかや、此人もとは美濃國野上の里の遊女花子といへり、吉田少將に相馴、かたみの扇を持身をはなさゞる故に、班女と異名をいへり、班女は唐女にて、扇を作り出したる人也、此故に花子が異名とせり、少將を待わび戀の狂人

と成けるが、少將にめぐり逢て、もとの正氣に立歸りて少將の妻と成、梅若丸をもうけたると也、都北白川に住給ふが、少將にはをくれ給ふといへども、梅若丸になぐさみ、年月を送り給ふ、然る所に奥州の人商人、梅若丸をかどひて、當國の角田川迄くだる、梅若旅のつかれにや、もつての外にいたわりて、今ははや一足もひかれずとて、角田川のほとりにひれふし給ふを、情なくも商人は打すて奥へくだる、梅若は程なくむなしくなり給ふが、今を限の時、我は都北白川吉田の少將が子梅若丸といふもの也、もしも故郷にたよりもあらば、さゞけてたまはれとてびんのかみを殘して、終にことされ給ふ、所の者ども哀に思ひ塚につきこめ、しるしに柳を植、念佛申てとぶらふ、梅若の母、狂女となりて尋下り、月日こそおほきに、三月十五日一周忌にあたる日、角田川につき、渡船の中にて、向ひに人のむらがるを、いかなる故ぞときくに、梅若丸のさいごの有樣を、舟人かたりければ、母は大きになげきかなしみ、念佛を申跡をとふらひ給ふに、塚の內よりも梅若の聲として、ともに念佛を申、まぼろしのごとく見へつかくれつし給ふと也、かくて母御も古郷へは歸り給はで、總泉寺にてかみをおろし、妙喜尼と法名を付、三とせの程淺茅がはらの露になきしほれ、念佛して居給ふが、前なる池に出て、我影のやつれはてゝ、かはれる有樣をうつして見んとやおもはれけん、水のおもてをさしのぞき見給へば、猶狂亂のうへにや、梅若丸のすがた池水に移りて見ゆる、あらいとおしや、和御前故にこそ、心もみだれて侍りしぞやといふて、そのまゝ池に飛入てむなしく成給ふ、あたり近きもの共、驚きあつまり網をおろし引あげゝれども、はやことされはてたれば、塚につきこめ、其上に堂をたて龜妙堂と名づく、內に妙喜の御影有、開帳して諸人におがましむ、それよりして彼池を鏡ヶ池と名付と也、池にも島有て、妙龜尼を辨才天にいわひ置ける也、

きて見ればいとゞ哀ぞますかゞみ
　池のむかしをきくにつけても

第十　角田川の木母寺

扨もわれ〳〵うき世のちりにまじはりて、にごる心もすみだ川の、わたしときゝてよろこび、舟こぞりてせばくとも、のせさせたまへ渡守、さりとてはと、い

ふよりはやくうちのりけり、扨も此川は武藏と下總の境にながれて、下總の名所なりと聞へける、近衞の院藤原の信尋卿の歌に、

來て見れば武藏國の江戸からは
　北とひがしの角田川かな

玉葉集、後二條院大納言典侍の歌に、

事とへどこたへぬ月のすみだ川
　都の友と見るかいもなし

又新拾遺集、羇旅部御製、

限なく遠く來にけり角田川
　言とふ鳥の名をしたひつゝ

此歌は伊勢物語に、業平あづまにくだり給ふ時、此川にて都をみて、

名にしをはゞいざ事とはん都鳥
　我おもふ人はありやなしやと

と讀たまふ本歌によせての御歌なりとかや、彼都鳥といふは、はしと足と赤くて羽は白く、いかにもうつくしき鳥にて、籠に入飼に、蛤を餌にするとかや、扨舟よりあがりて少行ば、梅若丸の墓有、しるしの柳、むかし植しは枯て、又別の木を植置ぬ、三月十五日は緣日にて、とりわけ貴賤道俗群集す、此寺の寺號を木母寺と號て、不斷念佛の道塲也、諸人爰にまうでゝむかしの事を聞つたへ、哀をもよほし、歌をよみ詩を作りて、一興有景地也、將軍家折々御遊覽おはします故に御茶屋ある也、近き頃五知の如來を造立して、本堂の向に堂を立安置し奉る、さるにても世の中の、死緣無量とは云ながら、昔は雲の上人の御子にてましますを、情もしらぬあづまゑびすの手にわたり、かどわかされ給ひて生所をさり、知らぬあづまのはて迄も、限なく遠くも來り給ひつゝ、道の草葉の露霜と、きへさせ給ふいたわしやと、思へば過にし遠き世も、今の目のまへの心地して、泪はさらにとゞまらず、逆緣ながらも、六字をかなにて七字となし、句をこまかにくばりてかくばかり、

なばかりはむめわか丸とあとにのみ
　みはさきだちてふるつかとなる

とよめば、旅の男、

よの花のちれば色のみをしみけり
　梅わかをしまぬ人はあらしな

第十一　牛御前

なみだながらに立さりて、南の方へ少行て、牛島の牛御前の御社につく、此御神は、むかし建長の頃此淺草川より、牛鬼出て人民をなやまし、淺草のくわんおんだうへ入てやすみ居、それより行方しらず成たり、去によつて所を牛島と名付、彼牛鬼を一社の神にいわひ、所の氏神となし奉ると也、牛淺草川より出たる事、東鑑にも見へたり、

もろ人のもうでくるまの牛御前
よだれをながし守りたまはん

第十二　業平天神

それより猶南へ行ば、業平天神の社有、又なりひら塚とて塚も有、所を業平村と云、橋になりひら橋といふて、天神の社のきわに有、牛島の古老の云傳には、此所にて船損じてなりひら死なれしを、塚につきこめたり、去程に塚のかたちをも舟のごとくに殘せり、されば宇治の平等院に、源三位賴政が自害の跡とて、芝を扇のなりに取殘して、扇の芝と名付しは、あふぎを敷自害しける故とかや、むかしはかやうに少の緣を取て殘しけるも心やさしくぞ覺ゆ、業平の事は、伊勢物語に京に住うかりけん、あづまの方に行て、住所求むとて、友とする人ひとりふたりして行けりと有、又四條大納言匡房卿の、江次第の第十四卷に書れしは、業平其頃は左中將にて、二條の后を犯し奉らんはかり事に、出家せられしが、其後髮をはやさん爲に、陸奥國の八十島に至りて、小野小町が髑髏の、

秋風のふくにつけてもあなめ〳〵

といへる聲の聞へしかば、草村をわけ〳〵て、聲を求て入て見れば、どくろの目の穴より薄の生ぬきて、風



にもまるゝ音也ければ、なりひら哀におもひて、下の句をつけて、
小野とはいわじすゝきおいけり
と詠せられし、彼髑髏はすなはち、小野小町にて侍りしといへり、此小町が事さだかに知がたし、京の北山なる小野といふ山里にて、死けるとて今も石塔有、小町は狂氣しけるよし、陸奥國迄も狂下し事もや有らん、然るになりひらは、二條の后を犯し給ふつみに、あづまにながされたまふと云說も有、但伊勢物語には東にくだりしとは有て、のぼられしといふ事はなし、
終に行道とはかねて聞しかど
きのふけふとはおもはざりけり
と辭世は有て、いづかたにて死なれしと云事も見へず、また辭世のやうすにては、舟破損して俄にしづみ給ふ時の、歌とはきこへず、其上心地しぬべく思ひければとあれば、病死の樣にもきこゆ、さりながらかやうの事は、しいて吟味するに及ばすと云て、歌道にてはうちすてゝ取上ざる事とぞ、三代實錄には、元慶四年五月廿八日辛巳、從四位上右近衞權中將兼美濃權守在原朝臣業平卒、時年五十六と記せり、是又何方にて死なれしともしれざる也、
名ばかりは今に殘て有原や
ぬしは昔になりひらの塚
爰に京より下りて住をのこ有、かねてより知人なりければ、たちよりけるに、折ふし飯どきにて取ちらしたる所へ、行かゝりて、心やすきまゝのたわむれに、何ぞたべものやありはら、ちとひもじになりひら也といへば、ていしゆ打笑て、折ふし事をかきものゝなはんばかりなりと、いふをきゝて、
なめしあらばいざちとたべん都人
我思ふ程ありやなしやと
ていしゆ飯櫃のふたを取て見せながら返歌、
きづかひてなめし有やととうがらし
見そのでんがく迄も有原
とよみて、わらひ互にへだてぬ中なれば、したゝか腹をそしたゝめける、扨ていしゆに暇を乞出けるが、旅の男に云きかせけるは、此近邊に古き寺社もおほければども、爰は江戶の外、殊に國も下總にて、武州にあらざれば、見めぐりても益なし、いざや向へ越べきと

いへば、尤とて川邊に出れば渡船有、いそぎ打乘こなたのきしにつき、駒形の少北なる、材木がしにぞ上りける、

第十三　法恩寺

さて淺草の雷門の前を西へ通て、寺町へ出、報恩寺へ參る、當寺は本願寺の開山、親鸞上人の御弟子に聖心坊とて有しが、下總國飯沼に一宇の坊舎を立て、上人所立の淨土眞宗の法門をひろめられしに、彼飯沼の天神、此流義をたうとみ、自御形をあらはし、聖心坊に對面有、紫の戸帳一重を袈裟の料にとて參らせらる、又正月十一日には、毎年彼天神より池の鯉二喉宛、聖心坊に參らせられしかば、其例として今に至る迄、其在所の門徒是を報恩寺へ參らするとかや、鯉を持參の時、正月の鏡餅を三返禮の爲につかはさる、則其餅を天神の御寶前に備へ、同き廿五日の初連歌に、彼鏡をひらきいわふと也、聖心坊は大中臣氏の人也、寺の什物には、

一親鸞上人六十三歳の御壽像
一同上人關東御回國の時の笈
一同上人御作直筆の敎行證　六册
一同上人御持候團
一づんぎり、壹つ、袋共に
一唐草の巾着中に永樂の錢四文有
一茶礶、壹つ、臺は木也、目なくして茶をるゝ、餘所にて引ばをりず
一聖心坊、過去生の骨、是は聖心坊、夢想の事是有て、奥州の土中山より堀出す
一弘法大師御直筆の三部經、但木口に、大師直筆之二十五の菩薩之繪有
一脇指一腰、此名を虵返しと號

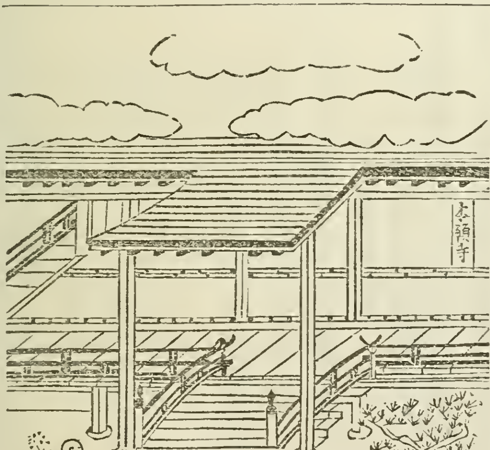
昔し伊勢の國鈴鹿山の邊に、貧く賤き男有、常に身のわびしき事を歎て、太神宮へ福分を祈り奉る、御夢想に、汝獵師をして世をわたるべしと、御示現をかうぶり、それより鈴鹿山を家として、獵をして明し暮す程に、あるとき三つ子山にして、あやしき刀をひろひ得たり、此刀を得てよりは、いさゝかも目にかゝる程のけだ物を取のがす事なし、是太神宮の御利生と思ひて、晝夜身をはなたず、有時彼獵師、鹿を待て大き成木の本に、件の刀をよせかけて置たりしに、此木たちまち枯たり、それより刀の名を、木枯と名付て持け

り、其頃刑部卿平の忠盛朝臣は、伊勢守に成て下られしが、此事をほのきゝて、彼獵師をめしよせ、栗眞庄の年貢三千石にかへてこられければ、れうしは家富榮て、いよ〳〵太神宮の御利生をたうとみ奉りけり、忠盛は都に歸りて後、六波羅の池殿の山莊にて、晝寢して前後もしらずおわしますに、木枯の太刀をば枕本に立られしに、大虵池より出て、忠盛をのまんと、口をはりて游來る、彼木がらし颯と拔て、がばとたをるゝ音を、忠盛きゝて驚き、おきあがつて見給ふに、刀はぬけて鋭は大虵に向ひたり、大虵は劔にをそれて、池に歸り水底にしづむ也、太刀のたをれたるは、主をおどろかさんがため、鞘よりぬけたるは、主を守て大虵をきらんが爲也、大虵恐れて歸りしより、木枯を改て虵返しと名付侍り、世々につたへて今此寺の什物となれりと云、又有說には、此刀は了海が作也、聖心坊本より家に傳りて持れしが、北國をめぐりしときに、猶此わきざし身をはなし給ず、有時舟に乘て、佐渡島にわたりしを、海中より大虵出て舟に乘移り、聖心坊をのまんとせしに、此刀颯とぬけて、大虵を追返しけり、目覺て此由を見つゝ、限なく秘藏してじやがへしと名付て、家につたへ今に有とかや、扨又此寺はいにしへ下總の飯沼より、櫻田に引越けるを、八町堀に移し、今淺草にうつされしは、明暦三丁酉年回祿以後の事也、

おたすけのごほうおんじと一向に
門戸を立て彌陀頼むべし

第十四　東本願寺

それより東本願寺へ參りぬ、是は又一宗の本寺、京の



本願寺の移し也、東照權現樣御在世の時、京都本願寺の門跡光佐敎如上人に、御懇意の子細有て、本人の開山上人の御影を寄附有て、上洛せしめられけり、それより前に、豐臣太閤の御時に、本門跡敎如上人を、故もなく隱居させられ、秀吉公の御はからひとして、敎如上人の御舍弟を、本寺の門跡になされ、敎如をばうらの屋敷に押籠られけるを、東照權現樣召出し給ふ、さればうらやしきにおはせしゆへに、うら門跡とは云けり、是に對して西の順如上人を、おもての門跡と云つたへたり、六條室町のするに、御堂屋敷拜領有て、新町を限て寺內と成る、此時より西東の兩本願寺となれり、其後神田に末寺を立らるべきよし、訴訟の事有て、江戶の神田に寺地拜領し、一宇を建立し給ふに、今は大きにはんじやうなれば、京都の本寺より、堂衆一兩人、かわる〲輪番にさし下されて、江戶中の門徒を勸化せしめらる、寺內の坊舍、同列座の出仕を勸む、明暦三年の回祿より、此所に寺地を移しあためられ、寺院をつくらせられたり、扨しばらく御さんたん、御ふみをちやうもんし居ける折ふし、わびしきもの來り、四五錢上るを見て、

錢程に光はうそか本願寺

あみだもごもんせきやたまはん

第十五　三十三間堂附本寺の緣起幷矢數の初

西の方の小橋をわたりて、三十三間堂へ行、是は京都の堂形也、抑京都の三十三間堂のおこりは、古しへ後鳥羽院ひとつの御願おわしまして、鳳城の北賀茂川の東に、三十三間の御堂をつくり、一千一躰の觀音をすへ奉り、得長壽院と名付らる、崇德院の御宇、長承元壬子年三月十三日に、勅願の供養をのべ給ふ、導師は天台座主東陽坊忠尋僧正也、上は一人三公卿相雲客、下は洛中邊土の貴賤上下、參り集りしに、導師高座にのぼり、三時ばかりの說法有、智辨無窮にして、言葉の花匂ひをほどこし給へば、數萬の聽衆をのをの歡喜のなみだを流す、かくて祈願の句に、衆病悉除身心安樂と、たからかにとなへ給ひしかば、其聲洛中白川に響き、齋宮の女御を始奉り、此聲をきゝし輩、都て二萬三千人、一同に病癒たり、此故に彼寺を、異名には平癒寺と申也、御布施には千斛千貫沙金千兩、其外被物祿物庭のおもてはさながら寶の山の如し、誠に大善功德の寶刹なり、然るに爰にて弓を射そめ

し事は、豐臣太閤の御代しろしめされし頃、東山今熊野觀音堂の別當、弓數寄にて八坂の靑塚にて弓を射、かへるさに三十三間堂にやすみ、初てくりやにて射初しより事をこる、指矢のをこりは松平下野の太守の家來川瀨權內、遠矢の無双は同名佐內村田與介也、然共矢數の多少を論ずるに不レ及してすぎぬ、淺岡平兵衞と云もの、初て通り矢數を記して、佛前に懸置しより、段々其上を越て、弓の天下と定來る也、矢數覺、

一通矢五十一筋　淺岡平兵衞
一同千七百三十筋　落合孫九郎
一同千七百四十二筋　吉田大內藏
一同千七百四十六筋　下村忠右衞門
一同千八百五十二筋　落合孫九郎
一同千九百二十一筋　山田半內
一同二千五十四筋　糟谷左近
一同二千七百八十四筋　杉山三右衞門
一同二千八百三十五筋　大橋長藏
一同三千百五十一筋　高山八右衞門
一同三千七百七十五筋　杉山三右衞門
一同三千八百八十三筋　吉井助之丞
一同四千三百十二筋　長屋六左衞門
一同五千四十二筋　杉山三右衞門
一同五千百九十七筋　高山八右衞門
一同五千九百四十四筋　長屋六左衞門
一同六千百五十四筋　高山八右衞門
一同六千三百二十三筋　長屋六左衞門
一同六千三百四十三筋　吉見喜太郎
一同六千六百六十六筋　星野勘左衞門
一同七千七十七筋　葛西薗右衞門
一同八千筋　星野勘左衞門
一同八千百五十筋　和佐大八郎

此大八が矢數は、貞享三丙寅年四月の事也、されば勘左衞門が矢數の時、京童、養由といはる星野の勘左衞門唐土迄も名を矢八千　と落書に立けるとぞ、誠に保元の昔は、爲朝の弓勢にをそれ、淸盛其責口をひかれけり、近衞院の御宇には、賴政が矢さきにて、變化のものを射留る、大功有事は是に過たるはなし、武家にもてはやされける事尤也、今爰の堂には、御本尊千手觀音只一體立給ふ、堂のうしろにて弓をば射る也、諸國にも堂形有てけいこ有に、百手はもつてなが

ら、はづれずしてとをりぬるも、京都の堂にては、大かたとをりかぬるよし也、それにかぎりとをしては、金の采牌を取侍りて、龍門の三級にのぼりし鯉のごとくいさみよろこぶは、理に過てぞきこへける、勿論觀世音は、大悲の弓に、智恵の矢をはげて、四魔の軍を破り給へば、此堂にて弓射るも、故有ぬと覺ゆる、

慈悲の弓智恵の矢數を千手とて
　佛も堂に居させ給ふか



扨ゑんに腰うちかけやすみをりて、とはずがたりをし出しける、愚親は吉田印齋の流を汲て、少々弓をもたしなみける故に、折々勝利を物がたり有しかども、我は生れつき不器量故射藝をすかで、若年より數術を好み、千里も遠からずと師を求、方圓を試枕をわらし侍れ共、一數を考得たる事もなし、しかはあれども古しへよりあまし置たる平圓を解、玉形を砕術を考付たり、兼々心にかゝりつるに、是迄よと思ひうち捨、算把(さんは)取事を止たり、一生益なきわざに、心をつくしたる事を悔て、

親の弓弦藝をば射矢と引すてゝ
　散算用にたらぬわざせり

第十六　幡隨院

それより神田山幡隨院へ參る、當寺の寺號を新知恩寺と云、もとは神田に有けるを、明暦三年の回祿に、此所へ移さるゝ、是は元和年中に、智譽白道幡隨意上人の開基にて、淨土の檀林關東十八ヶ寺の內也、然るに此上人御在世の內、きどくの事共度々有つる故に、諸人たうとみ、六字の名號を望受ける也、元和九乙卯年正月五日に、時年七十四歲にして入寂し給ふと也、

幡随のしめしはわけて有難や
　　二河白道のをしへ成けり

第十七　海禪寺

東へまわり尋行程に、大雄山海禪寺につきたり、是は桓武天皇六代の後胤、平親王將門、總州相馬の郡に有て、草創せられし所也、朱雀院の御宇天慶三年に勅命の事有て、俵藤太秀郷が爲に、將門誅せられてより、堂塔佛閣悉大破に及び、さながら狐のかくれ家となり、うさぎの住家と成て、年々の草のみしげり、まうでくるともがらもたへはてたり、爰に妙心寺の派下覺印長老爰に住し、いくばくならずして、地をうつし、湯島のかたはらにおもむかしむ、東照權現樣御在世の時、此所をめぐり見そなはせ給ひ、住僧の名を御尋有しに、覺印と答へ奉る、權現樣おほせられ候は、名は聞をよびたり、誠に學匠の善知識也、此寺にすまるゝとは夢にもしらざりしとて、大きに尊重有てより、其名高く聞え、其道遠くつたはりて、寺院宗派相續す、明曆三丁酉年の回祿に、堂舍ごと〳〵く燒ほろびけるを、同じ年の六月に將軍家の鈞命によつて、地を淺草にうつされ、かたのごとくの堂舍をかまへられたり、

再興はと覺印じゆの智惠ぞかし
　　げにはつとめし海禪寺也

第十八　清水寺

爰より南へ行て、江北山清水寺也、當寺は人王五十三代淳和天皇の御宇、天長年中にあたつて、慈覺大師今の江城の北の方におゐて、ひとつの勝地を求て、天台法流の一院を建立したまひ、則御自作の、一刀三禮の千手觀音を安置して、未世の衆生の爲、國家安全の御祈りをなし給ふ、此故に名付て、江北山寶聚院清水寺と號せらる、其昔は佛閣いらかをみがき、坊舍軒をつらね、誠に奇麗はんじやうの砌也けるを、年さり年來り、星霜かさなるまゝ、天變地妖はなはだ多く、漸人まれにして、堂塔やぶれかたぶき、坊舍くちたをれたり、それより此かた寺號院號もとなへうしなふて、世に知人もなかりけるに、當代より五世以前の師を、慶圓法印と名付、此人既に出家してより、長く名利の思ひをのがれ、とこしなへに誠の心ざしを發し、朝には五種の妙行をつとめ、夕部(ゆふべ)には觀諸法空の床に座して、おこなひ更にをこたる事なし、然所に有夜の夢

に、八旬計の老翁、忽然として來り給ひ、おもてにゑめる色をあらはし、慶圓に語りてのたまわく、我は是當寺しゆごのあるじ也、汝しば〳〵我名をとなふ、ねがはくは此寺を再興して、我にあたへよと、語給ふと見て、夢は則さめたり、誠にあらた成御靈夢のつげ心肝に銘じて、こぼるゝ泪は雨のごとし、されども心にのみこめて、人にかたる事なし、是世の人かならず疑ひをおこし、まことしからぬ靈夢かなと、あざけりそしらん事をおそるゝ故也、其後文祿年中にいたりて、比叡山にのぼり、正覺坊の探題豪盛僧正にまみへ奉りて、夢想の事を語り出し、則ふたゝび古しへ寺號院號山號を立て、江北山寶聚院清水寺と號す、それより此かた、大悲普門の月影は、清淨信力の水にやどり、圓通自在の花房は、渇仰歸依の梢に薫ず、千手千眼の妙相、あまねく定業亦能轉の利益をしめし、三十三身の應用は、等しく弘誓深如海の願徳をあらはせり、誠に闡提救世の御方便、いかでかむなしかるべきや、

　音にきく音羽の山の流にて
　　爰に淸水寺のたうとさ

第十九　靈山寺附諸檀林

それより右の方へ行て、靈山寺也、是は大超上人の開基也、そのかみは湯島に有、明暦三年の回祿より此所にうつさるゝ、是も關東十八ケ寺の檀林の内成けるが、いか成故にや世間寺に成たり、かくて數年中絶しける所に、當將軍樣御めぐみ深(ふかく)わたらせ給ひて、すたりたるをおこさせられ、たへたるをばつがしめたまふ事、かぞふるにいとまなし、去程に此寺も、又昔に立歸り檀林におほせつけられ、貞享三丙寅年より、檀林に成たり、

　開山の大超(おほきにこへ)し德しれて
　　又立歸り檀林と成

旅の男の云るは、關東の十八ケ寺は、いづれ〳〵ぞと問、委はしらね共、

相州鎌倉　天照山光明寺　開山良忠上人勅號記主禪師
武州小石川　無量山傳通院　開山酉蓮社了譽聖冏上人
武州江戸　三緣山增上寺　開山大蓮社酉譽聖聰上人
同　淺草　神田山知恩寺　開山幡隨意智譽白道上人
同　永代島　道本山靈巖寺　開山靈巖雄譽松風上人
鴻巢　水精山勝願寺　開山良忠然阿上人（此山號又天照山ト云也）
瓜連(うりづら)　草地山常福寺　開山盛蓮社了實成阿上人

飯沼　壽龜山弘經寺　開山嘆譽良肇上人
生實(おゆみ)　龍澤山大巖寺　開山靡蓮社道譽貞把上人
川越　孤峯山蓮馨寺　開山鎮蓮社感譽存貞上人
結城　壽龜山弘經寺　開山存把上人
小金　佛法山東漸寺　開山經譽愚底上人
岩築　佛眼山淨國寺　開山淸巖上人
瀧山　觀池山大善寺　開山讃譽牛秀上人
江戸崎　正定山大念寺　開山慶岩上人
新田　義重山大光院　開山呑龍上人
舘林　終南山善導寺　開山幡隨上人
淺草　靈　山　寺　開山大超上人

右の通聞傳へ侍る也、蓮社號、譽號、しれざるは記さず候、

第二十　東光院の藥師

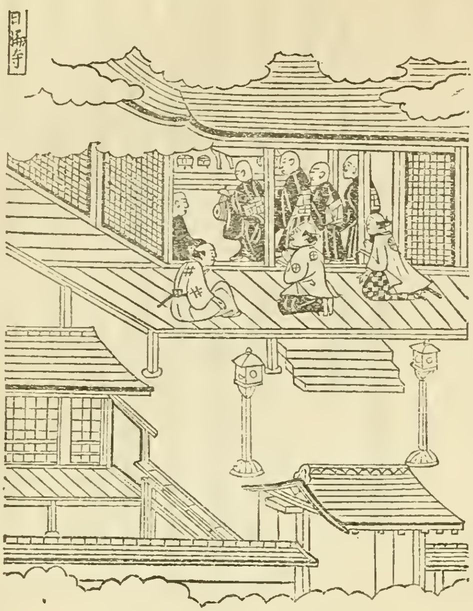
藥王山醫王寺東光院は、慈覺大師の御草創として、顯密二教共にひろまり、台宗一百八ヶ寺の惣本寺也、御本尊は春日の御作として、東方淨璃理世界の敎主、藥師醫王の形像也、其昔太田道灌、此御本尊を崇奉り、江城の鬼門に立て、利生のまもりをあふがれしに、權現樣此御城に御座なされ候御代にも、猶あがめさせ給ふ故、古へにも越給へり、其時の院主におほせて、御殿中にして、毎年の正五九月には、大般若を轉讀せしめて、江城長久の御祈禱有けり、其時は今の常盤橋の北の地に有けるを、江城次第に御繁昌に付て、寺を傳馬町に引移されたり、寺院いらかをみがき、樹木梢を爭ひけるを、酉のとしの回祿に、こと〲く燒ほろびて、わづかに本尊の藥師と、智證大師御作の不動尊幷雲慶の作れる彌陀如來の尊像のみのこらせ給ふ、此ときにあつて、又寺院を淺草にうつされたり、當寺は忝も一品尊敬親王、則山門無動寺の松林坊賢海法印におほせて、寺院を再興せしめたまふ、誠に十二願王の威力廣大にして、普く衆生を利益し、現世後世二世の悉地を、滿足せしめ給ふ事、併此御本尊の大悲なり、

御本尊は何と東光院ならば
　藥師如來と答いわうじ

第廿一　日輪寺附一遍上人

日輪寺は是(これ)時宗也、御本尊は安阿彌の作、立像の彌陀如來なり、是もそのかみは、柳原の土手の内、もと誓願寺の近所に有けるを、明暦三年の以後此所へ遷さ

れたり、されば此宗の本地は、相摸の國藤澤に有、開山を一遍上人と云、此上人は伊豫國主河野の七郎通廣が子也、建長十一年、十一歳にして出家し、建治二年熊野に詣、神勅を承り諸國を修行し、六十万人決定往生の御札を、普く衆生に弘め給ふ故に、遊行の聖と申也、扨代々の遊行を、他阿彌陀佛と名付、誠に開山は、京都の誓願寺の額を、六字の名號に書かへ給ふは、和泉式部の亡靈に望れ給ふ故とかや、其外代々



の遊行にふしぎ成事おほし、或は加賀國にて、實盛がゆうれいに逢たまふも有、此故にさねもりが甲令に有とかや、或は柳のせいあらはれて道しるべ申たるも有、此故に柳の名を遊行柳と名付て名木と成、其外にも數々の事うけたまはり候へども繁きが故に略す、扨彼開山の一遍上人は、正應二己丑年八月廿三日に、御年五十一歳にて入寂也、

一遍だにむなしからぬに猶毎日
　輪寺まうでの念佛たのもし

第廿二　誓願寺

少東の方へ行て誓願寺也、此寺は其かみ相摸國小田原に有、見蓮社東譽上人の開基也、其頃上人夢想の事有レ之春貞と云る僧、武州の秩父より、御長三尺の彌陀の形像を守來れり、則當寺の御本尊とせらる、是春日の御作也、誠に殊勝の靈佛、奇特の尊容也、見ればます〳〵尊く、拜めばいよ〳〵有がたし、万字の胸の間には、種智圓明の月の光りをかゝやかし、千輻のあならの下には、荘嚴端正の花の匂ひこまやか也、御法の匂ひ、遠く三界の涸渇をうるほし、誓ひの網、廣く四生の沈溺をすくふ、然るに京の誓願寺は、奈良の

都に開基して、平安城に引移さる、今此誓願寺は小田原の縣に開基して、武州江城に引移さる、本尊は同是春日の御作也、一稱一念の信力によつて、罪惡をめつし、三輩三心の行者を迎へ給ふ事、西都東關いかで隔あらんや、東照權現樣御在世の御時、小田原よりもと誓願寺へうつされしを、酉の年の回祿以後、此地に移されたり、彼火難すでに當寺に移りける時、御本尊に奇特の事おわしけるとかや、

もとよりも世に越たりし誓願寺
衆生をすくふ阿みだ佛かな

増補江戸咄巻第五終

増補江戸咄巻第六

第一　吉原傾城町

いざや世に聞へたる、吉原の傾城町を一見せん、此程は神社の神樂、佛經のうなり聲をきゝ、抹香臭きめにのみ逢たり、けふは衣紋のほこり打はらひ、ちりてんとなる三味線の、糸おもしろき一ふしに、そらだきの伽羅のかをかぐべいぞや、總じて田舍者をば、やぼと云てなぶるぞ、むざと口きゝて笑はるゝな、羅生門とて鬼に譬へたる遊女の有ぞ、うか〱とあるきて引こまるゝな、煙草ふるまふとて、うつとりとばしのむな、どうもぬけられぬ事になるぞなどゝ、うさぎ兵法をつかひ〱行程に、淺草堂のうしろの大道より、七八町程の堤を、北へ向つて五六町も、過たるとおもふ所に、左の方に門有、さればこそ此堤を、日本づゝみと云ぞ、此門を大門口といふて、只一方口なるぞ、所の名をば三谷と云、町の名は吉原町也、三方は堀切にて通路なし、さて門の內に入て、江戸町二町目、すみ町、新町、京町、揚屋町とて六町有、まよへば六趣輪

回、さされば又去此不遠の六字の名號也と、それしやの和尙達は勸め給ふ、此よし原もとは堺町の近所に有けるを、明暦三年の回祿に、此所へうつさる、それ傾城と名付しゆへは、漢史に李延年が歌に、北方に有二佳人一絶世而獨立、一顧傾二人城一再顧傾二人國一といへり、是傾城傾國といふ名のおこり也、天竺にては龜茲國よりはじまり、唐土にては三代の時より是有、虞氏、楊貴妃、王昭君、西施などゝ云は、皆是傾城也、然ども今爰の傾城とは各別上段の義にて、まことに都をかたぶけ、國をも傾けたる也、我朝にては鳥羽院の御宇に、島の千歳、和歌の前、是白拍子の根源として、或は磯の禪師、同娘の靜、或はとぢ、岐王、妓女、佛御前、遠江國池田の宿の遊や、大磯の虎、きせ川の龜鶴などゝて、世に聞へたる遊女、昔は有つると也、又江口の君と云しは、江口と云所に住たる故の名也とかや、然ば江口、神崎、室の泊などに有て、船路の旅人を慰めける故に、流の女とも云傳ふ、近き世に成て世上に聞へしは、京六條の吉野也、其頃何人の作歟、題二芳野一

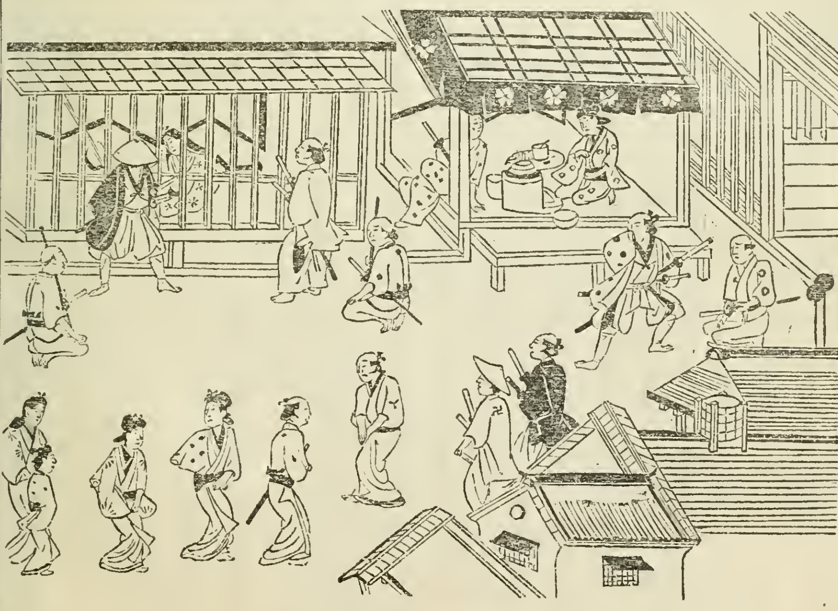
高哉芳野玉門眞　僧俗吹二金銀一爲レ塵

五十三夕一夜夢　覺來後悔鼻毛人

ほの〴〵とあげやを出て今朝がへり
名殘をしよりかね惜ぞ思ふ

扨此よし原にて、世々の名取おほき中にも、丹前、高雄、小紫とて、本朝にかくれなかりし遊女も有つる也、今も歌仙三十六人の、撰びものは有けるとかや、近き頃よりさん茶と云て、太夫かうしよりは下つがたなる女中有、江戸中の老若爰に來りて、大臣成は揚屋にて參會し、それに及ばざるは、さんちやの二階座敷にて樂しみ、又それよりくだりては、青のれんの蔭に立より、ぶん〱相應のあぢだて、めい〱かく〱のはり相、筆にも及ばず、詞にものべがたし、籬の内をさしのぞくに、そらだきの匂ひ雲井に薫じ、綾羅の袂を翻し、丹花の唇を動して、迦陵頻の聲を出して、うたふ小歌の一ふしを、ねがひの糸の三味線に、のせてやきでの言の葉に、心浮かるゝ鼻毛にて、つなぎづらなる有樣は、しやうしかりける事ぞかし、誠に遊女の小歌には、にぎりつめたるしわんぼうも立より、三味線の糸にて、大臣もつながるゝとは、よし原の見もじ立のいはれしとや、そも〱此道にまよひ

入根元をきくに、もとより好むものばかりにてなし、若きもの共は、友だちにそゝのかされて、一度二度はをのこたらんものは、見るべき事ぞ、色好まざらんものは、玉の盃の底なきがごとしと、つれ〲にも是有は苦しからぬ事也といふ、それをそむけば古文眞寶くさきとて、馳出してまぜざるがかなしさに、是非なくその座につらなれども、やぼの身のかなしさは、何の興もなく、疊のへりのちりをむしり、小袖のわたかみをひねりて立歸り、あまりのほいなさに、今一度一度とおもひて行程に、次第に知人も出來宿のかゝもねん頃に成、おんぼうが言葉もやさしくきこへ、ぎうが挨拶も心やすくなるまゝに、われははや粋に成たりと思ひ、友をさそひさそはれて、智慧才覺有ものは、をのがりはつに迷ひ、藝能有ものはそれに慢じ、美男は男ぶりをたのみ、不器量は心だてをたしなみ、いかやうにしても、一向傾城に思ひつかれんと、やきくさに成をばしらでたくむ程に、われ覺へずにかれに引こまれて、有頂天に飛あがり瓢金(ひやうきん)ものと成はてて、一句のしなせ言葉をきゝては、隱元禪師のしめしにもかへがたく、一紙の艶書を得ては、定家、爲頼の



御筆よりも秘藏して、肌の守りにかけ、友とするものには、人のいやがるあくたれものにちなみ、是を太鼓と定め、賤き六尺などが部屋を中宿として行かよふ程に、實體實目なる神妙ものも、いつとなく表裏輕薄ものと也て、そら誓文をたて、手にはのちがふ事ばかりなしける内に、身上は日を追てたまり水の炎天に乾く如く、金銀のへる事はやすりをもつておろすやうにて、借錢の淵に首だけつかり、主親をたをし、一せきをたゝき上て桶ぶせになり、やう〳〵ともだちのかげにて、のがれ歸りても、主の方へはかへりゑず、すぐにぼんでんこくをうたふ、親がゝりは宿へ歸りても、勘當せられて、うろたへめぐり、善盛の古へ、うたいならひ引習たる、小歌しやみせんにて、かどかどに立て一錢を乞も有、又無藝無能なるは、心にそまぬ道心をおこし、かね打たゝき、うわのそら念佛を申、爰にておもひあたりて、

けいせいのかけし情はしもくにて
かねがなければならぬ物かは

とよむとこそ、しかはあれども、若きが二度とあらばこそ、老てはこしに梓の弓をはり、ひたひに四海の波をたゝへ、かしらに雪をいたゞきては、人まじわりもならず、其上老少不定なれば一生は夢のごとし、誰有て百年を送る、なんのわざくれ、一寸さきは闇、白骨の樂したるためしなし、あすはともあれかくもあれ、けふのらくこそうれしけれど、心はいさみにいさめ共、巾着は春風にふきちるばかりなれば、旅の男の袖を引、いざ歸らんと云所に、音羽といへる端女郎の、小手まねきしてよぶ程に、立とゞまりてきゝければ、よきおてきさまと見るはひがめか、まさなふも女にうしろを、見せたまふかとて、

ぢよろの名の音羽あぢよきお茶のいき
ふかきなさけを人はしらずや

とたわむるゝ、其時やがてこしにはさみたるおあしを見せて返歌、

いかにぢよろ見や此錢もをしければ
なれし子もちのはらや立らん

とよみすて、足ばやにこそにげかへりけり、

第二　堺町淨瑠理の初り并鳳來寺

それより引歸し、堺町に行けるに、聞及びしよりは、にぎ〳〵しく、表にては、誰彼と云藝者の、何藝を仕

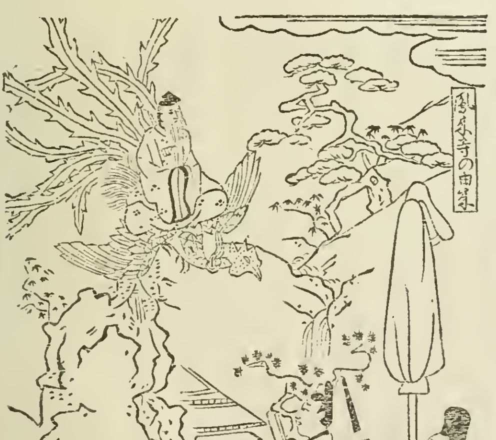
るゝ、口々によびたつれば、内には笛つゞみ太鼓にて、打囃す程に、内外のどよみにて、人の物いふをも、きゝわけがたく、初て爰にきたるものは、氣さかのぼりて、頭痛する躰也、然所に、どろぼう有て巾着をきり、小刀をぬき取、刀わきざしの下緒を引ぬきとる、此事かねてより、心付たるものもとられける程に、猶更初心にては、うか〳〵と立ては、とられずといふ事なし、萬一仕合惡きどろぼう、見付られては、ちやうちやくにあひ、まるはだかにせらるゝも有、此さわぎもたび〳〵なるに、やゝもすれば、はすは成もの有てこひぢをはり、眼をいからし、をのれがさしたる刀のこじりを、人のさしたる刀わきざしのさやにうちあて、事を好てけんくわをまねくやからも有、かくのごとくの事おほければ、しづか成間はさらになし、是や血氣の勇ともいつつべし、わづか一夫の勇なれば、しすましたればとて、何の用にかたつべき、只いやしきものゝなすわざ故にか、奴僕と名付る也、扨かなたこなたを見れば、江戸大ざつま、土佐の太夫、和泉太夫が上るり、天滿八太夫、江戸孫四郎、江戸半太夫がせつきやう、鶴屋の源太郎が、なんきんあやつりと、口口によびたて、初段より御見物候へとて袖をひき、たもとにすがりとゞむれば、さすが岩木にあらざれば、心よわく立どまり、札を取鼠戸をくゞる事かぞふるにいとまなし、されば浄瑠理の起りは、あまりひさしき事にも侍らずとかや、豊臣太閤秀吉公の、御臺様の宮仕に、小野のおつうと申て、ゆうにやさしき上らうの有けるが、ようがんいつくしく、ゑかき花むすび、しいか糸竹のわざも世にすぐれ、殊更手蹟は、聖武の女帝も、同世にだにましまさば、はぢおぼしめす程也とかや、有とき御臺様通女をめしておほせられけるは、古しへの女の世にすぐれたる才藝有しは、其徳を末世に殘し置しぞかし、されば伊勢は、在五中將の一生涯を記して、伊勢物がたりとて、今の世までも、もてあそぶ、紫式部は源氏六十帖を筆にまかせ、石山のくわんぜおんの化女なりと、世に云傳たり、清少納言が枕草子、かれといひ、是といひ、言葉の花にほやかに、心の水きよく、久敷世々を流來れり、哀和御前も才藝の程を末世に殘して、名のかたみともなし候へかしと、御望有ければ、おつう御返事に、いにしへのかしこきは、皆かみや佛の化身にてまします故に、さ

やうの事をのちのよまで、殘しをかれ候へども、今つたなきわらはの、およぶべき事に御ざなく候、さりながら、おほせおもければ、よしあしなにわ入江のもしほ草、書あつめてさし上、ときの御わらひ草にもなし奉らんとて、昔左馬頭義朝の末子牛若丸、くらまの東光坊の弟子と成、舍那王丸と名をつけおわしけるが、十五歲の春の頃、奥州秀衡がもとへ下るとて、金賣吉次信高が家人にまぎれ、三河國矢橋の宿長者がもとにつき給ひて、長が娘の淨瑠理御前に忍逢給ふとて、ぬれにぬれたる言の葉を、十二段にわけてかきしるし、御臺樣へさし上ければ、御臺樣御上覽まし〳〵て、扨々言葉のつゞきやさかたに、筆せい玉をのべたり、今の世のいせか、紫しきぶか、まことは小野のながれ程こそあれとて、御かんのあまりに、太閤樣の御上覽にそなへさせ給へば、秀吉公取上させ給ひて、是程のものをそのまゝすておかんもをしき事也とて、岩船檢校に節をつけよとおほせ付られければ、けんげうおほせをうけたまはり、すなはち山中山城守によませらるゝを、つく〴〵ときゝて申やう、十二卷平家は信濃の前司行長が作にて、生佛と云座頭ふしを付けると申傳へ候也、今通女の作に、此盲目がふしを付申さんこそ、末代迄のほまれにて御座候、通女の作なくば、音曲の妙もむなしからんに、よきさいわひにも生れ合候とて、しばらく閑居して、ふしを付かたり初めけるとなり、彼通女の作は、筆勢いせ物がたりににたりけるを、ふしやつけがたかりけん、岩舟けんげう言葉をくだしけるとかや、それより世上の座頭つたへてかたりけるを、上るりぶしとてもてはやし、しだいに事廣く成て、京、田舍、遠國、端島迄はやりける程に、四條の河原にて芝居をたて、六字南無右衞門といへる、女太夫かたりけるとき、十二段計ははや人の聞ふれてめづらしからざるとて、舞にまふ、やしま、たかだち、そがなどを、彼ふしにかたりける故に、上るりぶしにやしまをかたる、高だちを語ると云てより、をのづから其名になりたると也、それより左内、宮内などゝいふ太夫、うちつゞきて四條河原にてかたりける故に、かはらぶしといふて、座頭よりはいやしめけるとかや、扨江戸にてもそのかみは芝居町にて、座をはりかたり、そのゝち中橋へ移り、又此堺町へ移り語る也、其頃は大ざつま、小ざつま、四郎與吉、七郎左

衞門とて語る、中頃虎屋源太夫、油屋茂兵衞、鳥屋次郎吉、南北喜太夫などゝ云太夫有、然れば家々のふし出來て、淨瑠理をもさま〴〵作り出す事かぎりなし、太夫共も皆々受領して、丹後、近江、長門、丹波かれこれと、源平藤橘の氏を名乘、芝居をも金銀をのべかざりける故に、度々御改に逢たり、扨又和泉太夫が淨瑠理は、岡清兵衞と云もの作る、いつぞの程にか、金時が子を金平也と云廣め、わたなべの綱が子を、たけつなと云はやらかしてより、むかしがたりに云つたへたる、べんけい、時宗あさひななどは、彼金平が片手にもたらぬやうにきこへければ、くわいりよくらんしん好おこのもの共は、金平の語るをきゝては、そばにてこぶしをにぎりきばをかみて、よろこぶ程に、金平と云事をば、三才のわらべ迄もしりて、日本國へひろまりたり、彼金平作りの清兵衞は、生れつき才發にして、物覺つよく、太平記、盛衰記、あづまかゞみなどを、そらにおぼへ、儒釋歌道をも少づゝはこゝろみければ、古事來歷を引事得もの也とかや、此清兵衞近頃病死したるときゝて、哀にもをしくおもひければ、

金平を作り岡清びやう死して
　　惜や思へば學もたけつな

扨又淨瑠璃姫は、三州煙岩山鳳來寺の藥師如來よりの申子也と聞て、鳳來寺の緣起を尋ねけるに、文武天皇の御宇かとよ、利修仙人と申て阿閦佛の再誕、鳳凰に乘來り給ひて、煙岩山に住、衆生濟度にならん事を願給ふに、有時古木の七本杉の本へ、八童子天降、杉木醫王藥師佛、一步一見諸群集、現世安全得成佛、後生無量佛國と、三度禮し天上す、仙人藥師の尊躰なら



ん事を思食(おぼしめし)、杉一本切て一尊の藥師幷日天月天を一刀三禮に刻彫す、杉の根にては藥師一尊を作付給ふに、今に生木のごとくにて有と也、かゝる所に御門、后の御惱有しを、占せたまへば、煙岩山に住する仙人來り給ふならば、御快氣あらんと奏聞す、此時勅使として藤原公宣をつかはさる、則仙人鳳凰に乘じて參內有、后に逢奉るに即時に本腹ならしめ給ふ、是によつて、望あらば協へんとの勅宣也、仙人のたまわく別の望も御座なく候、只煙岩山に御寺造立被レ成やうにとの望を申上給へば、則勅額にて鳳來寺と下され、今に有とうけたまはる、彼やくしの申子とはいへども、則上るりは、藥師佛の化身なるとかや、此御影堂は參州岡崎の城の二の丸に有故に、他所のものゝ見る事なし、水野家の家來は、上下共に拜しけるよし、彼城下に住けるものゝかたりける也、牛若丸十五のかたちと、上るり十四のとしのかたちにて、是有と也、

おやくしの化身成ける上るりを
　きけば頭痛も氣も晴にけり

旅の男、作者のおつうをほうびして、古歌をなをしてかくなん、

上るりをきくにつけても哀々
　小野とはいわじ佛おつうか

第三　狂言盡

爰に中村勘三郎、市村竹之丞、都傳內とて、狂言盡の芝居有、老若つどひこぞりて、をしつおされつ、こみあひあらそひて、ねこぜになり、鼠戶をねらひよれども、よりもつかれず、あきれて立も有、又仕合よく內に入も有ければ、心そらに成て、いかばかりおもしろき事をやする、先しばらく見合てこそと思ひ、あたりの茶屋にこしうちかけて居たる所に、浪人かとおぼしき人、是もやすみ居られける程に、かやうの人こそ、ものゝゆらいはしれるもの也、さいわひに此きやうげんづくしの、起を尋ばやとおもひ、そこつながらも序語(ちよご)を出して、時のあいさつひとつふたつしをはりて、さても此きやうげんづくしと云事は、いつの頃よりはじまり候ぞや、御存候はゞ御物語候へと望みければ、彼人申樣、われらもくわしき事はぞんせず候、去ながら人のかたるをきゝ侍るに、もとは神事よりをこりて、出雲國大社のみこの、舞はじめけるとも申、又後鳥羽院の御宇に通憲入道といひし人、儒釋の

奥義あきらかに、諸藝萬能くらからざりし人なるが、舞楽をやつして、磯の禪師と云女にをしへまわせたまふ、初は白きすいかんきて、ゑぼしひきこみ太刀をはきてまひける故に、男舞とぞ申ける、ぜんじが娘の静つたへてより、太刀を略してはかざるゆへに、白拍子と名付たり、かれは九郎判官の思ひものなりし故、義經沒落の折から、吉野山にすてられしを、鎌倉へひきくだされ、頼朝の御前にて今やうをうたはせ、舞をまはせられける時、工藤祐經は世に聞へたるつゞみの上手なりとて、かれにつゞみをうたせ、畠山次郎に笛の役をおほせ付らるゝ、歌をうたひてまひける、妓女なればとて、歌舞妓と名付たり、それより世々の白拍子共つたへ來りて、慶長、元和の頃にや、佐渡島おくにと云女、われにをとらぬ遊女あまた集、芝居を四條河原にかまへ、歌舞妓をしける程に、貴きも賤きも、是にまよひて芝居さんじきに、錐を立る程のあきまなく、こぞり見物す、それのみならず、かれらにあふ事を望みて、ひたと參會せし程に、一跡をうしなひてうき名をながし、或はけんくわ口論しては公事ざたにおよび、諸道のさまたげ、わざわひの根元と成ければ、女かぶきを禁制なされ、其後は若衆かぶきに成たるなり、去程に國々より、うるはしき生れ付の子供を買もとめ、手入をして照光程の美少年に仕立、歌うたはせ舞まはせける故に、又たでをはむ虫もすきずきとて、是に魂をうばはれ、うてうてんに成てうかれ通ふ、それのみならず、大名高家へもめしいだされ、御酒もりの御相手、御酌などになりて徘徊し、又は諸寺諸山へめされて、あなたへつけさしこなたへうちごしなどとせし程に、高僧貴僧の勤行座禪のさまたげとぞ成たりけり、是又わざわひを求る中立（なかだち）、事をみだすもと也、其もとみだれてすへをさまる事はあらじとて、又御法度（はつと）におほせつけられて、既にかぶきは彦作、勘三郎此兩芝居の時ぞやみたりける、その頃かぶきのおどり歌に、櫻川と云小歌はやりて、散かちらぬか、見たかのと、うたひけるは、若衆の狂言師もちり〴〵に成べき、前表とぞきこへける、其時いろ〳〵御訴訟申上なげきければ、彼若衆共のむかふかざりを取せ、やらうと云ものになして、芝居を立べしと、おほせつけらるゝ、是によつて又いろ〳〵とたくみ出して、京の島原にてけいせいぐるひするていを狂

言に作り、やらう共を女に似せて、つけがみかづらをかづかせ、芝居をもよふしければ、かぶきはしばらくとゞまりたる時節にては有、めづらしくてくんじゆする事おびたゞし、これも上るりと云ごとくに、總名を島原と名づけ、始の程はかみきりしまばら、さかた島原などゝ言て、うら見にかみを切たるしかた、又は遠國へあきなひに行たるていをしけるが、しだいしだいに事ひろく成て、古き事を引て作り出し、或はあだかしまばら、八島しまばらと云しが、此名相應せざるゆへに、今は狂言盡と申也、誠に狂言僞虚とは云ながら、神祇、釋敎、戀、無常に孔老孟の道を引、忠孝惡逆の程をあらはしければ、見物の仕樣にて善にも惡にも移るべし、されば美少年を愛する事、天竺にては大聖文珠よりはじまり、唐土にては伊川先生よりらんじやうす、詩人の東坡はりせつすいにぬれて、馬に乘少人且婉也といひ、我朝の眞雅僧正は、業平の少年成しとき、是を戀給て、ときわの山の岩つゝじ、いわねばこそと、かこちたまふ、三國共にぬれ來る道なれば、今とてもやむべくもなく、金銀をばちりあくたともおもはず、しば〳〵の參會に浮世の思ひでをなす、女色は目立て出家の通ふべき道なければ、爰に諸談林の所化衆うかれ行て、一座の參會をば三尊來迎のおもひをなし、ほんいをとげては、龍門の鯉の三級の瀧にのぼる心地して、なをあきたらず通ふ程に、後はあげせんに事をかき、經論聖敎をも賣すて、佛具袈裟衣迄しちに置、寺院年來の什物をぬすみ出しもちはこび、千とせもちぎらんとの追從に參らせあげ、身の置所なくて逐電し、ぐわんにん坊主となるも有ることかや、女がたと云は、もと右近源左衛門よりぞはじまりける、其後まんのすけと云ぞすぐれて女には似たりける、去間堺の卜養の狂歌に、

女かと見れば男のまんの介
　ふたなりひらの是もおもかげ

とよまれしと也、又下りさくやとて、勘三郎が芝居に有けるが、萬治三年の冬身まかりければ、右同人の發句に、

　なにはづにさくや子の花冬ごろり

と申されしを、去人、明年の春きゝてわきをいたさるる、

今を春べとなくや此鼻



といはれしも、ざれ句ながらも追善なれば、さくやきみのゆうれいも、さぞや悦給ふべし、なにはの句のよしあしはしらねども、所によりてかわりたるはなしも、なぐさみにやならんとかたり侍る也と、語り給へば、そのまに少鼠戸もくつろぎたり、いざ入て見んとて内へ入に、中々きゝしは物かわにて、天人の影向、菩薩も爰にあまくだり給ふかと、うたがふばかりの美少年、かみけだかくゆひうすげしやうして、小袖のゑもんじやうに着なし、かりやうびむの聲をあげて、小歌をうたひ、階がゝりにねり出たまふをおがみ申せば、知人ならでもいとをしらしく、心もほればれとなる、なべて見物の人々、前成は三千年に一度花さく心ちして、せいわうぼうがもゝじりとなり、うしろ成はうどんげの思ひをなしてのびあがり、さんじきに有かた〴〵は、くちをみゝわきまであきて涎をながし、餘りのおもしろさに聲をあげて、我死はたすけよ、たへがたやとよばふも有、又うんけいたんけいあんあみの御作か、ちよい〳〵などゝのゝじりて、たれさまかれさまと、其名をさしてわめきけるは、只なるかみのごとく也、

君達に何かこがねのをしからん　露の命もやらうと思へば

第四　廻向院并酉年之火事

それより出て、ゑかういんへ参らんとて、いづみ町へかゝり行程に、是や此両國橋に着たり、長さ貳町程も有ぬべし、是を両國ばしと云は、武蔵より下總へかけたる故とかや、是を渡りて行程に、諸宗山無縁寺廻向院に着たり、されば此寺は近き頃の草創として、物の

哀をとゞめし也、そのかみ明暦三丁酉年正月十八日の辰の刻ばかりの事なるに、乾の方より風吹出し、しきりに大風と成、ちりほこりを吹あげて、中天にうずまきわたる有さまは、雲か煙かとあやしむ、日は出ても光なく、くらやみと成たり、未の刻にも成やらんとおもふ折ふし、本郷の四町め本妙寺と云日蓮宗の寺より、失火もえ出て黒煙天を掠め、寺中一同に燒あがる、然所に魔風十方に吹まわし、湯島をさしてもえ出、はたご町の堀を飛こへ、するが臺にいたり、大名の屋形數百家燒拂、かまくらがしにやけとほり、それより西風に成、さや町へほのほ飛び移り、海邊へ燒出たり、數萬の男女にげまどひ、靈岩島へかけこもるに、程なく靈岩寺の本堂幷數ヶ所の坊に火かゝり、一同にもえ上り、車輪程成ほのほ、風にはなされ飛散、大勢あつまり居たるうへにおちかゝりければ、かしらのかみにもえつき、袂の内より燒出堪がたければ、諸人あわてふためき、火をのがれんとて海邊をさしてはしり行、泥の中にかけこみけり、寒さはさむし、今朝よりして食はくわず、水にひたりて立すくみ、火をばのがれけれども、勢力つきはてゝ、大方凍へ死けり、それまでもにげのぶる事かなわぬものは、焔五躰へもえつきてやけ死す、おめきさけぶ聲は、かみはとうり天へもきこへ、下はならく金輪ざいへも通ずべし、誠にぢごくの罪人のねつてつのほのほに身をこがし、ぐれん大ぐれんのこほりにとぢられけるも、是には過じと哀也、水火両難にて死するもの、九千六百餘人也、其暮方西風いよ〳〵はげしく吹て、ほのほ十町廿町をへだてゝ、とびつきもえつき、大名小名の屋敷、神社佛閣、町人の家ともに、雲や煙と燒あがる、老若貴賤、資財雜具をもちはこびて、西本願寺の門前に集る、其頃は此寺あさくさ御門の内也、然所に旋風おびたゞしく吹まきて、ほん堂寺家數ヶ所、一同に燒あがる、山のごとくにつみあげたる道具に猛火もえつきければ、あつまり居たる諸人、せめて命をたすからんとて、井のもとに飛入、溝の中へにげ入ける程に、いやが上にかさなり、下成は水におぼれ、中成は友にをされ、上成は火にやかれ、爰にて死するもの、四百五十餘人也、又淺草口の總門へとにげ行輩、いく千万人と云數をしらず、かゝる所にいかなる天魔のわざにや、升形總門をひしとうちたりければ、思ひもよら

で、跡よりは車長持つゞら等を、引かけ持かけ押來る程に、門のきわ成もの共、いかにもして門の關貫引はづして、ひらかんとすれども、家財雜具をいやがうへにつみかさねければ、是につかへてひらくべきやうなし、前はつかへうしろよりはせきかゝる、そのあいだに大名の屋形卅五ヶ所寺院百廿ヶ寺、一同にもえたちて、あつまりせきあふ諸人の上へ三方よりほのほ吹かゝる、數万の男女たへかねて、升形の築地より堀の中へ飛入程に、手足をうちをり、かうべをくだき、跡より飛人にふみころされ、爰にて死するもの、貳萬三千餘人也、とかくする內に、さしも重々にかまへたる見付の櫓に火かゝりて、くづれおつれば、にげをくれたるものども、前後の火につゝまれて、燒死す、其死骸方々町中にかさなりふして、算をみだせるがごとし、其夜の亥の刻に御藏の米に火かゝり、爰にあつまり居たるもの七百餘人燒死す、都て牛島、新田に至るまで、皆やけほろびて、寅のこくばかりに火事はやう〳〵靜まりぬ、

夜既に明ければ、正月十九日也、四角八方に落ちりたる者共、たがひに聲々にたづねよばふ、燒死たる人は、かしらかみ手足、いしやうまで皆もえければ、それともさだかにみしりがたし、燒のこりたるは、いわひ事してよろこぶ所に、十九日の巳のこくばかりに、小石川新鷹師町より火出て、しかも北風はげしく、車輪程成火の子、黑煙の中に飛散、十町廿町の外にもえわたり、傳通院をはじめて廿餘ヶ所、一同にやけあがり、本鷹師町より殿守二三の丸、諸大名の屋形十五ヶ所、常盤橋の內廿ヶ所、むねとの大名廿六ヶ所、小名の屋形、十七ヶ所、都て南北七十二ヶ所、數万間前後十五町が間一同にもえあがり、ほのほは雲をこがし、火の子は雨のごとく、燒くづるゝ音は、百千のいかづちの一同に鳴落るがごとし、申の刻より北風西になをり、いよ〳〵はげしく吹て、紅葉山西の御丸は、漸殘りたり、やよすがしへ火うつり、南北廿餘町一面に成て、町屋に押出て、京橋中橋の町人共、是は〳〵といふ程こそあれ、あわてふためき鍛冶町、長崎町、前後ひとつに成て、男女老若にげ出つゝ、もみあひせきあひけるに、車長持つゞら革籠、その外資財雜具を、辻小路に山のごとくに積すてたりければ、諸人共に心のまゝに通り得ず、諸大名のはなれ馬と、男女老若

の貴賤打まじり、もみ合こみあひする内に、猛火さきざきへもえわたり、京橋中橋を初て、四方の橋共やけ落たり、前後の火に取まかれたるもの共、今はのがるべきかたなく、北や南やとあがきめぐりをしあふ内に、ほのほ五躰にもえつきうちたをれければ、うしろなるはしやうぎだをしに成、其上にほのほ落かゝり煙うづ巻て、おめきさけんで焼死するもの、凡二万六千餘人、南北三町東西二町が間にかさなりふす、猶南は新ばし木挽町、東は材木町より大名の藏屋敷に飛渡り、十六ヶ所一同にやけくづれ、鐵炮洲に吹つけて、酉のこくばかりに海邊にして焼とまる、然る所に戌のこくばかりに、糀まち五町目の在家より、別に失火もえ出て、西風ますゝゝ吹しきり、大名屋敷數十ヶ所をやきはらひ、それより又北風になりしかば、紅葉山西の丸は、いよゝゝ是にも殘りたり、南の方大名小路廿餘ヶ所、櫻田の町屋に出て、愛宕の下大名小路八十五ヶ所、増上寺の所化りやう、三島町の分、其夜の丑のこくばかりに炎上す、増上寺の内は此分ばかりにてしさいなし、それより南へ十一町、芝口三町目、濱手にしてをのづから焼とまる、本郷より是迄、六十餘町四方十餘里廣野と成、都て町中五百餘町、大名小路五百餘町、屋形五百餘家、小名の宿所六百餘家、御城殿守、二三の丸、櫓三十餘ヶ所、江戸中の橋六十ヶ所、わづかに淺草橋、一石橋ばかりぞ殘りぬ、此一石橋のきわにて、後藤源左衛門が家一軒のこりて、江戸のまちの名ごりと成、土藏の數九千餘庫焼、神社佛閣三百五十餘宇焼失せり、焼死する者十萬貳千百餘人也、此死骸共はかわりはてたる有様なれば、一類けんぞくも見しらず、辻小路、堀溝に、算をみだして有けるを、河原のものにおほせて、武藏と下總のさかひ成牛島と云所に、舟にて取はこび、六十間四方に堀埋新數塚をつき、増上寺より寺を立、諸宗山無緣寺廻向院と名付、諸寺の僧衆あつまり、千部の經を讀誦し、それより不斷念佛の道場と成也、誠に一業所感の者共、諸國よりあつまり來り、同時にやけ死て同穴に埋まれ、一所の土と成けるも、過去世の因緣にてや有ぬべし、江戸中の老若男女、あるひは子にをくれ、或は親にはなれ、妻にわかれ夫をさきだて、つれなく生殘りて、有かいもなき命ながらへ、物うきなげきにしづみ、其日になれば彼塚にまうで、五輪卒都婆

をくやうし、花をたて香をもり、水をたむけ靈供をそなへ、かなしみの泪たもとにあまり、思ひの煙りむねをこがすもの、高き賤き市のごとくに集りけるを、見るに目もあてられず、かたるにことばはなかりけり、そのゝち餓死に及ぶもの共に、御城様より粥をおほせ付られて、日本橋、常盤橋、筋違橋、本郷、八町ぼり、新橋、幸橋、虎の門、増上寺前にて施行なさせらるゝ、誠にもつて死せるものをば、作善をなさしめ、生るものには食をあたへて命をつながしめたまふ、御慈悲の程こそありがたけれ、然るに彼塚の名を無縁塚と號す、今は其上に唐金の坐像のあみだ佛をすへ奉るなり、

三界の有縁無縁寺もらさじと
申念佛の廻向院かな

第五　三股舟遊花火

南へあゆみ行、うなぎ澤の川口に立どまり、旅の男にかたりきかせけるは、爰をうなぎ澤と云て、ぎやうとくへ行舟道也、大河の廣みを三俣と云、爰は淺草川、新堀、靈岩島、此三方に相通じて、水のわかれながるる所なればかく云也、北には淺草寺、深川新田、東ゑい山、まのあたりに見ゆる、西の方は江城、愛宕山見ゆ、辰巳の方には伊豆の大島、坤の方には駿河の富士山、東の方にははるかに安房上總までうちつゞき見えて、まことに絶景の所也、何よりも面白きは、八月十五夜の船遊なり、世の人貴賤上下舟をかざり、幕をはしらかし、三股より鐵炮洲をさして押出し、又は爰に舟をとめ、うたひつゞみ笛太鼓小歌しやみせん、心々思ひ〳〵の、なぐさみは、心ことばもをよばれず、常はいましめなれ共、今夜ばかりは三俣に花火をゆるされ、舟ごとに我おとらじと色々の花火をたてて、たがひにほめ合てどよむ、しだれ柳に糸ざくら、牡丹白菊からなしや、露の玉火に流星は、くもゐはるかにわけのぼる、めぐれやめぐれ車火と、ともに盃めぐらして、月と花とをならべて見る、それ月の名所は、江戸やあかしやさらしなや、おばすて山と申つつ、浦にも山にもおほけれど、此三股にて見る月に、よもやまさじとをもほゆる、

月も見つまたしをもみつ最中かな

と申ければ、旅の男いへるは、それは秋の頃、今は春べ成物を、我見る花はなし、

山ならば木々もこそあれ海邊は
　水の出ばなやみつまたの枝
とつぶやき居ける所に、御大名の舟とおぼしくて、黒き船にめし、かこども廿四挺の櫓をおして行事、只みつばのそやを射るがごとし、うたひつれたる歌の一ふしをきけば、枝もさかゆる、はもしげるとことぶくは、誠にめでたき御代の印と、心肝にしみて、
枝もさかへはもしげりあふ花の江戸
　めぐみの色香よもにくんずる

并彌勒寺

それより二つめの橋を越て南へ行ば、大伽藍有、あたりの人にとへば、是なん彌勒寺と答ふ、眞言密宗の祈願所として、元祿年中に此所にうつされ、いと新しく造立られしかば、十方莊嚴の粧ひ、言葉にも述がたく、願念の内に、
高野山たかくあふぎて曉を
　待ぞ久しき世のためしなれ
誠に有がたき御代の御めぐみ、萬歳をとなふ、それより遙西の方を見渡して大橋見ゆる、是は元祿六年に新敷かけさせ給ひ、目出度御代に大橋と、貴賤悦び渡、





第六　靈岩寺

猶南へ行程に永代島にいたり、道本山靈岩寺につきたり、當寺は雄譽松風靈岩上人の開基にて、淨土宗の檀林也、誠に古今まれなる善智識にてまします故に、程なく京都の智恩院へおわしまして、元祖源空上人より第三十世の和尚とあをがれさせたまふ、寛永十八辛巳年九月朔日に、時年八十歳にて御入寂也、扨當寺へは以天、珂山と代々相續有來れり、もとは靈岩島

を雄譽の法力にて築給ひ、寺を建立有し故に島の名とせり、かくて其島に明暦の頃迄有つるに、酉の年の回祿以後此所に移せり、本堂のうしろの左に、せいしだう有、佛前の庭に藤有て、其枝庭中におほひ、花の頃は紫雲庭をうづむかとあやしむばかり也、

蓮臺をかたぶけ給ふ御佛の
　紫雲にまがふ庭の藤かな

と口ずさみければ、旅の男も、

善をすゝめ惡をせいしの御前なる
　藤は紫雲にまがふことはり

とつぶやきて、しばらくやすみ、いざかへらんとて出るとき、

むらさきの一休かや庭の藤

といひすて、大門さして出れば、右の方に不斷念佛の道場有、

第七　海福寺

靈岩寺より左の方へ行ば、海福寺也、是は近き頃の草創、隱元禪師の御弟子獨本師の開基也、隱元は唐人なれ共、當寺の住寺は倭朝の人也、本堂には釋迦佛、左右に文珠普賢、又十六羅漢を安置す、後ろに隱元の御影をすへ置たり、新地なれ共奇麗莊嚴にて、心もきよく成侍る也、

いんげんを云はことはりきれい成
　寺はつとめの海福寺なり

第八　永代島の八幡宮

それより猶南へ行て、永代島の八幡宮につきたり、そも此八幡宮は、寛永元年の頃、長盛法印其年旣に七旬に餘れり、有夜の夢に八幡宮夢中に御託宣有てのたまはく、我永代島に鎭座有べしと、數度靈夢をかうぶり、是によつてみづから信をおこし、一社の宮所を立て、八まん宮をくわんじやうす、同八年にあたりて、やうやく再興の本意をとげらる、御神躰は菅丞相の御作として、中古は源三位賴政是を崇たまふ、其後千葉介の家に崇らる、後に尊氏將軍へつたはり、それより鎌倉の公方基氏より同持氏公に傳り、同管領上杉家に崇敬有て、太田道灌ふかく敬ひあがめ奉らる、もとは下總國におはしますを、和光有緣の大悲によつて、今此御社の御神體とならせ給ふ、伊勢太神宮、春日大明神左右に相ならび給ふ、是八まん三所と崇奉る所也、同寛永廿年みづのとひつじ、八月十五日に初

て祭禮を行奉りて毎年の式とす、それより此かた神德高くあらはれ、諸人渇仰のかうべをかたぶく、島の內にぎはひて、人家軒をならべたり、慶安四年の頃より、法務貫首のおほせによつて、宮寺となされ、大榮山永代寺と號せらる、同五年の夏弘法大師御夢想おわします、其御告に、

名にしあふ弘めん法のわが家を
　人の心のうるほはずとも

是によつて高野山、兩門主、碩學其外東國一派の納僧、此永代島に集會せしめ、一夏九旬の間法談有、別に高祖大師の御影堂を立て、眞言三密の秘跡を講ず、それより此かた神前に龍燈を上る事有て、おがむ人すくなからず、同き年の秋、天下太平の爲に、神前にて流鏑馬（やぶさめ）を始む、是鶴が岡の法式をうつす、左右に假屋棧敷をかまへ是を見る、すべて貴賤上下市をなせり、萬治三年の夏、御室の宮、日光御社參の序に、下向の道に此島にまうで給ひ、天下安全の爲、兩日の間神前に御念誦を勤給ふ、此をりから兩院家の御詠有、

永代の榮久しき此島の
　めぐみたへせぬ神がきのうち

立ならぶときわの松も色そへて
　をさまる御代は永き代の寺

誠に此島の地景、又たぐひすくなし、東は遠く安房上總の山を見やり、南は品川池上も目前にて、坤の方は富士の嶽雲にそびへ、戌亥の方は江城也、北は筑波山ほのかに見へて興をもよほす、丑寅の方は下總にうちつゞき、すへは海邊の磯ちかく、鹽屋の煙立のぼり、風になびくよそをいまで、殘りなく見へわたる、此神德をとうとみ、まうでくる人、利生をかうぶらずと云事なし、又永代島を題として、諸人歌よむ事百千の數にもあまりぬべし、其中に、

さしくれば波こゝもとに立鹽の
　ひけば洲崎も永代の島

爰も又おなじ流れの石清水
　すむこゝろから永代の島

永き代の浦吹風に霧はれて
　八十島てらす月の影かな

實々（げにげに）和光同塵は結緣の初め、八相成道は利物の終ときくときは、現在二世の御ちかひ、誰かはたのまざるべきや、

永き代を神も守れば大榮を
　大慶山とおがむ成けり
石清水爰に流のすへ永く
　代々に大に榮かぎらず　旅男

第九　西本願寺

それより大渡の舟に乘、つくだ島や、石川又四郎住宅の島を左に見て、靈岩島へつく、高橋へ出て、いなり橋を打わたりみなと町へかゝり、鐵炮津のつき地より、西本願寺に参る、是も東照權現樣御在世の時より、京都西本願寺の末寺を立られ、宗流を汲輩をすゝめらるゝ、其かみ開山の上人より此かた、顯如上人と云迄は、只一寺にて侍りしを、豐臣太閤秀吉公の御とき、子細有て東西二派にわかれしより、宗風別成をしへもなけれども、東西二ケの本寺と成て、中のわろき事水剋火のごとくにて、我執をおこし、東の門徒は西をそしり、生ながら魔道へも落行やうにおもひ、又西よりは東をにくみ、命の內に火車に乘やうにおもへり、まことにおろか成事にあらずや、東西共に彌陀他力の本願を賴み一向一心のをしへなれば、何のへだてか有べき、又末寺の坊主等我心にかなわぬ事あれば、本寺をうらみて西よりは東へ、東よりは西へ歸山するとて其派をかゆる、されば西へちろり、東へちろりとする故に、かれらのやからを、明星坊と異名をいふとかや、當寺もとは淺草御門の內に有しを、酉の年の回祿以後鐵炮津に移され、海をつき出し地形とせり、初は人家も遠く立はなれて、いとゞさびしかりけるを、江府御はんじやう故に程なく人家立つゞき、今は此寺絶景の地となれり、本堂は南むきに立られたり、東に安房上總見へわたり、伊豆大島も目前に見ゆる也、坤の方には名にしあふたる、するがの富士の嶽くまなく見へて、おもしろたへの雪のふり袖は、坊舍毎にをわします、大まわしの舟は、順風に帆をあげて川口へといそぐ也、あまの小舟の釣竿の、いとなみまでもこなたには、詠のたねをまき筆の、かくにつきせぬ風情かなと、四方を眺めて立けるが、さるにても同じ流のあらそひあることそ、うたでけれと思ひて、

西こそはをしへしみだの本願寺と
　自慢はきみやう無理なあらそひ

第十　赤坂氷川大明神并小六

それより木引町へかゝり行、爰にも狂言盡の芝居二

軒有、太夫は森田勘彌、山村長太夫と云、是を見すてしほどめ橋をわたり、堀についてめぐり行程に、入間郡赤坂の氷河大明神の社につく、是は昔人王六十二代村上天皇の御宇、天暦年中に、近江國甲賀の郡に、蓮林僧正とて天台四明の法灯をかゝげて、一念三千の觀行おこたらざる上人有、東國修行のついでに、此所に一夜をあかし給ふ、その夜の夢にいづくともしらず、老翁一人來りて云く、我はこれ此土中に埋れて、一千餘歳を送りたるもの也、いそぎほり出して安置せよ、此所の守護神と成べしと見て、夢は其まゝさめたり、上人奇異の思ひをなし、そのあたりをめぐるに、一所の壇上に金色の光り有、いそぎほりて見れば、十一面觀音の形像也、やがて其所に社をたて安置せらるゝ、一ッ木村のくわんおんと號して、諸人參りつどふ、きはめて利益おほし、蓮林遷化の後、治暦二丙午年にあたつて、關八州の內、夏より秋にいたり、大に日でりす、萬民うれへけるに、當所の土民此社に雨をいのるに、たちまち洪雨降くだつて、五穀豐にみのり、民よろこびの眉をひらきけり、是雨を下して川をなし、雨中冬のごとく、水のはる程なりけるとて、氷川明神と名付奉ると也、神事は六月十五日なり、今におゐて、猶此神德高くおわしまして、諸人の願望をかなへ給へり、かるがゆへに此御神を近邊にて、所々にくわんじやうし奉る也、又世に小六の宮と云ふれけるは、慶長の頃關東の小六とて、美男なる馬追有けるが、此赤坂に住けり、小歌無双の上手にて、きくもの前後の事を忘れて、きゝとれけるとかや、扨かれが所持したる馬のむち、つえ扇等迄、賤の女共は乞うけて身をはなさず、もてはやしけるよし也、生國は西國方の者ときこへたり、此故にかれが事を作りたる小歌に、小六生れは西のもの、そだちは關東の小六ともうたふたり、是を小六ぶしとて貴賤ともにうたふ、年三十年程づゝ、中絕して三度迄さへかへりて、日本國にはやりし故にや、いやしきものなれ共、今に至るまで其名を殘す、此小六氷川神社をふかく信仰して、家富榮ける程に、折節宮も大破しければ二間四面に造立したり、小六が立たる宮とて、小六の宮といひつたへけると也、

御本地は衆生濟度のくわんせおん
ぢひかわらぬは明神(あきらけきかみ)

第十一　永田馬揚山王大權現

それより赤坂の御門の内へ入、右の方へ行ば、江府の鎭守山王大權現の御社也、此御社の初を尋奉るに、叡山第二代慈覺大師の開基也、是則日域守護の神として、和光同塵の利益あさからず、内には圓宗の敎法を守り、外には鎭國利民の德をほどこし給ふ、殊更御當家の御產土神として、武城の鎭守と崇給ふ也、然に慈覺大師佛法弘通の爲に、武藏國川越にいたり、今の星野山を開きそめて、圓頓の敎法をひろめ給ふとき、且は佛法ながくつたへんがため、且は和光の利益を、あまねく東國の間にほどこさんが爲にとて、比叡山の山王權現、上の七社、中の七しや、下の七社の内を、各一社づゝをぬき出て、三所の靈神を彼地に勸請し給ひけり、かくて星霜をかさねて、後花園院の御宇、長祿三年に、太田道灌既に文武兩道の才智をもつて、天下長久の勝地をかんがみ、此江府の城を築終て、文明年中に、始て此山王三所を、當城の產土神と城内にあがめらる、しかりしより此かた、天下一統して四海をだやか也、抑當社三所權現と申は、第一には上七社の内、二の宮の權現、本地藥師如來、東方淨瑠璃世界の敎主なり、第二は中七社の内、氣比の宮、本地は聖觀音也、第三は、下七社の内、王子の宮、本地は文珠大士也、いづれも國家富饒のことぶき、理世安民の唱は、近くは東關八州のちまたにみち、遠くは五畿七道の末にいたれり、後土御門院延德年中に、仰のむね有て道俗結緣の爲、三社の御社を山の手の城の西にうつし給ひて、再興修造有、其奇麗なる事、美つくし善盡せり、又明曆三年の回祿以後、今の溜池の築山無双の勝地たるによつて、上命をかうぶりて、此所にうつしたてまつる、月日いくばくならずして、造營の功をたてらる、金殿玉樓天にかゞやき、畵棟朱簾地に映せり、神事は六月十五日也、江戸中の大神事として、諸大名衆大かた產土神にておわしませば、〳〵おろかならず、いづれももてはやし給ふ、誠に大造の神祭なればとて、隔年に取おこなわるゝ也、

水無月は山王祭垂箘(たれこ)ても
　　さあらばひやを切麥にせよ

此御神の祠者、猿なりときゝて、旅の男、
　よしあしも見ざるきかざるいはざるや
　　かまはざるにはまさる事なし

扨も此程は、遠くもめぐりきぬる物かな、そなたの道しるべならでは、かくこま〴〵とは見まじきものを、是とてもをのづから神慮にかなひけるかとおもへりとて、旅の男よろこびければ、われもそなたの思ひ立ならずは、いかでひとりしては見めぐらんや、其方のかげにてこそあれと、互によろこび宮めぐりして、八角堂のうしろゑんにやすみ居て、近邊を見渡すに、溜池の水すみて、赤坂の民家にぎにぎしくうち見へ、右の方に紀伊國坂、左には麻布の榎木坂、今井の邊迄見ゆる、爰に安藝の太守の屋敷地高くして築立たる、城山のごとくに見ゆる、いかさまにも故有地成べしとおもひ、かたへの人にたづねければ、いかにも尤なる御ふしんかな、あの地は古跡にて御座候、むかし今井の四郎兼平、爰の今井に有しときの居城の跡にて候よし、古老の申つたへて候といへり、扨はよくも尋ね侍るよと云て、山の麓をめぐり見るに、社僧の坊舎數十ヶ所、溜池のはたに作りならべられて、いづれも庭の景をのづからの泉水と成、色々の花、さま〴〵のときわ木をうへをきければ、四季共にすてがたき庭共なり、取わけ夏の涼しさ、又よそにならぶる所なし、禰宜かんなぎの家居是も數十ヶならべり、本社へ參る右は神主日吉大膳、左は別當勸理院也、社領千石御寄附也、扨黑門へかゝりて出るに、右の方は奥州二本松の太守の屋形也、此書院より西南を見れば、山王の社、溜池の水に移り、赤坂民家迄見へて、又有べき景席ならず、去間寛文十二辛亥年五月下旬、此所へ弘文院春齋をまねき給へる折節、硯を乞筆染て、

夏日應₂丹羽拾遺之招₁賦₂庭前即景₁

賓筵禮畢到₂斜陽₁　日吉新宮隔₂水望₁
二本松堅千里綠　森々夏木一庭牆

同席賦₂晩景₁

南薫風袂揚　綠樹幾千章
遮莫外邊熱　一樓五月凉

弘文學士

かくのごとく絶景をかんじ、作意有つると也、

第十二　霞　關

それより歸る程に、名にしきこへたる霞關に着たり、されば續千載集春の部上に、前大納言爲世、

おなじくは空に霞の關もがな
雲路の雁をしばしとゞめん

春くるゝ行衞いづくとしらね共
空に霞の關やすへまし
扨爰にも藝州の太守の屋敷有、是も古跡にて、齋藤別當實盛が城跡なりと云つたふ、爰より櫻田御門を見渡して、
名にしあふ花のお江戶の櫻田や
霞が關も戶ざゝざる御代
一天四海まつたいらかにおさまりし
御代にも生れあふぞうれしき

增補江戶𠺕卷第六終

跋

斯て宿所に歸り明日は古鄕へ歸るべきとて支度しければ年久く馴なじみたる近隣の人々暇乞の爲とて酒肴を持參して云樣は扨も久々馴なじみを引別れ申さんこそ御名殘惜けれ御緣もあらば又こそ御めに掛るべし夫につきて此程見めぐり給ふ所々を定めて書留給ふべし我々も所には住候へ共世渡る業に取紛て空しく打過候也且は置土產且は形見とも存候べし御貸給はれ寫置候はんと乞程に仰の如く各にも細には御存候はじ其上我々も古鄕への土產と此度存立候然れば何方にても古鄕へ歸る人々は望ましくや有ぬべしと是を各記留て故鄕歸の江戶𠺕と表題して世に弘められ候へかし我々計しりて箱の底に空く入置なん事もほいなし能ぞ望み給ふもの哉何れの道にも人に教ゆるゆゑんの墨の跡永からんこそすなほ成べけれとて投出して寫さしむ扨持參の酒肴の口を開き隔てぬ中の戯は面白や諸共に近くへよりて語らんと唄ひ初め舞ふつ歌ふつ飲みあかして相生の松風颯々の聲ぞ樂しむと謠ひ收めて兩人は故鄕へこそ歸りけれ、

京童序

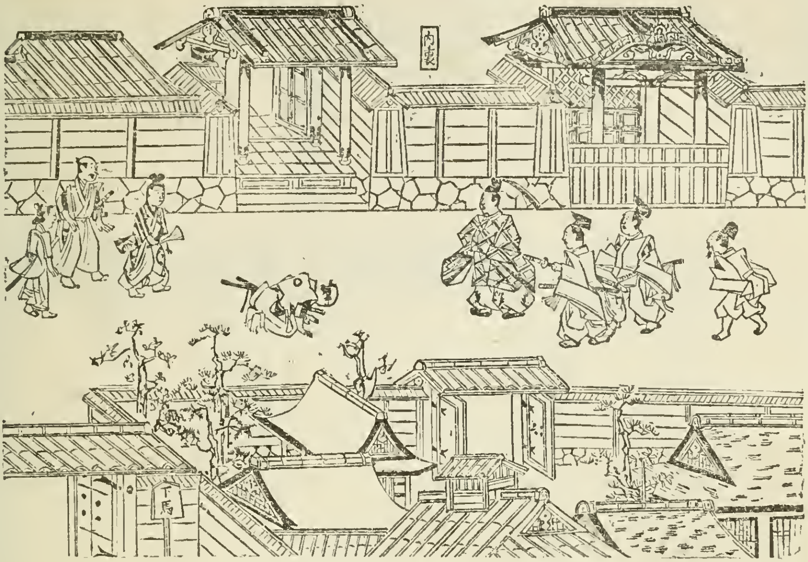
としは十のあまり四五の大きさして、居とつまさきのあかき、是なむ都人にいざことゝはん、そも〳〵やつがれは、丹波の國馬路といふ村にそだち、牛の角もじさへ知らず、無下にかたくなゝり、椋の木のもとにて榎の實を拾しと、友どちいざみあひしこそおろかにつたなけれ、年たくるまで、絲竹のあそびといふは魚釣竿の事とおもひ、なべとり公家といひなすは、筑摩の神の末々かとあやまり心うるこそあさましけれ、しらざるをしらずとして、しれる人にうかゞひしらまほしき事なり、けふは是にしてきのふの非をさとすはいかにや、鮑魚の肆を出て芝蘭の室をたづねんと、いとままうけて花洛にまかり、甘艸と黃耆をかみわけたる門にいりて、病のおこりをかんがみれば、きるにかたく、ちびたる杵とへらぬ槌の月なみある扉をならし、滑稽の事にたづさはれば、あふぐにたかし、さればふかき井の道は、水底くむに手たらず、とをき和歌の浦は、見渡すにまなこをよばず、いづれのわざに身をそめ月をおくりしとやかこたん、せめて古鄕のつとに、見ぬ京物語はほいあらじ、仁和寺の法師のひとり岩淸水にまうでつる事のあやしく、今少年のさかしきにあないさせて、九重の外まで見めぐり、鳳闕のめでたきつくり、神社佛閣のかたちをゑがき、來歷をしるしてよといへば、杜撰のことなりといなびながら、相如は上林を賦して盧橘夏熟する事を引、班固は西都を賦して比目を出す事あり、これみな文をかざりて、そのまことあるをしらずとなり、所謂鬼はあらはしやすく狗はうつしがたし、今黃吻ねがはくは、詞の花をかざらず、その根を求ん、所々まいりてとう下向めされ、とがをばいちやがおはんとたはぶれて、筆をはしらしむる、よりて此草藁を京童と名づく、文章のおろかなるは渠が年に罪をゆづり、事のあやまれるは予が僻耳のなす、穴かしこからぬに、ゆるされをかふむらむ、

京童目録

京童巻第一

○内裏

今のだいりは、人皇五十代桓武天皇の御時、延暦十三年甲戌に、長岡の都を、此平安城にうつさせ給へる也、明暦四年戊戌まで八百六十五年になるなり、人皇のはじめ神武天皇より、今上皇帝は百十三代に當らせたまへる也、禁闕のみありさまは、玉殿金門みがきたて、四つの時々名にしおふ、まづ春をしる梅つぼや、梨つぼ藤つぼ仙花門、夏は御帳もかたびらや、雲井のよそにきゝもらす、かんなりのつぼふく風も、かほりてかよふうちはし渡殿清涼殿、秋は千尋のかげに求食(あさる)、鳥もすむなる桐壺や、七重八重げに九重の萩の戸に、露のうてなのあたゝめ酒、冬は殘れる菊の宴、朝餉のゐのこの餅、豊のあかりの節會の舞、内侍所のみかぐらや、なやらふよるのぎしきなど、公事殿(おほやけごとの)づくり、おもひをくりおしはかり、六口の門の下馬のふだに、はいくわいするこそゆゝしけれ、山林の賢人も出てつかへ、生草をふまぬけだものはきそひて遊



び、國富み民豊なるも、ひとへに聖君の徳のうるほすなり、なを久方のそらながく、あらがねの土ひさしからんためし、世は住吉の名にひとしく、よはひは高砂の十かへる松、千代に八千代にさゞれいしのをび、かんふりのかけ緒のいとゞのどかに右往左往（ひらりしやらり）、

大内はゑぼしさくらや花の袖

○下御靈（しもごれう）附くわんおん

當社は八所なり、第一きびのだいじん、第二崇道天皇、光仁の御子早良親王、第三いよの親王崇道天皇の御子なり、第四藤原太夫人いよの王母なり、第五藤大夫藤原の廣嗣也、宇合の子なり、第六橘大夫逸勢なり、恒平の子、第七文大夫文屋の宮田丸也、第八火雷の天神北野の一躰也、日のみこと申て天神の御けんぞく也、すべて八所なり、祭は八月十八日なり、内裏南門のうちまで神輿をふり奉るなり、此御やしろは、いにしへ八月、洪水の事ありし時、上ごれうのほこらながれて、今の御靈の町といふにとゞまる、そのほこらを南禪寺の僧にまもらせ、こゝにうつし奉るなり、神は人のうやまふによりて威をまし、人は神の徳によりて運をそふ、かたじけなくも此御神は、やんごとなき御かたも、あまた御氏子にもたせおはします也、

枝〳〵の花もやかみと下御靈

又おくに觀音まします、これは惠心の作なり、

〇誓願寺

當寺は天智天皇の御建立にて、ならの京にありしを、桓武天皇の御時、此京にうつしたまひしなり、本尊の阿彌陀は、春日大明神、賢問子芥子國といふ父子の人に、御かたちを化現したまひ、つくらせたまへるなり、此御寺むかしは小川にあり、今もとせいぐわんじといふ所なり、しかるを豐臣關白聚樂の城をつくらせたまへる時、此ところにうつされしなり、堂の再興は、佐々木京極殿の息女、豐臣公の北の方、松の丸殿の祈願なり、六字名號の額は、一遍上人あそばされ給ふなり、今も遊行上人廻國の時、此御寺に一七日ましますなり、再興大施主の額は、大かくじくうしん親王ずいあんの御筆なり、さて又堂の南のかたの塔の本尊は藥師如來なり、鎭守は春日大明神なり、此御やしろの前なる紅梅は、未開紅と申なり、此花の色は、いまだ開けざる時、くれなゐ深くうるはしきゆへの名なり、としぐ〜の春ごとに、都部の人のまうでて詩歌なご侍るなり、折からちりすぎたるけしき、いかがみそらしたまはんやといへば、

紅梅を紫雲や奪ふ寺の庭

又云、清原の元輔のむすめ清少納言も、このところにはふむり侍る、されども時うつり事さり、跡とふゆかりも稀なるにや、この墓所しる人なし、當寺のゑんぎに清信女とある、これすなはち清少納言なり、

〇和泉式部

是なるは和泉式部の古墳なり、此人は一條院のきさき上東門院の女中なり、父は大江の雅致、母は越中守保衡のむすめ、夫は和泉守道貞なり、さるによりて和泉式部といふなり、小式部が母なり、やまとうたの



道ひろく學び、よめることの葉あまたある中に、拾遺集第廿に、性空上人のもとへよみてつかはしける、

くらきよりくらき道にぞいりぬべき
はるかにてらせ山の端の月

此作者和泉式部なり、中納言定家小倉の山庄の百人かずにもいれられ侍る、まことにあらざらんこの世の外のせつなる心、さもあらんことはりに、今も袖をぬらし侍る、名は朽ぬならひにて、末の世にとゞめ、かくは土にうづみぬれば、いかなるおもかげなりつるぞよとなつかしく、いま一たびの逢ふよしもがなと、おきあまる露は塚をうらむるなみだにこそ、

花をたてたむくる和泉しきみ哉

和泉式部命日は十八日也、

○腹帶の地藏

寺號を淸帶寺といふなり、此地藏は土佛にて行基の御作なり、いにしへは新町通下立賣下る腹帶の町といふにありしを、爰にうつしたてまつる也、此地藏菩薩は、懷妊の女人平產をまもらせたまへるによりて、女性のぐわんに帶をかくるゆへ、腹帶の地藏と申也、いつの頃誰人なるらん、此地藏にまうでゝ、

露の影や身二つになるこもち月

此句を昔より小耳にもち侍れば、その作者には遙におくれながら、われも狂歌を、

はら帶をむすび句にしる作者より
この歌よむはのちのものなり

もろこしの白居易は、詩をつゞりて賤き老女にきかせ、作意をさだめぬるといへば、今われも身におはぬたとへ事ながら、此狂歌も、とりあげ祖母(ばゞ)になりとも、あはれやすく〳〵と聞うけさせたき事なり、

○たこやくし

寺號を永福寺と申なり、そも〳〵此藥師如來は、からうすのつぼなり、昔たこやといふものあり、夜な〳〵家のすみより光さす、あやしみしたひみるに、からうすのある所なり、そのあたり光りさすべき物外になし、ふしぎに思ひ、碓(からうす)のつぼをほりてみれば、其石に藥師の御形あるなり、奇異の思ひにありがたくあんぢせるとぞ、されば蛸やのなにがしとかやの家におはしますゆへ、蛸藥師と申なり、又一說にひえの山の僧のもてる抹香はたくうすとも云り、この僧の母、寺の内にやしなへり、ある時母病にふさしむ頃、蛸を好

みけるに、もとより僧のもとめに叶ひがたく、されども孟宗が雪のうちの竹の子もあれば、いかゞして母の願を叶へんと、かたへの人を頼みて、蛸を求めぬれども、魚肉寺門に持入ならず、いかゞせんとあんじゐるに、よその目をつゝむは科あり、さら〳〵かくすべきにあらず、老母の病に願へるところなり、佛神も罪ゆるし給はんや、人のとがめあらば、ことはりをつくさんと思ひ、蛸の形をあらはしながら門を入りぬるに、かの抹香はたくうすより、藥師如來のあらはれ給ひ、此蛸をよそのめには經の卷物と見せしめ給へば、さらに人のとがめもなく寺にいり、母のねがひ事をかなへ、病をいやせり、ありがたし〳〵、さればその藥師をあんぢせるゆへ、蛸藥師と申ともいへり、

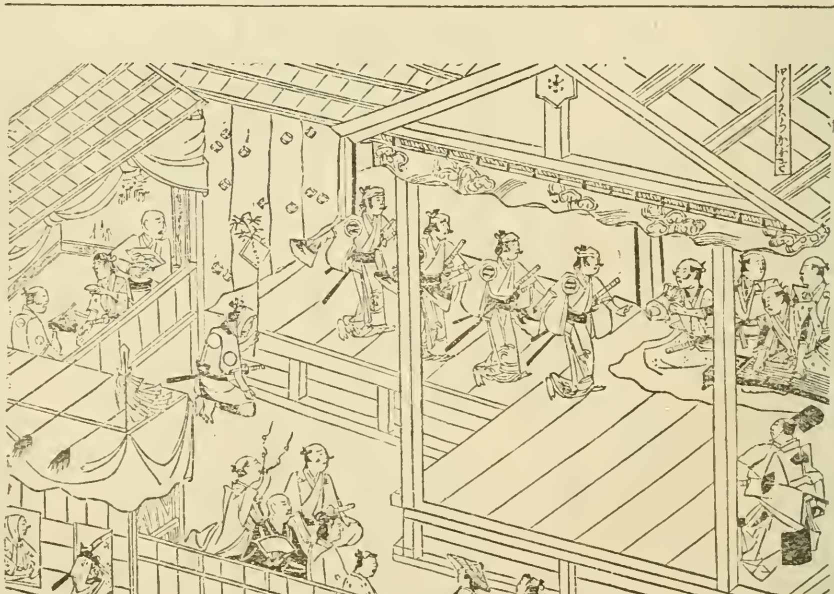
たむけなば八手の花やたこやくし

○四條河原

みぎりの鼠戸をみれば、猫せなかなるおのこあり、左の矢倉をながむれば、鑓おとがいの奴あり、見物の男女老たる若き、或ははたのそりたる伊せあみがさをかぶり、かとりのうすもの身にまとふもあり、或はこつま木綿を羽織にして、うちぬきの紙小はらわた出すもあり、そも〳〵かぶきといふは、出雲神子(みこ)の舞をまなびそめし也、このみこ、佛號を唱へ鉦をならし、念佛踊りせし後、又刀をよこたへ、男の裝束にて歌舞す、それをかぶきといひなしきたれる也、昔は白き水干にさうまきさして烏帽子を引いれ、今やうをうたひ、白拍子の舞しなり、これを男舞ともいにしへはいひしとぞ、いつの比までか、此所にてもたはれめどもの舞しに、みな人六根をなやまし、心を六塵にとらかし、たからをなげうち、あるは父母の養をかへりみず、あるはこもちがりんきもいとはず、くる日もこぬ夜も、心はこゝに置きて、かたちはくらの錢箱をたゝく、限りあるたからに、盡なきたはふれを好み、親をしのび妻をはかれども、阿漕が浦にひく網の、目も繁ければあらはるゝ、されば國のさまたげ民のわづらひ止事なしと、所司代よりうかれめの歌舞妓を法度せらるゝ也、その後少年をうるはしくおふしたて、若衆歌舞妓をはじむ、もとより若道のたはふれなきにあらねば、また〳〵魄をかれに奪はれ、食すれどもその味を知らず、且股とかいなの敵ともなれり、あるひは若き女は、これらの美少年に嫁ん事をねがふか、愛

染の弓に矢いれをぬからぬなり、いはんや諸寺の僧、えたりやおふと、ふせの豆いたは芝居の札せんと定め、祠堂の丁銀はしなせぶりのまいらせものとなす、つけざしの盃の光は秋ならずしてめでたく、舞臺への花の枝は春にあらずしておかし、金襴の袈裟は太刀かたなの袋におくり、もじの衣は新發意太皷の狂言師にゆづる、されば遂に住つく寺もひらき、一本のからかさにて日本をめぐり、一鉢のまうけに飢をおぎなひ、難行苦行さらに戀の山なり、豈肛門をおかすも善心をけがすにあらずや、もろこしにも此道を栽尾といひて、ある事にはあめれど、心ざしひとしくしてなさけたがへり、東坡が李節推をしたひて風水洞におもむき、騎馬少年清且婉とつゞるは、まことに人倫の交り淺からず、思へば〳〵ありがたし、又此日の本の阿闍梨眞雅は、ときはの山の岩つゝじ、いはねばこそとつらね、業平少年におくられしも、ひとつおもひによりて也、されば詩をたつきとして親しみ、歌をかごとにて交はるは、義もふかく禮もたゞしく、しかも信ありて契り久しからん、其ためしをいはゞ、主君にかしづかるゝ少人は、二世をはなれず死出の山路の跡追ふあり、などやかぶきの少年の、黄金のはたへをなでさせ、如來肌をよせて、たとひ命をちぎるとも、末の頼まるゝものにはあらねど、人の心はことにふれて移るものなれば、槿花を愛すまじきにもあらず、まして色にはそみやすく、たからを費し身を破るも知らぬならひなれば、かゝる若衆歌舞妓もあらぬにはしかじと、仁道をもてこれもいつしか停止せらるゝなり、されば今は若年のものも、額のかざりをとらしめ、うるさき形也、うちあるさまをみれば、小人島とやらん云異國のものは、かくやあらんと思はるる、しかしさはいへど、三ぼうもてなし、しんはしやうごんよりおこるなり、樂屋入の衣紋つき、笠の内ゆかしからぬにはあらず、しれるかたなど目をあはせ、すこし笑(ゑめ)るはさらに憎からず、それより跡を慕ひて、君を樂屋のかたに見送り、われは棧敷にのぼれば、程なく橋がゝりに出らるゝ姿、又あるべきものとも思はれず、芝居より御らいかうとほむるもうれし、われ〳〵も聲をあはせて、たれの御作ぞといはまほしけれど、さながらおもてはちかはしくえもいはず、まことにおぼしきこといはぬは腹ふくるゝわざな

り、やがてまひ終りて幕のうちにひきこみ、かづらをかけながら額の綿も置きながら、踊りのさうぞくもやつさずして、さじきへとぶらひきませるこそ、またまたうれしきものなれ、うしろのかたなどにつゐ居けるを、すだれのかたへといへば、あまたのみる目、苦しからぬかはと、こなたの事をいとへるもいとし、あとより又、百會を頭巾にてかくしたる少年の、ところせきまで集まれるもなをなさけふかし、盃のうへかろしなどたはふれて、細き手くびをおさふれば、こぼるゝばかりうけしもやさしく思はるゝに、つゆ飲める風情にて、殘をたまはるこゝろいれこそありがたきものなれ、かゝるおりふしは、下戸もなく飲酒戒もなし、あるはまた少年の盃をうけもてるうちに、あのながれは誰れかあるじならん、われえまくほしと、こゝろのうちやすからぬに、思はぬかたに移るもうらやまし、あるときは、奥深き寺などかりもとめ、夜すがら打向ひ酒たうべたるも、うき世を忘るゝものなり、かなたこなたと時うつり、さらばといへるに名殘惜しく、耻かしながらも袂にすがりとゞむれば、さすがつれなくあらざれば、心弱くもたちかへる、なを



これ輪廻の迷ひなれど、よしや未來は奈落に沈まばしづめ、いかなる閻魔王さうづ川のうばも、この少年をみるならば、婆婆ふく風もこひしからん、十目の見るところ十手のさすところ、それいつくしいかな、おはぐろつける口もと、べにさせるつまさき、女とも見えつ男なりけり、なりふりのありさま見ればなつかしや、われながらなつかしきや、ぼうしかづける額つきは、しぼめる花の色なうて匂ひのこり、ありがたの寺のかねも、こん〳〵とならし、とりも八ころをつくれば、腹だちやつらにくや、けふもいりあひに花ちり、かぶきははてにけり、見しまひはやぶれうせにけり、

すみぞめのさくらはありと何かせん
　おはぐろつける花のくちもと

一、淨瑠璃と云事は、牛若と淨瑠璃御前の事を、十二段にふしをつけ語りしを、則其物の名になりて淨瑠璃と云、是今の世に語る淨瑠璃のはじまりなり、彼淨瑠璃御前は、藥師如來のまうし子なりし故、淨瑠璃と名づけられしと也、

〇目やみの地藏附桂橋寺の觀音の事

爰の觀音は桂橋寺と申て、昔は淸水のほとりにありしを、いにしへ大水に寺くづれたりしまゝ、此所にかりに觀音をうつし奉る也、寺は桂の橋ばしらと、ゆやにうたふも、これすなはち桂橋寺の事なり、しかるに此目やみの地藏と申は、知恩院の前なる畠中よりほり出し、此所にあんぢしける也、されば御かたちに鋤鍬をあたらせたまへるあとあり、眼裏を土くれのうづみたるをきよめけるとて、かくたゞらかしたる御目もとを、俗に目やみの地藏と申なり、千手の御事はいひ出る人も稀にして、地藏ぼさつのあられぬ御名、世にひろまり侍るなり、いま觀音と地藏とあひ住しておはしますに、狂歌、

あひ住にすめる地藏と觀世音
　しよせん此世はかりの宿なり

〇祇園

當社は伊弉諾伊弉册のみことの御子、そさのをのみことなり、此みこと出雲の國にて、手摩乳足摩乳のむすめ稻田姬とかたらはせ給はんとて、八岐の大蛇を平らげ給へるに、おろち尾より八色の雲出、名劍をとらしめ給ふ、これをあまのむら雲の劍と申、三種の神

器の其一つ也、みこと稻田姫とすませたまひけるに、

八雲たついづも八重がきつまごめに
やへがきつくるそのやへがきを

是三十一字の詠歌のはじめなり、されば敷島の道に心をよせん人は、猶あふぐべき御神なり、淸和天皇の御時貞觀十一年、御託宣ありて此地にうつし奉る、牛頭天皇とも申、武答天神とも申なり、此みこと南海の女子にかよひたまひし時、日くれぬれば宿をかりたまはんとおぼしめすに、蘇民將來(そみんしやうらい)といひ巨旦將來(こたんしやうらい)といふ兄弟あり、このかみの蘇民は貧しく、おとうとの巨旦は富めり、こたんに宿をかりたまはんとおほせらるゝに、こたんかし奉らず、みこと遺恨におぼしめし、その後巨旦を殺させたまへるなり、今金神のかたといひていむ事は、此巨旦將來の精魂なり、されば人を殺さんと思ふ鬼神の靈魂なり、恐るべし〳〵、さて又蘇民將來は、家まづしけれ共、みことに宿をかし奉り、粟の供御をそなへけるとなり、さればそのゆへをもて、六月十四日のまつりに、四條京極にて粟の神供をそなへ奉る也、蘇民御宿をかし奉るその御報恩に、天下疫癘の事あれども、そみん子孫は除かせ給ひぬる、其しるしに、ちがやの輪とちいさき札を衣の肩にかけさせよと仰せらるゝ故、すなはち蘇民將來子孫とある小札、幼少のものゝ襟にかけ、大人のまもりにいるゝなり、今神前にて杉の葉と小さき札をうけ、みどり子の守にかくるこれ也、さて當社は三座なり、第一そさのをのみこと(牛頭天皇とも申、武答天神とも申也、)第二はり女(少將井是也、すなはちいなだ姫也、又娑竭羅龍王とも申す也、)第三やまたのおろち、又八王子おはします、これはり女の御はらなり、年のはじめに歳德の御神と申もこのはり女なり、へうびわうばんなごと申奉るも、八王子のうちにてましますなり、へうびと申は本地三ぼう荒神なり、わうばんと申は本地勝軍菩薩なり、その外の六神本地藥師如來あり、盤古王の化身あり、本地觀自在あり、本地毘沙門あり、本地龍樹菩薩あり、本地千手觀音あり、以上八將神なり、本社の西の方の堂は藥師なり、感神院のがく、こんぽん此藥師の寺にありたる額なり、又當社にぐわんざん大師の尊像もあり、

神前にやへ垣かその八重櫻

○知恩院

當寺は法然上人のおはしましたる也、此上人は、美作

の國いなをかといふ所にて生れ給ふなり、漆間氏なり、父は時國と申、母は秦氏の娘なり、しばらく子なかりけるをわびしく思ひ、父母佛神に子をいのられし、ある夜の母の夢に、かみそりを呑むとみて夢さめ、夫の時國にかたられければ、時國きゝ、やがて懐妊の事あらんとあるに、少しもたがはず、胎内重くなりて、長承二年四月七日に、此上人となりし人をうめり、此みどりご、かしらくぼくしてかどあり、まなこ黄にして光あり、いかさまたゞならぬうまれつき也、母懐妊のうちは、魚肉鳥類五辛もちひずして、しやうじんなりといへり、此男子十五歳のとき、延暦寺功徳院の皇圓をたのみ得度せらるゝ也、天台の教を學びてのち、黒谷のゐいくうに從ひ、源信の往生要集を見られ、所業をすてゝ淨土宗を唱へ、承安四年に黒谷をいで、このところにすませたまふ、しかるに相國兼實公、淨土の事をとはせたまへば、すなはち選擇集をつくりて與へたまふなり、建暦二年正月二十五日午のときに、高く彌陀の名號を唱へ、頭北面西にして終らせたまふ、年八十なり、又こゝを大谷寺ともいふなり、

色を避けいまもたつとき僧たちの
　大こくじとはえびすごゝろか

一笑〱すゝ御めんなれ、

○圓山

此圓山は寺號安養寺といふ也、時宗なれども、遊行上人の末寺にはあらず、當寺は都人ことに心なぐさむかたなり、爰なる池は吉水といふ、かの吉水の和尚といふ、此所にすみ給ひしなり、是慈鎭和尚の事、またまくづが原といふ名所此山下にあり、

我戀は松をしぐれのそめかねて
　まくづがはらに風さはぐなり

是慈鎭和尚の歌なり、我も恐れながら、此本歌の傚をけがして、

我こひはまゝのでくるをまちかねて
　ひもじなはらに蟲さはぐなり

○長樂寺

當寺は、ていしゐんの御建立、本尊は觀音にてましますなり、高倉の院の后建禮門院、平家滅亡の後、此寺にいらせ給ひ御出家ありし時、安徳天皇の御衣などを遺はされしを、御はだにぬひて、今此寺の什物なり、

花にきてまふやあげはの長樂寺

○將軍塚

將軍塚といふは、桓武天皇の御時、此京の守護神とし
て、八尺の土偶人をつくり、くろがねの甲冑をきせ、



くろがねのゆみ矢をもたせ、面躰西に向はせたゝせ
て、この山上にうづませたまへるなり、天下禍あると
きは震動する也、

目くぎ穴うちおさまれる御代なれば
　つかはなか〳〵なる事もなし

○双林寺

此寺は國阿上人のすませたまひしゆへ、靈山と本寺
末寺の爭ひありて、さいつころ公方へうたへの事あ
り、双論なにとわかちたるもしらず、平判官入道康頼
流罪しやめんありて、鬼界が島より歸洛の後、この寺
にこもりゐて、ほうぶつしうといふさうしをつくり
しなり、すなはち康頼石塔此所にあり、

松と花と祇園に双ぶ林哉

又西行法師石塔此所にあり、命日は十四日なり、

○八坂かうだいじあたづか

南をさして行くに、弓手のかたはかうだいじ、此寺は
豐臣公の北の方政所御建立也、めてのかたはあたづ
か、此所にて遠矢を射るなり、八坂の寺はほうくわん
じと號す、聖德太子の御草創なり、天曆のころ雲居寺
の淨藏此寺にきたり、塔の王城のかたへかたぶくを
みて、それ塔のかたぶくは其方に惡事あるずいさう
なりとて、その夜祈らるゝに、西北より風吹て出、塔
婆をゆるがし寶鐸こゑをなして、あしたにみれば、塔
婆まろくになれり、奇妙ふしぎ、みな人隨喜の涙袂を
ひたす、又淨藏此寺に有ける夜、ぬす人數十人來る

に、淨藏いのる聲すと聞くに、其まゝ盜賊の身枯木のごとくになりて、たちすくみにして、しか〳〵ものいふ事もえせず、奇妙なる事おほし、又賀茂川の水を祈られければ、さかさまに流れしとなり、しかれば此塔は五重なるに、

花のさかり塔にあやかれ五十日

○靈山

此山は國阿上人のすませたまひし所なり、此上人は、伊勢太神宮へあしだにて日參ありしなり、あるとき參宮の道中に、女の死にたるありしに、此屍骸をはふむりたまひけり、さればそのけがれにて參宮いかゞとおぼしめさるゝに、かの死人は、天照太神の化したまひ、上人の慈悲慳貪をためしたまはんためなれば、もとよりくるしからぬと、神の御つげありて、それよりすぐに參宮あり、さるによりて京まはりの人々は、參宮の時、まへ日に此國阿にまいりぬればいみをのがるゝにより、末の代までのためしになれる也、國阿上人そのときの杖あしだ、今も此山の靈寶にてあるなり、またはぶつの阿彌陀と中も此所にあり、寺より都のかたをながむる景なゝめならず、まことに千里一瞬なり、

齒佛もや花にはにこと笑顔

○さんねん坂又さんれい坂共云

こゝをさんねん坂といふは大同三年に引ならしたるゆへ三年坂といふなりともいへり、又こやすの塔に續きたる坂なるゆへ、產寧坂といふともいへり、產はうむとよみ寧はやすきとよむ、いづれのせつも一理は侍るなり、かやうの事はじやうのこはきかたのかちたるべし、

尼といひびくにといへばこのさかの

名はかはるともなしやありのみ

○泰產寺こやす共云也

もろこし人の鷹すゆる方をみればうばだうなり、又日のもとの人の鷹すゆるかたみれば經かくだう也、くるまやどりむまとゞめ、そも〳〵こやすの塔は、たむら丸の御娘懷姙の時、御平產のいのりに建立ありし也、御本尊は觀音菩薩なり、丹州老の坂に子安の塔あり、是は地藏菩薩なり、それをこゝろえ此塔も地藏かと拜みしはあやまりにこそ侍れ、まことに子安の觀音ときけば、一しほ有がたし、人にはえかたらぬわ

が心のうちにたのみたてまつる事有ければ、ねんごろにぬかづきたてまつる折から、いづこの人なるらん、つもる年十九かはたちかと思はるゝうるはしきよそほひしたる女性の、顔ふかくかくして、幾たびとなくくりかへし〳〵拜み、下女をめしてわに口の緒をならせらるゝは、まことに心のうちおしはかりなどまいらせらるゝは、われとおなじねがひ事なるべしとおもはるゝに、なをなつかしく、わが身の祈りよりも、此人のねがひはたしかにうけさせ給へかしと思はるゝ、これにつけても、よろづの事を人のわかちせずして、いづれの道にもよそを憐み、我身をなりしだいと思はゞ、道にそむかず、をのづからめぐみありて、ねがひごと祈らずとても天より與へ給はんに、大かた人は我慢にたかぶり、人を救はず我身をたてんとするなり、今わが心に、女性のねがひをわが祈りよりよくうけさせたまへかしと思ふも、これわが身をおもふひが事也、

山の腰抱やこやすの花の雲

京童卷第一終

京童卷第二

〇淸水寺

朝くらだう田村堂を行て本堂にいたる、それ當寺は、沙彌えんちん寶龜九年四月に、夢みる事あるにより淀川に出てみらるれば、水に金色の一すぢあり、ゑんちんふしぎのおもひをなし、みなかみを尋ねもとむれば、瀧のもとにきたる、一つの草の庵あり、うちに白衣の老翁あり、名を問へばぎやうゑいといへり、すでに二百歲もてる千手の像あり、これをゑんちんに與へ、ぎやうゑいは東州におもむけり、その時ぎやうゑい、ゑんちんにのたまへるは、我やがて歸らん、そのほどは此草庵にすみ、又遲く歸らばわれをまたずして、千手の御寺をたつべしとのたまひ、東州に去りたまふ、その後ゑんちん、ぎやうゑいを待ちかね、山科のほとりに出らるゝに、ぎやうゑいの御沓あり、疑ふ所もなくかのぎやうゑいは觀音菩薩の化現なるべしと、沓をとりてかへり、その跡を示し給へる也、延曆十七年に將軍坂上の田村丸鹿狩して此草庵にわけ

入、ゐんちんにあひ給ひ、しか〳〵の事を聞給ひて有がたくおぼし、大同二年に御草創ありし御寺也、又地主權現はすなはち清水寺の鎭守なり、本地は文殊菩薩なり、祭四月九日にあり、音羽の瀧といふは、こゝと又ひえの山にもあり、音羽といふ名所、山城の内に三ところあり、古き歌に、

古今
音羽山けさこえくればほとゝぎす
　梢はるかに今ぞなくなる　紀友則

新後撰
瀧津瀬におちそふ水の音羽川
　せくかたもなき五月雨の比　爲氏

右兩首清水の音羽の歌なり、

古今
ひえの山なる音羽の瀧をみて
おち瀧津たきの水上としつもり
　老にけらしな黑き筋なし　忠岑

山科の音羽の歌

山科の音羽の川のさよちどり
　及ばぬ跡に音をのみぞ鳴く　權中納言公雅

千手のちかひには、かれたる木にも花さき、たゞたのめの御誓願、咒咀諸毒藥所欲害身者念彼觀音力還着於本人ときけば、わが眼疾のあらん限りは、大慈大悲の御ちからにうさしてたび給へと、

いのるまなこ慈悲をぞま千手觀音の花

○六はら

大谷の藤のおぼつかなき、鳥部山のあはれなる、そとは思ひやるも心ぼそし、犬の聲もけうとくきこゆれば、立かへり六道のあはれなるをながめやり、南無地藏ぼさつ又は閻魔と伏拜み、六波羅にまうでぬる、此觀音は湛慶作なり、又平家淨海木像あり、又東のかたに空也上人の像あり、鹿の角をもてり、此鹿角をもた



せ申事は、むかし空也のつれ〴〵をとひ慰めし鹿あり、ひとひふつか見えざる事ありしを、いかゞと獵するものにたづねたまへば、かり人の手にかゝり、かの鹿むなしくなるといふ、空也なげかしくおぼして、その角をこひたまひ、また獵師をもしめしたまふにより て、その後佛道に赴きしとなり、今の鉢叩き、かの獵師のながれといふなり、うへの衣はさるごろもといふ、はじめにあらはす如く、當寺の尊像湛慶作なれば、

火をともしさくやたんけい花の枝

〇豐國

こゝは公方太閤秀吉公を大明神に祝ひ奉る御社也、豐國大明神の額は後陽成院の御宸翰なり、いにしへはいときらゝかにして、宮守も袖をつらね、朝ぎよめ夕のともし火かゝげたてしに、今は露ふせぐたよりだになく朽はて、鳥居は倒れてむぐらにかくれ、まことに一たびは榮へ一たびは衰ふ世のならひうらめし、天が下しろしめす御身にだにかゝることはりあれば、數ならぬ身のすぐせ怨みがたし、社頭に言問ふものとては、あしたの露夕の嵐、はかなきためし見るにつきずしてわびし、櫻も風ならではおとなはず、月も千種の虫ならでは言問はず、あはれ昔は諸侍駒の轡むしをならしてまうでつるに、いつしか蟷螂が斧のかひなく、今はかゝる草の下に足まとひとなり、末の思ひはきり〴〵す、いとゞさびしく身にしめば、たれこうろぎといひもあへず、はたをり蟲はありながら、しらゆふもたむけず、鈴蟲のこゑきけ共、かぐらの音せぬぞかなしき、

あはれとよくに民かてぬ山ざくら

〇大佛

此大佛は秀吉公御建立ありしが、程なく回祿し、御子秀賴再興ありつれども、開眼供養なかりしゆへか、しやかの鐺も鈍く、二王の固めも破れたり、又是なる塚の五輪は、秀吉公こまいくさの時切り取り給ひしかの國の人の耳を塚につきこめられしゆへ、耳塚といふ也、

みると聞とまよひをさくる大佛の
をしへにかなふ二王耳塚

〇三十三間

こゝは鳥羽院の御建立、平の忠盛奉行にて造營あり

し也、本尊は千手千躰也、此寺供養の日、導師衆病悉除身心安樂と唱へたまふに、其聲洛中にみてり、此時病に犯さるゝもの二萬三千人ありつるが、一時に平癒して、壽命長延をえたるゆへに、寺號を平癒寺といひ、院號を得長壽院といふ也、其後又後白河の法皇の御建立ありし、是も千手千躰なり、是を新千躰といひ蓮花王院と號せる也、さて又昔はなかりし事なるが、三十三間の堂のうしろのえんにて矢數をいるなり、ちやうまへといふは、一筋通すをのぞむなり、今他國にも此堂がたをうつし、弓とり共けいこをよんで、ここにのぼり矢數を射るなり、通り矢は堂見ありてしるしを引なり、もつとも摸陵の手なし、

ぬくるやうにくわんをんたのみたてまつる
矢にてはあらずわれはやまひを

○泉涌寺附いまくま野せいがんじ

此御寺は齊衡年中に左大臣緒嗣御建立なり、昔は仙人の遊びし所なれば仙遊寺といふなり、其後正法寺の俊芿上人宋朝より歸朝し、この寺の住持となり禪律の宗をはじめらるゝ也、かたへに靈水わき出るによりて、寺號の文字を改め、泉涌寺になせるなり、四條の院と申奉るみかどは、此上人の御さいたんといひつたへ侍る也、かのみかど崩御なされしを、此御寺に葬り奉つるによりて、それよりこのかた、崩御の御葬送この寺にておこなはる也、又かの足疾鬼が盜みし牙舍利、とりかへされて此御寺にあり、

風の手の花をぬすむや足疾鬼

花ぬすむ風に、いだてんゆかし、さて新熊野せいがんじの事は是にて語り申さむ、いまくまのは紀州熊野三所の權現を勸請あり、本地十一面觀音也、弘法大師の御作也、せいがんじは、佐伯きんゆき建立也、高倉院みさゝぎ此所にあり、又小督尼になりてのち此寺にありし也、

○御影堂

五條の石ばしより南をながむれば、融のおとゞちかのしほがまをうつしたまひ、六條河原の院今は煙だにたゝず、うらさびしくも見えわたるかな、とつらねられし歌のすがた、さながらとこそおぼゆれ、又はしづめの八幡宮、いとかう〳〵しく有がたし、それより此寺にまうでぬる、こゝに一遍上人の御影あり、昔は道心堅固なる女には、一遍かみそりをくだし、時宗の



法を授け給ひしに、いつの比よりかあやまり、當寺なごはめとるためしになりたり、法義は一遍のながれをうけつぎぬれ共、遊行の末寺にあらねばその咎めもなく、まして世の誹りもなければ、今改めぬはことはりにおぼゆる、程なくいつのまにやら螽(いなご)にあやかれるもめでたし、煩惱といふも菩提なり、悟れるうへにはさとりあり、迷へるうへには迷ひあり、もとより無一物、歌ふも舞ふも法の聲、折れる扇の拍子をとりて、歌はゞうたへ舞はゞまへ、釋迦のつまはやしゆだらによ、又此所に敦盛の由緒をかたれば、

扇さへ馬からおりてさゝるれば
　　こやあつもりのさいごなるらん

○いなば藥師

碓の音ごほ〱となれば、夕顔の宿はいづこにやとなつかしく、光源氏の惟光をめして一もと乞はせたまひしを、御隨身に白き扇のつまこがしたるにのせてまいらせつる、たそがれにほの〲見たまひし御車よせしも此あたり、遠くはあらじと、ゆかしきながら言問ひもせずして、藥師如來にまうでぬる、そもそも此如來は、因幡の國の海底より網にあがらせたまへる也、いとたうとくましませば、おろそかに安置すべき所なく、碁盤の上にうつし奉りし也、それを中納言行平、此都に傳へ奉れる也、されば網の目にかゝらせ給ひ、又碁盤の目を守りたまへば、いよ〱有がたく、わが目のわづらひもいやしてたうべよと、かけまくもかしこく祈り奉れば、如來の願むなしからず、やまひかつおこたりぬる比、過にし年、

又今狂歌、

露の玉は鈴はるやうの木目(このめ)かな

恭ばんなる藥師いのるに海よりも
　あげたる濱をよむやまと歌

〇新玉津島

此御神のやしろ、所をしれる人稀也、松原通烏丸西へ入町南がは、商人のうらにましますも也、其あたりにて尋ぬればまがふ事なし、是は紀州玉津島の明神を、五條の三位俊成卿此所に勸請也、かたじけなくも玉津島の明神は和歌の守神也、允恭天皇のきさき衣通姫をいはひ奉る也、

新續古今神祇
今こゝにうつすもたかき宮井かな
　もとの渚の玉つしま姫　權中納言雅緣

すきとほる霞の月や玉津島

〇五條の天神

此御やしろは少彦名命と申奉る、天下の萬物の病をおさめたまへる御神也、毎年せちぶんに、人みなまうでゝおけら餅などうくるは、病を除く例なり、もし又世の中騷動の事あれば、看督長(かどのをさ)のおひたる靭をかけられけるなり、

花もまだすくなひこなやをそざくら

〇本願寺

東西たがひに、天が下かくれなき威勢あらそひある事なれば、今われごときのいかゞ由來をいひ出んや、親鸞の御たゝりも恐ろしければ、とかくに口をふたぎて心のうちに、

根をとはゞ花や本來無東西

〇東寺

當寺の弘法大師尊像は、みづからきざませ給ひし也、御まへなる松を三鈷の松といふはいかゞぞや、三鈷の松といふは高野山にあり、此寺の松は獨鈷の松といふべき事也、高雄は五鈷なり、さてこゝの僧を長者といふなり、又勾當檢校などいふも高野山當寺の僧官なるを、いつのころよりか、めくら法師の官にももちゆ、むかし弘法大師守敏と祈りの爭ひありし時、互ひに决せず、されば弘法はかりごとにて、このしろといふ魚をやかせ、人の香を風にたぐへちらし、葬送の儀式あるに守敏心ゆるべ、さてこそ弘法入滅とたゆめるうちに、弘法いよ〳〵法力をつのらせたまひ、遂に守敏はあとなくなせり、まことに權者のはかりごとなをありがたし、

富にあかぬ長者や寺の花ざかり

○羅生門

大内裏の時の南門也、頼光の前にて、渡邊の綱と保昌あらそひて鬼平げんと、しるしの札をもて、綱のまかりしも爰也、むかし又都良香といふ人、氣はれては風新柳の髪をけづり、といふ句をもとめ、末の句いかゞあらんとあんじける時、此門を通り侍るに、門のうへより、氷きえては浪舊苔のひげをあらふとつぎたり、これこゝにすみし鬼神の句なり、

むぐら生ひてあれたる門のいにしへは
かりにも鬼のすだく息あひ

○西寺のしゆびん塚

これしゆびんの御寺の跡也、貫ける玉の數もかひなく、草深き野となり、嵐はげしく露の玉ちるばかりにて、今は守敏塚と名をいひ出す人もまれ〳〵也、

歌も詩も細字にかゝん花の友

○大通寺あま寺と云

此寺は坊門の内府のぶちか公の御娘、鎌倉の三代將軍實朝公の御臺所にておはしけるが、將軍身終らせたまひて後、御髻をおろし給ひ、この所に籠らせられしゆへ尼寺といふ也、二世に契りの通ふ故にや、大通寺共いふ也、いつぞや此所にて誰やらん、

ちるあとはげにあま寺や女郎花

○水やくし

清盛入道淨海熱病に犯されられし時、これなる水にて洗はれければ、こゝち涼しくなりしと也、まことにありがたき靈佛靈水也、先年此井の内よりわきあまる水に外の病を洗へば、いさぎよくいえたり、内のわづらひにのめば快くおこたる、その人々のまことをぬきんでゝ祈れば、すせうにありがたきためし多かりけり、猶あふぐべき如來にこそ、

胸にたく火けしてやぬるむ水やくし

○傾城町

昔は三筋町とて六條にありしを、十とせあなたよりこゝにうつされて、四壁にかこみ門外いづる事かなはねば籠鳥の如し、誠に秋來見レ月多二歸思一と雍陶が詩を思へる人はなきにや、さればひたすら色好みの若人は、朝な夕なあゆみをはこび、あひみることのうときにはあらじ、千里も咫尺なるべし、それ傾城傾國といふ出所は漢史に見えたり、李延年が歌に、北方有二佳人一、絶世而獨立、一顧傾二人城一、再顧傾二人國一、こ

れ傾城傾國といふ名のおこりなり、もろこしには虞氏楊貴妃王昭君などみなこれ傾城なり、本朝には鳥羽院の御時、島の千歳若の前、これ白拍子の根源なり、いにしへは室の泊三島江などにありて、舟路の旅人に愛せられしゆへ、流れの女ともいへり、今國々所所に遊君おほければ、いづこも美女に乏しからず、人間七十古來稀なる身に、誰か此たはぶれをなさゞらんや、身の後は金を堆（うづたかふ）して北斗をさゝふとも、生前一樽の酒にはしかじといへり、丹花の口もと芙蓉のまなじり、微渦（びくわ）はあさがほの露重げなるが如く、みどりの髪は楊柳の、きのふの春雨にさとそめられて、にほへる朝日かげうつり、たゆむばかりの東風おとづれて、行人したふに似たり、されば梅が香を櫻に匂はせ、柳が枝にさかせ、ほとゝぎすの聲そへ、ゆふべの月あしたの雪をこめたりとも、なぞらへがたからん、かくうるはしき形に溝葉（からえふ）の媒もたのまず、はこぶ錦木もいらず、わづかのたからをつかひとして逢みる事なるに、かの武藏のかみさよ衣といらへられ、艶書をなげかへされし折からに、かゝる遊君はみざるにや、叶はぬ戀にあこがれしなり、かばかりいみじきた



はれ女には、すこしき價をすてゝ鴛鴦のふすまの下に枕をつぎ、薰香ころもにあまし閨にみたする、まことに上品上生とやらんもよそならず、生ながらほとけとなり、郢曲をきけば妙音菩薩のようがうかと疑はる、今こゝにおもざしはみれどもその名をしらぬもあり、あるひは名はきゝ傳ふれどもその形をいまだ見ざるあれば、いづれあやめと引わづらひ、よそにのみ見てや止みなむ葛城の、神ならずしてよるのちぎりを、思ふうかれ女にしたしまぬは、すぐれておろかならし、され共よきほどにてやみがたきものなれば、一時の榮花に一生のなげきを招く、あすかの川の瀨の淺くながれになれぬるは、世のさがめもうすく、老鶴の子をおもふならひ、たかやすの里の二心をうらみぬ事なれば、憚の關もゆるすめれど、しのびの岡のはつ草も、いつしかしげくしげゝれば、終に主君に仕へず、親とさかひ妻とわかれ、身を巷にたゝしめて、先祖をよごしわれをさいなむ、末の松山波こえむと契りしも、忘らるゝ身となりてよそのながめになす、かく口惜しの身ながら、なを命は惜まるゝものにて、え死にもやらず、貪る心のみ深くなれり、無常に迫りたる身とはいへど、人ごと脆きにもあらねば、つれなき命にうきめみせんより、須臾の樂しみをやめて長き憂いのなからんことを思ふべし、しかし富める人にいふにはあらず、鵜のまねをする烏は木兎も笑はんか、又傾城は無屆きなるものなどといへるは、無學の人の詞也、さにはあらず、身を忘れぬほどのたはぶれには、誰とても臨終の夕まで、此えようすてざるよけれ共、必色に耽りては、迷ひをあるじとして身の程を忘れ、忠も孝も義もおもはず、魂をかれに奪はるゝゆへの戒め也、滛聲美色は易レ惑レ人ともいへり、さればこそ承久の兵亂は、白拍子龜菊がなす所にあらずや、まことに國をかたぶけ城をかたぶくるもこれなり、よく愼みよくまじはるべき道のわきまへいふにたらず、一たび此事になれては、今は中絶え忘れたりといふ共、おほくは底心に忘れぬものなり、たとひ黑燒にしたればとて、五八草はきゆるとも、このおもしろきと思ふしやうねはのこるべし、とかく傾城と辻風には逢はぬがひみつ、かへんなんいざ、

くせつこそすがたことばの花いくさ

○壬生

雀の森をみわたして壬生の堂にまうでける、そもそも此御本尊は六道能化の地藏薩埵なり、いにしへむほん人、武藏の國の住人香勾新左衛門高遠といふものの落人となり、此地藏ぼさつに頼をかけければ、菩薩寺僧かとおぼしき法師にならせたまひ、高遠にのたまひけるは、さやうの姿にてはかなふまじ、其太刀に此念珠をとりかへ、つまぐりて此もんを唱へよとて、以大神通方便力勿令墮在諸惡趣といふ事を授けたまひければ、敎への如く念珠つまぐりもんを唱へ居けるに、よせての人數、此堂に押寄せ、こゝかしこと高遠を尋ぬるに、すでに高遠を見つけぬれども、念珠をくりもんを唱へ、もとより地藏の御加護なれば、よせての目には高遠をまうでの人とみえて、少しもかたきの思ひがけなし、しかる所に地藏ぼさつ、法師の御姿にて、血のつきたる刀をさげておはしましければ、よせての人々あやしみ、此法師を高手小手にいましめ、つめ牢に入れ置き、目もはなたずまもりゐけるに、夜の間に牢をぬけて何もなし、ふしぎにおもひ壬生の堂にきて御づしを開きみれば、高手小手の繩、地藏菩薩の御衣に其まゝかゝりてあり、人々膽を消し尊くおもひ、逆緣ながら値遇にあひ奉り、よせての人數も髻をきりて、ひたすら後世の道にいりにける、ありがたき御本尊、中々語り盡しがたし、

有明のつれなき壬生のねぶつより　壬生唯視

きやうげんほどなうくものはなし

○神泉苑

天子御遊覽の所也、むかし神龍あり此池にげんず、されば雨乞には、此所に祈りをかくるに忽ち雨くだり、有がたき事いふにたらず、又正月に眞言院にてうつ球打(ぎちやう)を、此所に出してやきあぐる也、法成就の池といふは此池なり、いはゆる今の左義長の事也、此義一說に、西域より中華へ佛書の渡りし時、儒佛の書を左右につみて火をかけ、左の義長ずるといふ事に、さぎちやうや唐土や御本やといふと云說もあり、今一說もあれどながながしく、かつは神泉苑の事をいはんとて左義長の事をくはしくあかさんは、かの傍題とやらんの類なるべし、又鷺の五位なりしも此所にてなり、天子御遊覽の御時、さぎをとらしめんとおぼしめし給へるに、さぎとんでたつに、御まへにましますㇾ人、勅定なりとのたまへば、鷺御庭へたちかへりて手

にわたる、其時五位を下されしと也、

　五位鷺はきてみよあけの花衣

○二條の城

弓は袋にいれ劔は箱におさまる御代なれば、天守のしやちほこもいよ〳〵ひれあり、堀のごうがめもなを萬歳をつげ、國土安穏にして、五つのたなつものますます〳〵みのれば、民も畔をゆづりあひ、まことに武運長久、天下泰平この時也、かゝる折からにこそ、發句もざれ歌も、

　のどけさやかんこの苔も鬚矢倉

　なれみてもめでたくなりぬ城郭の
　　ほりのごう龜いく代へぬらん

京童巻第二終

京童巻第三

○北野の天神

此御神は今の高辻と號す御家の、是善と申に、養はれたまへるふり人也、延喜のみかどに右大臣となりて仕へさせ給へる也、和漢の賢才人にこえさせ給ひ、帝の御うしろみ、國のおさめあらん事を、其時の左大臣時平そねみ給ひ讒言ありて、昌泰四年正月廿日に、筑紫へ流し奉らしめ給ふなり、遂に延喜三年二月廿五日に、配所にてかくれさせ給ひ、安樂寺に葬りたてまつる、御年五十九なり、その年の夏、清涼殿にいかづち落つる、これ右大臣さすらへの御恨みの憤りのはやくなす所也、天徳三年九月廿三日庚申の夜、内裏回祿す、其後圓融院の御時まで營みたてたまひしに、一夜のうちに天井の板虫ばみて、文字をあらはし歌をなす、

　つくるともまたもやけなむすが原や
　　むねのいたまのあらんかぎりは

又いかづちとならせ給ひて、左遷の仇をむくはんと

おぼしめさるゝに、そのころ比叡の山に、尊意僧正とてたつとき人まし〳〵、九しきのまどの前、十じようの床のほとり、瑜伽の法水をたゝへ、三密の月をすませる、夜ふけてつま戸をほと〳〵とならす音せり、たぞと問はせたまへば、過にし二月下の五日に世をさりし菅丞相也、讒言の仇を報はんためいかづちとならん、其時僧正に勅使たち、祈りの詔くだるとも、參內ありてたまはるなとおほせられけるに、僧正聞給ひ、勅使二度までは參るまじ、三度に及はゞ、普天の下にありながら參らではかなふまじとおほせらるゝに、菅丞相の御けしきかはり、御まへなる柘榴をかみくだきて、つま戸に吹きかけ給へば、火えんとなりてつま戸はやけあがるに、僧正瀉水の印を結び給へば、火えんはきえにけり、天曆九年三月に御託宣の事ありて、大內の北野に一夜に千本の松生たり、此所に御社をたて、天満大自在天神と祝いたまへる也、一條の院にいたり、正曆四年五月、宰府安樂寺に勅使をたて給ひ、太政大臣正一位をおくらせたまへる也、その時御神託の詩に、

昔爲北闕被悲士　今作西都雪恥屍
生恨死歡其我奈　從今望足護皇基

又配所にて古里の梅を懷かしく思召し給ひ、御歌に、

こちふかばにほひおこせよむめの花
あるじなしとて春なわすれそ

これによりて梅飛び配所の庭に生ずる也、御神かくれさせ給ひて後、七百五十年忌近年有し也、其時北野に萬灯會あり、折から詣でぬる人誰やらむ、

梅とにほへ丁子がしらの萬灯會

一、御前の廻廊の內に社一つあり、是は筑紫にて、天神につなをしかせまいらせつ、御もてなし有つる白太夫と申をいはへり、
一、老松の明神は天神の御眷族也、末社の內、東より二番の御やしろ也、
一、紅梅殿は金山天王寺といふ、觀音堂の前に有、
一、ふねの宮と申は一夜に生たる千本松をいはへり、
一、ふねの宮と申すつゞきの北は藥師也、
一、笑ほとけと云は、佛書儒書を左右に置て燒きし時の、双方の童子なりと申す、しかじもんじゆふげん、
一、塔は虛空藏菩薩也、
一、會所の前の五輪は辨才天、此東の方にふしゆんの石塔あり、

一、宮の鳥居のそばなる五輪は淨藏貴所といふ、此人親と子の緣ふかき事あるによりて、中陰の忌み過てまいる也といへり、五輪の中には小佛ありとぞ、
それ天滿天神は、むじつの罪をはらし、風月の道を守り給ふときけば、今こゝにかたはらいたき事をつゞる、そも／＼やまと歌は此國の風俗にして、神慮にもかなひ佛意にもかよひ、よこしまを退けて正しきを補ひ、力をもいれずしてあめつちを動かせりと也、されば國平らかならんも此道にしくはなし、況んや身を修め家を齊へんをや、されども鷄をさくに牛の刀は用ひがたし、こゝに俳諧歌あり、紀の貫之古今集にその一體をあらはせりといへ共、心をえがたし、俳諧の連歌もひとしかるべけれど、當世士農工商までうとからぬ俗詩をよせ、ひたすらもてあそびとせり、さはあれど、いひ捨の戯れ心慰むかたとのみ思ひて吐ちらし、俳諧のほいをあやまてる人も有べし、これただ君臣親子兄弟夫婦朋友の道をさとし、氣形草木のことはりを感じ、身を修め家を守り、人を救はんのもとたる俳諧ならし、戯言なれ共おもふより出づ、神をまつる時はいますがごとくせん事をわきまへ、隣に喪ある時は歌うたはぬ道をならはんはしたり、弓削らんには箕をつくりならはせるが如く、此國に生れては敷島の道に入るべきはじめを、易きより難き所をくだかしめん俳諧の連歌なり、われ如きのあそび事とばかり心うるはたがへり、今次に記す八句付、心句躰にかゝはらず、はしづくりの兩字もこと字のこゑをかり用ゆる、さらに人のためにはあらず、われ健忘のたすけにかきつけ、身の戒を配る也、

配戒之連歌

養性をつねにわすれな花心
家職のつとめはげむ永き日
無理な事せねばわが身も長閑にて
慈悲あるむねのうちはたのもし
うそはつかぬものと不斷のたしなみに
人あなどらずそれ／＼の禮
おごらぬや月もみちてはかけぬらん
藝はあれこれ露ならひおけ

一、連歌賦物五ヶは、山、路、木、船、人、
山は伊せ、路は住吉、木は春日、船玉津島、人は人丸、

一、一字露顯はたとへば、

日を火、蚊を香、名を栞、

一、二字反音はたとへば、

花を縄、夏を綱、水を罪、如レ此下から上へ、

一、三字中略は、

霞を紙、菖蒲を雨、桂を唐、如レ此中一つはぶく、

一、四字上下略は、

鶯を檞、玉章を松、苗代を橋、如レ此上下を捨る、

一、連歌俳諧の席にて殊に睡のきざすはうるさし、これらの座に限らず、夜にても晝にても、ふくべを木につるしたるやうに、時ならずあたまをぶらり〳〵とふらめかすは、其身の行跡つたなくおぼゆる、さればねぶりの犯さぬ藥あり、ゆめ〳〵相傳なき事なれどもあらはし侍る、老人の睡は人も罪ゆるせり、是は若人のために、

一、茗荷草(みやうがさう)をやはらかにたゝきて尻しきに入る、又下帶下紐にもぬひこまるゝもの也、にほひぶくろほどにして尻のあたる所にぬひつくる、猶口傳あり、

〇西方寺

此寺をしんせいと申は、いにしへしんせいといひしびくに、はじめて結び住みし庵室なるがゆへに、その名を用ゆるなり、今も比丘尼かはり〲に、堂にてよるひる念佛たえず、又しんせい掟にて、寺中に硯をもつ事ならず、いとすせうの事也、

花のふるは淨土の春や西方寺

〇紙屋川

こゝをみな人、かい川といへるは、あやまりかあやまりにあらざる歟、雲林院をうぢゐといへば、此川もそのためしか、されどもかみや川といひてははづれず、古今集物の名に、かみや川、

むばたまのわがくろかみやかはるらん
鏡のまへにふれるしら雪　紀貫之

はいかいの花や四ひらの紙屋川

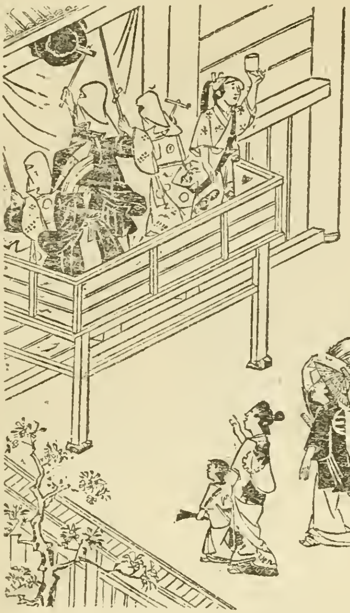
此あなた平野なれば、右の句中に立入侍る也、

〇平　野

當社は今木の神、久度の神、古關神、相殿比賣神、又第一みなもと氏、第二たいら氏、第三高階氏、第四大江氏、すべて八姓の祖神なり、延喜年中に此御社御さうそうあり、

枝の花は幣かのつとは松の聲

又津の國に平野と云あり、これは仁德天皇の廟也、



〇千本閻魔堂

此寺は小野の篁建立也、閻魔の像も篁の作也、さて暮春の念佛は、龜山の院の御時文永年中に、如輪上人と申人はじめられしなり、白毫院には紫式部古墳あり、船岡山をながめやり、或は大灯國師開山たりし大徳寺を見めぐり、雲林院の花もなつかしく、又定家卿の時雨のちんといふは、今寺町通の上に、くわんぎじといふに由緒あればゆかしく、遙に衣笠山を望むに、むかし夏の日、雪をにせて衣をひかれし故の名也、又千本の花はふげんざうなれば、

ふげんざうの花つなぎとめよ柳髮

〇今宮

當社は一條の院の御時、民疫癘になやまされけるにより、紫野に社をたてゝ、疫癘の神をいはひなだめ給ひし也、されば初めてたて給ひけるにより、今宮と申なり、神馬などひかせられし也、

しろたえのとよみてぐらをとりもちて
いわゐぞそむる紫の野に　藤原長能

今よりはあらぶる心ましますな
花の都にやしろさだめつ　同

花ちらす風に長能が歌もがな

〇上賀茂

むかし健角身命と申すあり、其息女に玉依姫と云おはせり、ある時せみの小川のほとりに逍遙有けるに、水上より丹塗の矢流れきたる、とりて歸り屋の上にさしはさむ、其後ふしぎに懐姙して男子をうめり、心得ずあやしきながらおふしたてゝ、この父をしらんため、三歳の時にいたりて、里人をあつめ酒宴さかんなる時、かの男子に盃をもたせ、なんち父にこの盃を

さすべしとあれば、男子盃を丹塗の矢の前に置き、われは天神の子なりとて、忽ちいかづちとならせ、天にのぼりて地にくだれる、今の上がもわけいかづちの神これ也、下がもは御祖の神、これ玉依姫なり、またと申すの化し給へる也、此矢もその時いかづちとなり、天にあがらせける也、今の松の尾大明神これなり、此かもの御神事おほき中に、五月五日のくらべ馬ことにもの見にて、かう〳〵しくおぼえ奉る也、

ほめられてかつにのるなりきほひ馬
やぶる埒はあいもたまらぬ競馬かな

○下鴨

當社の御事は、上にてあらはし侍る如く、御祖の神と申奉る、玉依姫是也、かの丹塗の矢に鴨の羽あれば此所を鴨といふなるとぞ、爰は又たゞすと申す也、神前に御たらしあり、毎年水無月末十日のうちは、人のまうでもつねよりおびたゞしく侍るなり、あしにかゆるだんごもおかし、

みだらしやげにも花よりだんご哉

○本滿寺

當寺は廣布山本滿寺と申て、日蓮上人の御流、日傳上人の御弟子、玉洞妙院日秀上人の御建立也、天正年中に日重上人と申あり、其比丹波の國せりやうと申所の山中に、讀經の聲聞えしを、里人ふしぎの思ひをなし、あたりの土を穿ちてみれば、日蓮上人の御影をほり出せり、是を此本滿寺よりひたすらえまくほしきと願はれ、終に思ひをとげ、當寺にうつさしめらるゝ也、それ佛法繁昌の所は王城のうしとらの方成べしとある事、思ひあたりたり、まことに當寺は都東北の角也、諸人あゆみをはこび、妙なる法の花さかんなる事、おほん敎へにもたがはず、しかれば日蓮上人の上行ぼさつの御さいたんにて、末法佛經のため衆生に佛果をさげさせ給はんとの御願也、南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經、

南無三寶月ぞかくるゝ嶺の雲
無ざんなりつゐに入ぬる山の月
妙なるや月につまぐる珠の數
法の聲けだいをなすな月の秋
蓮葉に未來はのぼれ胸の月
華や月にとひよる墓所

經に後世をわするな月の友

○しんによだう

本尊は阿彌陀如來、慈覺大師の御作也、元はひえの山におはしまし、今は都に拜まれさせ給へる也、ひえの山は女のまうでたやすからぬ故此地に移り給ひ、五障の罪深き女人をも救ひ給はん爲也、されば八さいのりうによも、なんばう無垢の成道をうれば、況や人身としてなどや願はざらん、ずいえんの波たてず、眞如の月を照し給へ、なむあみだぶつなむあみだぶつ、

な　なぞらふやもろき命と春の花
む　むじやうこそおこれ若木の花の風
あ　あらし吹花やへんずる世のためし
み　みるうちにちりぬる花や會者定離
た　だいじなりあすしらぬ身のはなごゝろ
ふ　ふる雨に生死のうみや花の浪
つ　つゐに行道をしらする落花かな

○百萬べん

寺號は知恩寺と申也、法然上人の住せ給へる御寺也、上人の御弟子せいくわん坊に此寺を讓り給ふ、其後の住持淨忠と申上人も智識にてありしが、病にふす人をも十念にて癒し給へる也、疫癘杯いふ邪氣を感ずるは、猶々十念の力に退き侍る例をもて、今も世に疫癘のなやみあれば、此寺の僧をしやうじ、念佛百萬遍唱へしむれば奇特あるによりて、百萬遍と申也、

さく花に數も百萬べんたらり

○革堂

一條のかうだうといふは順禮觀音これなり、此革堂と申は、そもそも筑紫の僧に行圓上人といふあり、寛弘二年に帝城に遊べり、革ごろもをきたまへる故に、みな人革上人といふ、或時上人ゆめのつげにより、賀茂の神祠の傍らなる槻の木にて、千手觀音たけ八尺の尊像をきざみ、小川のほとりに行願寺を營みて安置せらるゝなり、されば行圓上人ねがひの寺なるゆへ行願寺といふなり、かはごろもをきませる上人のたてられしゆへに革堂とも申すなり、先年聚樂のたちしとき此ところにうつれる也、

花の袂せくやまいりと下かうだう

又此所にかも大明神をもいはひ奉りてまします也、

京童卷第三終

京童巻第四

○吉田

當社は山蔭の中納言春日四所を勸請ある所也、奈良の京の御時は、宮女もかの御山にまうで給ひしを、程遠ければ叶がたく、今禁裏まぢかく此山にうつされ、官女婦人たやすくまうで給へるなり、かぐら岡といふは禁中の神祇官也、いづれのおほん時にかありけむ、此かぐら岡にうつし奉り給へるなり、是日本國中の神祇おはします所也、一條の院御在位の御時、此山にはじめて行幸なさせられしと也、又是なるちふくゐんと申て、虚空藏菩薩を安置しける寺は、兼好法師世を遁れてすみし跡なり、又こゝなる觀音は新はせ寺と申て、十一面觀音也、

拾遺神樂

名にたてる吉田の里のつえなれば
つくともつきじ君が萬代　　兼盛

玉葉神祇

皇（すべらぎ）もたのむ宮井となりにけり
たゞ山かげの名殘ばかりに　　従三位爲實

八重と一重花やよし田の早稲晩稲（わせおくて）



○白河

此所は忠仁公の御在所也、かの大臣御身終らせたまひしとき、

ちのなみだおちてぞたぎつ白河は
君が代までの名にこそ有けれ　　素性法師

その後白河の法皇、この所に院の御所をつくりて住ませ給へる也、法勝寺の六方九重の塔といふも此所にあり、

きればちるや白河石も小米花

○新黑谷

源空上人ひえの山の黑谷を出給ふ時、いづちかわが念佛の繁昌して、衆生濟度の誓願を達せんと、諸菩薩に祈誓ありて瑞相をまち給へるに、此所より紫の雲たちのぼりしかば、こゝこそわが法の弘まるべき所と思召、あとをしめ給へる也、さてこそ紫雲山金戒光明寺といひ、新黑谷とは申也、塔の前の藤さかりなるころ、

むらさきの雲こみぬるや山の藤

此所に熊谷の次郎直實、又敦盛石塔ある也、

○永觀堂

こゝを禪林寺といふ也、永觀律師の建立して、禪律淨土の三宗をかけり、大和の當麻寺と同じき也、はすの糸にて織れる曼陀羅は當麻のまんだらのあまりとぞ、又みかへり佛と云は、永觀行道の時あみだ佛おなじく行道なりて、跡をみかへり給ひたる御形をうつし奉り、末の世まで拜まれさせ給へる也、又永觀律師の作の物に、十因といふ書物あり、

花に目やみかへり佛下向衆

○南禪寺附靑蓮院

瑞龍山南禪寺は規菴國師の開基にて、五山の内のつかさ也、ちかき比の金地院は、禪のさうろくたり、さてそれより靑蓮院にさしかゝる、こゝは皇孫の御出家ならせ住ませ給へる御寺也、内に三申をいはひまつらしめ給へり、まことによしなき事は聞かざるがよし、よしなき事は見ざるがよし、よしなき事は言はざるがよし、此三申傳敎大師の作也、

心のさるの德をもとめむ
おふた子の敎へなりとも花と實に

○東福寺附萬壽寺

山號惠日山、寺號東福寺と云、開山聖一國師也、入唐ありて無準の弟子たり、伽藍の材木朝鮮木なり、聖一入定は十月十六日也、每年の開山忌に、入定のところに年數の札あれば、今こゝに記さず、その日無準のけさ、そのほかぼくせきいだして、諸人に見せしむ、聖一の木像ひつじさるのときほどにかきいだせり、また當寺通天のもみぢは名高し、兆殿司よりこのかた櫻はうへず、

くれなゐの雲は通天のもみぢ哉

又滿壽寺いま此寺内にあり、五山のうちの一ケ寺也、

昔は九重の內にありし寺なるゆへ、山號はなし、

　春の日のあまげにむすやまんぢうし

〇稻荷

此御神は、和銅年中にいなり山に現じ給ふといへり、祭禮四月卯の日なり、弘法大師東寺の門前にてあひたまひ、東寺の鎭守となせりともいふなり、明神おきなに形をかへさせ給ひて、いねを荷なはせ給ひし御姿をあらはし給へるにより、稻荷といふともいへり、神輿五社なり、御旅所より東寺へふるなり、この所にて神供をそなふるなり、此御神弘法にあひたまひしころは、東寺の伽藍建立の折からにて、ばんじやうのかれいゐまいらせそめし例にて、今も神事の日は大工もとより神供をそなへ奉るとなり、

よもぎいるゝいなりの茶屋のうすの餅
　あをかりしよりおもひつくなり

〇藤の森

深草の里をすぐるに、昔の言の葉どもを思ひつゞくるこそあはれなれ、うつせみはからをみつゝもとながめ、あるひはかりにだにやは君はこざらんのおもひ、あるひは野邊の櫻し心あらばと詠ぜられ、うづらなくなる深草の里とつらねられしは、歌きくさへ身にしみておぼゆる、さて藤の杜の御神靈は崇道天皇なり、祭禮は五月五日にてまします、此御神は御靈八所の內の一神也、

神も跡をたるゝや松に藤の森

〇伏見

後拾遺 都人くるればかへるいまよりは
　伏見の里の名をもたのまじ　橘俊綱朝臣

新古今 ふしみ山松のかげよりみわたせば
　あくる田面にあきかぜぞふく　俊成

續拾遺 伏見山ふもとのきりのたえ間より
　遙にみゆる宇治の川波　常磐井入道前太政大臣

花にかく歌や鰹のふしみ山

〇宇治

みやこのたつみ名所ありと、人はいへどもまだしらず、伏見の夢もさめぬれ、夜をこめつゝも立出る人まれなれば、木幡をすぎ五ヶの庄のあみだを拜み奉る、是は次郎といふ者の網にあがらせ給へるゆへ、世の人みだ次郎といふ也、やがて宇治橋に至りぬる、それ此川は西國一の大河なり、いにしへのもの丶ふ共、先

陣後ぢんの事はみな人耳にみてれば、今更かたりいでんも珍しからず、そも〳〵昔より茶は人の交りをなし、ねぶりをさまし、胸を淸くし、其德おほきもの也、茗といひ茶といふは同物にて、つむ時の早き遲きにてかはる名なり、もろ〳〵の藥種にも、とる時節に從ひて、同ものに名のことなるあり、こゝに又古しへより七種の名薗といへるは、

森いわ井うもし川下奥の山
　ふもとの朝日琵琶をひく也



茶をのみしまひてのあとに、茶碗を鼻によせて、意氣がよしとほむるはあやまり也、意氣といふは飲まぬさきの香也、飲みしまひてあとの茶碗に殘りたるは、薗香(えんか)といふなりと、世に名高き此道者(みちしや)の物がたり聞うけ侍る、され共茶のむ人をためすに、今時大かた茶碗に殘れるあとの香を意氣といひぬれば、われひとり此事しりがほに薗香とほめんより、人なみにして居て、心のうちにはあやまりとまことをわすれずして、もし人に問はるゝ時は答へたき事なり、よろづの道に、この心得はあるべきなり、

一、橋姫といふは此橋詰の社也、北にあたらせ給ふ、離宮は住吉の明神也、よな〳〵此橋姫に通はせ給へると也、

古今集
さむしろに衣かたしきこよひもや
　われをまつらん宇治のはし姫

平等院は宇治の關白殿の御建立、惠心の僧都說法ありし御寺なり、金葉集雜の上に、忠史法師うぢの平等院の寺主になりて、宇治に住付て、ひえの山の方をながめやりて、

宇治川のそこのみくづとなりながら

猶くもかゝる山ぞこひしき

一、扇の芝は頼政さいごの所なり、

むもれ木の花さくこともなかりしに
　身のなるはてぞあはれなりける

一、朝日山の歌、

ふもとをば宇治の川霧たちこめて
　雲ゐにみゆる朝日山哉　　權大納言公實

一、こじまがさきの歌、

續古今
咲にほふこじまがさきの山ぶきや
　八十氏人のかざしなるらん　　藤原光俊

一、やまぶきの瀬の歌、

ちりはつるやまぶきの瀬に行春の
　花に棹さすうぢの河長　　西園寺入道

一、宇治川の螢は、治承の戰にうたれしものゝ亡魂ともいへり、こうしやう寺は、近きころ再興ありて、道すがらのけしきおもしろく、のぼり〳〵て眺望えならぬ山なり、いにし比辛夷のはなを生て、茶の發句せよといはれて、

　花と茶やこぶしになるゝ鷹の爪

まきのしまにて、

　花のもとに酔てやくだをまきの島

○八幡

此御社は筑紫宇佐八幡をうつし奉る也、清和天皇の御宇に紀氏行敎と云僧あり、宇佐の社にまうでゝ一夏九旬のつとめあり、或夜の靈夢に、王城の傍らにすみて皇祚を守らんとありしかば、示現を奏聞せんと、行敎山崎に至るに、又あらたなる夢を蒙る、さめて東南をみれば、男山鳩の嶺に光かゞやけり、是八幡のすませ給はん所なりとて、其時清和天皇此社をたてさせ勸請し給へる也、圓融院天元二年三月廿八日に初めて行幸ありける也、

　花の木は伽羅のにほひや鳩の峯

○山崎

爰の御神は酒解神と申也、又此所にむかし上宮太子、百濟の佛作りにきざませ給へる十一面觀音の像有、沙門慈信あんぢせり、觀音ある夜沙門慈信夢にみえさせ給へるは、山崎の民、誠をぬきんで慈悲あり、いよ〳〵守らん、菩薩の像をうつす所を營むべしと、御身より光を放ち給ふ也、さて又たから寺を伏拜み、離宮八幡にぬかづき、延命じ、しやうりうじ、かうたにす

ぎて、むかうの明神に參る、當社の額は小野の道風なり、しかれば山崎にて、

唉花やよどの隣のたから寺

○大原

此所を小鹽山ともいふなり、奈良の都を長岡に遷し給ひける時、春日四所を勸請の所にておはします也、

後撰
大原やをしほの山の小まつばら
はや木高かれ千代の影みむ　貫之

續拾遺
こがらしも心してふけしめのうちは
ちらぬ梢ぞおほはらの山　周防内侍

續千載
大原やをしほのさくらさきぬらし
神代の松にかゝる白雲　正三位爲實

同
色に出ていはぬばかりぞをしほやま
まつとは風の便りにもきけ　入道前太政大臣

同
ちはやぶる神代もきかぬくれなゐに
をしほの山はもみぢしにけり　爲定

此所にげんひん僧都の古蹟あり、又西行法師めでし櫻あり、

東風ふけばげにも西行ざくら哉

○鳥羽の戀塚

此戀塚は文覺上人のきづけり、文覺俗の時、たうの盛遠といふ、其比源の渡といふものあり、此渡が妻を盛遠こひあこがるゝ也、たへかねて渡が妻の母を媒にたのめり、母思ひもふけぬことなり、わが娘といひ、すでに渡が妻となしたる上は、いかなる事ありとも媒かなふまじといふ、盛遠聞て、なかだちせざらば母を殺さむといふに、母せむかたなく、或時娘をよびて、盛遠おもひの程を語り、なんぢひそかに夫の渡が目を忍び、盛遠にあふべし、さなきに於ては母が命を盛遠はたすべし、孝行を知らば盛遠にまみえて、母をたすけんかといふに、娘なく〳〵思ふやう、盛遠にあふまじといへば母を殺す、是不孝也、逢へばまた夫をすつる、是不義なりと、心のうちに思ひ定め、詐りていふやうは、われを盛遠さほどまでこひ給はゞ逢ふべし、とてもさらば窃に忍ばんより、わが夫の渡を盛遠に殺させ給へ、みづからあひづしてうたせん、夫はてゝ後心靜かに世を憚らずあはむといふ、母此よしを聞て盛遠にくはしく語る、盛遠もとよりがうのもの、喜び勇み渡をうたんと思ひ、あいづをとるに、渡が妻のいはく、いつ〳〵の夜ふけきませよ、かしこの閨の内に

とばのこひづか



髪洗ひてふすものわが夫なり、ねやの戸ざしをすこしみづからあけて置くべし、立いりてあやまたずうつべしといひあはせおき、さて其夜の宵のほどに、夫の渡にかれが妻酒を強ひ飲ませ、とかくを知らざるほどよはせ、その酒のみたる座をさらずそのまゝ渡はふさせ、ふすまをきせ置きて、かのあいづをとりたる閨の内には、渡が妻髪洗ひ臥したり、やう〳〵夜ふくるに、盛遠渡をうたんと思ひ、敎へし閨のほとりにゆけば、いひしにたがはず戸を少しあけ、髪洗ひて臥すものあり、これこそすはや渡ぞと思ひ、細首ずんど打落し、しすましたりと思ひ立出て其首をみれば、わが戀ひ慕ひたる女のくびなり、されば貞女は兩夫にまみえざるためしなり、母に孝といひ夫に義といひ、其身ひとりの死を厭はず外を助け、まことに節女なり、それより盛遠此事を悲しみ、髻をきりて文覺と名をつき高雄山にのぼり、此きりたる女の塚をつかん所をはるかにのぞみ、すなはち鳥羽の里にきづけり、なづけて戀塚といふこれなり、碑の銘にいはく、

吁節婦兮　惟孝惟義　石可レ泯兮　貞名不已

折から求女塚の昔も思ひ出られ、女塚の古しへもあはれに慕はるゝ、まことにかゝる戀塚貞女の行跡は、異國も本朝も、末世の女たる者に聞しらせまほしき事也、舜を學ぶは舜の徒なり、又狂人のまねとて大路をはしらば則狂人なり、いつはりても賢をまなばんを賢といふべしとこそ侍れ、

戀塚の石よりかたき人ごゝろ
鳥羽かりいふはいふにたらずよ

京童卷第四終

京童巻第五

○くらま

みぞろ池、いちはらなどを行て、ふごおろしこそをかしき物なれ、はつ寅二の寅などにばかりある事かと思へば、いつとても所のよしあるものにいへば、おろしてまうでの人にみせしむる也、それより八町坂七まがり過て御まへにまいりける、そも〳〵くらま寺は藤の伊勢人の建立也、常に觀音を安置せんことを思ひ、いづれの地をか求めんと心にかけらるゝに、ある夜の夢に、城北の山に白髮の翁あり、つげていはく、此地天下にすぐれたり、山は三鈷の形に似て常に五色の雲いづる、なんぢこの所に觀音を安置せば、利やく無量ならんといへり、いせ人夢に問ていはく、おきなはたぞや、翁答へていはく、王城の鎭守貴船の明神なりといへり、伊せ人夢さめて、夢中の山いづくともしらず、いかゞして夢にみたる所の山を知らんと思へるに、いせ人常に乘れる白馬あり、それ白馬は靈畜なり、なんぢわが夢みる所をしらんと、鞍を飾りて白馬を追ひ放ち、とゞまる所をさだめんと思へるに、此馬こゝの山にとゞまる、伊せ人夢に見し所と少しもたがはざる形なり、此馬のとゞまりし所にて、びしやもん天の像をえて、これを安置せらる、いはゆる觀音と多門、名はかはりて一躰なりと、又夢のつげあり、よりて此所をくらま寺といふなり、又ひとつの堂をたてゝ、觀音の像をも安置せらるゝ也、今の寺の西にある觀音院これなり、

おる花に異儀をいふなよ鞍馬寺

○僧正谷

此谷は不動明王示現の地なり、源の牛若、舍那王丸といひし時、平治の亂れをのがれて、此あなたなる鞍馬寺に入、ある時此谷に至りて山ぶしにあへり、山伏牛若にいふ、われ劒術をえたり傳へんといふ、牛若よりりく〳〵習へり、ます〳〵兵法くはしくして、十五歳の時奥州にゆき、壽永元年平家と合戰して其功勝れたり、文治の初二度くらま山に來り、彼山伏を尋ねあはんと思ひ給ひ、此谷に入給へ共、其後終に山伏みえず、これ天狗にて有しと也、

まれに出ば鼻をたかはれ天狗茸

○貴布禰

此御社は龍神なり、されば雨乞にも又雨をやむるにも此宮を祈るなり、又夫婦の中をもまもりたまふ御神なり、むかしひでりの時、賀茂の社司こゝにまうで雨をこひしそのとき、賀茂の幸平歌に、

おほみ田のうるほふばかりせきかけて
　いせきにをとせ川上の神

和泉式部夫の薄情をうらみ、此神にまうで、みたらし川にとぶ螢をみてよめる、

ものおもへば澤のほたるもわが身より
　あくがれいづるたまかとぞみる

此時御神、男子の聲をなしたまひて、御歌、

おく山にたぎりてをつる瀧津せの
　たまちるばかりものな思ひそ

うはなりは花ちらす風のきぶね哉
おなご竹にとまる螢や鐵輪の火

○いは屋

めぐり〳〵てくるま坂をゆき、まんじゆたうげをこえぬるに、まんぢたうげか、まんじゆたうげかと問へば、たうげの茶屋のあるじ、中にあんの入たるものをさしいだして、まんぢうたうげ也といひしもやさし、いはやにいりぬれば、さしくちに一すぢの瀧あり、それよりのぼりぬれば不動明王なり、これは弘法大師の御作に石の尊像なり、厨子とちやうにこめたり、開帳たび〳〵あり、すぐれてありがたき明王なり、されば國々所々より參籠ありて、病をいやし、こたび喜びの眉を開く、いづこの人にかありけん、眼疾うれひ侍るに、不動明王に祈りをかけ此所に參籠し、つれ〳〵の折から、

やむ目よりみるめとへかしほとゝぎす
岩窟に香水あり、

香氷やひらくと岩のはなの露

○醍醐

上の醍醐は女人けつかいの山也、貞觀の末に聖寶ひらき、顯密の二敎をのぶ、延喜二年に僧正となれり、同九年に醍醐を賜はつて官寺たり、聖寶ともし火のもとに書をよみたまふ時、ねぶりをさまさんと、茶盞をとりたまひし半夜の比、うつばりの上より大蛇の形盞中にうつる、聖寶仰いで叱す、蛇忽ちに退きみえず、又蛇を平らげ給ひしとて劔あり、此山の靈寶な

り、又如意あり、背に五師子をきざみ、面に三鈷杵をえる、顯密ならび學べる事を表せり、此如意は東大寺興福寺兩寺のうちに今ありといふ、聖寶は延喜九年四月に病にふし同七月六日に身終れる也、年七十八、

　天の月もすめば太鼓や醍醐山

笠とり山、炭山、日野山を行て、長明が跡あはれに、おり琴つぎ琵琶おもひ出て、

　琵琶琴のちいんもたぬや糸すゝき

下の醍醐は三寶院と申し、山伏のつかさなり、此庭に佐々木の三郎盛綱、ふぢ戸のわたしの淺瀬を尋ね、かの下らうを一かたな刺しゝ時、尻かけし石あり、なづけてふぢ戸いしといふ、また聖護院は本山といひ、此山を當山といへば、

　當山や楓も色にそみかくだ

○大原

旅の疲れにやせの里を過て、大原につきにける、法然上人大原問答の時のせうこの阿彌陀伏拜み、かの女院の御あんじつ、阿波の內侍の影もあはれなり、せれうの里の細道、おぼろの清水おぼつかなきに、

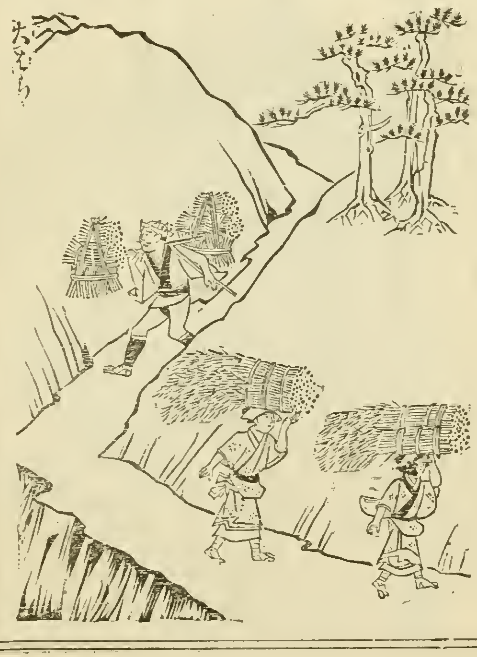
玉葉集
　ひとりすむおぼろの清水友とては
　月をぞやどす大原の里　寂然法師

やへむぐらしげみが下にむすぶてふ
　おぼろの清水夏もしられず　中納言匡房

螢とぶおぼろのしみづかすかにも
　しらばやをのが燃る思ひを　津守國冬

わがこひはおぼろの清水いはこえて
　せきやるかたもなき心かな　俊頼

大原にこもりゐて



新千載
はれくもる月もしぐれももる庵の
哀れをよその人にみせばや　前左兵衛督惺方
大はらはひらの高ねのちかければ
雪ふるほどをおもひこそやれ　西　行
世をそむくかたはいづこもありぬべし
大原山はすみよかりきや　和泉式部
おもふ事大はら山のすみがまは
いとゞ歎のかずをこそつめ　少將井尼
日かずふる雪げにまさるすみがまの
煙もさびし大はらの里　式子内親王
御產のとき、此里よりこしきをめさせられ、御殿の棟よりころばかすなり、御胞衣とゞこほらせらるゝ時にはある事、滯らせ給はねば此事なし、皇子御誕生には御殿の棟より南へ落す、皇女御誕生には御殿の棟より北へこかする也、飯かしぐこしきの事也、下﨟のしはじめし事なれ共、吉例ゆへ大内にもあそばし給へる也、此大原より甑を奉る也、それはさもあらばあれ、あの山みさい此山みさい、いたゞきつれた大原木を、
大原は身もちになるや小梅の木

〇ひえの山
昔は日枝山とかけり、その後叡慮に入りたる山なればとて、文字を改めて叡山とかき、比叡の山とかける也、又傳敎大師の歌よりこのかた、わがたつ杣といふも此山の事也、末の代の句にも、我たつ杣とあれば、名所と釋敎に定むる也、ひえの山と句にしては名所の方ばかり也、釋敎にはあらず、昔の人此山の歌に、
拾遺戀四
我戀のあらはにみゆるものならば
都のふじといはれなましを
ひえにのぼりて、かへりまうできて讀る、
古春
山高みみつゝ我こしさくらばな
風は心にまかすべらなり　貫　之
傳敎大師は近江國滋賀の郡の人なり、父の名は百枝といふ、子なき事をうれへて叡岳の左麓の神祠に祈られけるに、妻懷妊ありて、神護景雲元年に男子をうめり、是傳敎大師也、その庵は今の神宮院也、又をのころ島といふは日本の惣名なりといへども、此山の事也、伊弉諾伊弉冊のみこと、天の浮橋の上にたゝせ給ひ、みほこにてあをうな原を捜りたまひ、そのほこさきよりしたゞる鹽凝て、ひとつの島となる、これを

をのころじまといふ、此山の事なり、さて又元三大師の繪像、ありがたきみくじあり、又飯室には定家卿の墓あり、

下からの色葉やすせもひゑの山

○鼠禿倉

白河の院の御時、京極のおとゞの娘中宮とならせ給ひけるに、帝御子なき事をあやなくおぼしめし、三井寺の僧賴豪といふを召して、中宮御子なし、もし賴豪祈りにて懷姙あらば、何によらず望みをかなへんと勅ありけるに、賴豪綸言をかふむり祈り奉るに、ほどなく中宮御懷姙ありて、承保元年二月十六日に皇子をうませられたり、帝御悅び甚だし、その後賴豪望みの事を奏聞するに、叶ひ難き事ありしを怨み奉り、又皇子を殺し奉らんとて、賴豪斷食してつゐに死せり、皇子も御とし四つにて、承曆元年八月六日に身終らせ給ふ、賴豪が靈魂くろがねの鼠となりて叡山にのぼり、佛像經論をくひ破る、これによりて一つのほこらをたてゝまつり給ふ、今の鼠のほこらこれなり、

いる山は月の鼠のほこらかな

○日吉

山王本地は藥師也、竪の三てんに横の一てんを加へ、横の三點に竪の一點をそふといふ事あり、是山王といふ字也、

大宮ごんげんは釋迦、天照太神の垂跡也、

聖眞子はあみだ、八幡大菩薩の分身、

二の宮は藥師、　八王子は千手觀音、

客人の宮は十一面觀音、白山禪定の靈也、

十禪師の宮は地藏、　三の宮は普賢、

中の七社の牛の御子は大威德、

大行事は毘沙門、　早尾は不動、

氣比は聖觀音、　下八王子は虛空藏、



王子の宮は文珠、　聖女は如意輪、
下の七社の小禪師は彌勒龍樹、
惡王子は愛染明王、　新行事は吉祥天女、
岩瀧は辨才天、　山末は摩利支天、
劔の宮は不動、　大宮の竈殿は大日如來、
聖眞子の竈殿は金剛界大日、
二の宮の竈殿は日光月光、
當社まつりの比餘花の題にて、

花に風さはらばひやせ夏木立

○水うみ

むらさめも　波も音せぬ　琵琶の湖
かきまじへぬる　筆すさみ　名所々々を
あさきに　いひつゞくれば　われながら
我身に志賀を　あらはせり　これから崎を
見わたせば　獨たちたる　まつのこゑ
ことにすぐれて　おもしろく　うきに浮たる
舟あそび　一ふしうたふ　小うたにも
ちよ萬代と　ことぶきて　さゝくみかはし
あれなるは　竹生島ぞと　ふしおがむ
たいざうかいの　辨才てん　あらありがたの
れい地なり　實(げに)りよくじゆ影　しづんでは
魚木にのぼる　けしきあり　三千世かひ
目のまへに　月をも花も　うちわすれ
まことに十二　ゐんえんは　心のうちに
むなしくて　みがける玉の　ごとくなる
光源氏の　ものがたり　六十でうは
てんだいの　六十番に　なぞらへつ
され共地水　火風空　識の六つをば
雲がくれ　六でうとこそ　こめらるれ
はしひめまでの　二十八　これ法華經の
ほんのかず　殘る卷をば　ならびとし
あはせて五十　四でうなり　むかふ硯の
いしやまや　むらさきといふ　名にしおふ
式部はこゝろ　くだきつゝ　須まあかしより
まづはじめ　何れのおほん　ときにやと
なが〳〵しくも　せたのはし　よゝにわたれる
さうしなり　むかひ遙に　みかみやま
いにしへ爰に　ゆみとりの　はなつ矢ばせの
いきほひも　今又おもひ　いでぬれば
いとかしこげに　ひくあみの　かたゞの浦の

えならぬに　いひつゞくれば　おほみそや
これらの事を　きく人の　もしもありなば
おかしやと　こなされなんと　しるからに
わにの口より　おそろしく　思ひやれ共
さりながら　ひらにとゞむる　人あらず
のりしふないの　たはぶれに　すけのみ寺の
すせうさや　白ひげの神　しらむほど
思ふを外に　あらはせば　人のあざけり
まつもとや　とかくいふまに　三井の寺
かねは夕を　つげぬるに　なごりおしくは
ありながら　都をさして　のぼりこそすれ

名どころはあふみの海の丸太船
くるり〳〵とへめぐりてみる

京童巻第五　終

京童巻第六

○あたご

愛宕山朝日の峯勝軍地藏と申は、百濟國日羅の靈なり、敏達天皇十二年に、みかど、日羅は賢にして勇ある事をきこしめし及ばれ、百濟國に勅使して、日羅をめしけるに、百濟王、惜みて渡されず、又勅使ありて其時來朝せり、帝政をとはしむるに、甲を被て馬にのり、廳前にすゝんで跪いて、天下を治むる所以をあらはせり、又聖德太子もろ〳〵の童子に交はりて、ともに日羅の舘に入まみえ給ふに、あまたの中、もとよりいづれを誰としれる事なきに、太子をさして、これ神人なりとて三拜ありしとなり、其後太子日羅の御弟子にならせ給へる事あり、文武の御宇大寶年中に、役の行者此山にわけいらんと、嵯峨の奥に雲遍上人といふあり、これを同行にて淸瀧にいたれるに、雲おこり、いかづちなり、雨ふる事車軸の如くして、もろもろの天狗大杉の上にげんず、時に二人秘咒密言をもていのらるゝに、天はれかゞやき、地藏、龍樹、富樓

那、毘沙門、愛染、ひかりを放ちたまへり、しばらくありて天狗退きぬれば、二人山にいり、神廟を朝日の峯にたつ、開山第一祖は雲遍上人なり、（雲遍改て泰澄と名づく、）その後光仁帝の御時、内州の人藤井氏慶俊（天應元年に僧都になれる人、）勅して中興せしむ、和氣の清丸建立なり、又桓武天皇の御時、岩を改めて護の字となし給ひ、愛宕護山大權現と號す、是勝軍地藏日羅の靈なり、

拾遺雜下　なき名のみ高雄の山といひ立る
　君は愛宕の峯にや有らん　八條のおほい君

太郎坊と申は、文德天皇の御時、洛陽の人正六位上紀の朝臣御國の子に、眞濟といふ人あり、（柿本の紀僧正是なり、）弘法大師に密教をうけ、承和のはじめ入唐ありて、歸朝の後、高雄のみねにいりて、十二年出られざりけるに、いつの時なるぞや、眞濟染殿の后をみて心まどひ、思ひの火を胸にたき、遂に貞觀二年二月に死せり、年六十一、その靈魂大天狗となり、すなはちあたご山の太郎坊これ也、

もろともにあはれとおもへ天狗たち
　鼻よりほかにいふ事もなし

此山はいくさを守り火難をのがしたまへば、いづれのありがたき事かこれにしかんや、

ひおどしの鎧や花に勝軍

○高雄

こゝは和氣の清丸建立也、弘法大師入寺ならせ給ひて眞言の法をはじめ、神護寺と名づけられしなり、其後文覺上人此山に入再興ありける、又かはらけなぐるは地藏院といふ寺なり、つねは女のまうでならず、三月廿一日ばかり女人もまいるなり、紅葉の比誰やらん、

露むすぶ紅葉や大緒たかお山

まきの尾に入、所化寮にたゞずみ、僧にことゝへ共、いさゝか答へず、もし龍にあやかれる耳かと、くりかへしかれこれに問へど答へず、山吹の花色衣なり、栂の尾は明惠上人すませられし寺なり、上人渡天の望みありしとき、春日大明神とゞめさせたまひし也、又茶は栂の尾の名物なれば、

たまはりしとがの尾の茶はすぐれたり
　これや宇治よりそだちなるらん

○清瀧

さかしき九折（つゝらをり）をくだりて清瀧にやすらゐ、むかしの

歌ども思ひつゞけ侍る、
續古今春上
氷ゐし水のしらなみいはこえて
清瀧川に春風ぞ吹く　後京極攝政
新古今春上
ふりつみしたかねのみ雪解にけり
清瀧川の水の白波　西行法師
鵜とんで天にいたれば清たきの
淵には魚もおどりこそすれ

○小倉山

此山はもみぢの名所也、亭子院みゆきの御時、貞信公供奉にて、
拾遺雜秋
小倉山みねのもみぢば心あらば
今一たびのみゆきまたなむ
古今秋
夕月夜をぐらの山になく鹿の
聲のうちにや秋はくるらむ　貫之

中納言定家卿、山莊をつくりておはしまし、先達百人の歌を色紙にかゝせられ、此山莊におし置たまひしを、定家卿果てさせ給まひてのち一部のものとなし、世に百人一首と號せる也、

しのばれんものとはなしにをぐら山
軒端の松ぞなれて久しき　定家卿

二尊院は法然上人の御影あり、これをあし引の御影といふ、
はる〴〵と御影おがみにくる人も
くたびれぬればあし引の山

往生院は、清盛に愛せられしはらからの白拍子、祇王ぎによといふもの、ほとけ白拍子におもひかへられ、もとゞりを切て入し所也、
もえいづるもかるゝもおなじ野べの草
いづれか秋にあはではつべき
となんつぶやき、こゝに閑居しけるに、又ほとけ刀自も、此二人の尼になりしを慕ひて、もとゆひきり、こゝに入、三人の尼おこなひすまし侍る也、今三人の影、いとちいさくしてある也、
遊君の髮をおろして入てらは
なむあまだぶと申すべきなり

又瀧口入道横笛にしたはれぬる事おもひ出て、
横笛が花の瀧口にしのび竹
かゝる折からに、小督の昔もおもひつゞけ、此地にかくれしを、仲國琴の爪音にて尋ね求めしなれば、
鶯の琴はこがうか嵯峨の奥

かれこれいひつゞくれば暇なし、かの遍照のわれおちにきと人にかたるなと、美しき女郎花に戯れしも此嵯峨野なれば、われも又あれこれの名にめでゝかきしばかり也、わが誤りを口のさがなき人に語るな、

○釋迦堂

こゝは嵯峨の天皇の離宮なりしに、奝然法師入唐ありて、びしゆかつまがつくりし、しやくせんだんの佛像を傳へ、歸朝して奏聞をとげ、皇居をあらため寺をつくり、すなはち清凉寺と名づけ、尊容をあんちせるなり、三月十九日御身拭に、

欲垢やはなるゝ釋迦の御身拭

このあちに廣澤といふ池あり、これは月の名所なり、此事、御室のあらまし、妙心寺の仔細などはこゝにてかたり、これより南に名所々々あまたあれば、此三所は月の比まで殘し置かむ、まづ廣澤の月をみるには、池の西に居て、東の山より出る月の水にうつるを見る景、外よりすぐれ侍るなり、

後拾遺
住人もなき山里の秋の夜は
　月の光も寂しかりけり　藤原範永

新千載
いにしへの人はみぎはにかげたえて
　月のみすめる廣澤の池　頼政

廣澤のいけのつゝみの柳かげ
　緑も深く春雨ぞ降る　爲家

又鳴瀧の山には、五智の如來石にきざみたる有、御室は寺號仁和寺といふなり、寛平法皇のすませ給ひ、御庵室あるによりて御室と申也、妙心寺は花園といふなり、是も花園院の勅願所なる故に花園と申也、花園院の尊影繪像にてありしを、近きころ奏聞ありて、木像になしたてまつるなり、當寺は關山惠玄禪師のながれなり、

○天龍寺

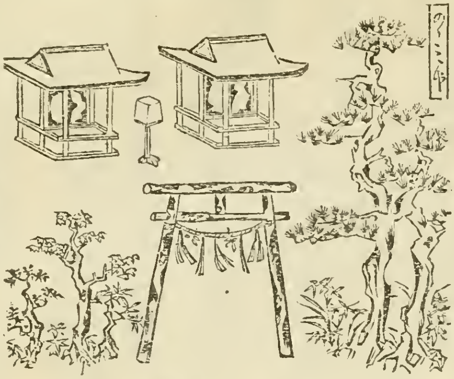
當寺は夢窓國師を開山となし、尊氏將軍の御建立也、前なる池を八宗論の池といふ、昔此池のほとりにて八宗の法論ありし故の名なり、夢窓國師のいんきよは西方寺といふなり、今ゆくべき道なり、此寺の庭は、一夜のうちにつくられしと也、七本竹とて、名ある竹、庭にあり、

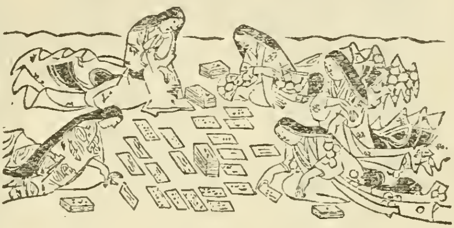
花の雨もふらしこそすれ天龍寺

○野の宮

野の宮と申は、伊勢の齋宮へ帝より皇女をくだし奉

らしめ給へる也、みかどに皇女ましまさねば、親王家よりも息女をたて給ひし例あり、その前の年此野の宮に御はらへし給ひておはしませるかりの宮なり、人皇十代め崇神天皇の御代よりはじまれる御事なり、此野の宮におはしますうちは、御いみ詞とてあり、一、佛をなかごと云、一、經をそめ紙と云、一、塔をあららぎと云、一、寺をかはらぶきと云、一、齋をかたじきと云、一、病をやすみと云、一、哭をしほたるゝと云、一、血をあせと云、一、死をなをると





云、一、墓をつちぐれと云、
さて齋宮の御下向の時は、大極殿にて天子御てづから齋王にさしぐしをさゝせ給へるなり、その時天子齋王にのたまへるは、二たび都へのぼりましますなとて、御暇乞あると也、其子細は、當今かはらせ給へば齋宮もかはらせたまふ故也、されば上をまなぶ下とやらんにて、下々の者もはなむけに櫛はせぬ事なり、ふる里へ二たび歸り給はせぬ御事のいはれを、下下のまなぶは恐れありながら、ことはりにすぎたれば尤にこそ、又此齋王の伊勢への御下向を行啓といふなり、長奉送使などとていかめしき供奉あり、久しくたえて今はなき事也、むかし六條の御息所の御むすめ、齋宮にたゝせ給はんとて、この宮にすみ給ひしを、光源氏みやす所をさすがに思ひはて給はずして、あきの花みな衰へ、蟲の聲もかれ〴〵に、松ふく風のひゞきまでも寂しきみちすがら、わけいらせたまひ、さか木の枝を折りて、ゐがきのうちにさし置き給へば、御息所、

神がきはしるしの杉もなきものを
　いかにまがへて折れるさか木ぞ

御返し、光君、
をとめ子があたりとおもへばさかきばの
　かをなつかしみとめてこそおれ
野の宮やつぼむ時分の伊勢櫻
　○大井川
延喜の御時、大井川に行幸侍ける日、
新古今 かげさへに今はと菊のうつろふは
　波の庭にも霜や置らん　坂上是則
後撰 大井川うかべる船のかゞり火に
　小倉の山は名のみ成けり　業平朝臣
拾遺 色々の木葉ながるゝ大井川
　しもは桂の紅葉とやみむ　忠岑
同雑上 大井河川べの松にことゝはむ
　かゝるみゆきやありし昔も　貫之
くみてしるさそふ小鮎の大井川
　○嵐山
此山は吉野のさくらを移し植られし所なり、されば
こもりかつての御神、垂跡ならせ給へる所なり、
後拾遺冬 大井川ふるきながれをたづねきて
　嵐の山のもみぢをぞ見る　御製

かめ山の仙洞にて、
わがやどのものかあらぬかあらし山
　あるにまかせて落る瀧津せ　太上天皇
龜山と申は龜山の法皇すませ給ひし御跡なり、さて
又此嵐山に古へは城郭ありし也、今も礎は殘り侍る
によりて、城主の末葉こしかたしたふ也、されば昔の
劔は今の菜刀にて、いよ〳〵さびおとろへ、はがねを
ならすことあらねば、誰に身をとはるゝよすがもな
く、小尻つまりぬれば浮世を凌ぎがたく、まことに
昨日までみし鑓梅もこぼれ落ち、けふはさうし錐の
もみでにてへつらひ、ふせぎかねたるあらし山の猿
舞腰となり、心をたかくうごかすばかりにて、翼なき
鳥の如く、のどけき空かける友を羨み、よそにみなさ
んはわびしき、
よその花をこちにもさそへあらし山
　○法輪寺
ちふく山法輪寺は、弘法大師の御弟子、太秦の住持に
てありし道昌僧都の建立なり、僧都眞言をうけ百日
じゆしたまふ事ありしに、明星降臨ありて僧都の衣
の袖にうつり、虚空藏菩薩の御かたちを現じ給ひ、日

歟へても消えさせ給はず、されば僧都ありがたくおもほえ、みづから虚空藏菩薩の尊像をつくり、ころもの袖の御影像を中にこめ奉り、高雄山神護寺に於て弘法大師の供養をせさせられしとなり、その尊影をこゝに遷し奉り給ふなり、さればありがたかりき虚空藏菩薩にておはします也、

　跪やちゝたる春のひつじの子

○松尾

當社は二座なり、大寶元年に秦の都理はじめて建立也、素盞嗚のみことの御子大己貴と申、又は賀茂川にながれしかの丹塗の矢と申、是松尾大明神なり、さればまつりにあふひかゝるなり、當社の祭は四月上の申なり、貞觀年中にはじまる、一條院寛弘元年十月十四日に、はじめて行幸ありしなり、その時、

　ちはやぶる松の尾山のかげみれば
　　けふぞちとせの始成ける　源　兼澄

四月八日、松尾祭使にたちて侍けるに、内侍は誰ぞと上卿のたづね侍ける、折しも時鳥のなきければ、

　時鳥しめのあたりになく聲を
　聞く我さへに名乘せよとや　後深草院少將内侍

　松の尾や春風の手に琴の曲

○梅の宮

贈太政大臣正一位清友の御むすめ嘉智子と申は、嵯峨の天皇の后にて、仁明天皇の御母なり、さればかちし橘氏にてありしゆへ、諸兄清友などを、此所にまつらんとそうし奉り、承和年中に當社を御建立ありしなり、皇后の御歌とて世に傳ふ、

　もろこしの山のあなたにたつ雲は
　　こゝにたく火のけぶりなりけり

此皇后遺詔にて、わが屍を野中にすて置け、葬る事あるまじと仰せられしなり、其仔細は、世上の人にすごきかばねを見せて、色欲をさけさせんとのためなり、きれば遺詔たがへず野外にすて奉り、狼犬のあらしたる白骨一拳のこりたるを、後に拾ひて納め奉るなり、その所を名づけて一拳といひ、又拳の宮と申也、

　春もとへ橘氏をほとゝぎす

○太秦

むかしこのところに蜂おほくありしゆへ、蜂岡寺といふ、また廣隆寺とも申なり、聖德太子は用明天皇の御子なり、厩のほとりにて御誕生ありしゆへ、むまや

の皇子とも申奉る、又いとさかしくましまして、八人一時に書をよませ或は物をいはしめ、一度にきゝわけさせ給へるゆへ、八耳の王子とも申奉るなり、然れば異國より、秦氏の人壺に入て流され、風波にゆられて、その船難波の浦にとゞまる、太子とりあげさせ給ひ、みやづかはせ給へるに、忠勤はげみ、並ぶかたもなく仕へ奉るゆへ、太子の太の字と、秦氏の秦の字をとりそへて、このところに太子をうつし奉り、太秦といふなり、又藥師如來あり、それ人身は病のうつはものなれば、誰かおろそかにたのみ奉らんや、人もわれも信心安樂なむ藥師十二神、

命門と五ざう六ふのかずくに
たのむやくしの十二神なり

京童卷第六終

神風穩かに四つの海波なく、關の戸さゝぬ御代なれば、心の及ぶ所縱横にあゆみをなさんも、誰か咎めんと、長き日めもそ庄屋の一番子と、京童の二番と、丁の一箪一瓢をたよりとして、都のほとりたどりぬる、しかるに見わたすのみは、金の山も石の峰もひとしければ、玉ある所のひかりをたづねあかして、たつときをたつとましめんと、みがく硯に水莖のをかしき言の葉、おりからのいひすてをつらね、あるはむかしむかし其處にふれたる愚句をも、今かきよせぬる、藻にすむ虫のわれからかたはらいたきに、まして人のみるめからは、あまさかさまのそしり、なほ又先吟あるをしら波の、うき名は立田のやまじといはれなん事もあるべけれど、しかしあづまの春は、天邑よりはやくいたりぬれども、谷の戸口のうぐひす、きく人まれなるゆへ、もてはやさるゝ人の心の花にあはねば、世に鳴かいなく、あとなる友に先をこさるゝならし、されば予がさきがけの句も、着到にもるゝは、かへりてをくればせになるもあらんずれど、よしやよしのかへり花、はやくもあれをそくもあれ、いまこゝろざすは、詞の林を愛するにあらず、罪といふ物を繪に

てしれるごとく、白きをのちにおぼろげの人につげんため也、濱の眞砂の數つきず、鳥のあとたえずして、道せばからぬ大君の御かげの國なるを、ひとりとせかせ給ふな。

明暦四戊戌年七月吉日

さはら木町通東のとう院東へ入町
八文字屋五郎兵衞新刊

京童跡追序

あれたる窓の破れ簾、かけまくもかしこきやまと歌、もゝにあつめさせたまへるよ、太郎あり次郎あり、もろこしのふるきふみに前集後集侍り、猶又鵜と鷺の本末など、書編みな先後あり、さりとて雲井にたかくとびゆくを、かりそめにもおふけなき身とし、池の石龜の翅おもふ類、いかでか心ざしの及べきとおもひさだめし、せめて唯その撰に始終ある事をのみ、おろかなる作意にまなびとり、予壯年の比明暦戊戌歳、大内のめでたきをあふぎ奉しより、洛陽のほとり神たち佛たち靈地のよりきたる事凡書よせ、京わらべと題號せし草案を、人にほり求められ梓に行ひけるに、名にたゝる所もあるは繁て省、あるはおぼつかなくて殘せしを、又かしこのこゝの記錄をうかゞひ事を問て、あとをひと名づけ、翌年己亥に大かた首尾そろひ侍り、すでに又剞劂氏の手におち侍らんとせしとき、われ田舍わたらひして、笈の底を出ぬ事、きのふといひけふはや十とせがほど也、今しきりに清書をすゝむるもの有、嗚呼とりごころなき草子なる物をと、耳のあなたになし侍ぬるも、たびかさねて、生のうらみぬるけしきなれば、さくらあさのあさからぬ友に、山なしのなしともいらへがたく、此たび砥魚(しみ)を拂ひてゆづり侍る、まことにはじめの年の戌の尾をくふてまはるごとく、ひかりの陰めぐり、歲次寛文七丁の羊のくるまに轄(くさび)をかため、さきに出ける京わらべをしたふゆへに、跡追といふもの爾なり、

中川喜雲撰

京童跡追目録

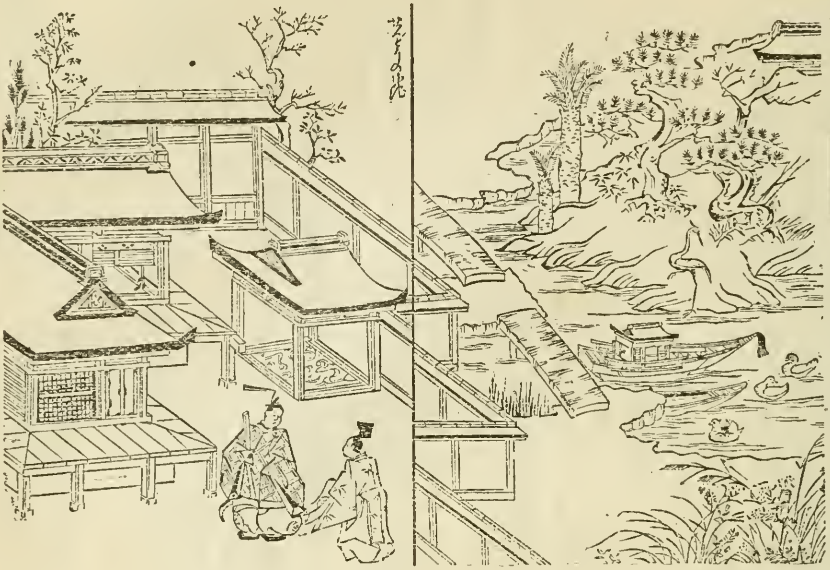
京童跡追卷第一

○仙洞之御池

みなもと淸くして下も濁らぬ おほん時のためしにや、姑射山の傍らに安古世賀池とかいへるは、三伏の夏いかなる旱魃にも、淸水かはかずとなり、名は聞つたふれども、その故をいかにとしるべきにあらず、それ積礫にならつて玉淵をうかゞはざれば、驪龍の蟠るところを知らざる也、されば深からぬ心の水莖にはしげき藻鹽草もなく、かばかりだに拙なきすさびにうつし、罪の重かるべきをはらしてよと、祈る北野の神木によせて、霞の洞をうかゞひ奉る、

梅と松やみどりの洞の五位六位

八島の外まで穩かに、たかき御めぐみ、猶つくば山の蔭よりもしげき御代にあひあふ悅び、四方のえびすすら、俳諧もてあそばぬは稀也、よろづの神のまにまに手向草となし、三世の佛におりて奉る花紅葉を錦の斗帳といひかけ、あるは守袋など興あるさまにつづり侍るのみならず、子持が婦夫いさかひの中なを



りも、狂句にておかしがらせぬるは此道の徳なり、されば等類は日々に多く、付合は席毎にふるめかしくなりもて行といへども、空とぶ鳥の網をもれ、水にすむ魚の鈎をのがるゝならひなきにしもあらねば、まさごの數々拾ひ、此全部に愚句を加侍る事、良材の檜木には人の斧をいれぬれば、我はのこしをく咋木に鉞をうちたつるもの也、かく敷島の道におもむきむかひぬるも、世靜かにして人の心騷がしからぬ故なり、然れば賤が杵歌も田歌も、詞すなほにしてなさけ内にこもり、いかに五月乙女艶書がほしいかゝけしやう文をたぶならば、さぞな嬉しかるべきなどたはぶるゝも、國土うるほひて民の心の種はびこり、科戸の歛舌もなごやかに、時をたがへぬ下米の下、二葉の松のおひそひて、千代のはじめは千世のはめじは、

○清荒神

此荒神は攝津國清といふ也、寺號常施寺といひて天台なり、むかしは下京にありしをこゝにうつす、洛下に清町といふあり、これいにしへのあとにて侍る、さて本地は不動敕願所にて、いとたつとくあらたなり、内に三申辨才天毘沙門あり、

荒神はかまどのかみときくからに
　げにも火焔の不動なりけり

○大炊道場

寺號を聞名寺といふ、念佛三昧の道場なり、いにしへは室町通道場の町にありしを、寺町通にうつされしなり、一遍上人のをしへをうけつぎて、遊行の末寺なり、一遍上人は伊豫の國の人、河野七郎通廣が二男なり、さて此道場に光孝天皇の御位牌石塔などあり、かのみかど盲人をあはれませ給ひ、洛下左牝牛といふ所に長屋を立やしなはせ給ひしに、あらかじめ崩御の後は凍餒のうれゐあらんことをおぼしめさせられ、檢校勾當などいふ座頭の官はじめて下されしと也、さるによりて爰の聞名寺へ座頭の出仕ある事也、されども今はたへ〴〵なりときこゆ、むかしより童のことわざに、あめうじ目くらが杖つゐてとふる所といふは、左牝牛目くらが杖つきて光孝天皇へまいる、よせあるさまをいふ事なり、又寺内に稱名寺といふあり、秋野の道場とて由緒侍る寺にて、本尊は安阿彌の作の阿彌陀を安置し、いにしへはまばゆく門から見ゆるたうさい寺にてありしとなり、今は柴の扉に草ふきしありさま、むかしにまさりて猶たつとしとおぼゆ、それ沙門はすみかをかざらず、匹如身に、悪衣悪食に身をやしなふこそ、ほとけのをしへなれ、なんぞ名利につかはれて富貴をねがはんや、金あらば山に捨、玉あらば淵になげて、ひたすら念佛となへんこそ、後の世のたからならめ、當寺に予がまどしき藜藿糟糠を囉齋が僧侍れば、まことにわが寺の佛たうとしとやらん、決定往生の四句の文、又遊行上人所持の靈寶まで書つけ侍る、

六字名號一遍法　十界依正一遍體
萬行離念一遍證　人中上々妙好花

六十萬人決定往生とは、字がしらをされる也、又大曾軒端梅などにうたふ東北院寺町上にあり、此寺の同宗なり、

遊行上人什物

一、熊野權現より相傳の鰐口のかたわれ
一、いほ硯　一、和布の杓子
一、中將姬剃髮の三尊の阿彌陀
一、眞盛甲此外有レ之といへどもしるすにいとまあらず

上人のもてありきぬる和布のしやくし

衆生をすくふしるしなるらむ
遊行上人回國のころ、當寺堂の端より、札くばりたまへるに、
短尺も遊行の札か柳陰
上人札を押たまふ事、衣の袖中にて、紙幾重もの上よりをされけるに、下のかみまでとをるとやらん、しかも間に白紙一まいへだゝり、上より下までとをる事奇妙の義なり、見ぬことなればしらず、法力にてかゝる事もあるべきか、
○妙傳寺
當寺開基日意上人は、はじめ天台宗也、しかるに三大部の内疑難の所少々あり侍る時、その比身延山に、日朝上人とて廣學の僧あり、此もとにゆき、多く問て疑をはれ、それより日朝上人をいよ〳〵たつとみ、法灯を相續、身延の十二代目にそなはれり、されば日朝上人と心をひとつにしておもへらく、西國の此宗旨の男女、甲州身延山まではこぶ歩もたやすからず、いでや宗門のためにとて、身延山を花洛にうつさんと、一ケ寺を建立ありし、これすなはちその法鏡山妙傳寺也、昔は西洞院にありしと也、さて本堂高祖上人の御影は、もと圓意といふ僧、上京飛鳥井町に寺をいとなみ安置せしに、さる事ありて、妙傳寺日悳上人の代に當寺にうつせり、圓意弟子ある時邪氣にきそひ、此御影の背を錐にてもみしに、其佛罰のがれず、翌年其錐もみし月日同時に、圓意弟子矢にあたり死すと也、しかも御影をもみし所、又かのものゝせなかも同所を矢つぼにて、高き所より射をとされ、弓箭の死をせし事、ひとへに佛像の罰すみやかなる事さも有べし、これにつきつく〴〵と思ふに、木石繪等に物のかたちをあらはす時、その物の靈やどらずといふ事有まじ、それにまことの奇特を見する事は、神明に適すれば也、もろこしの丁蘭父母の木像に希代の事ありしは、丁蘭まことの心の孝行より、その靈をそなへたるもの也、劉黄凡は木馬を作りければ歩、また張僧繇は龍を畵ぬれば動きたりぬ、これみなその精をよくそなへ妙をあらはすもの也、よろづ其物にその性のそなはる事あり、本草綱目に東壁土とあるは、文字の如く東に向たる壁土の事也、伏龍肝と云は竈の土の事也、されば同土を粘したる物なれ共、其證替れり、東壁土は氣味甘、伏龍肝は辛、猶南壁土それ〴〵の病に用ゆ、

法の道うつす甲斐ありや蓮華筆

○御所八幡

當社は八幡ようかうの地也、しかるところに、源の尊氏公、暦應三年に再興あり、それより御所の八幡と申なり、尊氏公をさして御所といへり、又等持寺とも號す、尊氏東夷退治の御立願に、建武二年當社へ御參詣あり、此度所願成就せば一日に大社三ヶ所御建立あるべきとの刻、社壇の戸びらひとりひらき、白き鳩しろき絹をくわへ坤にとびさる、めでたき瑞相なりとよろこばせ給ひ、其後東夷をほろぼしまし〳〵て願滿侍るにより、建立の事おぼしめさるれ共、一日に三ヶ所はなりがたく、三ヶ所の表示とて、當社を等持寺と號せり、文字に寺三つあり、それによりて尊氏公の道號をも等持院殿と申奉る、末社九所、伊勢、春日、祇園、北野、稻荷、河原神、武氏神、諏訪、熱田、いにしへはけいだい四町四方にて、本社八棟作りに一二の鳥井などたちしとぞ、東に本地堂あり、藥師となむ、今はわづかなる宮居にてましますしかし參詣の人絕る事なし、

八まんのうつりますかや月の弓

○頂妙寺

當寺は仁皇百三代後花園院の御宇寶德元己巳年、日祝聖人草創なり、後柏原院永正十癸酉年四月十二日寂す、壽八十七、辭世、

八十あまり七年かけて人を渡す
命ながらのはし柱かな

東照權現の御時より命ぜられて、下總國葛飾の郡正中山法華經寺を、妙國寺、本法寺、當所、三ヶ寺にて輪番に貫主たり、妙國寺開山日珖僧正慶長三戊戌年八月廿七日に寂す、壽六十七、本法寺開山日親聖人長享二戊申年九月十七日寂す、壽八十二、

なき人の跡を弔ふ過去帳の
いつの日次にかへりといねん

一、本堂は南向也、しばらく頂妙寺といふ額侍りしが程なく是をおろす、此筆者洛陽に住居せし筆道修行の能書なりしか共、凡俗の身なるにより、かゝる寺院には用捨故か、本朝支那その例侍れ共、宗躰の寺法いかゞ知らず、但もと額のなき堂なる故か、一たびはかかりつれ共、猶改めていにしへを守れるか、

一、三十番神堂幷拜殿あり、

一、東向に十羅刹堂あり、傳敎大師の作の大黑有、

一、西向に日蓮御影堂あり、開基日䫻の像是在、

一、二王門には東は持國西は毘沙門阿吽の像、安阿彌の作なり、むかしは和泉國高倉にありしを、當寺三世日珖聖人夢のつげによりて此寺にうつせり、立願の事ある時、數の灯明(とうみやう)をかゝげ侍る、聞しよりたつとくましまます事、短き筆にいかでかはあらはすべき、そのしるし多きをよくもしり侍る、又草鞋を大きに作りて願人かけぬるはいかなる事ぞも、

一、當寺内の柹、名物也、江府などへもつかはし侍る、風味外よりすぐれたり、むかし此寺にて柹出侍るに、即興、

あぢはひも法華をしるぞ寺の柹

法華涅槃のときは醍醐味なりといへる事を、いにしへ聞て、かうつかうまつり侍る、若かりし年の口ずさびをおもひ出、今此折ふし老の身の甘なひぬるに、淡く覺て、句一ッあらたにつくり書つけゝる、われながら未熟なる事におもほゆる句を、猶青柹の熟柹(じゆくし)とふぞやと、又雲脚(うんきやく)がもしらずながら、

しかくるや口きりの茶に法華釜

一、鐘樓、此鐘の聲黃鐘調也、攝津國天王寺六時堂の前の鐘の聲と同、但寒暑に從ひて變る事なれば、猶聞人耳底のためしあらんか、鄭の子產は女の啼聲を聞てそのまゝ搦捕、汝人を殺し調子ありとせめられ、拷問にたへかねて、夫を殺せし事あらはれたり、奇妙の事也、公冶長は雀のこゑだに聞しれりし事ありと也、

一、本堂の東に骨堂とやらんいひてこれあり、死骨剃髮など收る所か、たしかにはしらず、但存命の人もぬけたる齒などをおさむる所か、さて又こゝのついでに思ひ出侍る事あり、齒のおちたるを二たび生ずる事、黑豆をうしにはませ、その糞にまめのかたちそこねざるを取、ねずみのほねと二色ともにやき、ぬけたるはぐきにぬりぬれば、かさねてまた齒を生ずと、もろこしの醫書に侍り、その人によるべき事なり、くはしくはしるさず、さて此一ヶ條には、死骨剃髮の事書べきとて、えんにふれ、こゝにはよしなき藥方の道にうつり行侍るにつきて思ふ事あり、後世ねがはんとてえんにふれわきみちへ行、肝心の後世の道うとくなる事あらんか、

〇六角堂

寺號頂法寺といふ、本尊は如意輪觀音、一㯲手半の金銅なり、聖德太子淡路の海の濱にて、朽たる筐の浪にたゞよひきたるをとりて、開き見給へば、此如意輪なり、すなはち御守佛として、御身を放ちたまはず、其後堂宇を構へて尊像を安置せんとおぼしめさしむるに、老嫗の敎へによりて杉の靈樹を求め給ひ、用木として一堂を作らせられたり、他木をまじへず、其宇六稜也、万治二年の春開帳あり、拜まれさせ給へるは、弘法大師の作と云、この内に尊像ましますよし也、過にし比七夕に立花侍るを、

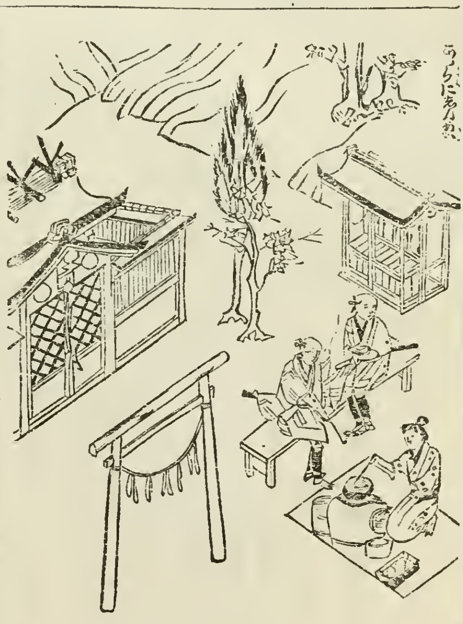
六角や花さす瓶もきかうてん

一、毎年兩度の祇園會山鉾に、次第の鬮此堂の前にて定る、七日のは六日の朝、十四日のは十三日の朝、雜職こゝに來りて鬮を持出る、山鉾の町人より行司出て鬮を持歸り、翌日神事の刻、次第をみだらず又雜職に渡す、

一、毎年二八月出替りの節、下部の奉公人共この堂にあつまる、

一、太子堂あり、

○粟田口神明



此神明山は、そのかみえびすの宮ありて、えびす谷といふ、然るに慶長十九甲寅の年九月朔日、靈夢によりて、伊勢太神宮をうつし奉る也、其とき社の方角いづれのかたにむかはせ奉らんとおもふところに、たつみのかたの山より烏二羽とびきたり、榊をくはへて今のやしろのうしろの松の木にとまり、さかきを下へおとす、さるによりて御神の告とおもひ、其榊のおちたる所に御社をいとなむなり、其比の神職左衞門尉宗光と云、當社は南向なり、すこしひつじさるの

方へふる、山にて方角おぼつかなきゆへくはしく記し侍る、隣は岩倉山、あたりにこまか瀧といふもあり、末社に八幡えびす 井洗米のいけあり、

えびす谷や神明山の弟草

○安祥寺

伊勢物語に、むかし田村のみかどゝ申すみかどおはしましけり、其時の女御たかきこと申すみまそかりける、そのうせ給ひて安祥寺にてみわざしけりとあり、これ山科なる當寺の事也、開基は眞雅僧正也、田村の帝は文德天皇の御事也、女御の多賀喜子と申すは、右大臣良相の息女也、堂の本尊觀音、むかし五條の后順子御建立ありしとなり、たかきこうせ給ひて、四十九日の御佛事此寺にてありけるとき、人々のさゝげ物、金のうち枝などにつけて、堂の前にたてられければ、山もさゝに動きいでたるやうと侍り、

山もさゝにうごくやうなり雲の峯

○關明神

逢坂關の明神は蟬丸也、庵の內に琵琶を抱、うき世のちりを遁れたのしめると也、延喜第四の皇子といへるはいかゞ、不審なり、古今集に蟬丸の歌三首入たり、逢坂の嵐の風は寒けれど行衞しらねばわびつゝぞゐる、殘二首こゝにしるすに及ず、古今集は延喜五年の撰也、其比主上廿二歲にてましします、此年ばひにてかやうの秀句よませ給ふべき皇子おはしまず事有まじ、されば延喜の皇子といふ事信用しがたし、仁明天皇の時の道人にて、常に髮をそらず、世人翁といふと也、又仙人なりといへる說もあり、

村雨や花をふらする琵琶の曲

○三井寺

山號は長等山、寺號は園城寺也、天智天皇天武天皇持統天皇三代の帝御誕生の時、御産湯當寺の井の水たてまつりしゆへ御井寺と號せり、後改めて三井になせり、元祖は教待和尚也、二代智澄大師は渡唐し給ひて、佛經を寫し秘法を受得て歸朝ありし也、寛平三年十月廿九日に、七十七歲にて入滅、存命の名は圓珍、諡を智澄大師と賜はる也、當寺に龍神より俵藤太秀鄉に贈りし釣鐘あり、釋尊祇園精舍うしとらの隅につり給ふ鏡なりといひつたへ侍り、然れば文永の亂に山徒の手に渡り、峰より落し侍るによりて、うちわれぬる所に、白龍來りてこれをねぶる、たちどころに

われたるところいえあひ、もとの如くの聲いでけるとぞ、今に至りて此寺の重寶なり、

みだるなよ釣鐘草の花の風

○智積院

寺號根來寺といふ、開山は覺鑁上人なり、宗旨眞言にて、勤學の寮舎螢をひろひ雪を集めていたづらにねぶらず、鑁上人薙染往二興福寺一習二唯識一、一夕倚二春日明神靈夢一學二密敎一、即至二高野一營二傳法院一、住有レ年入レ定云々、元亨釋書に審かなり、後弟子上人の廟を紀州根來にうつし、又道場をたてゝ根來寺と號せり、智積院は根來寺の學頭也、根來沒落によりて、智積院を洛陽東山にうつさる、又南隣に一寺あり、禪の南花和尙すめる所なり、後相承僧なく、大樹公命によりて、智積院より南花和尙の寺をも住せしむるとなり、

窓の前に智も積やたまり雪

○寶塔寺

深草山寶塔寺は、もと眞言律の寺にて、極樂寺と號し、今も村の名を極樂寺村といふ也、抑々仁明天皇芹川行幸の時、御琴の爪うせ侍るに、供奉の公卿その外尋ねさせたまへ共、求出されず、漸くありて今の寶塔寺の地にて尋ね得たまひし、これによりて伽藍建立あり、其比は極樂寺といひ侍り、今の寶塔寺也、元祖は聖寶、中比日像菩薩法華を弘め給ひしより、此宗旨にて日像を元祖とせり、極樂寺の僧良桂事、龍華傳にくはしき故こゝに詳かならず、又芹川の事竹田によみあはせられし歌あり、嵯峨によみあはせらるゝ方角各別なり、なを考べし、

一、御塔といふは、日像菩薩の舍利をおさめ塔を立る靈地なるゆへなり、

一、日像弘通のとき、說法の高座石なり、

うぐひすや柳のいとに琴の爪

○淨華院

當院はもと禁裏の佛殿にて、淨土の本寺なり、法然上人のつたへをうけ、寶物など侍る寺也、倩おもふに、それ念佛の行者しな〴〵あり、融通念佛、踊念佛、六齋念佛、歌念佛、鉢控念佛等、かねをならし、太鼓をうち、瓢簞をたゝき、又千本念佛、壬生念佛には狂言さへまじへ、うたふもまふも法の聲、かくその流々所によりて名はかはるとも、難波の芦は伊勢のはま荻なるべし、然れば何れの念佛修行なり共、終のよるべは變るまじ、さればわがおもひされるかたに從ひ、唯ひ

たすらに名號を唱へ、他念なくあみだ佛と頼み奉るべきものなり、そも〳〵念佛の功積り、臨終に聖衆の來迎にあづかり、西方十萬億土も、一念のうちにこゝを去こと遠からずして、極樂世界に往生する事、觀經に説たまへるにあらずや、なんぞほとけに妄語あるべき、一心不亂に念佛せば、尼入道の無智のともがらも、身の後は上品上生にいたらん、まことに極重惡人無他方便、唯稱彌陀得生極樂、

　月花を見てもこゝろにぞかけ念佛

むかし〳〵衣更着の時正に、ある淨土宗門の前を過りぬるに、説法はじめなん時、近く見えわたり、色々の袖をつらねし聽衆群集し侍るに、つれし小倀のまよひもやせんと、跡をみかへしければ、年まだ若かりし人、かたちすぐれて賤しからず、おふしたてられしと見えぬるが、よそひ風流にして詣でけるに、

　花の袖やあとより戀のせめ念佛

せんかたなみだに臥しづまんはおろかなり、狂言綺語のたはぶれ、本心くらます事なかれ、無始の輪廻は一心の執心よりおこりて、生死の牢獄やぶりがたし、いにしへの歌に、

よのうきめ見えぬ山路へいらむには
　おもふ人こそほだしなりけり

それ和歌が徳は想持の義、陀羅尼とおなじといへり、天竺の陀羅尼も、其國の人のことば也、和國の三十一字の詠叉爾なり、阿彌陀といふは梵語にて、漢には無量壽といふ、阿は無空の義、般若の徳なり、彌は量、假の義、解脱の徳なり、陀は壽、中道の義、法身常住の壽命なり、支那晉の惠遠法師は廬山に白蓮社をいとなみ、ちかひて山中虎溪をすぎず、一向往生極樂の行業他事なく、本朝惠心僧都は、往生要集をえらびて、漢土まで名をほどこせし、めでたき往生人なり、天親菩薩の淨土論には、淨土に生れんとおもはゞ、菩提心をおこすべしとか侍り、其外法然上人の作りたまふ物にも見へ侍り、

　ぼんなふもぼだいと聞ていにしへの
　　白びやうしさへほとけとはいふ

隨緣のなみにたゞよひ、妄執の雲にさへられて、胸の月ひかりを現はしがたき下愚のわれらごとき、穢土をはなれて、淨土にはいかでおもむかんや、かなしきかな、すみやかに地ごくにおち、分茶離迦とやらんに

て、いかなる獄卒にか行あひ、いかばかりの苦をかうけん、それ地獄の數おほし、等活、叫喚、焦熱、阿鼻地獄猶これあり、餓鬼畜生修羅、かくあさましき事のしな〴〵かへりみて、はやく五塵六欲をいとひはなれ、佛の敎へに從ひ、如說修行を勵まし、常樂の果をもとむべし、かりそめも惡をなせば惡にむくひ、善をおこなへば善をうくること、影のうつり鏡に姿をあはすがごとし、勸善懲惡の事をわすれず、無常のきたりなんをはかるべし、易の繫辭にいはく、日往ときは月來り、暑ゆくときは寒來る、此理をさとし、善惡の到來まのあたりなる事思ふべし、本心の神靈を昏蔽し、生ながら地ごくに入らんはうとましく思ひ、よくつとめ、いかにもして如來大悲本願のごとく引接にあづかりて、無量億劫の業障も消滅し、安樂國に生れんことをねがひ、一返の念佛つもり、一粒の種の大木となるがごとし、岷江の觴を浮ぶるも、楚に入て千尋の底なるぞかし、千里に赴くも一歩より始まり、その心ざす道よこしまにまよふ事なく、かんがへ思ふべきなり、人を養ふ物も口より入り、人をころすものも口より入なり、源氏物語に好色をいへるも、人のこのむ所よりして、道にひきいれんの方便なり、色欲とのみの管見は誤りなるべし、易は乾坤をはじめ陰陽男女の事をしる也、人倫のはじまりは夫婦なれば、なくて叶はぬ道也、されば濫すれば人倫をみだり、色をいへるは色を戒めん爲也、無爲の極樂をねがふに、五欲を滿足するは淨土とをしゆるは、五欲をはなれしめんのはかりごと也、弊起(まじめ)はこれ病、つかざるはこれ藥、妄念來らば常なき風にはらひ、飛花落葉に此身をよせ、夢幻泡影に命をそへ、はかなき事を觀じ、地獄ある事をしりながら、刹那もあみだを忘れ、須臾も佛號となふる事おこたらんは、何の仇ぞや、南無阿彌陀佛の六つにもとづかずして、眼耳鼻舌身意の塵にたぶらかさるゝ念々の心、いたづらものとさだめ、かれを退治せんと思ふ所の善心、かれとこれと、一身に物二つかと思へば二つにあらず、一つとおもへば一つにもあらず、たとへば水の月のごとく手にもとられず、たとへば山びこのごとく目にも見へず、火に入土に埋ても滅せぬくせもの、くるしめもうけ、たのしみも極る、王公もまぬがれぬ一大事、みだりにとらずして、終焉のめでたからむことを、ひたぶるにあみだ佛にうたへなば、願

なごかむなじからん、されば欣求淨土とをしへたまふ、三途八難をのがれ、七寶の山にのぼり八功德池にあゆみ、いのちは無量にて不生不滅の身、清淨堅固の妙躰なれば、塵勞の境界にをかされず、阿字の一字眞言の肝心也、深く習へば舌相言語みなこれ眞言なり、三大僧祇の修行も一念の阿字にこえ、五相瑜伽の寶藏を一座の觀心にひらく、いかなる鈍根のものも一字の眞言は習ひやすし、しかれば鈍智のわいだめなく、念佛門に入、南無阿彌陀佛とゝなふれば、たとひをもきつみも、他力自力によて、釘抜のよく釘をぬくがごとしといへり、いよ／＼佛の金言を恭敬し、如來のちからをたのみ、一佛淨土に生れん事、心にふくめるこそ肝要なれ、

他念なく口にとなふる阿彌陀佛
むねのれんげぞ臺座なりける

京童跡追巻第一終

京童跡追巻第二

○相國寺

萬年山相國寺は、尊氏將軍三代義滿建立にて、夢想國師を勸請の所也、むかし當寺の僧横川に人の問けるは、木篇に目の字はいかゞよみ侍るにやと云り、横川答に、篇も旁ももくの聲ある字也、よみはしらず、聲はもくなるべしといらへられしに、そばなる兒、相國寺の相の字なる物をといはれ、さと、ごよみになりにしとなん、横川に限らず、かゝる失は誰とてもある事なり、羅山子詩に、水を上に書て下に工といふ、こうの聲ある字を書たり、博學のともがら見る人不審かりしに、ある少人江戸の江の字也といひける、まことにさにてあるなりと、人々手をうちあへり、

つきぬ種や萬年山の瓶の花

一、定家卿時雨の亭の遺跡此所に侍り、難波津の道におもむきあるは、八月廿日を心がけてまかる事なり、又歡喜寺といふにも由來これあり、是は寺町通のかみに有、千本の白毫院にも由緒有と也、

○建仁寺

東山建仁寺、榮西いとなめる時、石木をよする人夫に力をそへられんと、みづからの名をよばしめらる、榮西〳〵といふに随て、人夫どもいさむ心つき、造立はやく成就せしと也、寺内にたつとき摩利支天あり、

　月の劔これをいはばや丸し天

又當寺の門前西の方に送葬の場あり、火葬のけぶり絶ず立のぼり侍るに、いづれの日か我ならんと心ぼそく、まことにあすしらぬわが身と思へど、くれぬまのけうは人こそかなしかりけれとよめる歌、いともあはれにおぼへ侍る、されば棺を舁ぐもの、手のいとま得る事まれなりとぞ、なきがらおくる方こゝのみならず、鳥部山、船岡、中山、なを形そのまゝに土にはふむるもあれば、ふもとの道はかはるともおなじ死出の山路のつれなるべし、刹利も首陀もかはらぬ所、つゐにゆくみちとは兼てきくものながら、常なき風の音をよそにのみおもひて、けふも又いのちのうちに暮侍る也、南無阿彌陀佛、

一、いつの年いづれの國の侍にてやらんありし、船岡にをひて主人第三年に追腹きりしあはれを見侍りき、いさぎよく神妙なる最後、みな人なかぬはなし、握及の前、しづかに卒度笑ぬるに、歯黒つけたる士にてありけり、あつぱれ世にながらへ忠を盡しなば、いかばかりの粉骨あらんと、見る人きく人云あへり、もろこしには芻靈といひて、その人のかたちを草にてつくり、穴にうづみし也、その後孔子などのころは、木にて作り、あなにうづむ、これを木偶人といふ、孟子梁の惠王の上篇に、仲尼曰始作レ俑者其無レ後乎とおほせられしなり、此ころは俑は木偶人の事なり、後とは子孫の事なり、此人形をつくるものは不仁なるゆへに、子孫もたゆべしと、孔子のにくませたまへる事なり、いはんや人の絶命をや、そのゝち秦の代にはじめて殉死あり、これ日本にいふ追腹の事也、史記に見えたり、秦の武公卒す、雍の平陽といふ所に葬る、此時に殉死六十六人、是主君のあとを慕ひて死するはじまり也、それより又のち穆公の卒せるときに殉死百七十七人、此内奄息仲行鍼虎といふ三人は、ならびなき臣下也、國人従死をかなしみて、黄鳥の詩を賦す、これ詩經に見えたり、又禮記に、陳乾昔病にふし、すでに臨終のまへに、われ死せば二人の婢子を殉

死させて、棺を大きにつくり、兩(ふたつ)をさしさはみてはふむるべしと遺言あり、二婢子はかたちうるはしきつかはれ女のこと也、しかるに陳乾昔、その子に尊己といふあり、但二婢子の腹にはあらず、此尊己、いかに父の遺言なればとて、殉死は禮にあらずといひ、父命をそむきて二人の女死をまぬがれたり、親の命をそむくは不孝なれ共、これは亂命也、そむきても不孝にあらず、たとひ不孝といふ共かろし、命に從ひて殉死さするは、禮にあらぬ事なにかこれにすぎんといひて、二女共にころされず、此事檀弓の下に見えたり、まことに日本は義の正しき事、もろこしよりこえたり、

○鳥部山

爰を阿彌陀峯といひ、又裾を鳥部野といふ也、まことに白骨は土よりも高く、紅涙は雨よりも頻也、

千載集
鳥部山をもひやるこそかなしけれ
ひとりや苔の下にくちなむ　民部卿成範

玉葉集
分きつる袖のしづくか鳥部野の
なく／＼かへるみちしばの露　俊成

往(い)んじごろ、さる人の追悼に、
聲あげてなきがらとふや蟬の經



○大谷

此所は文永九年に草建にて、阿彌陀堂有、親鸞上人九十一歳にして弘長二年十一月廿八日に遷化也、四百年忌の時一宇をいとなめり、親鸞上人古塚、もと知恩院山門のあたりに有けるを、知恩院造立の刻(きざみ)此大谷に引移さる、西本願寺の墓所又學問所なる由にて、岩屋などさながらしみ／＼とおぼゆ、名に高き藤波よるべのあるじとし、花に宿かりてうき世をよそになし、しばしの靜座もすなはちの心佛にて侍れば、これ

も御たすけの御恩とありがたく、
藤の花は瑤珞なれやほとけ達

○立本寺

山號具足山といふ、日像菩薩開闢なり、弟子大覺大僧正のとき、後醍醐天皇勅命により、弘法の地を洛內の櫛笥にたまひし綸旨、當寺にあり、其後後陽成院の御宇に、豊臣太閤秀吉公文祿年中に、此地を今出川にうつさしめたまふなり、近曾の住持日審上人名譽の僧にて、說法をひろめ、受法の人數あげてかぞへがたし、富樓那の辯舌もかほどにはとおぼへし、世壽六十八歳にて寂す、辭世、

むすびをく法の誓のちぎりには
鷲のお山の月をこそみん

五逆の提婆は天王如來の記莂にあづかり、八歳の龍女は南方無垢の正覺をとなへたり、されば男女老若、此經王の功力により、即得成佛うたがふ事なく、行住坐臥に南無妙法蓮華經をおこたる事なかれ、

罪をふせぐ釋迦はやり梅や具足山

○鹿苑寺世に云金閣寺

當寺は相國寺を造立ありし尊氏將軍三代義滿將軍の御菩提所として建立也、高閣をたて、金箔にてのこるところなくをし侍る故、金閣寺といふなり、いつのとしにかありし、紅葉のころ此寺にきたり、若年の友どちと、

山林のもみぢにあそべ鹿の苑

此時のつゐで、北野の比屋つくり木植しげり立より見侍るに、古木の臺のにげなきにもうるはしきに、枝いろ〳〵花ある物つきてそだてしに、郭橐駝おもひやられし、爪二其膚一以驗二其生枯一、搖二其本一以觀二其疎密一といましめし事、よくもこゝろうるものならし、しばし庭にたゞずみて、

草も木も成佛するとくのりの
まことなるかな庭の羅漢樹

○大德寺

龍寶山大德寺、宗峯妙超元祖也、宗派世上流布の本侍る故、こゝにくはしからず、大燈は播磨の國の人なり、父母子なき事を憂ゐて、書寫山の觀世音に祈誓をかけ、其後すでに懷胎してうめる一男子也、相州鎌倉建長寺大應國師の弟子、悟道發明の僧也、建武四年十二月廿二日に遷化、世壽五十二歳、後醍醐天皇の御時

大燈國師と諡を賜はりし也、當時に南派北派といふは、一休宗純養叟宗頤などの時よりの事か、

くる秋はいかなるかこれ西の方

○妙心寺

開山關山惠玄なり、大燈國師の弟子たり、關山父は信州の人、源氏高梨高家の末葉也、惠玄いとけなき時、相摸の國巨福山廣巖和尙に學び、其後花園院關山を住山となさせ給へる也、かるが故に當寺を花園ともいふ也、山號は正法山、法皇の一字は玉鳳院と號せり、近年法塔の天井に、龍、探幽齋法眼の時に畵也、關山遷化は延文五年十二月十二日、行年八十四と也、

袖にもてる拂子めきたる尾花かな

○釋迦堂遺教經

二月九日より十五日まで一七日のうち、僧あつまり經よみをこなはるゝなり、堂の如來の尊像は用明天皇の御守本尊と也、院內に護摩堂、不動は慈惠のきざめる也、本院を大觀音寺用明坊といふ、年毎の中春に緇素むらがりあつまれり、又此所に古き五諸車ありし、いかなる事共いまだとひ侍らず、

經をよみ燒香するやにほひ鳥

○仁和寺

仁和年中に、宇多のみかど、室の扉いとなませ給ふによりて、御室ともいひ、仁和寺とも號せり、比叡山を延暦の頃草創ありし故延暦寺といへるがごとし、此仁和寺は、かたじけなくも皇子のすませたまひ、殊に僧官をのぞみあるものにゆるさせ給へる也、內に弘法大師の堂あり、三月廿一日に男女のまうでおほし、門の前に下乘を石にほりて立られし、賀茂の氏人の筆跡となり、

一、雙岳といふも當所の事也、

色々にならびのをかのはつもみぢ
秋のさが野のゆきゝにぞ見る

一、近きあたりの民家に陶あり、又いにしへより仁和寺の眉作といふを、

仁和寺に見るや柳の眉つくり

○新住吉

此宮は五條高辻にあり、むかし三位俊成卿攝州住吉大明神を勸請の所なり、いにしへは宮居方一町にてありしに、應仁の亂に回祿せり、そもそも住吉大明神は、西の海檍原の鹽路よりあらはれたまふ御神なり、

くはしくは此奥攝津國住吉の所に書しるし侍るが、
俊成卿の歌に、
和歌の浦のみちをばすてぬ神なれば
あはれをかけよすみよしの波
雲の波に月や出現の神ごゝろ

○實相寺

上鳥羽木井郡正覺山實相寺は、開基日蓮末流大覺大僧正の建立にて、妙覺寺の末寺なり、此所に先師松永氏長頭麿を葬、されば滑稽の道のすき人猶あふぐべき寺なり、今の世に俳諧もてあそぶともがら、京師も遠く國々も、誰か此翁の掟にしたがはざらんや、十一月十五日か、人々と此寺にまいり侍る時、
奥ふかき雪佛とふや作禮而去
俳の好人長頭麿の像をかゝせ、うるはしき表補繪にて、興行のときのかけ物なるに、予に讃せよといへり、いなび侍るも聞うけず、おしていへるにのがるゝ事かたく、畫圖をかへり見侍るに、末廣をもてるかたなり、その禮紙に書つく、
末ひろや詞の花に御傘
御傘といふ書は翁齢の後の法を、世にあまねくひろめられしなり、かの末廣がりの狂言に傘とりあはせ侍るを、又こゝの句にかれとこれとを幸取用る事、まことに狂言也、

○妙蓮寺同鳥羽也

開基日像菩薩也、いにしへは寺内三百間有餘にて、堂舍いかめしかりしに、いつの比よりか衰微して、寺内田畠となり、本尊も民家にありしを、寛文六年のころある僧きたりて小堂をいとなみ、いにしへの本尊を安置し、すたれるをおこすものなり、毎月十九日に開帳あり、
日蓮御影　日像上人作也
中　尊　日像の筆也
日像御影　大覺大僧正也大覺大僧正は貞治三年甲辰四月三日に壽五十八にて寂
をのづから雪にや鳥羽の作り道

○黄檗山

山城國大和田に承應庚子年建立の寺なり、隱元禪師來朝のはじめはしばらく富田にすみたまひ、それより此所にうつり、いよ〳〵禪風さかんに、從學の僧おほし、抑豊臣關白秀吉公、文祿元壬辰年朝鮮を征せんと、兵をもようしたまひ、ほいのごとく、遼東の李子

といふ將をとりこにし、いきをひをあめがしたにふるひ、掌に八隅をにぎり給ふ比、朝鮮にて八歳の兒をとらせたまひ、日本へめしつれられんと、改陣のとき、おなじ御船に侍り、古郷をさる事をなげきかなしみて、二首の詩を賦す、秀吉公甘心ましくて、ちごを朝鮮へ道よりもごし給ふと也、その詩句、

煙水茫々歸路長　蒼波萬里隔二故郷一
與レ人欲レ語々音別　終日無レ言送二夕陽一

又

夢裏分明歸二故郷一　双親逢レ我問二扶桑一
華鯨樓上一聲響　撫レ枕猶疑在二大唐一

まことにあはれなる句々也、誰か落涙せざらんや、いかなる鬼神勇猛の士も、あはれをそふるはむべなり、しかれば今の御代、仁道の德澤四海にみち、支那の名僧までも、をのづからしたがひたてまつり、みづからもろこしぶねを日のもとによせて、厚きおほんいつくしみをかうぶれり、

漢竹もなびくや御代の春の風

唐僧問、道什麼、答、清風動二脩竹一、僧又曰、如何、答、滑稽句、僧云、何不レ學レ詩、答、僧是僧俗是俗、俗喫レ茶、我又對二繩床僧一欲レ破レ眠、狂歌咦、

何事も空とさとりてそばきりを
　三十棒にうたせたきかな

○元三大師御影

比叡山にあり、慈惠大師ともいへる也、古き繪像にて、近くおがめばあざやかならず、遠く見れば御かたちあらはにおぼゆるは、予病眼ゆゑ、われはかりかくありて、眼疾なき人は遠近かはる事あらざるか、さて靈像のたつとくまします事、凡慮の筆舌にあらはしがたし、靈前に奇妙の御鬮あり、信仰の人これを取、文句あたらずといふ事なし、むかしそれがし此御くじを取侍る事あり、尊影橫川にいまぞかりけるとき、その後又飯室にましますす比、兩度の御くじ同事にて侍りし、△莫レ作二等閑看一、此結句なり、一ッのおもひよる所に、日をへて二たび取ぬる御鬮おなじものなる事、奇妙也、さればおそるべしたつとむべし、

三ヶ月の尖し影や角大師

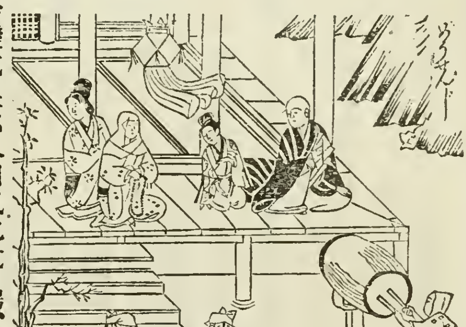
一、張良占とやらん云て、四言四句に作り、當所にて

笠物(うらなふもの)あり、これ相似たる事ながら、大師御鬮とは各別なり、もつとも同日の論にあらず、卜士又斧を鍬といひし類侍れば、工夫に功あるべし、

一、元三大師の御名の事、夏正は斗柄建レ寅三陽交、△泰の䷊卦也、象レ人也、かくのごときの子細によりて、つきたまへる事か、猶詳かにことはり盡し侍べけれ共、姓名の義さのみつぶさからずともありなむ、又勅言大師ともいひ侍る、これもいさゝか巨細あり、又々大師灌頂の起請といふ事あり、口傳とて、しる人秘密せるを、ふかめずしてあらはすべき事、且は道にも背き且はしりがほとそしられなんも益なし、故におぼめかせ侍る事ほいにあらず、これらの義、山門博學の僧に聞侍りしもの也、まことに赤蜻蜓の黒焼喉痺の藥なりと、あまねく人にしらせられぬる心ざしこそたうとけれ、

○妙泉寺

松ヶ崎妙泉寺は、開基實眼僧都也、むかしは歡喜寺と號し眞言宗にてありしが、日像上人の敎化により法華宗になり、すなはち又村中の者、のこらず其時法華になりしと也、されば春分三月雀變成レ蛤、秋分九月



蛤變成レ雀、又田鼠化成レ鶉、うつりかはる人の心、あすか川の淵瀬なり、萬事はみなすゑの露もとの雫、

一、此所に題目躍あり、七月十六日の夜、男女老若一在所のこらず、題目にふしをつけて躍、其有様稲のはへ出てよりみのるかたちとやらん、はじめは立てめぐり、後にうつぶして稲のみのりてふしたる體に躍るなり、經に踊躍歡喜とか侍る、その心なるか、さて松ヶ崎と云名所、山城と近江にもあり、古歌に、

夏の日も涼しかりけり松ヶ崎

これや氷室のわたり成らん
是山城也、又江州の松ケ崎には鶴をよめる也、
拾遺集
千年ふる松ケ崎にはむれゐつゝ
田鶴さへあそぶ心あるらし　元輔
又、
聲たかみをどり大夫か松ケ崎
足も手もはね題目や躍ぶり

京童跡追卷第二終

京童跡追卷第三

○春日

春日大明神は天兒屋根命也、神道三ケの大事の一つとなれば、容易(たやすく)いひ出ん事とがめおそろし、されども和光同塵は結縁のはじめ、もとより慈悲萬行の日の影、三笠の山に照るにあらずや、そも〳〵日の神岩戸を閉、とこやみの世となり侍るとき、二たび日の神を呼出させたまふは此命也、誠に世人擧てあふぐまじきは非也、四所大明神、第一御殿は武雷命、又曰武甕槌神、第二御殿は齋主命、又曰經津主命、第三御殿は天兒屋根命、第四御殿は姫太神、天照太神の分身也、又若宮、凡(すべて)浮屠氏の釋藥地勸文ともいへり、
天兒屋根命は、神の事をつかさどれる宗源なり、よりて此國の臣下たるともがら、猶よく守り給はむと也、これ藤原氏の元祖たり、神護景雲元年六月廿一日、常陸國鹿島より、武雷命白鹿にのりたまひ、柳の枝を鞭とし、伊勢名張の郡にまし〳〵、中臣の連時風秀行など供し奉り、同二年正月九日三笠山に至らせたまふ、

齋主命は下總の香取より來りまし、天兒屋根命は、河内國枚岡よりうつりまし、姫太神は伊勢國よりおはしまして、四所の神三笠山にすませ給ふなり、貞觀元年十一月九日祭禮はじめておこなはる、

續千歲集神祇に
春日山あまつこやねのます鏡
　うつりし影の月を見るかな　中臣祐茂

春の日も光ことにや照すらん
　國くしの葉にかくるしらゆふ　俊成

金葉
いかばかり神もうれしと三かさ山
　二葉の松の千代のけしきは　周防内侍

續後撰
春日なるみかさの山の宮ばしら
　たてし誓は今もふりせず　素俊法師

一、春日の御祭といふは十一月廿七日也、平生の神供管絃にてそなへ奉る、予央すぎ侍る比奈良にまかり、春日の禰宜高畠に侍り、渠がもとに宿さだめ、日を經てこゝもかしこも見めぐり、日記作りて外題を奈良刀と云、わざの鈍ければ也、此内にかきこめし狂句共、今とり出てついでよくこゝにうつさむと、見侍れば多くは同吟あり、此奈良刀の草藁は、若かりし時もたび〳〵新の能など見にまかりける比、發句つかうまつり、長頭麿添削の上にて函底に打をきしまゝ、あつめて一小冊となし侍るを、此たび取用ひんとすれば、今ほど同作意ありて、支證の出しをくれになり侍る、しかしわれに應じての爪印、年へて見侍れば、等類になる共おしからぬ句作數多侍る中に、兩句書つけん、かへす〳〵愚句をそだてんためにてはゆめゆめあらず、

鉢の木をするや薪の能太夫

猿澤の池にえなれや御まつり

かうやうの句、むかし〳〵貞徳翁に見せ侍る時、愚作は能役者と結句に置けるを、翁の丁管にて、能太夫しかるべし、三の句直して墨引べしと、珍重といふものうけたまはりし、御祭の句はそのまゝ點すべしと、吞盛といふものに仰せて、其後見せ侍りしとき合點なり、懷紙どもいまに所持し侍る、武陵におもむきし時、みちぐさと名けし一冊、又赤手拭といふ草子、これは宇治見物のころ書つゞりしを、袖中に携へ翁のもとにゆき、一返直に讀て、老耳をかたぶけられ、再三は小姓によませられ、付墨慈斤ありしも、今ひらきぬれば、此比の人の述作に似かよひたるのみ也、いづ

れかさき、いづれかのち、互にしらず、人の句を犯し侍らぬ理りしかなり、愚句は廿年あなたの事にて侍る也、和歌の浦波に心よするほどのともがら、誰か他の句を奪心ざしあらんや、しかもわがおろかなるを似する人はあるまじ、△此やこのゆくもかへるもわかれてはしるもしらぬも逢坂の關、此歌蟬丸也、しかるに素性法師家の集をうかゞひ侍れば、右の歌一字もたがはずこれあり、猶日のもとの人と唐人の詩文さへおなじ作あり、いはんや十文字餘七字の内、ひとしき類なくてやは、指をおりてかぞへぬる、黄吻の作者も、それがしがをろかなる先吟をはつりて、材木にせられんとにはあらず、よその作意を予が趣向にせざる事、年月をかゝなべたうびよ、とまれかくまれよし野の川のよしやよの中、

のみうたへかすんがのまつり酒の友
ぬさいれていたゞくや鹿の袋角
此山の月をやいはむ春日盆
三笠山やよろづ代よばふ雪おこし

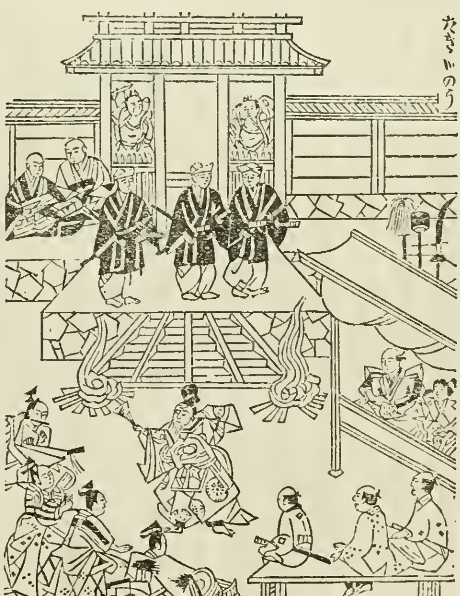
これは寛文七年夏の五月、此あとをひ清書のおりから作りし句なり、先作者いづこになりとありといへる時、余が句等類にせんため、年月書付侍る、さて御祭の次第は、廿六日に田樂あり、雉狸兎等の犧をそなふ、今宵流鏑馬あり、廿七日假御殿の前にて伶人の舞あり、田樂の品玉鷺足あり、あたりちかき諸侍綺羅をみがき、行列をみだらず美をつくせり、數疋に鞍掛具をかざり、いかめしきていたらくなり、夜にいりて、かり殿の御前に相撲あり、廿八日に能あり、かりそめならぬ神事、つまびらかにはかきもらし侍る、常祉廿一年目に造營あり、御旅所は毎年に立、

○薪能の事

一、薪の能は南大門の前、芝の上にてあり、興福寺にて、正月より二月六日まで法會あり、そのみてるに及で、諸僧少年うちまじはり酒宴せしに、猿樂うたひ舞そめしより、絶ずつとむる事になれり、六日より十二日まで、毎夜能あり、衆徒南大門の前に立ながら見物也、役者のうしろのかた脇正面には、階のごとく高くくらかけして、見る人尻かけなみいる也、七日より十三日の内雨ふれば、十五日をかぎりにのべて、地の乾きたる時、七日の都合をたすと也、晝は又若宮の前にて能あり、敷舞臺せばき所なる故に、役者の居座は常

と替れり、をよそ太夫笛、大小のつゞみ太鼓を、地水火風空の五つにあつると也、翁立の事、翁は天照太神、千ざいは春日大明神、尉は住吉大明神となり、たしかにはしらず、猿樂と云いはれをのみあらはさんも、粗(ほゞ)世にしれて物にもしるし、めづらしからねば、さまで書もとむべきにもあらず、且又異說も侍れば、いづれを是とせんや、横笛の事は、五の穴に心得ぬ事ありとやらん、それ五の穴は下無(しもむ)也、下の穴は壹越(いちこつ)、干(かん)の穴は平調、上の穴は双調、夕の穴は黃鐘、中の穴は盤渉(はんじき)、六の穴は上無(かみむ)、かくのごとく、間々に一調子づゝこめゐるに、五の穴上の穴の間には一調子なし、さるによりていぶかしきといへり、 宮商角徵羽の五調子を十二にわりつくゝ間に、雙調は體、下無は用なり、このゆへに一律なきをさとす事なり、 大小のつゞみには陰陽を表し、たいこには天地ありとなん、されども身づからの職だにおろものゝ、まいて外の事わざ、いかでしるべきなれば、過言ありとも見ゆるさるべきか、花傳書といふものを若年のときよみ侍りしに、太夫ははなのしん、役者は下草のごとしとかあり、まことにおもしろし、花のしんは下草をそだて、下草よりはしんにゐせいあるけしき、むべなるかな、太夫は役者をそだて、役者は太夫をゐせいあるさまにもてなす事肝要と見え侍る、君臣のみちもこれなるべし、われ壯年のころ、ある所にて大小皷うつ人に對し、

ならさかや此手柏子のふたりこそ
　とにもかくにも器用人なれ



○八景

一、水谷神事能は毎年四月三日より五日迄これあり、

南圓堂藤

藤波は神のこさはの花なれば
八千代を掛て猶や賴まん　太政大臣良基

左寶(さほ)河螢
飛ほたるかげをうつしてさほ川の
淺瀨に深き心をぞしる　前內大臣公忠

猿澤池月
のどかなるなみぞこほれるさるさはの
池より遠く月はすめども　藤原雅幸

春日野鹿
かすが山みねのあらしやさむからん
野べに麓の鹿ぞ鳴なる　權中納言公勝

三笠山雪
みかさ山さしてためのばしら露の
深き心を神やしるらん　前右大臣實俊

雲居坂雨
むらさめのはれまにこえよ雲井坂
三笠の山は程近くとも　權中納言爲重

東大寺鐘
をく霜のはないつくしき名も高し
古ぬる時の鐘のひゞきに　前大納言善成

轟橋行人
うちわたる人めもたえすゆくこまの
ふみようならせとゞろきの橋　前中納言實遠

さる人のいへる、轟の橋ははゞひろく、車三輪をならべて通るゆへに轟の橋といふと也、さもあるべし、是又一景ならん、
いにしへのならのみやこの八ッの景
けふ九ッにそへて見るかな

○元興寺

聖德太子の御建立なり、法興寺といひしを、推古天皇の御宇にあらたまり、元興寺と號せり、その比高麗より惠灌といふ僧來朝ありて此寺にすゝめり、又百濟の惠聰も住持せり、いにしへは六町四方勅願所の大伽藍なりしも、いつのころよりかおとろへ、今はそのあと塔のみなり、又わらはべのがごぜといふは、こゝよりはじまりし事なり、むかし此塔に、ばけ物すむといひて、暮れは人もかよはずと也、さればおさなきもののうるせき事いふに、すかしかねて、元興寺の鬼にあはせんといふ事を、がごぜにかませんなどゝおどして、しづめ侍るなり、土も木もわが大君の國なれば、

いづこの鬼のすみかなるらんに、をろかなる心に、狐狸のわざ魑魅魍魎をあやしむは、まことに凡眼の見る所かも、

ばけ物か雪にさまかへし鬼がはら

東金堂は十一面観音、秘佛也、

○興福寺

此寺は藤原不比等の立たまひし也、はじめは山城山階の里にありしによりて、山階寺と號す、本尊は大織冠鎌足の作らせたまへる丈六の佛也、元明天皇和銅三年に、大和にうつさせたまふとなり、皇極元年十一月に、蘇我の入鹿大臣を大織冠うちたまはんのとき、立願により、釋迦の像をつくりたまふを、父の御ため藤原氏の御ぼだひ所にいとなみたまふなり、聖武天皇の御宇に、東金堂を立させたまひ藥師如來を安置したまへり、后光明皇后の西金堂をいとなみ、十一面觀音と釋迦を安置したまへり、南圓堂は弘仁四年に冬嗣公の立られ、不空羂索觀音を安置したまふなり、新古今に補陀洛や南の岸に堂たてゝ今ぞさかへむ北の藤波、當寺に維摩會といふ事あり、器量の僧をえらびて導師とせり、毎年十月十日より十六日までおこなはる、藤原基俊、ちぎりをきしさせもが露をいのちにてとよめる歌は、息僧都光覺の維摩會の講師の請たび〳〵もれにければと侍り、

ゆうしきと誰も維摩會の講師かな

海士の謠はいかなる人の作にや、猶くはしき文は未だ見侍らず、今我も淺き筆の海に露の玉をとる也、

此寺にひかるは玉か雪ぼさけ

一、講堂は阿彌陀、　一、北圓堂は彌勒、

一、五重塔は大日、　一、食堂は千手、

○東大寺

當時は人皇四十五代聖武天皇の御建立也、八十代高倉院の御宇治承の比、平氏の重衡此寺燒失せしに、俊重坊重源國々をすゝめ立られしも、又百七代正親町院の御とき回祿せり、日本四ヶの大寺の一ヶ寺也、十丈の盧舍那佛の像、たぐひまれなる尊容也、良辨僧正天平勝寶三年四月九日に供養ありし也、僧正は近江國志賀の里百濟氏の人、その母觀音にいのりて懷胎し産り、良辨二歳のとき、母桑をとり兒を木陰にをきし所に、鷲きたり兒をつかんでさる、母かなしびなげき、鷲を追かけ山野をたづね、三十餘年家にかへらず

して、行衛もしらぬ鷲を尋ねまはりし、扨南都の義淵といふ僧、春日の社にまうでられしに、道なる野に、鷲の兒をつばさにてかいつくろふを見、ひそかに此ちごをもとめ得て歸り、五歳の時よりまなばせ、その智人にこえたり、しかるに良辨の母三十餘年あこがれさまよひ、又ふる里のかたをたづね見んと、淀舟にのり、故郷の方におもむかれけるとき、船中の人東大寺良辨のむかしをかたる、母きゝて、わが事なりとよろこびのなみだとゞめかね、南都にゆき東大寺に至り、良辨の事をとひかたるに、人々あやしみ、嫗は貴僧をたばかりけがさんとにやとうけざるに、母、その疑なき事あり、良辨兒のとき、一寸一分の觀音の像をきざみ頸にかけさせしなり、鷲のつかみぬる時もあり、もし其大悲の像今にありやといふ、良辨、さてはうたがふ事なし、鷲にとられしときよりの觀音の像今もありと、二たび母子の對面して、老母を院の側にをきて養へり、良辨は寶字四年に僧正となり、寶龜四年閏十一月十六日に卒す、大佛は天平勝寶元年十月廿四日に鑄奉りし也、

月の雲をつかまん鷲の爪もがな

一、越前の國に鮭の庄といふ所あり、聖武天皇の御時、東大寺に付屬し給ひしと也、衆僧學問の爲に勅許ありて、これを用ひし也、鮭の頭を喰ば眠る事なし、

一、當寺八幡の宮前にて、

木々の蟬もよむや八まん諸聖經

一、法華堂は觀音、　一、戒檀院は千手、

一、念佛堂は地藏佛舍利あり、

一、眞言院は空海開基、　一、眞禪院、上におなじ、

一、寶藏に蘭奢待有、但此三字に東大寺と云文字こもり、

かほりくる風や此寺の蘭奢待

○二月堂

良辨の弟子實忠といふあり、都率の法をおこなへり、あるとき攝州難波の津にて、川よりながれ來る閼伽桶をひろへり、中に銅にて七寸の大悲の像ありしを、帝にそうもんし、東大寺に安置し奉り、毎年二月一日より十四日都率の法おこなへり、此時牛玉出る、天平勝寶四年に始まれり、これを二月堂のおこなひといふ、天平寶字五年より二月十五日涅槃會あり、實忠二月懺をおこなふときに、もろ／＼の神をかきつけて供し給へり、多の神といふは若狹の國にあり、これ此

座にまし／＼、閼伽を奉らんとのたまひしに、黒白の二の鳥とび來り、土を穿ちてそのほとりの樹にとまるより、うがちし土のあとに清水わきいづる、これすなはちあかの水に用ひ給へり、いつの年にても水出かぬるときは、衆僧若州の方に向ひて祈り、若狹々々といへれば忽ち水出きたる也、若州多の神の前に川あり、音無川といふ、これより二月堂の行ひの水ゆくなり、まことに希代の事ならずや、おこなひの札わらはやみの守りなる事、世にかくれなし、

　わらは病おちてのゝちはとんつはねつ
　　あそべ鵜の宮にん月堂に

一、三月堂といふは聖武天皇の御建立法華堂也、不空羂索觀音をこめさせたまへる也、

一、側に鵜の宮あり、これ土をうがちぬる黒白の二鳥なり、

○西大寺

當寺は大裏の西なる故、西大寺と號す、三十二町四面に寺內をかまへ、都率の內院を表し、四十九院の精舍金堂、本尊は丈六等身彌勒慈尊なり、山號秋篠山、院號寶塔院、稱德天皇の御願所なり、天平神護元年に草創ありて、毘沙門持國増長廣目の四天王を銅像にて安置したまはんと、長七尺に鑄させたまへるに、毘沙門持國廣目の三體は成就し、増長の像六度まで鑄そんじけるを、女帝ふかくうれゐたまひ、七度におよび誓ひてのたまへるは、もし來世女身を轉じ成佛せば、御手つゝがあるまじと、わきたるあかゞねの湯の中へ、御手をいれさせ給ふに、露ばかりたゞるゝ事もましまさず、すでに増長の像も七度めに成就せると也、まことにありがたきみこゝろならずや、されば法華に一者不得作梵天皇、二者帝釋、三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身云何女身、この文などかけたがふべき、即成就佛身、

　べに染は豊心丹か花ごろも

○法華寺

法華寺は聖武天皇の后光明皇后の菩提所、又還亡と云名僧渡天歸朝のため、旁の願所にて、比丘尼のすめる所なり、猫も牡猫は飼ず牝ねこを養といへり、土にて犬をつくり、諸國へつかはせり、そのちいさきには蟻の大きさしたるあり、うつくしく色どり、姫のよきもてあそび物、またころもを織て業とせり、やむごと

なき衆の息女達もましますよし、
尼鷺もなるゝ柳のえのこかな
一、猿澤の池は、そのかみ采女なりし身の、君をうらみたてまつる事ありて身なげし池となり、端に采女の宮あり、衣懸柳あり、柿本人丸歌に、
わきもこがねくたれがみをさるさはの
いけの玉もと見るぞかなしき
又拾遺集に、
わきも子が身を捨しよりさるさはの
いけのつゝみや君はこひしき
霞こそ衣懸柳池のはた
○三輪
素盞烏尊娶二稻田姫一生二大己貴神一と云々、此所には社壇なし、大己貴神天の羽車にのり、大空をかけりたまひ、ひそかに活玉依姫に通ひ、三諸山(みもろの)にいらせたまふと也、少彥名命と御ちからをあはさせたまひ、あめのしたのよろづの民、病なからしめんことを經營したまへり、大物主の神、又葦原醜男、又大國主の神、又八千戈神、又大國玉の神、又國作大己貴命、みなこれ三輪の明神の御名なり、
みしめひく三輪の杉むらふりにけり
これや神代のしるしなるらん　爲家卿
新拾遺集に、
三輪山はしぐれふるらしこもりくの
初瀨のひばら雲かゝる見ゆ　隆教卿
杉原か三輪の神ます山の雪
よる〳〵ごとに活玉依姫に通はせ給ひ、晝はなどやきましまさぬとあやしみ、みことの衣裏にはりをつけ、こなたに苧玉卷(をだまき)をひかへ、あとをしたひたてまつりけるに、三諸山にとゞまり、三輪がねあとにのこりしにより、三輪山といひ侍るなどいへるに又、
松のはりやいとゆふつけて三輪の山
大神祭四月上の卯の日なり、三つあるときは中なり、丑の日勅使たてり、冬のまつりは寅の日勅使たち侍る、貞觀年中にはじまる也、
○長谷寺
本尊十一面觀音也、人皇四十八代元正天皇の御宇に草創あり、ある時江州高島の郡三尾の山より靈木ながれ出、御長二丈六尺に大悲の像をきざみ、此寺に安置したまへり、昔年大唐へ吉備の大臣遣唐使たりし

とき野馬臺の詩をよましむ、あやまり侍ればいのちあやうかりけるに、つねぐ\吉備公信ぜられしこゝの觀音に、ひたすら事故なくよまん事を祈り、歸朝をねがひ給へるに、觀音蜘蛛となりて其紙上におち、漸歩していとをひきけるに、あとをとめ、一字あやまたずよみつくせり、されば命つゝがなくおはせし事、此佛力と也、眞に廣大智惠觀悲觀及慈觀常願常瞻仰、

始定壤天本宗初功元建
終臣君周枝祖興治法主
谷孫走生羽祭成終事衡
塡田魚膾翔世代天工翼
孫子動戈葛百國氏右輔
昌微中干後○東海姬司爲
白失水寄胡○空爲遂國喧
龍游窘急城土茫々中鼓
牛湌食人黃赤與丘靑鐘
膓鼠黑代雞流畢竭猿外
丹燕後在三王英稱大野
水流天命公百雄星流飛

野馬臺かしげることの葉に蜘の糸

一、輾磑(てんがい)に東大寺の八幡の禰宜あり、殊光よりつたはりし徐凞の繪あり、表具殊光羽織の段子のきれなり、畫は鷺に芦萍也、幷松島といふ肩衝(かたつき)所持す、

一、十三鐘といふは、いにしへ此所のちご手ならひしけるつくえのほとりに、鹿きたりて紙をはましめぬる、ちご筆のさきにて鹿のはなをつきければ、たちどころに鹿死たり、もとよりこゝの鹿殺す事、その罪かろからず、神慮にをそれある事なれば、わたくしの沙汰にをよばず、社頭の格式にまかせ刑戮におこなひし、兒のとし十三なれば、此ばだいのための鐘なるゆへ十三鐘といふとなり、又あけがた七つと六つとを兼てつくによりて十三鐘の名ともいへり、

○般若寺

當寺伽藍は、本願聖武皇帝御建立、本堂本尊は三世覺母文殊菩薩なり、十三重の石塔此下にうづめり、天皇御宸翰の紺紙金字の大般若經あり、よつて般若寺といふ、山號は法性山、西門の額は弘法大師なり、

一、五大力といふは道祖神とやらん聞侍りし、猶たづぬべし、今のときより誰かは書そめけん、遠方の書札に五太刀を符ずるは道祖神の守りある心にて、道に

さはりなからむためか、狀の裏に五大力菩薩と符ずるは、おさなびたる事なるべし、此所より出るいとたうとき守札あり、これをまなびかたどるか、

　文月に竹の葉陰やさゝぼさつ

一、般若坂は奈良北よりの入口也、十八間の瓦葺の長屋あり、これに癩風病(かつたい)の乞丐人すむ也、奈良にゆく左の方に尻かくるばかりの石ならべあり、これは大科あるを罪におこなふとき、穢多共あつまりての式ありとなむ、其時此石に穢多等こしかけ侍るとなり、さるによりて、往來の旅人うらぶれながらも、かれをいみてこゝにやすむ事なし、をよそ五刑は墨劓剕宮(きくひひきう)大辟也、十三のちごの鹿の命をたちて、大辟にあふ事ほいなし、口けのしたなる兒の亡魂、このつたなき一しゆの狂歌かれきゝたまへ、

　くびせんを六百貫にさだめをき
　　科ゆるしたや大般若坂

○喜光寺

伽藍は行基菩薩の建立也、本尊は彌陀の三尊、すなはち行基の作也、初は菅原寺と云し、聖武天皇みゆきの時本尊光明を放ち給へり、よりて喜光寺と號せり、

　夜學にはひかりよろこぶ螢かな

○藥師寺

藥師寺は、本尊藥師如來、脇に日光月光有、

　一、五重塔　　一、八幡　　一、文珠堂

　東の月代や御光藥師佛

佛說秘密藥師經

南無藥師瑠璃光如來日光遍照月光大士十二神將各々七千夜叉同心守護同心加護晝夜隨順每日一遍受持者皆大歡喜信受奉行佛說秘密藥師經、

　仰ぎよればはなの后(きさき)も十二神

○招提寺

唐招提寺の額、聖武天皇御宸翰、

赤栴檀の釋迦如來、毘首羯磨作と也、嵯峨の尊容と御長ひとしきと也、舍利每日々晝に開帳有、但尊像の前にて戒壇、天下に四つの內なりといへり、小野篁作の地藏あり、龍水の池と云、有日でりの時は此池にて東大寺興福寺の僧雨を祈る也、春日御影向の松侍るに、

　姫松や影向の時の神樂見に

京童跡追卷第三終

京童跡追巻第四

○住吉

伊弉諾尊、日向の小戸の橘の檍原にて、御祓したまひしとき、海底より底筒男、中筒男、表筒男の三神出現まします、これ住吉の大神なり、神功皇后三韓退治のとき、三神あらはれ御舟の守護おはしまして、ことゆへなく新羅國をたいらげ給ひ歸朝のとき、攝州住吉の里に宮づくりし給ふげる也、冬十月、師舟新羅にいたり、國王をしたがへ給ひ、高麗百濟まで歸服せしめ、十二月に築紫に歸帆ましく\て、譽田の天皇をうみ給ふ、そのゝち軍にしたがひ給ひし三神、攝津國に至り、眞住吉とのたまひしより、其地の名となれり、豐浦那珂の兩所、みな攝津國の名によれるとなり、日本紀に、仲哀天皇八年九月に神託のをしへ、及に血ぬらず、寶の國を得たまはんと侍る、まことに神教たがはず、めでたき御代となれり、住所四所は、第一天照太神、第二宇佐明神田霧姫なり、第三底筒、表筒、中筒、爲二一座一、第四神功皇后、又三神と神功皇后とを四所共いへり、長門國豐浦郡なるは三座、攝州住吉は四座と、延喜式神名帳に二様あり、筑前の國那珂の郡に鎭座あり、是又三神なり、神詠に、



夜やさむきころもやうすきかたそぎの
ゆきあひのまより霜やをくらむ

伊勢物語に、むかしみかど住吉に行幸したまひけり、

われみてもひさしくなりぬすみ吉の
きしのひめまついく世へぬらむ

ほん神げぎやうしたまひて、

むつまじと君はしらなみみづがきの
　久しき代よりいはひそめてき
又古今集に、題しらず、よみ人しらず、
　すみよしのきしのひめまつ人ならば
　　いく代かへしとはましものを
とよめるに、翁のなりあしげなるが出居てめで、返し
に、
　衣だにふたつありせばあかはたの
　　山にひとつはかさましものを
とよみて消うせけり、今おもふに、此神になんおはし
けるにやと云々、
万葉三に、墨吉(すみのえ)、同六に住吉(すみのえ)とよませり、住吉の荒人
神とよめるは、神功皇后の御事なり、卜部兼直歌に、
　西のうみあはぎがはらのなみぢより
　　あらはれいでしすみよしの神
異國征伐したまへるとき擁護の神、又和歌の道の守
神にてましませば、此日本の人として、仰てもあきた
らずこそ侍れ、三月三日こゝの鹽干にまかりて、人々
詩あり、歌あり、發句など、思ひ〳〵に硯をならし侍
りける折から、
　筆の海もかするや鹽干花の友
又狂歌に、
　朝ゆふにくへばこそあれすみよしの
　　きしより沖のうをのあぢはひ
むかし壹岐守紀貞良すみよしにまふでける時、女に
ちぎりし事侍りてのち、又此浦にまかりければ、まさ
ごの上に蛙のあとひくあり、みれば歌なり、
　すみよしのうらの見るめもわすれねば
　　かりにも人に又とはれぬる
水にすむかはづの歌よみしといふ事是なり、
　かへる子を持しや歌の父と母
住吉のすみに雀と、いにしへもをかしき躰を詠じ、又
あふぎとりて、こゝはすみよしの御前とうたひ出し、
松のひまより海づらを見れば、きりにまじはる淡路
の島山、こぎくるふねはおもしろや、おもひやり侍る
だに興ある、此ところ眼の前の風景斷腸ばかり也、さ
て御田植といふは五月廿八日、堺の遊女來りて、早苗
とる儀式あり、又御祓は六月晦日也、數多の宜禰(きね)馬に
のり、幷に練ものあり、猶又此所の市は九月十三夜、
　月の雲や寶の市にかくれ蓑

○天王寺又難波寺と云

當寺は用明天皇二年に、皇子聖德太子御建立なり、太子日本に佛經ひろめ給はむとありし時、守屋大臣法敵となれりて、たゝかひのとき、太子白膠木にて、多聞持國增長廣目の四天王の像をつくり、御もとゞりにこめたまひ、誓ひてのたまへる、勝利あらば四天王寺を造立したまはんと也、しかるに守屋を本意のごとくほろぼし、佛法はんじやうの國となされられたり、さるにより、此ところを天王寺と號せり、石の鳥居は忍性といふ人、永仁二年にこれを立、額は小野道風筆也、

釋迦如來
轉法輪所
當極樂土
東門中心

いざよひは
　額の字數や
　　空の月

一、六時堂の前の鐘、黃鐘調のもなかにて、これを伶人樂器の指南とせると也、但涅槃會より聖靈會の中間めりかりなし、八耳太子忌二月二日なり、

七ふしぎといふは、

一、寶塔第一の露盤、閻浮檀金一千兩を以て鑄たれば、末代まで色更に替るべからず、

二、龜井の水は、天竺無熱池より龍宮城へ銀の樋をかけ、又龍宮より天王寺へかけたれば、絕べからざる者也、

三、金堂の雨落くぼまざる故は、太天竺靈鷲山より天龍に銀を運せて地にしかれたる寺なれば、此雨落くぼむべからず、

四、池の蛙なかざるは、此池の底に、十丈の大蛇を祭らしめ給ふ事、七頭これある故に、息を立てなかざる也、

五、金堂內陣の柱は、赤栴檀を天竺より八大龍王にひかせて作りたり、末代に朽べからざるもの也、

六、石の鳥居は西門にて、極樂淨土の東門の中心を當るといへり、されば西門にこそ二王は立らるべけれ、なんぞ南大門に立る事は、太子末代に至るまで補陀落山に通給へば、南大門に立られたり、此二天は金剛像王、天竺より下給ひて、みづから力士七像王を造り給へば、日本に作者なければと云々、されば此二王の上には、小鳥も更にとばずといへり、

七、大木、金堂寶塔より高く生上らず、若し天にのぼ

れども、枝は下へ指べし、毎日天人天降り、石上にて法會をのべ供養をなし給ふ故、枝は下へ指下るなりと云々、

七佛のふしぎもいつか月の秋

○庚申縁起

大寶元年庚申正月七日庚申の日申の時、攝津の國難波津天王寺民部僧都仕善と云坊主の所へ、十六ばかりの童子來て、われは帝尺より御使に下りたり、日本に寺多しといへ共、天王地はこれ佛法最初の靈地にして、彼地より諸佛弘まる也、然る間、今民部僧都に庚申の秘密を傳授すべき也下略、抑々庚申には男女の愛念をたち、精進にして五辛を禁じ、垢離抓、清淨の上棚に供具をそなへ、申の時より南方に向ひて、待ちむるとなり、信をぬきんづるともがらは、其願成就せずといふ事なし、六つ時より四つ迄は、不動明王、藥師如來、文珠菩薩、四つ時より八つ迄は、釋迦如來、青面金剛、摩利支天、八つ時より六つ迄は、阿彌陀、六觀音をとなふる事也、それ人身に三尸鬼九虫とやらんいひて、惡事をこのむ虫ありとなり、善惡の事を、此日梵天帝釋に告奏るとぞ、されば人毎に、庚申をあふぎたつとむべき事なり、凡そ一年に六度、いかなる行法なりとも、なすに難からず、

月の友もあけて待ぬる猿戸かな

○天滿天神

北野聖廟より四十年餘後の造營と也、菅家の御事は委しく京童にしるしたてまつるによりて、又こゝにあらはし侍らず、昔し此所に一夜に七本の松生出ける、猶希代の事、大融寺の僧奏聞をとげ、寛正四年の綸旨ありし、又天滿宮の額は伏見院御宸翰なり、大融寺と云は、左大臣融公の建立なり、靈寶に世尊說法の時の袈裟あり、さて天神御祓は六月二十五日なり、晝いろ〳〵のねりものあり、夜る舟にて神わざ侍る、當所の老若男女は更なり、花洛其外隣國よりも、けふ此みそぎにあはん爲め、よりくる人、ふねなら陸なら、ところせきあへり、五とせ往しころ、あしたより夜ふくるまで、誹友これかれと、ふねのうちより神輿船あふぎて、

暑さをも風におはらひや神輿船

難波津の道に富る御神にてましませば、こゝに人のせし句までをしるし侍る、まことにつげ口に似侍る

歟、四季をもわかたず、作者も次第不同、
めぐりあふ輪王の御代の春日かな　長頭麿
七ヶ日になさせまほしの寶かな　同
よき友はこゝろの花のそへ木哉　立圃
元日雨ふり侍るに
喜雨亭の吉例しるし今朝の春　令德
耕は歌の種まく試筆かな　西武
十二支の枝にやひらく年の花　貞室
君たれば臣も新春の御慶かな　重頼
延にけりきのふの師走けふの春　重方
かきぞめや塵のつもりて大和假名　宗恵
つく指も三つのはじめの禮義かな　惠佐
東から代はおさまるき春日かな　梅盛
佐保姫や姉が小路のはりさい女　姉小路住隈光
幸やひきまうけたる弓はじめ　政信
かざり竹はまことにめでたう候よ　道節
書初や歌に屋はらのかみごゝろ　玄札
さゞれ石やえいと引まで君が春　未得
立つゞく花のみやこや四方面　名不知
山寺にちる音きくや花のりん　僧正壽延

柳髪に常住とまれにほひ鳥　西畔
追善
花水の桶にもそふる鳴輪かな　作者不知
吹とぢな雲のかよひぢひばり笛　服部氏寛兼
はふこ草のけしやう道具か眉作り　遠藤氏盛親
大阪にて
月丸く出る東なりの郡かな　同
日げかものとなり侍るに
あたゝかな日をやせなかに老の春　池田氏正式
歌の聲は熊野比丘尼かあま蛙　熊谷氏三永
こがらしてあへ物にする木の葉哉　法眼寸青
靈山にて
かほる風は龍涎香かひがしやま　法眼可生
春や又たたねど矢聲弓はじめ　江崎氏幸和
おもだかのもとをりなりのくはゐ哉　休甫
下の十日見るやおんさの廿日草　重盛
膝もつきて見るは生をく手まり哉　元信
茶磨山や子日の松もひき木かな　土佐堀令諸
ながれたつる身の定紋や藤の波　同
是は藤の紋ある寢まきを見てとなん

前髪を風にわけさする柳かな
つけさしか霞をあます花の口
右両句は少人の作なり
日本にも礎の音やからごろも　長崎 次昌
蜘のゐやあれたる庭にこまつなぎ　同
一ふしはよまん若竹につゝとまり　友之
大和ぶきのやねは吉野か雪のはな　正永
探しみるやをかぬたなばたの手向草　芥也
落花こそあかぬ別れか鳥部山　豊永氏種名
通天の紅葉や日本開山忌　佃氏元清
圓山にて
やれ名のれ木の丸山のほとゝぎす　猪狩氏宗久
月に花に珠數をする手や蛸藥師　都筑氏成保
月蝕
燭をとつてよるあそべるや月の友　設樂氏休哲
うはなりや葵のうへに風の音　几山
竹の子も鹽の目するや汁の妻　松氏近滿
そよ吹もから風なれや蓼の苑　釣翁
魚とらばうきにうかひや鵜かひ舟　竹林
くふときはおす物もなし鮎の鮓　扇計

三またにて
三または月のかはづの足候か　淡味堂時之
風の音や寢ぬ海棠の空いびき　燕羽
おもしろの海棠くだりや花の露　福永氏宗立
まじはるは竹の園生にむくげかな　谷氏祐玄
雨だにも脚をいるゝやふぢばかま　是倫
きねの宮のぬさに手向よ薄紅葉　泰林
ふけば咽のふえにもよるや秋の鹿　奥村氏丁三
雨ふらで星はあふたりかなふたり　作者不知
神鳴や時雨の雲のよせ大皷　同
蚊柱のたてりを見るやさがり蜘　同
三月三日江府にて去かたの馬をかり侍る
殿の馬もかれば三日の節供哉
ふる露はあま物なれや佛生會　大坂口昌
飛驒國高山といふ所にて
はりあげよ聲も高山ほとゝぎす　小嶋次口
ほとゝぎすたゞ一こゑやおしみ鳴　嘉久口
須磨にて
櫻鯛やこの浦の名のすまし汁　元口
夏をむねとつゞるや遅き家ざくら　鳥飼氏高重

色にいはゞ粟の内侍やをみなへし　宇野氏親胤
むかしおもふ草の庵の新茶かな　八代氏累子
これも又上土門かつばめの巣　三枝氏快幽

攝津國にすむ人の兄の追善

花の兄とふや難波の三つ具足　作者不知
茶壺もや網かけといはん鷹の爪　重教
くゝたちの葉もとの雪や銀はゞき　夢幻
水かけのいは井が雨に武庫の山　同

江戸にて

綱引はげに船町の嘉例かな　同
なでしこにまがきの竹や枕蚊屋　同

熱田にて

あふげなを熱田の宮に月の釼　同
雪花の水ぎはなれや橋ばしら　同
初寅の尾をふむやうな難所かな　加々爪氏安辰
さをとめの歌のすがたや雨中吟　同
はらむ田も火のとまりたる螢かな　同
ながゝれよをのが命毛筆つむじ　同
すゝはきはちりにまじはる紙こかな　同
年玉をいるゝや富貴ばんふくろ　満田氏隱士

海あれば硯箱にもちどりかな　乘興
むら雲に月の弓もやふちはなし　友枕
屠蘇の酒やながれの末の我ら迄　庭虫
鞠けばのまつに音せよ沓代鳥　同
をく露は知恵のひかりか利根草　名不知
萩がえや錦をる野の機道具　同
たちばなになどか無音のほとゝぎす　作者不知

む月と、ことしの暮と、兩度立春侍るをおもひやりて、元日、

三春のやくありてたつことしかな　大夢
鈴鴨やこれ水神の庭かぐら　永房
山がらのふんどしなれや柹もみぢ　不平
春のあとにきたるは冠者太郎月　拙交
木の葉衣かつぐやよめり鼠茸　一無
車座にめす御所柹やまはり菓子　津田氏雲岫
下帶をしむるや尻のわれ相撲　柳原氏宗利

六角堂にて

雪そげに六角堂のながめもの　葉舟
茶屋が軒にふるやおほたれの霰釜　求可
まんべんにしげるやなぎや四方髮　久友

天神の梅のこだちや御はかせ　林　忠
とり分て見るや木三字森の花　同
待かぬる花にため息をつき木かな　同
けふ酌や桃のよう〳〵たるの酒　近藤重吉
置露は白銀物かよろひ草　同
にくからぬもいけてこそ見れ美人草　同
のむに心いそ〳〵するや桃の酒　近藤重治
ちゝとふる雨やなでしこの花の親　同
うつすもや聲はえにせまひ筆つ虫　同
暮六つになどや聲せぬ時の鳥　吉　政

讃州金比羅祭にまかりて

ふる雪もこん〳〵ぴらの祭かな　同
春夏のさい目のくゐやくつ木垣　平野正竹
花やりしみのなるはてや梅ぼうし　同
繪にかくは王昭君や美人草　同
こよひ月毛あつぱれお馬候よ　通　命
さかなもや具足の餅の引あはせ　辻氏直常
大小やながしみじかし月の劔　好　純
青梅の露や天神の牛の玉　並川重清
あいさつのことの葉もなき冬木哉　岩國虎佐

雪道をあゆむや足の土ふまず　同
名のらぬは枚をふくむか時鳥　岩田蔡芥子
卯の花や風の手にうつ雪つぶて　專光寺祐甫

巳の年正月二日神なり侍れば

年德の神樂太皷か雷の聲　片山氏宗清
ほうづきの發句やこれも口ずさみ　同
この花は養君かうばざくら　西川正利

姫百合にそへてをくり侍る

腰もとにおめかけられよ小姫百合　同
短尺をつくるさくらは和歌木かな　寺橋信行
池にかすみ引や蛙の歌のてん　同
天神の三木かや梅と松さくら　二次重吉
料理には骨までたゝく水雞かな　同
とびちるは花火といはんほたる哉　末玉助貢
天の原はかりものなれやこもち月　同
朝顏のつるや寢起の見だれ髮　曾根氏紹休
福の神はよるやひるこよ若えびす　蝶々
煙こそ燒鹽らしき富士の雪　一　雅

能の場にて

じんじやうに舞ておりそへ庭の蝶　小濱氏勝白

文車かめぐる初秋の月のかげ　三　次　宗　利
一りんも目にかゝるなり金錢花　長　崎　田　玄
なにがし所望に
若竹は弓筆のみちのそだちかな　作者不知
加州にて
名におはゞ梅の加賀みちよ國の內　敕使河原武經
海邊の郭公を
波の皷名のりがしらかほとゝぎす　藥師寺八　身
賢人もすてぬや山の金草　総　江　紹　休
淵になげし玉と申さん菊の露　作者不知
老の波もあらいそがしの師走かな　安　原　貞　室

〇玉造稻荷

そのかみ、日輪九つ中天に見えし時、聖德太子弓矢もて射たまふに、八つは消、のこる一つ烏となりて射おとされ、首此所にとゞまる、太子首を見たまへば玉あり、其まゝ土中にうづめさせたまふ、それより玉造といふ、五社大明神とは、第一十一面觀音、第二如意輪、第三千手、第四不動、第五毘沙門なり、こゝを栗山といふは、聖德太子、守屋とたゝかはせたまふとき、此山にて供御をめしけるに、栗の木をきりて御はしに奉る、其時觀音に祈誓しのたまはく、たゝかひにかつべきならば、此はし木今夜の間に枝葉出し、さもなからんには、そのまゝあるべしとて、御箸を土にさしをきたまふに、一夜のうちに、えだ葉さかへしかば、ほどなく守屋をほろぼしたまふなり、これによりて栗山といひ侍る、
夏山や藍より青き玉つくり

京童跡追卷第四終

京童跡追巻第五

○新御靈

此宮は鎌倉權五郎景正と也、本地堂に十一面觀音あり、正月十七日に、的射とて、弓を射侍る、又祭は廿七日也、猶この宮を權五郎ともいふ、鳥海彌三郎に弓手の目を射させ、その矢をぬきける時も、ますゝゝ勇猛の事ありしと也、

射させてはちるや目星の花軍

○座間

座間大明神は、本地藥師如來となり、祭は六月廿二日、又九月廿二日にも神わざあるなり、

涼しかれといのるや人のこゝろざま

○生玉

もと聞侍るに、三輪の神の御事あり、今按ずるに、活玉依姫なるべし、さるによりて、生玉といへるならし、そもゝゝ三輪の明神は大己貴命なり、素盞烏尊の御子、稻田姫の產也、この命活玉依姫とちぎりたまひ、男女一躰のかたらひあり、されば三輪の神慮うつりますにや、猶社家者流に祭は九月九日、



いく玉や月に見されし黑眼

○淸水

こゝは洛東淸水寺を、ちかきにうつせる所なり、さればふるきをしるすべきもなし、千手の御事は、京童に侍れば、二たびこれにあらはすにをよばず、

花の瀧や音羽ならねど淸水寺

一、逢阪の水といひて、いとひやゝかなる水あり、所の古歌ありもやすらん、なくもやあるらん、いまだか

んがへず、
しみづもや醉の後にはさゝむすび

○三津西生郡

近江にも攝津とひとしき此名所あり、又歌によみあはせぬると同物あり、

新古今旅
いざ子どもはや日本へおほともの
みつの濱松待こひぬらむ　山上憶良

新拾遺秋
大伴のみつのはま松神さびて
昔ながらの秋の初風　大納言經信

又近江の國三津濱は志賀郡なり、

新古今賀
七十にみつの濱松おひぬれど
千歳の殘りは猶ぞはるけき　清輔

玉葉賀
老のなみなをしづかなれ君が代を
九十までみつの濱松　隆信

西生郡高津

むかしおもふ高津のみやに跡ふりて
難波のあしに通ふ松風　慈鎭

難波津

難波人あし火たく屋はすゝけたれど
をのが妻こそとこめつらなれ　人丸

敷津

すみよしの松のいはねをまくらにて
敷津の浦の月を見るかな　後徳大寺左大臣

一、こゝらの名所々々の古歌かぎりなきゆへ、是のみあげてやみぬ、

琴詩酒や月雪はなに三つの友

○源聖寺

下寺町東榮山源聖寺、開山遠譽上人は、奥州衣川なにがしの子なり、三歳の頃繼母の嫉妬によりて、父の隙をうかゞひ、乳母をかたらひ衣川にしづむ、しかる所に川下にながれ上て三日の間死せず、川邊の人童子のなくこゑを聞てひろひとり養育す、人みな權化の示現とうたがふ、やうやく七歳を經て、父件の子細をきゝ、世間ものうきと思ひしより、爪連淨福寺にをひて出家せしめ、知行兼備の學匠となり、六十餘州修行し、終に攝州大阪に足下をとゞめ、今この寺の開山とあふぐもの也、東關より來り、化益西海に滿ゆへに、東榮山と號す、さて赤栴檀にて、一刀三禮の阿彌陀佛を作り、御母の方へ送り給ふ本尊あり、此本尊世々ふしぎおほし、又右大將賴朝公牧狩のとき、富士權現靈

夢のつげによりて、得たまへる釜もあり、猶この所の阪の風景のおもしろさ、いづこに似たる九折(つゞらをり)のあるべきともおぼえず、戴叔倫の詩に、沅湘日夜東にと侍る也、山號寺號にたよりあれば、もろこし人のことばのはなを一枝おるにや、まことに落花狼藉もの也、

○圓照寺

攝津の國島下の郡山田の庄圓滿山圓照寺は、慈覺大師の開基なり、上古當山に大木の櫻あり、靈木なれば是を伐て千手千眼の像をきざましむ、立像の觀音、御長五尺の尊容と、本堂の本尊、これ慈覺大師の作なり、奇特殊勝なる事、世俗その利をわきまへ、千手山といふ、まことに祈るものは諸願をかなへ、あふぐものは宿望を滿せずといふ事なし、此ゆへに圓滿山といひ、又は大慈大悲のひかりまどかに、有緣の衆生を照せるにより、圓照寺と號す、貞觀十二年庚寅、淸和天皇の御時、尊像の威靈大かたならぬをかんじおはしまして、勅符をかけ、秘佛となさしむ、しかれば又元慶六年壬寅、陽成院御治世のとき、御違例はなはだをもかりしに、當尊のちからをもて、帝病すみやかに、平腹しまします、この時、秘佛の封をひらきて、又勅封をかけさせたまへる、其後又宇多天皇寛平六年甲寅、染殿のきさき、病にくるしめるとき、勅封をひらかせ給ひけるに、快かりしと也、ふしぎなるかな、三度の見佛共に十三年の星霜をへだて、おなじく寅の歲ごろにあたれり、しかしよりこのかた、一十三年をかぎり、寅のとしをもつて、當寺本尊の開帳とさだめ、あまねく結緣の衆生をみちびき、ひろく濟度の方便とさせる也、

櫻木はかれても花の斗帳かな

○尼崎大物若宮

平相國入道殿、安藝國嚴島建立のため、攝津國尼崎までおもむき給ふに、波風あらく、舟路の渡海たえはて、はからず日數つもり、海神へいのり申さく、波風しづめ給へ、この願成就せば、此所に辨才天のやしろを建立せむとちかひたまへば、程なくしづまり、海のおもて平地のごとくなれば、舟をもよほし、彼島造立すみやかにして、又この浦に歸り給ひ、宿願とげんと、地をもとめ給ふに、此大物の南には難波入江、東には猪名川、北は待かね山、西は伊登妓島の遠きけしきもおもひやり、地景この所にしくはなしと、身をは

なたず安置しまします辨才天を神躰におさめ、社を建立し給ひ、身の老衰を祝してや若宮と號し、神宮寺を海牛寺と名づけ給ふ、それより民屋軒をならべしかば、すなはち氏神と尊崇し、今に繁榮す、舊記、亂國に紛失す、舊例の殘りしは、年々正月三ケ日の間開帳、月次連歌、靈寶に馬角牛王等、今にこれあるなり、故人の物語をしるしぬ、

千金の代物やこゝの春の暮

○西宮

伊弉諾尊の御子蛭兒と申奉るをいはひぬる所なり、日本紀に、雖三已三歳一脚猶不レ立、故載二之於天磐櫲樟(いはくすの)船一而順レ風放棄、そも又えびす三郎と申奉る事は、根の國へながされ給ふを、沖の釣するえびす、拾ひ奉つり、養君の三番目なるゆへに、夷三郎とあがめ侍ることなり、

手むくるや日もなが〳〵とえびす歌

○勝尾寺

當寺はいにしへ、攝津國の太守に致房と云あり、其二子に善仲、善算といひ侍る發心者あり、此所に庵室をかまへ、兩人ともにおこなひすまし、終をとれるのち、光仁帝の皇子開城と申奉りし座主、寶龜八年にいとなませ給ひけるに、沙門興日といふ人きたり、八尺の白檀を所持し、佛像きざまん事をかたる、開城御心ざしをおなじくしたまふときに、佛師妙觀まみえ、同十八人の良工して、千手觀音を作り安置せしめ、並に四天王あり、そも〳〵此觀音の慈悲、日本のみならず、異國にもあまねし、そのかみ百濟國の宮女、いかなる故にか、みどりの髮、須臾に白髮となれり、國王も后ももろともにうきおもひにしづみ、醫藥術を悉せしに、更に功なし、然る所に、ゆめのつげ有て、はるかに勝尾寺の觀音に祈誓ありければ、たちまち一夜のうちに、もとの黑髮となりしとなり、されば觀音妙智力能救世間苦具足神通力廣修智方便十方諸國土の御經の文、いよ〳〵ありがたく、かゝる靈像本朝異國たつとみあへるこそ、げにさる事なれば、かのきさき、ねがひ滿てるよろこびに、しゆ〳〵のたからものを、この寺にをくられぬる、閼伽器、金皷、金鐘等也、

白雪やきえて后の柳髮

○大宮寺

豐島郡醫王山大宮寺は、藥師如來の靈場、聖寶開闢

の精舍也、すなはち聖寶作の藥師、二尺八寸の立像安置せり、如來觀音、愛染明王など侍り、毎年元日より七日、秘術修正勤行、同八日大法會、九月十四五日まつり也、

けぬがうへに又六の花や十二灯

京童跡追巻第五終

京童跡追巻第六

○粟生(あを)光明寺

蓮性法師開基の所也、若年の時に、武藏の國にて、たけき熊をとりひしぎ、威をあらはし、熊谷と名乘ける事なり、さて當寺は西山流の學問にて、所化の學室あり、法然上人鏡の影といひて、はりこの像あり、念佛してことに殊勝なる所と、身にしみておぼゆ、

寺の名にいはゞ紅葉や光明朱

眞實事は、壽永二年に一谷のいくさにて、平大夫敦盛とくみける時、少年の顏ばせはなやかなるに心まよひ、すでによろひのちりはらひて、たすけんとせしに、味方の人々、熊谷心がはりもやといひあへるに、力をよばずして、花のやうなる敦盛の首とり、それよりもとゞりきりて、法然をためみしたがへるとなん、世にいひ傳へ侍る也、又東鑑を見れば、熊谷次郎直實、親族と論訴の事ありてかたず、其故に剃髪と侍り、兩樣の說いづれか是なる、

つよき雨は花とくみうちや鎧草

○御香宮

此所は神功皇后の廟なり、本社に天よりふりし金札の神あり、天津太玉の神也、祭は九月九日なり、御香宮といふ事は、いにしへいづくよりか來りけん、猿引この宮にいたり、飢につかれて、すでに絶入にけり、猿引しかる處に、此猿かなしむ風情にて、宮前にありし水を手にむすび、猿つかひの顔にそゝぎ、口にいれぬるに、その露胸に落て、夢中のごとくして、味ひかうばしくおぼえ、それより蘇生し侍り、此神のたすけにあひ、二たび壽ながらへぬる事、ひとへに神力のいたす所ならずや、さるによりて御香宮といふといへり、さればとよ、いつのときのみだれにやらんありし、山王の猿鐘をつきぬる事あり、諸兵、相圖のかねと心得て、おもはず敵によせあひ、味方の利を得し事ありけると也、これ又、山王の神の擁護にて、かゝる事もありしなり、

君はいつ御幸の宮の花車

○興聖寺

こゝは越前國永平寺の開山、道元禪師造立の所なり、其後久しくあと絶ぬるを、淀の城主大江氏永井尙政再興によりて、猶々山のすがた、川のながれ、見所あり、山の腰に尙政先祖の卵塔逆修の碑の銘侍り、川にちかく長川亭、觀流亭などいふ茶店あり、いにしへの通圓があとは、橋の爪にあり、又橋の半に、三の間といふあり、此とほりの水すぢよく、茶の湯の水にこれよりくみて用る也、八月十四日此所にて、

さんの間や二七夜めのこもち月

とぶ鴈や手ならひの君の古反古

此の結句は重言のやうに侍れども、世の妙目に如レ此の例おほし、反古とは古歌にもよめる、折節、今宇治の事見んと、机前の源氏物語平家物語のそこ〳〵をひらき、又反古の歌かんがへぬれば、

秋の田の反古とも鴈のみゆるかな

誰中空に書ちらすらん

梶原源太景季、佐々木四郎高綱、この宇治川を渡しける事など、右の物語に侍る故、又こゝに書出ざる也、

もみぢ葉は赤手拭か山の腰

○金龍寺

當寺は沙門千觀草建の所なり、父母の申子にて、千手觀音にいのりまうけける故に、千觀と名づくると

ぞ、されば觀音の像を安置し、靈佛靈地たぐひなき事ども也、應和二年、旱して國民うれゐぬる時、この所の池にて、千觀雨をいのられけるに、大雨たちまちくだり、みな人よろこびいさみ、いよ〳〵千觀たつとく、ます〳〵たなつものみのりて、國やすけきとなり、又長門守永幹、法名能因、この寺にすみけるころよみ侍る、

山寺の春の夕暮きてみれば　入相の鐘に花ぞ散ける

能因法師は、道に名譽ありしなり、又々雨乞の歌をよみてあめをふらせり、猶粉骨の事おほし、

あまの川なはしろみづにせきくだせ　あまくだります神ならば神

まつ花に雨乞の歌かにほひ鳥

〇有馬

此所は舒明天皇孝德天皇行幸の地也、そも〳〵釋の行基、武庫昆陽寺よりこゝに來り、一人の病臥にあへり、病者行基にいふ、われ温湯におもむき痾をあらはんとするに、力つかれて、進退やすく心にまかせず、願ふところは、鮮魚をもちひん事、これに過たるのぞみなしと、行基きゝて、やがて長洲濱より魚をもとめ、病人にあたふ、病者のいふ、割烹てここのめり、行基此ごとくして、半割、よく烹てあたへられし、又病者のいふ、われ瘡瘍の痛しのびがたし、但舐ときは疼痛止む、願がはくはこれを舐て、くるしきをやすまらしめよと、行基きゝて、焦爛臭穢の瘡をねぶれるとき、忽ち病者のかたち變じ、すなはち金身の藥師の御かたちとならせ給ふ、行基こゝろざしの程をいかにと、藥師如來のひきみたまへる事也、行基有がたく、ふしぎの思ひをなし、等身藥師の石像をきざみ、泉の湧出る所にをき、一字を建つ、今の藥師堂これなり、又た如法經を寫し、泉底にうづめり、さて彼病人に行基のあたへられし殘魚、昆陽寺の池にはなたる、化して一目の金魚となり、今にたま〳〵此寺に一目の魚ありとなむ、希代の事也、常喜山温泉寺、是れ藥師堂なり行基の作小像の藥師安置せるを、豐臣秀吉公、又大像の藥師を作らしめたまひ、小像は頭中にこめさせ給つる也、されば兩像一躰に拜し奉る、左右は文珠、不動、觀音、勢至、十二神也、此の藥師堂にて羅山子道春、

湯泉不熱不寒波　新浴皆歡瘳宿痾

一切衆生無恙否　醫王却欲レ問二維摩一

延壽院道三、湯文を見侍りし、入湯の人、一日に二度ばかりとあり、猶病者の輕重虚實による事宜ならし、それ温湯は硫黄の氣より涌出す、金瘡になを〱應じなむ、されば遠近をいはず、病ける人、かならず此山に來り、病痾をいやす事、年々其數をしらず、まことにありがたき事、何のよろこびかこれにこえん、南無藥師如來、

一、湯女は以上四十人あり、一の湯まもるもの十家、但し一家に二人づゝ湯女あり、二の湯同前なり、

一、妬湯　一、洗目湯などあり、

一、鹿舌山　有馬富士　鼓瀧　地獄谷　猪名野

其外しるすにいとまあらず、

一、そのかみ湯山權現女躰を現し、此山にいまぞかりけるに、軍士おそひ來りし事ありけるとて、今も山中へ嫌物、重籐の弓、白の鷹、あしげ馬、此三色、其時の事をつたへきて、今も山内に入る事をきらふとなり、

千載集

めづらしきみゆきをみわの神ならば
しるし有馬の出湯なるべし　按察使資賢

一、今魚を賣もの、籠にいれて提ぬるは、行基の長洲の濱より魚をもとめ來りて、病人にあたへられし餘風と也、

ありまなる鷺の音や涌出品(ゆしゆつほん)

はだにそふゆかたの妻をかさぬれば
うはなりの湯と名にやたつらん

○白瀧前

これ墜栗花(ついし)の根源也、攝津國矢田部郡丹生山田庄原野村、墜栗花利左衞門といふ者の宿所なり、記錄ありといふ、廢帝天皇の比、右大臣豐成公の息女中將姫の妹に、白瀧の前といふあり、其一女を此所に辨才天に祝ひ、五月に水の涌いづる所の上にあり、凡九百年餘になる事なり、今も其末葉、墜栗花利左衞門といふものこゝに住む也、むかしの歌とて語る、

雲だにもかゝらぬ嶺の白瀧を
さのみな戀そ山田おのこよ

是は白瀧前のよめるといひ傳へし、又おのこ返し、

水無月のいな葉の末もこがるゝに
山田に落よしら瀧の前

墜栗花利左衞門がいふ、大むね黴(つゆ)は立春より百三十五日にあたるとなり、その日かならず、利左衞門が所

に水涌出る、常は乾きたる所なり、いよ〳〵くはしくは利左衞門所持の舊記にあり、徴のはじまり、其所のみ大かたの事をこれにしるすもの也、但し記錄も大體此おもむきにかはる事なし、

かつら男月や白瀧の前わたり

易の乾の卦にいはく、水は濕るにながれ、火は燥るに就と侍る、

○嚴島遠雖レ隔二京師一、閑板人依二所望一書き加ふ也、

秋津國、吹風えだをならさず、十日の雨塊をやぶらで、波しづかに打おさまれる時にあふを、やら〳〵めでたと舟子どもにうたはせ、いつく島にまうでぬる道すがら、海山の眺望、つたなきことの葉にも、いはねば腹ふくるゝわざなれば、いはじとにもあらず、矢よりもはやうをす船に、弓手を見ればにの島といふあり、こゝにたとへばなりは鹽尻のごとくなるに、

富士山によく似の島や月の雪

馬手(めて)のかたには、總角(あげまき)のかりかふ草津ときくに、發句の趣向もなく、むなしく井の口をふさぎぬるもほいならねど、亥中の月を廿日市にいひ出さんもめづらしからず、かしこにかいらうと名づける山侍れば、

山の名のかいらうとなくや鹿の聲

廣島と宮島のなかばにある、つくねといふは、綫にたかふして、人のめだつ島なり、

菊の露や匂ひの玉をつくね島

はるかに地の御前にむかひ、手房をうしほに淸め、護身法の印むすび、九字きりて、

風の手もともに九字をや霧の海

ひじり崎といふは、海に出たる尾の上に、松ある所なれば、

世をのがれこれはどなたのひじり崎
お床しきぞよ松笠のうち

つれたる手繰舟の二三町をくれぬるを、杉の浦にまねきよせ、網引させけるに、いたいけしたる鯛こちやうのもの、網にいりぬ、桶に鹽ためてしばしはなちぬればかつうれしげなるに、又人の目をよろこばしむ、都のかたにてはめなれぬいかれる魚すら、藻鹽草をかきわけ躍出ぬ、なをたなごなごいふもをかしく、

引とるや露けき網の掌

拾ふ貝つ物さかなには、何よ望んといひしろひ、石鼎に鍋すへ柴折たきて、物とゝのへたうべぬる人々に

も、さのみはおそれず、うしろの山よりあまたの猿出てあそぶ、ころさえ七つ時に近ければ、

色になる山の日脚もや申の時

子をつるゝましらもあんなるに、

山ぢかくよせぬるふねの帆ばしらの

小猿もなれが友とやは見る

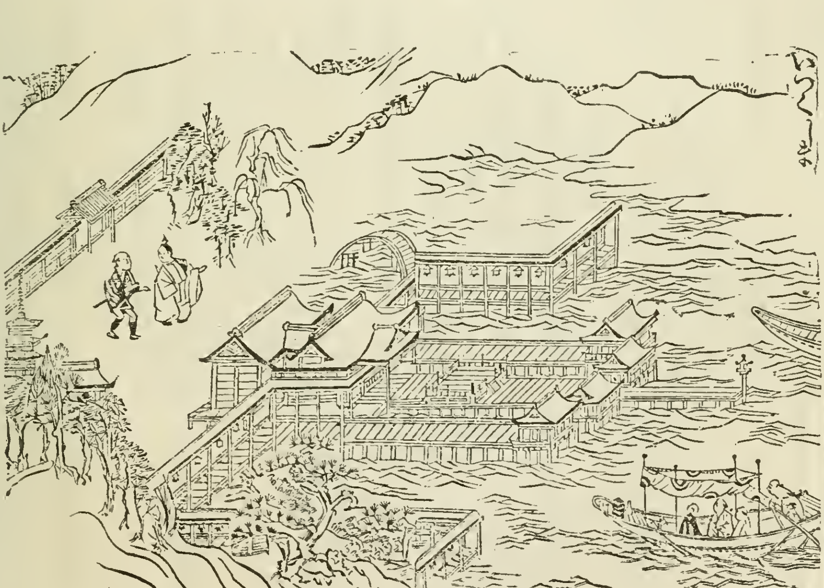
とかくして、又舟にのりうつり、えびすのまします長濱よりおりたち、禿倉(ほこら)ぬかづきて、

釣針かえびすの宮に三ケの月

これより岨をつたひ、市中の家にいりぬ、あるじ風呂まうけなどしけるに、

吹からにこ風呂もをくや扇板

こよひは此所にとまり、夜さむをしらぬにつけて、をり／＼をとへば、櫻は外に咲をくれず、郭公をとくきき、蚊虻(ぶんばう)の利觜にうれへず、月雪見るに更なり、燒く榾とぼしからずなど、おきなびたるぬし、所えがほに伴ひしみたりよたりに物語、とり／＼の聲におどろき、夢ばかりまどろみ、夙に起出て明神に參りぬ、そも／＼當社は、娑竭羅龍王の姫といへる、故ある事にや、いぶかし、素盞烏尊三女の市杵島姫これなり、推古



天皇のころ、宮造りしたまふけるとなむ、腐たる水茎みじかき才にあさ〳〵しくいはんは、とがめおそろし、聞しにこえたつとく再拝して、

女郎神さそふ月よりいつくしま

蒼波渺々客船奇、疑覔蓬萊嚴島姫、
暫語老翁忘世事、正嘗仙藥一瓢醸、

かゝる靈地の風景、つく〴〵おもふに、あやまつて仙宮に入か、峩々たる山、悠々たる海めぐり、草木禽獣ことさまにおぼえ、萬事をわすれて、ひたすらたのしむこゝちのみなるは、仙家の酒のなすにや、かくてえならぬけしき、見ぬもろこしの西湖もやはをよぶ、華表は海にたちて潟なる時もあり、漫々たれば廻廊も鹽にひたされ、川瀬の橋に高き水ゆくがごとし、百八の燈籠を間遠につれば、廊の長き事これにしれり、かかげぬるともしび海底にうつるは、いづこにたぐひせんや、寶藏日にかゞやき、瑞籬月に映ず、輪橋は住吉よりゆるくして長し、五重の塔は八阪よりうるはしくて、たけひとしく見ゆ、乙女の舞殿には橋の金鈴をつらね、伶人の樂には龍の笛音をあはせ、祝部の祝詞に松の聲吟じそへ、猿樂の舞臺には波の鼓をしらぶ、經堂より四面をのぞみて、狂句、

謳歌嚴島社參船、面白神々御寶前、
烏笑猿尻遊海際、鹿嘲蜂尾走山邊、
畵師抛筆無備手、文者退硏不怒肩、
止事擧觴三鬼殿、雖嫌魔界莫抓天、

あたりちかき狗品達(ひんたち)、一杯一杯又一杯、御免あれ兵庫のもの、

舌崎にをひて、

舌崎や波すさまじくタチツテト

あらえびすにて、

いつとても神のえがほはよからんに
あらえびすとは浦をいふかや

多景はおさ〳〵劣るまじき、四明の麓なる山王の客人といへるは、白山の權現と也、されば爰の宮居にても、

山王の客人か白き山の月

毘沙門堂にて、

毘沙門のみほこなるらし月の劔

大黑殿にて、

福の神のつかはしめかや黄金虫

藥師堂にて、
　淨瑠璃か玉しく庭の藥師草
觀音堂にて、かの御經の雲雷鼓掣電應時得消散とあるを、
　雲の帶得消散や月の前
天神の宮、
　御覽あれ神のまに〳〵梅紅葉
神馬の厩、
　神垣は馬立なるかこまつなぎ
さて嶋まはりは七浦なり、凡七里といふ、旅舘の軒のもとより、船歌そろへてめぐりぬる所々、みやしろの名をいひこめつらぬる句、ぬきとりあへぬ旅なれば、手向にもやと、第一に杉の浦をはじめ、垢離搔輪人形といふものをこゆる、六月祓の茅の輪のごとし、
　新酒やあらんしるしの杉の浦
此拜殿にてあしたのしたゝめすみ、猶ゆけば、かたへの山のみどりがちなるに、くれなゐふかき木立まじはりたり、鵙によみあはせぬる櫨といふ木なりと見さだめけるに、又うるしの木などゝいひつれば、
　えしらすば櫨とたしかにいひながら
　　又うるしとはぬつたりはげたり
第二鷹の巣、
　鶉草ありや小鷹のする所
鷗の三つ四つ二つなど とびかひ おり居るもあるに、江南野水碧二於天一、中有二白鷗閑似レ我と山谷もいへれば、をだやかにすめるこの鳥の心を、誰かうらやまざらんや、又をのが眼のかたち、鎧に似たれば、その名をかまめといふとも、きゝつたへしに、
　房崎の浦なくなくにしたはるゝ
　　鳥のまなこのなかもかまたり
第三、腰少（こしぼそ）、
　腰少（こしぼそ）につらなる雁や三重の帶
又狂歌、蟻の浦といふ所の侍れば、
　いたむともさいつさゝれよさかづきを
　　こしぼそよりも蟻の浦まで
第四、靑海苔、こゝの谷水のすめるに、我が醉を洗ひて、
　もみぢぬは靑のりなるか霧の海
このもかのもの木々の葉、また露時雨もそめあへねばしか也、又海原を見わたせば、一つの島あり、名を

とへば黒髪といらへぬるに、

うらやまし黒かみさげてよる〳〵は
女波男波のまくらならべむ

馬の牧ときけば、驥の尾につくはいがいもあらまし
く、晝のかれいゐくひけるうちに、

馬串か黒かみにとがる栗のいが

第五、藪崎、

藪崎や身にしめてしるさゞいかな

郡の名を佐西といへばなり、さて爰の沖に宮入船押
出し、人々もしづまりこぞり、みやつこ笛吹みてぐら
をふりて、海上に神供をうけぬれば、嶺より雌雄の鳥
きたり、ふなばたによりそひ、供物を求食り、又山に
とびいりぬ、されば神慮のなす所にあらずやと、皆感
涙をなし、をそるべし愼むべし、まのまへの奇異いふ
にたらずと、船中聲をあげて周章よろこびうたふ、も
しもいひ事あれば鳥喰ぬる事なしとぞ、

第六、山城濱、この名を折句の沓冠にすへて、

八重の霧間しるし眞くろはなれ島

又

波のそこの都といふはこのすへか
山城濱はひなびざりける

第七、洲屋、

すや〳〵と月に眠るな宮づかへ

これなん七浦といふ、いつの時より誰がはじめけん、
こゝの宮前にて、參詣のめん〳〵、禰宜も立まじり
て、餅を礫のごとく打あふは、いかなるゆへぞや、又
輿あり、御床には疊敷はえたる如きの磐石あり、その
その石上になみ居、社師の祭文よむをきゝぬ、輪人形
ふ此所におさめし、

見どころの最花や中稲早稲晩稲

大元にて、

大もとも今もかはらぬや秋の山

島巡過大元 玩景佇珠垣
見渡無花艶 遂家秋夕昏、

彌山は高くそびえて、けうとき天狗すまる嶽なれば、
けふはえもあがらず、あなひせる人に對して、

君ならで誰かは見せんこのところ
宮も島をもしる人ぞしる

我慢高雄の峯のみならず、愛宕の山の太郎房、比良山
の次郎房、伊豆奈の三郎、富士の太郎、上野の妙義坊、

常陸の筑波法印、彦山の豐前坊、大山の伯耆坊、大峯の善鬼金平六、比叡山の法性坊、肥後の阿闍梨、葛城の行者高間坊、醍醐の山上僧正が谷、猶かの善界坊、みなこれ長翼高鼻のあやしきかたちとなん、鵄飛で天にいたる事をかへり見、仰げはいよ〳〵たかきこゝの山頭に、靈空藏いまぞかゝりけるに、

　この山の求聞持くるか秋の蟬

筧のながれも法水につゞくやと、

　漸さむき水の烟や護摩と閼伽

宮島のならびにて、神いましめたまふことなれば、婦人月ごとのさはりあるとき、かたはらのあし山といふにとぢこもる、

　姫萩も月の物かや下もみぢ

順風に眞帆をもたせ、城下におもむく折ふし、なにがしといふ滑稽のすきもの、朝な夕なしたしむ友なるが、かうやうの句一つ作りてかたりし、

　波路をや月の兎もはしり舟

とつぶやきぬるに、予脇第三をつゞりぬ、

　島山陰はよねんながき夜

　肴臺に色かへぬ松と竹うへて

撥破捨べきものなれば、いひちらしつ、城郭のもとに舟つき、われ〳〵すみ家にいりぬとて、立わかれぬるなごりおしさ、のりける舟を見もどし、

　ほの〴〵とあかねの幕をはしらかし

　　島まはり行ふねをしぞおもふ

京童跡追巻第六終

寛文七丁未年
九月吉日

平野屋作兵衛開板

京雀目録

中御門通今は魚の棚通と云又は椹木町通共云　春日通今は丸太町通といふ
大炊通今は竹や町通といふ　冷泉通今は夷川通といふ
二條通　押小路通
三條坊門通今は八まん町通と云　姉小路通
三條通　六角堂通今は誓願寺通と云
四條坊門通今は蛸薬師通と云　錦小路通

卷第六東より西へ横町

四條通　綾小路通
五條坊門通　高辻通今佛光寺通といふ
五條松原通　樋口通今萬壽寺通といふ
六條坊門通今は五條橋通と云　楊梅（やまもゝ）通
六條通　左女牛（さめうし）通
七條坊門通　北小路通
七條通　鹽小路通
八條坊門通　梅小路通
八條通　針小路通
九條坊門通　唐橋通
九條通

卷第七京はづれ寺町通より東の竪横町

角倉通世に川原町通と云　土手町通
新土手町通　樵木町通
五條橋東一筋目立町　同二筋目
同東へ三筋目世に建仁寺町通と云　右竪町
三條橋通より東の町横の町　五條橋通橋ゟ東の町横の町
五條東ノ橋詰南へ二筋目　奥書

京雀卷第一

それ政かしこく、道すなをなる御代のしるしとて、六合のうち穏かに、四方の海しづかに治まれる時をゑて、その惠みをかうぶり、樂しみにほこる民の家々、軒をきしり門をならべし都のすまゐは、ことさらに花やか也、凡そ九重の條理は、いにしへより定まれることなれども、町々の名は時代にまかせて變りゆく、おなじ都の人にてだに聞しらぬ町の名もあれば、すむ人の家もおぼつかなし、まして田舍人の俄に京にのぼりて、人を尋ねはべらんには、まぎれたる町の名、同じやうなる家づくりに、方角を忘れ尋ねわびつつ、西に東に北みなみ、ひねもすめぐりくらし、急ぐことにも時をたがへ、辻のちまた門のほとりに立やすらひ、行つかるゝ事すくなからず、この故に文の表書札の書付、その理その町とさだかならねば、田舍より都に送るたよりの、ゆきとゞかぬこともおほし、是を少しの案内にもなれかしと、一條より九條まで、西の朱雀より東の京極まで、町並を書つゞけ、故ある所にはそのかみのためしをしるし、田舍人に敎ゆといふ、

都をさだめられし所々の事

凡そ京師は是帝王のおはします所にして、天下四海の貴賤あつまりつどひて、よろずの法式をたゞし、いとなむ業をなせるもの也、今の京は民のしな〴〵すみわたるありさま、めでたう榮ゑてゆゝしげに見えたり、これよりのち猶よろづ代までも限りなかるべきをや、岩ほをなで芥子をかぞへたりとも、いかでか譬へとげん、そも〳〵本朝人皇のはじめ神武天皇は、天神七代地神五代の跡をうけ傳へ、ひうがの國宮崎の郡にしてあまつひつぎし給ひ、五十九年に當るつちのとのひつじ十月に東征し、豐蘆原の中津國に留まり、畝傍山に都をたて、橿原の地を伐はらひ、宮作りし給ふ、これをかし原の宮と名づけらる、今の大和の國也、それより代々のみかど、都を他國にうつされし事、四十度に及べり、神武天皇より景行天皇まで十二代のあひだは、大和國の郡々に宮づくりして、他國へはうつされざりしを、景行天皇の御宇に、大和の國纒向日代の宮より、近江國志賀郡に都をうつして、穴

穗の宮をつくり給へり、仲哀天皇二年九月に、穴穗の宮より長門國にうつり、豐浦の郡をたて、天皇こゝにして崩じ給ふ、是より御后神功皇后御位につかせ給ひ、女帝の御身として新羅百濟高麗の三韓を責したがへ、御歸朝の後、筑前の國みさかの郡にして、皇子御誕生おはします、其所を產宮とぞ名づけたる、この皇子御位につかせ給ひて應神天皇と申す、これ八幡大菩薩の事也、その後神功皇后は、大和國十市郡磐余稚櫻の宮におはしまし、天皇は同じ國のうち輕島豐明の宮にすみ給ふ、仁德天皇元年に攝津國難波にうつりて、高津の宮にすみ給ふ、履中天皇二年に、大和の國十市の郡へかへりすみ給ふ、反正天皇元年に河内國にうつされ、柴籬の宮にすみ給ふ、允恭天皇四十二年にまた大和國にかへりて、遠明日香宮にすみ給ふ、安康天皇三年に同じ國泊瀨朝倉の宮におはします、繼體天皇五年に山しろの國綴城の宮に移され、其後十二年に乙訓の宮にうつりすみたまふ、宣化天皇元年に又大和の國にかへりて、檜隈入野宮におはします、欽明天皇より皇極天皇までは、大和國郡々に宮居して他國へはうつされず、孝德天皇大化元年に、攝津國長柄にうつり豐崎の宮におはします、齊明天皇二年に、また大和の國にかへりて、飛鳥の岡本の宮にすみ給ふ、天智天皇六年に近江國にうつされて、志賀郡大津の宮におはします、天武天皇元年に大和の國にかへりて、岡本の宮にすみ給ふ、これを飛鳥の淨見原の宮と申す、持統天皇より光仁天皇まで九代は、大和國奈良の宮にすみ給ふ、

山城の國平安城今の京の初の事附將軍塚の事

こゝに人皇五十代桓武天皇延曆三年十月に、大和の國奈良の都を、山しろの國に遷されて、長岡の宮にすみ給ふ事十年にして、この京は甚だせばしとのたまひて、同じ第十二年正月に、大納言藤原小黑丸、參議左大辨紀古作美、大僧都賢璟等をつかはして、山城國葛野郡宇多村を見せられしに、三人ともに奏し申されけるは、この地靑龍の流水あり、右に白虎の大道あり、前に朱雀の澤畔あり、うしろに玄武の高山あり、まことにこれ四神相應の靈地なりと、これによつて延曆十三年に、長岡の京よりこの平安城にうつり給ふ、公卿せんぎありて、王城堅固長久のためとて、長八尺の土人形をつくり、くろがねの甲冑を着せ、弓矢

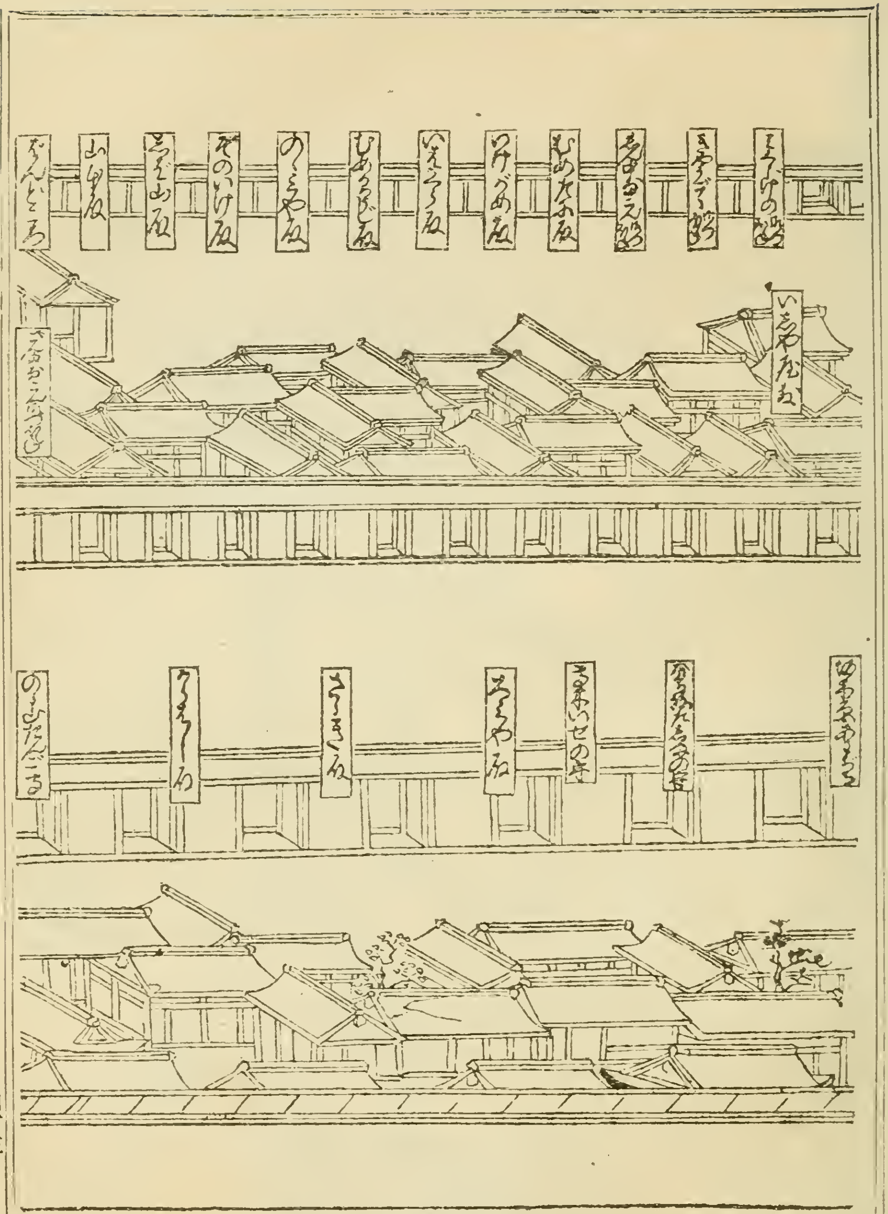
をもたせ、帝みづから人形に向ひ祝し給はく、必ずこの京の守護神となり、後の世に若しこの都を他所にうつす事あらば、その人を罰せよと宣命ありて、東山のみねに一丈あまりの穴をほらせ、西むきにたてゝ埋まれたり、今の將軍塚これなり、それより寛文四年◎甲辰歟きのとの巳今歳八百餘年にあまれり、この京は地景めでたく、五業久しかるべき平安の都城なれば、四方いよ／＼廣く榮ゑて、民の家々もたちつゞき、町々行かふともがら、高き卑しきすべて市のごとし、

大内裏の事

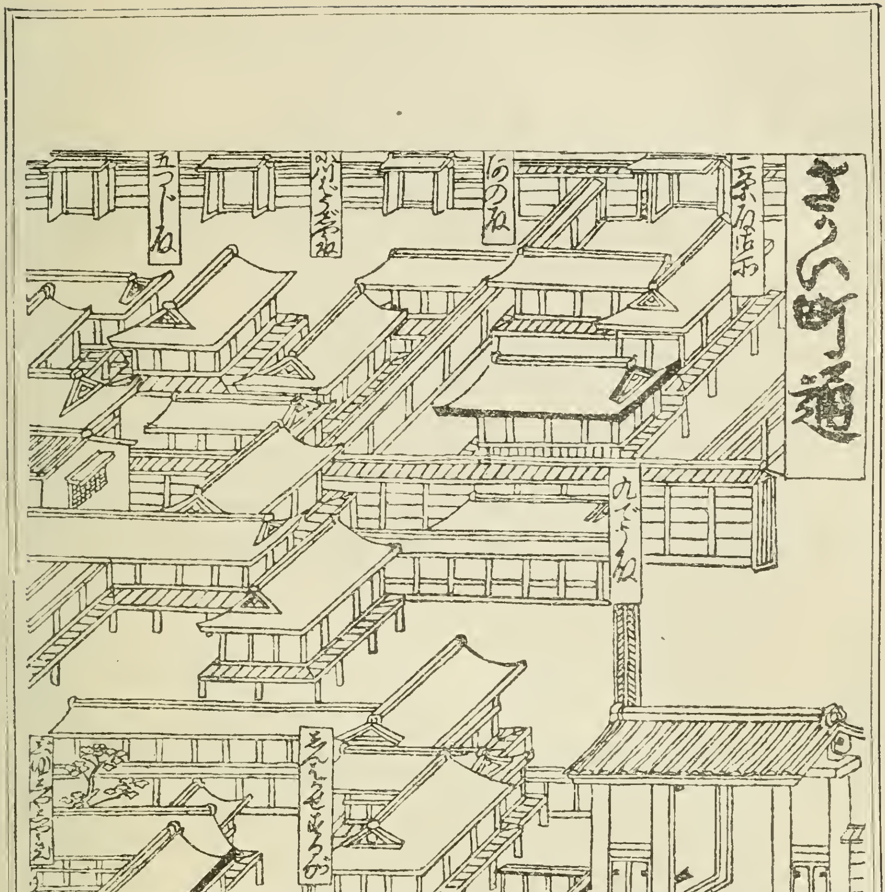
それ天子の王業は、一日萬機の政その事しげくして、百官諸司位をあやまるがゆへに、鳳闕の分内せばければ、禮法儀式を整ふるにかなひがたしとて、大内裏をざうゑいせらる、東西二十町南北三十六町をかこみて、その内にもろこし秦の始皇帝の咸陽宮をうつしつくらる、四方に十二の門あり、東には陽明門待賢門郁芳門、南には美福門朱雀門皇嘉門、西には談天門藻壁門殷富門、北には安嘉門偉鑒門達智門、この外に上東門は陽明門の北にあり、上西門は殷富門の北にあり、右近左近衞の府を置きて非常をいましめられたり、三十六の後宮には三千の女官ありて粧ひを飾り、七十二の前殿には文武の官職をつかさどりて詔を待つとかや、建禮門のうちに承明門あり、紫宸殿のうしろには仁壽殿承香殿常寧殿貞觀殿あり、この貞觀殿と申すは、后町の北の御匣殿なり、又仁壽殿の西には清凉殿後凉殿あり、仁壽殿の東には綾綺殿温明殿あり、鬼の間、直盧鈴の繩あり、海の障子は清凉殿に立らる、賢聖の障子は南殿にこれあり、左近の櫻右近の橘は、枝葉さかゑて今もあり、西に月花門東に日花門は、陣の聖に立むかへり、校書殿と申すは、清凉殿の南なる弓場殿の事也、武德殿と申すは、眞弓くらべ馬を御覽ぜらるゝところなり、昭陽舍は梨壺、淑景舍は桐壺、飛香舍は藤壺、凝花舍は梅壺、襲芳舍は雷鳴壺の事也、萩戸陣の座、瀧口の戸、鳥曹司、縫殿兵衞の陣、東の方は宣陽門、西のかたは陰明門なり、大極殿小安殿、蒼龍樓白虎樓有、左右にむかひて立らる、豐樂院と申すは八雀の西にあり、天子御遊宴會のところ、これを馬場殿となづけたり、豐樂殿と申すはもとこれ乾臨閣の事なり、神泉苑の前にある中臺の事とかや、清署堂はまた五節の宴水、大嘗會みなこゝに

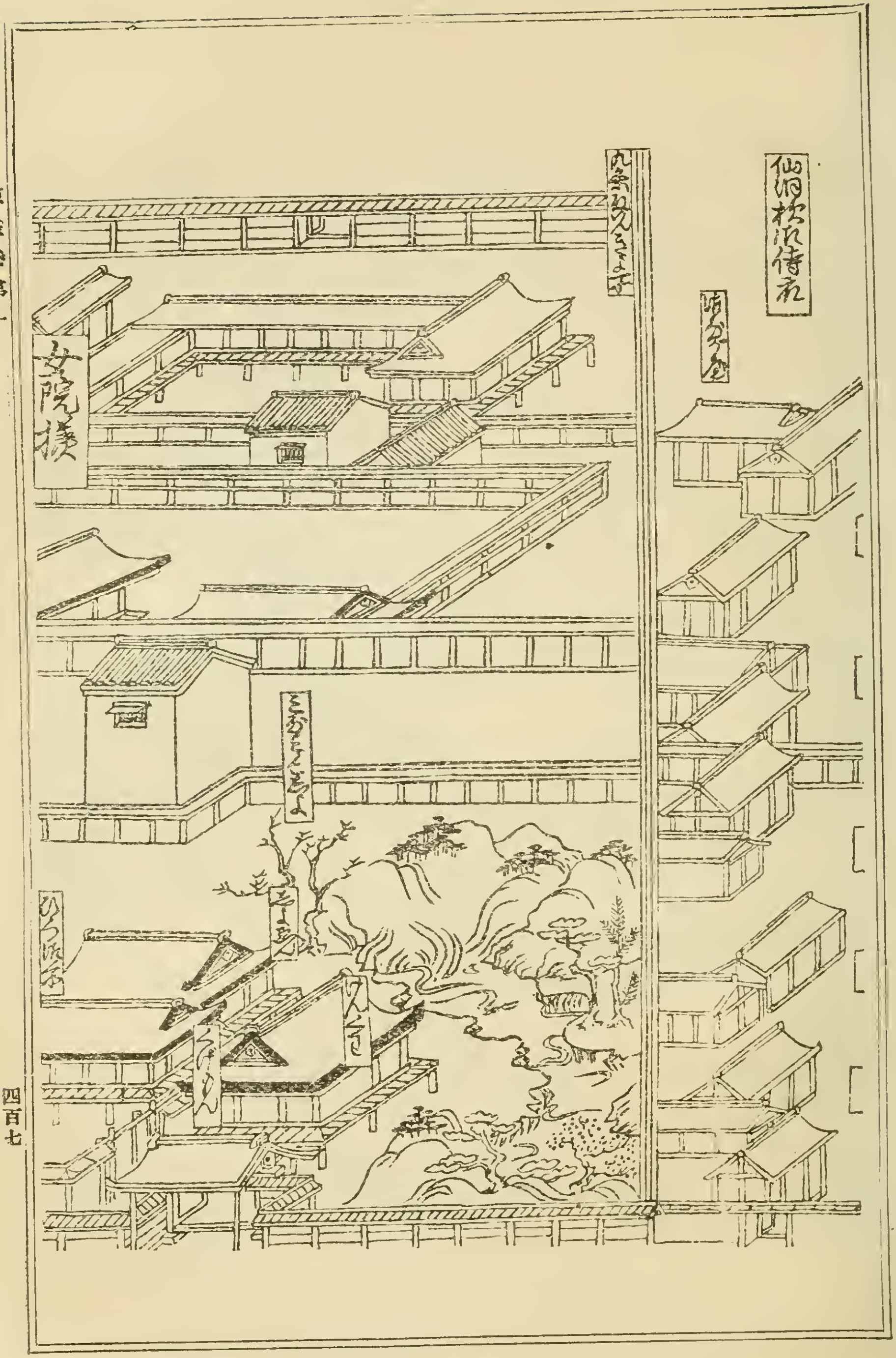
して行はる、眞言院はこれ御修法おこなはるゝ所也、内侍所と申すは、温明殿と紫宸殿との間、東の方におはします、弘徽でんは常寧殿の西にあり、そのうしろは登くはうでん、その北は徽安もん也、鴻臚舘と申すは、異國の使者をとゞむるところにして、羅生門の南にあり、鳳のいらかは天にかけり、虹のうつばりは雲にそびゑ、その廣大なる事いふばかりなし、然るをたび〳〵の回祿に國力ひすろぎ、今は昔の形ばかりに成ける事も、時世にまかせてかくのごとし、然るに都のうちに、西の京ひがしの京とて東西二京あり、西の京は初めに立て、東の京は漸々後に立つゞきたり、この故に伊勢物語にも、ひがしの京はまだ人の家居も定まらずとかき、源氏物語には、夕がほの宿をたづねて、五條わたりのあばらやと記せり、さればまづ大内裏をつくられしにも、宮城の十二門をば、十三ヶ國の造部に仰せて立させられ、その外諸國より宮殿をばつくりて奉りけるとなり、大内裏東の三門は、大宮通の西くしげ通に立られ、南は二條大路に三門あり、今の西の朱雀通は、南三門のうち中の朱雀門の理なり、東三門のうち、陽明門は近衛通にあたり、待賢門は中のみかどの理にあたり、郁芳門は大炊の御門の理にあたれり、さて上東門は土御門のすぢにあり、此十二門の外、四方に百官諸司の坊院寮町、さらに筆につくしがたし、今は僅かに名のみ殘りて、大内裏の跡は、或は民の家となり、或は田畠となりはべり、この故に今の都の町小路、人の家居たちつゞきて限りなし、堀川通の西がはより西の朱雀通まで、堅町を記さんとするに、一條通より北のかたは、町小路いりくみて筆には盡しがたければ、堀川の西一條より北をば、繪圖にうつしてこれを知らしむ、一條通より下は九條通に至るまで、町並をしるして、北より南へあらはし侍る、それ田舍にては、京のかたを上といひ、奥のかたを下といふ、京にては北をかみといひ、南を下といふ、天子のましますところ、いづ國よりさして申すにも上方といへり、◎圖は次頁以下に載す

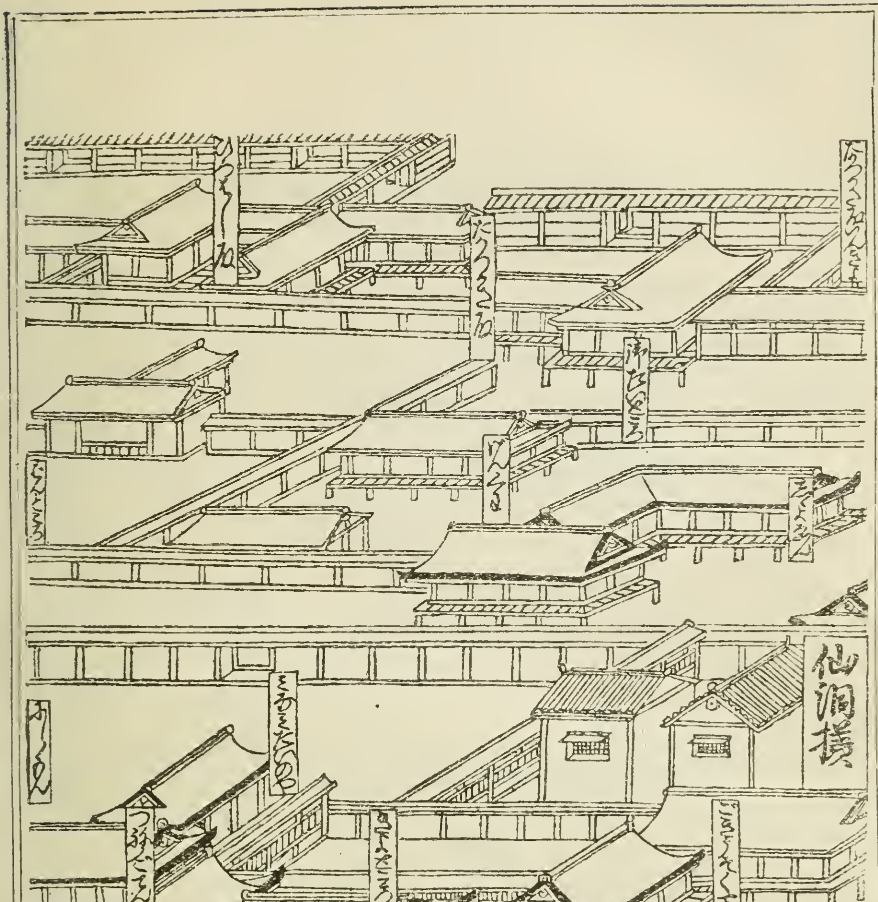
京雀卷第一終

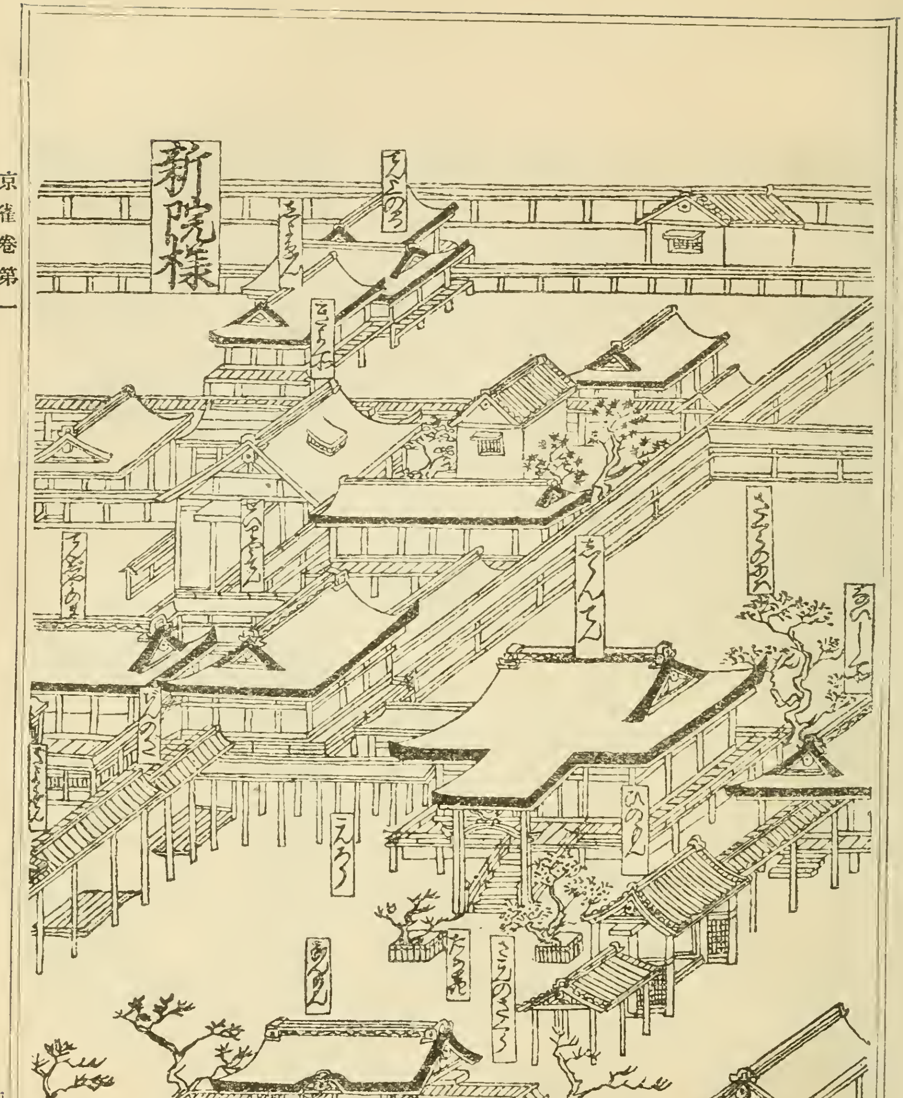


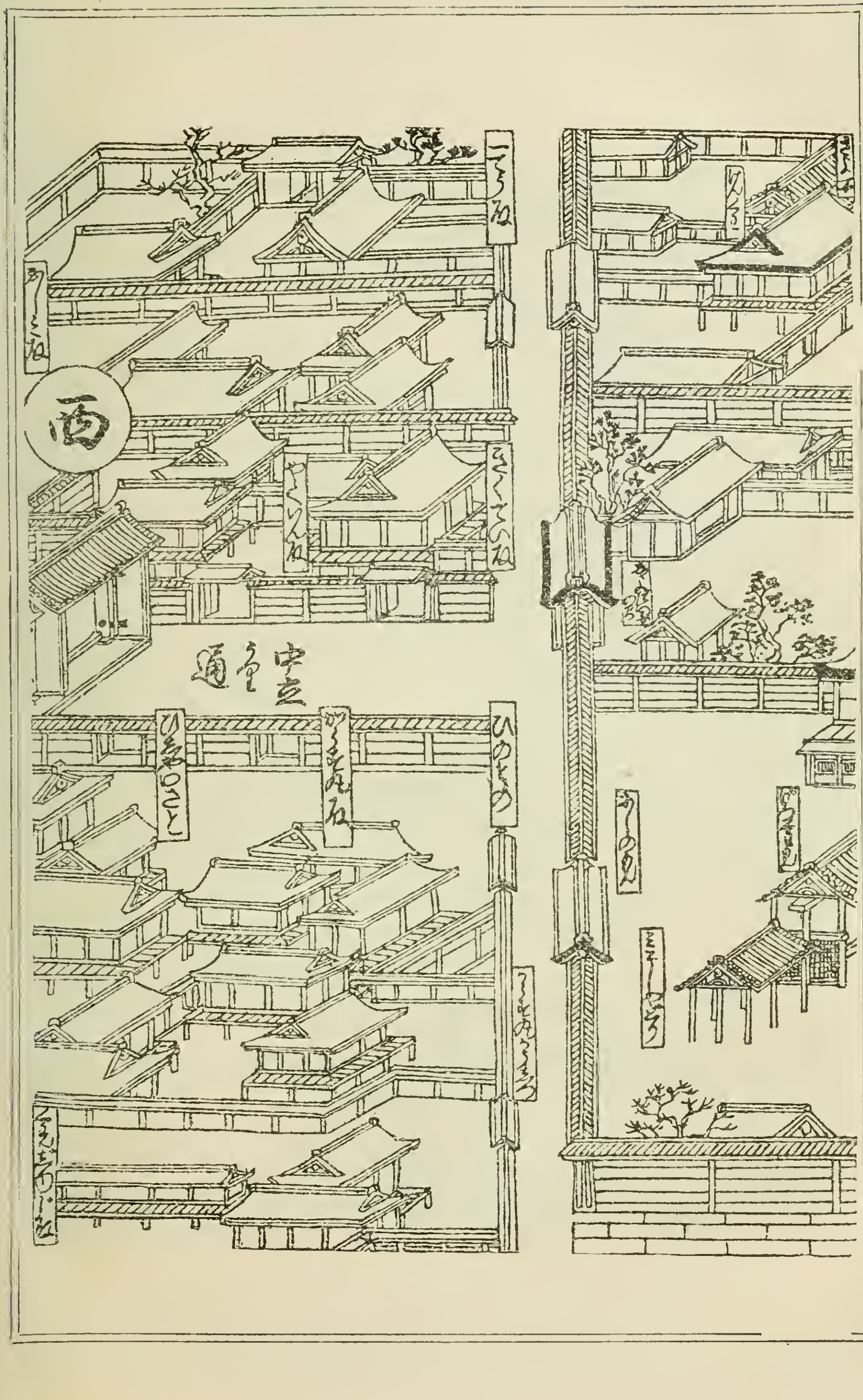
さまらき町通

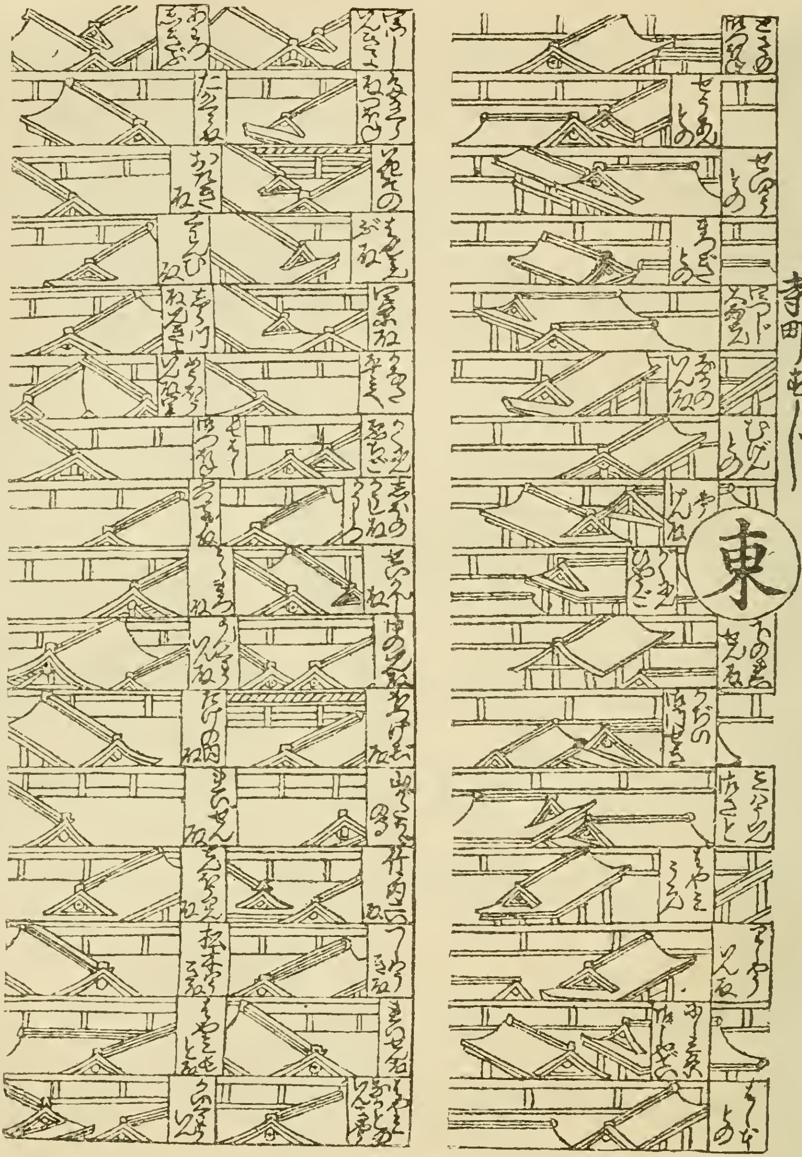

南

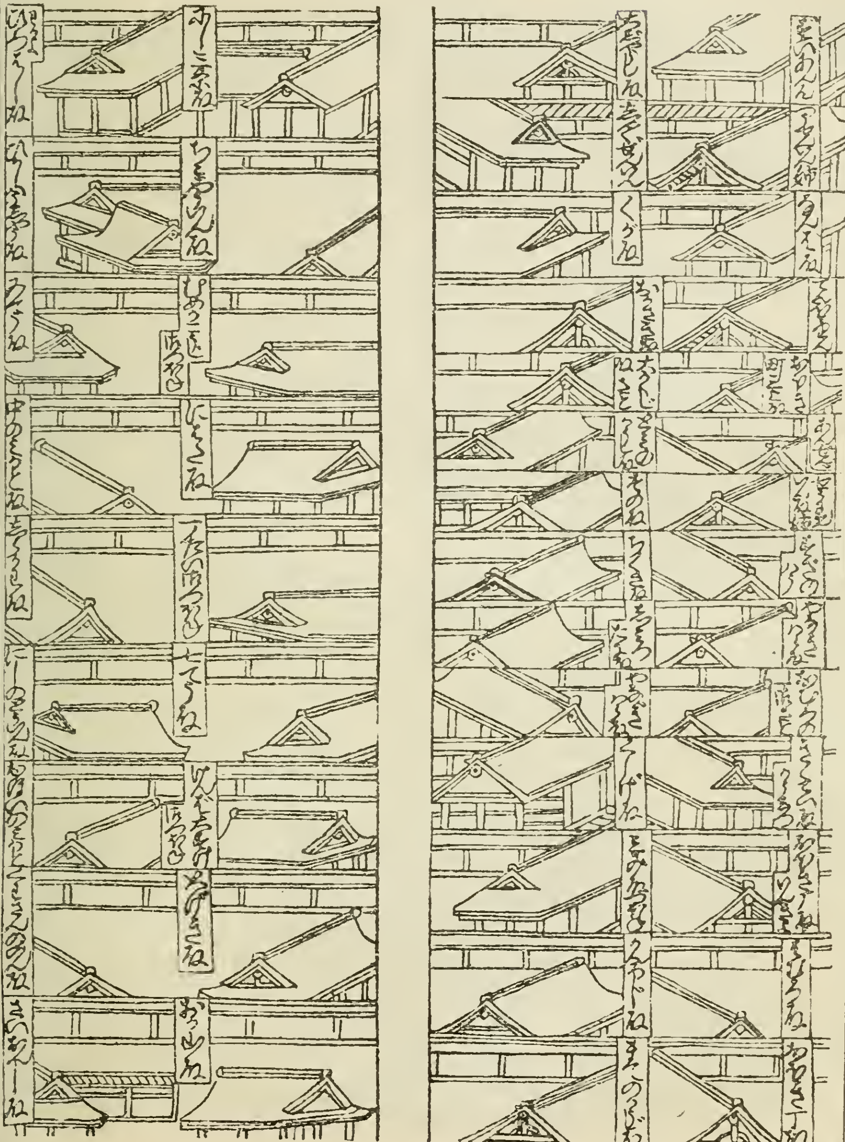

女院様

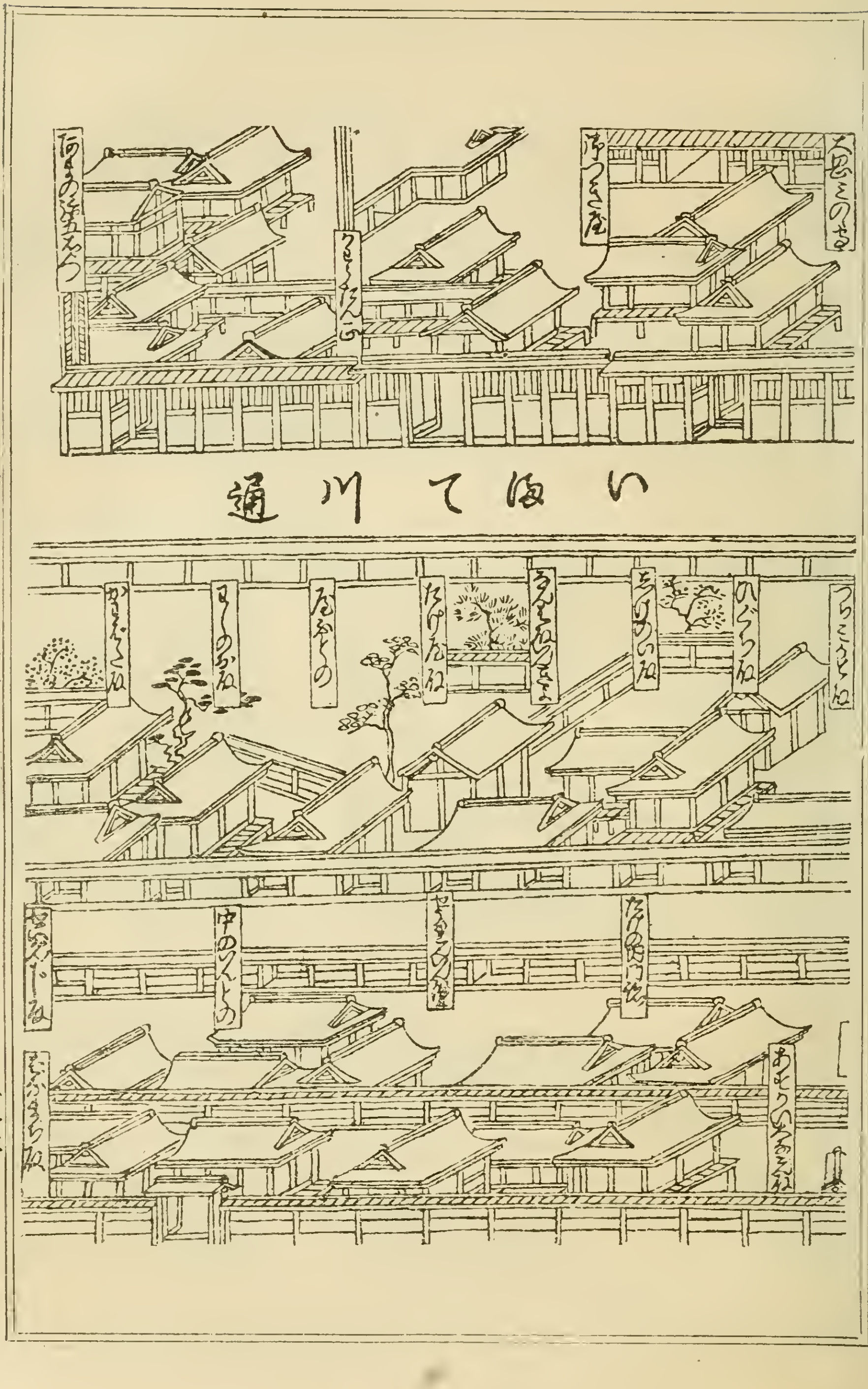

仙洞横

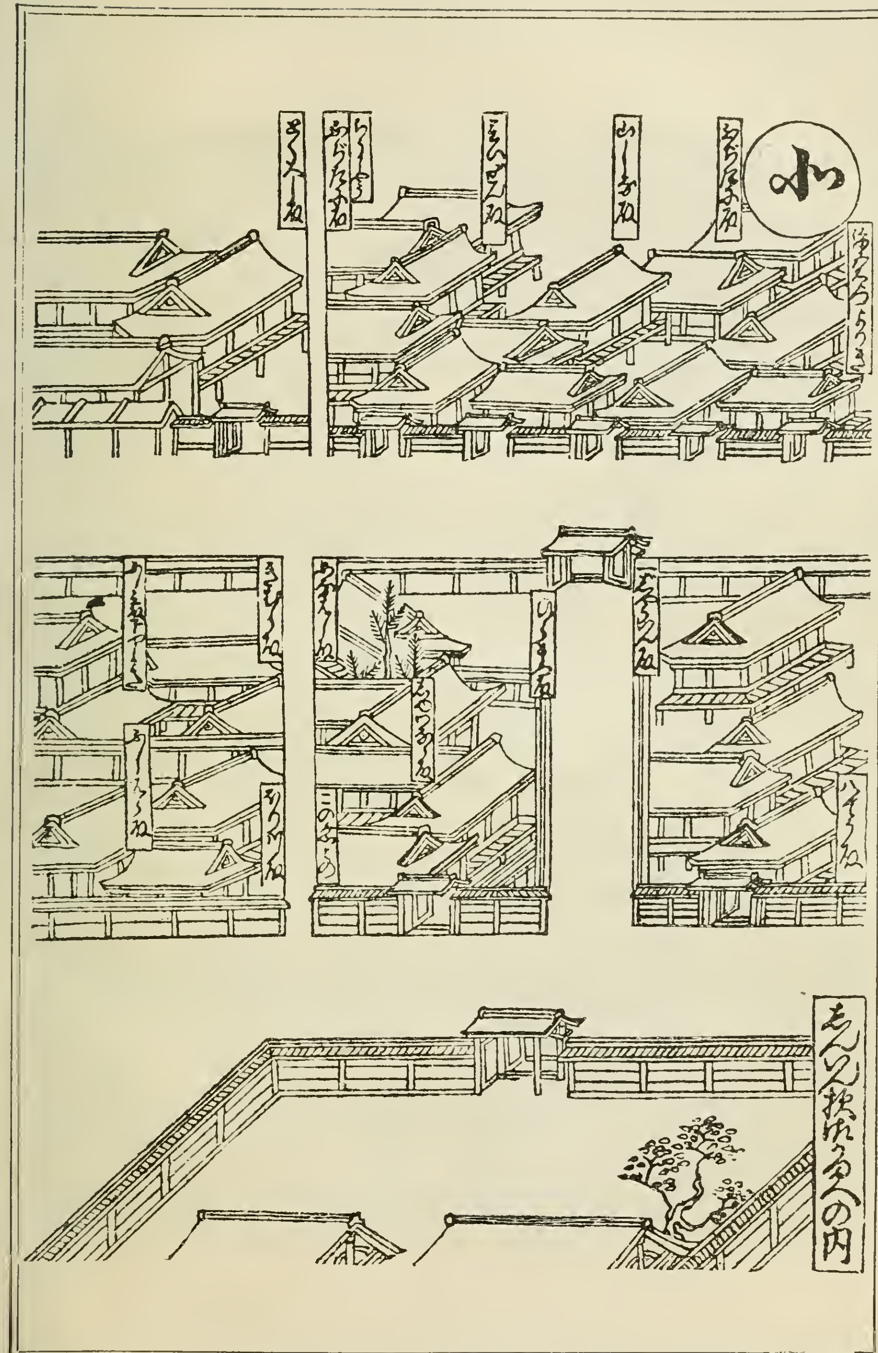

新院様


西


東








洛陽総圖
南
東
京
北
西

京雀巻第二竪町

【京極通】　今は寺町通といふ、

寺町通北の行あたりは、くらま口の町とて、賀茂の川原より西に向ひて、一町の民家あり、これより南にさがりて、その町をば西方寺町と名づく、これ寺町通の北のかしら町也、南にさがりて五條松原筋まで、東行は大かた寺にて、町屋は西行ばかり也、

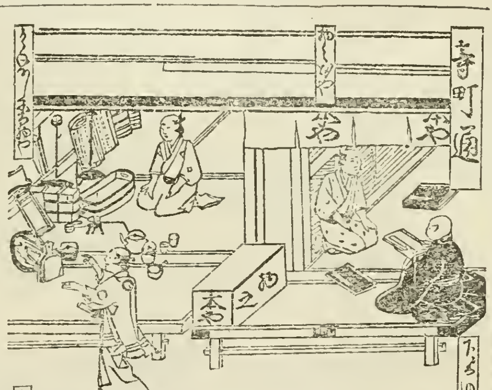
○西方寺町　この町に西方寺とて淨土宗の寺あり、

○光德寺町　この町に光德寺とて寺あり、

○長福寺町　この町に長福寺の不動とて名佛あり、菅相丞の御作といふ、

○歡喜寺町　○阿彌陀寺町　○十念寺町

○本滿寺町　右の町、その町にある寺の名を以て、即ちその町の名とせり、この本滿寺は日蓮宗の寺なり、此寺の日蓮聖人の木像は小原山の麓より掘出し奉る、年ごろこの所の地の底にて法華經をよむ聲の聞えしかば、あやしみて地をほりけるに、木像おはしましけり、極めて靈驗おわしますとて、かの



家流のともがらは、尊み侍るとかや、

○隆本寺町　これも日蓮宗の寺ある故にかく名づけたり、此寺の塔は靈佛の釋迦多寶にて、佛も塔も異國より渡されし所也、門前の仁王も名作にて侍りしを、さある頃內裏炎上の時に燒けうせたり、今の門は八條の宮の御門をつかはされて侍りとぞ、

隆本寺の南は小原口の道にて、東は御手洗に出る川原表也、西は今出川筋也、

今出川通さがる町

○眞如堂門前町　この寺は比叡山の眞如堂にて、本尊は慈覺大師の御作として、不斷念佛の道場也、内裏炎上の時やけうせて、三重の塔まで崩れ絕たり、

○一條道場前町　これ一條通下る町に當れり、一條南京極通の東二町は、古しへ上東門院の湯所にて、都の坤にありける故に、東北院と號すといへり、

○芝の藥師前町　又は本善寺前町ともいふ、本善寺はこれも日蓮宗の寺なり、この寺の立像は、いにしへ龍宮より渡らせ給ふとて、佛の御身に牡蠣がらのとりつきて侍り、極めて靈佛也とかや、

土御門のみなみ京極の西は、いにしへ京極殿とて、南北二町、これ入道長家公の家也、ある説には上東門院これなり、後一條院、後朱雀院、後冷泉院、三代のみかど御誕生の家にて、皇后四人まで生れ給へる地なり、賀茂明神紀伊の島に通ひ給ふ道なりける故に、めでたき地にて侍るとかや、

○淨花院前町　此寺は淨土宗四ヶの本寺の其一つ也、ある説に正親町の北、京極の西二町に、染殿の后の御所あり、これ忠仁公の家なり、又或説に正親町の南、京極の西をば清和院と號す、清和天皇の母后染殿の御所にて侍りしとかや、

○中御靈前町　此町は上御靈の御旅所にて、七月十八日より八月十八日まで、御靈の御輿こゝにおはします、

○七觀音町　此町に七觀音清和寺百万返あり、百万返は寺號は智恩寺といふ、淨土宗四ヶの本寺の一つ也、中頃淨忠といへる僧住持して、十念をもつて疫病をいやしけるとかや、内裏炎上の時みな焼たりしを、後に地替せさせられ、百万返は神樂岡のほとり、白川道の北に田中といふ所に遷さる、せいわ寺は北野のほとりに替られ、七觀音は八坂の高大寺の前にうつされたり、

○革堂前町　革堂の觀音の由來は、都物がたり京童の口に出たり、これ卅三所巡禮札の札所として、寺號を行願寺といふ、

○さいせう寺前町　○清光寺前町　○正行寺前町

○下御靈前町　御靈八所の神の事、京童にいひあらはせり、此町に天下一御細工所和泉掾とて人形作あり、

○大炊道場前町　時宗寺なり、おほゐのみかど通に

あたれる故に、かく名づけたり、此町に日蓮宗の寺あり、寂光寺と號す、此寺内に碁所本忍坊あり、

二條通あがる町
○ゐうほう寺前町　○めうまんじ前町

○ほんのうじ前町　此寺もと新町通にありし時に、織田信長公此寺にして明智光秀にうたれ給ひしといふ、

三條通あがる町
○天性寺前町

○下ほんのうじ町　此町南の東廉に矢田寺あり、この地藏の緣起は、東海道名所記に記せり、

三條通さがる町
○ゐつらく町　此町東行は、誓願寺の長門井地なり、西行の町家は高麗物や、數珠やなどの棚あり、

○泉式部町　此町東行に和泉式部の石塔あり、四十ばかりの比丘尼の貌うつくしきが、墨染の衣に淺黄のぼうしをかうぶれり、

その南隣は腹帶の地藏なり、これはそのかみ、新町通下立賣さがる町におはせし、寺號を清帶寺といふ、この地藏は行基の御作也、女人の平產を守り給ふとて、懷姙の女は帶をかけて祈るゆへに、腹帶の地藏と名づく、こゝに名譽の口中を療治するといへる齒藥をうりけりとかや、

蛸藥師　これはいにしへ室町通二條さがる町にありしとかや、今は四條坊門筋東の行あたり、この寺町にあり、此故に、世に坊門筋を蛸藥師通といふ、日外頃にやありけん、やくし堂の庭なる井のもとに、生蛸のありけるよし、いひはやらかし侍りし、

○圓ふくじ町　圓ふくじは淨土宗の寺なり、もとは室町通御池さがる町にありしとかや、

錦の小路さがる町
○大もんじ町　この町に六條の道場、四條の道場あり、みな時宗一遍上人の流を汲といふ、

四條さがる町
○ていあんの町　此町大雲院は、信長公の時安土にして淨土日蓮兩宗法論のとき、貞安の勝けるより、此寺の名高く聞ゆ、此一兩年は二月十五日に釋迦の涅槃會をとりおこなひ、葬禮の儀式をいたさるるは、當麻のねり供養に似かよひて、有がたく殊勝さふにおぼゆ、

○中町　○ゑびす町

五條まつばら通さがる
○蓮池町　この町に筆の上手裏辻が家あり、

○弓や町　此町には弓を削り矢をはぐ細工人、その

外革細工、扇や、よろづの商物あり、
○鐽や町　鐽、長刀、その外品々の物あり、
右二町はひとつにして、横の小路はなし、鐽や町の南は五條の橋通也、橋の西づめより南へは、六條樋の口町にゆく細道の川端也、

【御幸町通】　そのかみ太閤秀吉公の御時、大坂の城におはしまし、折々禁中參内の道にて、必らず此町筋を通り給ひける故に、御幸町と云傳へしとかや、

さはら木町通さがる○長ねん町　○毘沙門町　○松もと町
○だるま町　二條通さがる○鶴や町　○かめや町
○大もんじ町　あねがこうぢさがる○まるや町　三條通さがる○ゑびや町
○いせや町　四條坊門さがる○舟屋町　錦の小路さがる○大く町
四條さがる○めぬきや町　綾の小路さがる○まるや町　○たち花町
○ますや町　五條松原さがる○すはま町
○あかち町　この南は五條の橋通行當りにて、御影堂前の町也、是より南は寺計也、五條通さがる町、
六條さがる○樋のうへ町　○湛池町　○紺や町

○なや町　此南は七條通材木町の行當り也、此町の西筋も、五條はし通さがる寺町のすそ、
六條通さがる○わか宮町　○よろづや町　○下よろづや町
○すみよし町　是より南は七條通材木町行當り也、

【白山通】　この町筋に、そのかみ腐麵を賣もの多かりし故に、今も世に腐や町通といふなり、

さはら木町さがる○きくもと町　○ふねや町　○さゝや町
○ほていやくし町　この町に布袋やといへる家名の細工人ありける故に、そのかみは布袋や町といひけるを、後に藥師を安置して、御緣日には燈明をともして、諸人に拜ませければ、いつの程にやらん、ことのほかに繁昌して、八日十二日には貴賤參詣して、布袋藥師と名づけ、寺號を大福寺といふ、
二條さがる○おはり町　そのかみ此町に、素麵腐温飩の粉を賣ける家多かりければ、世に腐や町通と云傳へし、
○上白山町　○中はくさん町　○下白山町
この三町のうちに、そのかみ白山權現の社ありけるとかや、
三條さがる○しらかべ町　六角さがる○さかひ町　○梅や町

○ますや町　四條さがる○かぢや町　綾の小路さがる○たはらや町
○なべや町　○かぎや町　五條松原さがる○うろこ形の町
○神明町　此町東がはに神明の社あり、此南は五條橋通ゆき當也、少西の方に行て、橋通さがる所は寺町にて、本覺寺極樂寺、その南隣に首切地藏とて、大なる石地藏あり、御首はがた〳〵と動く、其首の下へ小石をはさみ入るに、夜のまにその小石なく成といふ、奇特の事なり、世に首切地藏と號す、信心を起し祈り奉れば、よく所願をかなへ給ふと云、

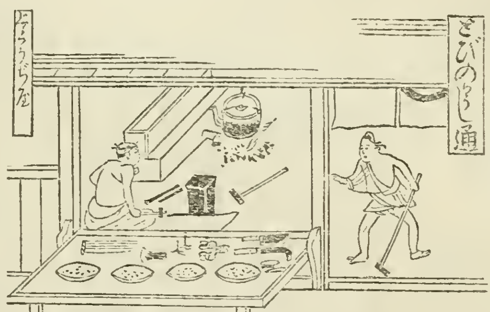
【富小路通】

さはら木町さがる○さいせうじ町　往昔(そのかみ)最勝寺といふ淨土宗の寺此町にあり、今は寺町通さはら木町筋上る町に移せり、
○ますや町　○大炊町　○かぢや町
二條さがる○たはら町　○もり山町　○松や町
○ふくなが町　三條さがる○櫻や町　○ほねや町
○たか宮町　○大もんじ町　四條さがる○さくゐんじ町
○ぬしや町　○すゞや町　○ゑびす町

五條松原さがる○上神明町　此町に神明のやしろあり、
○下神明神　この町の南は、五條のはし通にて、鹽がまの町に行あたる也、

【萬里小路】　古しへ民の家居未だ立續ざりし時、此筋には柳多く生つゞきしかば、柳馬場通といふ、

さはら木町通さがる○こまやくし町　往昔、高麗藥師此町におはしけりとかや、昔は中御門の北、萬里小路の東に、紀の貫





之の家あり、南庭に櫻木おほくうへ渡しければ、その家を櫻町とがうせしとかや、

○柳の馬場三町め

○かほもり町　そのかみ、金守出雲守殿御やしき、此町にありしとかや、

○柳のばゞ五町め

二條通さがる ○たうじの町　むかし異國の商人、此町に宿とりしとかや、又高麗陣捕物にて日本に來りし唐人共、此町に住けりとかや、

押小路さがる ○さらいしの町　昔本願寺の開山親鸞上人、此町に住給ひて遷化あり、その南庭の築山泉水の石に、虎に似たる大石あり、太閤秀吉公聚樂の城に引とりて築山に据給ふ、後に城を伏見に引移されし時、虎石をも引とられたり、石田治部少輔叛逆して、伏見の城代鳥井彦右衛門をうちとり、城は破れてかの虎石は今は猨谷の日蓮宗の寺に有といひ傳へし、

○八まん町　姉小路さがる ○あぶらや町　三條さがる ○つちや町

五條松原さがる ○井づゝ町　○十もんじ町　○しぶかみ町

○かしはや町

○忠菴町　この南は五條はし通ゆきあたり也、柳馬場より東のかた、五條の橋通より南へ八町のうちは、むかし融の大臣のすみ給ひし家なり、六條河原院と號す、後に寛平法皇の御所となれり、今はその跡だになくなり侍りとぞ、

【堺町通】　この筋を、二條より下にては、材木町通といふ、四條わたりにては鎗やのつきぬけといふ、北は内裏南の御門なり、

さはら木町さがる ○こまひき町　古しへ望月の駒を禁中に引まいらせしを、此町のわたりにて引つくろひけりとかや、今は世にとなへ誤りて、こまふく町といふ、

○たちばな町

○堺町　和泉の堺衆おほくすみそめたる故にかく名づけしとかや、

○鎗や町　二條さがる ○じゆせん町

押小路さがる ○ざいもく町　○中ざいもく町　○下材木町

右此三町の内、皆材木を賣あきなふ、

三條さがる ○たうだいの町　○かぶとや町

○さるや町　　○やをや町

四條さがる○ふろや町　この町南は綾の小路通ゆきあたり也、又佛光寺の南よりさがる町、

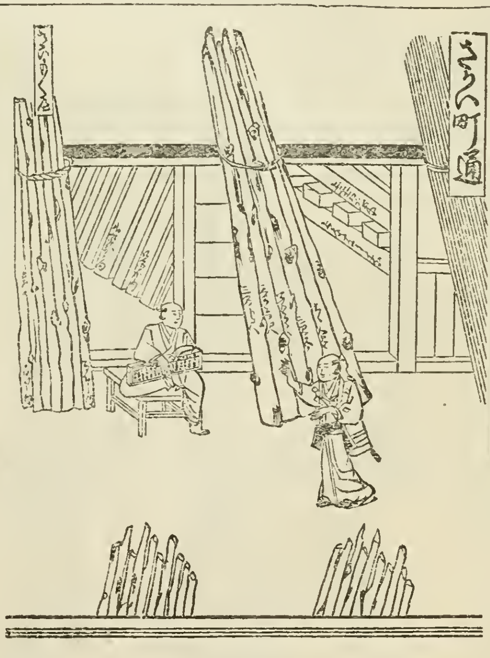
佛光寺さがる○すしや町　此町もとは夕顔の町といふ、むかし光源氏さすらひありき給ふ、五條わたりのあばらや、夕顔の宿もこゝのほとりにや、此町民家のうしろに夕がほの墳ありて、奇特の事侍りといひつたふ、かゝる古跡は求めてもあらまほしきに、いかなるものか、夕顔の町といふ名を替て、すしや町と改めしは何事ぞや、

○かじや町　又は金輪の町といふ、古しへ物ねたみ深き女あり、かしらに金輪を頂き、賀茂の明神に詣でたりしが、鬼になりて憎き人どもとりけるが、後に降伏せられし、その墳今に此町にあり、

○たはらや町　この南は五條の橋通行あたりなり、すこし西の方にゆきて、淨國寺、りうわう寺、隆せん寺といふ、三ヶ寺の南のかたより下へ、

山本通さがる○ほねや町　　○榮町

○から物町　この町の南八間町ゆきあたり、東本願



寺の新屋敷御茶屋あり、その南に鹽や町とて、一町の民家あり、その南は七條通なり、

【高倉通】　この筋の北に、頂妙寺とて日蓮宗の寺ありて行あたる故に、世の人頂妙寺通といふ、南は佛光寺にて行當りゆへに、三條より下にては佛光寺といふ、佛光寺の南にては、高倉通といふ也、いにしへ土御門の南の方、高倉の西にあたりて一町四方、これを高倉院と名づく、昭宣公のすみ給ひし家

ありけりとかや、
さはら木町さがる
○ふくもと町
○坂本町　そのかみ坂本の人すみそめたりし故に名とす、
○ふくや町　○あまかみ町
二條さがる
○かはら町　此町は扇の骨を削る職人おほし、
○ひらぎや町　○龜のかうの町
○かたわら町　この町は東行ばかり家あり、西行は堀にて、どんけ院殿家のうしろ藪土手なり、
三條さがる
○まるや町　○かいや町
○をひや町　○ざいもく町
○竹や町　この町の南は佛光寺前の町、五條坊門通なり、此寺は本願寺の開山親鸞上人の弟子眞佛原の開基なり、中興は本願寺の存覺、彼の家に入て相續ありとかや、佛光寺の南門は高辻通也、その筋をさがる町より南へ、
高辻さがる
○つゞらや町　此町にはつゞらをあみて業とす、
五條松原さがる
○かはら町

○はねや町　此町扇の骨や多し、
五條橋通下る
○さし物や町　○とみや町　○ますや町
○四町め　此南は東本願寺新屋敷ゆきあたり也、新屋敷の南に高倉町とて、只一町あり、其町の南は七條通にて、七條の道場、七條の墓跡也、其後は東九條とて、都の內ながら、家居は在鄕の村里也、

【間之町通】

出水通さがる
○今新在家町　これは出水通さがる町なり、ひがし行は九條殿うらの御門なり、又頂妙寺の寺家のうしろの長坪也、
○木のもと町　この町も東行は、頂妙寺西の長坪にて、西行ばかり町家あり、
さはら木町下る
○あいの町　○大津町
○いづみ町　○ゑびす町
二條さがる
○きせるや町　此町東西両行ながら皆きせるをはりて世をわたる業とす、
○高田町　此町東行に高田の寺あり、此寺は親鸞聖人の弟子高田の覺信坊の開基也、東の川原町二條

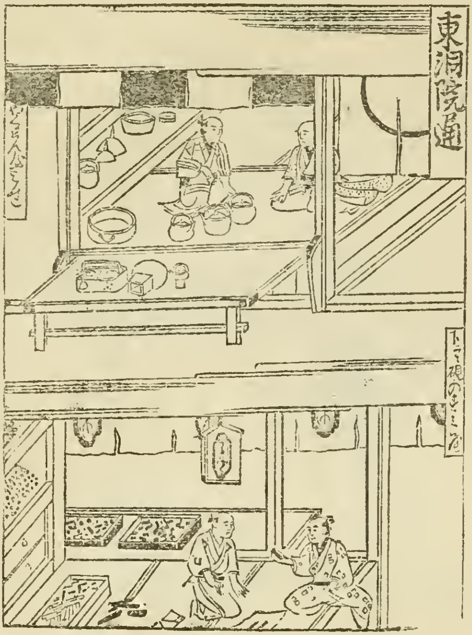


にも高田の寺あり、本寺は伊勢の一心傳是也、
○わたや町　このみなみはごんげ院殿の屋敷にて、行あたりなり、佛くはう寺南の筋高辻通さがる町より下へ町あり、
○つゞらや町（たかつじさがる）　この南は長光寺にてゆきあたり、長光寺の南の筋、樋口道さがる町より下へ町あり、
○あさひが町（ひぐち通さがる）　この町いにしへ朝日といへる名譽の神子のすみけるとかや、
○大津町（五條橋通さがる）　○ぬしや町　○ゑびす町（六條通さがる）
○天神町　○みこし町
○榎木町　この町に朝がほの墳とてこれあり、
○ほりつめ町　この南は七條通ゆきあたりなり、

【東洞院通】

○七けん町　これは新在家中の町をさがる町也、この北は行當りにて、禁中の築地也、これ新在家の北町東の行當りなり、北町は西も烏丸通にして行あたりにて、只一町西ひがしの町也、この七けん町は、これ東の洞院の頭町也、
○上三本木町（出水通さがる）　いにしへ東の洞院の西、近衛の南、一町四方は、枇杷左大臣仲平公の傳領として、もとは昭宣公の家也、おなじ所に北一條の御所山吹殿とて、淸和天皇御誕生の所、貞信公の家ありしと也、又近衛の南、東の洞院の東に、花山院とて一町四方の御所あり、もとの名は東一條の御所といへりとかや、
○三本木二町目（下立賣さがる）　○三本木三町目　○三本木四町目（かすが通さがる）

○井筒や町　　○つぼや町　　○かはらの町（二條さがる）
○ふねや町　　○さゝや町
○ごんげ院どの町　曇花院殿は今比丘尼御所なり、
○三もんじ町（三條さがる）
○諏方町　むかし近江國甲賀の邑なる、甲賀の太郎次郎三郎とて兄弟三人あり、常に山をめぐり鹿を殺して、世を渡るいとなみとす、ある時三人つれて、若狭の國たかかけ山にわけいりけるに、この山



の神大蛇となりてあらはれ出でたり、三郎これさたゝかふて遂に其神を殺す、兄二人鹿をとるに妨げありと怒つて、三郎を谷底に押落す、三郎死せずして大蛇の形ちに變じければ、そのすむ所に穴出來たり、三郎この穴にいりて、信濃の國こなきの松原にぬけ通る、三郎が妻子は悲しみ歎きて、觀音堂をつくりて跡を弔ふ、かくて卅三年にあたる日、三郎故鄕ゆかしく思ひて甲賀に歸る、里人おそれまどふ、三郎わが形ちの淺ましくなりたる事を悲しみ、觀音堂のゑんのしたにはひいりわだかまりて、一しんに觀音を稱念しければ、大蛇の形もぬけて、もとの三郎となる、妻子大に喜びけるに、兄の太郎も次郎も恐れて自害す、三郎は甲賀のあるじとなりつゝ家さかゑ、遂に信濃の國に飛さり、後に人の夢に、われは諏訪の明神の化身なりとつげ侍り、その觀音堂は今の南口の宿にあり、三郎が子は後に都にのぼり、今このすはの町にすみける故に名とす、京にある人もし鹿を食せんとするには、此家に參り明神を拜み、白箸一前をうけて歸り、その箸にて鹿を食へば子細なしと云ふ、

○じやうゑんの町　○ばんごうや町

四條さがる○あしふんじ町　○扇ざかや町　○たかはし町

○とうろうの町　そのかみ太閤秀吉公の御時に、この町に彌五三といふものあり、七月の燈籠を公儀へ申て、我只一人うけとりて京中にうりけり、此故に町の名とす、今は冶鑵(やくわん)やおほくあり、又産前産後の醫師彈正のすけが家あり、因幡堂やくし東の門の町也、又此町より祇園會七日の祭禮に、花ぬす人といふ山をまつり渡す、是は昔藤原保昌禁中の宿直して、花を盗とり御垣を越し所を、左近の陣より矢を射ければ、保昌が髻を射きられたるの所也といふ、

五條松原さがる○さくら町　○ふりき町　五條橋通下る○おくま町

○いづみ町　二條さがる○下いづみ町　○橋づめ町

○たんた町　○とうがね町

○かざりや町　此南は七條通也、直に伏見より京へかよふ車街道也、竹田通と云、此南に宇賀途子、竹田の里あり、伏見までは行程三里あり、

【車屋町通】　これはつきぬけ也、下姉が小路に、車借おほくある故に、その町筋の名とす、北は出水通にて行あたり也、出水通さがる町より南へ、

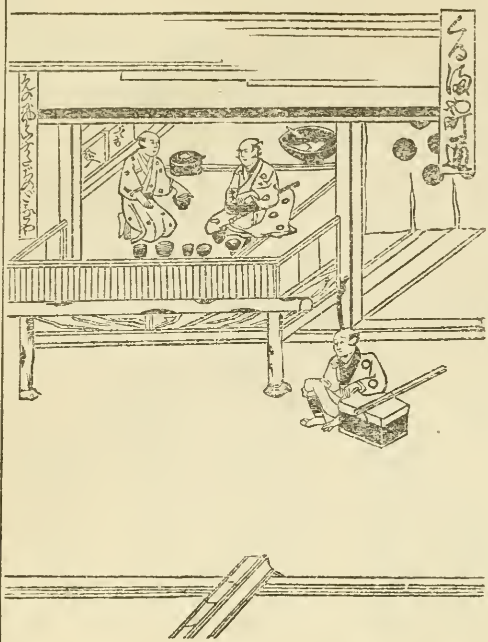
○大かた町　世にはおかた町といふ、ある人おかた町をや忘れて、上郎や町と尋ねて、傾城町に敎へやりけり、上郎と御方とは何か違けるとて、腹立けるとなん、

下たちうりさがる○ほりたての町　そのかみ此町の西行(がは)よりして、烏丸の東行までは、堀にてありしとかや、

○大炊町　○沙金町

○御旅町　むかし祇園殿御旅所この町にありし、今は四條寺町に引移されたりとかや、大炊通の南の方、東の洞院と烏丸との間一町四方は、いにしへ惟喬親王のすみ給ひし家ありけり、惟喬は文德天皇の皇子也、母は紀の名虎がむすめ靜子のうみ奉りし所也、然るを御弟惟仁親王は、忠仁公の御むすめ明子のうみたてまつり給ふ所にて、御位をふみ給ふ、清和天皇とぞ申ける、此故に惟喬は御兄ながら御位を引違られ、小野と云山里に引籠給ふ、後に小野宮定賴公傳領し給ひて、小野宮と號す、又此町西行(がは)に少將井とて、祇園殿手洗の水有し故に、今も此

町筋を少將殿つきぬけともいふ、
○二王町（冷泉通さがる） 此町より南へ、二條通までの間に、むかし觀音堂の有しとかや、寺内廣かりしを退轉に及び、六波羅の愛宕寺にうつされ、其後門前の二王をも、此町より送りつかはせしと也、
○下二王町（二條さがる）
○ぬしや町 この町兩行（かは）共に堅地塗師なり、
○車や町 此町はみな車借の住ける家也、南行（かは）には



後藤庄三郎が家ありて行當り、後藤が家の後は六角堂の寺内池坊が家也、それより南五條松原通さがる町までは、堅町の突抜なし、五條松原通さがる町より南へ立町、
○いなば堂の突ぬけ（五條松原さがる）
○同二町目　○平野町（五條橋通さがる）　○下平野町
○佛具や町 此町より東本願寺の寺内也、
○たかつき町　○かめや町　○鶴や町
○小川町 右これ因幡堂開ずの門筋といふ、
此南は七條通行あたり、麻緒の町なり、

【烏丸通】
○柳のつじ（上立賣通下ろ） この町北の横町をも榊の辻子といふ、西を風呂の途子といふ、只二町にして、ゆきあたりは御所の内といふ、
○八まん町（上立賣さがる） 此町西行は聖護院御門跡の御屋敷也、
○二本松町 この町西行（かは）は典藥頭清法印の家也、
○下二本町 此町の東に横石橋町とて、唯一町あり、
その東は相國寺門前也、

○五條殿町
○觀音町　此町東行は一條殿ふしみ殿裏の御門也、
○藥院町　この町東行は藥院の築地なり、いにしへは施藥院、悲田院とて、この兩院に知行を付られ、國中に或は年老て子なきもの、或はいとけなくして親におくれしもの、又は病にとりふせられて、類むかげなき者、みな悲田院に集めて、粥を煮て食せしめ、施藥院より藥を出して、病人を療治せしとかや、今はその事絶果てゝ、悲田院は鴨川の西にありて、その跡には乞食集りすみ侍り、施藥院を略して藥院と號す、むろ町の西唐はしの南にありけるを、今は一條通さがる烏丸にありながら、無緣の者に藥を施す事をもきかず、
○盧菴町　典藥頭盧菴法印、此町東行に家あり、小紅屋とて紅染する家も同じく西行にあり、むかし土御門の內裏と申せしも、この町の西の方にありしとかや、
○川田町　○丸いち町　○櫻のばゞ町
○ほりのうち町　この町より西へ一町は、菅丞相の御所なり、ある說には父參議是善公の家ありけり、後に觀喜光寺と號す、北野祭の日、かならず此所の枇杷をとりて、神前にまつるといへり、
○かすが町　この町に春日明神の小社有、
○おほゐの町　この町のあたり、そのかみ大炊の內裏とて、御所のありけりとかや、
○少將井町　古老傳にいはく、此町のうしろに御旅町といふは、こゝもと古しへは、人の家居もまばらなりける時、祇園殿の御旅所にて侍りし、これ今の車屋町通なり、少將井の御こしを居たる社の前の井のもとありける故に名とす、時世うつりて今は烏丸通の家屋敷となり、その井のもとは、いま少將井の町に、錢屋といふ酒やの家にあり、名水なれば諸方より水をくむといふ、
○淺野町
○二條殿町　いにしへこのあたりに、二條の內裏とて御所ありけるとかや、
○虎の町
○塲の町　此町には馬借あるゆへにや、六月十四日祇園の祭禮に、靜山とてかざりまつる、

三條さがる
○まんぢうやの町　此町の饅頭屋は、日本第一番饅頭の初なるよし、家名の書付にあり、

○七觀音町　そのかみ七觀音の堂、この町にありしを、寺町通に引移されしを、寛文三年又八坂の高大寺前に引移しける也、

○てうずの町　此町東行中ほどに、井のもとあり、毎年祇園會六月七日より十四日まで、この井の水にて手水つかふ、常には柵の木ゆひまはしてあり、

錦の小路さがる
○たかの丶町　本名は箏の町と名づく、祇園會七日の祭禮に、孟宗が母のために、雪の中なる竹の子をほり得たる山をつくりて、孟宗山とも、または竹の子山とも名づけて、まつりわたす、

四條さがる
○水かねや町　この町東行に大佛師の家あり、

○二帖半敷の町　此町に大經師の家西行にあり、京中の暦はこれより出して賣するなり、昔この町に五條寺とて、眞言宗の寺ありしを、師の坊身まかりける時、二人の弟子に寺をふたつにわけてとらせければ、五條寺ふたつにわけて、二帖半じきの町と名づけしとかや、又ある説には、疊五帖じきの家を、兄弟に分て讓りしかば、かく名づけしともいへり、ある人都俳諧とてせられしに、「中立のきげんさうにも見ゑの町」といふ前句に、「數奇やは二帖半じきの町」と付たり、

○大政所の町　昔この町東行に、祇園殿の社あり、その跡にある人家づくりして住ければ、蛇おほくありしを、打殺せどもとりすつれども、さらに限りなくわき出て、すさまじかりけるを、後に大善院といへる山伏、此家にすみて、七歩蛇を見つけいだして、打殺しけるより、長く蛇絶てなくなりたるとかや、

○いなばやくし前の町　この町東行に、因幡堂の藥師おはします、本堂は南むき也、そのかみ因幡の國の浦にて、漁の網にかゝりて、大海よりあがらせ給へり、中納言在原行平卿、因幡守にて下り給ひし時に、碁盤の上にのせ奉りて拜まれしより、今も碁盤の上におはします、後に大納言橘好古これを都にのぼせまいらせ、堂を建立せられし、今の本堂これなり、寺號を平等寺と號し、堂を因幡堂といふ、

五條松原さがる
○もと竹田町　今は五條烏丸の町といふ、

○檜皮町　この町に檜皮ぶき師住そめたりとかや、もとの名はあくわうじ町といふ、中頃より四條通御旅の町北行に、あくわうじの祉を引うつしぬ、今も此祉の參錢をば、此檜皮町へ取るといふ、

五條はし通さがる
○上の大坂町　○中の大坂町　○下の大坂町
右の三町には、ざいもく竹や多くあり、

○寺内一町目　此町より南へ東本願寺の寺内也、

○寺内二町目

○寺内三丁目　此町を大皷の番屋の町といふ、これより南は西行は本願寺の門前、東行は御家中の家家打ならべり、

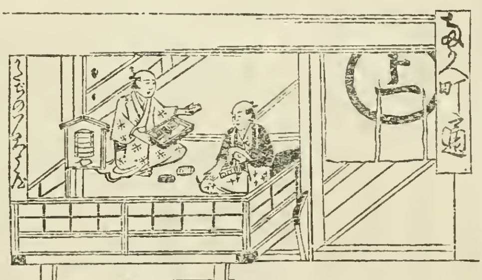
七條通さがる
○櫻町　このみなみは七條通行あたり也、

【兩替町通】　此理は春日通、今いふ丸太町筋より北には竪町なし、丸太町通さがる町より南へ、

丸太町通さがる
○さいはうじ町　もと西方寺とて淨土宗の寺あり、今はさはら木町通あがる寺町に引る、

○鶴龜や町

○北こうぢ町　この町そのかみ、北小路殿といふ公家のすみ給へりとかや、





二條通さがる
○兩替町　同兩替町　○同下町

○同兩替町　右四町のあひだ、兩替町に金座銀座の家々軒をならべたり、銀座の司大こくや常是、朱座の司この町にあり、南は三條通にてゆきあたり、その下高辻通さがる町より南へ、

高辻さがる
○がんぎ町　五條松原さがる ○辨才天町　ひぐち通さがる ○みごく町

五條橋通下ろ
○上のすの町　此町に諏方の堀とて堀池あり、

〇中のすはの町（□ののづし下る）　此町にすはの明神の社あり、その
がみ六條に傾城町のありし時は、此明神へけいせいどもの參りて、わが身の事思々の願だてなんどし、繪馬かけ燈明まいらせて、にぎはゝしかりけるを、今は傾城屋どもは、みな島原に引うつされしかば、まうで拜む人も稀にして、神さびわたり、物すごき宮居となれり、そのうへ東本願寺の古御堂の時は、この町筋より門徒の衆も參詣せしを、今は烏丸通に、御堂の門の立たれば、此町筋いとゞさびしさまさりぬ、

〇諏方の町　この町も大かたは本願寺の家中衆也、南は御堂のゆきあたりなり、

京雀巻第二終

京雀巻第三

【室町通】この筋は、北は上御靈通行あたりにて、それをさがる町を森もと町といふ、

〇もりもと町（上御靈さがる）　〇竹や町　〇柳原町
〇下柳原町　〇室町頭町（寺の内通さがる）　〇同かしら町（上立賣あがる）
〇うらつじ町　〇つき山町

〇惣門の町　此町に禁中御藥子所二口屋とてあり、

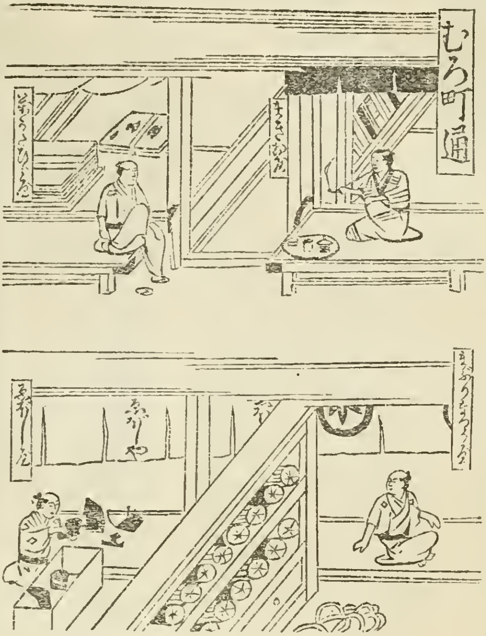
〇つゞらや町　この町には塗つゞらあり、

〇小島町　此町にいにしへ小島三郎とて、文武兼備の勇士住侍りし故に町の名とす、

〇新町（一條通さがる）　此町に御香具所播磨掾が家有、又梅原とて蒔繪師が家あり、

〇花たて町（中立賣さがる）　この町には有德人おほし、中にも袋やとて大福人の名をとりける宗古有、身まかりしかども家は今も相續せり、

〇清和寺町　清和寺は寺町百萬返の町にうつされしを、寛文三年に北野にうつされたり、七觀音清和寺



百萬返の跡の地には、禁中の與力衆の家となるといふ、

〇近衞町

出水通さがる〇火鉢や町

下立賣さがる〇ふゑんじ町

〇大もんの町

〇だうじやうの町　そのかみ大炊の道場、この町にありと云ふ、

竹屋町通さがる〇かゞみや町

〇冷泉町　古しへ公家冷泉院どの住給ひし故に、町の名とせりといふ、

二條さがる〇藥師町　そのかみ蛸藥師この町にありしとかや、今は四條坊門ゆきあたり、寺町にうつされたり、むかし此町の西行より一町西、新町通の東行まで、南は三條坊門通北行まで二町のあひだ、鴨井院とて御所あり、堀川院御誕生の所なり、又ある說には、古き井のもとありて、鴨つねに下居たる故に、鴨居殿と名づけたりとかや、

〇御池町　これ三條坊門通あがる町なり、これも鴨居の池の說をいへるにや、

〇ゑんふく町　圓福寺と云寺あり、今は寺町通六角通さがる町に引うつされ、その町をもまた圓福寺の町といへり、

三條あがる〇ゑんの行者の町　この町より祇園會十四日の祭禮に、役行者の山をまつり渡す、その町に新嫁どりあれば、その新嫁の表衣を、ゑんの行者の人形に着せしむとかや、この人形の面は靈理奇特あり、燈明散米を供へて祈るに、よく瘧病をおとすといひつた

へし、此山の子細は、ゑんの行者大峰葛城におこなひ給ふ時に、その谷深く峰高くして、苦行のもの苦しめり、此故に大峰と葛城との谷あひに、岩橋をかけよとて、山の神を呼び集めて、橋をわたさせらる、一言主の神貌かたち見ぐるしきゆへに、晝出て橋を渡す事かなふべからず、只夜ばかり出侍らんと申せるを、行者怒り給ひて、いましめを加へらるる體を、あらはしたる山なりといふ、

三條さがる
○ゑぼしや町　此町にゑぼしを折りて賣なり、又六月十四日祇園會に、黑主山をかざりてまつり渡す、これは花山の櫻を大伴の黑主がながむる所といへり、ある説には雲林院の花ともいへり、

○鯉山の町　この町、祇園會十四日に、鯉山をまつり渡す、龍門の瀧を鯉の昇る形を作れり、りうもん三級の瀧は、太唐無双の名瀧として、その流れを孟津といふ、これ又第一の大河也、此川の鯉、三月三日にかの龍門の瀧を昇りて龍になるといへり、

四條坊門通さがる
○山ぶし山の町　此町祇園會六月七日の祭禮に、山を飾り渡す、此山は淨藏貴所といふ人、大峰葛城に入ておこなひ給ふ所を作れり、

○ゑびすの町　この町東行に、いにしへよりゑびすの木像あり、燈明供物をそなふ、

四條さがる
○馬のまたの町

綾の小路さがる
○まつもとの町　此町に菓子屋おほし、中にも洲濱餅は、餘所にならびなき風味ありと云、祇園會六月七日の祭禮に、白樂天山を飾りて祭り渡す、もろこしの道林禪師は、松の枝にのぼり座して、心をすましおはせしに依て、世の人これを鳥窠和尚と名づけしを、白樂天こゝに行て、法を求めし躰也、

六條坊門さがる
○さんわうの町　此町東行北の廉に、山王權現のやしろあり、毎年の山王まつりに、この町より江州へ、御供をまいらせ送るといふ、

高辻さがる
○たかつじ町　五條松原さがる ○もと兩替町　○ばんどうや町

五條橋通さがる
○大こく町　○堺町

○下さかひ町　いにしへこの町、東行一町を海橋立と名づく、此所は祭主輔親の家なりし、その庭に連理の樹ありけりとかや、

○八百や町　此町の南は、東本願寺の行當り也、此町の西に袋町とて只一町あり、下上みな行あたり也、

【衣棚突拔通】　この町筋の北は、後藤かくぜうが家にて行あたり、そのさがる町を、

○上木のもと町　○下木のもと町　○信樂の途子

○芝の辻子　上立賣さがる○瓢たんの町　○はたけ山殿町

○今辻子　此町の南は行あたり也、鷹司通いまの下長者町筋さがる町より又南へ、

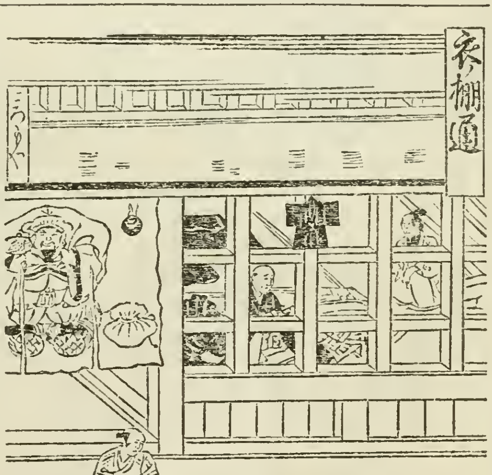
○御靈の町

○常宣院の町　中頃は頂妙寺の門前東行にありしを禁中役人の家に屋敷替あり、

下立賣さがる○もんぜき町　東の本願寺中興の開山教如上人といひしは、太閤秀吉公子細ありて隱居せしめらる、今西本願寺の寺內、花や町西のゆきあたりなる屋敷に引こもりおはせしを、今の東の寺內を東照大權現に申給はりて堂を立てらるゝほど、西寺內をとりのきて、此町に來りてすみ給へりとかや、

魚の棚さがる○くすりや町　まるた町さがる○たまや町　竹や町さがる○花たて町

○大をん寺町　大恩寺今は寺町通さはらぎ町あがる所にうつされたり、



二條さがる○上妙覺寺町

○下妙覺寺町　妙覺寺は日蓮宗の寺也、今は柳原町行當、小川通の北の極にあり、

○長はま町　南は三條通衣の棚也、此南行に突拔只一町連忍の辻子とて、其南に出れば六條通玉倉町にて行當也、それより南は四條上町鐘木途子とて一町あり、其南は京極若狹守殿御屋敷にて行當也、

その南には五條松原通下町より竪町あり、其北行は淺野但馬守殿御屋敷也、その町をさがれば、

五條松原さがる○たんばや町

○小田原町　是より南は行當にて町家はなし、

【新町通】古しへは町尻通といひしとかや、二條の北新町の東一町は、關白兼家公の家也、町尻殿といひけるゆへに、この筋を町尻といひけり、この町筋の北のかしら町は、上立賣通さがる東行は入江殿なり、その町をば無邊町といふ、

○もと新在家　今出川通さがる○さく大寺殿町

○一條どの丶町　一條通さがる○扇町

○仕丁町　禁中の仕丁のすみけるとかや、

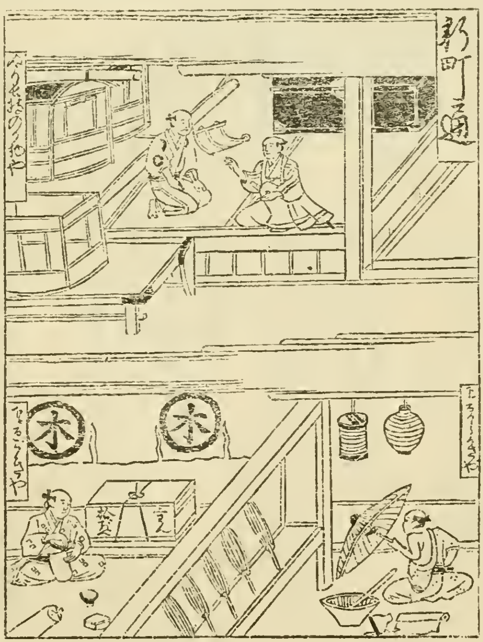
土御門通さがる○もとちやうめうじ町　頂妙寺今は高倉通とはら木町あがる北の行あたりにあり、

出水通さがる○ごれうの町　いにしへこの町に御靈の御旅あり、今の寺町中御靈これ也、此町には乘物をつくりて賣ゆへに、世には乘物や町といふ、

○はらおび地藏の町　腹帶の地藏は、寺町誓願寺の南にあり、名は同じけれども、それにはあらず、今三條通むろ町を東へ入町を、むかうの町といふ、その町北行の西かどに、腹帶地藏とて町やのうらにあり、七月廿四日にはおもてへ出し、燈明供物をそなふ、參詣の人市のごとし、

いなの棚さがる○青田町　まるた町さがる○大炊町

竹や町下る○辨才天町　冷泉通さがる○二條新町



二條さがる
○ぬしや町　この町より南へ二町のあひだは、むかし東三條院とて御所あり、四條院御誕生の地なり、後に大入道殿貞信公これを傳領せられし、長久四年晦日に燒失す、

三條坊門通さがる
○神明町　○町かしらの町

○下ぬしや町　右二町のあひだ、ぬしやおほし、

三條さがる
○いこう町　六月十四日祇園會に、八幡山をかざりまつる、

六角通さがる
○六かく町　六月十四日祇園會に、觀音山をまつり渡す、

○むかでや町

錦の小路さがる
○こゆひの棚　此町は、毎年七月と極月とに、萬の物をもち出てあきなふ市の棚ある故に、町の名とす、

四條通さがる
○十四屋の町　六月十四日祇園會に舟ぼこを祭渡す、是は神功皇后三韓を責給ひし時、異國の蒙古降參する體なり、その事共は本傳にあり、

○袋や町　岩戸山の町　祇園會七日の祭禮に、山かざり祭り渡す、天照大神天の岩戸に引こもり給ひしを、八百萬の神達岩戸の前にあつまり、思兼命といふ御神さま〴〵功をなし、常世の國よりながなきどりを求めて、これを鳴せ、庭火をたき、神樂を奏し給ふに、大神岩戸を出給へり、さればその山の鳥井のうへにある人は、思兼命なり、

高辻さがる
○さし物や町　五條松原さがる ○山崎町　○ざいもく町

五條通さがる
○ゑびすの町　七條坊門さがる ○下ゑびすの町　六條通さがる ○うしとら町

○四本松町　○三町目

○四町目　此町の南は七條通行あたり也、

【かまの座つきぬけ通】　この町筋は、北は下長者町通にて行あたり也、それより南へさがる町、

○しもおき町　○ならや町　下立賣さがる ○はんさうじ町

○同じく下の町　まるた町さがる ○かごや町

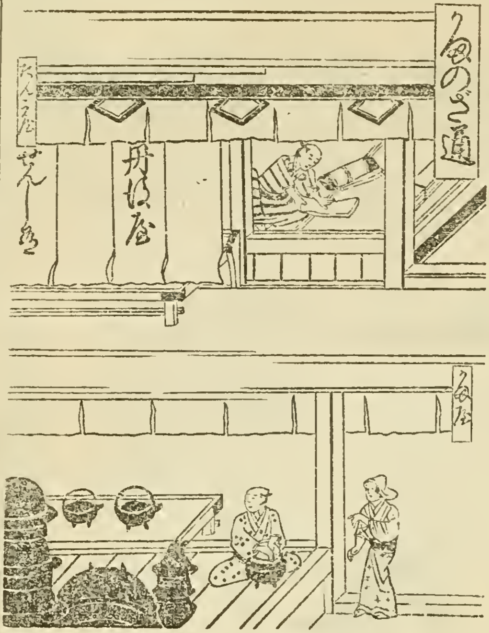
竹や町さがる
○たんごや町　此町そのかみより丹後つむぎをあきなふ、今は萬の絹を商買す、

ゑびす川さがる
○大こくや町　此町西行中ほどの家に、藥師を安置せしを、その町にしめたしの染物やおほく、鹿の子

をゆふ女ども、日ぐれごとにはつどひて參詣す、此故に鹿子藥師と名づけて、今大かた繁昌す、

○二條さがる松や町　○下松や町　○津輕町

○釜の座　此町に茶の湯の釜を鑄ける上手ども有、町の南は三條通行あたり、西ひがしの町をも釜の座といふ、鍋釜萬鑄物師の道具あり、行あたりのうしろは紀伊大納言樣御屋敷也、それより南四町の間には突拔なし、



○かうやくの町　又此町の南にて行當、神田明神の社有、其南は雨神の社也、神田明神の事は江戸名所記に記す、雨神の社の前高辻通さがる町より、

○たかつじさがるだいうす町　往當(そのかみ)此町に伴天連が住て、提宇子(だいうす)の法を勸しを、太閤秀吉公禁制せられ、寺を壞れたり、

○五條松原さがる鶴や町　○ひぐち通さがる布や町　○五條ばし通さがるゆやの町

○すゞや町　○六條通さがるわか宮町　○さめうしさがる西四本松町

○七條坊門さがるわか宮二町目

○北こうぢさがる竹や町　此町の南は七條通にて行あたり也、

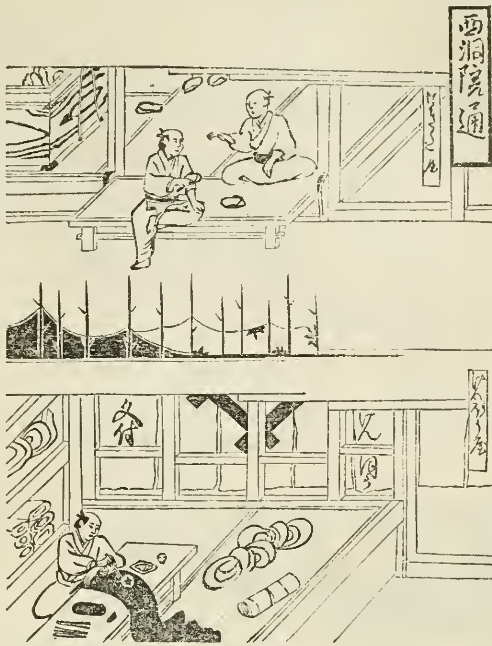
【西洞院通】　この筋の北は淸藏口とて、賀茂にゆく道の入口なり、

○下せいざう町　○大心院町

○道正の町　道正の解毒丸は、天下にかくれなき名藥なり、洞家の僧の傳へしとかや、子細は諸人の口につたはれり、今も禪僧の此家に入來るといふ、

○內藤町

○安樂寺の小路　此町西行(がは)に御所のうちとて屋敷あ



り、いにしへ尊氏將軍より、代々公方として、光源院義輝公まで、此御所におはしけるを、三好修理太夫がむほんして、義輝公を打奉りしより、この御所荒につきたり、此町の南のゆきあたりは、上立賣通、近衞殿櫻の御所の門前なり、

○近衞殿町　○かなつきの町

○下かなつきの町　右三町にて南にゆきあたり、本せいぐはんじ通さがる町より又縱町あり、

○大みねのづし　此町にそのかみより大なる栬(もみ)の木あり、その木に妖物すみて、夜更がたには梢より光りものとなりてくだる、その形つるべの如し、世の人はねつるべと名をつけていひつたふ、

○松の丸殿町　此の町に松丸殿とて住給へり、これは太閤秀吉公の妾にて、わりなくおぼしけるに、太閤御遺言の事ありて、松丸殿は尼になり、此町にすみ給へり、誓願寺に祠堂の心ざしを殘し置かれ、猶今にいたりて松丸殿の年忌には、誓願寺にて佛事あり、いと殊勝の事也、

中立賣通さがる
○菊や町　○新町かしら町　○ますや町

出水通さがる
○ごくもんの町　むかし左の獄舍は、近衞通の南、西の洞院の西の方にありしといへり、犯科人あればそこに入られたり、首をかくるにはこの獄門の町にかぎられし、いにしへは源平の後までも、科人をば京都を引渡し、首をはねては、この獄門の樗(あふち)の木にかけられたり、今は人の家居たちつゞきて、町屋になりけれども、猶獄門の町と名づけたり、後にすむ人この名をうるさがりて、菱や町と改めけると

かや、

下立うりさがる
○うらつじの町

いなの棚さがる
○ゑびすや町　昔は此町に神祇官とて、大内裏の時の官舍あり、又春日通の南、堀川通の西のかた、二町の間にも神祇官あり、又大炊のみかど通の北、大宮通の東、藍園の西のかた一町にも神祇官あり、都のうち三所の神祇官、ともに書傳に神祇官の前と記せるは、みな此所の事也、

○大炊の町　春日通の南のかた、西のとう院の東のかた一町、大炊の内裏とて、昔しは御所ありける故に町の名とす、

竹や町さがる
○びしやもん町　そのかみこの町に毘沙門堂あり、今は姉小路通油の小路を西へ入町、かぢや町の北行にうつしかへて侍り、又此町には來金道、伊賀守金道、丹後守吉通、越中守政俊、出羽守國通とて名鍛治あり、とり〳〵に打いだす刀わきざし小刀、いづれもよく骨を切といふ、

○藥師町

○もとめうげんじ町　妙顯寺は日蓮宗の寺也、京都日蓮宗二十一ヶ寺の中の第一也、今は小川通の北のゆきあたりに引移されたり、二條の南二町、西の洞院の西一町は、むかし閑院の大臣冬嗣公の家也し、その家の築山泉水は、金岡がつくりし所なりとかや、閑院殿となづけて奇麗絶景の地也、

又この町、今は押小路と名づくるとかや、昔近衞院の御宇に、東三條の林頭より、鵺といふ怪鳥くろ雲にのりて禁中に來り、わざはひをなし、此町閑院殿の築山の大石の上にやすみたり、その鵺の通ふ道なればとて、押小路は烏丸を限りに、西のかたはふさがれしとかや、これ俗説にして信じがたし、空をとぶほどのものに、押小路をふさがれたればとて、何事かあらんやと也、只もとより閑院殿の境地にて、おのづから町筋なき也、源三位賴政に仰せて射おとされし事は、平家物語にあり、鵺の腰掛石と名づけて、今もこの町民家の壺にあり、東三條の林頭といへるは、今鴨川より東、岡崎邑の南のかた、悲田院のあたりにあり、

○三條西のとう院町　そのかみ三條西洞院殿と云公家、この町にすみ給ひしとかや、今いふ三條西殿と

いふは此事也、
○姉西のとう院町
三條さがる
○柳の水の町　此町そのかみ織田常眞公の御屋敷あり、その井のもと名水にて、餘所の水にはすぐれたり、井の端に柳をうへられ、茶の湯の水にはたぐひなかりしを、後に常眞公は北野の五辻にうつり給ふ、その井の柳は枯て、今は樗の木一本井のほとりにあり、されども楢柳の水と名づく、そのあたりの人は今も此の水を汲といふ、
六條通さがる
○いけす町　此町西行に、そのかみ織田有樂の御やしきあり、又東がはに魚やありて、生洲をこしらへて、川魚をうりけり、今はたえて、その生洲は民家の井のもとになれり、
○しきれや町　此町より南は、西東兩行ともに、大かた茶染、けんぼうや染をいだす、
○外郎町　小田原の外郎は、この町より出すといふ、祇園會七日の神事に、この町より蟷螂山をかざり祭る、此山はもろこしの燕といふ國の君御幸の時、御車の輪の轟きしかば、蟷螂怒つて斧をさしあげとびかゝりしを、大王大にかんじて、これ武勇のものなりとて捕へて飼給ふ、この故に諸國武勇のつはもの來り集まりて、國大に治まりたりといへり、この故事をつくりて祭り渡すとかや、
四條さがる
○いうてんじ町　この町東行一町は、昔四條の大納言公任卿の家なり、そのころは毎日この屋敷より、紫雲の立おこりしとかや、公任の卿は朗詠集の作者なり、
綾の小路さがる
○けんばう町　中ごろけんばうの某とかや云もの、黑茶染を仕出しけり、この故にけんばう染といふとかや、この町に住ければ町の名とす、又この町東行一町は、むかし菅丞相の御子たちのおはせし所にて、紅梅殿と申せしとかや、
五條坊門さがる
○下柳の水町
高つじさがる
○高辻西洞院　此町東行一町は、むかし菅丞相のすみたまひし御所ありけるとかや、
○大水町　此町は五條天神の東の門前也、扇の地紙又は白紙を漉く家おほし、
○八けん町

○もと大夫町　昔此町東行(がは)一町は、中務卿具平親王の御所にて、千種殿と申せしとかや、

○下大夫町　右大夫町二町は傾城町也しを、六條三筋町と一同に、西朱雀の島原に引うつされたり、

六條通さがる ○西洞院一丁目　○同二町目

○かじや町　此町には、釘かすがいなどつくる鍛治おほくあり、

○ふくもと町　此南は七條通也、中に流るゝ川は、北は生洲町より南へ流れて、末は竹田の里のわたりにて、賀茂川の水とひとつに流れあふ也、

【小川通】

上立賣通さがる ○かみの小川　○中小川　○よりや町

もと誓願寺さがる ○うつぼや町　○みづのや加賀殿町

一條通さがる ○小川殿町　中立賣通さがる ○小川二丁目　土御門さがる ○岩やの町

出水通さがる ○勘兵衛町　下立賣さがる ○八まん町　いなの棚さがる ○かぢや町

丸太町さがる ○まるや町　竹や町さがる ○下まるや町　ゑびす川さがる ○ならや町

二條通さがる ○古城町

○らうの町　此町は古城町とひとつにて、只門ひとつにて隔てたるばかり也、西行(がは)の南に牢やありて、京都の科人を入置かる、

○はりつけ町　牢やの南にはりつけ町は、さし合て開ゆ、さりながら犯科人礫の事にはあらず、屏風、ふすま、障子などのはりつけする名也といふ、

○せいとう町

三條さがる ○猩々酒やの町　この町西行(がは)に酒やあり、表のひさしのうへに、猩々をつくり出し置きたれば、おのづから家の名になれりといふ、

○本能寺町　本能寺町は日蓮宗の寺なり、太閤秀吉公の御時に、今の寺町に引移されたり、そのかみ此寺こゝにありし時に、織田信長公上洛ありて、この寺におはしましけるを、明智日向守光秀が逆心によりて、信長公は打れ給へり、主君を打ける天罰にや、十三日めに太閤秀吉公のために追落され、野伏のために打殺されしとかや、此町の南は本田内記殿御屋敷行あたり、

高辻さがる ○舟や町　五條松原さがる ○天子のつきぬけ

○天子の衘拔二町目　○同三町目

六條通さがる ○天子のつきぬけ

七條坊門さがる ○もみぢ町

○しのむら町

○同二町目

北こうぢさがる ○もんがくの町　此町の南は七條通ゆきあたり也、文覺上人高尾の勸進帳をよみて、一院の御遊をさまたげ奉り、からめとられて土の牢に百日入置かれ、それより流されて伊豆の大島にすてられ、兵衛佐賴朝にむほんをすゝめたりける、此町はその時の牢屋のあと也、平家物語にみえたり、

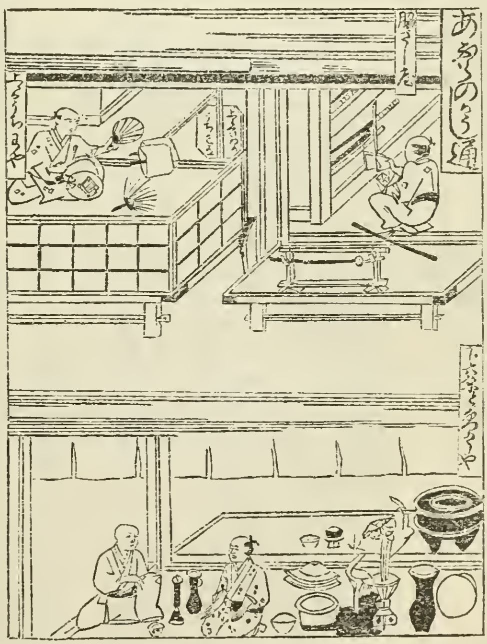
【油小路通】此筋は北の行あたり、そのかみ誓願寺のありける、今は引うつして、寺町六角通の行あたりにあり、此故に油の小路ゆきあたり、西ひがしの理(まち)をば、もとせいぐわん寺通といふ、

本誓願寺通さがる ○本せいぐわん寺下町

○百萬遍の町　この町中ごろ百萬遍知恩寺ありけるとかや、

一條通さがる ○一條油小路町

中立うりさがる ○甲斐守町　此町に本田甲斐守殿御屋敷ありける故なり、



□門通さがる ○鶴や町　新さいけ中の町さがる ○大こく町

出水通さがる ○近衛町　此町の西行一町は、いにしへひだり獄舍(がは)にて、犯科人はこゝに入られしとかや、義朝鎌田が首の出たるを、兵衛佐賴朝に渡しあたへたりといふは、この獄舍より出たるなりといふ、

下立賣さがる ○うら辻町　○しや町　まるた町さがる ○大もんじ町

竹や町さがる ○松もと町　冷泉通さがる ○くすりや町　二條さがる ○二條油小路町

○押油小路町　三條坊門さがる ○しきあみの町

姉小路さがる ○そうりんの町　そのかみ大友宗麟此町にすみけりとなん、

三條さがる ○三條油小路町　○六角油の小路　四條坊門 ○山田町

錦の小路さがる ○□□もと町　この町、六月七日の祇園會に、八幡山をまつり渡す、

四條さがる ○べんけい町

綾の小路さがる ○かざはやの町　この町、七日のぎをん會に、天神山をかざり祭る、これ宰府の天神飛梅の事を作れり、

五條坊門さがる ○太子山の町　七日の祇園會に、太子山を飾り祭る、此山は、そのかみ聖德太子、十六歳にて弓削守屋を打給へり、その時四天王に願を立給ひ、天王寺をたてんとて、山城の國をだきの郡の山中に入て、材木を求め給ふ所に、御守にかけ給ふ御本尊に、奇特の事おはします有樣をつくりて祭り渡す、

高つじさがる ○ふもとの町　五條松原さがる ○ひぐち町　○かな池町

五條橋通さがる ○下かな池町

○うちぼりの町　此町東行に內堀とて目醫師あり、

○はり松町　○佛具屋町　○同三町目

○同四町目　此町の南は七條通行あたり也、猶その南は不動堂、その南より稻荷の御旅所に出る也、

京雀巻第三終

京雀卷第四

【いづみどのつきぬけ通】四條坊門通さがる町、堀川おもてより東へ半町の間は、藤堂和泉守殿御やしきある故に、町筋の名とせり、此筋の北は一條通行あたり也、

一條通さがる
○松下の町　この町に洲與三とて、そのかみ無双の蒔繪師ありけるとかや、

○同突抜　此町の南は、水野美作守殿御屋敷にて行當り也、南にては、錦の小路下る町より南へ竪町あり、

錦小路通さがる
○いづみ殿町　此町の北は和泉守殿御やしきの行あたり也、

四條通さがる
○たかの丶町

○ゑうぼうじ町　要法寺、日蓮宗の寺なり、今は二條寺町にあり、

五條ばうもんさがる
○からかみ町　園韓神はもとこれ宮内省にありといふ、延暦年中に長岡の京よりこの京に都うつしの時、この神を他所にうつされんとせしに、御託宣の事あり、ながく此所にありて帝都をまもらんとの給ひし故に、其まゝ宮内省におはしましけりといへり、ある歌に、

近きだにきかぬみそぎを何かその
から神までは遠く祈らん

とよめり、二月と十壹月の丑の日神事ありとかや、この町、いにしへよしある人住給ひて、この神を勸請せられしとかや、

○すみよし町

五條松原さがる
○さらや町

○いづみ町

五條ばし通さがる
○はすいけ町

○さめが井水の町　この名水ある故に此筋をさめが井通といふ、

○醒が井二町め　○同三町め

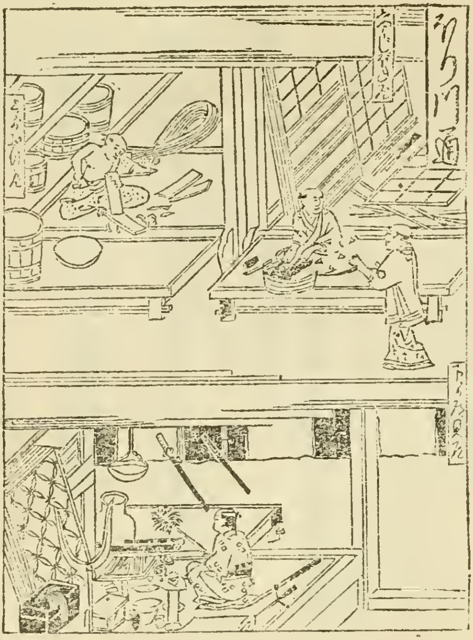
○同四町め　このみなみは西本願寺の前なり、又油の小路通と、さめが井筋とのあひだに、六條通さがる町より七條通まで、竪町あり、

六條さがる
○すみよし町

さめこうじさがる
○さかた町

七條坊門さがる
○まるや町

北小路さがる
○ひしや町　此町の南は七條通行あたり也、



【堀川通】東行(がは) この筋、北は本法寺とて、日遶宗の寺にてゆきあたり也、寺の內通さがる町より南へ、

寺の內さがる ○竹やの辻子 いにしへ竹や殿とて、公家の住給ひしさかや、

上立賣さがる ○上のふなばし 五辻さがる ○下のふなばし

すまの町通さがる ○むら雲の町 此町むら雲の御前とてこれあり、

本誓願寺通さがる ○さんだ町 一條通さがる ○ざいもく町 中立賣さがる ○同ざいもく町

土御門通さがる ○同ざいもく町 新在家中の町通下る ○同ざいもく町 出水通下る ○同ざいもく町

下立賣さがる ○長はま町 この町の東行(がは)一町は、本院の右大臣時平公の家なりしさかや、

いなの棚さがる ○上ほり川 まるた町さがる ○ほり川七町め

竹や町さがる ○ほり川八町め ○ほり川九町め

二條さがる ○つちはし町 此町東行(がは)に、山のせんかうや敷あり、

○押堀川町 此町に土井遠江守殿御屋敷あり、

○三條堀川町 ○姉ほり川町 三條さがる ○はしうら町

○六かく堀河 ○にしきほり川 四條さがる ○四條樋の口町

綾の小路さがる ○ぬけ小路 五條坊門さがる ○よし水町 ○高辻ほり川町

五條松原さがる ○本國寺前町 右堀川通東行(がは)これにて行あたり也、その南を半町ばかり東へゆけば、さめが井通に出るなり、

【同ほり川通】西行(がは)の竪町

一條あがる ○ゑの木の下町

一條さがる ○かぢや町 この町には釘かすがいなどつくる鍛冶

おほし、

○さいり町

（中立賣さがる）○なら物や町　この町は莚、楊梅皮、苅茅などうりあきなふ、

○ほり川四町め　此町は桶井筒つるべ水舟などをつくりてあきなふ、

（下立賣さがる）○なるを町　（いなのたなさがる）○上のほり川町

○ほり川七町め　此町は牧佐渡守殿下屋敷の長坪にて、惣門の口ひとつ開て、民家はなし、竹や町筋堀川の橋西のつめ、それより南は二條の御城西のかた也、南へさがれば左は堀川の端柵の木也、右は御城の堀なり、これより三町南にゆきて、

（八まん町通さがる）○大こく町　○姉堀川町　（三條通さがる）○はしうら町

○六角堀河町

○四條堀川町　此町より南は、古道具唐の日本の品品、鍋、釜、桶、障子、古家の壊道具までも、家々に出し商なふ、

（四條さがる）○四條樋の口町　○綾小路堀川町

○吉水町　昔吉水法印とて住けり、

（五條松原通あがる）○高辻地内　五條松原通下る町は、本國寺の門前にて、町家は只一二家あり、堀端の南も本國寺の門脇也、

【ほり川通より西へ二筋目】

（一條あがる）○神明町　（一條さがる）○福大明神町　○たはら町

○よしや町　○きくや町　○風呂や町

（下立うりさがる）○まるや町

○なをゑ町　此町直江の某とて武勇の人住けるとにや、此町にて南は牧佐渡守殿御やしきにて行あたり、その南は二條の御城あり、御城より南の堀川の西二筋目、

（八まん町さがる）○佐渡町　そのかみ本多佐渡守殿御屋敷有といふ、

（おしこうぢさがる）○上八もんじ町　（三條さがる）○下八もんじ町

○岩神町　此町に岩神の社ありける故に、此筋を岩神町筋ともいふ、

○宮もと町　○松かた町

（四條さがる）○たかす町　此町いにしへ和泉の境高洲の人すみそめたりといふ、

○雁金町　　○ゐづゝや町
五條松原通あがる ○吉もんじ町　この町の南は本國寺にて行當り也、
【猪熊通】ほり川通より西へ三筋め也
一條あがる ○びしやもん町　一條さがる ○小寺町　中立賣さがる ○小寺町二町め
土御門さがる ○はなばたの町　聚樂御城の時此町のわたりは御花畠也、
○ゑびす町
○くわうじん町　此町東行に荒神堂あり、
下立賣さがる ○かぎや町
○昆陽野町　津の國昆陽野の人すみそめたりと云、ある說に、此所そのかみ野原にてありしを、聚樂御城の時、小屋がけして商賣したる故とかや、
○二町め　此町東行は下屋敷也、西行は牧佐渡守殿家の門也、此南は御城行あたり也、冷泉通と二條通との間、大宮猪のくまのほど一町四方は、むかし小野篁の家なりしとかや、
○二條御城より南の方ほり川より三筋め
二條御城さがる ○もがみ町　○三ぼう猪の隈町

○姉猪くま町　三條さがる ○三條ゐのくま町
○くろもん町　○かはら町　○柳町
四條さがる ○かぢや町　○瀬戸物町　○土や町
○わらや町　今も此町には藁をあきなふ也、この町の南は、本國寺の行當りにて、五條松原通也、
【堀川通より西へ四筋め】くろ門通といふ、
一條あがる ○大しやうじ殿途次　大聖寺殿は比丘尼御所也、
一條さがる ○やぶの內町　そのかみ民家未だなかりし時に、聚樂御城のころ、此わたり竹藪にてありけるとかや、
○榎の木の町　○小大文じ町　○くろもんの町
下たちうりあがる ○かにや町　ある人の家に蟹を飼けるに、大かた馴て人の家にもゆかざりしかば、奇特がりてその家名を蟹やと云けりとぞ、
○森中町
○小傳馬町　此町、牧佐渡家殿にて行あたり也、
二條御城さがる 二條御城の南、堀川より西へ四筋め、
○だんごや町　○大もんの町　三條あがる ○上一文字町
三條さがる ○下一文字町　○山崎町　○下山崎町

四條あがる
○ふぢをか町　そのかみ染物の上手にて、藤岡といへるものすみける故に、町の名とす、世にいふ藤岡染とは此事也とかや、

四條さがる
○御太刀の松町　此町に大木の松一本あり、世にいふ九郎判官義經太刀をかけられし、今も此松を太刀かけの松と名づくとかや、

○綾町

○竹や町　此町には青竹をあきなふ、

○杉ゑびすの町　此町に杉夷とてありといふ、此南は本國寺にてふさがり、五條松原通にて行當り也、

【大宮通】ほり川通より西へ五筋め

北のゆきあたりは、今宮の御旅町とて、西東只一町あり、その町の東は、ほり川へ出る水の源にて、賀茂川のわかれて流るゝ所也、そのわたりに、大宮權現のやしろあり、此故に町筋の名とす、さて御旅町の西は、紫野大德寺に行道なり、その北は今宮、紫竹、大門、鷹が峰にゆく、こゝには野間玄澤法印の藥園あり、みそのするゑは、萬壽峠より岩やの不動へ參る道あり、岩やは空海和尚の開基として、本尊は行基の御作として、大聖不動明王にておはします、都より五里ばかりあり、車坂萬壽峠などいふむつかしき難所をこして、雲が畑と云山家をすぐる、ここは柴かり薪とるいとなみに隙なし、その里より十町ばかりにして、岩屋の瀧あり、狂氣するものこの瀧にうたせぬれば物のけさむるとて、都より狂つれて人をつれてまうで、不動明王の御利生をあふぎなるへきはかりにて、正氣になるも多しとかや、今宮の社の事は、京童の口に出たり、鳥井の前に流るゝ川をば、若狹川となづく、そのあたりに萩野上野とてあり、又この萩野を見つるし野とも名づく、萩の名所にて、今も萩おほくあり、

柴野は是大德寺のほとり也、源の兼高朝臣の歌に、

宮人のかざして歸る葵草
　此平野までみどり成かな

とよめり、夫木和歌集にのせたり、賀茂の葵まつりのかへるさをよめりとおぼゆ、

龍寶山大德寺は、大燈國師の開基也、この師の由來は別書にしるす、

雲林院は大德寺の門前にある村なり、櫻の名所と

して古歌ども數々あり、
今宮お旅町下る ○わか宮町　○筋違橋の町
○安居院中の町　安居院はもとこれ山門の一院にて安居院と號す、音の連宜しき故に、あぐゐといふ、
○安居院前の町　寺の内通さがる ○上花開院町
○下花開院の町　上たちうりさがる ○芝の大宮町
五辻通さがる ○觀世の町　此町、申樂四座の内、觀世太夫が家あり、
すゝの町通さがる ○京や町　西陣織殿やのつかふ唐糸を商なふ、
○石やくし町　此町西がは北の廉に石やくしあり、
一條さがる ○梨の木町　中立うりさがる ○小堀町　○藤九郎町
○櫻町　○大字頭町　下立賣さがる ○ひしや町
○三町め
春日通さがる ○大宮二町め　此町の南は、二條御城の行あたり也、
御城より南大宮通、
御城さがる町 ○布の町　○本水町　○つるもと町
三條さがる ○二條大宮町　○六角大宮町　○坊門大宮町

○車や町　四條さがる ○四條大宮町　○たんばや町
五條坊門さがる ○ありや町　○下くりや町　○山崎や町
○かぎや町　○土井のうへ町　六條通さがる ○寺内一町め
○同二町め　○こおや町　七條通さがる ○七條大宮町
○中の町　○鹽がま町　八條通さがる ○石ばし町
○中の町　○下の町
からはし通さがる ○塔の角の町　東寺は唐はしの南、九條の北、大宮の西、壬生の東にあり、廻四町四方なり、塔の角の町の南は、九條通也、東寺の二王門あり、その前を西にゆけば、東寺の西に西寺あり、むかし弘仁の帝の御時に、東寺を空海に、西寺を守敏に給はりしとかや、西寺の西に四塚あり、其西は吉祥院村也、村の西を唐橋といふ、その西は桂川なり、又東寺の二王のすこし西のかたより南へゆくは、淀鳥羽の道にて、大坂までも連たり、戀塚、秋の山、みなこの道にあり、又九條通直に西にゆけば、桂川より津の國山崎の道也、

【大宮通の西の筋北へ今宮御旅町さがる】

○西わかみや町　○下西わか宮町
○七野社木下町　此北の横町を山桝や町とて、只一町あり、その町より七野社にまうで、舟岡山にゆく道あり、此舟をか山の西の麓に、千本の墓所あり、むかし保元の亂に、六條の判官爲義を切せられたるは、此舟岡山にての事也、七野社の南のかた、長ふく寺の町とて横町有、その町を下れば、
○みのべ町　○壹岐殿町　○しやうでんの辻子(づし)上立うりさがる
○櫻井の辻子(づし)　○横大宮町　○立花町
○智惠光院門前町　○虫はみ町一條通さがる
○洲濱池の町　○鳥井町
○ふくろ町新在家中の町通さがる　右是より南は行あたり也、又長ふく寺の西町を闕貫町是はよこ町と云、その西の辻をさがる町、
○聖天三町め
○聖天の町　此町の内、東のかたは聖天の社、是は陰陽の神にて、夫婦むかひ立給へり、面相は象の貌の如し、又西のかたは石神、これいにしへ二條御城の南の岩神の町にありし、その本躰は大石也、石の景ここの外に見事也ければ、内裏に引よせ庭の立石にせんとせられしに、靈驗の奇特ありて、八條宮の御所のまつにすてられしを、奇特のありければ、石神と名づけて此所に鎮祭れり、此町の南は行あたりにて、日蓮宗本立寺にて行とまれり、下は智惠光院の南の門より竪町あり、これ一條通さがる町也、
○本丸町一條通さがる　これ聚樂の城、本丸の跡也、
○山里町　○下山里町
○上てんびん町　此南は安寺と云寺にて行當、猶此西に入組たる町々は圖にあり、

【西朱雀通】　上にては千本通といふ、この筋北の行ぬけは丹波にこゆる道なり、紫野大德寺の西にあたりて蓮臺野あり、寺を蓮臺寺と名づく、空海和尚の開基なり、都の北に七野あり、一には内野、二には北野、三には紫野、四には上野、五には萩野、又は見つるし野とも云、六には蓮臺野、七には平野也、
○閻魔堂前の町　此町西行にゑんま堂あり、小野篁の建立として、堂のゑんま王も同じく篁の作也、三月に大念佛あり、龜山院の御宇より初まれり、此所に白毫院とて紫式部が墓所あり、
○花車町寺の内通さがる　この町の西のかた一町ばかりにして、釋

迦堂あり、二月八日より十五日まで、此堂にて遺教經を訓讀す、

○作菴町　　○五辻大下町

（五辻通さがる）○上せいくはう寺前町　淸光寺は今の寺町通さはら木町東のゆきあたりにあり、

○下五辻町　　○大津町　　○大塔前町

○龜や町

（中立うりさがる）○百萬返町　昔百萬返智恩寺この町に有しとかや、

（土御門通さがる）○かうだう町　そのかみ一條の革堂此町にありしを聚樂の御城をつくられし時、百萬返もかう堂もみな、今の寺町にうつされしとかや、

○福良子の町

（出水通さがる）○十四間町　中古に二條殿の御家つくられし時に、新在家より立たる町也、

この南は下立賣通なり、これより南は田畠にて、人の家居はなし、近頃二條御城常番同心の衆に屋敷を渡され、家つくり少々ありといへ共、京町の數にあらず、

又朱雀通作菴町の南の辻を西へ一町ゆきてあがる町は、

○釋迦堂北東町　（次さがる町）○しやか堂の町　（次さがる町）○さたけ町

（次さがる町）○みなみ佐竹町　此南は野也、

又釋迦堂の正面は南向也、門前さがる町を、

○釋迦堂前の町　その次さがる町を、

○びしやもん町　といふ、此南は左近の馬場にて行あたり也、

京雀卷第四　終

京雀巻第五　北より南へ横町筋

【寺之内通】東は相國寺の西、塔中にて行あたり也、室町通頭町の北の辻子を西へ入町より、

○なやの町　○ふかさほの町

○めうけん寺前町　此町北行に日蓮宗の寺妙顯寺あり、京都日蓮宗廿一ヶ寺の第一にて、開基は日蓮の弟子日像也、

○ごゃの町　○寺のうち町

○妙蓮寺町　此町北行に日蓮宗の寺妙蓮寺あり、

あくゐ通西へ　○ゐのくま町　○中の猪隈町　○新猪隈東の町

○ほそこ町　此町小野細川の新賣の住そめしとかや西の方は千本通にて行當、釋迦堂の東の坪也、

○烏丸通北の行當、柳辻子を西へ入町に、柳の辻子、風呂の辻子とて、横町只二町あり、その西の方は御所の内にて行あたり也、○安居院通の東に、北小路町たゐま町とて只二町あり、その西の町はみのへ新町とて、右三町入組てあり、又其南町安居院通を東へ入町を、曼陀羅辻子と云、その西の町はいまどの町といふ、右二町にて、その西は聖天の社行當り也、

【上立賣通】東はからす丸通にて行當也、

烏丸西へ入町　○ひしの町　○もと立うりの町　○西たち賣の町

○御三間町　小川通西へ入町　○ごゃの町　油の小路西へ　○埋忠の町

○たかにし町　あがる通西へ　○觀世の辻子　○聖天岩神門前町

○ゑびす町　○とうたい町　○おほら町

○釋迦堂東寺町

【五辻通】

からす丸西へ　○聖ご院殿町　むろ町通西へ　○鍋町の辻子　○御靈の辻子

○近江殿辻子　○本阿彌辻子　○やまとのづし

○石やの辻子

あぐゐ通西へ　○五辻町　此町の後北のかたに、かんやの辻子とて、西東只一町の辻子あり、その町の東はあぐ院通、西は智恵光院通にて行當也、

○一色町　○西五辻町　○西五辻子町

千本通西へ　○ふろや町　○伊丹町

○柳町　此西は北野天神東の鳥居七間茶屋の前に出

る也、須磨の町の末とひとつに出合なり、

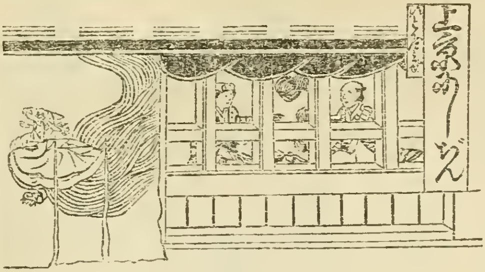
○須磨町通　此筋は東は小川通にて行あたりなり、

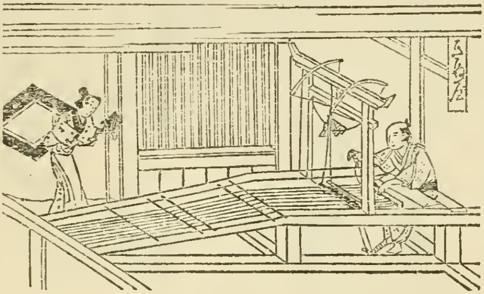
小川通西へ入町より、

小川通西へ
○あすか井町　○すまの町　○いまとの町

あぐゐ通西へ
○東北小路　○西北小路　○中の町

○はんせの町　此町北行の般舟院とて寺あり、禁中方の勅願所にて、後光明院御中陰のあひだも、此寺





にて御とぶらひありけり、町の名も般舟院の町といはんとて、はんせの町といひならひけり、

○西はんせの町

千本通西へ
○おこびと町　○西おこびと町

○紅梅殿　是は北野の天神の末社也、北行に天王寺とて寺有、

○西方寺の町　此町南行に信西とて尼寺あり、寺號を西方寺といふ、この町は北南両行ともに、皆まちやにて焼豆腐、炙餅、酒肴いろ〳〵店屋物あり、殊更に粟の餅は北野の名物也、此町の西は天神の鳥居の前にて、五辻通の町末とひとつに出合也、西おこ人町の北にあがる前只一町あり、地ごくの辻子といふ、此町の北は伊丹町行あたり、南は西御小人町にて行あたり也、

【今出川通】　むかしは今の小路と名づけしとにや、この家の今出川殿住給ひし故に、今出川通といふといへり、此筋の東は小原□□□、表に出れば北東南のあひだ隈なく□□小原、くらま、比ゑい山にゆく、みたらし、田中、白川、松が崎にも行なり、山中越とて白川の里の東にこゆれば、山中の里あり、これ

より東坂本に出る也、寺町通を西へ入町より、
（寺町通西へ入町）○大原口の町　此町只一町に町人の家あり、此町の西の町より烏丸町までは、北南兩行（がは）共に公家殿の家也、南行（がは）に八條の宮、近衛殿の御屋敷あり、北行には武家の與力、同心衆の家もあり、
（烏丸通西へ入町）○やすいの町　（むろ町西へ）○ほり出しの町
（新町西へ）○辨才天町　此町の西は行あたりて、又小川通を西へ入町あり、
（小川通西へ）○いま町　此町の西は、堀川通の北なるむら雲の町にて行あたり也、又大宮通糸や町を西へ入町、
（大宮通西へ）○よこ大宮町　○ひしや町　○かめや町
○西かめや町　此町の西にて行當也、

【本誓願寺通】

（新町通西へ入町）○狩野殿辻子
（小川通西へ）○もとせいぐわんじ町　誓願寺は大和國にして、天智天皇の御時に建立せし所、今此京に引うつされしは、桓武天皇の御宇にや、そのころは此町のわたりに地を定められしを、太閤秀吉公の時に、三條通にうつし給へりといへり、惣じて京の町中にありける寺ども、大かた東の川端に引うつして、寺町通に諸寺のならび立たるは、これ太閤秀吉公のし給ひし事也、されば京町の名に寺號のあるは、そのかみその寺のありし町なる故といへり、
（ほり川通西へ）○鹽や町　○今こうぢ　○高西町
○本妙顯寺町　○中の町　○今出川町
○四丁め　（千本通西へ）○松や町
○大もんじ町　此西は釋迦堂筋にて行當り也、

【武者小路通】

（烏丸西へ入町）○梅や町
（むろ町通西へ）○むしやのこうぢ　（新町通西へ）○西武者小路
右二町は魚のたな八百屋の商人也、この町の西は行あたり、大宮通を西へ入町より、
（大宮通石やくし町西へ）○ますや町　○さゝや一町め　○同二町め
○同三町め　○同四町め
○同五丁め　此町の西は北野の經王堂前の町也、經

王堂は小野道風の建立として自筆の額あり、其堂の前に大なる松の木あり、垣ゆひ廻したり、梢高く枝たれて、誠に物ふりてみゆ、名を辨慶松といふ、
經王堂の西のかたに觀音堂あり、山本左大臣の建立として、等身の千手觀音也、そのかみ菅丞相いとけなくおはしましける時、手習し給ひし所也、その院の天井の板は、猶其時の板なりと云つたへし、堂も本尊も東にむかひて立たりければ、世に東向の觀音といふ、
經堂の南のかたを西へ三町ばかり行て、大將軍の社あり、是より又一町ばかり紙屋川有、世にはかい川と云、いにしへこの川水にて紙を漉けるとにや、

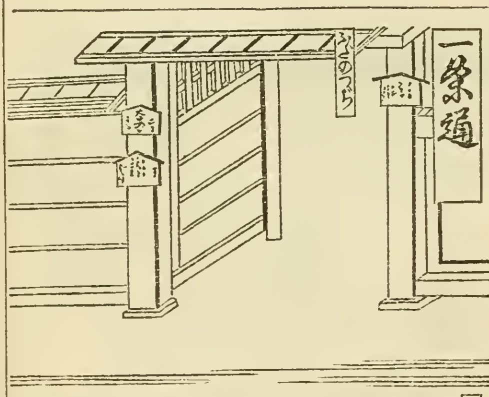
【一條通】武者小路と一條通とのあひだ、烏丸西へ入町只一町あり、柳の辻子といふ、西は行當也、

からす丸通西へ
○西一條の町　むろ町西へ入
○もと廬菴町
かうだうの町　中の革堂の觀音この町におはせしとにや、

油のこうぢ西へ
○西口町
○高や町　此町の西は堀川通一條の戻橋也、昔八坂雲居寺の淨藏貴所の父は、三善淸行と名づけしが、淨藏大峯に行し頃、父すでにむなしくなり給へり、折ふし淨藏都にかへりしに、此堀川の橋にて葬禮に行合、棺に向つていのりしかば、淸行よみがへり、打つれて家に戻りける故に、一條堀川の戻橋といふ、和泉式部が歌に、

いづくにも歸るさまのみ渡ればや
　戻橋とは人の云らん

堀川西へ
○ふくなが町



○晴明町　昔安倍晴明此町に住けるとかや、花山院は弘徽殿の女御におくれ給ひ、七月廿三日の夜御發心ありて、禁中を忍せ給ひ、晴明が家の前を通給ひしを、晴明星の座のかはりしを見て、是只事にあらずと驚き、急ぎ參內いたしければ、帝は早や行がたもなくうせさせ給ひしとかや、此町の事成べし、

あくゐ通西へ
○かゞ見石の町　そのかみ此町に鏡石とて絶景の名石あり、太閤秀吉公より取て禁中に奉らる、此石によりて町の名とすとかや、

○新在家町　○かうだう町

○伊勢度町　此町の西は行あたり、それより南へ、

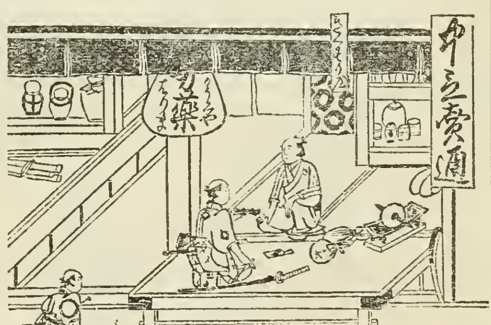
○かまか辻子　とて竪町五町ばかりあり、

【正親町通】むかし大內裏の時、おほぎ町は西のとう院の東、一町のうち、此筋にありし故に名とす、今は中立賣通といふ、烏丸通西へ入町より町屋あり、烏丸の東は禁中西の惣門也、

からす丸西へ
○中立うり　むろ町通西へ ○同二町め　○同三町め

○同四町め　油のこうぢ西へ ○橋本の町　ほり川通西へ ○はし西の町

大宮通西へ
○しんざいけ町　此町の北に袋町とて只一町有、



○丸や町　○たもん町　○ますや町

○かゞや町　○玉や町

右此西は內野にて田畠なり、

【土御門通】むかし大內裏の時、此筋の南のかた一町、烏丸の西にあたりて、土御門內裏あり、此故に町筋の名とす、今は上長者町通といふ、

からす丸通西へ
○もと淨花院町　往當淨花院この町に在しとかや、

むろ町西へ
○土御門町　昔土御門內裏此町の南にありしと云、

新町西へ○土御門西の町　小川通西へ○たはらや町　油小路西へ○たはらや西町
ほり川西へ○たはら町　○鶴や町　大宮通西へ○坪の町
○洲濱池よこ町　○洲濱いけの町　○みだい町
○新院の馬場　○あいぜんじ町
此西は内野の田畠也、

【新在家南町通】

東の洞院通東へ入町○新在家南東町
東の洞院西へ入町○新在家南西町　此町南行に典藥頭壽徳院の家有、
からす丸西へ○このゑ町　右此町の西は室町通近衛町行當也、

【鷹司通】　昔この町筋の北のかた一町、萬里小路通の東に、鷹司殿ありし故に名とす、今は中長者町通といふ、案ずるに今の鷹司殿の家、すなはち昔の屋敷に替らず、これ鷹司通にあたり、萬里小路の東にあたれり、

東の洞院通西へ入町○新在家中の町　此東の行あたりは今新院の御所うらの御門也、新在家の北町といふは、此中の一町北のかたに、東洞院通を西へ入町なり、此北町の北行は公家勸修寺殿の長築地也、西は烏丸通にて行あたり、只一町ある所也、

中の町通烏丸西へ○なへや町
むろ町西へ○かんき町　此町の北うしろ、室町通清和寺町を西へ入町、○清和寺衝抜町○長者町○西長者町とて只三町あり、其西は油の小路通鶴や町、水野美作守殿御屋敷にて行あたりなり、
中の町通がんき町の西○下長者町　新町通西へ○たかつかさ町　油の小路通西へ○ときは町
ほり川西へ○花ばた横町　○大北もん町　○東つゞら町
○西つゞら町　○山もと町　○西山もと町
○御幸町頭町　○二本松町
此町の西は田畠なり、

【近衛通】　今は出水通といふ、

○よこ三本木町　此町は、東は九條殿御屋敷の坪にて行あたり也、間の町通北の行當りを西へ入町也、
東の洞院西へ○ひがし出水町　からす丸西へ○西出水町
室町通西へ○御りやう横町　此町の西新町あがる町に御靈の町とてあり、
新町通西へ○丁子ふろの町　丁子風呂といへる風呂屋ありし故

に名とす、

西のとう院西へ
○西丁子風呂町

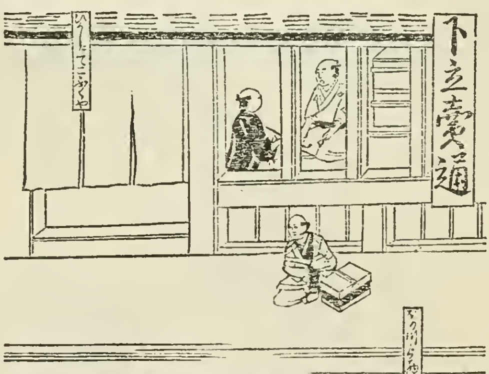
油の小路西へ
○このゑ殿よこ町　此町さがる油の小路通を近衛町
といふ、

ほり川西へ
○かめや町　○くろ門の横町　○てんびん町
○西唐秤（てんびん）町　○かねは町　○西てんびん町
○神明町　○千本よこ町

この西は寺あり、

【勘解由小路通】今は下立賣通と名づく、
古しへ太閤秀吉公の御時に、上中下の立賣はみな呉服だなにて、大名小名小袖かたびら此町にして買もとめらる、きぬまき物を裁縫て賣ければ、立賣といひけるとなり、

あいの町通西へ ○ふくろ町　東のとう院西へ ○東たちうり町　からす丸西へ ○はらや町
むろ町西へ ○ひがし立賣町　新町西へ ○東立うり　西のとう院西へ ○東立うり
油の小路西へ ○はしづめ町　ほり川通西へ ○西はしづめ町　下立うり ○橋詰二町め
○うきだ町　聚樂の城の時分、宇喜多宰相殿此町におはしけると也、



○まるや町　○田中町　○伊なば町
○長門町
○西の京　この町の西は行當りなり、北の方に向ひてゆけば、西の京なり、なを北野の天神、南の高井すぢに出る也、中むら町東の辻を北へあがる町をば、下てんびん町と名づくるなり、その西へ入町は只一町あり、ふんごう町といふ、てんびん町のよこ町なれば、かく名づけたりけるにや、知がたし、

【中御門通】　この筋は西にては魚のたな町通と云、東にてはさはら木町通と名づく、寺町通西へ入町より、さはら木町までは、南行ばかり町家あり、北行は禁中がた同心屋敷のうしろ坪なり、

寺町通西へ
○ふくしま町　むかし太閤秀吉公の御時、福島左衛門太夫、禁中御修理の奉行をうけ給はり、此町に假屋を立られしとかや、

○つちみかどの町　此町には陰陽師多く居住す、

○さはら木町　此町中頃はさはら木の材木をあきなふものおほくすみけり、

○西かうだうの町　そのかみかうどうの觀音おはしましけり、中頃は寺町通に引うつさる、

○角倉町

からす丸西へ
○ようあんの町　中頃までは此町の北行に、ようあんとかやいふ人の家ありし、今はなし、

むろ町西へ
○青物町

新町西へ
○ゑびす川町　是より西は魚のたな也、

○山崎町

油のこうぢ西へ
○うをや町

○かうどうの町　かうだうの觀音、もとは此町にもおはしけりとかや、

○みなとの町

○中將町　此西は牧野佐渡守殿御屋敷行當り也、

【春日通】　此筋の西堀川に、丸太の材木おほくある故に、世には丸太町通といふ、昔大内裏の御時に、此筋室町の西一町に、光孝天皇の御所ありけり、新町通の西一町に、神祇官の町ありしとかや、

寺町通西へ
○いしや町

○昆布や町　今は魚のたなおほくあり、

富の小路西へ
○くははら町　此町、古しへ桑原殿とておはしけりとかや、

柳のばゞ西へ
○がきや町

高くら通西へ
○くはんとうや町

東のとう院西へ
○ひかりだうの町　中頃此町にひかりだうとて寺あり、その本尊の阿彌陀光明を放ち給ひしとかや、今は寺町通にあり、

烏丸西へ
○馬や町　中ごろ此町に、東開通にかくれなき馬追の段兵衛といふもの住て、馬借せし故に名とす、此

町北行に、岡崎殿とて織田家の後室住給ひし、其御やしき今は町人の家となれり、

むろ町西へ
○かねまき町

西のとう院西へ
○かぢや町　この町北南両行ながら鍛冶やなり、

油の小路西へ
○まるた町　此町両行ながら丸太材木やなり、

ほり川西へ
○西丸太町　○はらや町

ゐのくま通西へ
○ふくろ町　此町の西は牧野佐渡守殿御やしき行當也、

【大炊通】此筋の西ほり川に、竹やおほくある故に、世に竹や町通といふ、此東の行あたり寺町に、大炊の道場とて無緣の寺あり、寺は時宗にて、一遍上人の流れを汲とかや、

寺町西へ
○大炊竹や町　御かう町西へ ○魚や町　○きくや町

富の小路西へ
○はくや町　柳のばゞ西へ ○へいの內町　高倉通西へ ○きよ水町

東の洞院西へ
○かめや町

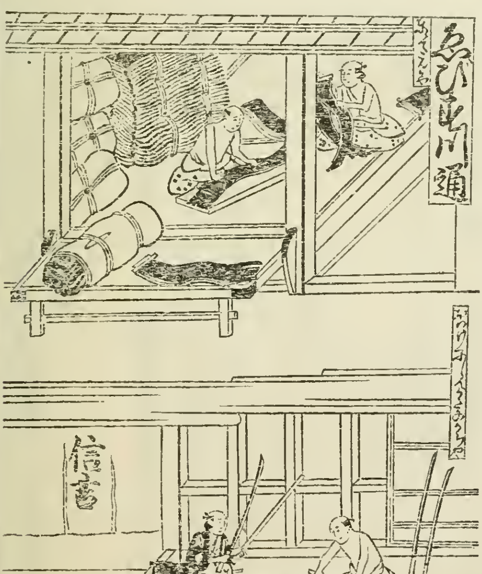
からす丸西へ
○きつゝけや町　此町北みなみ両行ともに、馬道具、切付、その外よろづの革細工師あり、

新町西へ
○さし物町　此町、から木細工、其外よろづのさし物師おほし、

西のとう院西へ
○東竹や町

油のこうぢ西へ
○西竹や町　ほり川の橋むかひは、牧野佐渡守殿下屋敷にて行當也、橋むかひをすこし南へゆけば、二條御城のからめ手の堀ばたなり、

【冷泉通】古しへ此筋ほり川の西二町に、冷泉院の

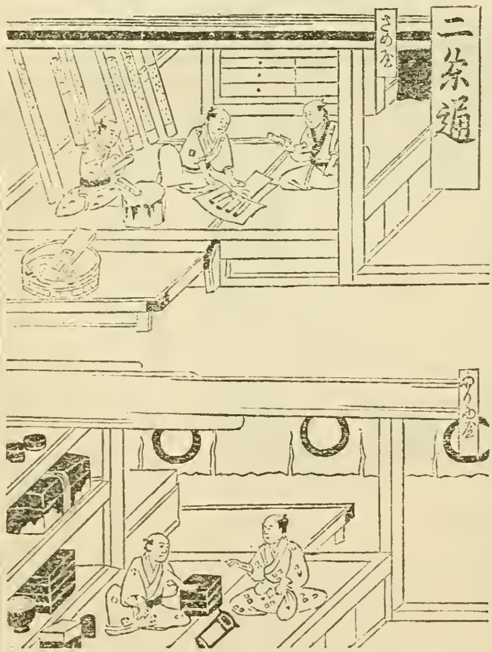


御所ありけるとかや、大炊御門の南ほり川の西にあり、嵯峨天皇の御宇に立られ、それより代々の後院たりし、もとの名は冷然院といへり、しかるを弘仁年中に焼たり、然の字にもゆると云讀ありて、此院號しかるべからずとて、然の字を改めて、冷泉院と號せらる、いま此筋其院の中にあたりたれば、冷泉通と名づく、今は夷川通と名づくとかや、

寺町通西へ ○丸や町
御こう町西へ ○こふや町
白山通西へ ○たはら町
たかくら西へ ○むかでや町
東のとう院西へ ○九けん町
からす丸西へ ○ともゑ町
むろ町西へ ○かきや町
新町西へ ○四けん町
西のとう院西へ ○ゑびす川町
油の小路西へ ○かぢや町　此町、小刀かみそり、いろ〳〵の鍛冶多し、堀川の西は二條御城の行當り也、中頃までは堀川の上に橋の有しを、朽て落ければ今は橋もなし、

【二條通】

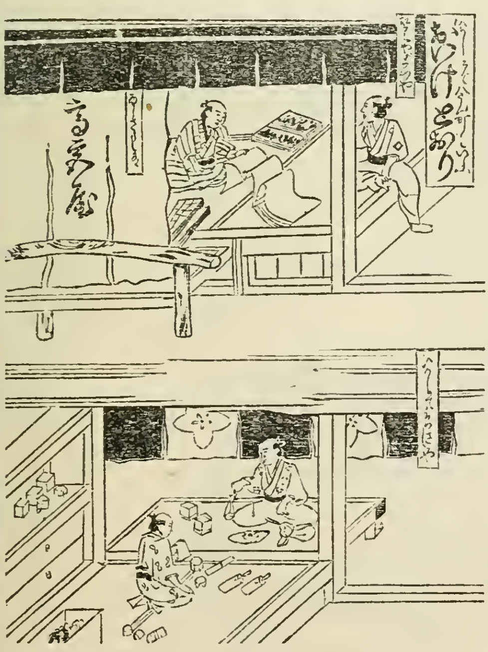
寺町西へ ○丁子や町
白山通西へ ○鶴や町　むかし此町に傾城やのありけるを、これより荒神川原、今の寺町通を一町ばかり後に追うつされたり、こゝも中ごろ追たてられて今はなし、
柳のばゞ西へ ○くはんをん町　古しへ愛宕の観音、此町におはしけり、今は東の六はら邊に引うつされてあり、
高倉西へ ○まつや町
東の洞院西へ ○二王門町　昔おたぎ寺の二王門、この町にあたりて、南むきにありける、車や町通二條あがる町を二王町といふ、二王門の前と云心にや、今は是も六はらの邊に引うつされて、愛宕寺にありといふ、



烏丸西へ
○たまや町　此町北行に秤や善四郎が家あり、又此町北南の兩行別にして、北行は玉や町、南行は大黑町といふ、
むろ町にしへ
○大おん寺の町　大恩寺もとは此町にあり、中頃より寺町通さはら木町さがる町にうつさる、
新町西へ
○正行寺町　これも中頃寺町通下御靈の北にうつさる、
西のとう院にしへ
○西大こく町
油のこうぢにしへ
○やはた町　此町の西は、堀川通二條の土橋、その西は御城のからめ手、ほりばたなり、

【押小路通】
寺町通西へ
○きねや町
こかう町西へ
○たち花町　此町古しへけいせいやの侍りしを、六條三筋町に引うつさる、花の立のきたればとて、立花町と名づけしとかや、今は古道具屋町也、
柳のばゞ西へ
○竹や町
たかくら西へ
○左京町
東の洞院西へ
○西押小路町　此町の西は烏丸通にて行當也、世にいふ、此理は鵺のかよひける道にて、ふさがれしといへり、それにはあらず、昔烏丸の西は鴨居殿、東三條院、閑院、堀河院とて、南北二町づゝの家、立續て侍りし跡なる故に、町屋になりても、ふさがりたるものなり、

【三條坊門通】　此筋を東にては八幡町通と云、御所の八幡宮ある故也、西にては御池通と云、此筋室町に御池町あり、むかし鴨居殿とて御所あり、鴨の下



居池の井ありける跡也とかや、
寺町西へ ○大ひがし町　○東八まん町
柳のばゞ西へ ○八幡町　此町南行(がは)に御所の八幡とて社あり、世にいふ、もとは三條内裏の内に、勸請せられし八幡宮也、建武の頃尊氏將軍此社に願して、新田義貞といくさし給ふ、もし此軍に打かたば、塔を立てまいらすべしと祈られしが、軍に打勝、則塔を立られしとかや、
高くら西へ ○たか宮町　江州高宮の布をあきなふ、今は絹綿までも商賣する町也、
東のとう院西へ ○中ほり町
からす丸西へ ○御池よこ町　鴨居殿の池の井の跡、今もなを有べく、その水極めて清ければ、あたりの人は汲といふ、此町に、少き溝のうへに小石ばしを渡せり、是をかさゝぎのはしと名づく、
室町西へ ○橋上町　新町にしへ ○石ばし町
○もり木町　ほり川西へ ○よこかご町
○たはら町　此町の西、大宮通行あたりにて、其西は神泉苑なり、神泉苑の事は京童部物語にあり、又此筋の西、朱雀邊に耳敏川あり、七瀬の内也、

【姉小路通】

寺町西へ ○姉がこうぢ町　○さしや町
柳のばゞ西へ ○わかさや町　此町の西は、ごんげ院どの屋敷にて行當、東の洞院通西へ入町より、
東のとう院西へ ○車や町　この町は車借の家おほし、南行(がは)に後藤庄三が家有、
からす丸西へ ○神明東町
むろ町にしへ ○神明町　此町北行(がは)に神明あり、又町内は釘鍛冶おほし、
西のとう院西へ ○まるた町　此町昔少納言信西入道の家ありしを、平治の亂に源義朝その家を焼れしといふ、
油の小路西へ ○かぢや町　此町に毘沙門堂あり、町内鍛冶やおほくあり、
ほり川西へ ○たるや町　此町は桶樽つくれるものおほし、
○さるや町　此町の西は酒井讃岐守殿御屋敷あり、

【三條通】　三條の大橋は、往昔太閤秀吉公の渡し給ふ所なり、このはし西のつめ南の方に、畜生塚とてあり、その事は太閤記にしるせり、聚樂の關白殿にめされし妾、其外女房連、罪科の事ありて殺されたるしるしの塚也といふ、

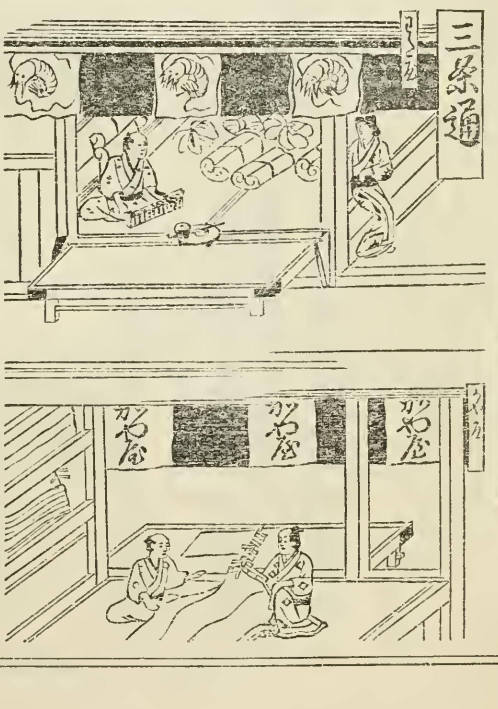
○中島町（大橋小橋のあい）　此町旅人の宿かすとにや、古しへより旅人に一夜は宿かせども、二夜とは借さざる掟なり、北行には布をさらす家あり、又柳膏藥とて名方のかうやくあり、

○柳のした町（川原町西へ）　古しへ此町のめぐり二町ばかりは、みな柳原にて侍りしとかや、

○べんけい石の町（寺町通西へ）　昔はくらま口に、武藏坊辨慶が常に腰かけ休たる大石ありし、ある年の大水に流れて此町に來れり、又後に西朱雀の水藥師の寺内に引とりたりといふ、

○中の町　　○ますや町　　○ひしや町

○埋忠の町　そのかみ埋忠と云鍛冶この町に住けりとかや、今は上立うり通安居院の東に居す、剃髪刀によし、



○みくじ町（からす丸西へ）　此町北行兩替町通の廉に、武田法印の家あり、牛黄淸心圓を出す、又此町の北行西の廉に腹帶の地藏とておはします、毎年七月廿四日には貴賤群集して參詣あり、

○衣のたな町（むろ町西へ）　此町北南兩行ともに衣屋也、六月十四日祇園會に鷹山を引まつる、

○釜座町　此町北南兩行共に鍋釜を鑄て商賣とす、

西のさう院西へ
○鹽や町

油のこうぢ西へ
○橋東町　此町にて、六月十四日の祇園會祭禮、ねり物以下をゆりそろへて東へ渡しまつる、

ほり川西へ
○はしの西町

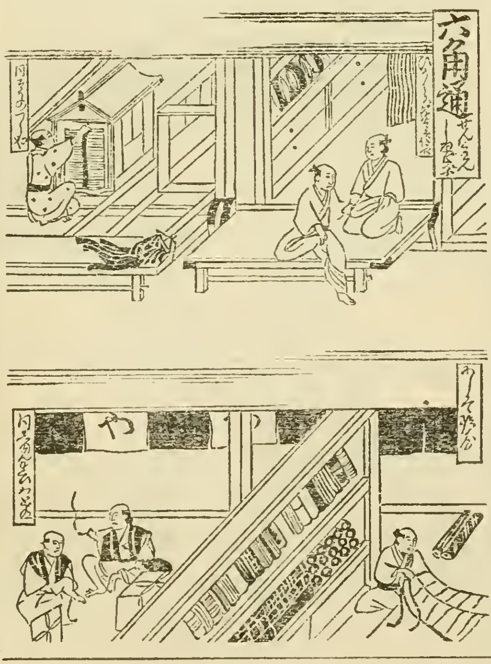
ゐのくま西へ
○みごく町　この町、祇園會十四日の祭禮に、辻に壇をつき注連をひきて、ぎをんの御こしをこゝにかきすへ、濁り酒をそなふる事あり、此西は大宮通にて、猶その西には家なし、此西朱雀通藪土手の外に、北の方には犯科人の京都を引渡すに及ばざるものを成敗する場あり、南の方には墓所あり、世に西院の墓所と云ふ、日夜に煙の立ざる時なしとかや、

【六角通】　この筋の東は、誓願寺の正面なれば、世には誓願寺通といふ、せいぐわんじの事は、京童物語にあり、天智天皇の御宇に建立あり、桓武天皇の御時、奈良の都よりこの京に引うつされたり、本尊は春日の御作として、寺中に春日の鎮守あり、社の前の紅梅は、未開紅とて名木なり、

寺町西へ
○やをや町
○大こく町　今は革細工の職人、木綿の衣類を裁縫て商買とす、
○堀上町

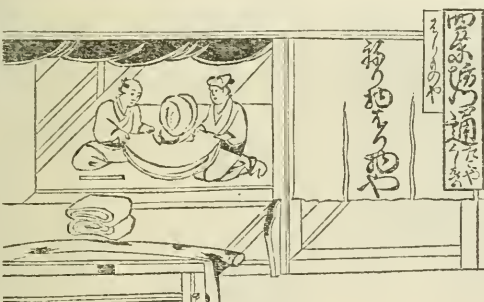
高くら西へ
○ちぎりや町

東のさう院西へ
○六角堂門前町　六角堂の事、京童は忘ていはず、都物語にしるせり、堂の後に色花の師池坊が家あり、又西隣は愛染堂也、南行に照善院あり、山伏の先達



也、その前に鐘有て、十二時をつぐる、
からす丸西へ
○ほねや町　此町には扇のほねやおほし、
○たまくら町　もとの名は手枕町といふ、又玉倉町といへり、此町に源三位頼政の社あり、又祇園會十四日の祭禮に、山をかざりまつる、其山の名を世にはあすいしやうと名づく、是俗に唱ちがへたり、昔頼政宇治合戰の時、宇治橋の板をはづし、平家のよせ手を防しに、三井寺法師筒井の淨明、軍に疲て橋げたに休居けるを、その弟子一來房といふもの、淨明がうへをはねてこして軍したり、はねこゆる時に、あしう候淨明房といひける詞をとりて、唱誤てあすいしやうといひならはしけるとかや、
新町通西へ
○西六角町
西のさう院西へ
○ひじり町　此町そのかみは高野聖に宿かしけるとかや、
油のこうぢ西へ
○ゐちご町
ほり川西へ
○岩神町　此町を南へさがる町をも岩神町と云、
ゐのくま西へ
○丸木や町　この町の西は大宮通也、その西には南行（がは）みな淨土宗の寺なり、

【四條坊門通】　寺町行あたりに蛸藥師の堂あるゆへに、世にたこやくし通といふ、
てら町西へ
○やくし前の町　はくさん通西へ ○あぶらの町　柳のばゞ西へ ○三文字町
たかくら西へ
○せいしやう寺町　東のとう院にしへ ○いしや町
からす丸西へ
○橋べんけい町　祇園會十四日の祭禮に、橋辨慶の山を飾まつる、五條の橋にて牛若丸殿、千人ぎりし





給ふ時に、辨慶が初めて行合つゝ降參したる事、義經記にみゆ、

室町西へ
○うへ柳町

新町西へ
○ふどう町

西のさう院西へ
○七けんざいけ

油の小路西へ
○たゝき町　此町南行に鉢扣(がは)の住侍る、是古しへ空也上人の跡也、極樂院と名づく、そのころ空也上人御つれ〴〵の時を慰めまいらせし鹿あり、ある時は兩日みえ來らざりければ、獵師に逢て問給ふに、その鹿は狩人の矢にかゝりて殺されたりと申す、上人歎おぼして、其角を乞求て杖につき、かの獵師に近づき、佛道を示されしかば、れうしも年頃おそろしき罪つくりしことを悔悲しみ、つゐに發心して念佛唱へけり、瓢簞を打扣き修行しけるゆへに、今も鉢扣と名づく、其節をつけて申すなる事は、空也上人のつくりて敎給ひし法語也、かの杖につき給ひし鹿の角は、今も極樂院の什物として、去ぬるころ後光明院崩御の御中陰に、此所より鉢扣數十人打ちつれて般舟院にまいり、念佛となへて諷經しける時に、かの角をさゝげて白洲に立たりけるを、まのあたり見侍り、世にたぐひもなく大なる五支の鹿角也、又常には鉢扣ども茶筌を作りて賣侍る、

ほり川西へ
○ゆやの町

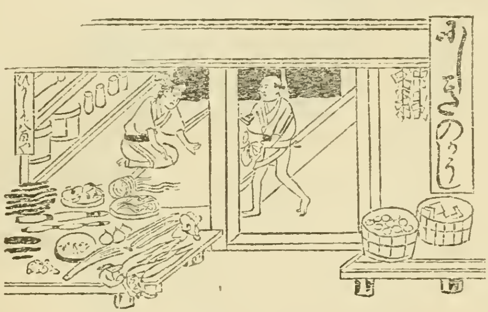
ゐのくま通西へ
○たゝみや町　此町の西は大宮通也、その西は田畠也、

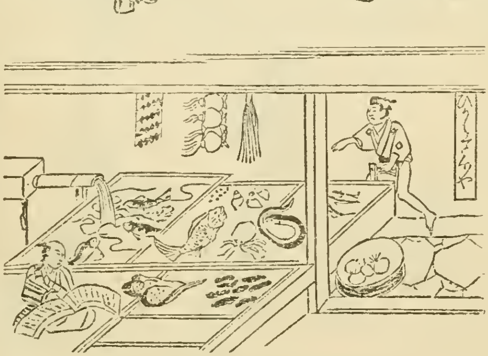
【錦小路通】

てら町西へ
○やをや町

白山通西へ
○中の町

柳のばゞ西へ
○うをや町





たかくら西へ
○西うをや町　東のとう院西へ　○あをや町

烏丸西へ
○鮎靦山の町　六月七日ぎをん會の祭禮に、此町よりかざりて祭る山の名を、世にあいはい山といふ、むかし神功皇后三韓を責したがへ、すでに歸陣あり、肥前國にして川中の石の上に立給ひ、釣針をおろし給へば、あやしき魚のかゝりてあがりけるを、皇后みそなはして、めづら物也との給ひしより、その川をめづら川といひけるを、後に五音相通じて、松浦川となづけ、其里を松浦の里といふ、かの釣あげられし魚は、鮎にて侍り、其形を山に作りて祭れり、此故に町の名とす、

むろ町西へ
○あかねや町　此町祇園會七日の祭禮に、宰府の天神飛梅の故事を山に飾り、天神山と號して祭る、

新町西へ
○西をけ町

西のとう院西へ
○こうやの町　昔空也上人此町に庵を結びておはせしとかや、

油の小路西へ
○一もんじ町　此町北行は藤堂和泉守殿御屋敷也、

ほり川西へ
○よしの町

ゐのくま西へ
○七けん町　此西は大宮通、猶其西には小寺あり、寺より西は田畠なり、

京雀卷第五終

京雀巻第六

【四條通】この筋、寺町通より東の方一町を、冠者殿前の町といふ、こゝはぎをんごの御旅所として、毎年六月七日より十四日まで御輿をとゞめられ、參詣の貴賤道をさりあへず、舞殿には神子かんなぎなみゐて、神樂を奏するに休隙なし、又この御旅所の南のかた、中川のはたに、西向に小社あり、世にいひつたふ、是は土佐房正尊が社也、そのかみ頼朝の命に依て、九郎判官義經の打手にのぼり、此事露顯して、六條堀川の御所に召よせられ、義經の前にて、打手の使にあらず、熊野まうでのため也といふ起請文かきたり、主君の御ために罸をかへりみず、おそろしき起請文かきけるは、忠ありといへども、その報ひにや、正尊つゐに義經の舘に夜うちして、いけどられ殺されたり、かの起請文をものうき事に思ひ、今は神といはゝれて、世の人の起請文の罸の身がはりに立べしといへる願ありとかや、此故に十二月大晦日の日は、京中の商人空誓文のほどこしに、此社へまうでゝ祈りまいらすといふ、

寺町通西へ
○なら物町　此町には、南北両行ともに、むしろ、薦、刈安、楊梅皮、奈良火鉢、土器やうの物をあきなふ、

白山通西へ
○たち賣の町

柳のばゞ西へ
○立賣西町　右二町は、そのかみ上京のごとく絹布を商ひける故に、世に四條立賣と云、



たかくら西へ
○みごく町

東のさう院西へ
○長刀ぼこの町　此町、六月七日祇園會祭禮に、長刀ばこをかざりまつる、此長刀は武藏坊辨慶がもちける所也、眞向に立れば災ありとて、正面にはたてず、刃をかたはらにむけて立るとかや、總じて祇園會にまつり渡す山鉾は、皆その町の行事衆六角堂へ參り、雜色奉行して、鬮をとりて一二三番をさだむる事なれども、長刀鉾ばかりは、第一番山ぼこの初なれば、今も鬮に及ばず、いつも一ばんに引まつるとかや、祇園會は貞觀年中より初まりて、大造の神事なる故に式法あり、鉾の拍子物は、五月廿五日より每年その町内にしてけいこあり、六月五日は渡り初とて、鉾をかざりてその町内を引わたす、七日には正式の神事にて、四條通を寺町より南へ、五條松原通にくだり、それより西をさして引て歸る、そのあひだの賄は、祇園殿產土の町、山も鉾も出さぬ町より、寄子として家なみに米を出し集めて、鉾の出る町へ送りつかはす、

からす丸西へ
○かんこぼこの町　六月七日此町より諫鼓鉾を引きまつる、是はもろこしの堯王は、天下をおさめて民をあはれみ給ふに、もし政道のあしきことあらば、直に聞しめすべしと仰せけれども、政道たゞしかりければ、諫のつゞみを打人もなく、鼓は苔生て、逢鳥そのうへにあそびけると也、諫鼓苔深して鳥おごろかずといへるは此事也、それをまなびてまつる、鉾のかざり物につきて、鉾の名も、町の名も、かんこぼこの町とはいふなり、

むろ町にしへ
○月鉾の町　鉾の上に三日月をつくりのせたり、たかくわすかなる鉾のありさま也、

新町西へ
○川のたな町　六月七日此町より釜ほり山をかざりまつる、これは晉の郭巨が古事をうつせり、

西のさう院西へ
○おしろいや町　同日かさぼこをまつり渡る、

油のこうぢ西へ
○逢鳥ぼこの町　同日の祭禮に、からかさのうへに庭鳥をのせて、そのしたには太鼓、鳧鐘、笛の拍子物あり、棒ふり一人からの頭をかうぶり、かるさんを着してねり渡る、

堀川の水は、四條通にて西へわかれて流る丶、川ばた北南ともに町家二町あり、樋の口町と名づく、大

宮通の西にあたりて雀が森あり、其道の左手は永井信濃守殿下屋敷あり、匣通にあたりてなぎの宮あり、是より西にゆけば、梅津、松の尾、嵯峨まで道つゞけり、又壬生通を南へさがれば、壬生の地藏堂にゆく、此地藏の靈驗の事は、太平記にしるせり、毎年三月十四日より廿四日まで大念佛あり、

【綾小路通】

寺町西へ ○たびや町　白山通西へ ○鹽や町

此二町には木綿足袋を業とす、

柳のばゞ西へ ○ざいもく町

高くら西へ ○神明町　此町北行に神明の社あり、その前に榎の木ありて、町中の大道に生茂りしが、今は枯て、末は切すてゝ、朽たる根ばかり殘りぬ、

東の洞院西へ ○竹や町　烏丸西へ ○あしだ町　むろ町西へ ○せん長寺町

新町西へ ○やたの町　古しへ矢田寺は、大和國矢田と云所にあり、滿慶上人の開基、本尊も同じ作の地藏ぼさつなり、緣起は元亨釋書にあり、中頃京にうつして此町におはしけるを、太閤の御時に本町通三條の東廉にあり、貴き靈像也、

西のとう院西へ ○芦刈山の町　六月七日の祭禮にかざりまつる、この山の古事は大和物語にあり、

油の小路西へ ○井のもと町

ほり川西へ ○めうまんじ町　日蓮宗の寺めうまん寺此町にありしを、今は寺町通二條さがる町に引うつさる、

ゐのくま通西へ ○まる山町　此西は大宮通なり、猶その西は壬生の地藏堂行あたり也、

【五條坊門通】

寺町西へ ○大こく町　白山通西へ ○ひがしの町　柳のばゞ西へ ○佛光寺門前町

たかくら西へ ○同門前町　東のとう院西へ ○うへ柳の町　烏丸西へ ○てかくし町

室町西へ ○いとや町　新町西へ ○かんたいし町

西の洞院西へ ○とくさ山の町　六月七日の祭禮に、木賊刈の山をかざりまつる、此山の古事は、木賊といへる謡につくれる所也、

油のこうぢ西へ ○きよし町　ほり川西へ ○さくしや町

ゐのくま西へ
○たゞ町　この町の西は大宮通也、それより西はみな是田畠なり、

【高辻通】　立町は高倉通にあたりて、佛光寺ある故に、今の高辻通を、世に佛光寺通といふ、

寺町西へ
○ちやひ町　○しぶかみ町

柳のばゞ西へ
○藪のした町　たかくら西へ
○藪の下新町

右二町は佛光寺南の門前、右左は竹やぶの垣也、南行ばかり町家あり、

東のとう院西へ
○すいうんのづし　からす丸西へ
○ほねや町

むろ町西へ
○おはんじよの町　此町北行に、おはんじよの神とて社あり、神事もこの町にてつとむるといふ、

新町西へ
○ほりの内町　西のとう院西へ
○ゑいあんじの町

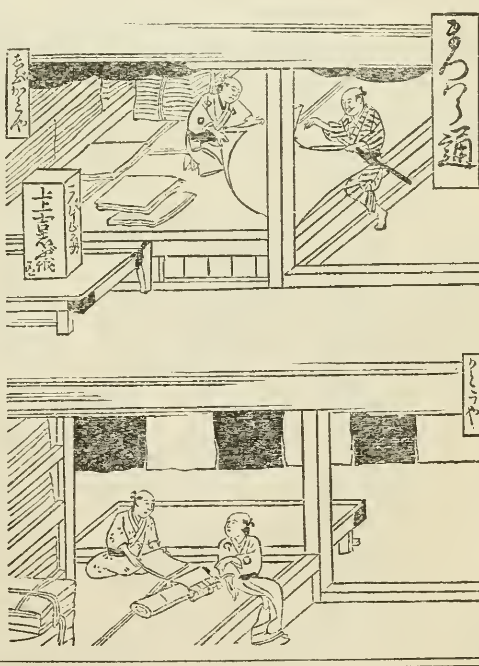
油のこうぢ西へ
○たかつじ町　堀川西へ
○たんば町

○七けん町　此西は大宮通也、猶其西は田畠也、

【五條松原通】

寺町西へ
○ふどう町　白山通西へ
○中の町　柳のばゞ西へ
○杉や町

たかくら西へ
○かみ子や町　此町、紙子澁紙をつくりて商なふ、



東のとう院西へ
○やくしの前町　此町北行は、因幡堂の南の門堀端にて、南行ばかり町屋あり、

からす丸西へ
○にゐ玉つしまの町　此町南行に、古しへ五條の三位俊成卿の家ありけり、平家沒落の時、薩摩守忠度は、津の國狐川より引返し、わがよみたる歌の集を、俊成卿に渡して、千載集に入られんことを望まれしに、さゞ波やしがの都はあれにしを、といふ歌

一首を入れられしは、此所の家也とかや、俊成卿歌道に堪能あらんことを祈て、玉津島明神を我家に勸請有て、新玉津島明神と號せらる、時世うつりて今は賤き町人の家となり、あるかなきかに名ばかり殘れり、

むろ町西へ
○なや町　此町南行に魚のなやあり、

新町にしへ
○やぶのした町　此町北へあがる町を、だいうす町といふ、其町に昔きりしたんの住て、法をすゝめしに、太閤の御時破却せらる、其時はきりしたんが住ける家の北は堀、南は竹藪也、されば北の横町は堀の内町、竪町はだいうす町、此町は藪のした町と云也、

西のとう院西へ
○天子の町　西のとう院を西へゆく南行に、五條天神の社あり、此神は昔神代の時、高皇産魂尊に一千五百の神子おはせしを、御手にのせて愛し給ふほごに、少彥名命と申す御子を、指の間より泄て、此下界へとりおとし給へり、やがて此國に住て、素戔嗚尊と御心を合せ、日本の地形をつくり給ひ、國の作法を定め、業をつくりて蒼生の病をいやし、疫神をはらひ給ふ、今の五條の天神是也、往昔國の作法を定給ひしかば、京都の所司代より崇らるゝとかや、疫神をはらひ給ひし故に、今も節分の日は、此社の前に雜色の來りて、白木餅をくばり侍り、白朮を家にふすぶれば、惡氣を清むる德ありといふ、此外の事は京童部物語に記せり、

あぶらの小路西へ
○あをや町

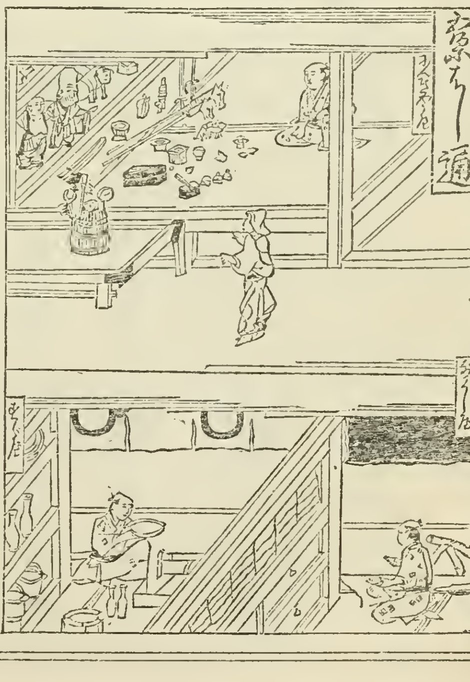
ほり川西へ
○賴光堂町　此町、いにしへ攝津守源賴光の住給へり、後に寺となして賴光堂と號せしとか、今は退轉に及べり、

ゐのくま西へ
○らいこうだうの町　此町には貞光、季武、綱、公時とて、賴光の家に四天王といはれしものすみけりとかや、此町の西は大宮通也、猶その西は田畠也、

【樋口通】今は萬壽寺通といふ、寺町通は五條松原通と五條橋と二町ひとつにして、今此樋口通は、白山通の下より西へ町筋あり、

白山通西へ
○かた田町　此町、そのかみ江州かた田の網引ども、鯉鮒やうの魚をもち來り、市をたてゝ賣けりといふ、今は此町をうをや町と名づくる也、

柳のばゞ西へ
○いをや町
○萬じやうじ町　昔萬壽寺は、禪宗五山のひとつ也、此町にありしを、今は東福寺の北の門内に引移されたり、俗にまんじやう寺といへり、京城山萬壽寺は、聖一國師の弟子寶覺禪師の開基也といへり、
東のとう院西へ
○大ほり町　　からす丸西へ
○まるた町
むろ町西へ
○六けん町　此町を世には長刀をれの町といふ、祇園會産土の町は、山ほこをかざり渡す也、山ほこのなき町は、思ひ〳〵に山ほこの出る町へ寄子につく也、此六間町は四條通長刀鉾の寄子につくべきを、町割にはづれたりければ、長刀をれの町と名づけしとかや、
新町通西へ
○うき世町　　西の洞院西へ
○月見町
わふのこうぢ西へ
○いづみ町　この西、ほり川通本國寺の行あたり也、
【五條橋通】　もとは六條の坊門通といふ、古しへは松原通を東へ道ありけるとにや、今この大橋は、東の川端に人形あやつりの芝居をかまへ、細き假橋をかけて侍りしに、太閤秀吉公の時、伏見より禁中



へ參内し給ふ道筋よしとて、此大橋をかけられ、人形あやつりの芝居をば、今の四條川原へうつされたりとかや、
大橋の西のつめに、南のかた八幡宮あり、社の右のかたにほそ道あり、伏見に通ふ高瀬舟の通る川ばた也、そこを南へさがれば、六條の東寺內、六條通樋の口うへの町、梅が小路に入なり、その入口より南は、川ばたの藪土手也、

寺町通西へ
○みゑいだう前の町　此町南行に御影堂あり、此寺は一遍上人の流れを汲て、時宗念佛の教をつたふ、寺中に念佛の堂ひとつあり、其めぐりは軒をならべて立つゞき、尼ども扇を折りて業とす、末代になりて、今はわかき女房共あまたあり、髮うつくしうゆひけさうして扇を折りける、さしもかくれなき御影堂扇也、

白山通にしへ
○鹽がまの町　古しへ源の左大臣融公は、六條河原院とて、八町四方に家づくりしてすみ給へり、つき山泉水その頃世にたぐひなかりしとかや、源順この河原院の賦をつくられし、本朝文粹にのせたり、又みちのくの千賀の鹽竈をうつし、津の國難波のみつの濱より、日ごとに鹽を汲せ、こゝにて鹽を燒せて、御心を慰め給ひしと也、融公なくなり給ひて、河原院もあれゆきしかば、紀貫之が歌に、

君まさで煙絕にし鹽がまの
　浦さびしくもみえわたるかな

とよみけると也、

柳のばゞにしへ
○はしや町　萬里小路六條坊門の南二町に、六條院ありけり、その西高倉通六條坊門の南二町に、六條の內裏ありけりといふ、

高くら西へ
○扇や町　東のとう院西へ ○松や町　からす丸西へ ○たいこ町

むろ町西へ
○くさりや町　新町にしへ ○西くさりや町　西のとう院西へ ○わらや町

油のこうぢにしへ
○わらや町　この町の西は、さめが井通行あたり也、

【楊梅通】(やうばい)

たかくら西へ
○やまもゝのづし　此西の行あたり、室町通西へゆく町を、上の町と名づく、その西油の小路を西へ入町より、さめが井通までのあひだに、六條堀川の御所とて、九郎判官義經すみ給へり、堀河夜うちは此所にて侍りとかや、又此筋の南につきぬけあり、

たかくら通西へ
○うをのたな辻子(づし)　東のとう院西へ ○かきや町

室町西へ
○中の町　この西は行あたり也、

【六條通】

たかくら西へ
○梅がこうぢ　東のとう院西へ ○東魚のたな　むろ町西へ ○東魚のたな

新町にしへ
○ねずみが小路

西のさう院西へ ○うをのたな横町　此西はさめがゐ通行あたり也、

【左女牛(さめうし)通】

○八間町　此町は白山通の南にあたれり、東本願寺新屋敷北の築地の町也、

高くら西へ ○花や町

東のさう院西へ ○上のじゆずや町　此西はからす丸にて行あたり、東本願寺の前なり、此筋新町通西へ入町より西へ町屋あり、西本願寺の寺内也、

新町にしへ ○松や町

西のさう院西へ ○花や町

油の小路西へ ○花や町　此西はさめが井通の南にて、西本願寺北やしきの行あたり、堀川の水此前に流れゆく也、

【七條坊門通】　東本願寺新やしき西のかたなる大門筋也、高倉通より西にあたれり、

○廿人講の町

東のさう院西へ ○中のじゆずや町　此町の西は、からす丸通東本願寺御ゑいだうのまへ也、新町通を西へ又此筋の町家あり、

○ゑびすの水町

西のさう院西へ ○御ゑいどう前の町　是は西本願寺の御ゑいだうの前なり、さめがゐ通の末にて川ばたなり、

【北小路通】

東のさう院西へ ○下のすゞや町　此西は東本願寺南の築地のもとにて、御墓へゆく道なり、又北小路通新町を西へゆく所より町屋あり、

新町にしへ ○井づゝ町

油の小路西へ ○たいこのまへ町　是は西本願寺の寺内なり、此町の西の辻は、さめが井通の末にて、御本寺の南のかた、太鼓の番やの下に出るなり、そのもとに堀川の流れに渡せし橋あり、その南のかたは興正寺御門跡也、太鼓の番やと興正寺の間に、橋を渡りて道あり、御本寺對面所の門前なり、それより西へゆけば、大宮通に出る也、

【七條通】　七條川原の東に、大佛の正面筋にあたれば、世に大佛通ともいふ、寺町通の末にあたる筋を西へ入町、

○材木町　樵木(こりき)材木を商賣とする也、町中に入川あ

り、伏見より高瀨のふないり也、

東の洞院通の東のかた、七條通の南に、金光寺とて時宗の寺あり、世に七條の道場と名づく、一遍上人の開基也、一遍上人法名は知眞房、その俗姓は伊豫國の住人河野七郎通廣が二男なり、家とみさかへてえようをきはめしに、二人の妾をもちたり、ある時かの二人の妾、碁盤を枕として一所に晝寢したりければ、たちまちに二人の女房の髮結(もとゞり)、小蛇となりつゝ噬合けるを見て、刀をぬきて中より切わけ、それより發心して比叡山にこもり、十八歳にて西山の善惠上人のもとにいたり、淨土宗を學し、十一年を經て、建治年中に熊野に參詣し、直に權現を拜み奉り、神勅によりて諸國を修行しけり、かの二人の妾も同しく出家して、一遍上人にともなひ侍り、時宗に尼を妻とするは此故にや、藤澤の道場は、これ時宗の本寺なりといふ、

東のさう院西へ ○まをの町　からす丸西へ ○ひがし寺內　○西の町
新町にしへ ○ゑびすの町　西のさう院西へ ○大こく寺　油の小路西へ ○仕丁町
ほり川にしへ ○やをや町　ゐのくま西へ ○大工町

此西は大宮通なり、猶その西くしげ通の末にあたりて、大通寺あり、世に尼寺と名づく、これは古しへ平忠盛の內室、池大納言賴盛の母、池の禪尼のすまれし所といへり、案ずるに、そのかみ池殿は梅が小路の南、室町の西一町にありといへり、しからば此說正しからず、又ある說には、坊門內府宣親公の御娘は、鎌倉の右大臣實朝卿の北の政所にておはせしが、實朝卿は鶴が岡社參の夜、惡禪師公曉に殺され給ひし後に、御臺は御さがりおろし給ひて、都にのぼり此所に住給へりとかや、此故に尼寺と號すといへり、尼寺の西、朱雀の末に、朱雀權現の社あり、その北にあたりて、島原傾城町一構あり、その事は假名(かな)双紙おほく、口々に沙汰しあへり、

【鹽小路通】此筋の東には町家なし、田畠のみあり、堀川通を西へ入町、

○かぢや町　○木津や町　○辻子(づし)の町

此西は大宮通行あたりなり、

【八條坊門通】此筋も東は田畠にて、町家なし、ほり川通のするを西へゆく町、

○金替町（ほり川西へ）　○みてつの前町

この西は大宮通にて、猶その西は町家なし、此西の大宮より西のかた三町四方は、いにしへ平相國淸盛公の家也、西八條の御所と號せしとかや、鹽小路通朱雀のわたりに、水藥師とて堂あり、堂の前に淸水のわき出る事川をなせり、古老の傳に、そのかみ淸盛入道熱病をうけて、くるしみに堪かね、水をまかせて侵り給へば、其水忽ちに湯に成けりと、平家物語に書たり、此水藥師は靈佛にて、淸水も名水也ければ、この水を汲せてひたり給はりしに、御心地少し涼しくおぼし給へりとかや、

【梅が小路通】　此筋も只田畠のみにして町家なし、猪隈通の西一町に、稻荷の御旅所あり、

【八條通】　朱雀坊城通のわたり、八條にすこし家あれども、在鄕のごとく農民の棲なり、

【針小路通】　堀川通の末に當りて、西八條とて家少しあれ共、こゝも農民の棲にて、家居もひたすら在鄕の如く、西の方大宮通東寺の北の門前にゆく、其前にも農民の家あり、都方の家居には似もにず、

【九條坊門通】　今は信濃の小路といへる是なり、堀川の西に民家ありと雖も、農人の棲にて、藪やの有樣、在鄕の村里の如く、人の有樣もいやしげ也、

【唐橋通】　古しへは多那井小路といひしとにや、此筋も今は東は田畠にて、民家もなし、西は大宮通東寺にて行あたり也、東寺の西に農民の家すこしあり、唐橋と名づくといへども、家居在鄕なり、

【九條通】　大宮通より西のかた、東寺の南の門北行に民の家はあれども、或は耕作人或は大坂山崎往還の茶や店屋のみにて、町の名もなし、

東寺の來歷は京童部物語にも記せり、又東寺の西の門をば羅生門と名づく、古しへ大内裏の時に、もろこし周の國門をかたどれり、むかしこの門には、鬼神のすみけるとかや、都長香といへる人、ある時氣霽風梳㆓新柳髮㆒といふ句をつくりて、此後句なかりければ、案じわづらひて、この羅生門の前を打通るとて、吟詠せられしかば、門の内より氷消波洗㆓舊苔鬚㆒とつけたりとにや、渡邊の源五綱といふものゝふ、この門にして鬼を退治しけりといふ、

京雀卷第六終

京雀巻第七　寺町より東の竪町

寺町通革堂観音の北のかたより東へ入町をば、荒神町と名づけて只一町あり、その町の南行に三寶荒神の堂あり、其町の東は川原表に出る、吉田、くろ谷、みな此川原口よりゆく、川原に出れば、東山を初めて北南の山々殘りなく見え渡る、其名所舊跡は京童部物語に記せり、荒神町の東の辻より、南をさして町あり、川原町通といふ、二條より下にては角倉通といふ、此筋に角倉が家ある故なり、

【角倉通】くわうじん町下る　世には川原町通といふ、

○たか宮町　○いけす町

右二町は、中頃まではけいせい町にて侍りしを、寛永年中に追立られたり、

○出水町　○ますや町　○いせや町

○大もん町　○さし物町

○清水町　此町西行に、石川主殿御やしき有、東行に高田の寺有、

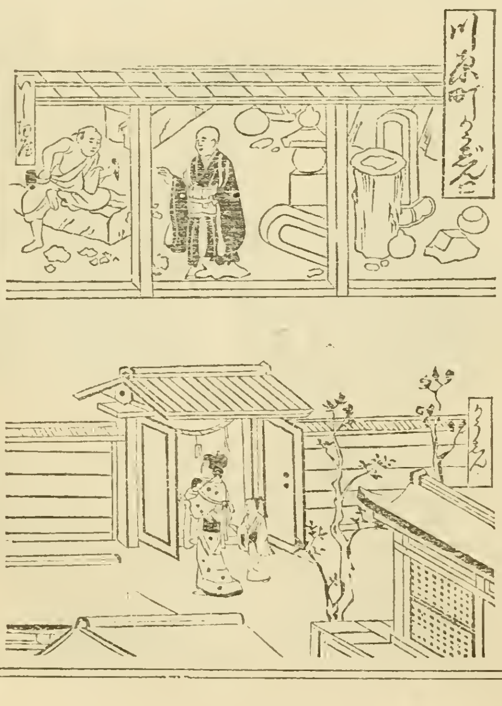
二條通ながつじさがる ○ふないり一町　此町東行に角倉がやしきあり、此町の北のよこ町を東へ一町あり、樋口町と名づく、其町の東は二條川原なり、東山南禪寺永觀堂、みな此川原より道筋あり、

かはら町通 ○舟入二町め　此町東行に毛利殿御やしきあり、

○ふくろ町　東行は加州犬千代殿御やしきあり、

三條あがる ○ゑびす町　三條さがる ○山崎町

○しちや町　此町東行に松平土佐守殿御屋敷あり、



○ならや町　此よこ町を豊前島の町といふ、
四條あがる○こめや町
四條さがる○ふろや町　此町北の横は四條の橋づめの町也、南のよこは角倉町といふ、これより南は行あたり也、すこし東の方にゆきて、四條さがる町を、風呂や町といふ、只一町あり、
川原町通生洲町を半町東へゆきて、
【土手町筋】とてあり、そのかしら町は、
○ふくろ町　○たはらや町　○小松町
○まるや町
○そみん町　此町南は高田の寺にて行當り也、
土手町筋たはらや町を東へ半町ゆきて、
【新土手町通】あり、そのかしら町は、
○新町　○大こく町
○つちや町　此町の南は、二條川原口の北行にある浄土宗の寺善導寺の後にて行あたり也、
【樵木町通】二條川原口北行に善導寺あり、此寺の門前より南へさがる町、西行には生洲の魚や町あり、東行には賀茂川の流れを堰わけて、南をさして



川筋を堀通せり、是すみのくらが堀ける所、伏見の高瀬舟をのぼす川筋也、善導寺の門前さがる町、
○わかさ町　今いふがごとく、此町西行は生洲の魚のたな二町ばかりあり、東行は鯉や、鮠やとて、名もかくれなきはたごやあり、その二階座敷より東のかたをみれば、北東南の山々隈なくみえわたり、まことに絶景の所とて、都の人こゝもとに来り遊ぶに、宿の隙なし、

○わかさ町
○樵木町　中頃この町にもけいせいやの侍りしを、荒神町の傾城と一同に追立られしとにや、今は此町筋の上下は、樵木、柴、炭、材木をあきなふ、
三條さがる○木や町　○同二町め　○同三町め
○同四町め　北南は四條通中島に出る、中島より東の方を見れば、四條川原いろ〳〵見物の芝居あり、その末は祇園町、北南兩行ながら、茶やはたごやにて、座敷には客の絶る時なし、祇園殿西の門只一目にみゆ、

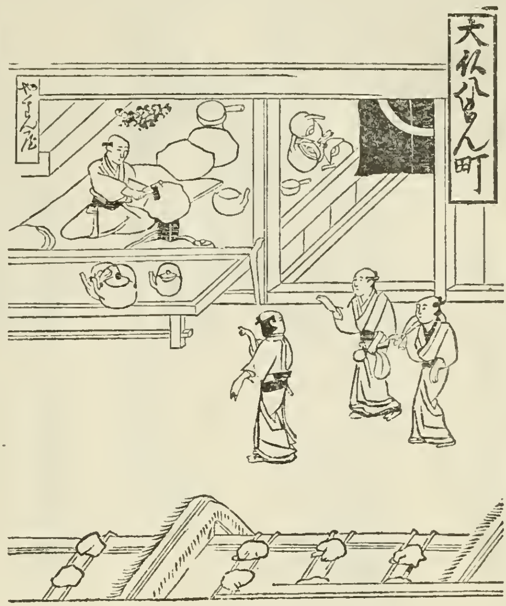
【五條の通東へ一町ゆきてさがる町】
○朱雀町　○上人町　○橋町
この南は行あたり也、

【五條ばし通東へ二筋め】
五條橋通さがる○中の町一町め　○大坂町　○さいら町
○正めん町　此南の横行あたりを、亦正面町といふ、大佛正面の町といふ事也、

【五條ばし通東へ三筋め】　是は伏見開道なり、
○本町一町め　○同二町め　○同三町め
○同四町め　○新正面町　○本町五町め
○六町め　これより南へ　○十一町め
猶その南は東ふく寺、稲荷の前より藤のもりまで、左に見て伏見へゆく也、

【五條ばし通東へ四筋め】　此町筋北のかた、五條松原通にあたつて、晴明が塚あり、その東の竪町筋、
○大こく町　○上石がき町
五條ばし通さがる○ふくろ町
○ゑびす町　晴明が塚の東のよこ町を、北みかど町といふ、その東の町をば、坂と名づく、祇園の犬神人の住町也、弓、箭、弦、ゆがけ、沓などつくりて業にいたす、坂の北行に愛宕の觀音あり、その東は六道といふ所也、毎年七月九日十日には、京中の貴賤聖靈むかへのため參詣おびたゞし、南の方には六波羅の觀音おはします、その道の末は三年坂、經書堂に出る清水坂なり、

【五條ばし通五筋め】　世には建仁寺通といふ、この筋の北は三條通、東の橋づめより南へ四町は、祇園縄手の堤なり、右は賀茂川の水流れ、左は知恩院にゆく道あり、四條通さがる所より町屋あり、



四條通さがる
○けんにんじ町　此町東行に建仁寺北の門あり、建仁寺の事は都物語にしるせり、
○けんにんじ二町め　此町西行に夷の社あり、その南に墓所あり、多少の人死して此墓所に送りすてられ、夜半の煙と立のぼる事、晝夜をわかず、見きくにつけてあはれを催す、東行は建仁寺也、是五山のひとつ也、

建仁寺さがる
○山崎町　○石かき町
○上とうりやう町　此町の南は、大佛二王門の前に出る也、二王門の前なる道の右に耳塚あり、猶その南にゆけば、三十三間堂の門前にいたる、又その内に入ば、やうげん院、智積院、豊國にゆく也、

【三條通東の橋詰より東へ】
○大橋づめの町　○大橋二町め　○大橋三町め
○松原町　○さいかち町　○豊後町
○大井手町　此町東は白川ばし也、その橋より東は、是東開道にて大津にゆくなり、白川橋の東のつめを南へさがれば、知恩院の門前に出る、猶南に行ば、祇園の西門の下に出る也、
○五條橋通　橋の東へ入町を橋づめ町といふ、
はしの東づめ ○はしづめ町　東へ二町め ○橋もと二町め
建仁寺通東へ入町 ○佛師町　此町北行に常樂寺とて、日蓮宗不受不施の寺あり、その東には若宮八幡の社あり、
○西おち町
○遊行町　こゝに遊行の寺あり、これより東は鳥部野にゆく道也、鳥部山鳥部野はあだし世のためし

にいへり、西本願寺開山の墳墓あり、又御本寺より一宇の阿彌陀堂を建立し給ふ、その奇麗嚴淨につくりみがゝれし粧ひ、さながら極樂世界の七寶の宮殿とは是成べしとおもほゆ、

【五條通南へ二筋め建仁寺通ひがし入町】

○長刀町　此後北の方に、櫻町とて只一町あり、長刀町といふことは、町竝反張ゆがみたる故なり、南に冶鑵町とて又只一町有、若宮八幡の前にて、三筋の町通の末一所に行合て、其東に忠信嗣信が石塔北行にあり、

○新町（長刀町東の町）　是は大佛の北也、

○石塔町　此東の末は、豐國の北にあたる滑谷越に出て、山科追分より大津に出る也、大佛卅三間の南東には、泉涌寺新熊野阿彌陀が峯あり、其外名所舊跡は、大かた京童部物語にしるしぬれば、今はいふに及ばす、

凡京城、東西南北町々の數、大概記侍り、猶古しへ大内裏の時には、杳に替りて似るべくもなしといへども、時世今さかゆく折から、人の家居も月に日に隨て廣く立つゞき、いく千萬とも數知がたし、其間に古跡名所の絶たるもおほし、世の人となへ失なふて、後にはしらずなりなん事も本意なし、されど又京童部物語なんどいへる文つくり出侍れば、其名の殘りしこともすくなからず、又此京雀七冊もおなじ類ながら、かれに泄ぬる事ひとつふたつ記とゞめて、田舍の案内せさする少の補ともならんかしといふ、

京雀卷第七終

寛文五年正月日
山田市郎兵衛板

難波鑑序

難波がた、短き蘆のふしのまも、うき身のよるべ定めんと、船路の艫のかぢ枕、夢の浮橋のあやうきを、渡りくらべて住の江の、岸による波よるさへや、ね覺驚く松の戸に、軒もる月を友となし、垂こめて折節のうつり行をしらぬも猶哀深く、咲くやこの花と榮し春も、芦の枯葉に秋をしり、田簑の島の雪の眺に、袖打拂ふ歳の暮の煤帚まで、心をめぐらし、神社の祭禮、佛閣の御法などに事よせ、其志の至る處は、鴨長明が四季物語に準へ、かけまくも辱も、おほやけごとは年中行事を、此彼とり交へ、まだ文もみぬ天の川、遠き渡り雲井の御有樣は、中々眼の餘所なれば、諸書の餘力を借て今茲に記し、行末の鑑迄は無共、其世にはかくこそあれなど、云む便共ならんかしと、すぢはかもなき泉良の、藻屑をかき集めむと、硯の海をならし、摸陵の手の拙きをも恥ず、自ら難波鑑と名づけぬ、是然しながら直ちに捨べきにあらねば、梓に鏤め、文字の誤は剞劂氏に譲り、後見む人たゞし給へと云爾、

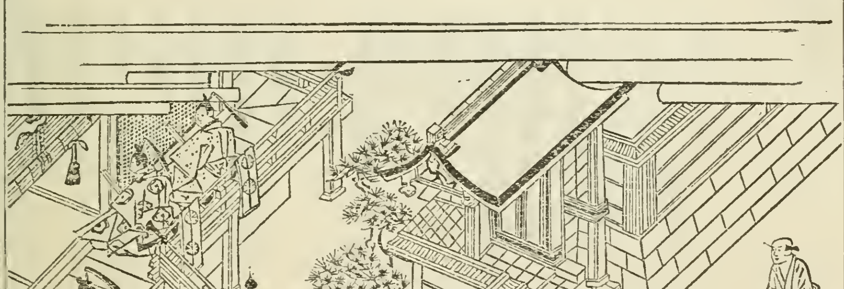
延寶八庚申年孟春上旬　一無軒　道冶輯

難波鑑目錄

難波鑑第一

○氷様(ひのためし)　正月朔日

難波の帝の御時より、はじめてたてまつる也、仁徳天皇六十二年五月に、額田太中彦皇子、闘鶏(くけ)といふ所に侍べりしに、出行て山にのぼり、野中を見やり給ひしかば、庵をつくりたる様なる所あり、人をつかはし見せ給ふに、窟なりと申、其時彼の山のあたりに侍べる人をめしてとはせ給ふに、氷室なりと申、皇子の云、其氷をばいか様にしておさめたるにか、答て云、土を一丈餘ほりて、草を其上にふきて、茅萱などをあつく取しきて、凍を置たるに、氷ていかなる大旱にもとけず、是をとりて熱月に用るとなむ、其時皇子この氷を仁徳帝へ奉らせ給ひければ、叡感ありしと也、是則氷を奉りしはじめ也、其後季冬ごとに納て、國々に氷室を置れしと也、今朝家にいたりて、氷様(ひのためし)と申是也、則氷の御所とて、大法秘法おこなはるゝとぞ、舊冬納まる氷のあつさ薄さにて、豊年凶年を奏聞せる事と也、様(ためし)はこほりの寸法分際あるゆへならし、是を



凍らす地を、氷池ともいへり、近頃は石かはらのわれを奉ること也、延喜式にも氷池風神の祭と載たるも、此ことなりとぞ、

年中行事歌合
今日ぞしるとしはきのふにくるすの丶
氷池の水の深きめぐみを　入道大納言

附若水

去年御生氣のかたの井をてんじ、ふたをして、其内くまず、立春の日むすびて、主水司内裏にたてまつれば、朝餉にてきこしめし給ふとなり、年中の邪氣を除くといふ本文あり、今民家に、元日のものとばかりこ丶ろうるはあやまれり、春のはじめにくめば、若水とは申にや、

○正月と云事

先としの初月を正月といふは、秦の始皇寅の月に誕生あり、されば、降誕の月なるによりて、專政をおこなはる丶ゆへに、政月といひしを、始皇の諱政なるゆへに、後改て旁を省て、偏ばかりを用い、是ひとへに天下を正しくなすべきなりとて、正月とせり、今の正月は震旦の法にて、とらの月をもちゆ、夏の世の例なり、殷の代の月建は丑の月、今の十二月にあたる、周の代の月建は子の月、今の十一月也、冬至を唐の正月といふは、このゆへなるべし、

○門松并炭薫、竹、歯朶、ゆづりは、飾縄の事

むかし素戔烏尊、南海へかよひ給ひし時、宿を巨旦將來にかり給ひしに、かし奉らず、蘇民將來宿をかしたてまつる、其後尊いかりて巨旦をころし、其家をほろぼさる、是を後の世までのしるしにせんとて、巨旦が墓の上に、生たる松を年の始に門に立ること也、

門松をいとなみたつる夏ほとや
春あけがたに夜やなりぬらむ

また炭わらをかざるは、巨旦を火葬の心、是惡をこらし、善をす丶むる義なり、かざり竹は、すなをなる君子の徳に、ながきよはひをことぶけり、歯朶、ゆづり葉は、雪霜にもなやまされず、色をもかへぬめでたきもの也、かざり繩は不淨を經だて丶、正月の神をまつる義なるべし、

○住吉明神御供并内侍所御供　同朔日

神主大晦日より神舘殿に參籠して、元日卯の刻に、一の神殿へ出仕して、御精進供を獻ず、むかしは攝津の國司より奉幣ありて饗應あり、毎月一日にも供せ

らるゝと也、則一の神殿は、底筒男命にて、天照太神宮にてわたらせ給ふと也、是則內侍所の御供になぞらふるか、抑內侍所とは、三種の神器のその一なり、天照太神あまの岩戶をさし籠給ふ時、鑄うつさせたまふける、日神の御かたちの鏡となり、是を八咫の鏡となづく、むかし神鏡とび出て、天にあがらんとし給ひしを、女官の衣の袖にかけ奉りて、とめけるよりして、今に此內侍所は女官の守護し奉れると也、御供は寬平年中にはじまる、萬治四年正月十五日禁裏炎上の時、ことゆへなく白河に移奉れば、しばらく此所に皇居をまふけさせ給ふて遷幸、近衞殿にかり殿をあらためられ、同二月十八日渡御、

附 橘木之事

むかし神功皇后、三韓をうちしたがへ給ひしより、後本朝に歸伏して、三國同心して、八十餘艘の船に數のたからをつみ、我朝に至來せしに、橘は是いはゐの物なればとて、第一の船の上積にして奉りけると也、是によりて、社內に植をかしむるとかや、かゝるめでたき物なれば、正月の蓬萊の組物にも、橘をかざるもゆへあることにや、

我園にはなたち花のいろみれば
こがねの鈴をならすなりけり　顯仲

○聖德太子御精進供　同朔日

正月一日より同十一日まで、每日御精進供を獻ず、其職掌嚴重也、また元日には、御寶庫をひらき、靈寶を人におがましむるを恒例とせり、されば太子は用明帝の皇子、推古女帝の儲君也、御母は間人皇后、御誕生は欽明天皇三十三年正月一日、御厩戶の前にて御誕生也、さるによりて厩屋の王子とは申き、

○餅鏡居事

齒固といひて、餅かゞみをむかふことは、人は齒を以て命とするがゆへに、はといふ文字をば、よはひともよむ也、齒固は齡をかたむる心也、餅は近江の國火切の餅を用べき事也、餅鏡にむかふ時、誦する歌あり、

古今集
あふみのやかゞみの山をたてたれば
かねてぞ見ゆる君がちとせは

此うたは、延喜の御門の御時、近江國より大嘗會の御べたてまつりし時、大伴の黑主がよめる也、また餅は蚩尤が肉と名づけてくふと云說もあり、

○毬打玉幷胡鬼板、破魔弓、はれつく事



むかし唐に黄帝と申みかど、炎帝といふ子孫をほろぼして、位につき給へり、炎帝の臣に、蚩尤といひて惡人あり、涿鹿といふ所にて、黄帝の爲にうたれしゆへに、其惡靈疫病といふ神になりて、國土の人民をほろぼせり、是によつて末の代に、疫病をおそれしむる爲に、蚩尤が身分をづた〳〵にわかちて、ひとつものこさじのはかりごとに、正月には、彼眼の中のひとみをぬきて、毬打の玉にしてうつことにせり、彼眼のふくりん三重にありしゆへに、弓いる時の的に、三重に繪をかきて、中のひとみをばのぞきたり、はねをつくは、そのかみのたゝかひに、惡鬼の矢をはらふて太平ならしむる、はねは其矢のかたちをかたどり、ふせぐものを胡鬼板といひ、はご板ともいふ也、破魔弓も惡魔をやぶりしりぞかす心なり、なをまた千町や萬町の鳥追、けさう文など云もの、本說たしかならず、

〇屠蘇白散

五十二代嵯峨天皇の御宇弘仁年中に初め給ふ、此藥は一人是をのめば一家無レ病、一家是をのめば一里無レ病、自レ少飲レ之至レ老無レ病云云、此藥をきこしめさるゝに、未レ嫁雅童女になめそめさせ、さて酒にいれ、清凉殿にて主上へたてまつると也、よりて此少女を藥子と云、

としごとにけふなめそむるくすり子は
わかえつゝ見む君が爲とか　新大納言爲秀

〇道頓堀初芝居

初芝居といふよりも、其名めづらしく、心もうき立物は、道頓堀江の川波、うちはやす太皷のをと、唐土はしらず、日本橋のはしの上、老若男女、きせる火繩

に、辨當提重箱のうへに、毛氈繪むしろをからみつけさせ、とちや遲しとはせ來る、粧は雲のごとく霞に似たり、抑役者の名はしらねども、としのうちの顔みせの頃より、そんじやうそれとかたりつとふるを、きくよりもなつかしく、鼠戸のあたりに徘徊して、こゝに來る人々のなりふり、品かたちの異樣なる有さまを見るに、わがしれる人多く、こなたよりはそれとおもへど、予がすがたを見付られじと、しのぶの山の山守も、人めのあみのしげきにもれ、更にとがむる人もなし、たゞ芝居の見もの見むよりは、まされる物をとおもへど、物の音に心うつり、はやくも内に入らんことをおもふ、されば樂器をとれば音をたてんことをといへるも餘所ならず、内に入侍りて、こゝらの人に案内してゐけるに、いまだ狂言もはじまらず、其中に人々、とありかゝりと四方山のとはずがたりをなしけるが、側なる人のいひけるをきけば、此所を道頓堀といふは、人みな此地に來りて、歌舞喜若衆の遊興に入事の頓きがゆへに、かく名づけ侍ると也、其むかし若衆歌舞喜のありし時は、僧俗によらず、貴となく賤となく、價を以てなさけをかけしゆへ、錢あれば此市に立むこと易しと、御寺法師は布施のつゝみがねをば花代とさゝげ、町の一番子は、親の巾着のかねごとに、そひねの床の袖枕口より、かねをすひとられ、あるひは家財をうしなひ、あるひは所を立ちさりて、身をほろぼす人多し、是みな此道の長じぬる媒なれば、天に口なし、人を以ていはせよと、誰か披露はなけれども、去じ承應元年初秋の頃、かぶき若衆の額髮をとらせ、悉く野老となりし、旅芝居をかける子どもまで、さがし出させ給へば、普天の下いづくにか、かがまりすむべきにあらねば、をのが生緣に立かへり、ゐもいはれぬことわざのみにて、落穗ひろふありさま、見るめもいと堪がたし、しかしより此道すこしとさめてけり、しかれども、芝居のことはとゞめさせ給はねば、そのゝち能狂言と品をかへ、右近左近が海道くだりを舞しより、人また二人靜のまひぶりもやと、はやして群集しぬとかたるがうちに、はじめよ〳〵とのゝしれば、追つけはじめぬ、さてはしがゝりのかたを見やれば、としのよはひは二八ばかりの粧にて、なよ〳〵と、楊柳のはるかぜにしたがふ風情にて、出るといなや、是々おでやつた、あつた物では

ない、妙音菩薩の御來迎かとほむれば、こなたにむかひ、袖うちかへげてめくばせして、一たびゑめるかほばせは、さながら李花の一枝、春雨にほころぶるかとおもはる、また二九ばかりにもあまりたると見えしが、つゞいて出でければ、洞底の秋の月是々とほむるもおかし、ふくるもよしといふことにや、其外色をあらそひ、品をわかち、いづれもおとらぬ中に、霜葉は二月の花よりもくれなゐなりと、いはまほしきもあれど、其名をいはず、凡人間百にみたず、常に千歳のうれひをいだく世の中に、何ぞ男色にめでゝ遊興を催し侍らんや、されども、狂言の其品々を見るに、ざれめきたること共にて、おさなき事ども多し、いにしへは、佛神の本縁をもとりまじへ、うたひまひければ、人もおもしろがり、あはれがりしに、いつしか今やうは、むかしにをとり、きのふ大坂のうちにありしことを、けふはやとりくみ、戀慕密通せしことを狂言にして、其人の名をさして、それといひければ、人また是をおもしろがりぬ、されば大坂のうちは云に及ばず、國々遠き縣までも聞つたへ、其親に恥をあたへけること、いかばかりの歎きならずや、かくつたなきことをよしとおもひて、人のおやの娘なんど引つれきたりて、物見し侍ること心得られず、けふは人の上、あすのわれらが身をしらで、うか／＼と役者にはかられける　あさましさよと、ふと　おもひ出るより、いざ／＼立むとしけるを、傍なる人のまたしめよと、ひざをおさへて、尤と感じつゝ、仰のごとくさまで候、惣じて娘なんど持たる人の心づかひあるべきは此見物なり、其人にはよるべけれども、戀慕の手だてを見るよりも、心なきもこゝろをつけ、我もまたしやせまし、しのびても見まほし、情もかけてもやと、色のなきもをのづから色をつくるは　此見物ならんと、答して立わかれぬ、いとおかしかりけり、

○住吉白馬神事（あをうまのしんじ）　同七日

今日一の神殿へ、御精進供を備へ奉る、神前にをひて白馬の神事とて、神馬の乘初あり、此時神主一族、禰宜、社僧、伶人以下にいたるまで、出仕しけると也、抑白馬の節會といふこと、大内にをいて今日おこなはるゝ、此節會をかたどれるにや、是は天武天皇十年よりはじまれり、馬は陽の獸なり、青は春也、是によりて、正月七日に青馬をみれば、年中の邪氣を除くとい

ふ本文侍る也、されば主上紫宸殿に出御おはしまして、白馬を御覽ある也、夜に入ての事也、此時の出御をりから、地下人も玉體を拜みたてまつる、されども法頂は今日まで御門に入事停止、節會の義式さまざまありといへども、本より下ざまのものゝしることにあらねば、あらはすべき節もなし、僻耳にきゝなし侍るは、內辨のみこゝろにて、いしはまかりよんぬるかとのたまへば、いし着座といらへ、又開門などいへる事有、今のはらばへの春駒といふは、是よりはじまり侍るにや、

こよひある節會に馬を引ぬれば
　ひらくといふや四つ足の門

附七草之事

七草の若菜を羹にして食するとは、人に三魂七魄といふ神あり、天に七曜と現じ、地に七草となる、是をとりて服すれば、我魂魄の氣力をまし、命を延るなり、大宋文王の時より始る事也、七草といふは、

せりなづな五行たびらこ佛の座
　すゞなみゝなしこれを七くさ

○大融寺富(とみ)之祈幷卯杖　同七日

正月一日より七日まで、修正の法會、辨財天女、牛玉寶印降富の執行あり、是は天下太平、國土安穩、風雨順時、五穀成就、萬民豐饒の御祈禱と也、抑降富の符札は、其數所々不同なり、當寺には七番の富あり、七難即滅七福即生の標主なりとぞ、凡牛玉寶印とは、諸の惡魔をはらひ、諸の福德を集む、辨財天女の內證を顯す謂也、此こといつはじまりたりといふことたしかならず、今日當國にも所々に有、いづれか前後なることを知らず、爰のみにもあらず、諸寺、諸山に於て、正月には修正ありて、福杖といふものを物し給ふことあり、是みな此等の類にひとしきか、けふまた大內に於ても、卯杖と申こと侍りき、是は持統天皇三年正月の卯日、大學寮より是を奉るよし、日本紀に見えたり、ある人のいへるは、卯杖と申は、若菜を備へける時つく杖をいふと也、此卯杖は卯のかたへ向ひたる椿の枝、柳の枝、松の枝、此三のえだを、いづれも三尺五寸づゝにきりて削り、五色の糸にて十二所ゆひ付て、若菜を君に備へ奉ると也、是を卯杖といふと也、猶尋べし、

○神宮寺藥師講附富士が事　同八日

正月八日藥師講筵義ありて、法花轉讀の後、いにしへは管絃ありと也、むかしは住吉にも地給の樂人ありて、管絃の役をつとめしと也、往古萩原院の御時、大內に七日の管絃ありしに、津の國天王寺に淺間といふ樂人あり、ならびなき太皷の上手にてありしゆへ、禁裏にめされ太皷の役をつとめし也、其頃番所に富士といふ樂人あり、是もおとらぬ太皷の上手なりしゆへ、管絃の役をつとめむと、おなじく京にのぼりしが、帝叡聞ましまして、富士、淺間、いづれもおもしろき名なり、うたに、

信濃なる淺間が嶽もゝゆるといへば
富士の煙のかひやなからむ

此こゝろなれば、名こそうへなき富士なりとも、あつぱれ淺間はまさらん物をと勅掟ありしによりて、その後は富士が名をよび出すものもなかりき、しかるに淺間いかゞや思ひけむ、富士をあやまつてうちぬ、此こと妻子は夢だにしらず、只富士がかへることのおそきを待かね、京へ尋のぼりしに、富士は淺間にうたれぬる、形見の色品とりいだし、これ見よとさしいだす、妻子きくよりはや、宮古にのぼりし夜の間の夢、心にかゝる月の雨、身をしる袖のなみだかと、あかしかねたる折からに、かゝるものうきかた見とや、さしも名高き富士は、などけぶりとはなりぬらんと、いひ悲しめるありさまは、よその袂もぬれぬべし、妻は娘に向ひ、あれに夫のかたきあり、いざうたんといふ、娘きゝて、あれは太皷にてこそあれ、おもひの餘りに心みだれ、すぢなきことをの給ふ物かな、あらあさましやといへば、あかで別れし我妻の、うせにしことも太皷ゆへ、たゞうらめしきは太皷なりと、夫のかたきようたんといへば、實にことはり也、父にわかれしことも太鼓ゆへなれば、さあらば親のかたきぞ、うちてうらみをはらさむと、持たるばちを釼とし、ひたすら嗔恚をはらしけるとなり、いとあはれならずや、其富士が舊跡は今にありとぞ、

〇今宮惠比須祭　同十日

西宮を勸請しけるゆへに、當日をまつりとす、殊にあき人の家に、としの始に若惠比須といひて、とりわきいはゐ奉れば、けふの參詣大かたならず、また市にゑびすをまつること、聖德太子の願によりて、商をまもらせ給ふゆへと也、

○帳綴祝　同十一日

けふは吉書とて、商人の家に帳をとぢ、上書をしていはふ日也、しかれども近頃より、大坂の內所々に帳を綴、上書をしてうりかふ事になれり、則帳をあきなふ家には、門に竹をたて、幕などはりて、うりてのさいはひ、かふてのよろこびなどゝ祝しけるとぞ、禁裏にも吉書の奏と申こと侍りき、

○住吉御弓　同十三日

今日晝過より、神主一族禰宜出仕して、南の拜殿にをいて、饗膳しをはりて、其後的塲にさがりて、二人づつかはり〱に弓をいる、其義式委細也、むかしは大社御狩の神事とて、神子男の形となりて、弓箭を持て狩塲を出る躰の義式ありと、舊記に見へたり、是等のこと今は中絶せるか、尋べし、

○東土塲左義長大坂中にも有　同十四日

東土塲は、今の大手の上にあり、むかし太閤御所の御時、此所にて左義長ありしゆへに、かくいふと也、抑左義長のおこりは、漢の明帝の時、はじめて天竺より佛法わたる、五嶽の道士是を破らんと祈るにより、其しるしを見むと、佛經をひだりに置、道士の書を右にをきて火をかくるに、道士の書焼失す、されば左の義長ぜりとありて、左義長といへり、また西域義長や東土やとはやすは、西域佛法の義まさりて東土流布すといふことなりともいへり、又神異經に云、西方の山中に有レ人、長一尺餘、人見レ之則病ニ寒熱一、名曰ニ山噪一、以レ竹焼レ火、爆烨有レ聲、則驚去不レ來云云、此を以て正月に焼ニ爆竹一說々おなじ、



附萬歳

今千壽萬歳とて、門々をうたひありくものあり、是は踏歌のかたちをあらはし、萬歳樂とうたひ侍る、其濫觴を尋ぬるに、今日年始の祝詞を作りて、うたひまふ節會を、男踏歌といふ、則あられればしりともいふ也、是則源氏物語にもこのことあり、高巾子綿の花をつくること、このとのかざしのわたなッど丶よめり、天武天皇よりはじまる節會にや、聖武天皇天平の比は、踏歌の義はて丶祿をたまふに、仁義禮智信の五つの題をさぐらしめて、絹布綿など、それ〲の題によりてたまはりし事有つる也とぞ、

○住吉粥之御供　同十五日

一の神殿へ、今日粥の御供を献ず、されば今日禁裏にも御粥を献ずる也、其來由を尋ぬるに、むかし蚩尤といふ悪人を、黄帝と申御門、正月十五日にころされたり、その丶ち天狗となり、其身は地靈となる、是よりして、けふ亥の時小豆の粥を煑て天狗をまつり、是を食すれば年中の邪氣を除くとなり、其外の異說もあり、尋べし、

難波鑑第一終

難波鑑第二

○住吉甘菜御供（あまなのごく）　正月十六日

住吉四所明神へ今日たてまつるを、あまなの御供と申たてまつる也、一の神殿は御精進供也、今のほかの三じや神へは魚盃也、尤鯉鮒蛼螭（にしかき）等に海草のたぐひ多し、魚御供の御神詠に、

伊豫の國うはの浦半の魚までも
われこそはくへ罪救ふとて　住吉明神

○新御靈御弓幷射禮　同十七日

當社は、津村のうち神なり、むかしは今日いろ〲のねりものにつくり物をいだすといへども、いつのころよりか、此こともおこたり、今はわづかに社内にをいて的をたて弓をいる、人これを御弓となづく、是則御靈宮の門のうちに茶屋あり、此あるじ是をつとむ、今日禁裏建禮門院にをいておこなはる丶射禮を準ずるならし、

○新清水観音供幷仁壽殿観音供　同十八日

今日當寺に法事等有、是は國土安全、當所靜謐の祈願

也、是則禁裏仁壽殿の觀音供に準ずるか、此觀音供は應和年中、觀音の像二躰を仁壽殿に安置せらる、寛空僧正開眼供養あり、天子の御祈のために、加持ある事なりとぞ、當所にも近曾より三十三番の札所ありて、人々巡禮することにはなれり、しかれども此觀音は、わきてはやらせ給ひ、けふは殊更參詣の群集袖を連ね、下寺町の通筋は、人はふばりて、跡へも先へもゆかれぬほど多く、長町より野道を出る人限なく、舞臺の上にはみぬ人多く、西海を遠見してたゝずみけり、

○法然御忌　同十九日

けふより廿五日まで、源空上人御遷化の御忌とりおこなはるゝ寺々、先知恩院の末寺八十六ヶ寺、淨花院がた廿一ヶ寺、黑谷光明院派十九ヶ寺にをよべり、其寺々に、男女老少參詣の詳集、聲をばかりに念佛することゝ、十萬億土の西方極樂へも、手にとるやうにきこゆらんと、いさたうとし、

○團子　廿日

今日は、武家に具足の餅ひらきいはふ日にて、だんごをあづきにて煮たるを、俗に廿日團子と名づく、具足もたぬ中間足輕ばらも、けふはいはふ事にて、餅の代にだんごはすることなりといふ、士民の家にすることゝおもへるはいぶかし、

○北野石不動參　廿八日

此尊は弘法大師の御作にて、靈驗あらたなり、當日錦帳をかゝげ、諸人に拜見せしむ、むかしより尼の住持せし寺也、

○天王寺涅槃會　同十五日

當日は、天王寺の堂塔みなひらけて、諸方の參詣袖をつらねて群集す、御葬禮の次第は、先聖德太子堂より御輿をふりいだして、さきには梅のずわひを持たる人、其つぎには、獅子がしら花笠の兒數十人、はた、面、其ほか異類異形の出立して、管絃を奏し、仁王門の前に出で給ふ、また釋迦堂より御輿をふりいだす、行列太子の御輿におなじく、是も仁王門の前に出で給へば、兩輿立むかひ給ふ時、兩方より梅のずはひ持たる人、のつとをあげ、それより太子の御輿は、廻廊の外をにしへねりて、六時堂へいらせ給へば、釋迦の御輿は廻廊の外をひがしへねりて、是も六時堂へいらせ給ふと、伶人の舞はじまる、まことに天王寺の舞

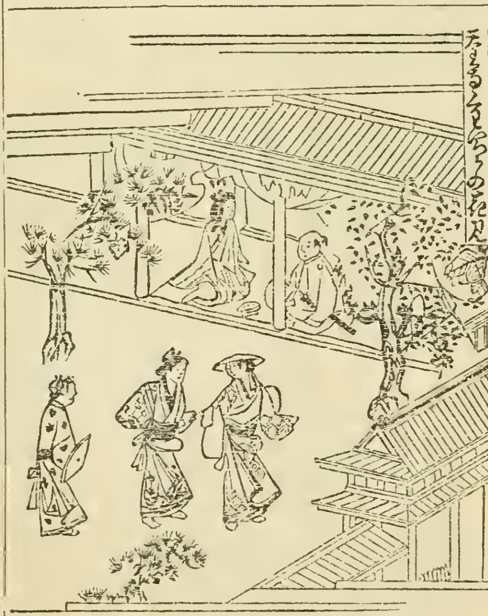
樂のみ都に恥ずといへるも、實にさる事ぞかし、抑此舞のはじめは、神代佛在世のはじめ、月氏、震旦、日域に傳はる、狂言綺語をもつて、作佛輪法輪の因緣をまもる、まゐんをしりぞけ、福をまねき、此舞を奏し給へば、國ゆたかに民しづかに壽命長遠なりと、秦の川勝につたへ、六十六番の舞をつくりてまはしめ給ふより、今に其遺法によれるとかや、此日堂上がたには、涅槃の賭とて、尊影の前に絹布あるひは墨筆なにゝても、それ〳〵にかけをはで、晩に賭をたがひにとりかふことありとぞ、今日諸方の寺々にも、涅槃像をかけて、諸人におがましむる也、

○聖德太子聖靈會　同廿二日

今日は太子の御忌日也、其職掌の行列は涅槃會のごとくにして、伶人の舞終日百二十番の舞ありとぞ、いにしへは、廿一日より廿三日まで、三日のあいだこれあるよしを、大造のことなりとて、今は一日につとむ、

○天王寺彼岸詣

當日の彼岸詣は、春こそよけれと人ごとにいふめれど、秋はまた、あふ坂の清水もひやゝかに、龜井の水をむすぶ手も涼しくて、三伏の氣をはらふもまたおかし、いつの頃よりか、春秋ともに、七日のうちは、人人こゝにまふで遊宴を催し侍る、其濫觴をしらず、予おもふに、此寺の石の鳥居は、極樂の東門の中心なれば、彼岸の時正には、日輪極樂の東門にいらせ給ふとて、人々是をおがまむと、歩をはこぶ事なりしを、今は此こともなく、身にはきよらを盡して、大坂のうちはいふに及ばず、堺よりも、貴賤上下乘物辨當、さすがにひろき道野邊も、所せくまでこみあひおし合

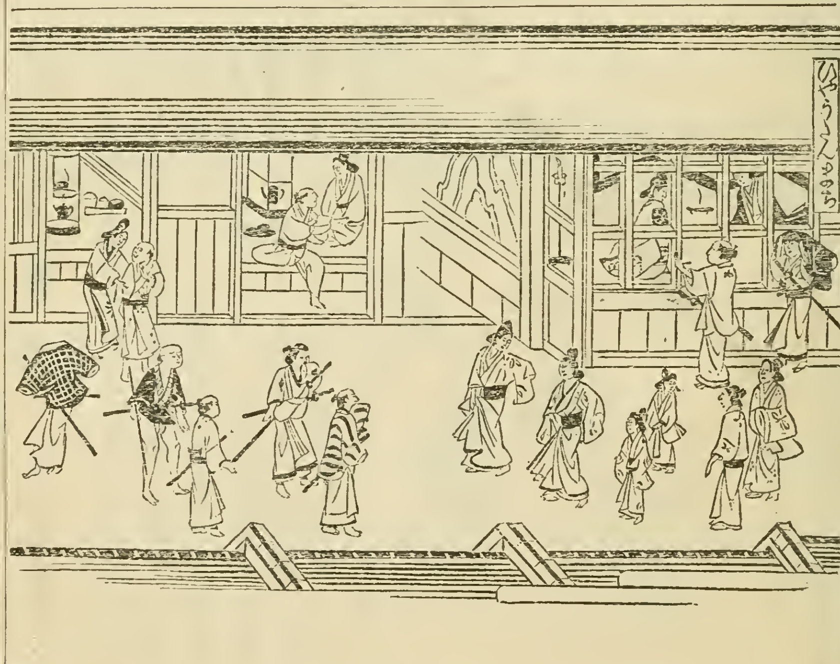


て、幾千萬とも知がたく、綾羅綿繡のよそおひ、己れおとらじと嗜て、風流をこのむ人々のありさまは、またさら也、まことに態ならぬたきしめしうつり香は、花たちばなよりもめづらしく、行かふ人の心も時めき、色をおもくするも、猶あはれになさけふかし、廻廊堂塔の緣もみち〳〵、こゝらの芝原、池水のほとりのくま〴〵までも、あくまで其家々の紋を幕にあらはし、これ見よと云む計に潜上するもおかしく、こゝには琴三味線のをとづるれば、かしこにはおどり、あそび、笛、太鼓、つゞみ、尺八などのはやしものにてうたふ聲もおかし、また花の木陰に並ゐて、あからめもせずまもりて、物くひ酒のみ、ことうたのつけあひおもしろしなどゝ、ひげくひそらし、肪杖をつきたる體、見るもさながら絕がたく、またおほきなる花の枝、こゝろなく折とりて、地主にはいからるゝもかたはらいたく、地水にをりて手足さしひたして、見つけられにげまはるこそ無下に口をしけれ、また傍には、酔なきして、ゑもいはれぬことのみして、かしらをとらへゐるこそおかしけれ、猶興つき終りての後には、人々よりあひむさぼり、つかみあひ、口論をして、法場をけがすを、彼岸詣といふべきや、抑二季の彼岸といふは、晝夜の長短なく、相應して正き時也、されば兩岸ならびて、左右ひとしきがごとし、よつて比岸といふ、又日出月沒の兩岸彼岸云云とひとしきゆへに、彼岸ともかく、されば佛法には正しきをもちゐ、魔界にはたがへるを用るゆへに、正直の時節に佛法は顯現し、魔界は隱沒するによりて、此時にあたりて佛事善根をなすと也、また或說に、都卒天のかたはらに靈所臺あり、そこに樹あり、二月に花開き、七日七夜して落、秋八月七日果成、摩醯、首羅、梵天、帝釋等をの〳〵集りて、七日の間世間の善人惡人の名を印記するともいへり、

○瓢簞町夜見世　三月朔日

いにしへは、晝夜のわかちもなく、いとにぎやかなりしが、ひとゝせの火災の難にかゝりしより、いはゝしならねど、夜るのちぎりもたゑ〴〵に、晝ばかりの出入となれば、をのづから廓のうちには、闇夜に灯をうしなひたる心ちして、物の榮は夜に入てこそあれと、行かふ人もなく、いと心細げになりゆきて、冬の日の短きをかなしみ、夜の長きをくるしむも、さながら寒

若鳥にひさしく、あけなば局格子に出むといふもあはれなりしに、去し延寶辰の年春三月の初日より、無神月の終日までは、としごと夜見世をかざるべしとの仰をうけたまはり、阿波座、瓢箪、越後、三筋の町、よしはらまで、局々の靑暖簾をとりて燈をかゝげしは、萬灯會にことならず、入くる人々、こみあひをしあひて、かちよりゆく若きものは、衣紋ひきつくろい、編笠をかぶり、羽織をかづきて、しのぶすがたもいとおかし、乘物は揚屋のうちに入ることかなはねば、西東の門口にすへさせ、内より出る面々、宿の首尾しすましたりとうれしげに、跡につれたる僕のなりふりまでに、心をつけて見かへる人もおかしくぞ侍る、そも〳〵傾城傾國のことは、漢書にも見えたれば、今こゝにいはむもむつかし、されば、此廓のうち、太夫をはじめて、天神、かこひ、はし傾城まで、凡二千二百餘人に及べり、まことにそれ〴〵のおもわくありて、われ鍋にとぢぶた、たがひに情をかはし、肱を曲て枕とするたのしみも、おもひやられておかしく、さればさる人、長崎の寢道具にて、京の上﨟に江戸のはりもたせ、大坂の九軒町にて遊びたしと、ねがひ



しとかや、此九軒町ほどあそびどころよき所はなきと、誰しもいひけるぞかし、此うちにあまたの門あれど、東西より外は常にあかず、名づけて蛤門といふ、やけばあくとにや、火事の時はひらきて、人をとをしけると也、

○節日草餅　三月三日

是は周の幽王の御時よりはじまれり、むかし三月三日に、幽王に、ある人此草の餅を奉る、御感なゝめならず、それより献二宗廟一、後人今日もちゆる事也、

并曲水の宴　同日

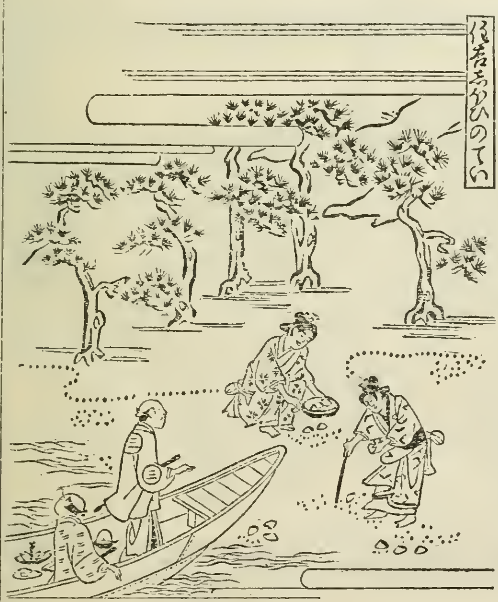
是も周の世よりはじまりける事也、水上より盃をながし、人々の前過ざるさきに詩をつくりて、酒くめる事也、御溝にてありしと、康保の御記に見えたり、

附鶏合禁中御庭にて有

明王と申たてまつる帝、まだ宮におはしましさふらふ御時、鶏合をこのませ給ふて、今日たゝかはしめ給ひしに、ほどなく御位につかせたまひける吉例にて、今も侍る事也、但明王は乙酉のとし御誕生ありつる也、

○住吉浦鹽干　同三日

時をたがへぬものは鶏と潮なり、されば西東南海には日ごとに鹽干ありて、北海にはなしといふ、けふはことさら、すみよしうらのひあがるゆへに、鹽干あそびとて、大坂はいふに及ばす、京都の好事のひとびともくだりあつまり、大坂の川ぶねに幕はしらかし、あるはながれの女をまねきよせ、笛、太鼓、つゞみ、三味線、鼓弓、いろ／＼の拍子もの、水主梶とりに櫓械をさせ、とゞめきて漕でたる、すみよし浦よりさ



かひうらまで、濱も磯も沖も陸も人ばかりにて、どよめくほどに物音もきこへず、堺のさもある女房は、鹽干小袖とて、うるはしくこしらへて、今日を晴にて出立たる面々、鹽の干あがるより、舟のり物をおりたちつゝ、裙をもかいとらず、沾々としたる濱の眞砂に裳裾を引、眞砂の底にかくれたる蛤をふむ、ひとつふたつ手づから取あげて、なぐさみよろこぶ、かくて鹽みちくれば、俄に舟にこみのる、其あいだにみちかさなれば、のりをくれておぼれ、舟をのりかへらかして水をのむ、一の谷の落あしに、平家の一門女房たち、あはてふためきて舟にのり給ひけんも、さこそありつらめとぞおもひやらる、ことゆへなくのりゑたる舟には、小歌うたひ酒盛して、日くるゝまであそびて、浦々に漕わかれ、家々に立歸るも、いとさう〳〵しく、またあるべきことがらとは見ゑず、おもしろく侍る、

○住吉大乘會　同八日

是は神主前攝津守津守宿禰經國、自筆をとりて、十二箇年に五部の大乘經二百餘軸書寫して、去じ安貞年中、安居院大和尙位聖覺法印を囑して、唱道として、北白河女院の御願に準じて、供養の宿望を達して、神明の法樂をなしたてまつるがゆへに、今としごとの今日は、此會を莊嚴して法事有とぞ、

○善導忌　同十四日

惣じて當所には、西山派の寺すくなく、粟生永觀堂の末寺三ヶ寺に及べり、此日善導和尙の法事等ありといへども、さのみに群集する程の事もなかりき、

○弘法大師御影供　同廿一日

此日は大師御入定の日なれば、古儀新儀のわかちなく、眞言十三ヶの寺々にをいて法事あり、しかるに、當日大師の御影へ三寸をたてまつりけるを、ある人見て、神にこそ三寸はそなへけるに、佛に奉るはいぶかしといふ、予がいはく、是は大師御入定の後、また御伯母高野山の麓にまし〳〵けるが、御手づから粄と云ものを一粒づゝはききよめて御酒に造り、御影堂にをくり給ひしより、其遺法により、今に高野山御影堂に、つまむきの御酒とて奉ければ、今寺々にたてまつるも、是等の事によりてかと申き、尋ぬべし、

難波鑑第二終

難波鑑第三

〇更衣并青葉簾之事　四月朔日

宮中所々の御裝束寮あらたむ、御殿の御帳のかたびらおりて、すゞし胡粉にて繪かくとなん、御疊などもあたらしきをしきかふと也、天上人は、けふよりねりぬきの衣を着給ふと也、是を白がさねまたは衣がへともいふと也、さてまた青葉のすだれとて、大内にをいて、今日南のとに、もろ柳とて二本あり、相向て生たるに、青葉のすだれをかけ給ひ、其日のくれにとり給ふと也、猶尋べし、

〇孟夏旬（まうかのしゆん）

旬とは、夏冬の季のあらたまる始に、臣下に御酒をたび、政をきこしめさるゝ義也、冬の旬は十月朔日也、また内裏あたらしく作られて後、はじめて南殿にておこなはせたまふを、新所の旬と申也、御位につかせ給ひて、始て政に望たまへるを、萬機の旬と申也、是は天武天皇十二年よりはじまる也、此四月の旬には、内侍所扇持て上達部に賜へば、膝をつきてとり給ふ作法なゞあると也、

〇天王寺灌佛

今日は、金堂の前に金佛の釋迦三體を出し置けば、參詣の輩水をそゝぎてあぶせ奉る、こゝのみにもあらず、諸寺にをいて其義あり、されば灌佛といふは、釋迦如來の倶毘藍城にてうまれさせたまふける時、天龍くだりて水をそゝぎ、釋尊にあぶせ奉りし義也、但此佛生會は、推古天皇よりはじまる、また宇多天皇よりはじまるといふ說有、寛平三年四月於宮中有灌佛、皇帝太子公卿百寮皆浴像し給ふと云々、また延喜十年に灌佛あり、又古き書に、佛誕生は二月八日とあり、今卯月八日におこなふは誤也、二月は卯の月なるゆへに、卯の月の二月を四月とこゝろえぬるは、ひがことなれども、世間皆しかあるうへは、あやまりにつくべし、

〇玉造稻荷御出　中の午日

此所を豐津といふ也、四月中の午日、神輿御本社よりいだし、社内を三反まはり給ひて、そのゝちまた御本宮にいれまいらせ、卯の日まで十日のあいだまつり、諸人におがましむ、そのかみは鉾やうのものなゞとわ

たるといへども、此事も中絶して今はなし、

○住吉初卯

俗につたへしは、此日は住吉明神此所に跡をたれ給ひし最初日なるがゆへにまつると也、則神輿一社南の拜殿より、瑞籬の外を北の門まで遷幸し、神主一族出仕して、禰宜をの〳〵卯の葉を持てねり給ふ、其義式あると也、是を住吉の忘草と云、されば住吉の忘草のことは、古今集最上の極秘なれば、たやすくしるべき



にあらず、されども崇神天皇すみよしに行幸ありて、物おもひし給ふ時、忘草を植給ふよりしていふと也、猶しゐて尋しるべきこと也、

○土塔會　同十五日

むかしは天王寺七村より、當日は山鉾をいだしまつりけると也、しかれどもいつのころよりか中絶して、今は此こともなく、其時のねりものゝ馬具、面、人形なゞど、村々の社内におさめをきしを、けふはまいりてとりいだし見る人もありとなん、則天王寺の内に、古塔塚とて于レ今あり、

○東照權現祭　同十七日

當日は、東照宮の御祭禮とて、大坂のうちはいふに及ばず、近里遠村よりも袖をつらねてまいり、御寳前にうづくまひ、此君千代萬歳と御武運長久をいのり奉る、まことに普天の下々まで、枕を民家のやすきにをくこと、是みな此聖君の御恩澤ならんや、されば此君竹千世公と申たてまつり、いまだ七歳の御時、三州にをいて、五月五日印地うちのありしに、人々見にまかりけるが、一方には二百餘人、また一方には纔三十餘人にはすぎじと見へしが、をの〳〵多勢のかたへむ

らがりあつまりしゆへ、此の君をいだきまいらせしやつこも、多勢の方へゆかむとす、公しば／＼見給ひて、汝多勢のかたへゆくべからず、小勢につくべし、いかむとなれば、今多勢は少勢を見て心に油斷あり、また少勢は多勢を見てまけじといさむ心あれば、終には勝つべし、若まけたらん時は、加勢ともならんと仰給へば、奴き丶て、何ごとをか仰たまふぞ、人のゆくかたにまかせ給はずして、いらざる仰ごとやと、しゐてつれ行奉る、既に雙方立あひ、火をちらしてうちあひけるが、少勢のかたすこしたるみて見へし所へ、後の山よりかくし勢五十餘人かけ出、彼二百餘人を悉うちちらしてければ、見物の人々も、こ丶かしこににげ行たり、公此よしを御覽じて、汝いはざることとかと、奴があたまをた丶き給ふを、傍なる老人つくづくと始終のありさまき丶奉り、さても我命がふたつほしきかな、此若君の天下をしろしめされん行末を見たしと、感涙をながしつぶやきけるとや、寔淺からぬ御こ丶ろざし、いとも賢こく、予が舌端にいひ出むもをそれあれば、先は筆をとゞめぬ、

○五日節會幷藥玉粽之事

主上武德殿に出御ありて、宴會をおこなはせ給ひ、群臣に酒を賜ふと也、內辨なンども、元日の節會豐明なンどにおなじきよし、また典藥寮あやめの机をたてまつる、群臣に藥玉をたまふ、五色の糸をもつてひぢにかくれば惡鬼をはらふとある本文侍るにや、また今日粽を用ること、むかし高辛氏のあくし、五月五日に船に乘て海をわたりし時、俄に難風吹て浪にしづみけるが、水神となりて常に人をなやます、ある人五色の糸にて粽をして海中になげ入しかば、五色の蛟龍となる、それよりして海神人をなやまさず、こぎゆく船も災難にあはずと也、また屈原汨羅にしづみしをまつりし時の供物ともいへり、

○住吉御田植幷源平合戰之事

いにしへは、堺の高洲の傾城の役として、色々のかたびらに衣裏(ゑり)ざしして出たち、うつくしき帶など手すきにかけつ丶、田面におりたち、早苗をとりてうへたり、神主は車にて田の畔に來る、車をたて丶幣をとり、一粒萬倍の祈念あり、社人おほく出立て、早苗をはこびわたし、田歌おもしろくうたひける早乙女のありさま、いとおもしろかりけるを、今は傾城どもは

いで侍らず、人をやとひて代にたつが程に、老さらぼへたる婆ども、澁かたびらのやぶれたるに、軒まばらなる菅笠きて植ると也、いと見所なし、末の世になれば、なにもかも略義になりて、上代の作法にたがふこと、上も下もかくのごとし、さてまた田植すぎて、神前にをいて、源平兩家の合戰とて、赤白の旗じるしを立、弓箭を持てたゝかふ、むかしはなかりしことなるを、中興よりことはじめけるとぞ、

○勝鬘參幷氷餅之事

御本尊愛染明王なるがゆへに、今日を縁日となし、錦帳をかゝげておがましむるにより、參詣の諸人所せくまでおし合群集す、まことに此明王は、衆人愛敬をなし給ふなれば、誰か信向をなさゞらんや、けふまた民家にて氷餅をかふことは、今日氷室の御調とて、帝氷をきこしめすなり、むかしは富士とよし野より、ひむろまいりける也、延喜のみかどより此かた、丹波のいた田山より、今はあがるとなり、かゝるゆへにや、これは仁德天皇の御宇よりはじまる、猶氷のためしの所にくわしく見へたり、

牛頭天皇祭　同十四日

難波の宮にまふでゝ、御湯まいらするばかり、神輿はまつらず、むかしは平の明神を上の宮といひ、當社をば下の宮といひて、さかえ給ひし時は、神輿をいだしまつりけるよし、今は神さびて其さたもなし、

○嘉定喰（かでうぐい）　同十六日

禁中がた米をくばりて、百一口なにゝても、所望にまかせて買もとめて食せらる、いにしへは錢の文に嘉定と書たる、是を嘉定錢と名づけて、食物を買もとめしを、今は錢も絕てなし、米にて買侍べる、其米は禁中よりくださると也、今日武家にもいろ〳〵のくわしなどを、嘉定と名づけたまはるとなん、

○新御靈夏神樂　同十七日

氏人あつまりて神樂をまいらせけるゆへに、夏神樂といふ、夜に入て神輿を社内にいだし、しばらくありて御本座になをす、神前より門外にいたるまで、氏子ども祈願のために挑灯をとぼしけること、萬灯籠のごとし、

○稻荷夏神樂

是また新御靈の宮のごとく、夜宮より社内に挑灯をとぼし、門前の商人は夜もすがら篝をたき、聲をば

かりに、是々味よき砂糖水とよばゝれば、是々こゝはよきところてん、道明寺なりとしいふもおかしく、參詣の群集は野陣の夜に似たり、

○座摩御祓　同廿二日

當日御神前へ、御供にそへて醬を奉るを例とす、是は神功皇后三韓御退治ありて御歸帆の時、つかれに及び、渡邊といふ所に御休息ありしに、一人の賤女きたりて、ひしほをさゝげ飢をすくひしより、其義を以て奉るとなり、此賤女は天朔女とて、今宮社のうちにいはふ所也、ねりもの、母衣掛武者、立花、砂の物、色々のつくり物に美を盡し、今の渡邊筋より本町さかい筋へ出、高麗橋をわたり、大津町の御旅所までねる、其間三十餘丁の道筋には、やらひをゆひて慕すだれなどはりて祭見しさま、彼の法師がいへるごとくに見ごと遲し、其ほどは人の行かひみるめも耻ず、酒のみ物くひ、圍碁、雙六などあそびて、またわたりける時には、をのくきもつぶるゝやうに、あらそひ簾はり出をしあひつゝ、一事も見もらさじとする、人々の體こそおかしけれ、まつりわたりすぎて、そのゝちに御輿もおなじ道に出させ、御旅所に御幸あ



れば、神主祓なッどありて、本社に還御ある、御迎の挑灯をいだしてまつり奉ること、大形ならぬことどもなり、

○天滿天神御祓　同廿五日

菅丞相、筑紫へながされ給ひし道の次でに、しばしおはしませし舊跡也、（今の北野天神、此宮より北西へさること十餘町、）其時菅丞相あまりに飢つかれ、今のゑのころ島といふに立より、翁嫗二人住ける家に入給ひ、小麥餅をたてまつりしを、

開しめされし例により、御旅所とさだめ、小麥の御供を備へ奉ると也、御神事ねりもの、引山三方面にして、内に見あるひは花笠をきたる子どもにおごらせ、あるひは異類異形に出立せ、さま〴〵の藝づくし、かね太鼓を笛にあはせ、拍子は都祇園會のまつりのごとし、また引舟などもあり、内にておもしろき小歌うたはせ、また母衣かけ武者、小道具、いろ〳〵有、天神橋通をわたりて、難波橋の道までゆく、御輿二社、難波ばしより舟にめし、いまは惠比須島に漕行、御旅所に遷幸あり、夜に入てかへらせ給ふ、御迎の挑灯の數々、浪間をかゞやかし、蒼波もからくれなゐに水くゝり、神代もきかぬ祭禮のありさま、いときら〳〵し、

○住吉御祓

朝まだきより、方々のねりもの、母衣かけ武者、小具足、いろ〳〵の餙に手をつくしてわたる、其さま奇麗也、さて晝時分より、鼻高、鷹師、馬にのりてわたる、社人もおなじく馬にのり、社僧は茶臼笠をきつれて馬にのり、その次に禰宜も馬にのり、一疋に數百人、長刀、鑓、なぎなた、かつぎつれ、一組々々引てわたる、聲よきものどもは小歌うたひつれたり、さてそれより、神馬に笠鉾さしかけ引てわたる、四社の神輿をまつりたてまつる、社務は檳榔毛の車にて、反橋の本に立るゝ、神輿一社、七度の濱に出し、潮におりひたりたまふを、あがるまじきとの御事也とて、拍子たてゝ、それより宿院の御旅所へ遷幸ある、神人のつどをあげ、しばしありて還御ある、御送迎の挑灯、まことにおびたゞしきまつりごと、また〳〵有べきともおもはれず、されば御祓といふことは、今のさかい浦、干與七佛のいにしへより、物在不思議の龍宮有、（今の宿院のこち也）彼砌に如意寶珠また壺を埋置給ひ、住吉明神今日幸をなし口をひらき給ふゆへに、祭禮をなし、神輿をこゝにうつし奉ると也、御誓願の文に、今此三界皆是我有乃至唯一人能爲救護是とあるも有りがたし、さるによりて此浦の潮を浴する輩は、必現當二世の願成就せりと、をの〳〵當日潮に入て水をあびけるも、かゝるゆへにや、

附　堺浦と云事

開口（あくち）一說水村と云、十三所の神明は、外宮金剛界三十七尊九會まんだら佛界と衆生界と、金胎兩部陰陽不二

の地也、是によりて堺浦と名づく、男子盧島、葦邊干與ともいへり、また八祖の浦ともいふと也、子細あること也、

難波鑑第三終

難波鑑第四

○法善寺墓參　七月朔日

千日寺のたゝきがね、諸行無常のひゞきあり、歌舞喜若衆の花のかほばせも、つゐに必衰をあらはせり、さればあしたには紅顏ありて世路にほこる人も、夕には此墓所にきたりて白骨となりて朽る、まことにけふは人の上、あすの我身をしらず、おもへば〳〵はかなきあだしのゝ露よりもろき世の中に、たれありて殘るべき、鳥部山の煙たちさらでのみ住はつるならひならば、いかに物のあはれもなからんといへることなゞおもひやられて心ぼそくぞ侍る、抑此法善寺と申せしは、寛永年中のころほひより、千日の念佛をとりたてしより、人こぞりて千日寺といへり、それよりつゞひて、今は不斷念佛の道場となれり、いつのころよりか、此寺の墓參とて、七月一日より其月のくるるまで、毎夕大坂の男女、老若、貴賤によらず、此寺にまふできたるありさま、いふも中々くだ〳〵し、予も一夕殘暑のたえがたかりし折から、納涼の陰をもさ

めむと、こゝに來て、堂のえんに端居して、人々のこころをうかゞひ見るに、予がごときの人おほくて、賓に參人まれにして、わかき人々は色にそみ、あるひは酒宴なゞごを催し、ざれめき遊ぶ人がちにして、あるひはいきほひ猛にのゝしり、はては喧嘩して法場をけがす人あり、かゝることを見るにつけても、いよ〳〵我身をかへりみ、うけがたき人界に生を得て、有がたき御法をうくるよろこびをわすれ、後の世のくるしみをまふけむこと、おもへば〳〵あさましくぞ侍る、かゝることをしても物詣といふべきや、をそるべくつゝしむべし、

○七日御節供索餅幷仙翁花送事

むかし高辛氏の小子、七月七日に死せり、その靈鬼となり、人に瘧病をなやます、彼存日に麥餠をこのみしゆへ、索餅を以て是をまつれば、年中の瘧病を除くといへり、さればけふの御節供に、内膳司より是を調進せり、よりてすゑ〳〵までも索麪をもちゆるは此ゆへ也、けふまた仙翁花を人に送ることは、乞巧奠とて二星をまつり香花をそなふがゆへに、花を人にも送るにや、仙翁花は、嵯峨の仙翁寺よりはじめて出しによりて、其名とせるとかや、

○乞巧奠(きかうてん)　七日

乞巧といふことは、もろこしよりことおこれり、七夕祭とも云也、けふは御殿の庭に机を四脚たて、灯臺九本、但をの〳〵ともし火あり、机の上火とりに、夜もすがらたき物くゆる、また琴をたてたらいに水を入、大ぞらの星をうつせり、天平勝寶七年よりはじめて行はせたまふと也、香花をそなへ供具をとゝのへて、庭上にふみを置、竿のはしに五色の糸をかけて一事をいのるに、三年のうちにかならずかなふといへり、此ゆへに乞巧と申也、郝隆は腹中の書をさらし、阮咸は竿の上の褌を手向したためしも侍るや、

年中行事歌合　七夕にけふはたむくる琴のをの
たえぬや秋のちぎりなるらん　爲群朝臣

○天名種(あまのなくさ)幷七姫名之事

同七日、萬の寶物を舟車につみて、七夕に手向たてまつる、是を天の名種といふ、

けふはとて天の名種のとり〴〵に
舟と車や七夕のもの

さてまた七夕に七姫の名あり、

さゝがに姫　薫姫　百子姫　袖かす姫
織女　梶葉姫　横姫

〇天王寺千日詣　同十日

此日天王寺へまいれば千日にむかふとて、參詣の群集大かたならず、

〇御城御番代　同十二日

四の海浪しづかにして、江戸をならさぬ時つ風、難波のうらもをだやかに、民の竈もにぎ〳〵と、たかき矢倉の時の太皷も、うちおさまれる御城の、白洲にをる友鶴は、松にちとせやちぎるらん、猶行末も久堅の、雲かとのみぞあやまたる、しら浪たゝむ石垣の、堀のごう龜幾世經て、萬々歲や待ぬらん、かゝるめでたき御代にまた、行もかへるもあふ坂の、關のひがしのあなたより、御勤番の諸士隔年にかはらせたまふ、そのかみは仲秋のころなりしが、ちかきよりして、今日をはじめ十六日までかはらせ給ふ、御出入の粧、かいつくろふ儀式うるはしく、まことにやんごとなき御ありさま、中々武士に越たる物あらじ、

人は武士はしらはひの木魚は鯛
小袖は紅梅花はみよし野　一休

〇盂蘭盆　同十四日

內藏寮御盆供をそなふ、晝の御座の南の間に、菅の圓座一枚しかせ、主上是にて御拜あり、幼主におはしたまへる御時は、此義なしと也、盂蘭盆といふは梵語也、倒懸救器と飜譯せり、倒懸はさかさまにかくるといふ心也、餓鬼のくるしみを思ふに、さかさまにかけたらんがごとし、救器はこのがきのくるしみをすくふうつはもの也、佛弟子目蓮はじめて六通をえて、その母の有所を見られしに、餓鬼の中にありしかば、是なげきて釋尊にまふで、このくるしみをすくはむことをもとめられしかば、七月十五日に自恣の僧を供養あらば解脫をえられんと說たまひしよし、盂蘭盆經に見えたり、

附　躍之事

をどりは佛在世にもあり、すなはち踊躍歡喜とて、法門を悟道しては、をどりをどつてよろこぶといふことなり、儒經には手のまひあしのふむところをしらずといへるもこのこゝろあり、いま町々のをどりは、秋は人の氣分下陷する故に殺厲の氣をはらひ、君相二火の氣分を引たてんために、をどりはありとこそ、



○東西本願寺灯籠　同十七日

洛陽御本寺にありし灯籠を、大坂の御堂にうつし、十七日より十九日まで諸人に見せしむ、まことにいろいろのつくりばな、さま〴〵としな〴〵にかはり、鳥けだものゝつくりものなどに、こゝろをつけて色をあらそふこと、東西いづれかをとり侍らんや、

○地藏祭　同廿四日

けふは地藏の御えん日にて、町々の辻にわらはべども供物灯明をかゝげてまつる也、取分安堂寺町東堀壹丁めの門の脇に、あぶらかけの地藏とて、いにしへよりあり、此地藏よく瘧病をなをし給ふとて、其宿願には縄をかけ置、やまひ愈時はかならず縄をときまいらする、寔苦勞なる地藏の體、見るもさながら堪がたくこそ侍れ、

○八朔幷禁中御馬

是は大やけごとにてはなし、さればたしかなる本説あらず、建長の頃より祝來られると也、はじめは田のみとて、土器に米をいれて人のもとへ送けるとかや、其後次第々々に、世人さかんにけふを以てあつかへる事也、今わらはの行器(ほかい)をもて遊びの送物とせるも、今としの米をいるゝうつはものにや、ある説に、公事(おほやけごと)也、田面の節會とて、そのかみは早稲の燒米を、諸國地頭の本より禁中に奉りしと也、中手奥手田も、このごろは穗並花咲て、科戶の風も靜ならんことを、上下ともにいはゐまつる節なれば、猶武家には領田地方の滿作西收の祝をなし、主君の拜禮をおもくする也ともいへり、また今日は禁中へ、公方より御馬進上あり、たゞし昔は十四日より當月の中、國々よりたてま

つると也、

あふ坂の關の清水にかげ見へて
いまやひくらん望月の駒

○三津寺八幡祭　同十五日

けふは當社の祭禮とて、氏人ども神樂を奏して、御輿はまつらず、居祭也、まことに神は人のうやまふによりて威光をまさしめ給ふとかや、此御神ほど御種性も歴々にて、ことに男山宇佐などには、おびたゞしきまつりごとをなし奉るに、さのみのことなきは、よき氏子をもたせ給はぬゆへにや、此日諸國にて放生會をなしけり、其はじめをきくに、是は元正天皇の御宇養老四年九月、異國襲來の時、八幡大菩薩の神力にて、たやすく異敵をしりぞけたまふ、そのゝち大菩薩の御託宣に、合戰のあいだおほくの人ころされぬ、かれがために放生會をおこなふべきなりとありしによりて、石清水にて此事あり、うたにいけるをはなつとよめり、

年中行事歌合
世にかくてつながるゝ身をすくはなむ
生るをはなつ神のめぐみに　新中納言

○難波堀江月見幷難波御祓　同十五日

月の名所は須磨あかしよりはじめて、更級、姨捨、田子、都は廣澤、ちかきは若吹上、諸國に名を得しことなれば、世々の歌人、今宵の月にあこがれて、いろいろの歌をとり出してのこしをかれしぞ、こゝも名にしあふたる難波堀江の月こそ、餘所にてみるにはまされど、棚無船に幕はしらかし、辨當、提重を入させ、曲水ならねども、手まづさえぎる盃の、波にうかべし遊宴も、見所有ておもしろく、又琴、三味線、笛、太皷、つゞみ、鼓弓、とりどりのはやし物にて、船こぎいづる物の音に、水底の魚鱗もおどりあがるかとおもはる、かゝる遊興またとあるべきや、また世の好事の輩は、硯懐紙とりもたせ、堀江づたひに傳法あるひは一の洲のあたりまでも、櫓櫂をさせてあこがれ出、水の面にてる月なみもしづかにて、二千里の外までも、曲なき月の面影は、つねにまさりて一きはいさぎよく、心もうき立つ物は今夜の船遊びなりといひけんもおかしく、されば彼法師が、月花はさのみ目にて見る物かはといへれど、もしまた今夜雨のふらば、いかばかり殘多からめと、つぶやきけるも實もといひて、酒のみ連歌してゐるまに、月西海にしづめば、難波寺のか

ねもあけぬとつげわたる、いざ〳〵家路にかへむなんいざと、をの〳〵船をはやめて、こぎかへるありさまは、また興ありておもしろくぞ侍る、されば難波の御祓といふことは、源氏月の秋の頃、此浦里にくだり給ひしとき、名月の夜にはらひし給ふことあり、是をいまに難波の御祓と申傳へり、

○安居天神芝原祭　同廿二日

當社の神事を芝原祭と申て、けふは三寸(みき)をそなへて、神慮をすゞしめまつり給ふ也、あまり人しらねば、參詣の人もまれ〳〵也、

難波鑑第四終

難波鑑第五

○重陽宴幷菊著綿

けふは節日にて侍れば、禁裏にて茱萸の壺を御帳にかけて、群臣に菊酒をたてまつり、菊花の宴をおこなはるゝと也、是を重陽の宴とはいふ也、九月九日は共に陽の數なるによりて、重陽とはいふ也、また菊をもちゆること、諸書に見へたり、むかし費長房といふ仙人、汝南の桓景にかたりていはく、九月九日には、汝が家にわざはひあるべし、茱萸の壺をぬいてひぢにかけ、山にのぼりて菊酒をのまば、此災きゆべしと申ければ、其日にいたりてをしえのごとくせしかば、其身はつゝがなくして、家中の雞、犬、羊、こと〴〵く死たり、かやうのくのふ侍るによりて、けふは菊酒をのむといひつたへたり、又後光明峯寺殿の御抄には、九月九日に寒温二季のさかひあひあふとき、身肉にわかるゝ也、此時酒をのめば病を得ず、さてけふより酒をばわかすといへり、寒温の二季大增大減すれば、かならず病のをこる也、故に針治灸治も、みな肉別をし

てする也、また魏文帝うまれたまふ時、紫雲殿上に現じて、例にも似ず、はたして七歳にして位につき給ふてけり、其時天下の壽命十五に過ぎず、ことに帝十五漸く近く時、歎きをふくしてあゆましめ給はず、其時穀祖といふ仙人の、らきくえんの菊の花を折て、九月九日に持參りて奉りければ、帝是を服したまひて、延壽七十歳をたもち給ふよし載らせたり、漢の武帝も菊酒をのみて長壽を得給ひしこと侍る也、また菊のきせ綿をけふとる也、是は七月一日より、菊にわたをきせて、九月九日に花をさかせて、大内へかざしまいらせむが爲也、此綿きすること別にあらず、花をとくさかせんがゆへ也、

○生玉祭　同九日

當社御祭禮、引馬、犀鉾、母衣武者など、そのかみはありといへども、今は神前の松原にてやぶさめあり、御輿一社をまつり奉る也、

○高津祭并相撲　同十日

御神前にて御湯なゝどまいらせ、神樂を奏しまつる也、そのかみより氏人立寄、相撲などはじめ神慮をすゞしめける也、抑相撲節とて、禁中には、七月廿五日より廿九日まであり、是は垂仁天皇七年にはじめ給へること也、諸國の供御人をめして、すまふをとらさしめ給ひ、天子御覽有事也、國々より相撲人をめさせらるるを、萬葉に相撲使とあり、主上仁壽殿に出御なり、左右の相撲人、犢鼻の上にからぎぬはかまをきて、すまひをとり勝負あり、是を内取といふ、廿八日に召合といふあり、天皇南殿に出御なる、廿九日に拔出といふあり、その中の上手をすぐりて、御覽あるゆへに、



抜出しと云よし、それ相撲のおこりは、垂仁天皇の御時、當麻のむらに蹶速といひて、角をもさきぬる程のちからづよきものあり、此よしきこしめさせられ、是につがふべき人を尋させ給ふに、出雲の國に野見の宿禰と申すもの侍るよし奏せり、則めして相撲を御覽せられ、野見宿禰ちからまさりて、蹶速が腰をうちくじきて踏殺し侍る、是相撲の始也、

年中行事歌合　かた分てこどりつかひのいそぎしは
　　けふのぬきての口となりけり　女房

○住吉相撲會幷竇市　同十三日

むかしは當日住吉にをいて相撲競馬ありとぞ、是は神功皇后三韓御退治ありし時の例をうつしけるとなり、今は中絶してこのこともなかりき、さてまた今日夜に入て、神前にをいて市を立、升をうりかふ、是をたからの市といふ也、予おもふに、住吉の地主神は、侍者御前とて女體にてましまし、是を市姫と申て、すみよしは日本國の市の立始なるがゆへに、市のあるじとし侍れば、是等のことによりてか、此市姫に御子七人あり、すなはち七姓を給ふて、住吉の氏人となり給ふ、大領氏、板屋氏、狛氏、これらは今の津守氏の先祖也、そのほか津氏、大宅氏、神奴氏、高木氏などゝてあり、いづれも神とあがめ、七所に鎮座なり給ふ、尋べし、

○天王寺一乘會幷結緣灌頂御念佛始　同十四日

當日夜に入て、一乘會をとりおこなひ給ふ、そのぎしきは、涅槃會、聖靈會におなじく、御輿などふり出、伶人の舞あり、まことに木の間をもりくる月影は舞臺にうつり、物の栄ある粧こそ、たうとく殊勝なれ、萬のものゝきらかざり色ふしも、夜のみこそめでたけれ、夜はきらゝかに花やかなる装束いとよしといへる人をおもひ出、人のけしきも、夜のほかげぞよきはよく、物いひたるにほひも物のねも、たゞよるぞひときはめでたけれ、むかしは又此月の廿日ごとに、結縁灌頂をとりおこなはるゝと舊記に見えたり、猶御念佛始などといふこともあり、尋べし、

○神明祭幷例幣　同十六日

是は蠟燭町にたゝせたまふ、一社天照太神宮にてわたらせ給ふがゆへ、當日を御祭禮とし、氏人御湯神樂を奏し、神慮をすゞしめ給ふ也、されば當日禁中にも例幣といふことあり、是は伊勢太神宮へ御幣をた

てまつらせ給ふ義也、としごとの義なれば、例幣とは申こと也、このこと朱雀院の御時よりはじめらる、當月一日より今日にいたるまで、僧尼重輕服の人、御門にいることならず、大神事なれば也、神風の伊勢の國に御鎮座あることは、垂仁天皇二十五年三月に、倭姫命をしへによつて五十鈴川上に神宮を立、外宮は内宮鎮座の後、四百八十四年をへて、雄略天皇の御宇にあとをたれさせたまふ、養老五年九月十一日にはじめて官幣をたてまつりたまへるなり、いまに神祇官にてこれをおこなはせたまふなり、

○天皇祭　同十六日

此天皇は難波村のうぢ神也、當日を御祭禮として御湯をさゝげ、神樂を奏して是をまつりたてまつる、

○今宮祭　同十八日

當社のまつりは今日也、天王寺より僧侶きたりて、拜殿にをいて法事をなし、すなはち天王寺の伶人舞樂を奏し、神慮をすゞしめたてまつり、そのゝち神輿一社をふり出、天王寺の西門まで遷幸したてまつれば、聖德太子の御輿出むかはせたまひて、その儀式あること也、



○稲荷祭　同廿一日

當社は仁德天皇の御廟也、むかしは七堂伽藍の地にて、さしもはなやかに、宮殿玉をたれ瑠璃を鏤むといへども、たび〱の回祿にかゝり、今はわづかの宮井にて、物ふりにたるけしき、玉がきまばらにありしを、此とし本社を再興ありて、神の威光をかゞやかしたまふ、まつりは當日也、そのかみは男舞とて、かみ難波よりいろ〱ねり物をいだし、伶人の舞なンどあ

りしかども、いつのころよりかこのこともやみ侍るとぞ、

○座摩祭　同廿二日

當日を御神事とて、十二灯の隙なく神樂を奏し、氏人の參詣おびたゞしくぞ侍る、

○天滿鏑流矢馬　同廿五日

此日天神の御神事也、則やぶさめあり、是は天滿天神の門の前に茶屋あり、茶屋のあるじの式として、としごと是をつとむ、まづ七日以前より、拜殿にあらごもをしきて通夜いたし、精進潔齋して、其日にいたれば、あたらしきなをしはかまに袖くゝり、あかき鉢卷してかざりたる馬にのり、ゆみとかぶらやを左右の手にとり、社壇をのりめぐること三度、それより逸散をかけいだし、宮の前濱手九町を三反をのりかへすあいだに、六所に角のまとを立て是を射る也、手綱をもとらず手をはなちて弓ゐる間、逸足かくる馬をつゐに落ざることは、此天神の御はからひと、いとたうとし、

○津村祭　同廿七日

津村の宮にまふでゝ、神樂まいらするばかり、御輿はまつらず、居祭にて過る也、されども氏子をの〳〵夜宮まいりのためとて、ちやうちんなどとぼしてまつり奉る事、いとにぎやかに、社内もかゞやくばかり也、

○住吉神送　同晦日

今日暮がたより、四社明神の御輿を北の拜殿にふりいだし、神主一族、禰宜以下、をの〳〵出仕して、おこなひありて、出雲への神をくりのつとをあげ給ふ、儀式殊勝にぞ見へ侍る、また十月晦日には神かぐらの式、此日におなじきと也、

難波鑑第五終

難波鑑第六

○孟冬旬幷無神月

十月一日は先御衣がへあり、掃部寮夏の御裝束を撤して、冬のにあらため給ふ、天皇南殿に出御ありて節會あり、是を孟冬の旬とは申なり、二獻の後氷魚を群臣にたまふとかや、また此月をかみなづきといふこと、說々不同にして一决しがたし、ある說に、伊弉册尊崩御し給ふ月なればいふとにや、また四方の木末ちりすさむ比なりとて、葉みな月といふ人有、また諸神出雲の大社へくだり給へばいふとにや、一曰、素戔烏の尊常に軍を發して、天照太神をうちたてまつらむとし給ふにより、太神素戔烏をすかさしめんが爲、汝我が子となりたらば、一年に十月を讓り、出雲石見の兩國をあたへんと宣ひしによりて、十月には諸神出雲に行てつかへたてまつるとなり、此こゝろを、

出雲には神在月をいかゞして
神無月とや四方にいふらむ　經信

○殘菊宴　同五日

菊花のえんは九月九日にて、また殘菊の宴とて、十月五日におこなはせ給へることなり、是も群臣詩をつくり酒をたまふこと、重陽にひとしきよし、

○十夜始　同七日

今日より十五日まで、寺町の淨土宗の諸寺にをいて談義念佛等あり、されば無量壽經に千日十夜の語あり、これにもとづきけるとなり、また皷音聲經にも本文ありとぞ、

○日蓮御名講　同十三日

惣じて大坂のうちに、日蓮一派の寺々六十四ヶ寺あり、此寺に盛物、花香、灯明、讀經、談義などありて、まいりの人多し、

○夷祭　同廿日

是其所とさだめたる社なし、夷三郎殿は商人をまもらせ給ふ御神とて、上下の諸商人、面々の家にして內祭す、夷棚ある家には色々の御供を備ふ、

○亥子　亥の日

十月亥の日餅を食すれば病なしといふ、されども此こと、いつの頃より始まるとも見えず、延喜式◎藏人式歟にも侍れば、往古よりあることなり、今日內藏寮より餅



をそなへたてまつる、朝餉にてきこしめしたまふ、また此餅をおけんでうとて人々にわかちたまへるなり、またいのこの說、ある書に、猪はよくあまたの子をうむなり、さるによりて女人是をうらやみ、亥の月の亥の日にあたるゆへ餅をいはふとなり、亥はとしごと十二の子をうむ、一年十二ヶ月をかたどる、また潤年には十三子をうむとなり、

○東西本願寺御佛事幷東山　同廿八日

としごと十月、兩本願寺の御門跡、大坂の御堂に來臨ありて、開山親鸞聖人の御佛事をとりおこなひ給ふ、其うち東の御門跡は隔年にくだらせたまふ、廿二日より廿八日まで一七日のあいだ、近里遠村よりも老若男女參詣して、御堂の內は所せくまでおし合、法談を聽聞して、歡喜のなみだをながしよろこぶ、一文不智のともがら他力の本願をたのみ、行住座臥に彌陀の御名を唱往生すべしとのすゝめの程もたうとし、また東山佛光寺の御門主も隔年にくだらせ、是も一流の他力眞實の信心をはげみだし、佛恩報謝のためには稱名念佛をとなへ申せとのおほせのほどもありがたし、あなかしこ〳〵、

○御火焼幷內侍所御神樂

大坂所々の宮社にをいて、當月は神火をたきてたてまつる、是を御火焼とて、氏人どもあつまりたてまつる、其社々、

高津宮	八日	玉造稻荷	八日
新御靈	十日	生玉明神	十二日
稻荷明神	十三日	三津寺八幡	十三日
座摩明神	十六日		

朝日宮　十六日　同聚樂町神明
神明 蠟燭町 十六日　天満天神　十八日
さてまた、神樂とて、諸神の前にて冬かならずし侍ること、是等をはじめとやいふべからん、抑神樂といふは、天照太神の岩戸をさしてこもり給ひし時、諸神の祈り申されけるに、鈿目命まさきのかづらをかざしとし、ひかげを手すきにしてうたひまひ、庭火をたきしかば、天照太神天の岩戸を出給ひしより、諸神此ことこのみ給ふ、今も内侍所にて行はるゝ御神樂の事にて侍るなり、是は一條院の御時よりはじまるなり、まことに神樂こそなまめかしくおもしろけれといへるも、實にとおもひ出られ、其人もなつかし、

年中行事歌合　久堅のあめのむかしのかみあそび
今も雲井にうたふなるかな　貞世

○天王寺道祖祭　同十六日

此日は天王寺の村里の辻々に、わらはべども集居て、塞の神をまつるとて、行還の人々に錢をとる、出さゞれば此所を通さずして、剰其人にとりつき難儀させしとかや、是を道祖祭と云、是道祖は道の神まつるにや、今し此事をしりたる人は、此日はこゝに來らず、

○納庚申かのえさるの日

天王寺の庚申は諸國の本寺なり、一とせのうちに六度づゝ、潤あるとしは七庚申あり、なにゝても所願ある人、一色をばかなへ給ふとて、參詣の人々、初庚申よりも、願成就いはゐおさめの庚申まふでよと群集して、十二燈々々とよばはる聲も喧く、七いろの菓子菓子とうるこゑもいそがはし、さてまた今日夜をねざることは、三尸天にあがりて人の善惡を告によりて、夜をまもりてね侍らぬとかや、

年中行事歌合　出やらでなをぞやすらふかのえさる
蘆分を船こぎやかぬらん　爲邦朝臣

○神宮寺佛名　同十九日

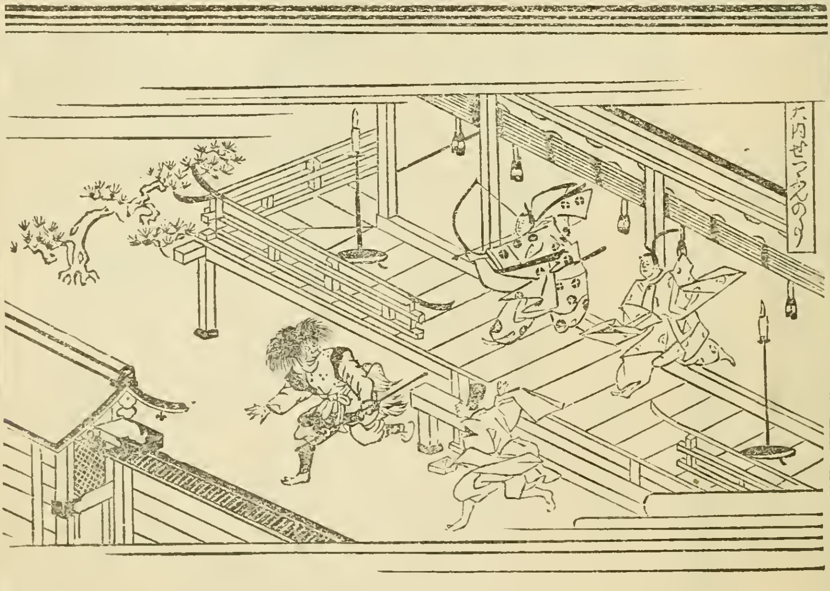
當寺にをいて、むかしより三千佛名經を誦し給ふとかや、是則住吉明神の御法樂の爲にとりおこなはるるとなり、されば禁中の御佛名は、十二月十九日より廿一日まで三ケ日なり、あるひは一夜も例あり、此佛名といふは、三世諸佛の名號をとなへて、六根のつみを滅する心なり、まことに佛名經にとかるゝ所の功徳はかりなきにや、寶龜五年十二月よりはじまる、承和のころは、としごと佛名三ケ日の間、諸國にて殺生

禁斷のよし、格に見えたり、また釋の靜安と申せしは、比良の山にて十二佛名經をよみて禮拜修懺し給ふ、其聲帝闕にきこえ、諸國のあいだにもきくものあり、是によつて勅して僧官をたまはりけるとなり、くわしくは元亨釋書に見へたり、

六百番　河竹のなびく葉風にとしくれて
　　三世の佛の御名をきくかな　定家

○追儺并節分大豆鰯首大戟さす事　晦日

禁中には十二月晦日に行はる、今日はなやらふ夜なれば、惡鬼の夜行するゆへに、陰陽寮さいもんをよみて上卿以下是をおふ、御所にともし火を多くともして、四目ありておそろしげなる面をきて、手にたてほこをもて、内裏の四門をまはるなり、また殿上人とも御殿のかたに立て、桃の弓よもぎの矢にていはらふ、これらをかたどりて、節分にまめうちて鬼をはらふ事はじまれるにや、此内裏にて鬼ををはれしことは、慶雲二年十二月、百姓多く疫癘になやまされしゆへに、はじめられけるとなり、また鞍馬のおく僧正が谷御菩薩池の邊に、方丈の穴あり、藍婆惣王とて二頭の鬼出て都にいるべきよし、毘沙門のつげありしを、くら



まの別當宇多の帝に奏しければ、法家に仰られて、四十九家の物をとりて、方丈の穴を封じ、三石三斗のまめをいりて鬼の目をうちしょし、しるせし書あり、十二月晦日の夜の鬼を、躬恒のうたに、

鬼すらも都のうちとみのかさを
ぬぎてや今夜人にみゆらん

今の世に、節分の夜、いはしのかしら、大戟を軒にさすこと、開鼻(かくはな)といふ、鬼の人をくはんとするをふせぐ術なりといへり、

附白朮(をけら)焼事　同晦日

おなじく此夜白朮をたくことは、白朮は風氣をさる藥にて侍るゆへ、群薫あしきがゆへに、疫癘の神の夜行する夜なれば、是をたきてをそれしめむが爲にて侍るとなり、

難波鑑第六終

一無軒道治先生は、己をしるの交り異なりけらし、我住方は南紀路の閣を隔て、年ふれば難波津に咲や此花の匂ひもなつかしく尋來りて、幾宿かたらひ侍り、かたへの几にかいやり捨たる文あり、取て見侍りしに、この京の昔よりとり行はるゝ言草を結び、皇居の事によそへ名付けて、難波鏡年中行事といへり、元來家翁は和歌の道に入心をみがく、玉津島神代の書もくらからねば、載籍の編詞涌て流るゝが如し、誠に賢は猶愚なるも、眸を煩はさずして優ならんもの也、集て成せりとは蓋此謂歟、是しかしながら、先生は醫を以家業とし給へば、是等の事卑近粗淺なりと辭し給ふを、予强て乞とり梓に鏤め、婦人小子の翫びともなさんと思ふから、南畔の旅泊の暇屢々硯をならして、老の筆を後に加ふるもの也、

南陽山人自庵齋

延寶八申親月日
大坂本町五丁目御堂筋角
小濱屋七郎兵衛板
同所
近江屋次郎右衛門

（近世文藝叢書第一奥附）

明治四十三年七月二十日印刷
明治四十三年七月廿五日發行

非賣品

編輯兼發行者　東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會代表者　早川純三郎

印刷者　東京市神田區蠟燭町八番地
武木信賢

印刷所　東京市神田區三河町三丁目四番地
武木印刷所